

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

# 医学部附属病院入院棟 A 地点

報告編《第3分冊》

1区遺物本文

2016

東京大学埋蔵文化財調査室



D面焼土出土陶磁器

卷頭図版 2



肥前色絵大皿 (IV-94図174)



肥前色絵燭台 (IV-103図309)

SK3 出土遺物



巻頭図版 3



トルコ・イズニク色絵大皿見込み (IV-303図610)



トルコ・イズニク色絵大皿裏 (IV-303図610)

C2層 出土遺物(1)



卷頭図版 4



肥前色絵大皿 (IV-313図688)



肥前色絵大皿 (IV-313図689)

C2層 出土遺物(2)

卷頭図版 5



肥前色絵大皿 (IV-313図690)



肥前色絵染付碗 (IV-317図716)

鍋島変形皿 (IV-310図679)



卷頭図版 6



肥前染付皿 (IV-304図618)



肥前色絵皿 (IV-306図631)

C2層 出土遺物 (4)



卷頭図版 7



肥前染付皿 (IV-306図634)



肥前染付皿 (IV-307図643)

C2層 出土遺物(5)

卷頭図版 8



肥前染付皿 (IV-307図650)



肥前染付皿 (IV-309図667)

C2層 出土遺物(6)



卷頭図版 9



肥前染付皿 (IV-309図668)



肥前染付皿 (IV-309図669)

C2層 出土遺物(7)



卷頭図版 10



肥前染付皿 (IV-309図671)



肥前染付皿 (IV-310図673)

C2層 出土遺物(8)

卷頭図版 11



鍋島五寸皿 (IV-310図677)



鍋島五寸皿 (IV-310図678)

C2層 出土遺物 (9)



卷頭図版 12



肥前染付碗 (IV-301図601)



肥前白磁猪口 (IV-317図734)



肥前青磁猪口 (IV-317図735)



肥前染付猪口 (IV-317図736)



肥前白磁平鉢 (IV-316図703)





肥前染付皿(IV-294図501)



肥前染付皿(IV-294図502)

C3層 出土遺物(1)



肥前染付皿 (IV-295図507)



肥前青磁変形皿 (IV-295図509)



卷頭図版 15



肥前色絵鉢 (IV-296図512)



肥前色絵蓋付鉢 (IV-296図516・517)

C3層 出土遺物(3)



卷頭図版 16



福建・広東系三彩壺 (C3層 IV-299図569)



肥前色絵段重 (D2層 IV-259図142)

包含層 出土遺物

卷頭図版 17



金箔瓦

左：鬼瓦 (SU774 IV-538図160)、上段中：軒丸瓦 (SK987 IV-523図2)、上段右：軒丸瓦 (D2層 IV-523図13)、  
下段中：滴水瓦 (SK987 IV-530図105)、下段右：滴水瓦 (D2層 IV-530図103)



硯「万治三(1660年)六月一日 石」(D1層 IV-566図5)



砥石「延宝八天(1680年)四月日」(D面焼土 IV-75図8)



卷頭図版 18



特殊平瓦 (SF1759 IV-535図128)と推定使用状況



特殊丸瓦 (SX2102 IV-533図118)

卷頭図版 19



連歯下駄(IV-142図75)



連歯下駄(IV-139図46)



路傍下駄(IV-147図96)



草履(IV-153図111)

SK3 出土木製品-下駄



漆椀(椀蓋 梅鉢紋 IV-167図351)

SK3 出土木製品-漆椀



卷頭図版 20



IV-166図308



IV-166図310



IV-166図311

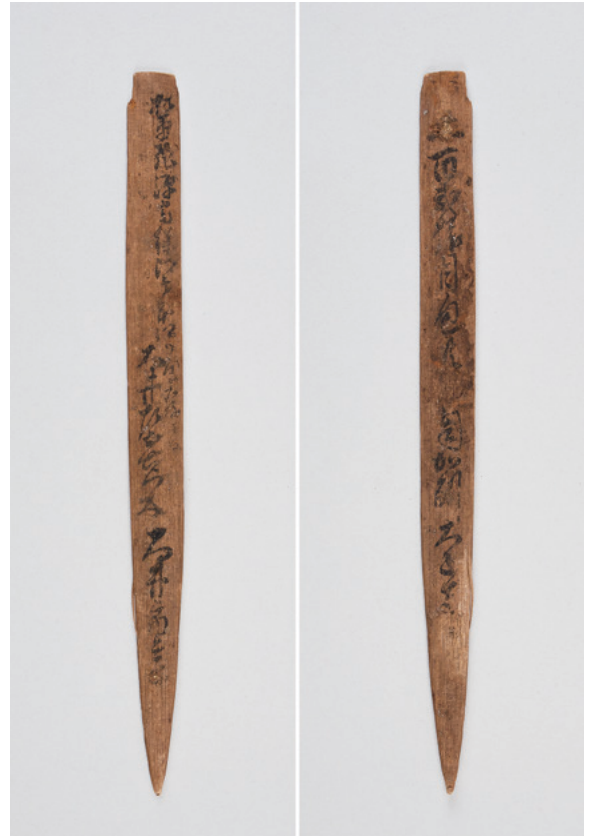


IV-174図471



IV-203図762

SK3 出土木製品-蒔絵・木簡



IV-204図774

卷頭図版 21



IV-205図812

IV-207図825

SK3 出土木製品-木簡



梅鉢紋建築材(SE2572 IV-543,544図)





裸人形

操り人形



操り人形のかしら  
SK3 出土木製人形



キセル(雁首IV-232図11、吸口IV-232図16)



簪(IV-233図25)

SK3 出土金属製品





花降り雛小判(SX2008 IV-565図269)



一分金(D1層 IV-565図268)



卷頭図版 25



鏡 (IV-233図31)



毛抜き (IV-233図34)



風鈴 (IV-234図50)



分銅 (IV-234図52)



水滴 (IV-234図61)



三足燭台 (IV-235図71)



鋏 (IV-234図75)



小柄 (IV-233図40)



小柄 (IV-233図41)

SK3 出土金属製品



卷頭図版 26



筭(IV-233図36)



小柄(IV-233図37a、37b)





小柄(IV-233図38)



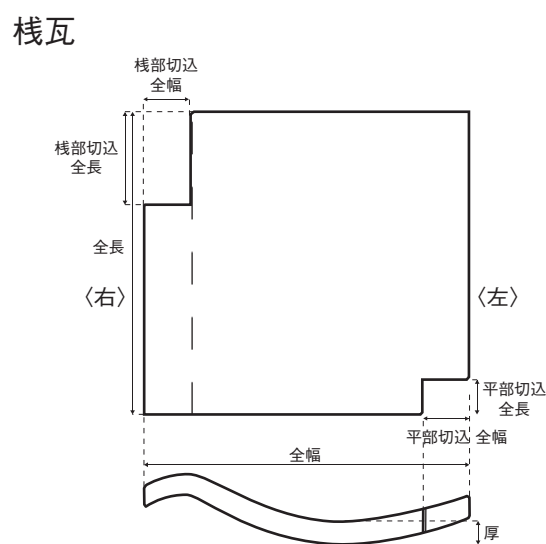
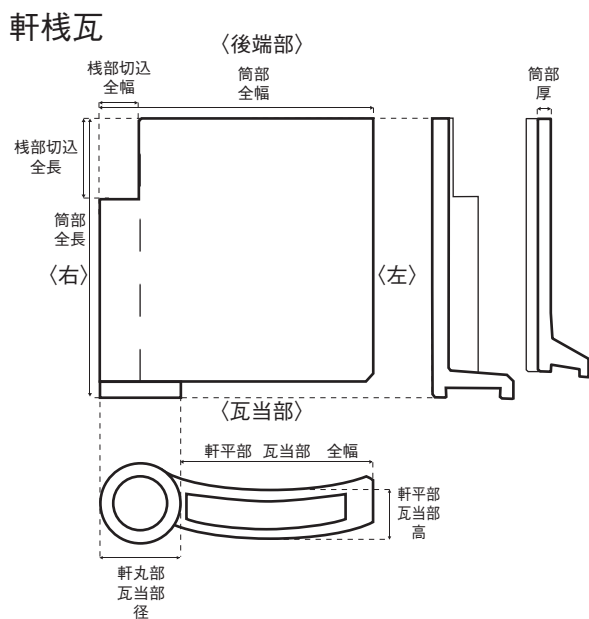
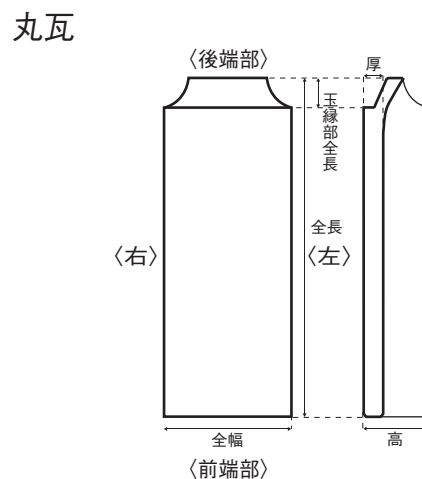
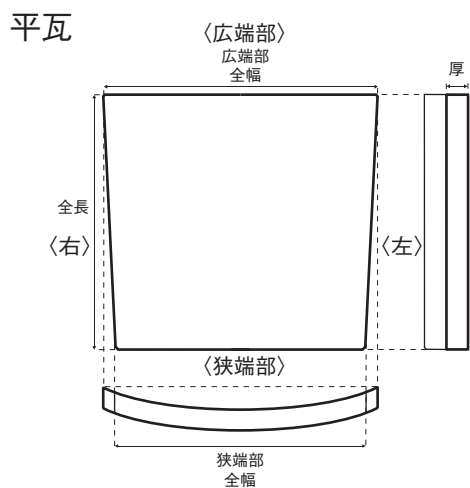
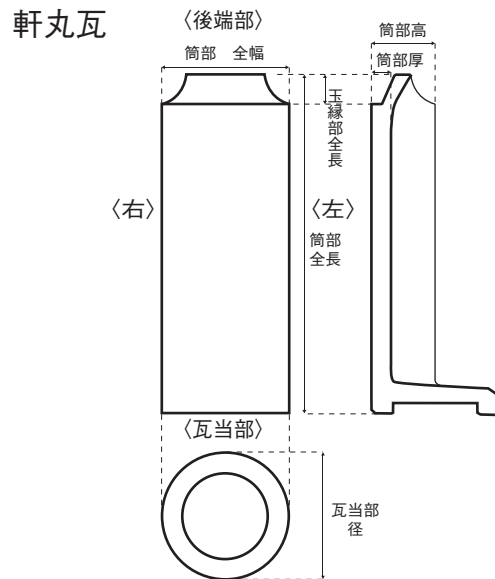
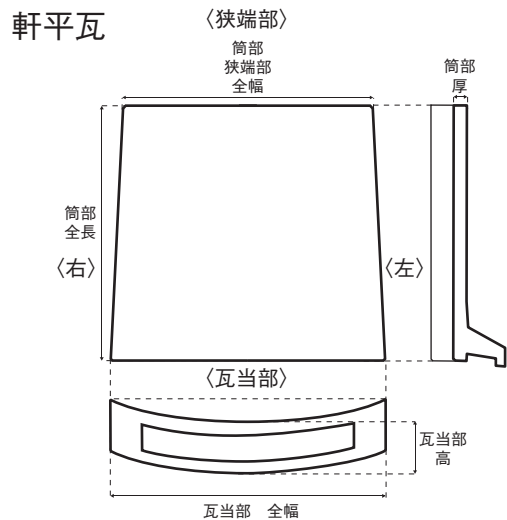
小柄(IV-233図39)

SK3 出土金属製品

## 凡 例

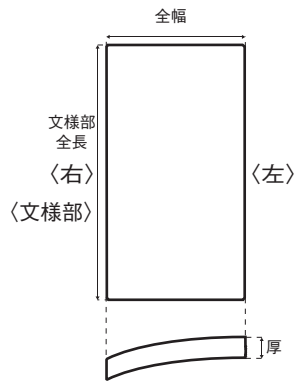
1. 遺物実測図は個別図に指示がない場合、基本的に以下の尺度で掲載している。
  - 1/1：銭貨
  - 1/2：金属製品
  - 1/3：陶磁器、土器、人形・玩具、木製品、石製品、ガラス製品、動物製品、繊維製品
  - 1/4：瓦
2. 陶磁器・土器の実測図に付した記号及びトーンは以下のことを表している。
  - ・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。
  - ・\—／は、口唇部の口錆を表している。
  - ・\↔／は、人為的な磨耗痕、敲打痕を表している。
  - ・↓—↓は、播鉢体部播目の範囲を表している。
  - ・中心線上下端の破線は、各々推定口径、推定底径を表している。
  - ・スクリーントーンは、が青磁の が施釉土器の施釉範囲を表している。
3. 本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に一部変更点を加えた新分類に拠った。変更の詳細は、巻末に提示した。また人形・玩具の分類は「東京大学構内遺跡出土の人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報7』に拠った。
4. 墨書釈文中に用いた記号は以下のことを示している。
  - \：改行、／：割書のはじまり、//：割書のおわり、・：表裏、□：不明文字、
  - 〈〉：字数不明文字、○：一字あけ、 $\delta$ ：屋号、記号、花押、▲：三角の記号、 $\beta$ ：梵字
  - $\gamma$ ：符ろく
5. 漆器実測図に付した▲、\↔／は漆の塗り分け部位を表している。
6. 遺物番号は本文、挿図、観察表、DVD-ROMの写真で共通の番号を使用した。
7. 遺物観察表は、全て添付のDVD-ROMにExcelファイルにて収録した。
8. 遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを1280×850ピクセルでjpegに圧縮し、添付のDVD-ROMに収録した。



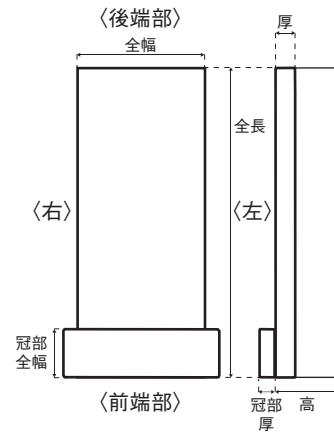


瓦凡例(1) 軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒棧瓦、棧瓦

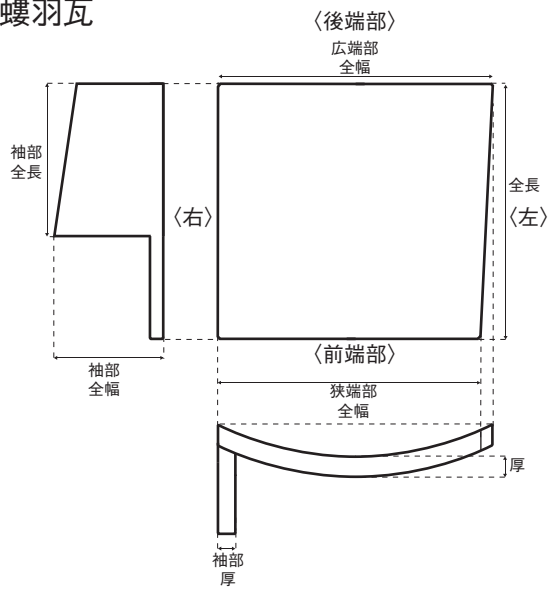
熨斗瓦



冠瓦

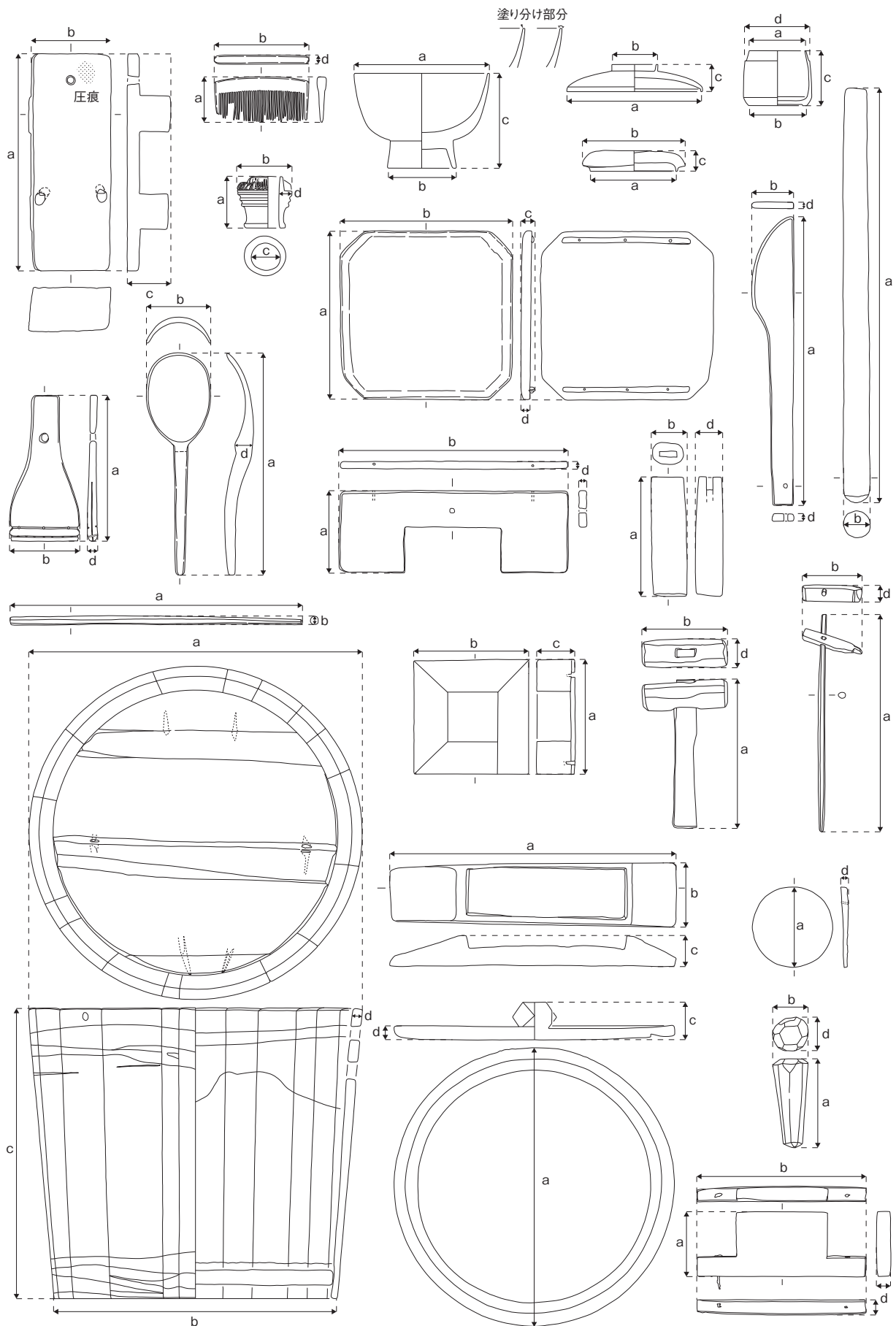


螻羽瓦



瓦凡例(2) 熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦





木製品凡例

医学部附属病院入院棟 A 地点  
報告編《第3分冊》  
1区遺物本文  
目次

口絵  
凡例  
目次

遺物図版一覧表

第IV章 江戸時代以降の遺物

第1節 D面焼土出土遺物	4
(1) 磁器・陶器・土器	4
(2) 瓦	36
(3) 木製品	36
(4) 金属製品	37
(5) 銭貨	37
(6) 石製品	38
(7) 動物製品	40
第2節 SK3出土遺物	41
(1) 磁器・陶器・土器	41
(2) 瓦	59
(3) 木製品	59
(4) 金属製品	87
(5) 銭貨	92
(6) 石製品	93
(7) 動物製品	94
第3節 包含層出土 磁器・陶器・土器	96
(1) E層	96
(2) E面上層	96
(3) D3層	97
(4) D2層	98
(5) D1層	103
(6) C3層	111
(7) C2層	118
(8) C層	129
(9) C面焼土	133
第4節 遺構出土 磁器・陶器・土器	136
第5節 瓦	220
第6節 木製品	224



第7節	繊維製品	225
第8節	金属製品	226
第9節	銭貨	230
第10節	石製品	236
第11節	ガラス製品	241
第12節	動物製品	242
第13節	鹿角未製品	243
第14節	近代層出土遺物	246
東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類の見直しの経緯		252
主要遺構出土磁器・陶器・土器組成表		270
人形・玩具類組成表		277

遺物図版一覧表

遺構		確認面	遺物図版 (IV-@)							
種別	No.		・陶 土 磁 器	瓦	*木 織 維	金属	銭	石	ガラス	動物
SD	1	C面～A面	330					578		582
SK	2	A面	330～ 332					580		
SK	3	C面	80～ 133	134	135～ 231	232～ 242	243～ 246	247、 248		249、 584
SU	11	C面	332	524、 529、 532、 535						
SU	12	C面	332～ 334	524、 525、 527、 528、 529、 530、 535、 536、 541				570		
SP	90	A面				547				
SK	91	A面	334							
SE	108	C面	335	524、 527、 528、 529						
SU	131	A面		527、 530						
SK	132	C面	335～ 337		*545			570、 572		
SK	156	D面		536						
SE	159	A面	337～ 339							
SD	236	A面		538、 541		553				
SU	247	C面	339～ 343			549	554			
SD	259	A面	344					566		
SE	326	D1面	345	523、 525、 527			554			
SU	327	D2面	345～ 347		542	546、 548		566、 580		
SK	333	C面	348							
SD	337	A面						570		
SP	352	E面～D2面				547				
SK	388	A面	348～ 350	529						
SU	390	D1面	350～ 351			546、 548、 549、 553	554、 555、 556、 565	566		
SP	415	D面					556			
SD	422	D1面						570		
SU	436	C面	351～ 352			546				
SU	445	C面	352～ 353	524、 527、 529、 537						
SU	446	A面	354～ 361			547		566	581	582
SK	466	D面	361～ 362							
SK	476	D面						556、 557		
SK	518	D4面～D2面	363					550		567、 570
SK	521	D面						547		
SK	548	D面	363							572
SK	552	D面	364	541						
SK	557	D1面	364～ 366							580
SK	584	D面						557		
SU	593	A面	367～ 371					557	567	581
SK	596	D2面	372							570
SX	603	C面								570
SK	607	Da面	372							
SU	631	C面	372～ 375	524、 533、 539				557		570、 579
SK	667	D1面						550		
SK	699	Db面							558	
SK	734	Db面	376							
SU	774	D2面	377					538		
SP	779	E面～D2面						523、 536		
SK	797	D面	378							572
SU	799	D面	379					547		
SD	803	E面	379							
SU	804	D2面	380～ 382						558	570
SK	805	D2面	382～ 384							
SU	845	E面～D2面	384							
SU	847	E面～D2面	384	526						
SP	851	E面							558	
SU	874	D2面	385	529						
SK	883	D1面	385							
SE	908	D面						549		
SK	979	D2面	386～ 387							567
SK	987	E面～D2面						530		
SK	1023	D2面	387～ 393	526、 527、 529					558	570
SK	1024	D2面							558	
SB	1042	E面～D2面						551		
SK	1052	E面～D2面							558	
SK	1091	A面	393～ 394					549		582
SK	1093	近代	395～ 396							
SK	1094	近代						529		
SU	1101	A面	396～ 398							
SD	1103	D1面～A面	398～ 408	525、 527、 540				550、 552	558	571、 576、 577、 580
SU	1110	A面	407～ 408	531、 532、 534						



遺構		確認面	遺物図版 (IV-@)							
種別	No.		・陶 土 磁 器	瓦	*木 織 維	金属	銭	石	ガラス	動物
SK	1114	A面	409~ 420	529		546、 550	558、 565	567、 571	581	
SK	1115	A面	418~ 420			546		567		
SU	1122	A面					558			
SL	1124	A面	420							
SK	1125	A面	421	526、 527		547	565			
SK	1131	A面	422~ 425			548				
SD	1134	A面	425				558			
SK	1137	A面	425~ 426							
SK	1140	A面	427~ 428							
SD	1141	A面		527				571		
SL	1143	A面	429							
SK	1151	A面	428~ 429							
SX	1154	C面~A面				553				
SE	1155	A面	429			546、 548	565			
SK	1156	C面~A面				548				
SK	1159	A面	429~ 430							
SK	1160	A面	430~ 439	527、 530					581	582
SK	1161	A面				549				
SK	1175	CR1上面				549				
SK	1176	CR1上面		540						
SU	1182	A面		537						
SK	1183	A面				550				
SK	1188	A面		539、 540						
SK	1189	A面	440~ 442							
SU	1192	C面	443~ 444							582
SU	1194	A面	445	524		551				
SK	1205	A面					558			
SK	1231	A面	445~ 446					567		
SP	1247	CR2面						567		
SK	1253	A面	446~ 448							
SK	1261	C面~A面		527			559			
SU	1264	A面	448~ 451				559			
SK	1265	C面		538						
SK	1309	CR1上面					559			
SK	1328	A面	452							
SK	1329	C面						571		
SK	1409	A面	452~ 454							582
SK	1415	A面	454					571		
SK	1438	CR1面						571		
SX	1443	CR1面		534						
SK	1474	CR1面	455~ 456							
SK	1483	CR2F面				548				
SK	1486	CR1下面				553				
SE	1559	D1面	456	537	542					
SB	1560	CR2F面	457							
SD	1581	C面~A面		530						
SG	1586	C面~A面	457~ 459	530						
SD	1601	D1面	459~ 460							
SD	1603	D1面	460~ 461	523						
SD	1604	D1面	462							
SD	1605	D1面	462							
SD	1607	D1面	462							
SD	1608	D1面	462~ 463						580	
SD	1609	D1面	463							
SD	1610	D1面	463							
SK	1632	A面	464						567	
SD	1648	D1面	464							
SD	1649	D1面	464							
SD	1657	D1面		537						
SX	1670	D1面		526、 536、 537						
SP	1671	D1面							571	
SX	1674	D1面		525、 526						
SF	1687	D1面	465							
SF	1689	D1面	465							
SB	1697	D1面	465							
SK	1698	D1面	465						567	
SE	1706	D1面	466							
SF	1721	D1面	466						572	
SD	1723	D1面	466~ 467							
SD	1725	D1面	467							
SF	1727	D1面	468							
SF	1737	D1面		537						
SD	1747	D1面	468~ 469						580	
SF	1753	D1面							572	
SF	1759	D1面		535						
SB	1772	D1面						560		
SB	1780	D1面	469						572	
SB	1782	D1面	470	525					573	
SL	1783	D1面	470							
SL	1784	D1面	470~ 471						572、 573、 574	
SF	1798	D1面	472							
SF	1804	D1面	471							
SB	1822	D1面	471						571	
SR	1826	C面~A面	473							
SF	1845	D1面	474	527						
SR	1855	D1面	474~ 477	525、 526					572	
SR	1856	D1面	477~ 478					560	572	
SR	1857	D1面	479~ 481	525						
SR	1858	D1面	482	528						
SR	1859	D1面	482~ 484							
SF	1870	D1下面				546				
SU	1886	D2面	484	525						
SU	1892	E面~D2面	484~ 485	534、 540					571	
SP	1910	D1面				546				

遺構		確認面	遺物図版 (IV-@)							遺構		確認面	遺物図版 (IV-@)							
種別	No.		・陶 土 磁 器	瓦	*木 織 維	金属	銭	石	ガラス	動物	種別		No.	・陶 土 磁 器	瓦	*木 織 維	金属	銭	石	ガラス
SK	1952	D1面	485	528							SK	2478	D2面		539					
SK	1962	D2面	486~ 487					567			SF	2484	D2面					572		
SK	1965	D2面	486~ 487					567			SK	2535	D3面	515				567、 571		
SK	1966	D2面	486~ 488	526				567			SK	2560	D3面	515						
SX	2008	D2面					565				SK	2567	D2面	516	528					
SK	2039	D2面	488					571			SE	2572	D2面	516		542、 543、 544				
SK	2043	D2面				547					SE	2574	D4面~D2面	516~ 517			560、 561			
SK	2044	D2面	489	528							SK	2588	D4面~D2面			548				
SD	2082	D2面	489~ 491								SK	2589	D2面			549				
SK	2083	D2面	491	528				571			SK	2678	D4面~D2面					567		
SK	2098	E面	492					572			SK	2678	D4面~D2面					567		
SX	2102	D2面		533、 534							SP	2688	D2面				561			
SX	2105	D2面	492~ 493	523、 530、 541							SX	2715	E面	517~ 519			561			
SK	2106	D2面				549					SK	2721	D2面	520	538					
SK	2111	D2面	493~ 494								SD	2768	E面~D1面		531					
SF	2113	D2面						572			SK	2965	D4面~D2面	520~ 521						
SD	2116	D2面						572			SK	3054	D4面~D2面	522	528					
SK	2135	E面~D2面	495								SK	3196	D4面~D2面		524					
SK	2148	D2面	495~ 496								SK	3309	E面~D2面			550				
SK	2149	D2面	495~ 496								SD	3528	E面	522						
SK	2154	D2面	496~ 497																	
SF	2172	D1下面	497																	
SF	2185	D2面					560													
SK	2187	D2面					560													
SK	2208	E面	497~ 498	538																
SE	2241	D2面	498~ 499																	
SX	2245	E面	499~ 502		542	546、 547、 551	560	572												
SF	2281	D2面						574												
SE	2295	D2面	502~ 503	524	543、 545	551														
SK	2351	D2面				553														
SK	2352	D2面	503~ 510	528		547、 549、 553	560	571												
SK	2358	D2面	511					578												
SK	2382	D3面				546														
SD	2388	D3面	511																	
SK	2414	E面~D2面				548														
SK	2440	D3面				546														
SK	2441	D3面	511~ 512	528、 538																
SK	2445	D3面	512	523																
SK	2449	D3面				550														
SB	2457	E面~D1面	512~ 513			551		567、 571、 579												
SK	2475	D3面					560													
SK	2477	D2面	513~ 514	523				567、 571												



## 第Ⅳ章 江戸時代以降の遺物

### 第1節 D面焼土出土遺物（Ⅳ-1～79図）

D面焼土は、D1面直上に堆積した焼土層で、D1面に帰属し、天和2（1682）年の火災によって焼失した黒多門邸内勤番武士長屋建物に起因する焼土整理層である。よって本焼土層より出土した遺物群は、天和2年12月28日の火災発生時点で、ここに居住した勤番武士の日常生活道具類と位置付けられる。出土遺物は陶磁器・土器類が主体を占めるが、釘などの金属製品は回収されたとみえてほとんど出土していない。また瓦の出土もないことから邸内に建てられた長屋建物には瓦が葺かれていなかったことが確認される。出土遺物の様相は別項で詳細に扱うが、5mメッシュによるグリッド間接合を試みたところ、接合事例は単一グリッド内ないし隣接グリッド内と遺物の飛散は極近距離に限定され、鎮火後に木材、金属などを除去し、近辺にて瓦礫をならしたことが推定され、遺物出土位置は所有者が居住した長屋建物を反映していることが予想される。

#### （1）磁器・陶器・土器（Ⅳ-1～65図 1～513）

##### 磁器（1～225）

1～20は碗である。1は染付碗で、JB-1-aに分類される。高台内はアーチ状に整形され、高台は外傾し、畳付外側は大きく面取りされている。体部はほぼ直線状に開く。見込み側面には蔓文が描かれている。被熱している。2は鉄釉丸碗で、JB-1-aに分類される。胎土は灰褐色を呈する。高台断面は長方形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。畳付を除き、鉄釉が施されている。被熱している。3は高台無釉丸碗で、JB-1-bに分類される。高台断面は逆台形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。底部を除き、青磁釉が施されている。口縁部付近に釉飛びが認められる。4～19は丸碗で、JB-1-cに分類される。4は色絵碗で、器面の色調はやや白濁している。外面に赤、黒、青、黄絵の具を用い、梅、鳥文を描いている。被熱している。5は色絵碗で、器面はやや灰色を帯びている。外面に赤、青、緑絵の具を用い、梅文を描いている。被熱している。6は染付碗で、口唇部に口銹が施されているが、著しい釉飛びが認められる。見込みに草文が描かれている。外面は無文で高台脇の圏線のみである。高台内には一重圏線内に「宣明年製」銘が書かれている。7は染付碗で、畳付は丸く整形されている。文様は外面に花文、見込みに二重圏線内に花文、口縁内側に二重圏線、高台内には一重圏線内に「宣徳年製」銘が書かれている。被熱している。8は染付碗で、口径10cmとやや小振りの碗形である。体部には花鳥文が描かれ、高台内には二重圏線が描かれている。被熱している。9は染付碗である。文様は外面に団鶴文が3箇所配されている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。10は染付碗である。口径は10.1cmとやや小振りの碗形である。外面に松竹梅文を描き、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。11は染付碗である。高台脇からダミによる帯線を描き、その上に草文？を描いている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。12は染付碗である。外面には山水文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。13は染付碗である。器面全面に微細貫入が認められる。外面には樹木文が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。14は染付碗である。口径は9.9cmとやや小振りの碗形である。外面

には流水文、花文が描かれている。被熱している。15は染付碗である。口径は8.7cmと小振りの碗形である。外面には網干文が描かれている。被熱している。16は染付碗である。体部は高台脇から腰が張って立ち上がり、口縁部にかけてほぼ直立する。外面には団鶴文が3箇所配され、その間に草文が描かれている。被熱している。17は染付端反碗である。体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、口縁で大きく外反する。外面には兎、岩、花が描かれ、高台内には一重圏線内に「寅」？銘が書かれている。被熱している。18は染付碗である。胎土はやや灰色掛かり、呉須の発色も悪い。外面に草文が描かれている。被熱している。19は染付碗である。口径は8.6cmと小振りの碗形である。胎土は灰白色を呈し、畳付には砂が熔着している。外面には1本線による唐草文がラフに描かれており、呉須の発色も悪い。内山以外の製品と考えられる。被熱している。20は染付碗で、JB-1-dに分類される。外面には花鳥文が描かれている。被熱している。

21～122は皿・平鉢である。21は景德鎮窯系の色絵皿で、JA1-2に分類される。底部は碁笥底状を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。器面の色調はやや白濁した沈んだ白色を呈している。見込みに赤、黒、黄、緑絵の具によって花鳥文が描かれている。高台内には染付によって「竹石居」銘が書かれている。22は染付八寸皿で、JB-2-eに分類される。高台高は外面で15mmを測り、畳付は丁寧に丸味を持って整形されている。見込み全面に花文が散らされ、外側面には変形文字が散らされている。高台内には一重圏線内に「大明成（化）（年）製」銘が書かれている。被熱している。23～29は染付七寸皿である。23、24はJB-2-cに分類される。高台内にハリ支え痕が認められる。見込み全面にサギ、柳、岩波を描き、裏文様には紅葉が散らされている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。24は高台内にハリ支え痕が認められる。見込みには海松文を描き、見込み周囲には帆立貝と巻貝を交互に描いている。裏文様は縁取り線を有す如意頭唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。25はJB-2-eに分類される。高台内中央に1箇所のハリ支え痕が認められる。高台高は高台外側で13mmを測る。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は外曲し、鏢状を呈する。見込みには楼閣山水文が描かれ、口縁部には帯文が形成し、波濤文が描かれている。裏文様は線書きによる如意頭唐草文がラフに描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。26はJB-2-eに分類される。高台高は高台外側で11mmを測る。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。見込み周囲に二重圏線による区画帯が設けられ、見込みは無文、内側面に松、草が描かれている。裏文様は線書きによる如意頭唐草文がラフに描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。27はJB-2-cに分類される。高台内には4箇所のハリ支え痕が認められる。見込み周囲には二重圏線による区画帯が設けられ、見込みには海松、鮑、二枚貝が描かれ、内側面には墨弾きを併用した波濤文と千鳥が描かれている。裏文様は縁取り線を有す如意頭唐草文が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。28はJB-2-cに分類される。高台内には現存で4箇所のハリ支え痕が認められる。見込み周囲には二重圏線による区画帯が設けられ、見込みには海松と巻貝が描かれ、内側面には12単位の窓絵内に鳥が描かれている。裏文様は草花状の文様が3単位描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。同一意匠の製品が、他に7個体出土している。被熱している。29はJB-2-eに分類される。高台高は高台外面で13mmを測る。高台内には1箇所ハリ支え痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反し8単位の輪花を形成する。見込みには樹木が描かれ、裏文様には1本線による唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。30は蛇ノ目高台染付小皿で、JB-2-hに分類される。胎土は灰褐色を呈する。見込みには一重圏線内に、「大明成」銘が書かれている。31は染付四寸皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は逆台形を呈し、

口径：高台径は2.76：1である。胎土は灰白色を呈する。体部は型打ち成形によって成形され、口縁部は外反し、8単位の輪花を形成する。見込みにはラフな草文が描かれ、内側面には型打ち成形時の陽刻によって8単位の草文が施されている。胎土の色調、文様の粗製度から有田内山以外の製品と考えられる。被熱している。32は染付四寸皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は逆台形を呈し、口径：高台径は3.13：1である。胎土は灰白色を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。見込みにはラフな蔓文が描かれている。胎土の色調、文様の粗製度から有田内山以外の製品と考えられる。被熱している。33は染付四寸皿で、JB-2-bに分類される。高台断面は三角形を呈し内傾する。体部は型打ち成形によって16単位の輪花を形成する。見込みには垣根と花が描かれ、内側面は型打ち成形によって捻子花状に成形されている。高台内には一重圏線内に一重角枠内に貢偏に必と言われている異形字文が書かれている。被熱している。34は染付四寸皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は逆台形を呈し、やや内傾する。口径：高台径は2.25：1である。胎土は灰白色を呈する。体部は型打ち成形によって成形され、口縁部は外反する。口唇部には口鏽が認められる。見込みは一重圏線による区画内に草文が描かれ、内側面は型打ち成形による花卉状の8単位の陽刻文様が施されている。胎土の色調、文様の粗製度から有田内山以外の製品と考えられる。被熱している。35は染付四寸皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は逆台形状を呈し、壘付両側は雑に面取りされている。体部は型打ち成形によって輪花を形成している。口唇部には口鏽が認められる。胎土は灰白色を呈する。釉は雑に掛けられ、随所に釉溜まりが認められる。見込みは一重圏線による区画内に花文が描かれ、内側面は型打ち成形によって輪花を形成する。被熱している。36は染付四寸皿で、JB-2-bに分類される。高台断面は三角形を呈するが、やや幅広である。見込みには降灰による熔着痕が顕著に認められ、外面は随所に釉垂れ、釉ムラが認められる。見込み全面に菊花を描き、裏文様には3単位の蔓草が描かれている。高台内には「大明」銘が書かれている。同一意匠の製品が、他に2個体出土している。被熱している。37、39は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。39の高台断面はやや三角形に近い。同一意匠の製品が、他に1個体出土している。37の高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。いずれも見込み周囲に二重圏線が施され、口縁部内側には、二重圏線が施されている。37の高台内には二重圏線内に「宣真年製」銘が書かれている。38は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。見込み周囲には二重圏線が、口縁部内側には二重圏線が施されている。裏文様には、縁取りを有す如意頭唐草文が描かれている。同一意匠の製品が、他に1個体出土している。37～39は、色絵素地の可能性もある。いずれも被熱している。40は色絵四寸皿で、JB-2-bに分類される。高台断面は細身の逆台形を呈し、壘付両側は雑に面取りされている。高台内のケズリが深い。口径：高台径は2.53：1である。体部は高台脇からほぼ水平に開いた後、内湾して立ち上がり、口縁部でクランク状に外曲する。見込みには色絵文様が描かれているが、ほとんど剥落し、原形をとどめていない。黄、赤、黒絵の具が観察される。被熱している。41は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈し、口径：高台径比は1.93：1である。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み全面を染付線によって3単位の区画し、内側面側の1単位はダミで埋められ、もう1単位は唐草で埋められている。唐草の一部は区画を越えて拡がっている。裏文様には線書きによる如意頭唐草文が描かれている。高台内には二重圏線が描かれている。被熱している。42は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は三角形を呈しているが、壘付はやや幅広である。口径：高台径比は1.73：1である。器高は3.8cmを測り、やや見込みが深い。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。内面は二重圏線によって区画され、見込み中央に縁取りを有す五弁花文が、内側面に縁取りを有す梅唐草文が描かれている。口唇部には口鏽が施されている。裏文様には線書きによる如意頭唐草文が描かれ、高台内には二重圏



線が描かれている。被熱している。43は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈し、口径：高台径比は1.6：1とかなり高台径が広く、器高も2.1cmと低い製品である。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み一面に草花を描き、裏文様には蔓文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。44は染付五寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面はシャープな三角形を呈し、口径：高台径比は1.68：1である。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。内面は二重圏線によって区画され、見込みには朝顔が、内側面には牡丹唐草文が描かれている。裏文様には縁取りを有す梅唐草文が描かれ、高台内には一重圏線内に二重角枠内渦福銘が書かれている。被熱している。45は染付四寸皿で、JB-2-dに分類される。高台断面は三角形を呈しているものの、畳付幅は広く、U字形に近くになっている。口径：高台径比は1.61：1である。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。内面は二重圏線によって区画され、見込みには鳳凰文が描かれ、内側面は縁取りを有す唐草文で埋められている。裏文様には縁取りを有する如意頭唐草文が描かれ、高台内には一重圏線内に二重角枠内異形字銘が書かれている。同一意匠の製品が、他に7個体出土している。被熱している。46は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈するが、ややシャープさに欠ける。口径：高台径比は1.56：1である。外面には多量の焼土が熔着しているため、ハリ支え痕の有無は不明である。内面はダミ線と二重圏線を用いて区画され、見込みには菊花が描かれている。裏文様は松葉か。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。47は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は三角形気味のU字状を呈する。口径：高台径比は1.67：1である。見込みには二重圏線内に草花を描き、内側面には見込みと同一文様の丸文を3箇所配し、丸文間にも花を描いている。裏文様は圏線のみで、高台内には一重圏線が描かれている。同一意匠の製品が、他に1個体出土している。被熱している。48は染付五寸皿で、JB-2-eに分類される。高台はシャープなU字形を呈し、高台高は7mmを測る。口径：高台径比は1.62：1である。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。内面は二重圏線によって区画され、見込みには菖蒲？が、内側面には牡丹唐草文が描かれている。裏文様は圏線のみ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。49は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はU字形を呈す。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口径：高台径比は、1.73：1である。胎土は灰白色を呈する。釉はやや青味を帯び、外面には随所に釉垂れが認められる。見込み文様は八角形の区画帯内に鳥、花が描かれ、内側面には8単位の二重圏線楕円区画内に花卉、宝珠が交互に描かれている。裏文様は染付線で、5単位の区画され、非常にラフなワンポイント文様が描かれている。被熱している。50は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は上方がやや開くU字形を呈し、畳付は丸く整形されている。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口径：高台径比は、1.65：1である。内面は二重圏線によって区画され、見込みには鳥が、内側面にはダミの濃淡で波濤文を表し、その輪郭は墨弾きによって表されている。裏文様には紅葉を散らし、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。51は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はシャープなU字状を呈し、高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。口径：高台径比は、1.68：1である。見込みには草が描かれ、周囲には同心円状の集合圏線による意匠が描かれている。裏文様は無文で、高台内には一重圏線が描かれている。同一意匠の製品が、他に2個体出土している。被熱している。52は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。胎土はくすんだ黄白色を呈し、釉も透明感が薄く、呉須の発色も黒ずみ焼成不良の製品である。高台断面はやや開くU字形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口径：高台径比は、1.48：1とかなり高台径が広い。見込みには兎、草花が描かれ、裏文様には線書きによる環状

唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。53は染付三寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は上方がやや開くU字形を呈し、高台高は8mmと高い。見込みは二重圏線による区画で、無文帯を形成し、内側面には墨弾きによって雲形文が描かれている。裏文様には蔓草を描き、高台内には一重圏線内に、「大明成化年製」銘が書かれている。同一意匠の製品が、他に7個体出土している。被熱している。54は糸切り細工の貼り付け高台による形皿で、JB-2-rに分類される。高台は楕円形を呈し、高台高は13mmを測る。体部は楕円形を呈する菊花形に成形されている。見込み中央には菊花を描き、型打ちによる花卉先端部にはダミが施されている。裏文様には線書きによる梅唐草文が描かれ、高台には雷文が巡る。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。被熱している。55は染付四寸皿で、JB-2-dに分類される。高台断面は三角形を呈するが、畳付幅はやや広く、丸く整形されている。高台内にはハリ支え痕が3箇所認められる。体部は高台脇からほぼ水平に開き、内曲し逆ハの字状に開く。口径：高台径比は、1.49：1である。見込み周囲は二重圏線によって区画され、見込みには鶴、松を描き、内側面には縁取りを有する梅唐草文が3単位描かれている。裏文様には縁取りを有す如意頭唐草文が描かれている。いずれも非常に丁寧に描かれている。高台内には一重圏線内に二重角枠内「渦福」銘が書かれている。被熱している。56は染付四寸皿で、JB-2-dに分類される。高台断面はU字形を呈し、畳付幅は3mmを測る。体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、体中位で外反し、口縁部で再び内湾する。型打ち成形によって8単位の輪花を形成する。口径：高台径比は、1.81：1である。見込みには丸文とススキを描いた雪輪文を散らし、内側面には宝珠文が描かれ、口縁部内側には部分的にダミが施されている。裏文様は縁取りを有す如意頭唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に「宣嘉年製」銘が書かれている。被熱している。57は染付四寸皿で、JB-2-dに分類される。56と同一器形で、同じ土型で成形された製品と考えられる。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。文様は見込み周囲に丸文とススキを描いた雪輪文を散らし、口縁部内側にはダミによって波状文様が巡らされている。裏文様は縁取りを有す如意頭唐草文が描かれ、高台内には一重圏線内に「宣嘉年製」銘が書かれている。被熱している。58は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は上方がやや開くU字形を呈し、高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁で外反し8単位の輪花を形成する。口径：高台径比は、1.63：1である。見込みは二重圏線によって区画され花文が描かれている。内側面には松、竹、草が描かれており、欠損部には竹が描かれていたと推定される。裏文様は縁取りを有す如意頭唐草文が描かれているが、ダミは縁取りをはみ出し、如意頭にはダミが掛けられていない。高台内には一重圏線が描かれている。59は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は上方がやや開くU字形を呈し、畳付は丸く整形されている。体部は丸味を帯びて立ち上がる。口径：高台径比は、1.72：1である。見込みには鳥、岩、葦などをモチーフにした一枚絵が描かれ、裏文様には蔓草が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。60は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は上方が開くU字形を呈する。高台内中央にはハリ支え痕が1箇所認められる。口径：高台径比は、1.58：1である。見込みには生花が描かれ、裏文様には簡略された七宝文が8単位描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。61は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はU字形を呈し、やや内傾する。高台内中央にはハリ支え痕が1箇所認められる。口径：高台径比は、1.7：1である。見込みには鳥、岩、樹木をモチーフにした一枚絵が描かれている。裏文様は圏線のみである。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。62は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はやや上方が開くU字形を呈している。口径：高台径比は、1.51：1である。見込み全面に6弁の花状文様が描かれ、裏文様には蔓草が描かれている。

高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。63は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈するが、畳付幅はやや広く、シャープさに欠ける。高台内中央にはハリ支えが熔着したままになっている。口径：高台径比は、1.72：1である。器面の色調は灰白色を呈する。見込みには鷺、流水文が描かれ、裏文様は圏線のみである。高台内には一重圏線が描かれ、中央には二重圏線内「角福」銘が書かれている。被熱している。64は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はシャープなU字状を呈する。口径：高台径比は、1.85：1とやや高台径が小さい器形を呈する。器面の色調は灰白色を呈し、釉飛びも認められる。見込みには桐、瓢箪、四方襷を描いた短冊が描かれている。裏文様は無文で、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。65は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面は三角形気味に開くが、畳付幅はやや広く、丸味を帯びる。口径：高台径比は、1.7：1である。底部厚は8mmと厚く、見込み深は12mmと浅い。見込みには如意頭状の区画を三方に配し、梅、松を描いている。欠損部には竹が描かれていたと推定される。区画外は花卉で埋められている。裏文様には圏線による梅唐草文が、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。66は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。高台断面はやや上方に開くU字形を呈している。口径：高台径比は、1.87：1である。器面の色調は青灰色を呈する。見込みには簡略された宝珠文が描かれている。裏文様は無文である。同一製品が他に1個体出土している。被熱している。67は染付四寸皿で、JB-2-sに分類される。高台断面は幅広の三角形を呈し、畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.81：1である。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉ムラが認められる。見込みには花を描いた色紙と柳を描いた折り紙が描かれているが、呉須の発色は青黒い。裏文様は圏線のみで、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。68は染付四寸皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈し、高台内中央にはハリ支え痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口径：高台径比は、1.71：1である。見込み周囲をダミ線と染付線による帯線で区画し、見込みには花が描かれている。裏文様は圏線のみで、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。69～83は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。69は高台断面はやや上方が開くU字形を呈し、高台内中央にはハリ支え痕が認められる。口径：高台径比は、1.62：1である。見込みには草花をモチーフとした一枚絵が描かれ、裏文様には簡略化された花束文？が2単位描かれている。被熱している。70の高台断面はやや上方が開くU字形を呈する。畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.92：1と高台径が小さい製品である。器面の色調は灰白色を呈し、呉須の発色も悪い。外面には釉ムラが、見込みには降灰による熔着痕が認められる。見込みには水車が描かれている。裏文様は圏線のみで、高台内には一重圏線が描かれている。71の高台断面は上方に開き、畳付は丸く整形されている。高台内中央にはハリ支え痕が認められる。口径：高台径比は、1.61：1である。見込み周囲にはダミ線による圏線が描かれ、それを越えて見込みから内側面にかけて樹木が描かれている。裏文様には七宝文が散らされている。高台内には一重圏線が描かれている。呉須の発色は悪い。被熱している。72の高台断面は上方は開き、畳付は丸く整形されている。口径：高台径比は、1.66：1である。器面の色調はややくすんだ白色を呈する。見込み周囲にはダミと染付線による圏線が巡り、見込みには花が描かれ、内側面には2匹の蝶が三方に配されている。裏文様は簡略化された花束文？が3単位描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。73の高台断面はやや上方へ開くU字形を呈し、畳付には砂が熔着している。器面の色調は灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が、外側面には釉垂れが認められる。口径：高台径比は、1.9：1と比較的高台径が小さい。見込み周囲に放射状の染付線で埋めた輪花形帯線を描き、見込みには花が描かれている。裏文様は簡略された花束文？が2単位描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。74の高台断面はや



や上方に開くU字形を呈し、畳付には砂が熔着している。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口径：高台径比は、1.79：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、外側面には釉垂れが認められる。見込み周囲を二重圏線によって区画し、見込みには花が、内側面には葡萄が描かれている。裏文様は2単位の文様で構成されているが、かなり簡略されており意匠は不明である。被熱している。75の高台断面はU字形を呈する。口径：高台径比は、1.7：1である。胎土の色調はややくすんだ白色を呈する。見込み周囲を二重圏線によって区画し、見込みには菖蒲？が描かれ、内側面には桐が描かれている。裏文様には簡略化された花束文？が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。76の高台断面はU字形を呈し、畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.81：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、釉ムラが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に菊花を描いているが、一部は区画線を越えて、見込みにまで及んでいる。裏文様には簡略化された意匠が3単位描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。77の口径：高台径比は、1.88：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、外側面には釉垂れが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に梅を描いているが、一部は区画線を越えて見込みにまで及んでいる。裏文様は簡略された花束文？が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。78の口径：高台径比は、1.76：1である。文様構成は77と同様である。被熱している。79の畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.76：1である。器面の色調は青味がかかった灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に樹木を描き、見込みにワンポイントの紅葉を描いている。裏文様には線書きによる圏線唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。80の高台断面はシャープなU字形を呈しており、畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.65：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、外側面には釉垂れが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に草花文を描き、見込みにはワンポイントの草花文を描いている。裏文様は簡略化された花束文？が2単位描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。81の口径：高台径比は、2.12：1とかなり高台径が小さい。素地、器面の色調とも灰褐色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み、内側面共に草花を描いている。裏文様には折松葉が2単位描かれている。呉須の発色は悪い。被熱している。82の口径：高台径比は、1.77：1である。器面の色調は灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。見込み周囲を二重圏線と染付線・ダミ線による帯線で区画し、見込み中央には花が描かれている。裏文様には簡略化された花束文？が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。83の底部厚は8mmと厚く、中央部は窯床に接し、砂が熔着している。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈する。口径：高台径比は、1.65：1である。見込み周囲を二重圏線と花文を並べダミをかけた帯線で区画し、見込みには花文を描いている。裏文様には簡略された花束文？が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。84～107は、外山から大外山で生産された量産品の染付四寸皿で、JB-2-s分類される。84は高台断面はやや上方に開く幅広のU字形を呈し、高台高は3mmと低い。口径：高台径比は、1.82：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、外面には釉垂れ、釉飛びが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央には花文が、内側面には5単位の捻子花状区画を施し、花文を描いている。裏文様は無文である。被熱している。85は畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.81：1である。器面の色調は灰褐色を呈し、外面には釉ムラが認められる。見込み周囲を染付線とダミによる帯線で区画し、見込みには花文が描かれている。被熱している。86の高台断面は三角形を呈し、畳付には砂が熔着

している。口径：高台径比は、2.6：1と高台径は小さい。器面の色調は灰褐色を呈する。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには柳、建物を描き、内側面は放射状の二重線によって6単位に区画されている。本製品類似資料は嬉野市吉田2号窯跡出土製品に見ることができる。被熱している。87の高台断面は逆台形を呈し、畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、2.34：1と高台径は小さい。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉ムラが認められる。見込みには色紙内に柳が描かれている。呉須の発色は悪い。被熱している。88の高台断面は逆台形を呈し、高台高は4mmと低い。口径：高台径比は、2.5：1と高台径は小さい。器面の色調はやや青味がかかった灰褐色を呈し、外面には釉ムラ、高台際には釉飛びが認められる。見込みには色紙内に柳が描かれている。被熱している。89の高台断面は逆台形を呈し、口径：高台径比は、1.79：1である。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉ムラが認められる。見込みには雪輪文、草、雲が描かれている。被熱している。90の高台断面はやや内傾する逆台形を呈し、口径：高台径比は、2.19：1である。底部最大厚は12mmと厚い。器面の色調はやや黄味を帯びた灰白色を呈し、外面には釉垂れ、釉飛びが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みにはオモダカが描かれている。91の高台断面はやや細身の逆台形を呈し、畳付と底部中央には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.84：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。見込みには色紙内に竹などが簡単に描かれている。被熱している。92の高台断面は逆台形を呈し、畳付は丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.75：1である。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉ムラ、高台内には釉飛びが認められる。見込みには色紙内に建物、柳などが簡単に描かれている。被熱している。93の高台断面は逆台形を呈し、畳付は丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.98：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには柳が描かれ、内側面には花文様が三方に配されている。被熱している。94の高台断面は逆台形を呈し、畳付は丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.87：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈しているが、焼成不良のため斑状に白濁している。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには竹、岩が描かれ、内側面には七宝文が6箇所配されている。被熱している。95の高台断面は細身の逆台形を呈し、畳付は丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.76：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰褐色を呈し、釉ムラ、釉切れが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには岩、竹が描かれ、内側面には四方櫛状の文様などが6単位配されている。被熱している。96の高台断面は逆台形を呈し、畳付と高台内中央には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.86：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、釉ムラが認められる。見込み周囲を染付線とダミを用いた輪花形帯線で区画し、見込みには花？が描かれている。被熱している。97の高台断面はやや細身の逆台形を呈し、畳付はやや丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.75：1である。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉垂れが認められる。見込み文様は96と同一意匠である。被熱している。98の高台断面は幅広の三角形を呈し、畳付と高台内中央には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.73：1である。器面の色調は灰褐色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が、外面には釉ムラが認められる。見込み周囲を花をあしらった二重圏線で区画し、見込みには花卉文が描かれている。呉須の発色は悪い。被熱している。99の高台断面は逆台形を呈し、畳付は丸味を帯びている。口径：高台径比は、1.68：1である。器面の色調はやや青味がかかった灰白色を呈し、釉ムラ、釉切れが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには花盆が、内側面には草花が描かれている。被熱している。100の高台断面は上方が開くU字形を呈しているが、シャープさに欠ける。口径：高台径比は、1.75：1である。器面の色調は明灰褐色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。また焼

成不良のため、器面全体が白濁している。見込み周囲を二重圏線で区画し、花文を描いている。被熱している。101の高台断面は上方が開くU字形を呈し、畳付には砂が熔着している。口径：高台径比は、1.83：1である。器面の色調は灰白色を呈し、釉ムラが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには花卉文を、内側面には唐草文を描いている。被熱している。102の高台断面は逆台形を呈し、内傾する。口径：高台径比は、2：1である。器面の色調は灰白色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。口唇部には口鏽が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みに花盆を描いている。呉須の発色は悪い。被熱している。103の高台断面は上方が開く幅広U字形を呈し、やや内傾する。口径：高台径比は、1.94：1である。器面の色調は灰白色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには花卉文を、内側面には2単位の花文を描いている。被熱している。104の高台断面はU字形を呈し、口径：高台径比は、1.75：1である。器面の色調は灰白色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央および内側面に5単位の花文を描いている。被熱している。105の高台断面はやや内傾するU字形を呈する。口径：高台径比は、2.3：1と、高台径が小さい。器面の色調は灰褐色を呈し、釉ムラ、釉飛びが認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには紅葉状の植物を、内側面には蔓文？が描かれている。やや被熱している。106の高台断面はやや上方が開くU字形を呈し、高台内側のケズリが深い。口径：高台径比は、2.31：1と、高台径が小さい。器面の色調は灰褐色を呈し、全面に細かい貫入が入っている。見込みには降灰による熔着痕が、外面には釉ムラ、釉飛びが認められる。見込み周囲を輪花形帯線で区画し、見込みには蝶を描いている。嬉野市不動山3号窯跡物原出土資料に類例が認められる。107の高台断面は逆台形を呈し、畳付は丸く整形され、砂が熔着している。口径：高台径比は、1.91：1である。器面の色調は灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が、外面には釉ムラが認められる。見込み周囲を輪花形帯線で区画し、見込みに花を描いている。被熱している。108は染付二寸皿で、JB-2-sに分類される。高台断面はやや上方が開くU字形を呈する。器面の色調は淡青白色を呈し、外面には釉ムラが認められる。見込みには染付線によって水文が描かれている。109、110、121は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿のうち高台径が小さく、高台断面が細身の逆台形を呈し、底部が施釉されている製品で、JB-2-lである。109の高台はやや外傾し、見込みに日字鳳凰文が描かれている。被熱している。110は見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に錆釉が施され、直重ねによる環状熔着痕が認められる。器面の色調は灰白色を呈し、外面には釉ムラが認められる。内側面には千鳥、竹が描かれている。同一意匠の製品が、他に3個体出土している。被熱している。121は焼成不良のためか深緑色を呈する青磁釉が施され、全面に貫入が認められる。素地は灰褐色を呈する。蛇ノ目釉剥ぎ部表面色調は、茶褐色を呈し、直重ねによる環状熔着痕が認められる。被熱している。111は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿で、JB-2-kに分類される。高台断面は逆台形を呈し、やや外傾する。器面の色調は灰白色を呈し、外面底部付近には釉垂れが認められる。蛇ノ目釉剥ぎ部には直重ね痕が認められる。内側面には松葉、梅？が描かれている。被熱している。112～120は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青磁皿で、JB-2-kに分類される。高台断面は外側がほぼ直立する逆台形を呈する。釉は淡青白色を呈し、流し掛けされ、釉ムラが認められる。いずれも被熱している。112は口縁部が鏗状に外曲し、本分類初期の様相を呈している。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部は素地に1段を有するほど深く削り取られている。113、115～118の蛇ノ目釉剥ぎ部には直重ねによる環状熔着痕が認められる。114の見込みには降灰による熔着痕が認められる。120は口縁部が外反し、本分類初期の様相を呈している。高台脇にはカンナ痕が巡っている。119の高台断面は逆台形を呈し、底部無釉であるが、青磁釉は高台外面畳付際まで比較的丁寧に施されている。蛇ノ目釉剥ぎ部には直重ねによる環状熔着痕



が認められる。被熱している。122は染付皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は三角形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。高台内には残存部でハリ支え痕が2箇所認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには花卉文、内側面には牡丹唐草文を描いている。裏文様には蔓文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。123は染付芙蓉手大皿で、JB-3-fに分類される。高台断面は三角形を呈し、やや内傾する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、中位で外曲する。高台内にはハリ支え痕が3箇所認められる。器面全面が焼成不良のため、白濁し光沢はない。見込みには松竹梅の花盆が描かれ、内側面の区画には宝珠文と花卉文が交互に描かれている。裏文様には蔓文が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。

124～131は鉢である。124～128、130は染付鉢で、JB-5-bに分類される。124は型打ち成形によって、体中位で一段稜を有し、口縁部は鋸歯状の細かい輪花を形成する。見込みには菊花文が描かれ、内側面には花文が陰刻され染付線とダミ線による帯線が巡っている。裏文様は1本線の圏線による如意頭唐草文が描かれ、高台内には二重圏線が描かれている。被熱している。125は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央には五弁花文を描き、内側面には2単位の窓絵を配し、楼閣山水文を描いている。裏文様は線書きによる如意頭唐草文が描かれ、高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。126は見込みおよび裏文様に縁取りを有す梅唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。127は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。胎土は灰白色を呈する。見込み周囲を二重圏線によって区画し、見込み中央には複弁を持つ五弁花文が描かれ、内側面には牡丹文が描かれている。裏文様は片側1本の縁取りによる如意頭唐草文が描かれている。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。128の胎土は灰白色を呈する。文様は見込みに二重圏線を描き、その中に菊花文を描いている。外面は口縁部と高台部に圏線が描かれているのみである。被熱している。130の胎土はやや灰色を帯びている。文様は見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みに花を描き、内側面に風景状の文様が描かれているが被熱と破損のため詳細は不明。129は青磁染付小鉢で、JB-5に分類される。底部は碁笥底を呈し、体部は内湾して立ち上がり口縁部でハの字状に外曲する。青磁釉は青白色を呈し、畳付を除く外面と内体部上半まで掛けられ、内体部下半には透明釉が掛け分けられている。口縁部には染付による帯文が描かれている。被熱している。131は青磁鉢で、JB-5-dに分類される。青磁釉は淡青緑色を呈する。高台は蛇ノ目凹形高台を呈し、蛇ノ目釉剥ぎ部には鉄奨が施され、チャツ痕が認められる。見込みには陰刻による花文とその周囲に雷文が巡っている。被熱している。

132～142は小坏である。132、133は丸碗形の坏で、JB-6-aに分類される。132の高台断面はU字形を呈し、外面には楼閣山水文が描かれている。被熱している。133の高台断面はやや幅広のU字形を呈し、外面には楼閣山水文が描かれている。被熱している。134～142は端反小坏で、JB-6-bに分類される。134は高台断面がやや上方へ開くU字形を呈する。文様は外面に松竹梅文を描き、高台内には「太明成化年製」銘が書かれている。被熱している。135は高台断面がシャープなU字形を呈する。外面は口縁部と高台付近に圏線が描かれているのみで、色絵素地の可能性もある。高台内には一重圏線が描かれている。被熱している。136は高台断面がやや上方へ開くU字形を呈する。外面には鶉が描かれている。高台内には高台際に一重圏線を描き、「(太明成) 化年製」銘が書かれている。被熱している。137の高台断面はシャープなU字形を呈する。外面は墨弾きで雲形文を描き、器面全面をダミで埋めている。見込みには鳥が描かれている。高台内には「宣明年製」銘が書かれている。被熱している。138の高台断面は幅広のU字形を呈し、畳付には砂が熔着し、見込みには降

灰による熔着痕が認められる。器面の色調は灰白色を呈する。外面には風景と思われる粗放な文様が描かれている。被熱している。139は見込みに降灰による熔着痕が認められる。外面には木、岩が描かれている。140は白磁小杯で、口縁部は大きく外反する。被熱している。141は白磁小杯である。畳付には砂が熔着している。142は染付端反小杯である。外面には風景が描かれている。被熱している。143は白磁猪口で、JB-7-bに分類される。体部下半に白泥を用いた型紙摺りによって唐草状の文様が3箇所施されている。

144～147は仏飯器である。144は青磁仏飯器で、脚部のえぐりが深いJB-8-aに分類される。畳付内側は1段平坦面を介して中央が円錐形状に抉られている。また外側には明瞭な面取りが施されている。胎土は灰白色を呈し、青磁釉は灰青緑色に発色している。底部無釉。145～147は染付仏飯器で、底部の抉りが浅いタイプで、JB-8-bに分類される。145は体中位に稜を有し、口縁部は外反する。体部には草文が描かれている。底部無釉。被熱している。146は器面の色調は灰白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。器面の色調は灰白色を呈し、釉は流し掛けされており、脚部の釉際は波打っている。体部は浅く、緩やかに内湾して開く。外面には粗放な唐草文が描かれている。底部無釉。147は畳付外面が逆台形状にシャープに面取りされている。器面の色調は灰白色を呈し、釉は流し掛けされており、脚部の釉際は波打っている。体部は浅く、緩やかに内湾して開く。外面には唐草文が描かれている。底部無釉。被熱している。

148～158は香炉である。148は白磁香炉で、底部が円盤状の露胎部を呈し、JB-9-aに分類される。底部端には脚が付けられ、体部は直線的に開き2本の隆帯が巡る。口縁部は内曲し断面はT字状を呈す。釉は露胎部を除く外面から内体部上半にかけて施されている。被熱している。149～152は青磁香炉で、蛇ノ目高台を呈し、底部全体が露胎である。JB-9-fに分類される。149の体部はやや開く筒形を呈し、口縁部はL字状に内曲する。内面のロクロ目は間隔が狭くかつ深いことから、ケズリによって整形されたと考えられる。胎土は灰白色を、青磁釉は淡い深緑色を呈し、外面にのみ施釉されている。底部には鉄奨が施されている。被熱している。150は蛇ノ目高台内がやや深く抉られている。体部は直立し口縁部は内曲しL字状を呈す。胎土は灰褐色を呈し、青磁釉は淡い深緑色を呈し、外面にのみ施釉されている。被熱している。151は袴腰形を呈し口縁部は外反し口唇部は内側へ折り曲げられている。胎土は灰白色を呈する。青磁釉は淡緑色を呈し、高台際から口縁部内側まで施釉されている。被熱している。152は蛇ノ目高台外側が大きく面取りされ、やや開きぎみに直立する。口縁部は内側へ2回折り返され、断面形は三角形を呈する。胎土は灰白色を呈し、青磁釉は淡深緑色を呈し、外面から口唇部内側にかけて施釉されている。被熱している。153～157は輪高台を有する香炉で、JB-9-cに分類される。153は白磁香炉である。底部外端も高台状に張り出し、二重高台状を呈しているが、接地しているのは内側の輪高台のみで、外側は装飾である。体部中位には2条の隆線が巡り、口縁部は内曲しL字状を呈している。口縁部内側から高台際まで施釉されているが、流し掛けによりいずれも釉際は波打っている。被熱している。154は青磁香炉である。高台断面は逆台形を呈し、底部際には獣足が3脚貼り付けられている。体部はやや開きぎみに直立し、下端に2条、中位に2条の隆線が巡り、口縁部外側は带状の縁帯が巡る。また口唇部は内曲しL字状を呈す。青磁釉は青白色を呈し、内体部中位から高台際まで掛けられ、体下半には釉ムラが認められる。被熱している。155は青磁香炉である。高台断面は細身の逆台形を呈し、底部外端には陰刻を施した脚が貼り付けられている。体部下位に1条の隆線、口縁部に3条の隆線が巡る。口唇部は内曲しL字状を呈す。胎土は灰褐色を呈する。青磁釉は深緑色を呈し、口縁部内側から畳付際まで施釉されている。被熱している。156は白磁香炉である。高台は細身の逆台形を呈し、畳付は平坦に整形されている。

体部はやや外反ぎみに立ち上がり、口唇部は内曲しL字状を呈する。釉は口唇部内側から壘付際まで掛けられている。被熱している。157は白磁香炉で、高台の外側に脚が貼り付けられている。体部はやや外反ぎみに立ち上がり、3条の隆線が巡る。口唇部は内曲しL字状を呈す。釉は口縁部内側から壘付際まで掛けられている。158は白磁香炉の口縁部片で、JB-9に分類される。口縁部は内湾し、口唇部で下方に曲げられている。被熱している。

159～162は瓶である。159は染付瓶で、JB-10に分類される。最大径は体部下半に有り、肩部で稜をもって頸部に移行する。口唇部は若干玉縁状の膨らみを持つ。外面には帯線、圏線による幾何学文様が描かれている。被熱している。160、161は染付瓶で、JB-10-eに分類される。160の高台断面は逆台形を呈し、口縁部は朝顔状に開口する。体部には花文が描かれている。被熱している。161は碁笥底状の高台を呈し、体部はなで肩で口縁は朝顔状に開口する。被熱している。162は大形長頸瓶で、JB-10-aに分類される。最大径は体部やや上方にある。頸部は直立し、口縁部は外反して玉縁状をなす。体部には蔓文が描かれ、頸部には鋸歯状の幾何学文が巡る。被熱している。

163、164は油壺で、JB-12に分類される。163は白磁で、器面の色調は灰白色を呈する。被熱している。164は色絵で、器面の色調は灰白色を呈する。被熱と風化のため、色調は劣化しているが、赤、黒、青絵の具が確認される。

165～177は蓋物とそれに伴う蓋である。165は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。高台断面はやや丸味を帯びた三角形を呈し、底部厚は6mmと厚い。文様は荒磯文と思われる。被熱している。166は白磁の蓋物で、JB-13-bに分類される。高台脇は面取りされ、体中位に隆線が施され、漆器碗の壺を正確に模倣した製品である。口縁部内外面共に蓋受けのため無釉であるが、外面の釉際は口唇部から約1cm下ではほぼ水平であるが、内面は流し掛けのままに波打っている。被熱している。167は166に伴う蓋である。高台状の摘みを有し、体部はハの字状に開く。身受け部は無釉である。被熱している。168は丸碗形の色絵蓋物で、JB-13-aに分類される。器面の色調はやや白濁し、焼成不良と考えられる。蓋受け部の無釉部は口唇部外側では丁寧に削り取られているが、内側は流し掛けのままに、緩やかに波打っている。文様は窓絵内に花が描かれているが、被熱と風化のため、色調は劣化しており、赤、黒、黄絵の具が確認できる。169は168に伴う蓋である。上部中央には釦状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム形を呈し、端部でやや外反する。内面無釉。文様は身と共通する。被熱している。170は袋状を呈する蓋物で、JB-13に分類される。口縁部は外反する。蓋受け部は口唇部から口縁部内側にかけて丁寧に釉剥ぎされている。体部には牡丹唐草文が描かれている。被熱している。171は170に伴う蓋である。上部中央には釦状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム形を呈し、端部でやや外反する。文様は身と共通する。被熱している。172は瑠璃釉筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。体部に瑠璃釉、底部と内面は透明釉で掛け分けられている。蓋受け部は口唇部から口縁部内側にかけて丁寧に釉剥ぎされているが、内面の透明釉は流し掛けによる釉飛びが認められる。被熱している。173は172に伴う蓋である。上部中央には円筒状の摘みが貼り付けられている。表面を瑠璃釉、内面を透明釉で掛け分けられている。被熱している。174は筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。体部はやや外傾して直立する。蓋受け部は口唇部から口縁部内側にかけて丁寧に釉剥ぎされている。外面には建物、草、岩、雲などの風景が描かれている。被熱している。175は174に伴う蓋である。上面中央に高台状の摘みを有する。体部はドーム形を呈し、端部で外反する。文様は身と共通する。被熱している。176は筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。高台断面はやや上方へ開くU字形を呈し、やや内傾する。蓋受け部は口唇部から口縁部内側にかけて丁寧に釉剥ぎされている。外面には薄ダミによる区画が設けられ、草、岩などの風景が描かれている。被熱し



ている。177は176に伴う蓋である。上部中央に円筒状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム形を呈し、端部で外反する。文様は身と共通する。被熱している。

178、179は白磁合子の身である。178はJB-18-aに分類される。底部はベタ底で、体部は型打ち成形によって輪花状の陽刻が施されている。外面のみ施釉されている。被熱している。179はJB-18に分類される。底部はベタ底で、平面形は小判形を呈する。底部と蓋受け部は無釉である。無釉部に墨の付着が認められる。

180～198は壺(JB-15)とその蓋である。180は白磁壺で、頸部に放射状のシノギが施されている。高台断面は逆台形を呈し、暈付外側が面取りされている。内面は流し掛けによって施釉され、釉際は内体部上半から口縁部にかけて波打っている。被熱している。181は180に伴うと考えられる蓋である。内面は無釉。被熱している。182は白磁壺で、高台はハの字状に外傾する。体部は和太鼓状に膨らみ、口縁部は外反する。被熱している。183は白磁壺で、高台はやや外傾し滑らかに体部へ移行する。最大径は体上半にあり、口縁部はやや外反し口唇部下に1条の微隆線が巡る。焼成不良のため、釉は白濁している。被熱している。184は白磁壺である。高台中位が外側へ張り出し、算盤玉状を呈す。体部は丸味を帯びて立ち上がり、肩部付近に最大径を有す。口縁部はやや外反して直立する。内面は流し掛けによって施釉され、釉際は波打っている。被熱している。185は184に伴うと考えられる蓋である。上面中央には算盤玉状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム状を呈し、端部は外反し鏢状に張り出す。被熱している。186は青磁壺である。肩部と頸部に各1条の隆線が施されている。胎土は灰白色を呈し、青磁釉は淡深緑色を呈し、随所に釉飛びが認められる。内面は流し掛けで、釉切れが認められる。被熱している。187は186に伴うと考えられる蓋である。上面中央に団子状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム状を呈し、端部は鏢状に張り出している。内面無釉。被熱している。188は青磁三耳壺である。高台断面はやや外傾する逆台形を呈し、暈付外側は面取りされている。体部は高台から滑らかに立ち上がり、最大径は体上半にある。肩部には粘土紐の貼り付けによる橋状把手が3箇所貼り付けられている。外面の青磁釉は深緑色を呈し比較的厚く掛けられているが、内面は口縁部内側のみ掛けられている。被熱している。189は染付壺である。胎土は灰白色を呈する。内面無釉。体部には竹が描かれ、口縁部には雷文が巡る。被熱している。190は189に伴う蓋である。摘みは欠損している。体部はドーム状を呈し、端部は鏢状に張り出す。表面に松が描かれている。内面無釉。被熱している。191は染付壺である。高台は算盤玉状を呈する。最大径は肩部にあり、口縁部はやや外傾して直立する。内面は流し掛けによって施釉され、釉切れが認められる。体部には風景と推定される文様が描かれている。被熱している。192は蓋である。釦状の摘みが貼り付けられている。体部はドーム状を呈し端部はやや下傾して鏢状に張り出している。文様は191と共通しているが、出土地点が壺はG3・G4グリッド、蓋はE15と約50m離れていることからセットの可能性は低い。被熱している。193～198は染付壺で、供伴する蓋は認められなかった。193は暈付両側が面取りされている。体部には海浜図を描き、頸部には鋸歯状の幾何学文を描いた帯文が巡る。内面は体下半部と口縁部内側のみ施釉されている。被熱している。194は高台断面がやや幅広の逆台形を呈し、暈付両側は面取りされている。外面の釉には釉ムラ、釉飛びが認められ、内面は流し掛けによって施釉され、釉際は口縁部内側から内体部上半にかけて波打っている。体部にはオモダカが描かれ、口縁部には渦巻文を描いた帯文が描かれている。被熱している。195は碁笥底状の蛇ノ目高台を呈し、暈付には砂が熔着している。内体部中位にはケズリによる鋭い沈線が数条巡る。外面には釉ムラ、釉飛びが認められ、内面は流し掛けされている。文様は網干文を含む風景が描かれている。被熱している。196は高台断面が逆台形を呈し、暈付外側が面取りされている。

胎土は灰白色を呈する。外面には釉ムラ、釉垂れが認められ、内面は流し掛けされている。底部は無釉。体部には一重網目文が描かれ、口縁部には連続渦巻文を描いた帯文が描かれている。被熱している。197は体部の膨らみは小さく、太鼓形を呈している。外面には釉ムラが認められ、内面は流し掛けされている。文様は体中位に一重網目文が描かれている。被熱している。198の高台断面は算盤玉状を呈し、体部は型打ち成形によって15面に成形され、底部に貼り付けられている。体部文様は縦方向の帯線により3単位に区画され、草花が描かれている。口縁部には鋸歯状の肩部には放射状の幾何学文を描いた帯文が描かれている。内面の釉も丁寧に掛けられ、口縁部内側でほぼ水平に整えられている。小片につき図化はしていないが、本製品に供伴する蓋の破片も同グリッドから出土している。被熱している。

199～203は花生で、JB-22に分類される。199は竹筒形の青磁掛け花生である。胎土は灰白色を呈する。高台は碁筒底状を呈し、体部には3箇所の節が作出され、下段の節上部より切断された枝が貼り付けられている。また口唇部と上段の節の間には直径9mmを測る壁掛け用の孔が穿たれている。青磁釉は淡緑色を呈し、畳付を除く全面に掛けられている。被熱している。200は青磁花生である。高台は算盤玉状を呈し、体部は緩やかに開き、壺形を呈す。頸部には1対の把手が貼り付けられている。体部全面にしのぎが施されている。青磁釉は淡緑色を呈し、口縁部内側から底部にかけて掛けられている。被熱している。201は青磁花生で、鼓形を呈すると考えられる。胎土は灰白色を呈し、青磁釉は暗緑褐色を呈する。内面無釉。被熱している。202は染付花生で、鼓形を呈すると考えられる。胎土は灰白色を呈する。内面無釉。体部下半に文様が描かれているが、欠損部が多く詳細は不明である。被熱している。203は鉄釉花生である。胎土は灰褐色を呈する。高台から体部へは滑らかに立ち上がり、口縁部は朝顔形を呈する。内面の釉は流し掛けにより、釉切れが随所に認められる。被熱している。204は茶筌立てと考えられる肥前産青磁製品である。胎土は灰白色を呈する。青磁釉は淡緑白色を呈し、内面は無釉である。被熱している。

205～207は水滴で、JB-19に分類される。205は染付で、陽刻文様を施し、ダミを掛けている。206は平面長方形を呈する染付製品で、空気孔には菊花形のパーツが貼り付けられている。底部は無釉で、型押し時の布目圧痕が観察される。また墨が付着している。207は平面長方形を呈する色絵製品で、注口には円筒形の、空気孔には菊花形のパーツが貼り付けられている。上面には黒、緑、青、黄絵の具で、梅花が描かれている。被熱している。

208～211は壺の蓋である。208の胎土は灰白色を呈し、内面は無釉、上面には一重網目文が描かれている。197の蓋と考えられる。被熱している。209の胎土は灰白色を呈し、内面は無釉、上面には蔓文が描かれている。上面中央には球状の摘みが貼り付けられている。内面には墨と考えられる付着物が認められる。被熱している。210は白磁壺の蓋である。上面中央には球状の摘みが貼り付けられている。211は白磁壺の蓋である。上面中央には円筒形の摘みが貼り付けられている。内面は無釉。被熱している。212は蓋物の蓋である。上面中央には橋状の摘みが貼り付けられている。如意頭形二重圏線によって区画された3箇所の窓絵内に松竹梅文が描かれ、区画外の地文は唐草文で埋めている。被熱している。

213～226は二次加工による円盤状製品である。遊具でJB\_4008に分類される。214、221は瓶(JB-10)の頸部片、222、223は碗(JB-1)の口縁部片、226は呉器手碗(TB-1-a)の口縁部片、それ以外は碗(JB-1)の胴部片を再加工したものである。縁辺の調整剥離は、内面からの打撃が主体をなしているが、特に規則性は認められない。213～220、222、223、226はD4グリッドより出土。221、224～225はF12グリッドより出土し、剥離面の摩耗が顕著で、被熱している。

## 陶器 (227～476)

227～253は碗である。227～236は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。胎土は黄白色を呈する。227はやや緑味を帯びた透明釉が施されている。230は全体的に薄造りで、高台内の兜巾状の突起もなく平坦に整形されている。高台厚も薄い。231の胎土はかなり白みが強く、きめ細かい。器面の色調もそれを反映している。全体的に器厚も薄く、高台整形、畳付処理も丁寧に行われている。234の口径は9.4cmと小振りである。236はやや小振りで、器高も低く、腰が張る。227、231、233、234、235、236は被熱している。237～243は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。237は口径13cmを測る大振りの碗形で、胎土は褐色を呈し、緻密かつ硬質である。高台高は外側7mm、内側3mmを測り、高台内のケズリは浅い。体部には楼閣山水文が描かれ、高台内中央には円圏ケズリがその脇には「清水」銘が刻印されている。被熱している。238、240の胎土は灰白色を呈し、239、241～244は灰褐色を呈する。いずれも硬質かつ緻密である。238は体部に楼閣山水文を描き、高台内中央に円圏ケズリをが施され、それに掛かるように「清水」銘が刻印されている。被熱している。239は体部主文様が省略され、高台内中央にはの字状のケズリと「中山八」銘が刻印されている。被熱している。240は口径9.6cmを測り、やや小振りの碗形である。体部には楼閣山水文が描かれ、高台内中央には円圏ケズリが、さらにその周囲にもう一重沈線が巡り、それに掛かる様に「山原住」銘が刻印されている。被熱している。241は体部に楼閣山水文が描かれ、高台内中央には円圏ケズリと「山原住」銘が刻印されている。被熱している。242は高台内中央に円圏ケズリと「雲」銘が刻印されている。被熱している。243は高台内中央に円圏ケズリと「小松吉」銘が刻印されている。被熱している。244は京焼風陶器筒形碗で、TB-1である。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側は面取りされている。高台内中央にはの字状のケズリが施されている。被熱している。245は象嵌碗で、TB-1-kに分類される。胎土は茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。文様は横位の沈線によって体部を3単位に区画し、各々波状櫛歯文、渦巻き文、花卉文が白土象嵌されている。畳付を除き透明釉が施されている。246は青緑釉碗で、TB-1-iに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は逆台形を呈し、体部は緩やかに内湾しながら、斜め上方に開く。底部を除き青緑釉が施されているが、口縁部下はさらに流し掛けによる波状の文様を構成している。247は透明釉丸碗でTB-1に分類される。胎土は淡褐色を呈し、緻密である。高台断面はシャープな逆台形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。畳付を除き透明釉が施されている。被熱している。248は灰釉丸碗で、TB-1に分類される。胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。底部を除き灰釉が施され、体中に青緑釉が流し掛けされている。被熱している。249、250は天目碗で、TC-1-aに分類される。249の胎土は淡褐色を呈する。高台内のケズリは2mmと浅い。底部を除き茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。250の胎土は灰白色を呈する。釉は黒褐色を呈し、高台際まで掛けられている。251、252は鉄釉丸碗で、TC-1-oに分類される。251の胎土は黄白色を呈する。底部を除き暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。見込みは茶褐色の斑状を呈し、口縁部には褐釉が流し掛けされている。252の胎土は灰白色を呈する。底部を除き黒褐色を呈する鉄釉が施され、口縁部にうのふ釉が流し掛けされている。被熱している。253は銹絵平碗で、TD-1-hに分類される。胎土は灰白色を呈し精緻である。高台断面はシャープな逆台形を呈し、畳付外側は面取りされている。高台内中央には円圏ケズリが施されている。器厚も薄く全体的に丁寧に作られている。見込みには目痕が認められる。文様は内側面に鉄絵によって流水文が描かれている。被熱している。

254～346は皿・平鉢である。254～261は青緑釉見込み輪剥皿で、TB-2-aに分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈する。見込みに青緑釉、外側面に灰釉が掛けられている。いずれも



被熱している。254 は暈付に砂目痕が4箇所認められる。255 は高台断面が長方形を呈し、蛇ノ目高台状を呈している。見込み輪剥部及び暈付に砂目痕が4箇所認められる。256 は見込み輪剥部に直重ねによる環状熔着痕が認められる。258 は見込み輪剥部及び暈付に砂目痕が4箇所認められる。259 の胎土には黒色微粒子が含まれる。262、263 は呉器手碗調の皿で、TB-2-i に分類される。胎土は黄白色を呈し、釉調、貫入の状態などが呉器手碗 (TB-1-a) と共通する。高台断面はU字形を呈し、高台高は16mm と高い。体部は高台脇から緩やかに開き、体中位で内湾する。釉は器面全面に掛けられ、高台内側際から蛇ノ目状に釉剥ぎされている。被熱している。264 は灰釉丸皿で、TC-2-a に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。見込みには目痕が認められる。底部を除きやや緑色を帯びた灰釉が流し掛けされている。底部にはススが付着している。265 は灰釉端反皿で、TC-2-y に分類される。胎土は黄白色を呈する。高台断面は三角形を呈し、高台脇にケズリによって一段稜を有する。体部はほぼ直線状に開き、口縁部でやや外反する。高台内、見込みに円錐ピン痕が3箇所認められる。やや白濁した灰釉が、高台際から見込みに掛けて施されている。口唇部に灯心痕が認められる。266、267 は直重ねによって焼成された灰釉皿で、TC-2-b に分類される。266 の胎土は灰褐色を呈する。高台断面は三角形を呈し、体部は直線状に開く。外体部中位から見込みにかけて、やや緑色を帯びた灰釉が掛けられている。見込みには高台径とほぼ同径の環状熔着痕が認められる。口唇部に灯心痕が認められる。267 は高台脇にケズリによる稜を有し、口縁部がやや外反する。胎土は灰白色を呈する。底部を除きやや緑色を帯びた灰釉が掛けられている。見込みには直径6cmの環状熔着痕が認められる。被熱している。268 は長石釉丸皿で、TC-2-c に分類される。胎土は黄白色を呈する。高台断面は三角形を呈し、高台高は4mm と低い。高台脇にはケズリによる稜を有し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込みにはピン痕が3箇所認められる。釉は暈付を除き施釉され、全体的に縮緬状になっている。口唇部には灯心痕が認められる。被熱している。269 は長石釉端反皿で、TC-2-y に分類される。胎土は黄白色を呈し、黒色微粒子を少量含む。高台断面は三角形を呈し、高台脇にケズリによる稜を有す。体部は直線的に開き、口縁部で外反する。高台脇から見込みにかけて、長石釉が掛けられている。見込みおよび高台内に円錐ピン痕が3箇所認められる。270 は御深井輪花皿で、TC-2-e に分類される。胎土は淡褐色を呈する。高台断面は上方が開くU字状を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は12単位の輪花を形成する。見込み周囲には一段が設けられている。底部には目痕が3箇所認められる。底部を除き、やや白濁した灰釉が掛けられている。見込みには鉄絵を用いた摺絵で花文が描かれている。被熱している。271～274 は外面にしのぎが施された菊皿で、TC-2-k に分類される。271 の胎土は黄灰白色を呈する。見込みには沈線による圏線が巡り、その周囲に口縁部輪花と対応した二重沈線を単位とする菊花文が型打ちされている。外面のしのぎは輪花とは対応していないが、幅広く削られ、波状の器面を作出している。見込みには3箇所の目痕が認められる。底部を除き黄釉が施され、口縁部には緑釉が流し掛けされている。被熱している。272 の胎土は灰白色を呈する。高台断面は三角形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込みには二重沈線による圏線が巡り、その周囲を口縁部輪花と対応した幅広沈線によって菊花状に型打ちしている。外面には放射状の沈線が施されているが、輪花とは対応していない。底部を除き黄釉が施され、見込み周囲に緑釉が流し掛けされている。被熱している。273 の胎土は灰白色を呈する。高台断面は上方に開くU字形を呈する。菊花を表出する見込み周囲の沈線は花卉1単位2本を基本としているが、必ずしも輪花とは対応していない。外面には放射状の沈線が施されているが、輪花とは対応していない。見込みには3箇所の目痕が認められる。底部を除き黄釉が施されているが、焼成不良のため白濁している。被熱している。274 の胎土は灰白色を呈する。高台断面はやや外傾する逆

台形を呈する。見込みには二重隆線による圈線が巡り、その周囲には口縁部輪花とほぼ対応した菊花文が型打ちされている。外面には放射状の沈線が施されているが、輪花とは対応していない。見込みには3箇所が目痕が認められる。底部を除き、やや緑色を帯びた灰釉が施されている。被熱している。275は外面にしのごを持たない菊皿で、TC-2-1に分類される。胎土は黄灰白色を呈する。高台はU字形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込みには一重沈線による圈線が巡り、口縁部は如意頭状の輪花を形成する。見込みには3箇所が目痕が認められる。外体部中位から見込みにかけて黄釉が施されている。被熱している。276、277は灰釉輪禿皿で、TC-2-mに分類される。胎土は黄灰白色を呈する。276は高台断面が三角形を呈し、内側のケズリは浅い。体部は緩やかに開き、口縁部で外反する。見込み蛇ノ目無釉部内は一段削られ凹帯を形成する。釉調はやや緑色を帯びており、蛇ノ目無釉部内側縁辺は凹帯稜線に合わせて拭き取られているが、外側は流し掛けによって無釉部を作出している。底部無釉。内外面無釉部にはススが付着している。277の体部はやや深めで、口縁部は緩やかに外反する。見込みは円形状に一段削られ、凹帯を形成する。釉はやや緑色を帯びた灰釉で、見込み凹帯部を中心に不整形円形状に施釉され、また外側面中位から内側面にかけて施釉され、蛇ノ目状無釉部を作出している。被熱している。278、279は輪高台の形皿で、TC-2-iに分類される。278の胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。体部は平面楕円形を呈し、口縁部は輪花を形成する。底部を除き、緑色を帯びた灰釉が施されている。被熱している。279の胎土は灰褐色を呈する。体部は平面長方形を呈し、見込み全面に斜方向の沈線が施されている。被熱している。280は三足を有する形皿で、TC-2-xに分類される。胎土は灰白色を呈する。体部は平面楕円形を呈し、口縁部は輪花を形成する。底部には円錐形の脚が3箇所貼り付けられている。見込みには集合沈線が施されている。器面全面に緑色を帯びた灰釉が施されている。被熱している。281は長石釉鉄絵皿で、TC-2-jに分類される。胎土は淡褐色を呈する。高台断面は三角形を呈し、低い。見込み及び高台内に円錐ピン痕が認められる。器面全面に長石釉が施されている。見込み周囲を鉄絵による二重圈線で区画し、見込みには文字文が描かれている。282は鉄釉皿で、TC-2に分類される。胎土は灰白色を呈する。底部を除き黒褐色を呈する鉄釉が施されている。被熱している。283は鉄釉把手付油皿で、TC-2-pに分類される。胎土は灰褐色を呈する。底部は碁笥底状を呈し、体部はほぼ直線的に開く。底部を除き、黒褐色を呈する鉄釉が施されている。被熱している。284は灰釉鏝皿で、TC-2に分類される。胎土は黄白色を呈する。高台断面は長方形を呈し、高台内のケズリは浅い。口縁部は鏝状に外曲し、5単位の輪花を形成する。鏝部には数条の沈線が巡っている。体中位から見込みにかけて灰釉が施され、口縁部から内側面にかけて緑釉流し掛けが3箇所認められる。被熱している。285は備前産の焼き締め皿で、TE-2に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。全体的に平滑に整形されているが、外体部下半にはケズリ痕が認められる。口唇部に釘状の貼り付けが認められるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。見込みから外体部上半にかけて鉄鏝が施されている。口唇部には灯心痕が認められる。286は志戸呂産の焼き締め皿で、TF-2に分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を少量含む。底部には右回転の糸切り痕が認められる。見込みから外体部上半にかけて鉄鏝が施されている。口唇部には灯心痕が認められる。被熱している。

287は京焼風陶器の皿・平鉢で、TB-2-cに分類される。高台断面は長方形を呈し、高台内のケズリはやや浅い。体部はやや腰が張り、口縁部は外反する。見込みには花盆が、裏文様には山水文が描かれている。高台内中央には円圏ケズリがその脇には「清水」銘が刻印されている。同一意匠の製品が、他に3個体出土している。被熱している。288～305は刷毛目大平鉢でTB-3-aに分類される。288の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は方形を呈し、高台内のケズリが深い。

体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁で外曲し鏢状を呈する。見込みから外体部中位にかけて白化粧を施し、鏢縁部は波状文様を形成している。見込み周囲には鉄釉と緑釉を用い文様が描かれている。被熱している。289の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には胎土目の剥離痕が認められる。口縁部は鏢縁状を呈し、口唇部でやや内曲する。見込みから外体部中位にかけて白化粧が施され、見込みには鉄絵文様が描かれている。被熱している。290の胎土は褐色を呈し、白色微粒子および砂粒を含む。畳付には胎土目痕とその剥離痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。口縁部は鏢縁状を呈するが、口唇部は内曲し三角形を呈する。白化粧土は基本的に見込みにのみ掛けられ、鏢縁と見込み周囲で波状文様を形成している。見込み周囲には鉄釉と緑釉が流し掛けされている。被熱している。291の胎土は灰褐色を呈し、白色および黒色微粒子を含む。畳付には胎土目の剥離痕が認められる。口縁部は鏢縁状を呈し、口唇部は内曲し玉縁状を呈する。見込みには白化粧を施し、緑釉を流し掛けした後、鉄釉で文様を描いている。292の胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。口縁部の鏢縁は短く、1条の沈線が巡る。畳付には7箇所の胎土目剥離痕が、見込みには同じく7箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込み全面には白化粧土による波状の刷毛目文が施され、鉄釉と緑釉が流し掛けされている。被熱している。293の胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には6箇所の胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには5箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。口縁部の鏢縁は短く斜め方向に伸び、1条の沈線が巡る。見込み全面に白化粧土による波状の刷毛目文を施した後、見込み周囲に数条の刷毛目文を施している。鉄釉が流し掛けされている。被熱している。294の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には6箇所の胎土目剥離痕が、見込みには5箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。口縁部の鏢縁は短く、先端が鉤状に内曲し断面三角形を呈する。見込みには白化粧土によって同心円状、波状の刷毛目文を交互に施した後、鉄釉を流し掛けしている。被熱している。295の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には胎土目剥離痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。口縁部はクランク状を呈する。見込みには白化粧土によって同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉を流し掛けしている。被熱している。296の胎土は黒褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には6箇所の胎土目痕が、見込みには同じく6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。体部上半はやや外反し、口縁部はクランク状を呈する。見込みには白化粧土によって、同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉、緑釉が流し掛けされている。被熱している。297の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。高台外側は面取りされている。口縁部はクランク状に屈曲し、短い鏢縁を呈する。白化粧土によって見込みに波状、見込み周囲に同心円状、内側面に波状の刷毛目文を施し、鉄釉、緑釉を流し掛けしている。被熱している。298の胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には胎土目剥離痕が、見込みには5箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。畳付外側は大きく面取りされている。口縁部はクランク状に屈曲する。見込みには白化粧土によって波状、同心円状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉、緑釉が流し掛けされている。被熱している。299の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付には胎土目痕が、見込みには6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。畳付外側は大きく面取りされている。口縁部はクランク状に屈曲している。見込みには中心から渦巻き、波状、同心円状、波状、同心円状の順で白化粧土による刷毛目文が施されている。内側面



に鉄釉、緑釉が流し掛けされているが、かなり薄い。被熱している。300の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。壘付外側は深く面取りされ、一段が付く。口縁部はクランク状に屈曲する。壘付には7箇所の胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには同じく7箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには同心円状の内側面に放射状の刷毛目文を施した後、見込みに四つ葉状の刷毛目文を施し、内側面に鉄釉と緑釉を流し掛けしている。被熱している。301の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。口縁部は鐔縁を呈し、屈曲部に沈線が巡る。壘付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって、同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉、緑釉が流し掛けされている。被熱している。302の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。壘付外側は深く面取りされ、一段が付く。口縁部は鐔縁を呈し、屈曲部に沈線が巡る。壘付には胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって、同心円状、波状の刷毛目文が施されている。被熱している。303の胎土は暗褐色を呈し、白色微粒子を含む。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、上半で外曲する。壘付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって同心円状の刷毛目文を施した上に、花卉状の刷毛目文様を重ねている。内側面には格子目状の刷毛目文を施している。被熱している。304の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。壘付外側は深く削られ、一段が付く。口縁部はクランク状を呈する。壘付には胎土目痕およびその剥離痕が認められる。見込みには白化粧土によって波状、同心円状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉が流し掛けされている。被熱している。305の胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。口縁部は外曲し、内側に沈線が巡る。見込みが削り込まれ、周囲に一段が付く。壘付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。内側面には白化粧土によって波状の刷毛目文が施され、鉄釉、緑釉が流し掛けされている。被熱している。306～309は刷毛目平鉢で、TB-2-gに分類される。306の胎土は暗灰～茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は長方形を呈し、体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。壘付には胎土目痕、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって、同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉、緑釉が流し掛けされている。被熱している。307の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し壘付外側は面取りされている。高台内は深く削られている。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。壘付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉が流し掛けされている。被熱している。308の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部はクランク状に外曲する。壘付には7箇所の胎土目痕および剥離痕が、見込みには同じく7箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みには白化粧土によって同心円状、波状の刷毛目文が交互に施され、鉄釉が流し掛けされている。被熱している。309の胎土は茶～暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、高台内は深く削られている。体部は緩やかに丸味を帯びて浅く開き、口縁部は外曲し、鐔縁状を呈す。壘付、見込み共に5箇所の胎土目痕が認められる。壘付を除き鉄奨が施され、見込み周辺から口縁部にかけて同心円状に掻き取られている。口縁部には青緑釉が施されている。被熱している。310は刷毛目鉢で、TB-5-aに分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。見込みから外体部上半にかけて白化粧

土が施され、見込みは渦巻き文、内側面は波状の刷毛目文を施し、鉄釉、青緑釉を流し掛けしている。また外体部下半から底部に掛けて鉄獎が施されている。被熱している。311～317は象嵌大平鉢で、TB-3-bに分類される。311の胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は外曲し、鐳縁を形成する。畳付には胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に、印花文、波状集合沈線、蓮弁文による連続文が陰刻され、白泥を充填している。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。312の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は方形を呈し、体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は外曲し、鐳縁を形成する。畳付には胎土目痕が、見込みには7箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に、印花文、蓮弁文による連続文が陰刻され、白泥を充填している。口縁部には波状二重沈線が巡る。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。313の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、口縁部は外曲し上面に浅広の沈線を有す鐳縁を形成する。見込みには砂目痕が認められる。見込みは二重沈線による带状区画内に、蓮弁文、印花文、波状集合沈線による連続文が陰刻され、白泥を充填している。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。314の胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側は深く削られ、一段を有す。高台内のケズリも深い。口縁部は斜方向に外曲して鐳縁を呈し、口唇部内側に沈線が巡る。畳付には胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには8箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に、波状及び直沈線の組み合わせによる帯文、印花文、蓮弁文が陰刻され、白泥を充填している。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。315の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付外側は深く削られ、一段を有す。口縁部は斜方向に外曲して鐳縁を呈し、口唇部内側に沈線が巡る。畳付には6箇所の胎土目剥離痕が、見込みには同数の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に、波状沈線と直沈線を交互に配した帯文、印花文が、鐳縁には蓮弁文による連続文が陰刻され、白泥を充填している。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。316の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付外側は深く削られ一段を有す。口縁部は斜方向に外曲して鐳縁を形成し、口唇部内側に沈線が巡る。畳付には胎土目痕およびその剥離痕が、見込みには6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に印花文が、鐳縁には蓮弁文が陰刻され、白泥が薄く掛けられている。外体部下半に鉄獎をかけた上に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が掛けられている。被熱している。317の胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付外側は深く面取りされ、一段を有す。口縁部は斜方向へ外曲して鐳縁を呈し、口唇部内側に沈線が巡る。畳付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に波状沈線と直沈線の組み合わせによる帯文、印花文が、鐳縁上面には蓮弁文が陰刻され、白泥を充填している。畳付を除き底部から外体部下半にかけて鉄獎を施した後に、見込みから外体部上半にかけて透明釉が施されている。被熱している。318、319は象嵌平鉢で、TB-2-bに分類される。318の胎土は黒褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、体部は腰が張り、口縁部は水平方向に外曲して鐳

縁を呈す。畳付には胎土目剥離痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に印花文が陰刻され、白泥を充填している。底部から外体部下半にかけて、鉄奨が薄く掛けられ、見込みから外体部上半に透明釉が掛けられている。319の胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、高台内のケズリは深い。口縁は斜方向へ外曲し、口唇部はさらに外曲する。畳付、見込みともに胎土目痕が認められる。見込みは二重沈線による带状区画内に、印花文が陰刻されている。白泥は充填されていない。畳付を除く底部から外体部下半にかけて鉄奨を薄く掛け、見込みから外体部上半にかけて透明釉を掛けられている。被熱している。320、321は象嵌鉢で、TB-5-bに分類される。320の胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。畳付は逆台形を呈し、畳付外側が丁寧に面取りされている。畳付には胎土目痕が、見込みには砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは二重沈線による带状区画内に印花文と蓮弁文が陰刻され、白泥を充填している。畳付を除く底部から外体部下半にかけて鉄奨を薄く掛け、見込みから外体部上半にかけて透明釉を掛けられている。被熱している。321の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側には部分的に面取りが認められる。口縁部は水平に外曲して鏝縁を呈し、口唇部は縁帯を形成する。畳付には胎土目痕が、見込みには6箇所の砂目痕が認められ、砂胎土目積みによる窯詰めであったことが確認される。見込みは三重沈線による带状区画内に、波状沈線と直沈線の組み合わせによる帯文、印花文、蓮弁文が陰刻され、鏝縁上面には波状三重沈線を巡らし、白泥を充填している。外体部下半には鉄奨が掛けられ、見込みから外体部上半には透明釉が掛けられている。被熱している。322は京焼風陶器大平鉢で、TB-3-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台は逆台形を呈し、畳付外側は面取りされている。見込みには文様が描かれているが、被熱のため不明。高台内中央には円圏ケズリが施され、その脇に二段角枠内に「建」銘が刻印されている。324、325は京焼風陶器平鉢で、TB-2-cに分類される。324の胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面はやや外傾する長方形を呈し、畳付外端は丸くなでられている。高台高は17mmと高い。体部は捻子花状に型打ちされている。見込みには楼閣山水文が描かれ、高台内中央には円圏ケズリが施され、その中に一重角枠内に篆書による銘が刻印されている。被熱している。325の胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は長方形を呈し、畳付外端は丸くなでられている。見込みには楼閣山水文が描かれ、高台内中央には円圏ケズリが施され、その中に一重角枠内に篆書による銘が刻印されている。被熱している。323は京焼風陶器鉢で、TB-5-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。外面に文様が描かれているが、被熱のため詳細は不明。高台内中央に円圏ケズリが施され、「山原住」銘が刻印されている。

326～329は黄灰褐色を呈する胎質、釉調、貫入の状態が呉器手碗（TB-1-a）と共通する一群である。そのうち326～328は鉢で、TB-5-eに分類される。326は体中位に一段を有し、口縁部は5単位の輪花を形成する。畳付を除く器面全面に透明釉が施されている。被熱している。327は型押し成形により体部に輪花状の凹凸が設けられている。畳付を除く器面全面に透明釉が施されている。被熱している。328は腰が張る器形を呈し、畳付を除く器面全面に透明釉が施されている。口唇部にも露胎部分が認められるが、著しい被熱により意図的に釉剥ぎされたかは不明である。畳付が摩耗している。329は平鉢で、TB-2-iに分類される。高台内が蛇ノ目釉剥ぎされている。釉剥ぎ部にはチャツ痕が認められる。被熱している。330～332は青緑釉見込み輪剥平鉢で、TB-2-aに分類される。胎土は黄白色を呈し、黒色微粒子を含む。見込みに青緑釉、外体部に透明釉が掛け分けされている。330は畳付が摩耗している。被熱している。331は口縁部が外湾する。見込み輪剥部および畳



付に砂目痕が認められる。被熱している。**332**は畳付に砂目痕が認められる。被熱している。**333**は丸碗形の鉢で、TB-5-dに分類される。胎土は灰白色を呈し、底部を除き青緑釉が施されている。被熱している。**334**はいわゆる卵手と称される砂目皿で、TB-2-dに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。器面全体に灰釉が施され、見込みおよび畳付に砂目痕が認められる。被熱している。**335**は胎土目皿で、TB-2-eに分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。見込みおよび畳付に5箇所胎土目痕が認められる。見込み周囲に一段を有し、口縁部は外曲し鏝縁を呈す。被熱によって釉調は変色しているが、畳付を除く器面全面に灰釉を施し、緑釉を流し掛けしているものと考えられる。**336**、**337**は鉄絵大平鉢で、TC-3-aに分類される。**336**の胎土は灰褐色を呈し、硬質である。高台断面は逆台形を呈し、高台高は低い。口縁部は外曲し鏝縁を呈す。見込みに目痕が認められる。見込みには鉄絵によって植物文が描かれ、緑釉を流し掛けしている。被熱している。**337**の胎土は黄白色を呈し、硬質である。見込みおよび高台内に目痕が認められる。見込みには鉄絵によって植物文が描かれている。被熱している。**338**、**339**は灰釉鉄絵皿で、TC-2-vに分類される。胎土は黄灰白色を呈す。器面全面に灰釉を掛け、高台周辺を拭き取っている。見込みには鉄絵文様が描かれている。被熱している。**340**は灰釉緑釉流し掛け鉢で、TC-3-bに分類される。高台内に目痕が認められる。見込みには環状櫛目文内に印花文を施し、内側面には直線と波状の櫛目文が施されている。器面全面に灰釉を施し高台周辺を拭き取り、見込みには団子を置くための円形釉剥ぎが残存部で2箇所認められる。内側面に緑釉を流し掛けしている。被熱している。**341**は灰釉鉄絵皿で、TC-2-vに分類される。胎土は黄白色を呈し、気孔が認められる。口縁部は外曲し鏝縁を呈す。見込みには目痕が認められる。底部を除き灰釉が施され、見込みには鉄絵文様が描かれている。被熱している。**342**は灰釉緑彩皿で、TC-2に分類される。胎土は灰白色を呈し、気孔が認められる。高台は付高台で断面三角形を呈す。見込みには直径約2cmの目痕が3箇所認められる。見込みから外体部下半にかけて灰釉が施され、見込み周囲を中心に緑釉が流し掛けされている。被熱している。**343**は灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。胎土は灰白色を呈し、気孔が認められる。底部を除き灰釉が施され、見込みには白泥の型紙摺りによる菊花文と鏤絵が描かれている。被熱している。**344**は鉄釉輪髻皿で、TC-2-uに分類される。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で輪花を形成する。畳付と見込み蛇ノ目釉剥ぎ部を除き、柿釉が施されている。**345**は藁灰釉平鉢で、TZ-2に分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を多量に含む。畳付には糸切り痕が残る。また畳付から高台内側にかけて胎土目痕が4箇所認められる。口縁部は輪花を形成し、見込み周囲には一段を有す。底部を除き藁灰釉が施されている。釉調及び高台内および体下半部のケズリが左回転であることから、上野、高取などの可能性が高い。被熱している。**346**は象嵌小鉢でTB-5-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、黒色微粒子を含む。微小気孔が認められるが、硬質かつ緻密である。体部には文字文が象嵌されている。被熱している。

**347**、**348**は小坏である。**347**は鉄釉小坏で、TC-6に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質だがやや粗い。口唇部はやや玉縁状に丸味を帯びる。被熱している。**348**は灰釉端反小坏で、TC-6に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。底部を除き灰釉が掛けられている。被熱している。

**349**、**350**は仏飯器で、TB-8に分類される。胎土は暗褐色を呈し、白色微砂粒を含み、硬質である。底部は浅く抉られ、底部外周は面取りされている。内外体部に藁灰釉が掛けられている。被熱している。

**351**は京焼風陶器の蓋物で、TB-13-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。外体部と口唇部を除く口縁部内側に透明釉が掛けられている。高台内には残存部に「清」印が認めら

れ、「清水」印と考えられる。被熱している。

352～375は香炉である。352、353、355は京焼風陶器の香炉で、TB-9-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台内側はやや外傾し、高台内のケズリはやや浅い。体部はやや外傾して立ち上がり、口縁部は逆L字状に内曲する。外体部から口縁部内側にかけて透明釉が掛けられている。体部には楼閣山水文が描かれている。352の高台内には中央に円圈ケズリがその脇に「雲」印が認められ、353は中央の円圈ケズリと重なって「清水」印が押されている。被熱している。355の高台は蛇ノ目高台を呈し、暈付外端部が面取りされている。体部は波状に成形されている。口縁部は内側に折り返され、玉縁状を呈す。体部から口縁部内側にかけて透明釉が掛けられている。口縁部下に鉄絵文様が描かれているが、欠損のため意匠は不明である。354は鉄釉香炉で、TB-9に分類される。胎土は黒褐色を呈し、硬質かつ緻密である。型押し成形によって円形の底部から胴部、口縁部と平面六角形に成形されている。口縁部には雷文、胴部には七宝文などが陰刻され、獣面が貼り付けられている。内面には指頭圧痕が認められ、凹凸が著しい。外面にのみ鉄釉が掛けられている。同様の製品は、伊万里市金石原窯辻窯跡で出土している。被熱している。356～361は瀬戸・美濃産灰釉香炉で、TC-9-aに分類される。356の胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部際に団子状の脚が貼り付けられている。口縁部は外曲し、T字状を呈す。灰釉はやや緑味を帯び、外体部に掛けられている。被熱している。357の胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部際には団子状の脚が3箇所貼り付けられている。体部下端は膨らみを有し、口縁部は外側に折り曲げられ、玉縁状を呈す。灰釉はやや緑味を帯び、外体部から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は釉剥ぎされている。被熱している。358の胎土は黄白色を呈する。底部は碁笥底状を呈し、底部脇に団子状の脚が貼り付けられている。口縁は外曲し、三角形を呈する。体部外面と口縁部内側に灰釉が掛けられている。口唇部に若干の敲打痕が認められる。被熱している。359の胎土は、灰白色を呈し、白色微粒子を少量含む。底部脇には団子状の脚が3箇所貼り付けられている。口縁部はやや外曲する。灰釉は外体部と口縁部内側に掛けられている。被熱している。360の胎土は淡黄白色を呈し、気泡を含む。断面三角形の高台を有し、高台外側は沈線状に抉られている。体部下端が張り出し、袴腰状を呈し、口縁部は縁帯を有す。釉はやや白濁し、外体部から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は無釉である。また体上半には鉄釉が流し掛けされている。口唇部には著しい敲打痕が認められる。被熱している。361の胎土は灰白色を呈し、気泡を含む。底部はベタ底を呈し、口縁部はやや外反する。釉は外体部から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は釉剥ぎされている。被熱している。362、364、367～370、374、375は、瀬戸・美濃産鉄釉袴腰香炉で、TC-9-fに分類される。362の胎土は黄白色を呈する。底部際にはT字形の脚が3箇所貼り付けられている。体部下端は膨らみ袴腰状を呈する。口縁部は内側へ肥厚し、玉縁状を呈する。体部には糸目が施されている。内底部には3箇所の目痕が認められる。鉄釉は褐色を呈し、底部を除き施されている。口唇部両端には著しい敲打痕が認められる。被熱している。364の胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。底部は丸底状に成形され、円錐形の脚が3箇所貼り付けられている。体下半部は袴腰状の膨らみを持ち、口縁部は内曲し、断面三角形を呈する。鉄釉は黒褐色を呈し、体部外面から口縁部内側にかけて掛けられている。被熱している。367の胎土は灰白色を呈し、気泡を含む。底部は丸底状に成形され、粘土紐を摘み上げた脚が3箇所貼り付けられている。体下半部は袴腰状の膨らみを持ち、口縁部内側がやや肥厚する。体部には糸目が施されている。内底部には3箇所の目痕が認められる。鉄釉は黒褐色を呈し、底部を除き掛けられている。被熱している。368の胎土は灰褐色を呈し白色微粒子を含む。硬質である。高台際に粘土塊を台形状に成形した脚が3箇所貼り付けられている。底部脇には一段の稜を有し、体下半部はやや袴

腰状に膨らみ、体部には糸目が施されている。底部を除き、暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。369の胎土は黄白色を呈し、黒色微粒子を含む。底部際には粘土塊の摘み出しによる脚が貼り付けられている。体下半部はやや袴腰状に膨らみ、体部には糸目が施されている。口縁部はやや外反する。黒色を呈する鉄釉が底部を除き掛けられ、口唇部は二次的に釉剥ぎされ、一部に敲打痕も観察される。内底部には目痕が認められる。被熱している。370の胎土は灰褐色を呈し、黒色微粒子を含む。硬質かつ緻密である。底部際には円錐状の脚が3箇所貼り付けられている。体下半部は袴腰状に膨らみ、その上端に一段の稜を有す。体部には条線が巡り、口縁部はやや外反する。黒褐色を呈する釉が外体部から内体部中位にまで掛けられている。口唇部には敲打痕が認められる。被熱している。374の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台は断面逆台形を呈する輪高台で、高台際外側は深く削られている。体部下端は袴腰状の凸帯を呈し、口縁部は玉縁を呈する。外体部から口縁部内側にかけて、黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。口唇部内側は敲打により釉が剥離している。底部には墨書が認められるが、詳細は不明である。被熱している。375の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。高台は断面三角形を呈する輪高台で、口縁部は外曲する。底部を除き暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。内底部には直径31mmを測る環状熔着痕が認められる。被熱している。363、365、366、371、372は瀬戸・美濃産鉄釉香炉で、TC-9-bに分類される。363の胎土は、黄白色を呈し、硬質である。底部際には粘土紐の摘み出しによる脚が貼り付けられている。口縁部は外曲し、逆L字状を呈する。体部には蓮弁状のしのぎが巡っている。内底部には目痕が認められる。鉄釉は茶褐色を呈し、底部を除き施されている。被熱している。365の胎土は灰白色を呈し、硬質である。底部脇には粘土塊を摘み出した団子状の脚が3箇所貼り付けられている。鉄釉は暗茶褐色を呈し体部外面に掛けられ、その上にうのふ釉が流し掛けされている。口唇部はやや摩耗している。被熱している。366の胎土は灰褐色を呈し、硬質である。高台は断面逆台形を呈す輪高台で、高台高は約4mmと低い。体部には蛇腹状のロクロ目が施されている。内底部には直径約6cmを測る重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。釉は暗茶褐色を呈し、体部外面に掛けられている。被熱している。371の胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。高台は断面逆台形を呈する輪高台で、体部には条線が巡る。口唇部は内曲し、逆L字状を呈する。底部を除き、暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。372の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。硬質である。底部際には粘土紐を摘み出した脚が3箇所貼り付けられている。高台脇には一段稜を有し、体部には条線が巡る。黒褐色を呈する鉄釉が外体部から口縁部内側まで掛けられている。被熱している。373は鉄釉しのぎ香炉で、TC-9-dに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。底部際には粘土塊による逆台形状の脚が3箇所貼り付けられている。体部には半菊状のしのぎが3箇所施されている。口縁部はやや肥厚し、玉縁状を呈す。底部を除き、茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。

376～401は瓶である。376～378は瀬戸・美濃産灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台は蛇ノ目状を呈し、口縁部は大きく外反し、376、377の口唇部はやや下方へ湾曲する。378の体部には鉄釉が流し掛けされている。釉は器面全面に掛けられ、畳付から体下半にかけて拭き取られている。被熱している。379は瀬戸・美濃産鉄釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。胎土は黄白色を呈し、気泡を含む。最大径が体下半にある雨滴形を呈し、口縁部は大きく外反し、口唇部は下方へ湾曲する。肩部には約10条の条線が施されている。器面全面に茶褐色を呈する鉄釉が掛けられ、底部は拭き取られている。また口縁部下から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けされている。被熱している。380～386は瀬戸・美濃産舟徳利で、TC-10-f



に分類される。380～383の胎土は灰白色を呈し白色微粒子を含む。硬質である。底部脇は面取りされている。最大径は380が胴下端部にあるが、それ以外はほぼ寸胴である。口唇部は断面三角形を呈す。380～382は器面全体に暗茶褐色を呈す鉄釉が掛けられ、底部は拭き取られている。また頸部から肩部にかけて黒褐色を呈す鉄釉が流し掛けされている。383は外体部から口縁部内側にかけて黒褐色を呈す鉄釉が、内面には茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けされている。382の底部面取り部分には環状熔着痕が認められる。被熱している。384～386は柿釉が施された製品である。384の胎土は黄灰白色を、385、386は灰白色を呈する。底部脇は面取りされ、最大径は体下端部にある。口縁部はくの字状に折り返されている。384の釉には黒色のゴマ斑が入り、頸部から肩部にかけてはうのふ釉が流し掛けされている。385、386は黒色を呈する鉄釉が流し掛けされている。被熱している。387は鉄釉徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。硬質である。高台は逆台形を呈し、やや外傾する。最大径は体下半部にあり、肩部にむけて内傾し、肩部で大きく内湾する。胴部には3箇所凹みが設けられている。口縁部は朝顔状に外傾する。体下半部から口縁部内側にかけて、黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。388は鉄釉徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。肩部には条線が施されている。口縁部はクランク状を呈す。底部脇から口縁部にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられ、頸部にはうのふ釉が流し掛けされている。また底部は無釉であるが、畳付にも鉄釉が掛けられている。内面には灰釉が掛けられている。被熱している。389は灰釉徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。高台断面は台形状を呈し、高台際はシャープに削られている。黄緑灰色を呈する灰釉が外体部に掛けられ、下半部は拭き取られている。被熱している。390は鉄釉徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰白色を呈し、黒色及び白色微粒子を含む。体部は緩やかに外傾しながら立ち上がり、肩部で内曲する。外体部に黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。391は鉄釉徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰白色を呈し、白色微粒子を含む。高台はやや外傾し、体部は雨滴形を呈して頸部へ移行し、口縁部は外湾する。外面全面に黒褐色を呈する鉄釉が掛けられ、高台から底部にかけて拭き取られている。被熱している。392～395はいわゆる備前産の献上手徳利で、TE-10-aに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。392は体部上半に細かい糸目が施され、頸部には1条の沈線が巡る。底部には○印の刻印が2箇所認められる。被熱している。393は体部全体に条線が認められるが、特に肩部で強い。また肩部には1条の沈線が巡っている。口縁部は玉縁を形成する。底部には「○に井」印の刻印が3箇所認められる。被熱している。394は体部屈曲部上に1条の沈線が巡り、肩部は強く張り出し、内曲する。頸部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部は玉縁を形成する。底部にはヘラ書きによる刻印が認められる。被熱している。395は底部際に1段の稜を有し、体下部から中位にかけて六角形に成形され、2条の沈線によって区画されている。体上位は再び円形に戻り、器面には糸目状の条線が密に入っている。肩部は一段の稜を持って内曲し、頸部に移行する。底部には残存部でL字状の刻印が認められる。体部には火襷が認められる。被熱している。396、397は備前産の雨滴形徳利で、TE-10-bに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部脇は面取りされ、口縁部は玉縁を形成する。396の器面は自然釉、火襷が認められる。397は鉄泥が施されている。ともに被熱している。398は瀬戸・美濃産の徳利で、TC-10に分類される。胎土は灰白色を呈し、白色微粒子を含む。底部はベタ底で、体部はやや肩の張る雨滴形を呈し、口縁部は玉縁を形成する。外面には鉄泥が掛けられ、底部は拭き取られている。さらに口縁部から肩部にかけて、黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。器形、施釉方法から志戸呂産の徳利（TF-10）を模倣したものと考えられる。被

熱している。399～401は志戸呂産徳利で、TF-10に分類される。底部脇の面取りはなく、体下半部に最大径を有す雨滴形を呈し、口縁部はラッパ状に外反し、口唇部は玉縁を形成する。体部には鉄泥が、口縁部内側から頸部にかけて鉄釉が掛けられている。399の胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。400の胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。401の胎土は暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。被熱している。

402～426は壺・甕である。402～407は肥前産の製品である。402はロクロ成形による象嵌幾何学文壺で、TB-15-aに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を少量含む。硬質かつ緻密である。高台断面は長方形を呈し、畳付には回転糸切り痕が残る。最大径は体部下半にあり、口縁部はS字状を呈して外反する。頸部下に環状パーツの貼り付け痕跡が1対認められる。体部全面に線彫りおよび印による象嵌文様が描かれ、高台脇と口縁部には刷毛目文様が施されている。釉は内底部、外底部、口唇部を除き掛けられている。被熱している。403はタタキ成形による鉄釉二耳壺で、TB-15-bに分類される。胎土は褐色～灰褐色を呈し、白色微粒子を少量含む。硬質である。輪積み成形によって作られ、外体部下半には横方向の、内面には同心円状のあて具痕が認められる。肩部にはアーチ状の把手が貼り付けられ、口縁部は玉縁を呈する。外体部上半から口縁部内側にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。404はロクロ成形による鉄釉壺で、TB-15-aに分類される。胎土は暗褐色～暗灰褐色を呈し、白色微粒子を含む。硬質である。鉄釉は暗茶褐色を呈し、外体部上半から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は釉剥ぎされている。畳付に砂目痕、口唇部に熔着痕が認められる。被熱している。405はロクロ成形による緑釉壺で、TB-15-aに分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含む。硬質である。底部は基筈底状を呈し、直接体部へと移行する。口縁部は直立し、口唇部は玉縁を形成する。外体部上半から口縁部内側にかけては、白泥を施した上に、緑釉を掛けている。体下半及び内面には鉄泥が掛けられている。畳付に砂目痕、口唇部に熔着痕が認められる。被熱している。406はロクロ成形による鉄釉壺で、TB-15-aに分類される。胎土は灰白色で、白色微粒子を多量に含む。硬質である。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側が面取りされている。体部上半から口縁部内側にかけて黒褐色を呈する鉄釉が掛けられ、口唇部は釉剥ぎされている。また体下半から底部にかけて鉄泥が掛けられている。被熱している。407はロクロ成形による緑釉壺で、TB-15-aに分類される。胎土は褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部から体下半部に鉄釉を掛けた後、体上半から口縁部内側にかけて緑釉を掛け、口唇部を釉剥ぎしている。408～423は瀬戸・美濃産の製品である。408、409はいわゆる銭甕で、TC-15-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体中位から内面にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。408の口唇部は敲打によって釉が剥ぎ取られ、底部脇に円形の刻印が押されている。被熱している。409の底部脇には長方形枠に「小太□」の刻印が認められる。また底部には糸切り痕が残る。被熱している。410は鉄釉壺で、TC-15に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。肩部には条線が巡り、体上半には幅約30mmを測るキャタピラ状の沈線が巡っている。高台脇から口縁部内側にかけて暗茶褐色を呈す鉄釉が掛けられ、口唇部は釉剥ぎされている。また内体部から内底部にかけては同様の鉄釉が薄く掛けられている。口唇部には熔着痕が認められる。被熱している。411は鉄釉三耳壺で、TC-15-eに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。底部はベタ底で、周囲を面取りしている。体部はほぼ寸胴状に立ち上がり、肩部で内湾する。口縁部は外側へ折り返され、玉縁を形成する。釉は茶褐色を呈し、口唇部と底部が拭き取られている。また頸部から体上部にかけて黒褐色を呈する鉄釉が流し掛けされている。頸部には粘土紐によるアーチ状把手が3箇所貼り付けられている。内底部には「こ」の字状を呈する窯道具熔着痕が三箇所認められる。被熱している。412～416は鉄釉二

耳壺で、TC-15-eに分類される。412は胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。底部はベタ底で周囲を面取りしている。体部はほぼ寸胴形を呈しているが、最大径は肩部にある。肩部から頸部にかけて大きく内湾し、口縁部は外側へ折り返され、玉縁を形成する。頸部には粘土紐によるアーチ状把手が推定2箇所貼り付けられている。釉は暗茶褐色を呈し、底部を除き施され、肩部に鉄釉が流し掛けされているが、焼成不良のため白濁している。被熱している。413の胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。底部はベタ底で周囲を面取りしている。体部はほぼ寸胴形を呈しているが、最大径は肩部にある。肩部から頸部にかけて大きく内湾し、口唇部はやや外側に張り出している。釉は黒褐色を呈し、体下半部から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は拭き取られている。被熱している。414の胎土は灰褐色を呈する。底部はベタ底で、周囲は面取りされている。体部はやや開きながら直立し、肩部から緩やかに内湾し、口縁部はくの字状に屈曲する。肩部には粘土紐によるアーチ状把手が推定2箇所貼り付けられている。釉は暗茶褐色を呈し、体下半から口縁部内側にかけて掛けられ、口唇部は拭き取られている。被熱している。415の胎土は、灰褐色を呈し、白色砂粒を含む。底部はベタ底で、周囲は面取りされている。体部はやや開きながら直立し、肩部から緩やかに内湾し、口縁部はやや外反し玉縁を形成する。肩部には粘土紐によるアーチ状把手が推定2箇所貼り付けられている。釉は黒褐色を呈し、体下半から口縁部内側にかけて施されている。口唇部は拭き取られている。また内体部も非常に薄く掛けられている。内底部には3箇所の目痕が認められる。被熱している。416の胎土は、灰褐色を呈し、白色砂粒を含む。底部はベタ底で、周囲は面取りされている。体部は直立し、肩部から緩やかに内湾し、口縁部はほぼ直立し玉縁を形成する。肩部には粘土紐による把手が2箇所貼り付けられている。釉は茶褐色を呈し、底部から口縁部内側にかけて施された後、底部は拭き取られている。口唇部および底部に口唇部と同径の環状熔着痕が認められ、同製品が重ね焼きされた可能性が指摘できる。被熱している。417は鉄釉壺で、TC-15-eに分類される。胎土は黄白色を呈し、気泡を含む。底部はベタ底で、周囲は面取りされている。体部は直立し、肩部から緩やかに内湾し、口縁部は玉縁を形成する。釉は黒褐色を呈し、底部から口縁部内側にかけて施され、底部と口唇部は拭き取られている。内底部には直径5cmを測る環状熔着痕が認められる。被熱している。418は鉄釉壺で、TC-15-eに分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、やや軟質である。底部はベタ底で、周囲はラフに面取りされている。体部は直立し、肩部から緩やかに内湾し、口縁部はくの字状に外曲する。釉は錆釉に近い黒褐色を呈し、底部以外に掛けられている。口唇部は二次的に釉が削り取られている。被熱している。419は肩衝の鉄釉壺で、TC-15に分類される。胎土は灰褐色を呈し、気泡、白色砂粒を含み硬質である。体部は太鼓形を呈し、肩部にて強く内曲する。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口唇部は玉縁を形成する。底部を除き茶褐色の鉄釉が施され、頸部から体上半にかけて黒褐色を呈する鉄釉が流し掛けされている。被熱している。420は鉄釉二耳壺で、TC-15-fに分類される。口縁部を欠損している。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、肩部で内湾する。頸部には粘土紐による把手が貼り付けられている。釉は茶褐色を呈し、高台脇から体外面に掛けられている。被熱している。421は鉄釉壺で、TC-15に分類される。胎土は白色粒子を含み、硬質である。体上部に一段の括れを有し、肩部はくの字状に内曲し、口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり、口唇部は玉縁を形成する。釉は黒褐色を呈し、外体部下半から内体部中位までかけられた上に、頸部、体上部にうのふ釉が流し掛けされている。被熱している。422は鉄釉壺で、TC-15に分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、硬質である。最大径は体上半に有り、肩部から頸部にかけて緩やかに内傾する。口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり、口唇部でやや肥厚する。釉は暗茶褐色を呈し、底部を除き施釉されている。頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けされている。被熱してい



る。423は鉄釉二耳壺で、TC-15-fに分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、肩部で大きく内傾する。口縁部はほぼ直立して立ち上がり、低い。頸部には粘土紐によるアーチ状の把手が2箇所貼り付けられている。釉は黒褐色を呈し、内面に薄く掛けた後、高台脇から口縁部内側にかけて施釉されている。被熱している。424～426はいわゆる腰白茶壺で、TD-15-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。釉は体下半部に透明釉が、上半部から口縁部内側にかけて鉄釉が掛けられている。424の体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、肩部で大きく内傾する。頸部に粘土紐によるアーチ状の把手が3箇所貼り付けられている。把手の内側に一段を有す。被熱している。425の体部は緩やかに波打って立ち上がり、頸部には粘土紐によるアーチ状把手が4箇所貼り付けられている。口唇部は外側へ肥厚し、玉縁を形成する。釉は茶褐色を呈し、頸部から体上半にかけて、さらに流し掛けされている。底部には白色粗砂粒が熔着している。被熱している。426の体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、肩部で大きく内傾する。頸部には粘土紐によるアーチ状把手が4箇所貼り付けられている。把手内側には一段を有し、口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、口唇部で外側へ肥厚し、玉縁を形成する。体上半の鉄釉は茶褐色を呈し、その上に黒褐色を呈する鉄釉が流し掛けされている。被熱している。

427は灰釉水滴で、TC-19に分類される。胎土は灰白色を呈し、緻密である。型押し成形によって底部と体部を作出し、貼り合わせている。平面形は不整楕円形を呈し、体部には菊花状の文様が施されている。被熱している。

428～432は花生である。428、429は肥前産鉄釉花生で、TB-22に分類される。428の胎土は灰褐色、429の胎土は暗灰褐色で、白色砂粒を含み、硬質である。扁平球状の体部に朝顔形に開く口縁部を有す。428は口縁部内側から底部にかけて褐色を呈する鉄釉を施した上に、頸部に暗茶褐色を呈する鉄釉を流し掛けしている。やや被熱している。429は口縁部内側から高台際にかけて黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。430、431は瀬戸・美濃産の盤口形花生で、TC-22-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、気泡を含み硬質である。431の体部は算盤玉状を呈し、頸部はほぼ直立し、口縁部端で上方へ屈曲する。430の頸部には粘土紐によるアーチ状の把手が2箇所、431には粘土紐による耳状の把手が2箇所貼り付けられている。430は底部を除き、褐釉が施され、頸部にはうのふ釉が流し掛けされている。431は褐釉を全面に施釉した後、底部から体下半部を拭き取っている。いずれも被熱している。432は花生で、TZ-22に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体部は竹を意匠とした円筒形を呈する。口縁部は斜めにカットされている。釉は錆釉を施した上に、鉄釉を流し掛けしている。内面には灰釉が施されている。被熱している。433は鉄釉瓶で、TC-10-hに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体部は扁平雨滴形を呈し、頸部には表面に花を象った円形の貼り付け文が2箇所認められる。口縁部欠損。体下半から底部を除き、黒褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。

434～438は水注とその蓋である。434～436はTC-27-dに、437はTC-27-aに分類される。胎土は灰白色を呈する。体部はやや肩の張った雨滴形を呈し、頸部には数条の条線が巡る。口縁部外形は算盤玉状を呈し、内側には蓋受けを有する。注口部はS字状を呈する。粘土紐による把手が貼り付けられている。底部を除き、434、436には灰釉が、437には茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。435は同形水注の蓋である。出土グリッドが同じことから434の蓋と推定される。盤状の体部にドーム状の摘みが貼り付けられている。被熱している。また下面にはススの付着が著しい。438は鉄釉筒形水注で、TC-27に分類される。胎土は黄白色を呈する。体部は円筒形を呈し、注口は緩やかなS字状を呈す。粘土紐による断面小判形の把手が貼り付けられている。釉

は暗茶褐色を呈し、底部を除き施釉されている。部分的にうのふ釉状の斑文様が浮き出ている。被熱している。

439～445は片口である。439は肥前産の片口で、TB-23-bに分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。体部は浅めの丸碗形を呈し、口縁部は外側へ折り返され、玉縁を形成する。注口は口縁部下に半円形の孔を穿ち貼り付けられている。底部を除き、刷毛目文様が施されている。また見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされている。被熱している。440は肥前産の片口で、TB-23-aに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。体部は丸碗形を呈し、口縁部は外側へ折り返され、縁帯を形成する。注口は口縁部下に不整円形の孔を穿ち貼り付けられている。見込みと外体部上半に白泥による刷毛目文様を施し、見込みから外体部上半にかけて透明釉を、外体部下半に鉄釉を施している。底部無釉。被熱している。441、442は瀬戸・美濃産筒形片口で、TC-23-aに分類される。441の胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。高台高は約3mmと低い。口縁部は内側に肥厚している。黒褐色を呈する鉄釉が体下半部から口縁部内側にかけて施され、口唇部が拭き取られている。また口唇部には熔着痕が認められる。被熱している。442の胎土は暗灰褐色を呈し、白色砂粒、黒色微粒子を含む。底部は碁笥底状に成形され、口唇部は内側へ張り出している。黒褐色を呈する鉄釉が体下半部から口縁部内側にかけて施され、口唇部が拭き取られている。また口唇部には熔着痕が認められる。被熱している。443～445は瀬戸・美濃産丸碗形片口で、TC-23-bに分類される。443の胎土は灰白色を呈し、白色砂粒を少量含み硬質である。高台は丁寧に平滑に整形されている。口縁部下に1条の沈線が巡る。暗茶褐色を呈する鉄釉が、体下半部から口縁部内側にかけて施され、体上部にうのふ釉が流し掛けされている。被熱している。444、445の胎土は黄白色を呈し、やや砂質感がある。口唇部がやや外側へ張り出している。見込みには3箇所目痕が認められる。底部を除き、茶褐色の鉄釉が施されている。445では黒色との斑状を呈す。いずれも被熱している。

446～464は播鉢である。446～457は瀬戸・美濃産鉄釉播鉢で、TC-29に分類される。446の胎土は灰～黄白色を呈し、黒色粒子を多量に含みやや軟質である。底部には回転糸切り痕を残す。口縁部はくの字状に外曲して折り返され、縁帯を形成する。注ぎ口が1箇所設けられている。播目は1単位11条からなるが、見込みは使用による摩耗のため、擦り消されている。器面全面に暗茶褐色を呈する鎊釉が掛けられている。被熱している。447の胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、白色微砂粒を少量含む。口縁部はクランク状に屈曲し、縁帯を形成する。注ぎ口が1箇所設けられている。播目は1単位13条からなる。器面全体に暗茶褐色を呈する鎊釉が掛けられ、底部は拭き取られている。見込みは使用による摩耗のため素地が露出している。また底部も摩耗のため回転糸切り痕が擦り消されている。被熱している。448の胎土は黄白色を呈する。底部には回転糸切り痕を残す。口縁部は軽いクランク状を呈し、縁帯を形成する。口唇部内側がやや肥厚している。注ぎ口が1箇所設けられている。播目は1単位11条からなり、重なりは浅い。器面全面に暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられ、外体部下半部から底部にかけて軽く拭き取られている。被熱している。449の胎土は黄白色を呈し、白色微砂粒を少量含む。口縁部はクランク状に屈曲し、断面三日月形の縁帯を形成する。釉調は茶褐色を呈し、器面全面に掛けられた後、底部を拭き取っている。播目は1単位11条からなり、比較的疎に施されている。内底体間には重ね焼き時の砂が熔着している。被熱している。450の胎土は黄白色を呈し、白色砂粒を含む。口縁部はクランク状に屈曲し断面三日月形の縁帯を形成する。注ぎ口が1箇所設けられている。釉調は黒茶褐色を呈し、外面には指頭痕が認められる。播目は1単位14条からなり、内側面は反時計回りで施されている。見込み脇及び底部脇に砂が熔着している。被熱している。451の胎土はやや黄色を帯びた灰白色を呈し、白色微砂粒を少量含む。口縁部はクランク

状に屈曲し、縁帯を形成する。釉調は黒褐色を呈し、器面全体に掛けられた後、底部付近を拭き取っている。拵目は1単位15条からなり、見込み周辺は使用によってドーナツ状に摩滅している。452の胎土は灰白色を呈し、白色微砂粒を少量含む。口縁部はクランク状に屈曲し、縁帯を形成しているが、クランク幅は10mmと広い。釉調は黒茶褐色を呈し、底部周辺は拭き取られている。拵目は1単位11条からなり、見込み周辺は使用によって摩滅している。底部際に重ね焼きによる砂の熔着と、摺目痕が認められる。被熱している。453の胎土は灰白色を呈し、白色砂粒を含みやや軟質である。底部には回転糸切り痕を残す。口縁部は外側へ折り返され縁帯を形成する。断面形は逆V字状を呈す。また口縁部内側には隆帯が1条巡る。拵目は1単位11条からなり、見込みは使用のため摩耗し、わずかに残るのみである。器面全面に黒褐色を呈する鉄釉が施され、外体部下半から底部にかけて拭き取られている。被熱している。454の胎土は淡褐色を呈し、白色砂粒を含む。体部は比較的急に立ち上がる。口縁部はクランク状に屈曲し、さらに口唇部から折り返され、三日月形の縁帯を形成する。縁带上端に1条の沈線が巡る。注ぎ口が1箇所設けられている。釉調は黒褐色を呈する。拵目は1単位11条からなる。見込み際及び底部際に砂の熔着が認められる。被熱している。455の胎土はやや黄色を帯びた灰白色を呈し、白色砂粒を少量含む。口縁部はクランク状に屈曲し、口唇部で折り返され、三日月状の縁帯を形成する。口唇部内側に1条の沈線が巡る。注ぎ口が1箇所設けられている。釉調は黒茶褐色を呈する。拵目は1単位12条からなる。見込み際及び底部際に砂の熔着が認められる。被熱している。456の胎土は黄白色を呈し、白色砂粒を少量含む。口縁部は折り返され、縁帯を形成する。内側にはクランクが退化した1条の隆帯が巡る。釉調は茶褐色を呈する。拵目は1単位10条からなる。見込み際及び底部際に砂の熔着が認められる。被熱している。457の胎土は黄白色を呈し、砂粒を含む。外面はロクロ目が顕著で、口縁部は内曲し、断面三角形を呈する。拵目は1単位11条で形成されている。器面全面に茶褐色の鉄釉が施されているが、内体部下半は使用による摩耗によって擦り消されている。458～464は丹波産拵鉢でTK-29に分類される。458の胎土は、淡褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。体下半部に右上方向の指頭圧痕列が巡る。体上半には右方向へのケズリが認められる。口縁部断面は三角形を呈し、注ぎ口を有する。拵目は1単位6条からなる。見込み周囲は使用によって摩耗し、拵目が消滅している。暗茶褐色の鉄釉が掛けられている。被熱している。459の胎土は暗褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。体部には右上方向への指頭圧痕列が巡る。口縁部縁帯は断面三角形を呈し、2条の沈線が巡る。拵目は1単位8条からなり、見込みは同一方向の縞状に施されている。内底体間及び底部際に重ね焼きによる陶片熔着痕が認められる。暗茶褐色の鉄釉が掛けられている。460の胎土は暗灰茶褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。体中位に右上方向の指頭圧痕列が巡る。口縁部はくの字状に内曲し、縁帯は断面三角形を呈する。口唇部と縁帯下端が隆帯状にやや張り出している。拵目は1単位7条からなり、見込みは直線を1本引き周囲に円を巡らしている。底部端に重ね焼き時の熔着痕が認められる。暗茶褐色の鉄釉が掛けられている。被熱している。461の胎土は暗灰褐色を呈し、白色砂粒を含む。口縁部縁帯断面は口唇部がやや外反する三角形を呈し、内側には微隆帯を有する。拵目は1単位7条からなり、見込みは○に×状に施されている。黒褐色を呈する鉄釉が施されている。内底体間及び底部端に重ね焼き時の陶片熔着痕が認められる。被熱している。462の胎土は暗灰茶褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。外体部に指頭圧痕が認められる。口縁部はくの字状に屈曲し、やや外反する。内面の括れ部はケズリ整形によって沈線状を呈す。注ぎ口を有す。拵目は1単位6条からなり、見込みは○に×状に施されている。黒褐色を呈する鉄釉が施されている。被熱している。463の胎土は暗褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。体部全面に指頭圧痕が認められる。口縁部はくの字状に屈曲して縁帯を形成し、2条の沈線が巡る。



播目は1単位9条からなる。器面には鉄漿が施され、外体部上半には緑褐色を呈する自然釉が認められる。被熱している。464の胎土は暗灰茶褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。外面は横ナデによって整形され、口縁部はクランク状に屈曲し、2条の沈線を有する縁帯を形成する。播目は1単位6条からなり、隙間無く施されている。見込みの播目は○に一を呈す。器面には暗茶褐色を呈する鉄漿が施されている。内底体間及び底部端に重ね焼き時の陶片熔着痕が認められる。被熱している。

465は備前産の油受け皿で、TE-40に分類される。胎土は黒褐色を呈し、硬質かつ緻密である。器面全体が丁寧にナデ整形されている。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、体中位（油皿受け外側）からやや外傾する。被熱している。

466～476は蓋である。466は肥前産の壺の蓋である。胎土は褐色を呈し、白色砂粒を含み硬質である。下面には右回転の回転糸切り痕を残す。上面中央に釦状の摘みを有す。釉は黒褐色を呈し、上面に施されている。被熱している。467～476は瀬戸・美濃産の蓋である。467～470、473～475は、壺の蓋である。467～469、473、474は釦状の摘みを有す鉄釉蓋である。467の胎土は黄白色を呈す。下面には右回転の回転糸切り痕を残す。端部はやや下方へ湾曲しており、摘みは円筒形を呈す。上面から下面中位に掛けて錆釉が施されている。被熱している。468の胎土は灰黄白色を呈し、白色砂粒を少量含み硬質である。下面には右回転の回転糸切り痕を残す。端部は鑿状に水平に張り出す。摘み中央には直径4mmの凹みが認められる。上面に茶褐色を呈する鉄釉が掛けられているが、凹部分は拭き取られている。被熱している。469の胎土は灰褐色を呈し、黒色微粒を含み硬質である。下面には右回転の回転糸切り痕を残す。端部は折り返され、下方へ湾曲している。摘みは中央部が凹む円盤形を呈する。上面に茶褐色を呈する鉄釉が施されている。被熱している。473の胎土は黄白色を呈す。下面には右回転の回転糸切り痕を残す。端部は鑿状に張り出し、摘みはドーム状を呈す。上面に灰釉が掛けられている。被熱している。474は下面に右回転の回転糸切り痕を残す。鑿部内側に1条の沈線が巡り、摘み高は約2mmと低い。器面全面に茶褐色を呈する鉄釉が施され、下面には砂が熔着している。被熱している。470、475は橋状摘みを有する鉄釉蓋である。470の胎土は灰白色を呈す。下面はケズリ整形によって平滑に仕上げられている。端部はやや下方へ湾曲し、摘み周囲には数条に沈線が巡る。釉は茶褐色を呈し、上面に掛けられている。被熱している。475の胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。下面に右回転の回転糸切り痕を残す。体部は逆ハの字状に開き、口唇部で直立する。表面に暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。被熱している。471、472はTC-27-dの蓋である。471の胎土は黄白色を呈す。円筒形の摘み上面に直径5mmの凹みが認められる。上面に灰白色を呈する灰釉が掛けられている。被熱している。472の胎土は黄灰白色を呈す。端部は下方に面取りされている。上面に緑灰褐色を呈する灰釉が掛けられている。被熱している。476は水注の蓋である。胎土は黄白色を呈す。下面に断面三角形を呈する受けを有す。上面に暗茶褐色を呈する鉄釉を掛け、うのふ釉を流し掛けしている。被熱している。

#### 土器 (477～513)

477～490はかわらけである。477、478は離れ糸切りによる製品で、DZ-2-aに分類される。胎土は橙褐色を呈す。見込みは同心円状に緩やかに波打つ整形痕が認められる。被熱している。479、480はDZ-2-aに分類される。479の胎土は橙褐色を呈し、金雲母、白色微砂粒を少量含む。体部は外反し、見込みには同心円状に緩やかに波打つ整形痕が認められる。口唇部には灯心痕が認められる。被熱している。480の胎土は褐色を呈し、雲母を少量含む。体部は内湾ぎみに立ち上がり、見込みには同心円状に緩やかに波打つ整形痕が認められる。内外面共にタール状の付着物が認められる。被熱している。481、483、484は左回転の回転糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。481の胎

土は橙褐色を呈す。口縁部はやや外反する。器面全体に白泥が塗布されている。被熱している。483の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。体部はほぼ直線的に立ち上がる。見込み整形痕は渦巻き状を呈す。白泥を塗布している。被熱している。484の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。体部はやや外反して立ち上がり、口縁部でやや内湾する。見込み整形痕は同心円状を呈す。被熱している。482、486、488、489は左回転の回転糸切り痕を有し、DZ-2-bに分類される。482の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。腰折れ状痕が認められる。底部は焼成後に磨かれている。白泥が塗布されている。被熱している。486の胎土は黄灰褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。外部底体間は腰折れ状痕状に立ち上がるが、糸切り痕外端の沈線が明瞭で深く、体部を貼り合わせた可能性もある。見込みには同心円状の整形痕が認められる。488の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。底部は丸味を有し、糸切り痕から更に広がり、体部は外反気味に立ち上がる。見込み中央に凹みが認められる。灯心痕が認められる。被熱している。489の胎土は橙褐色を呈し、暗赤褐色微粒を含む。腰折れ状痕が認められる。灯心痕が認められる。485、487は右回転の回転糸切り痕を有し、DZ-2-kに分類される。485の胎土は褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。口径対底径比は1.7:1と底径が広い。糸尻の輪は楕円形に近く、間隔はやや疎である。見込みには同心円状の整形痕が認められる。灯心痕が認められる。487の胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を含む。口径対底径比は1.5:1と底径が広い。体部は内湾気味に直立する。糸尻の輪は傾きが無く、見込みには同心円状の整形痕が認められる。490は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を含む。器面全体が丁寧に磨かれ、見込み及び底部にはうちぐもりが認められる。灯心痕が認められる。

491～494は火鉢である。491、492は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。底部には板状圧痕が認められ、円錐台形状の脚が貼り付けられている。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は内曲し、逆L字状を呈する。被熱している。493は土師質角火鉢で、DZ-31-eに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。外面は丁寧に磨かれ、口縁部内側および底部にはナデによる整形痕が認められる。被熱している。494は土師質角火鉢で、DZ-31に分類される。胎土は橙褐色を呈す。平面形は長方形を呈し、仕切り板が1箇所設置されている。底部には円錐台形状の4足が貼り付けられている。内面には白泥が塗布されている。被熱している。

495は土師質七輪で、DZ-48-eに分類される。胎土は橙褐色を呈し、雲母、白色微砂粒を少量含む。底部には円錐台形状の3足が貼り付けられる。体部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部は内側に縁帯を有す。また縁帯上には窓枠の両側と向こう正面の位置にスリットが設けられている。内底部には窓枠からループ状に続く上端に刻みを有す仕切り版が貼り付けられている。体上位には円形の把手が1対貼り付けられている。尾張藩上屋敷跡遺跡第26地点26-2号溝などに類例が認められる。

496～500は瓦燈で、DZ-45に分類される。496～497は瓦燈の蓋部である。496の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。体上部に円形の孔が穿たれ、残存部で2箇所を数えるが、その配置から均等に3箇所穿たれていたものと推定される。体下部には長方形のスリットが残存部で3箇所認められるが、そのうちのひとつには下部左側にも円形の孔が穿たれている。被熱している。497の胎土は褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。体下部の長方形スリットは残存部で3箇所を数える。スリット上位には円形の孔が3箇所穿たれ、孔との位置関係から、スリットは5箇所設置されていたと推定される。また3箇所の孔の向こう正面にも孔が1箇所穿たれている。被熱している。498～500は瓦燈の身である。498の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。底部には簾状圧痕が認められる。被熱している。499の胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。底部には

簾状圧痕が認められる。500の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。油皿受け部には棒状工具によって六弁花状の模様が施されている。また口縁部外面は剥離によって二次加工され、口唇部は平坦に磨き削られている。被熱している。

501は土師質あんか502はその蓋で、DZ-63に分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。501の平面形は楕円形を呈し、スリットを有する面がやや扁平となる。体部断面はドーム形を呈し、直径9cmを測る円形の口縁部を有す。底部には簾状圧痕が認められ、円錐台形状の3足が貼り付けられている。体部上半には長方形を呈する5条のスリットが開けられ、またスリットから90度方向の肩部には扇形のスリットが1対開けられている。502の裏側には環状の受けが認められる。被熱している。

503～507は土師質丸底ほうろくで、DZ-47-aに分類される。503の胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。底部にはチヂレ目が認められ、体部は横ナデによって整形されている。中空半球状の内耳が貼り付けられている。504の胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。体部は横ナデによって整形されている。中空半球状の内耳が貼り付けられている。被熱している。505の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。底体間はケズリによって面取りされ、明瞭な稜を有す。半球状の内耳が貼り付けられている。被熱している。506の胎土は淡～橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。底部全面にチヂレ目が認められ、体部はヘラ削り後に横ナデによって整形されている。半球状の内耳が貼り付けられている。被熱している。507の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。底部全面にチヂレ目が認められ、体部及び内底部は横ナデによって整形されている。被熱している。

508は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-dに分類される。胎土は褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。内面には布目状圧痕が認められる。体上部に一重角枠内「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘の刻印が押されている。

509、510は塩壺の蓋である。509は輪積み成形塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。内面にチヂレ目が認められる。510は板作り成形塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。内面に布目圧痕が認められる。511は出土状況から碁笥蓋として使用されたと考えられる製品である。胎土は褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を含む。表面は浅いドーム形を呈し、内面には環状の受けが作出されている。

512、513は刻印を伴う棒状製品である。胎土は淡褐色を呈す。器面はナデによって丁寧に整形されている。二重角枠内に同一の刻印が押されているが、内容は不明。被熱している。

## (2) 瓦 (IV-66 図1～4)

1は鬼瓦である。中央の一部分のみ残存。家紋が貼り付けられており、梅鉢紋Aである。文様に沿ってナデ調整が施されており、文様が外れてしまっている部分には貼り付けのためのカキヤブリが見られる。花卉は面取りされている。文様は厚さ2.6cmと厚い。背面は鬼瓦を銅線で屋根に固定させるための把手(龍頭)が付けられていた痕、全面を指で成形した痕が残る。2は丸瓦である。全長30cm。玉縁3.2cm。凹面には、布袋痕が見られる。3は熨斗瓦である。陽刻文。文様は二重線による唐草文で中心飾りは不明。唐草、子葉は3類に類似。木口に「⊖」の刻印あり。4は軒棧瓦の軒丸部である。瓦当文様は三つ巴文C。

## (3) 木製品 (IV-67 図 1)

1は蛇の目傘の頭轆轤である。傘の柄に接続固定するための孔が穿たれている。火災により炭化し



ている。

(4) 金属製品 (IV-68 図 1~14)

1はキセルである。雁首Ⅲ-1類。雁首の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、火皿の溶接部分の表面は銀色。胴部の溶接部はやや白味を帯びた金色。表面に鍍金が施された資料か。2はキセルである。吸口Ⅲ-1・Ⅳ・Ⅴ類。表面全面に横方向に細い線が彫金されている。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。ラウが残る。3は飾り金具である。菱形の板材に鉤穴状の穴を開け、貝をモチーフとした金具である。銅釘で接続している。腐食のため地金の金属色は観察できない。4は飾り金具である。菱形の板材に鉤穴状の穴を開け、花を彫金した金具である。銅釘で接続している。地金の色調は赤銅色。5は刀柄の縁である。鍛造した側板の上部に刀を嵌め込む部品が溶接されている。側板の溶接は反り側に施されており、内側に細い金属板を溶接し補強している。側面に波文様。側板の地金の色調は金色。接続している部品の地金の色調は赤銅色。6は刀の釧である。地金の色調は赤銅色。7は竿秤の分銅である。表面は腐食。上面にある竿秤にかけるための紐を通す部分は、本体に方形の平面形で断面形が楔形の臍穴に嵌め込んでいる。8は包丁である。鍍を除去した地金の色調は金色。9は長方形の鏡である。摘みを通す穴が2箇所にある。文様は扇子。「天下一」銘。鍍を除去した地金の色調は銀色。10は水滴である。中央の長方形の空気孔には細長い板材を折り曲げた部品、円形の注口には細長い板材を丸い筒状に折り曲げた部品をそれぞれ溶接している。鍍を除去した地金の色調は赤銅色。11は錠前である。鉤が嵌った状態で出土。鍍を除去した地金の色調は金色。12は容器蓋の摘みもしくは錘である。半球状の部品を重ねて球にしたもので、棒状の部品を通して固定している。棒状の部品に銅線が巻かれている。鍍を除去した地金の色調は赤銅色。13は小柄である。刃の先端と柄の後端部は欠損している。板材を鍛造し棟方部分で溶接している。文様は地板部分に雪輪文、円。文様は別部品が嵌め込まれている。刃の地金の色調は銀色。柄の地金の色調は赤銅色。溶接部分は銀色。14は熱で溶解した金属塊である。鍍を除去した地金の色調は金色。

(5) 銭貨 (IV-69 図~74 図 1~133)

銭貨の分類基準などは、第9節銭貨の章を参照願いたい。

D面焼土層は天和2(1682)年の火災に伴う廃棄層であり、廃絶年の下限が判明している。この火災までの生活面であるD1層は新寛永通寶文銭が出土していることから、D面焼土層の帰属年代は1668~1682年である。火災層は平準化されており、まとめて銭貨が出土している箇所はなく、火災時の原位置を保っていたとは考えづらいが、比較的、火災当時の生活状況を反映した遺物の組成と考えられる。出土した銭貨の内訳はI期古寛永通宝72枚、II期新寛永通寶文銭90枚、渡来銭・模鑄銭4枚、雁首銭2枚、粒銀、不明52枚が出土している。不明が多いのは、火災による溶着が多く判別できないためである。

1~33はI a期に属する古寛永通宝で、1・2二草点型、3は不草点型で、従来「称芝銭」と呼ばれていたものである。二草点型は銭文「寛永通寶」の「永」点、「通」点が草書体になっている。4・6は称水戸式で4は正字型、6は長永型である。長永型は水戸銭と呼ばれている中でも、発掘調査によって、水戸鑄の確度の高いものとなっている。「永」字が狭く、上下に長い形となっている。5は称坂本式に属する正永型である。7は「永」字フ画が大きく仰いでいることから仰永型と思われる。8は「永」字が湾曲していることから、湾柱永型と思われる。9は広足寛型、10は「寶」字貝の前・後ろ足の長短が著しいことから破寶型と考えられる。11・12は潤字型、13・14は「永」字柱部分が太

いことから太細型に分類される。15は長門鑄として確度の高い麗書型である。16は「永」字、頭部分が大きく俯いていることから俯頭永型と思われる。17～20は「寛」字が他の三文字より著しく縮んでいることから称井之宮式縮寛型に比定される。21～27は「寶」貝足接合部分が大きく後ろに後退していることから、称建仁寺式小字型に分類される。28～32はI a期に属する古寛永通宝と思われるが、細分できなかった。33～50はI b期に即する古寛永通宝で思われる。33は「寶」字貝足が均等に振り分けられることから、正足寶型と思われる。34～39は「通」字用部分が狭長であることから、従来鳥越銭と呼ばれていた群に属する大字型で思われる。40～50は「通」字、コ頭部分が上下に接するほど狭い特徴から、従来沓谷銭と呼ばれた銭に相当する。40～45は「寶」字足が上下に幅広（高い）なことから高寛型に属し、46～50は低寛型である。

51～128はII期に属する新寛永通宝文銭である。51～79は正字背文型、80は「文」ノ画が下がっており、「入」字のように見えることから正字入文型と思われる。81～95は正字背文に比し、文字の太さが均一なこと、「文」字第一画・二画が離れ「離点文」となっていることから中字背文型に分類される。96・97は深字背文型。98・99は「文」字が内輪に接するほどに、上に高くなっていることから縮字背文型と思われる。100～115は「文」字ノ画・末画の交叉部分下に切れ目が存在することから細字背文型に分類される。116は「文」字点が著しく左に寄ることから退点文型と思われる。117～128は細分できなかったがII期に属すると考えられる。129は渡来・模鑄銭で聖宋元宝である。

130～133は小玉銀（粒銀）と考えられる。132は豆粒銀状を呈し、上面、底面ともに平滑になっている。外見上の容色は銀色に近い。131・132は火熱を受け、表面に亀裂が入っている。133から形状は「碁石金」に類似するが、材質は金とは考えられない。容色は銅色で、銀と銅の合金と思われる。

## (6) 石製品 (IV-75 図～78 図1～74)

### 硯 (1～7)

全体的に被熱し、剥離や欠損、赤変しているものが多い。材質など良質なものは見受けられない。3は頁岩、他は粘板岩。1は何層にも剥離してしまっている。硯背に「宝□年四月十四日」の文字が刻まれている。おそらく、年号は天和2(1682)年の火災直前の「延宝」であろう。2は硯背に「武州江戸 日本開山□ 高田□」の文字が刻まれている。3は熱で赤変している。4は海部欠損。5は陸の部分が大きく磨り減っている。四寸×二寸。二隅の角が落とされている。6は四隅が丸く削り出されている。7は四隅の角が落とされている。小型。

### 砥石 (8～27)

全体的に熱を受け、剥離や欠損、赤変しているものが多い。火災による廃棄のためかあまり使用していない砥石や大形の砥石が多く出土している。8は粘板岩。比較的定型化した砥石。均一に摩耗している。裏面には「延宝八天(1680年) 四月日」の文字が刻まれている。天和2(1682)年の火災の2年前である。熱で何層にも剥離しており、内面は熱で赤変し表面はススで黒くなっている。縦方向の擦痕が観られる。9は頁岩。裏面には「六月 富田平右衛門」の文字が刻まれている。側面には刻みが付けられている。片面は熱で赤変し、片面はススで黒くなっている。10は粘板岩。側面には4面とも鑿痕がつく。右手前から左奥に向かって摩耗している。11は粘板岩。均一に摩耗している。12は粘板岩。手前から奥に向かって摩耗している。13は頁岩。右手前から左奥に向かって大きく反っている。2面を使用している。持ち砥。14は頁岩。仕上げ砥。短辺は面取りされており、表面も磨かれたように滑らかである。15は頁岩。手に持って大きなものを直接磨いたと思われる。16は頁

岩。小形の砥石である。石の摺理面があり、砥石の石材としてはあまり良い物では無かったであろう。17は粘板岩。小形の砥石である。均一に摩耗している。18は粘板岩。横方向に使用している。19は頁岩。熱で何層にも剥離し、発泡しかけている。V字状の溝が縦方向に刻まれている。どのような使われ方をしたのかは不明。20は粘板岩。熱で発泡しかけている。格子状に傷が付いている。21は輝石安山岩。荒砥。22は頁岩。右手前から左奥に向かって大きく反っている。2面を使用している。大振りな道具を研ぐための砥石。23は流紋岩。荒砥。24は頁岩。右手前から左奥に向かって大きく反っている。3面を使用している。25は堇青石ホルンフェルス。右手前から左奥に向かって大きく反っている。3面を使用している。26は粘板岩。右手前から左奥に向かって大きく反っている。表裏の2面を使用している。27は頁岩。不定形。荒砥。石材を小さく割ろうとしていた痕跡が残る。右手前から左奥に向かって摩耗している。1面のみを使用している。

温石 (28)

粘板岩。熱で何層にも剥離しており、表面はほとんど残存していない。長方形を呈し灰の中から取り出すときに棒を刺すための円孔が穿たれている。四寸×二寸。

軽石 (29)

中心部に2箇所紐を通すための穴が開けられている。

茶臼 (30)

ドレライト。下臼。1分画の中に溝が12本まで確認でき、溝は臼の周縁にまでは達していない。関東では比較的珍しい石材で他地域から持ち込まれた可能性を指摘されている。

水鉢 (31)

輝石安山岩。4脚。13.3×17.9cmの長方形の底部。内面には工具痕が残る。墓などで使われたものであろう。

箱 (32・33)

脚付きの箱の身と蓋。9.9×7.9×5.4cm。砂岩(新第三紀)。身は内面底部に工具痕が残り、蓋には透かしが入っている。良質で、おそらく香炉として使われたものであろう。仏前などでお焼香用に使われたものかもしれない。

玉 (34・35)

流紋岩。焼成を受け白変している。直径1.6cm。袋・巾着・印籠・煙草入れなどの緒を通して口を束ねて締める緒締めであろうか。珊瑚・瑪瑙・木・象牙・金属・陶磁器などで作られたものがあり、多くは球形であるが意匠を凝らしたものも多い。

碁石 (36～66)

全体的に被熱し、赤変しているものや何枚にも剥離してしまっているものも多い。おおよそ55個ほどあると思われる。全域から出土し、特にC12グリッドから出土した土製の蓋(Ⅳ-65図511)の下から碁石が多数出土している。土師質あんかななどの土製品の蓋を代用したのだろうか。36～51の内37、39、44、45、46、48は粘板岩、その他は頁岩である。灰褐色、暗灰褐色など均一ではない。52～66は頁岩でやや灰色がかった黒色である。黒石として使われたものであろう。ハマグリを白石として使う以前は白い自然石を白石として使用するなどしていたが、36～51は、火災による被熱で変化したものであろう。直径の平均値は2.07cmである。現在の黒い碁石の大きさは2.22cmで、あまり変わらない。また、ここに図化されている以外に形はあまり整っていないが、比較的薄く大きさも碁石に近く碁石としてほぼ使われたのではと考えられる碁石状石製品も含まれている。



### 火打ち石 (67～74)

いずれも白色系の石材である。67は脈石英。68、71、73は石英。69は瑪瑙。70、72、74は玉ずい。67は大きく5個に割れており、使用痕は見られない。全体で210gあり、この後火打ち石として使うために割ったものではないかと考えられる。68、69は稜の多くに使用痕が見られ、大きさも25.3gと26.6gと大きく使用中のものではないかと考えられる。70、71は使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられ再度使用するために剥離したのではないかと考えられる。71～74は使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられるが、再利用するには小さく廃棄されたものと考えられる。

D面焼土出土石製品には、透かし彫りのある香炉と思われる箱や茶臼、粒のそろったきれいな碁石などのやや良質な製品が少量出土している。中級藩士数人含む下級藩士の長屋と考えられており、それらと合致する遺物の出土状況と思われる。

### (7) 動物製品 (IV-79 図)

1は櫛払い。化粧道具の櫛の歯を掃除する道具。大形家畜の四肢骨骨幹。頭部欠損、2列の植毛孔を僅かに残す柄である。先端に向かってわずかに細くなり、一旦やや広くなる。その部分から片側を薄く成形しておりヘラのようにになっている。全面を丁寧研磨している。表面には植毛孔の位置決めをするための「×」が刻まれている。2は双六などの駒か、なんらかの部品の一部。大形家畜の四肢骨骨幹。焼成を受け白色化している側面は垂直に切られ丸味を帯びていない。

## 第2節 SK3 出土遺物 (IV-80～249 図)

## (1) 磁器・陶器・土器 (IV-80～133 図1～705)

最少個体数 3716 点を数える遺構一括資料であり、入院棟 A 地点でもっとも多くの遺物が出土した遺構である。本遺構は調査時に、元禄 16 (1703) 年の火災層 (C 面焼土) でパックされた状況が確認されており、それが本遺構一括遺物の下限となろう。磁器は肥前系磁器 (JB) が中心で、中でも碗 (JB-1) が 4 割以上をしめる。確認された JB-1 の中で多いのは高台の断面形が三角形を呈す碗 (1-c)、ついで高台の断面形がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗 (1-d) である。それらの絵付をみると、手描きにより染付されたものが中心で、型紙摺を使用したものを少量含む。またごく少ないが手描きとコンニャク印判を併用したのも認められる。陶器も肥前系 (TB) が中心で、磁器と同じく碗 (TB-1) が 7 割以上をしめる。確認された TB-1 の中で多いのはいわゆる呉器手碗 (1-a) や京焼風陶器碗 (1-b) である。土器 (DZ) は 8 割近くがかわらけ (DZ-2) で、中でも DZ-2-a がその 5 割以上をしめる。かわらけについで多いのは塩壺 (DZ-51) で、中でも板作成形、大枠の「泉州麻生」の刻印のあるもの (51-i) が中心である。以上のような様相から東大編年 IV a 期に比定される遺構一括資料である。

## 磁器 (1～309)

1～97 は肥前系磁器碗である。1～7 はいわゆる初期伊万里碗で JB-1-a に分類される。1 は青磁、7 は白磁、他は染付が施される。1 の釉は生掛けされる。2 は底部内面に細かい擦痕が認められる。4 は口鏝が施され、高台内には「大明」銘が書かれている。5 は高台高が高く、口縁部が強く外反する。底部内面中央には一重角枠渦福銘が書かれている。6 は口縁部が緩やかに外反、腰が張り、高台高が高い碗である。器面にはやや大きめの貫入が全面にみられる。7 も口縁部は緩やかに外反し、腰が張り、高台高が高い碗である。高台内はアーチ状に削り込まれ、兜巾にされる。また高台内から畳付脇にまでおよぶ大きな砂目痕が 3 箇所ある。8、9、95 は底部無釉碗で JB-1-b。8 は染付が施され、畳付脇が浅く帯状に削り込まれている。9 は外面に鉄釉、内面に透明釉が掛け分けされたもので、8 と同じように畳付脇が削り込まれている。高台内には「一二」と判読される墨書がある。95 は青磁である。畳付、底部内面に漆のようなものが付着している。10～50、52、54、57、82、83、90 は高台断面形が三角形を呈す碗で JB-1-c に分類される。10、11、41、44、83 は白磁、45、57、82 は色絵、48、90 は外面に瑠璃釉、内面に透明釉、他は染付が施されたものである。基本的には大振りの丸碗が中心であるが、中に小振りの碗もある (41～43)。丸碗以外では腰が張った筒形碗 (44～48)、杉形に近いもの (19、21)、小広東碗のように体部が直線的に開くもの (40) もある。染付が施されたものが多いが、施文パターンは数種類あり、見込み圏線と菊花に外面圏線のみもの (12、13)、見込みに圏線とワンポイントがあり、口縁部内側に圏線、外面全体に施文、高台内に銘があるもの (15～17 など)、外面全体に施文、高台内に圏線があるもの、(18～20、29、30 など)、外面のみに施文されるもの (32、33、39 など) などである。高台内にみられる銘款には、15、17、21、25～27 には「宣明年製」銘、16 には「宣明」銘、22 には「宣徳年製」銘、23、82 には「大明年製」銘、28 には「大明」銘、34 には「宣」銘、46 には「大明成化年製」銘、54 には「大明嘉靖年製」銘、90 には「製」銘などがある。11 はいわゆる濁手である。12 の底部内面には細かい擦痕が認められる。20、47 の染付は型紙摺とダミを併用したものである。25 はロクロ成形後、体部

下半をランダムにケズリ調整し、体部ラインが部分的に直線的なラインを呈す。30、46の器面は釉ムラが顕著で、染付が透明釉からはみ出し、黒く発色している箇所がある。34の底部内面中央に擦痕が集中する箇所が認められる。37の絵付は墨弾きとダミによるものである。41は高台脇に細かい放射状のケズリが施される。高台内に染付による異形字と思われる角椀銘がある。44の底部内面には輪状に擦痕が認められる。45の色絵は、緑、赤色で施される。49は焼成不良で呉須の発色も悪く、胎土も完全に磁胎化していない。器面の貫入が顕著である。54は圈線が高台内と高台内側面に1本ずつめぐる。57の色絵は青の盛絵具で施される。82は染付が施されたものに赤、黄、緑で上絵付が施される。割れ口に漆継痕跡が認められる。なお本製品は複数個体確認されるが、そのうち1つのものには内面に漆状のものが付着していた。83には口銹が施される。55、59～79、81、88、89は高台断面形がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗でJB-1-dに分類される。59は色絵、60は外面は瑠璃釉、内面は染付、88は青磁染付、89は青磁、他は染付が施される。絵付は高台脇にまで及ぶような一枚絵が施されるもの(62～64など)、あるパターンの文様が繰り返されるもの(65、73、77など)の大まかに2種類のタイプのものがみられる。前者のタイプの絵付は手描きされるものが多いが、後者のタイプの絵付には手描き、型紙摺、コンニャク印判などの技法が単一で使用されたり、あるいは組み合わせられたりしている。高台内の銘款には、60、62、64、には「大明年製」銘、63は「太明年製」銘、65には「宣真年製」銘が書かれているが、銘が無いものが大半である。また高台脇の圈線もないものが多い。59、61、70、79は他の1-dより小振りである。59は赤、緑、黄、黒で色絵が施される。60の見込みには染付で手描き五弁花文が施される。内外面に部分的に漆状のものが付着している。61は口銹が、底部内面には手描き五弁花文が施される。65の絵付は手描きと型紙摺が併用されている。69の内面には漆状のものが若干付着している。71、72の絵付は手描きとコンニャク印判を併用している。77の絵付は白土型紙摺にダミ、手描きを併用したものである。79の絵付は型紙摺によるものである。88の底部内面には染付型紙摺で五弁花文が施される。89は口銹が施される。底部内面には輪状の細かい擦痕が認められる。51、53、56、87、94、96は高台断面シャープな「U」字状を呈し、高台高が低い碗でJB-1-e。87が青磁染付、他はすべて染付が施されたものである。53の絵付は手描きで、非常に丁寧な上手のものである。底部内面に手描き五弁花文、高台内には角椀渦福銘が書かれている。87は底部内面に染付で二重圈線に手描きの四弁花文が施される。口銹が施される。94は白土型紙摺でいわゆる雨降し文が施文され、その上に呉須でダミが施されたものである。高台内に角椀銘が書かれるが、欠損のため判然としない。96は暈付と底部内面に漆状のものが付着している。84～86はいわゆるうがい茶碗でJB-1-t。84は色絵、85、86は染付が施されたものである。84の色絵には赤、緑、黄、青、黒色が使用されているが、比較的淡い色味である。85、86はうがい茶碗ではめずらしく内外面に絵付が施される。また86の高台内には「宣明化製」銘が書かれている。91～93はJB-1-dの小振りの碗でJB-1-uに分類される。91は外面に鉄釉、内面に透明釉が掛け分けされる。92は赤、緑、黒の色絵が施される。他の1-uよりやや小振りである。58、80、97はJB-1。58は白磁、80、97は染付である。58は腰が張り、高台高もかなり高い碗で、一見すると肥前系陶器碗のいわゆる呉器手碗(TB-1-a)に近い器形である。80の絵付は型紙摺と手描きを併用したものである。97は高台内がアーチ状に削り込まれ、暈付脇が面取りされている。また体部数箇所に窪みを有す。割れ口には漆継痕跡が認められる。

99～170、177、178は皿・平鉢である。99、100、102、177、178は景德鎮窯系(JA1-2)、101は産地不明(JZ-2)、他は肥前系(JB-2)である。99、100、102、177、178はいずれも青花でJA1-2。99は型打成形され体部が細かい輪花状を呈す。口唇部の虫喰いが顕著である。100は口



縁部が小さく外反する丸皿である。呉須の発色は悪く、黒ずむ。177は削り出し高台であるが、放射状にカンナ痕跡が残る無釉の高台部に一部透明釉がかかり、そこに砂が付着している。178も削り出し高台で蛇ノ目高台状を呈する。101は体部が直線的に開く白磁皿でJZ-2。釉は畳付まで含めて総掛けされ、器面にはやや粗い貫入が多くみられる。畳付脇と見込みには砂目痕が1箇所残る。なお本製品は割れ口に漆継痕跡が認められる。103、115～117、120～128、131、133、144、145～147、154、155は高台断面形が三角形を呈す染付皿・平鉢でJB-2-c。120、121、123～127、131、146、154、155の高台内にはハリ支え痕が1箇所ある。116、154、155は白磁、120～122は色絵、他は染付が施される。115～117、133は型打成形皿である。116はいわゆる濁手で、体部外面は細かい捻子花状を呈す。117は口縁部が1/2しか残存していないが木瓜形皿か。120～122の色絵皿はいずれも輪郭線が黒色で描かれた上に彩色が施されたものである。120の胎土は薄い灰色を呈す。青、赤色で彩色されるが、赤い花の部分は黒色の輪郭線はみられない。高台内のハリ支え痕は直径5mm程の比較的大きめのものである。122の色絵は内外面に施される。123の高台内には二重角枠の「渦福」字銘が書かれている。割れ口に漆継痕跡が認められる。124、125の高台内には二重角枠銘が書かれている。127は他の2-cと分類される皿と比較すると、器高はやや高く、口縁部が外反する。また胎土が灰色味を帯びている。144の内面の染付は型紙摺によるものである。なお本品は複数個体出土していることが確認されているが、本品と酷似するものが柴田コレクションVIに掲載されている。ただし掲載されているものは外面に圏線がない。145の見込みには手描き五弁花文が施文される。146の体部はほぼ垂直に低く立ち上がる。147は胎土がやや灰色味を帯び、染付も雑なものである。104、105、107、129、130、132、136～143、158、160、167は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す皿・平鉢でJB-2-e。158は白磁、160は青磁、167は色絵、他は染付が施される。ハリ支え痕が104は高台内に4箇所、105は3箇所、107、136、139、140～142、160には1箇所ある。104、105は比較的深めの皿で裏文様も施される。104の高台内には二重圏線が施される。105の高台内には「明成年製」銘が残る。107は見込み中央には手描き五弁花文が、129の見込みには手描き四弁花文が施文されている。132は高台高が高く、口鏽が施された丸皿で、高台部側面に雷文が施文される。136は口縁部直下に括れを有す。口鏽が施される。137の内側面の文様はダミと墨弾きによるものである。見込み中央には手描き五弁花文が施される。138は底部がへたり、底裏中央に白色砂粒が付着している。見込み中央には手描き五弁花文が施される。139は口縁部が緩やかな輪花状を呈す。141は高台内に「太明成化年製」銘が書かれている。142には口鏽が施される。143内面の染付は型紙摺によるものである。高台内にはカンナ状の削り痕跡が放射状に顕著に残る。158の胎土は灰色味を帯び、畳付には砂粒が付着する。167は口縁部がわずかに外反し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎされた皿である。色絵は釉剥ぎされた部分と内側面に赤、黒、緑、青色などで施される。高台脇の圏線も赤色で施される。106は高台断面形が三角形を呈し、高台径が小さい平鉢でJB-2-b。体部中程が括れる。口鏽が施され、高台内に「太明」銘が書かれる。なお割れ口には漆継痕跡が認められる。108、134、135、156、157、159は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す上質な皿・平鉢でJB-2-d。135は染付、134は青磁染付、108、156、157は白磁、159は青磁である。108、156、159は型打成形された輪花皿である。108、135の高台内にはハリ支え痕が1箇所ある。157は口縁部がわずかに輪花にされ、高台内にはハリ支え痕が1箇所ある。168～170は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿でJB-2-k。169、170は青磁、168は染付が施される。170以外は見込みの釉剥ぎ部分にはチャツ痕が看取される。109、110、166は見込み蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が小さい皿・平鉢でJB-2-l。109、110の見込み蛇ノ目釉剥ぎ部分

にはチャツ痕が残る。109の壘付脇には放射状のカナナ痕が目立つ。壘付には砂粒が多く付着する。166は壘付内外側ともに面取りされる。釉は生掛けされ、高台脇には手跡がみられる。蛇ノ目釉剥ぎされた部分には鉄漿が塗布される。割れ口に漆継痕跡が認められる。111～114、151は初期伊万里の染付皿でJB-2-a。111は口縁部の大半が欠損しているが、本来は菱形を呈していたと思われる型打皿である。112は見込みに「太明成」の銘が書かれている。113、114はともに型打成形された輪花皿であり、内面の文様も酷似している。113には口錆が施される。151は高台径は小さいが、高台断面は「U」字状を呈す。壘付周辺には白色砂粒が多く付着する。149、150はJB-2。ともに染付が施される。149は高台高が高い皿で、高台内には「宣明年製」銘が書かれる。118、119、148、162～165は糸切り細工、貼付高台の皿でJB-2-r。118、119、162は白磁、他は染付が施される。118の内面には釉下に細かい布目が顕著に認められる。119の内面には牡丹の陽刻が施される。148の口縁部は緩やかな輪花状を呈す。162は口縁、高台ともに平面形は菱形を呈すが、口縁部の菱形の各頂点は緩やかなアーチ状に窪まされている。163は底部銘が書かれるが、欠損のため判読できない。164、165は二次的な火熱を受ける。165は複数個体確認されている。161は蛇ノ目高台を有するいわゆる初期伊万里の青磁平鉢でJB-2-h。内面はヘラ状のもので陰刻が施され、高台周囲には花文の陽刻が施された足が3箇所ある。なお蛇ノ目高台部分には鉄漿が塗布されている。

171～176は大皿・大平鉢で、173が漳州窯系（JA2-2）、他は肥前系（JB-2）である。171、173、174は色絵、172は青磁、175、176は染付が施される。171、174、175、176は高台断面形が三角形や逆台形を呈すものでJB-3-fに分類される。171、174はいわゆる古九谷様式である。171は青手の破片と考えられるが、焼成不良で、胎土が完全に磁胎化していない。174は五彩手で、呉須で内外面に圏線を描き、色絵は黒で線書きし、青、緑、赤、黄色などで彩色される。高台内に染付の二重圏線が施されるが、これは有田町山辺田窯跡で出土する製品にみられる特徴である。175、176は高台内にはハリ支え痕が3箇所ある。175は二次的な火熱を受ける。176は口縁部が緩やかな輪花状を呈し、外反する。172は高台内が蛇ノ目釉剥ぎされたものでJB-3-c。型打成形で、内面には雲竜文が陽刻される。蛇ノ目釉剥ぎ部分には鉄漿が塗布され、チャツ痕が認められる。本製品は二次的な火熱を受ける。173は赤絵大皿でJA2-3。高台まで施釉されるが、骨付の釉の拭き取りが雑であり、壘付部分には大量の砂が付着している。なお本品はD1層以下の包含層、SK2741、SE1569などと遺構間接合していること、またそのうちSK3から出土したものは底部破片2点であることを考慮すると、SK3の埋め戻し土中に含まれていたものというよりも、SK3構築時に周囲の包含層などを掘削した際に混入した遺物である可能性が高い。ちなみに破片で一番多いのは包含層D2層のものであり、本来はD2層に伴う遺物か。

179～201、238は肥前系磁器鉢（JB-5）である。179、180は高台内が蛇ノ目釉剥ぎされた青磁鉢でJB-5-c。ともに蛇ノ目釉剥ぎされた部分には鉄漿が施され、チャツ痕が認められる。179は高台周囲に3足が貼り付けられる。見込み、口縁部外面、3足側面にはヘラ状のものによる陰刻が施される。180の見込みに陰刻が施されるが、2種類の陰刻技法が用いられている。すなわち中央の花文および算木文は押印によるものであり、内側面の陰刻はヘラ状のもので施文されている。181はいわゆる初期伊万里青磁鉢でJB-5-a。3足を有すが、図のように壘付からは完全に浮いている。内外面、3足側面にはヘラ状のもので陰刻が施される。182～195は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す鉢でJB-5-b。185は青磁、186は色絵、190、191は白磁、他は染付が施される。183は口縁が輪花状にされ、内側面も型打成形で捻子花状の陽刻が施される。見込みには手描きの四弁花文、高台内には二重角枠の変形「福」字銘がある。絵付、成形ともに丁寧な上手のものである。184の

高台内には「大明成化年製」銘がある。なお見込みにはわずかに輪状の擦痕が認められる。185の見込みにもわずかに輪状の擦痕が認められる。186は高台脇に赤で圏線を見込みには黒で輪郭線を描き赤、緑色で施文している。187は高台内に二重圏線が施される。188の絵付は型紙摺と手描きが併用される。高台内には「大明年製」銘が書かれる。191の見込み中央付近には輪状の擦痕が観察される。192は高台脇の削り調整痕が顕著である。暈付には砂粒が付着する。なお内面のごく一部に漆状の付着物が認められる。193の高台内付け根に二重圏線、中央に「宣明年製」銘が書かれる。195は型打成形された小鉢である。口縁部は輪花にされる。口鏽が施され、見込み中央には手描きの四弁花文、高台内には「延寶年製」銘が書かれている。196～201、238は高台断面形が三角形を呈す鉢でJB-5-f。198、201は染付、他は白磁である。196は高台脇のケズリ調整が顕著である。197の内側面には型打で松竹梅の陽刻が施文され、その陽刻は外反する口縁部にまで及ぶ。198は口縁部が輪花状にされた小鉢で、型打で陽刻が施される。見込みには染付で「大明成化年製」銘、高台内には「福」字銘が書かれる。199も口縁部が輪花状にされた小鉢である。型打で口縁部内側に陽刻が施されるが197、198と比べて陽刻があまり明瞭ではない。暈付には砂粒が多く付着する。200は二次的な火熱を受ける。201は口縁部が1/2以上欠損しているが、見込みの形状から八角鉢である可能性が高い。絵付は岩と建物が交互に8面に施文されたものか。238は二次的な火熱を受ける。

98、202～209、211～237、239は坏である。202、203は景德鎮窯系（JA1-6）、他は肥前系（JB-6）である。202、203は青花端反坏でJA1-6。呉須は滲む。腰が張り、口縁部は強く外反する。ともに高台は削り込まれ蛇ノ目状にされる。203の割れ口には漆継痕が認められる。98、204～209、235～237は丸形坏でJB-6-a。98、204は色絵、205は外面は鉄釉、内面は透明釉、206、236は白磁、他は染付が施される。98は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す。内外面に赤、青、黒で色絵が施される。204の色絵は黒で輪郭線を描き、その上に青、緑、黄、赤、紫色で彩色される。高台内に「大明」銘があるが、これも黒で上絵付し、その上を緑色でなぞっている。口縁部内側と高台脇に染付による圏線が施される。割れ口に漆継痕が認められる。205の見込みには染付による二重圏線が施される。208は体部はほぼ直立し、口縁部がわずかに外反する。209、235の絵付は型紙摺によるものである。236の体部中程にごく浅い沈線が1本巡る。211～234は端反形坏でJB-6-b。211～220は白磁、221は色絵、222～234は染付が施される。214、220は内側面に、223、228は内外面にわずかに付着物が観察される。漆か？ 211は高台内には染付の角福銘が書かれる。212も高台内には染付による角枠銘がある。213は器面全体が青味を帯びる。215、219、233、234は高台無釉である。218は口鏽が施される。221の色絵は黒あるいは赤で輪郭線を描き、赤、黄色で彩色される。高台内には染付で「大明成化年製」銘が書かれる。222、223、227、229は高台内に銘が書かれる。222は「大明年製」銘、223は「宣真？年製」銘、227は丸に「寿福」の変形字か。229は「宣明年製」銘と判読される。224は器厚も薄く、絵付も精緻なものであり、上手の製品と思われる。高台内には二重圏線がある。230は内面全体にやや厚く漆膜が付着している。漆は暈付にも及ぶが内面ほど厚くはない。なお本製品は二次的な火熱を受けている。239はJB-6。染付は型紙摺とダミを併用している。

240、241は肥前系猪口の底部が輪高台状を呈すものでJB-7-bに分類される。240には染付と口鏽が施される。241は白磁である。

242～248は肥前系仏飯器（JB-8）である。244の外面には褐釉に灰釉流し掛け、内面は透明釉、244以外は染付が施されたものである。242～244は高台内の削り込みが深いものでJB-8-a、245



～248は高台内の削り込みが浅く、高台脇に面取りが施されたものでJB-8-cに分類される。242は畳付の釉はケズリ調整され、高台内は施釉される。243は畳付の釉際の処理が雑で、畳付周囲に砂粒がやや多く付着している。

249～257は肥前系香炉・火入れ（JB-9）である。249～252は青磁、253、254、257は染付、255は白磁、256は色絵である。249、253は蛇ノ目高台を有すものでJB-9-f。249は二次的な火熱を受ける。253は口縁部外側に敲打痕が認められる。250、256は底部に円盤状の露胎部を有すものでJB-9-a。250は3足を有し、その足は丸味を帯びた三角錐状を呈す。足の表面に縦に2本沈線が陰刻される。256も3足を有すが、足以外の部分を1段低く成形することで足状にされたものである。足の先端付近は丸味を帯びた山形にされ、無釉である。色絵は赤で輪郭線を描き、緑色の彩色を施している。底部内面には漆状の付着物が認められる。251、257は高台状の露胎部を有すものでJB-9-c。251は底部内面中央に横位に指で撫でたような痕跡が認められる。ヘラ状のもので陽刻が施された3足を有す。257は畳付から高台内側にかけて不整形の無釉部分が2箇所認められる。252、254、255は底部あるいは高台内が無釉にされたものでJB-9-g。252の底部は碁笥底状に削り込まれ、その部分は無釉にされる。円形に砂粒が薄く付着する。254は輪高台を有す。底部内面中央付近には砂粒が集中し、やや盛り上がり確認される。255は底部中央を輪高台状に削り込み、その部分は無釉にしている。3足を有すが、足以外の部分を1段低く成形することで足を作り出している。残存する足の先端には熔着痕が認められる。

258～260は肥前系磁器瓶（JB-10）である。258、260はいわゆる初期伊万里の染付瓶であるJB-10-e。260の胎土は全体に灰色を呈し、呉須も黒色に発色している。259はJB-10。白磁瓶で、底部に輪高台を有す。

261～263は肥前系油壺でJB-12。261は染付、262、263は色絵が施される。262は胎土が灰色を呈し、色絵は赤、黒色で施文される。263の色絵は赤、黒、緑色で施文される。

264～270は肥前系蓋物（JB-13）である。264は色絵、266、267は白磁、269は青磁染付、他は染付が施される。264、265、269は丸形を呈すものでJB-13-aに分類される。264は蛇ノ目状の高台を有す。色絵は赤で輪郭線を描き、黄色で彩色が施される。269は高台脇に稜を有す。内外面に漆状の付着物が認められるが、特に内側面のものが顕著である。また底部内面中央には円形の細かい擦痕が認められる。266～268は筒形を呈すものでJB-13-b。270は円筒形を呈す段重でJB-13-c。

271～277は肥前系壺・甕でJB-15。271、272は白磁、273～276は染付、277は色絵が施される。275、276はいわゆる初期伊万里である。275の底部内面は調整が雑で、凹凸が著しい。畳付から高台内は無釉である。276は内面無釉である。肩部には熔着痕が1箇所認められる。口縁部全体に敲打痕が認められる。277は型作りである。外面の胴部中程は帯状に盛り上がり色絵が施され、それを挟んで上下には陽刻がみられる。

278～281は扁平な球形を呈す合子で、278～280は肥前系でJB-18-a、281は福建・広東系でJA9-18に分類される。278は染付が施され、高台内には銘が書かれる。279の外面は瑠璃釉に金彩の上絵付、内面には透明釉が施釉される。底部は円盤状に露胎にされる。二次的な火熱を受ける。280は型作りで、外面に亀甲形の陽刻が施される。白磁であり、底部は円盤状に露胎にされる。281も型作りで、外面に亀甲形の陽刻が施される。また高台内に角枠銘が認められるが、これも型によるものである。外面は畳付以外は緑釉、内面には透明釉が施釉される。

282は肥前系青磁水滴でJB-19。型作りで、背中と思われる場所に空気孔が1箇所ある。底部は無

釉である。

283、284 は肥前系花生で JB-22。283 は青磁である。284 は肩部および頸部を除き鉄釉が施釉されるが、鉄釉も胴部の上下で明度が異なる。また上半には鉄釉施釉後、トビガンナ状の文様が螺旋状に施され、わずかに残存する頸部には染付による圏線と思われるものが巡る。割れ口には漆継痕が認められる。

285 は器種不明である。白磁で内面と底部は無釉である。本品と類似するものが入院棟 A 地点の D 面焼土の 204、既報告の法学部 3 号館地点の E8-2 号土坑から出土しているが、法学部のそれは茶筌立ての可能性が指摘されている。

286、287 は肥前系の染付灰落しで JB-24。口縁部には敲打痕が認められる。286 は底部が輪高台状を呈す。内面も透明釉が施釉されるが、口唇部は拭き取られる。その部分には細かい砂粒状の痕跡が認められる。287 はベタ底で、無釉である。内面も口縁部以外は無釉である。

288 ～ 306 はすべて肥前系の蓋である。288 は染付丸形碗の蓋である。摘み内に二重圏線がある。289、290、293 ～ 300 は蓋物の蓋である。289 の合わせ口部分には付着物が認められる。293 の摘みは染付ではなく、鉄釉が施釉される。297 の染付は型紙摺によるものである。298、299 は裏側が輪高台状に削り込まれている。298 は二次的な火熱を受ける。300 は型押成形で、縁が花びらのように成形された楕円形部分と、手づくねで平面形が小判形にされた円筒状の受け部を貼り合わせている。花びら部分の色絵は黒で輪郭線を描き、青で彩色を施している。291、292 は白磁の壺・甕の蓋である。303、304 は扁平な球形を呈す合子の蓋である。303 は外面に瑠璃釉、内面に透明釉が施釉される。外面には金彩が施されていた痕がある。割れ口に漆継痕が認められる。304 は型打成形で外面に陽刻が施され、ダミで塗り埋めてる。陽刻は非常に精緻なものである。301、302、305、306 は器種不明の蓋である。301、302 は裏側に断面凸形の受け部を有す。壺・甕の蓋か。301 は手づくねで、表側は赤絵で花文を施している。302 はロクロ成形で、受け部を円形に削り出している。摘みは別作りで貼り付けられている。305 は染付が施され、裏側は蛇ノ目状に釉が拭き取られる。蓋物の蓋か。306 の胎土は非常に緻密で灰色を呈す。いわゆるタタラ成形によるもので、裏側は外周を幅 5mm ほど残して削り込み、長辺方向にナデ調整した痕跡が残る。表側はヘラ状のもので中央に壺形の陰刻を施し、透明釉を施釉し、その周囲には陽刻で雲文を施し、青磁釉が施釉される文箱や硯箱などの蓋か。

307 は肥前系染付片口鉢で JB-23。口縁直下を穿孔し、ロクロ成形の注口を貼り付けている。

308 は肥前系染付磁器であるが、器種は不明である。型作りで、2つの型を貼り合わせている。外面には火焰形に沈線を巡らし、その中に染付で手描きによる四弁花文が施文される。

309 はいわゆる古九谷様式の色絵燭台で JB-52 に分類される。2つの皿状の受け部、頸部、釣鐘状胴部からなる。胴部と皿の口縁部以外はほぼ完形で出土しており、胴部内側を観察するとロクロ成形であることがわかる。上の皿の中央に灯心立と思われる穿孔が 1箇所あるが、図にあるように頸部中程で止まっており、釣鐘状胴部上方の穿孔までは達していない。外面の色絵は赤色の部分は赤で輪郭線を描き、赤で彩色し、それ以外の黄、青、紫色の部分は黒で輪郭線を描き彩色を施している。

#### 陶器 (310 ～ 545)

310 ～ 374、376 ～ 385 は碗である。310 ～ 354 は肥前系 (TB-1) のものである。310 ～ 317 はいわゆる呉器手碗で TB-1-a。312、313 にはごく薄く付着物が認められる。314 は二次的な火熱を受ける。315 の高台は兜巾高台状を呈す。318 はいわゆる卵手のもので TB-1-j。器厚は比較的薄く、口縁部は小さく外反する。畳付には砂目痕が 4箇所ある。319、320 は内野山窯を指標とする丸

碗で TB-1-i。319 は外面緑釉、内面灰釉が施釉され、外面の緑釉も、口縁部付近には全体よりやや濃い色調の青緑釉を流し掛けしている。畳付には砂目痕が3箇所ある。320 は灰釉に、内外面に緑釉が流し掛けられる。321 ～ 339 はいわゆる京焼風陶器の外面に主文様があるもので TB-1-b。高台内の削り込みが外側より浅く、大振りな丸碗が比較的多いが、338、339 のように高台の内外の削り込みがほぼ同じ高さのものも含まれる。高台内に刻印を有すものが大半であり、刻印が浅い円刻、あるいは「の」ノ字状のごく浅い削り込みとともに確認されるものが多い。なお円刻と刻印がある場合は、円刻の中に刻印が入れられるものと、その外側に配置されるものと大きく2パターンあるようである。刻印の種類をみると、321、322、325、326 は行書の「清水」、323、324 は行書の「清」、327、328 は「山原住」、329 は「木下弥」、330 は「小松吉」、331 は楕円形に「寶」、333 は「稀」か、334、335 は「雲」、336 は「上政」か。332、337、339 判読できない。図化した以外にも様々な刻印が確認されているが、最も多いのは行書の「清水」である。ただし同じ行書の「清水」であっても、その刻印をみると筆致に差がある。325 の高台内には、やや大きい円形の削り込みと逆「の」ノ字状のごく浅い削り込みの両方が認められる。また、通常 TB-1-b に施文される文様は山水文であるが、それに加えて漢字4文字が書かれている。327、331 は内面にごく薄く付着物が認められる。漆か。340 ～ 346 はいわゆる京焼風陶器で内面に主文様があるもので TB-1-c。全体的に高台内側の削り込みが外側よりも浅く、内面の鉄絵も丁寧に山水文が描かれたものが多い。また前述した TB-1-b 同様、高台内には刻印と、円刻あるいは逆「の」ノ字状のごく浅い削り込みが確認されるものも多く、刻印も共通しているものが多い。340、341 は同じ刻印と思われるが判読できない。341 は体部外面にロクロ目が残る。342 の刻印は「上政」か？ 343 の刻印は「木下弥」。344 の刻印は行書の「清水」。1-b 同様、1-c でもこれが最も多く確認される刻印である。345 の刻印は「山原住」。346 は他のものと比較すると内面の鉄絵がやや雑であり、高台内も逆「の」ノ字状の削り込みがあるのみで、刻印は確認されない。高台内に墨書があるが判然としない。347 は胎土、器形的特徴はいわゆる呉器手碗に酷似するが、内外面に渦刷毛目が施された碗である。TB-1-d。刷毛目は施釉された高台内まで及ぶ。348 は外面は波状、内面は縦筋状の白土刷毛目が施された丸碗で TB-1-g に分類される。畳付には熔着痕を削り落としたような凹凸が一部確認される。349、350 は陶胎染付碗で TB-1-f。ともに外面には白土染付が施される。351 ～ 354 は TB-1。いずれも胎土は黄白色から白色の比較的緻密な胎土である。351 は筒形碗で、口唇部と畳付脇に鉄釉が施釉される。352、353 は腰が張り、体部がほぼ垂直に立ち上がる碗である。外面には鉄絵がワンポイント施文され、一見すると京焼風陶器 (TB-1-b) に類似するが、畳付以外、高台内まで施釉される、高台断面形状が「U」字状を呈すなど、京焼風陶器の特徴とは異なる部分もある。353 の畳付には砂粒が付着する。354 も器形、高台断面形状など京焼風陶器に類似する特徴を有すが、畳付以外、高台内まで施釉されること、釉調、無文であることなど、京焼風陶器とは異なるものである。355 ～ 362、374 は瀬戸・美濃系 (TC-1) のものである。355 ～ 358 は天目碗で TC-1-a。SK3 では比較的多く 1-a が出土しており、それらを見ると図化したようにサイズ、プロポーションともに様々なものが確認される。356 は高台内に「繪所」の墨書がある。358 は他の 1-a と比較して口径が大きく、口縁部も逆「く」ノ字状に屈曲し、そこから垂直に立ち上がるものである。削り出し高台であるが、輪高台ではなく、円盤形で、その中央が播鉢状に浅く窪む。また高台脇の削りも他の 1-a と比べて少し狭い。口縁部は鉄釉が浸け掛けされ、高台部も薄く施釉されている。359 は鉄釉丸碗で TC-1-ag。口縁部が小さく外反する。見込みには縦横に細かい擦痕が認められる。360、361 はいわゆる尾呂茶碗で TC-1-o。360 は大振りな丸碗で高台内まで施釉されるが、畳付釉は拭き取られる。高台内、畳付脇に手跡が認められる。361 の見込



みには輪状の細かい擦痕が認められる。362は灰釉丸碗でTC-1-aa。削り出し高台である。374はうのふ釉が施釉された丸碗でTC-1-c。体部内面に1箇所手跡が認められる。二次的な火熱を受ける。363～373は京都・信楽系(TD-1)。363～366は平碗でTD-1-h。366以外は底部内面にピン痕が3箇所ある。363の内面には鉄絵が施され、高台内には行書「清」の刻印がある。364、365は内面に銹絵染付が施され、高台内には浅い円刻と小判形に「清閑寺」の刻印がある。365は外側から押され、体部1箇所が窪まされる。366は内面に染付が施され、高台内には長方形に篆書?のような刻印がある。367～369は丸碗でTD-1-c。いずれも高台径が口径に比して小さく、腰が張る。外面には銹絵染付、高台内には刻印が施される。367、369は高台内に小判形に「清閑寺」の刻印が確認されるほか、367は幅広の逆「の」ノ字状の削り込み、369は浅い円刻がある。367は畳付脇に手跡が3箇所認められる。368は小判形の刻印のみが施される。370、373はTD-1。370は高台内に浅い円刻と小判形に「清閑寺」の刻印がある。平碗(TD-1-h)の可能性もある。373の外面には銹絵染付の三つ葉葵文が3箇所に施文されていたようである。内面には薄く付着物が認められる。半球形碗(TD-1-b)の可能性もある。371は杉形碗でTD-1-d。口縁付近の外面には銹絵染付が施される。372は天目形碗でTD-1-p。高台内には浅い円刻がある。376～385は産地不明の陶器碗でTZ-1。380、381、383～385には高台内に「の」ノ字状の削り込みがある。なお381～385は高台部のみが残存しているものであり、碗以外の器種の可能性もある。376は腰部に明瞭な稜を有し、体部が直線的に開き気味に立ち上がる。胎土はやや粗く黒色粒が多く認められ、にぶい橙色の胎土中に白色の胎土が含まれる、いわゆる練り込み素地である。口縁部の内側が雑に削り調整され、口唇部の断面形が歪な三角形を呈す。体部外面はロクロ目が顕著で、畳付以外は灰釉が施釉されるが、釉ムラも目立つ。377は内外面に白土刷毛目が施された丸碗である。胎土は磁器質のように緻密で灰白色を呈す。高台はいわゆる兜巾にされ、畳付には砂目痕が4箇所ある。体部外面上半には刷毛目の下に幾何学文のような陰刻がみられる。378は一見するといわゆる呉器手碗に近い器形であるが、口縁部が外反する。胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈す。白濁した紫色の釉が総掛され、畳付には砂目痕が4箇所ある。畳付脇には手跡が認められる。379は体部1箇所がわずかに窪まされた丸碗である。胎土は緻密で、黄白色を呈す。高台部は十文字に割られた、いわゆる割高台状を呈し、無釉である。畳付脇はごく小さく面取りされる。380は口縁部がわずかに肥厚する灰釉丸碗である。胎土は緻密で灰色を呈す。畳付脇の釉は拭き取られる。381の胎土は緻密で灰色を呈す。灰釉が施釉され、内外面に渦状刷毛目が施される。高台内まで施釉されるが、畳付は削り調整され、無釉にされる。ただしそのケズリ調整が雑なため、部分的に砂粒が付着している。382の胎土はやや粗く、にぶい橙色を呈す。内面は透明釉、外面は灰釉が施釉される。高台内は丁寧にアーチ状に削り込まれている。畳付脇は面取りされる。383の胎土はいわゆる軟質施釉陶器に近く、黄白色を呈す。釉は剥落したのか認められないが、内外面に白土が残る。384の胎土はやや粗く黄白色を呈す。内外面に灰釉が施釉されるが、浸け掛けされたようである。385の胎土は384と酷似する。高台径が大きく、撥形に開くものであるが、歪に成形されている。

386～432、434～439、441、443、444、448は皿・平鉢である。386～398、421、430～432、434～439、441、443、444は肥前系(TB-2)である。386、437は透明釉が施釉され、見込みに砂目痕が5箇所ある皿でTB-2-b。437は体部外面の相対する位置に斜めに窪みが2箇所確認される。畳付を除き、高台内まで施釉される。387～394、438、439、441は青緑釉輪剥皿・平鉢でTB-2-a。387、388、391～393、439は外面に灰釉、389、441は透明釉が、438は白釉が施釉される。また390は内外面ともに透明釉が施釉され、394は内外面に灰釉が施釉され、内

面に青緑釉を散らしている。なおいずれの皿も高台とその周囲は無釉にされているが、387、390、391、394などは無釉部分がきれいな三角形を呈すように意識して浸け掛けされているようである。高台はいずれも削り出し高台であるが、高台高、畳付の削り出し方などは様々である。387の輪剥部分には砂目痕が4箇所ある。388は口縁部が外反する。389は輪剥部分に輪状の直重ね痕が認められる。391も輪剥部分に輪状の直重ね痕、そして高台脇には熔着痕がみられる。394は輪剥部分および畳付に砂目痕が4箇所ある。438、439、441はいずれも輪剥部分の釉が削り取られ、周囲とは明瞭な段差が生じている。またその輪剥部分には砂胎土目痕が4ないし5箇所認められる。395～398、434～436は見込みに鉄絵山水文のある、いわゆる京焼風陶器皿・平鉢でTB-2-c。高台内には刻印があり、395、396は京焼風陶器碗（TB-1-b、c）と共通するもので、395は「山原住」、396は「雲」、397、398の刻印は碗には管見の例はない「建」か。なお碗と同じく、刻印とともに大きさは様々であるが、浅い円刻が施されるものもある。434の底部は蛇ノ目凹形高台状にされ、その部分にはチャツ痕が認められる。その周囲には獣足が3箇所貼り付けられる。435は体部に括れを有し、高台内には角枠の押印がある。436は回転させながら体部外側を下から上に撫で、体部に凹凸を付けたものである。高台内に刻印はないが、他の京焼風陶器にあるような浅い円刻が施される。また漆継痕が認められる。421、443、444は内外面に透明釉が総掛けされる。いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す皿・平鉢でTB-2-i。いずれも高台内は蛇ノ目釉剥ぎされている。443、444は釉剥ぎ部分にチャツ痕が認められる。444は二次的な火熱を受ける。430は刷毛目平鉢でTB-2-g。底部内面には砂胎土目痕が7箇所ある。431は象嵌平鉢でTB-2-h。底部内面には砂胎土目痕が5箇所残る。432はTB-5。体部中程が括れる灰釉鉢で、畳付釉は削り調整される。399～420、422～424は瀬戸・美濃系（TC-2）である。399、400は見込みに3箇所のピン痕のある端反皿でTC-2-yに分類されるが、399のピン痕は径2mmほどの円形を呈すが、400のそれは1辺が7mmほどの不整形を呈す大きなピン痕である。399の底体間には明瞭な沈線状の削り込みが認められる。401は長石釉が総掛けされた丸皿でTC-2-c。底部にはトチ痕が3箇所ある。402～404は見込みに輪状の直重ね痕のある丸皿でTC-2-b。402の高台付近は無釉にされるが、畳付の1/3程は釉が付着した状態になっている。なお本品の口縁部2箇所が隣り合う形で、二次的に「U」字状に削り込まれる。403は高台内側を持ち、釉を浸け掛けした為か高台内の一部分が無釉であり、畳付の釉のみ拭き取られている。405は輪高台を有す木瓜形の灰釉皿でTC-2-i。406は鉄絵が施された丸皿でTC-2-s。内面には直重ね痕が認められる。407～410、412は外面にしのごのある灰釉菊皿でTC-2-k。いずれも内面の菊花が細かく、見込み中央には沈線状の円圈を有す、2-kの初現的な様相を呈すものである。408は内面に型打成形の際の布目痕が残る。高台内には墨書がある。409、410の内面にはトチ痕が3箇所ある。411は外面にしのごのない灰釉菊皿でTC-2-l。底部内面には二重の沈線状の円圈を有す。口縁部には部分的に灯心痕が認められる。413、419、422はTC-2。413はいわゆるヒダ皿と菊皿の中間のような皿である。体部は外反し、口縁部は緩やかなヒダ状を呈す部分と、菊皿（TC-2-k、l）のように口縁部に浅い「V」字状の切り込みが入れられる部分とがある。白色の釉がやや厚めに総掛けされ、畳付の釉は拭き取られる。419は体部中程に稜を有し、体部が内傾して立ち上がる。底部には右回転糸切り痕が残り、無高台である。見込みには短い舌状の粘土塊が貼り付けられている。底部を除き鉄釉が施釉され、その上をうのふ釉が全面に散らされている。なお口縁部1箇所が二次的に浅い「U」字状に打ち欠かされている。尾呂窯で出土している灯明具（Ⅱ類b類）とされているものか。422はロクロ成形後、口縁部が隅切り方形に成形された灰釉皿である。口縁は1/2ほどしか残存していないが、四隅にのみ灰釉の上に鉄釉が浸け掛けされる。畳付から

高台内は無釉である。417、418は鉄釉丸皿でTC-2-z。417の見込みにはトチ痕が3箇所ある。ともにロクロ成形された後、底部を平らに成形された無高台の皿であり、糸切り痕が部分的に残る。なお両製品の口縁部には灯心痕が認められる。423、424は型打成形、3足を有す灰釉形皿でTC-2-x。423は扇形、424は長方形を呈す。423は総釉掛けされた後、底部釉は拭き取られる。底部にはトチ痕が2箇所ある。424は浸け掛けされ、底部と足の先端から内側半分が無釉である。414～416は輪禿皿でTC-2-m。414の輪禿部分は凸帯状を呈し、見込みには銀杏の葉のような押印文が施される。2-mの古手の様相を呈すものである。輪禿部分の処理が雑であるためか、見込みに熔着痕が認められる。415、416の輪禿部分は釉を拭き取ったもので、414のような明瞭な凸帯部はない。なお415、416の輪禿部分には赤色のベンガラ状のものが付着する。416の口縁部には「U」字状の削り込みが1箇所認められる。420は見込みに白泥型紙摺が施された、いわゆる御深井皿でTC-2-e。釉は浸け掛けで、畳付から高台内は無釉である。425は京都・信楽系でTD-2。ロクロ成形で、口縁部が多角形を呈す鉄釉皿である。底部内面にはピン痕が4箇所ある。高台は削り出し高台で、高台高が低く、幅広い。高台周辺は無釉である。426、427は備前系のロクロ成形された皿でTE-2-a。426は無釉で、外面にはケズリ調整痕が顕著に残る。タール状の灯心痕が口縁部を全周する。427も無釉であるが、内面には火襷が認められる。外面はケズリ調整されるが、底部中央には右回転糸切り痕が残る。口縁部には紐状の把手が1箇所貼り付けられる。口縁部には灯心痕が1箇所認められる。428、429は志戸呂系の皿でTF-2。ともに外面はケズリ調整され、内面から口縁部付近のみ錆釉が施釉される。428の口縁部にはタール状の灯心痕が全周する。429の口縁部には、薄い粘土板を上下から挟み込む形の耳が1箇所貼り付けられる。448は産地不明でTZ-2。胎土は黄白色を呈し、比較的緻密である。削り出し高台で、高台部以外は藁灰釉が施釉される。口縁部内外面に熔着痕のようなものがある。見込みに不整形の大きなくぼみが確認されるが、その割れ口がわずかに立ち上がっており、何か貼り付けられていた可能性もある。

375、433、440、445～447、494は鉢である。375は産地不明のものでTZ-5。錆釉が総掛けされ、畳付釉は平らに削り調整される。433、440は肥前系の内野山窯指標の鉢でTB-5-d。433は高台部以外青緑釉が施釉される。440は外面は灰釉、内面は青緑釉が施釉された輪剥鉢である。輪剥部分に鉄漿を塗布してある。445～447は京都・信楽系のものでTD-5に分類される。445はロクロ成形されたものであるが、口縁部は方形を呈す。口縁部直下の四隅に円孔があり、四辺は直線ではなく浅いU字状を呈し、内側が斜めにケズリ調整されている。削り出し高台で輪高台を有す。見込みにはピン痕が3箇所残る。446は口縁部がヒダ状にされ、外面に銹絵染付による輪繫ぎ文が施される。447は体部は方形を呈し、口縁部は四弁花状を呈す鉢である。底部は削り込まれ碁笥底状にされる。体部外面の四隅に鉄あるいは呉須で笹(?)が描かれる。底部内面にはピン痕が1箇所残る。494は丹波系の鉢でTK-5。胎土は淡橙色を呈し、1～2mm大の白色砂粒を多く含む。ロクロ成形で、底部には右回転糸切り痕が残る。外面には自然釉が掛かる。なお口縁部付近の内外面に一部タール状の付着物が認められる。

442はいわゆる瀬戸・美濃系煙硝播でTC-64。体部外面から口縁部にかけて柿釉が施釉される。口縁部は内側に折り返され、肥厚する。体部内面に熔着痕が認められる。

449～457は坏である。449は肥前系鉄釉坏でTB-6。449の高台内には「半」の墨書がある。450～454は瀬戸・美濃系の坏でTC-6。450、452、454は鉄釉、451は灰釉、453は飴釉が施釉される。450、454は底部内面にトチ痕が3箇所ある。451は二次的な火熱を受ける。455～457は京都・信楽系の坏でTD-6。455は透明釉が施釉される。底部に穿孔が1箇所あり、その内面



には円形のパーツが欠損した痕がある。いわゆる十分坏といわれるものか。同様のものが四谷一丁目遺跡のD-15号遺構などで出土している。456、457は灰釉が施釉される。456は見込みにピン痕が1箇所ある。

458は肥前系鉄釉仏飯器でTB-8。

459～472は香炉・火入れである。459～465は肥前系のもの(TB-9)である。459は陶胎染付の香炉・火入れでTB-9-a。蛇ノ目高台状を呈し、壘付部分のみ無釉である。壘付脇には手跡が2箇所認められる。460、461はいわゆる京焼風陶器の香炉・火入れTB-9-b。高台内には浅い円刻と刻印が認められる。460は「清水」、461は「小松吉」と判読される刻印である。462、463、465はTB-9。462は透明釉、463、465は鉄釉が施釉される。462の高台はやや幅広の蛇ノ目高台状を呈す。463の底部には足が2箇所残る。足は紐状の両端を指で挟み、その間が平らにされたものである。465の壘付には3箇所の目跡が残る。464は胴部に刷毛目が施された鉄釉香炉でTB-9-c。袴腰を呈し、高台高が高いものである。口縁部には敲打痕が認められる。466～472は瀬戸・美濃系のもの(TC-9)である。466はTC-9。体部外面には鉄絵が施される。底部内面にはトチ痕が3箇所ある。体部に1箇所二次的な小穿孔が認められる。467は灰釉香炉でTC-9-a。口唇部の釉は拭き取られ、その部分には敲打痕が認められる。壘付脇には輪状の熔着痕が認められる。468、469、472は袴腰のものでTC-9-f。468は内面まで施釉され、底部にはトチ痕が3箇所ある。底部には3足が貼り付けられ、その中央には輪状の熔着痕が認められる。口縁部には細かい敲打痕が認められる。469も内面まで施釉され、外面の相対する2箇所には鉄絵が施される。底部内面にはトチ痕が3箇所ある。底部には3足が貼り付けられる。472は体部外面から口縁部にかけて施釉された後、口唇部の釉は拭き取られる。その口唇部には熔着痕が認められる。壘付外周付近を円圈状に削り込んでいる。470、471は3足を有す鉄釉香炉でTC-9-b。470は内面まで施釉され、底部にはトチ痕が3箇所ある。口縁部には敲打痕が認められる。471の内面の釉は拭き取られ、底部には輪トチ痕と白色の付着物がある。口縁部には敲打痕が認められる。底部には墨書がある。

473、475～484、499は瓶である。473、475は肥前系瓶でTB-10。473の壘付には熔着痕が認められる。475は高台を除き、鉄釉が施釉される。476、499は瀬戸・美濃系のものである。476は灰釉五合徳利でTC-10-d。頸部は長く、口縁部は外側に小さく折り返されるなど10-dでも比較的古手の特徴を有すものである。499は胴部がらつきょう形を呈す灰釉小瓶でTC-10。紐状の耳を2箇所有す。底部は碁筈底状に削り込まれる。体部2箇所に窪みを有す。477～481は備前系のものである。477は鶴首を有すものでTE-10-a。いわゆる伊部手の製品で、器壁は薄く上手のものである。底部には「八□/加右門」の墨書と、「○」に「一」の刻印がある。478、481は底部付近に最大径を有し、体部が三角形を呈すものでTE-10-b。ともにいわゆる伊部手の瓶である。478は口縁部はごく小さく外側に折り返され、体部に自然釉が掛かる。底部には扇形の刻印がある。481は体部に自然釉が掛かる。体部2箇所に熔着痕が認められる。底部には○の刻印がある。479、480はTE-10に分類される。479は焼成不良で、胎土が黄褐色を呈し、やや軟質。底部脇には「○」に「大」の刻印がある。480は体部1箇所がわずかに窪む。底部には「○」に「□(判読不能)」の刻印がある。482～484は志戸呂系のいわゆる由衛門徳利でTF-10。いずれも釣鐘形に近い形状を呈す。由衛門徳利の中でも比較的古手の特徴を有す。またいずれも底部外周には熔着痕が認められる。484は体部下半に熔着痕と窪みが1箇所ある。また484の底部には「□/□/三十八」の墨書がある。

474、498は花生である。474は肥前系でTB-22。壘付からその外側の釉は拭き取られ、高台内は施釉される。壘付には白色砂粒の付着物が認められる。498は瀬戸・美濃系でTC-22-a。口縁か

ら体部上半にうのふ釉が流し掛けされる。頸部に紐状の耳が2箇所貼り付けられるが、その上端部分は紐の両側に楕円形の粘土塊が貼り付けられ、やや複雑な形状を呈す。

485～493は壺・甕である。485～487は肥前系のロクロ成形されたものでTB-15-a。485は外面上半が青緑釉、下半は錆釉が刷毛目状に施釉される。内面も底部付近のみ鉄釉が施釉される。畳付の釉は拭き取られるが、その周囲には細砂粒が付着する。486は口唇部の釉は拭き取られるが、その部分に熔着痕が認められる。487は外面上半は鉄釉、下半は錆釉が施釉されるが、高台部まで施釉されたため、畳付には熔着痕がみられる。口唇部の釉は拭き取られる。488～491は瀬戸・美濃系の高台を有すものでTC-15-f。488は外面上半に鉄釉、下半に錆釉が施釉されるが、高台部まで施釉され、畳付には粗砂粒が付着する。口唇部の釉は拭き取られるが、熔着痕が認められる。489は高台以外、内外面鉄釉が施釉される。490、491は鉛釉が施釉された二耳壺である。ともに高台以外、内外面施釉され、口唇部の釉は拭き取られる。490の口唇部には熔着痕が認められる。491は二次的な火熱を受ける。492は備前系でTE-15。紐積み成形されたもので、内面数箇所に横位の継目が認められる。内外面回転ナデ調整されるが、胴部下半にはケズリ調整された痕跡も認められる。なお頸部より上方は欠損しているが、割れ口端部は二次調整されている。493は丹波系でTK-15。胎土は淡灰色を呈し、1～2mm大の白色砂粒を多く含む。紐積み成形で、内外面に錆釉が施釉される。なお高台内は無釉であるが、釉が畳付にまで及ぶため、畳付全面に熔着痕がみられる。口縁端部は平らに整形され、その部分に3箇所の目跡が残る。

495～497は水滴。495、496は瀬戸・美濃系でTC-19、497は備前系でTE-19に分類される。495、496は型作りで、外面は菊花状にしのぎが施される。灰釉が施釉されるが、底部は無釉。497はロクロ成形後、体部を型押しで隅丸形状に成形し、兎の陽刻が施される。体部下半には鉄泥が浸け掛けされる。底部には右回転の糸切り痕が認められる。

500～502は片口鉢である。500は瀬戸・美濃系の片口鉢でTC-23-b。外面に鉄釉、内面に錆釉が施釉され、底部内面にはトチ痕が2箇所残る。501は肥前系鉄釉丸碗形片口鉢でTB-23。502は京都・信楽系の白土染付された丸碗形片口鉢でTD-23。高台内には小判形に「音羽」の刻印がある。底部内面にはピン痕が3箇所ある。

503～505は鬚水入れである。503、504は瀬戸・美濃系でTC-25、505は産地不明でTZ-25に分類される。503、504はいわゆる御深井で、長辺側に鉄の摺絵が2箇所施される。底部はともに無釉であるが、503には「み□」の墨書がある。505はいわゆる軟質施釉陶器である。胎土が赤橙色を呈し、白色細砂粒を含む。器面全面に透明釉が施釉されるが、底部には釉下に斜めにケズリ調整した痕跡が認められる。底部の一部に施釉されなかった部分があり、そこには漆状の付着物が認められる。

506、507は瀬戸・美濃系茶入れでTC-26。ともに底部無釉で右回転の糸切り痕が認められる。506は鉄釉、507は黒釉が施釉される。507は内面まで施釉される。また口唇部には敲打痕が認められ、二次的な火熱を受けている。

508は瀬戸・美濃系柿釉漫瓶でTC-28。施釉は一部内面にまで及ぶ。上部には幅広の紐状把手を有す。底部はごく浅く削り込まれ輪高台状にされるが、畳付には糸切り痕が残存し、熔着痕が認められる。内面には白色の付着物がある。

509～512は瀬戸・美濃系水注（TC-27）である。509、510は胴部がらつきょう形を呈すもので、509はTC-27-a、510はTC-27-dに分類される。509は鉛釉が施釉されるが、それは内面までおよぶ。510は高台内に輪トチ痕が認められる。511、512はTC-27。511は胴部が算盤玉形を呈し、上方

に把手を有すものである。高台付近を除き外面には鉄釉、内面には灰釉が施釉され、受け部の釉は拭き取られる。512の体部は丸く、肩部の相対する位置に紐状の耳が2箇所貼り付けられ、うち一方の耳の直下に注口が貼り付けられる。内外面ともに黒釉が施釉される。類似したものが尾呂窯で出土している。

513～526は播鉢である。513～520は瀬戸・美濃系播鉢でTC-29。図下した大半のものは口縁部が体部外側に折り返され、体部に密着し、縁帯状を呈すものであるが、513のように完全には密着しないものもある。また519のように体部内側へ折り返され、緩やかな玉縁状を呈すものもある。519は他のTC-29より口径、器高ともに小法量のものである。なお注口部が残存するものをみると、口縁部内側を撫でて、幅2～3cmほどのごく浅い注口としているものが大半である。513は8条/1単位のやや粗い播目が14単位施される。底部内面の摩滅は著しいが、団子状トチ痕が4箇所ある。514は12条/1単位で13単位の播目が施される。口縁直下には溝状の浅いくぼみが巡る。底部内外面に団子状トチ痕が4箇所ある。515は11条1単位で10単位の播目が施される。514と同じく口縁直下には溝状の浅いくぼみが巡る。底部には団子状トチ痕が5箇所ある。豊付脇の釉は拭き取られるが、底部の釉は施釉されたままである。底部外周は使用により摩滅し、露胎となっている。516は12条1単位で13単位の播目が施される。底部釉は拭き取られ、団子状トチ痕が4箇所認められる。底部内面の摩滅が著しく、播目が消え、露胎となっている。517は13条1単位で13単位の播目が施される。底部釉は拭き取られ、団子状トチ痕が3箇所残存する。なお本製品は乾燥時に重ね積みされていたのか、底部に横位の播目が認められる。518は13条/1単位で11単位の播目が施される。口縁部内側の体部との境には稜を有す。底部から体部下半の釉は拭き取られる。底部内外面には団子状トチ痕が3箇所ある。なお本品は底部内面の播目が極度に摩滅し、露胎となっている。519は10条/1単位で11単位の播目が施される。内面の底部と体部の境付近に直重ね痕が認められる。底部から底部脇の釉は拭き取られる。520は13条/1単位で11単位の播目が施される。底部内外面に団子状トチ痕が4箇所ある。521は備前系でTE-29。いわゆる伊部手で、底部以外は内外面に鉄泥が塗布される。底部には窯印と思われるヘラ書きがある。播目は13条/1単位で密に施される。口縁部と体部の境付近の外面と、口唇部付近に輪状の直重ね痕が認められる。522は志戸呂系の播鉢でTF-29。胎土は淡橙色を呈し、白色粒子をはじめ混和物が多い。無釉で、内外面ナデ調整されるが、底部脇は強く撫でられ、高台状を呈す。播目は1本1本が太く、7条/1単位で施される。体部下端内面は摩滅している。523～526は丹波系でTK-29。523は7条/1単位で播目が施される。口縁部は内傾し、その内側直下は横位に強く撫でられる。524は口縁部から体部上半に鉄泥が流し掛けされる。播目は7条/1単位で29単位施される。内面の体部下端付近は窯詰め時に使用した陶片痕の凹凸が、底部外周には熔着痕が認められる。525は口縁部断面が三角形を呈し、口唇部直下外面に沈線が1本巡る。播目は8条/1単位で30単位施される。内面の体部下端には、窯詰め時に陶片を置いた部分に変色した箇所が5箇所認められる。526は体部外面のロクロ目が顕著であるが、斜めに擦痕が数箇所認められる。重ね積みした際の播目の痕跡か。播目は6条/1単位で施される。

527～529は油受け皿である。527は備前系でTE-40。いわゆる伊部手の製品で、受け部の付け根付近に円孔が3箇所ある。底部中央付近は鉄泥が拭き取られるが、その部分に輪状の熔着痕が認められる。見込み部分に淡黄褐色の付着物、受け部には灯心痕が認められる。528は志戸呂系でTF-40。大きく欠損しているが、受け部にはアーチ形と思われる穿孔が1箇所確認できる。内外面に527同様淡黄褐色の付着物、受け部には灯心痕が認められる。529は瀬戸・美濃系の高い受付の油受け皿でTC-40-e。皿形の口縁部は小さく内側に折り返される。底部付近以外錆釉が施釉されるが、受け



部の口唇付近は一部釉が拭き取られる。高台は碁笥底状に浅く削り込まれ、畳付には熔着痕が認められる。なお高台内には「地」の墨書がある。

530は瀬戸・美濃系の釜でTC-67。ロクロ成形で、胴部中程を外側へ引き出し、齔状にされる。外面には錆釉、口縁部から内面は鉄釉が施釉される。肩部の相対する位置に獣形の耳が貼り付けられる。

531は瀬戸・美濃系手焙りか風炉と思われる。ロクロ成形で、体部下端に開口部を有すが、欠損のため形状は不明である。外面にはやや厚く鉄釉が施釉されるが、内面は無釉である。なお欠損部の割れ口は二次調整され、丸味を帯びる。

532～545は蓋である。532～538、541、543、544は瀬戸・美濃系である。532、538、544は鉄釉、533、536は黒釉、534は鉄釉にうのふ釉流し掛け、535は透明釉、537灰釉、543は錆釉が施釉される。532、533、541は鉤状の摘みを有す壺・甕の蓋である。532は裏側に右回転の糸切り痕が残り、その部分に熔着痕が認められる。533の裏側はケズリ調整される。541の側面および裏側には熔着痕が認められる。534は竹を模した把手が付いた蓋物の蓋である。裏側はケズリ、ナデ調整され、蓋の外側より中央部がわずかに突出するように整形されている。建水の蓋か。535～538は水注の蓋である。543、544はともに裏側に右回転糸切り痕が残る落とし蓋である。壺・甕の蓋か。543の表側にはトチ痕が2箇所ある。539は京都・信楽系の灰釉蓋物の蓋か。540、542は肥前系の壺・甕の蓋と考えられる。540は灰釉、542は青緑釉が施釉される。540の受け部分は削り出しによるものである。542の裏側は周囲がナデ調整され、中央部分がわずかに突出するように整形される。545は志戸呂系の蓋物の蓋である。外面には鉄泥が塗布される。裏側の受け部内に輪状の熔着痕が認められる。

#### 土器 (546～663)

546～606はかわらけである。547、548、551、552、556、558、560～562、565～567、570、576～578、581～583、586、590、592、596、597、602、604～606は口縁部に灯心痕が認められる。549、553、560、562、564、567、568、574、576、579、581、587、590、594の底部は熱による赤化が認められる。546～557、561、563、565～568、571、584、601～603、605はDZ-2-aに分類される。549、567、571、584の底部には離れ糸切り痕がみられる。546はいわゆる金箔かわらけで、底部以外には内外面に金箔が貼られる。547は底部以外の内外面に漆状の暗茶褐色のものが塗布されている。552は還元焼成され、全体が黒色化している。畳付脇は強くナデ調整されている。553、554はやや器厚が厚く、口縁部外側に稜を有す。556は口縁部外側が強くなでられ、括れる。561は底部と体部の境目に段差を有す。566の胎土は白色を呈す。568は体部下端に括れを有す。外面全体にススが付着したような状態が認められる。602は内面に赤漆、底部も含め外面には黒漆が塗布されたものである。見込み中央部分には灯心立と思われる一辺1mmほどの角釘のようなものが飛び出しているが、底部は漆が塗布されている為、釘の状態が確認できない。603、605の皿は底部中央が二次穿孔されたものである。605は底部の穿孔に加え、口縁部一箇所を「U」字状に削り込み、灯心痕がその削り込み部分にのみ集中している様子が認められる。560、562、564、569、570、572～583、585～591、593～596、600、604、606はDZ-2-bに分類される。570は内面が黒色化し、外面は放射状に黒色化している。572は体部中程に括れを有す。574は見込みの凹凸が顕著で、底体間は強くナデ調整され、括れる。575は器厚が比較的薄い。579は底部のみでなく器面全体が赤化している。585は見込みの凹凸が比較的顕著である。587は糸切り痕跡が体部にまで一部およぶ。588は口唇部直下内側が窪む。591の胎土には

金雲母や白色粒子をやや多く含む。595、600は胎土が白色に近く、器厚も比較的薄いものである。604は底部中央が二次穿孔されるが、その周囲を除き、内面全体に灯心痕がおよぶ。606は内外面にやや厚く付着物がみられる。底部には別のかかわらけが貼り付いた状態で確認される。558、559、592、597、599はDZ-2-k。558の胎土は金雲母や白色砂粒をやや多く含む。559は体部中程に括れを有す。592の胎土は赤橙色を呈し、黒色粒子、白色粒子をやや多く含む、器厚も厚い。底体間に明瞭な稜を有す。597は体部中程がわずかに括れ、口縁部がやや肥厚する。599は体部がハの字形に開いて立ち上がる。底部外周は摩滅している。598はDZ-2。内面底部と体部の境が溝状に窪む。

612は鉢でDZ-5。胎土はにぶい赤褐色を呈し、金雲母や白色粒子などを比較的多く含む、やや粗いものである。内外面ともに横位にナデ調整され、受け部のような部分の直下には印花文が施される。なお外面に足状の突出部がわずかに認められる箇所もある。関西系火鉢といわれるものと類似する。灰器か。

613～617は火鉢（DZ-31）である。完全に足が残存しているものはないが、613～615は3足、617は4足を有すものであろう。613～615は口縁部に敲打痕が認められる。613は土師質丸火鉢でDZ-31-a。外面は丁寧ミガキ調整され、図のように刺突文が一定の間隔で施される。口縁部内外にススが付着する。614～616は軟質瓦質丸火鉢でDZ-31-b。615の外面は丁寧ミガキ調整される。617は軟質瓦質角火鉢でDZ-31-f。外側面はナデ、口縁部上面はミガキ調整される。

618～621は瓦燈でDZ-45に分類される。618は土師質瓦燈身の底部内面中央の皿形の部分と思われる。皿形の内面には「廿二」のヘラ書きがある。なおその欠損部分は平らに二次調整されている。619は瓦質の瓦燈蓋であるが、外面はミガキ調整され、内面下端は横位にナデ調整される。内面中程から上方には指頭圧痕が認められる。肩部に空気孔が3箇所、それと相対する位置に1箇所穿孔されている。620、621はともに瓦燈身であり、620は瓦質、621は土師質のものである。620の受け部分は欠損しているが舌状の突起を有していた痕がある。621の底部には横位の板目状の圧痕が認められる。

622～624はほうろくで、622、623は丸底でDZ-47-a、624は平底でDZ-47-bに分類される。622は内外面にススが付着するが、特に体部外面が顕著である。623の底部脇は幅広にケズリ調整される。ススは体部外面にわずかに認められる程度である。624は瓦質で、口唇部は平らにされ、口縁部はわずかに外反する。内面に幅広の紐状の耳が2箇所残る。底部を除き内外面ナデ調整されるが、外面には指頭圧痕のような凹凸が目立つ。底部は器面が縮れた状態を呈す。

625～637は塩壺（DZ-51）である。625～630は輪積成形、631～637は板作成形されたものである。625、626は一重枠「天下一堺ミなと藤左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-b。626の底部には板目状の圧痕が認められる。627は二重枠の「天下一堺ミなと藤左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-c。胎土に白色、黒色粒子をやや多く含む。628、629は「天下一御壺塩師堺見なと伊織」の刻印のあるものでDZ-51-d。629の体部外面には墨書で「天和二年 / 三月十日 / 本見那と / □」の墨書が認められる。この墨書から本遺構の廃絶年代の上限が天和2(1682)年と判断される。630は「御壺塩師堺湊伊織」の刻印のあるものでDZ-51-e。631、633～636は3ピースからなり、大枠の「泉州麻生」の刻印のあるものでDZ-51-iに分類される。いずれも内面には鱗状のやや粗い布目が顕著に認められるが、635は縫い目が2本認められるだけである。また底部中央に認められる粘土塊は概ね直径2cmほどであるが、635のそれは1.5cm程度の小さなものである。631の口縁部は著しく摩滅している。632、637は2ピースからなり、小枠の「泉州麻生」の刻印のあるものでDZ-51-hに分類される。これらは前述した635の内面と同じく縦位の縫い目のみ認められる。底部の粘土塊も

635 と同じく直径 1cm 前後の小さなものである。なお 637 は先端が方形のもので粘土塊を内面から押した痕跡が認められる。

638 ～ 650 は蓋である。638 ～ 647 は塩壺蓋で、638、639 は断面形がドーム形を呈すもので DZ-00-a、640 ～ 647 は断面形が凹形呈すもので DZ-00-c に分類される。640 ～ 647 の裏側には細かい布目痕が認められるが、644、645 は布目痕の上に沈線状の円圈がある。642、645 ～ 647 には墨書があるが、647 以外はごく薄く判然としない。647 は表側に「大坂 / 七大夫」「江州 / □屋木」、裏側には「太夫 / 大夫 / 天下一 / 大夫 / 人 / さつま」、側面には「天和貳年 / 五月吉日」の文字がある。前述した 629 の塩壺の墨書と同じく、本遺構の廃絶年代の上限を示すものである。648 ～ 650 は瓦質の火消壺の蓋である。

651、652 は器種不明の瓦質製品である。651 は長方形に鉤状の摘みを 1 つ有す。器面はナデ調整される。何かの蓋か。652 の表側は額縁状にされ、一段低い部分には印花文が施される。表側の縁部分や側面はミガキ調整、裏側はナデ調整される。裏側に受け状の立ち上がりが認められる。なお表側は二次的な火熱によるものか器面が一部赤化している。

658 は羽口である。二次的な火熱を受け、胎土が非常にもろい。端部にはスラグが付着する。

659 ～ 661 はいわゆる埴塼と思われる。全体にかなり焼締まった状態となり、外面は高熱を受けたため白色化している。手づくねであるが、規格品のように同法量、同器形のものである。専用器か。いずれも内面には付着物が認められる。

人形・玩具 (210、607 ～ 611、653 ～ 657、662 ～ 705)

210 はミニチュアの碗で、JB\_2001\_w に分類される。鋸歯文状の網目文様である。畳付は無釉である。607 ～ 611 はミニチュアの片口で、DQ\_2007\_W に分類される。607 ～ 609 は器高が高く緩やかに口縁部に向かうタイプで注口は二本の指で摘みあげ成形しており、指頭痕が確認される。注口部上面は工具で滑らかに調整している。610、611 は器高が低く胴部から急激に口縁部に向かうタイプで注口は工具で外反させ成形している。胎土は前記した 3 点より硬質感があり精緻である。653 ～ 657 はミニチュアの茶釜・羽釜で、DQ\_2011\_W に分類される。赤色粒子を多く含む胎土である。本遺構からは 12 点出土している。653 は茶釜形で、鏝部は意図的に打ち欠いたように欠けている。654 は底部が丸味のある羽釜である。外面口縁部下に二本沈線が観察される。655 は胴部の高い羽釜である。底部は高台状の作りで鏝との境に段差をもち、径は小さく板目が観察される。見込み部分は工具で抉るように広げ段差をもつ。口縁部から鏝上面にかけ黒褐色に塗彩されている。鏝裏面から底部に彩色はみられない。656 は羽釜である。外面口縁部下は沈線が観察される。鏝、胴部は黒褐色の彩色痕が観察される。657 は羽釜である。上部外面に沈線が二本観察される。5 点とも以前は陶磁器土器分類の DZ\_5\_c に分類されていたものである。

662 は西行で、DQ\_1109\_M2f に分類される。首部は別作りで差込み貼付している。雲母粉がみられ、背面の表現はされず平面的である。663 は手に鼓らしきものを持った人形で、DQ\_1100\_M2o に分類される。器壁が厚く硬質である。664 は西行で DQ\_1109\_M2f に分類される。胎土が橙色系と灰黒色の 2 点出土している。首部は別作りで差込み貼付している。雲母粉が顕著で硬質である。665 は猩々（しょうじょう）の人形と思われ、DQ\_1108\_M2f に分類される。本遺構から 2 点出土している。666 は振袖姿の小形の人形で、DQ\_1100\_M2f に分類される。全体に銀彩がみられる。667 は蹴鞠人形で、DQ\_1113\_M2f に分類される。鞠を掲げ、右足はつま先を蹴り上げた所作を表現している。所々に白色（胡粉）が観察される。硬質感があり厚み（奥行）の薄いものである。2 次的に被熱している。本遺構から 2 点出土している。668 は大黒で、DQ\_1103\_M2f に分類される。器壁は薄い



が彫りは深く硬質感がある。胡粉残存。2点出土している。669は恵比寿で、DD\_1102\_M2fに分類される。DD系の特徴の一つである、透明釉に緑釉を流し掛けした装飾を施したものである。670は天神で、DQ\_1101\_M2fに分類される。キラが顕著で、器壁は薄い、彫りは深く硬質感がある。後出する同類のものと異なり袍の袖は跳ね上がったものである。本遺構から6点出土している。671は力士が組み合っている人形である。胎土は2次的に被熱している為不明、DZ\_1111\_M2fに分類される。672は玩具の舟で、DD\_3010\_M1に分類される。船内の人物と道具は別作りで貼り付けている。濃い透明釉と緑釉が観察される。673は犬で、DQ\_1204\_M2fに分類される。背布を掛けたものである。本遺構から2点出土している。674は馬で、DD\_1205\_M2fに分類される。雲母粉が顕著で硬質感がある。675は岩に腰掛けた言わ猿である。DD\_1203\_M2fに分類される。透明釉に薄く鉄釉が確認される。676は木菟(みみずく)と思われる。DZ\_1217\_Hfに分類される。耳と鼻は摘み出し、目と口は工具で彫り描き表現し、羽毛は櫛状工具で表現している。677は獅子の頭で、DZ\_1303\_M2fに分類される。残存した首には接合を目的とした櫛目を所々に施している。678は大黒の面で、DQ\_1304\_M1oに分類される。雲母粉が顕著、耳に紐孔が観察される。丁寧な作りである。679は鍔絵染付の人形で、TD\_1100\_M2fに分類される。腰に鍵を下げた着流しの人物で、底面に「八丁」と墨書されている。680は下部が欠損しているが動物形の鶴とし、JA\_1200\_M2eに分類した。瑠璃祥瑞で全体が鮮やかな濃い青色である。翼や足は別作りで貼り付けている。681は唐人で、JB\_1100\_Hoに分類される。灯心押さえといわれている、鉄釉かき分けの人形である。頭部が型で、耳、鬚、腕、胴は手捻りで、背面に大きな孔を工具で抉り穿っている。底部は大きく開口している。本遺構から3点出土している。682～701はミニチュアの器物である。682は白磁碗でJB\_2001\_Wに分類される。貫入、虫喰いがみられ、体部の一部と高台は無釉である。683、684は白磁碗でJB\_2001\_Mに分類される。683は施釉がムラで、684は貫入、釉垂れが観られる。2点とも器壁厚は不均一である。高台は無釉で縮みが観察される。685、686は腰が張り、高台の高い白磁碗でJB\_2001\_Wに分類される。687～690は染付碗で、JB\_2001\_Wに分類される。687、688の口縁部付近と高台脇に圈線があり、暈付は釉を剥いでいる。687の暈付には熔着痕が確認される。688は内外面に草花文様を描いている。器壁は厚く高台はやや丸味があり無釉である。690は鋸歯文状の網目文様である。口縁下、高台脇に圈線を描き、暈付は釉を剥ぎ砂粒が観察される。691はTD\_2001\_W成形に分類される。2次的に被熱している。高台径は大きく精巧な作りである。692、693は2点とも2次的に被熱。692は上部が欠損しているため器種は明確でないが形状から皿と考えられ、DD\_2002\_Wに分類した。見込みに鉄釉で三つ葉の縁を描き、低火度釉を施し緑釉で葉を彩色している。削りだし高台で暈付の径は大きく高台内中央には渦巻き痕が観察される。693は碗で、DD\_2001\_Wに分類される。見込みには692同様の三つ葉文様を描いている。694は燭台か、JB\_2000\_Wに分類される。鏝部の一部に熔着痕が観察される。内面体部のみ釉を剥ぎ取っている。695は色絵の油壺で、JB\_2006\_Wに分類される。赤色で折枝梅を描いている。口縁部は小さく丸味を帯び外反し、腰は大きく張り出し器高は低く、高台から底部にかけ無釉である。696は染付の瓶で、JB\_2005\_Wに分類される。山に樹木を描いたもので底部は無釉である。697は瓶で、TE\_2005\_Wに分類される。小さいが火轆が観察される。698は播鉢で、DD\_2012\_Wに分類される。濃い黄色釉を施したものである。底部から胴部に立ち上がる際に沈線がみられる。699～701は播鉢で、TE\_2012\_Wに分類される。鳥の餌播り用の播鉢とも云われている。699の縁帯は内側に張り出し、外面には2本の沈線が観察される。播目は4～6条で不規則に入っている。700は縁帯外面に沈線2本が観察される。体部は丸味があり底部径は小さく、播目は10～15条である。見込み中央にはクロス状に入っている。699、701と比べ、最

も挿鉢の機能をもつ挿目である。701は、縁帯内面は僅かに内湾し沈線1本、外面の沈線は2本観察される。挿目は3～4条で短く蛇行して入っている。702は祠の屋根で、DQ\_3001\_Mに分類される。棟は手捻り作りで貼り付けている。裏面はきれいに調整し、中央に篋で抉り凹みを作っている。雲母粉は顕著で硬質である。703は土鈴で、DD\_4001\_Hに分類される。紐孔を捻りだし、鈴口はカットし開口している。本遺構から4点出土している。704は基石状製品で、DQ\_4004\_Hに分類される。705は円盤状製品で、DQ\_4000\_Mに分類される。厚さは不均一である。未掲載であるが柿右衛門様式の馬や獅子、鷹、鴛鴦、白磁の鳥などのJB系の人形片が多くみられる。

## (2) 瓦 (Ⅳ-134 図1～5)

1は鬼瓦である。家紋は型押しで梅鉢紋C。軒丸瓦当文様の梅鉢紋と大きさなどが類似している。背面は鬼瓦を銅線で屋根に固定させるための把手(龍頭)と把手を付けるためのカキヤブリが観られ、全面を指で成形した痕が残る。2は菊丸瓦。金箔瓦。瓦当文様は梅鉢紋である。梅鉢紋には範の同じところに付いた傷が残されており、D1層～D4層の遺構や包含層から出土している7点と同範であることがわかる(537図147～538図153)。3、4は軒丸瓦。瓦当文様は幼剣梅鉢紋C。筒部欠損。5は丸瓦。全長27.5cm。玉縁3.0cm。凹面にはヘラ磨きの痕が強く残る。

## (3) 木製品 (Ⅳ-135～231 図1～1029)

SK3は陶磁器の他にも木製品をはじめとする有機質の遺物が良好な保存状態で出土した。遺構内に水分を多く含む泥状の土を採土坑として掘削されたSK3の埋め立てに使用、出土遺物は遺構の埋め立てとともに廃棄されたと考えられる。SK3の廃絶後、SK3上面にローム土を盛土し、挿鉢状の庭園を造園した。地盤が軟弱ということもあり、大規模な建物は建設されなかった。庭園を撤去した後、挿鉢状の敷地を埋め立てたこともあり盛土は厚く、SK3の覆土は発掘調査を行うまで廃棄時の状態のまま維持された。木製品の種類は多岐にわたる。遺物として全てを取り上げることはできなかったが大量の鉋屑、建築材も廃棄されていた。SK3の掘削と廃絶、木製品の工具、建築材、金属製の工具の出土を含めこれらの遺物は邸内の造成、建築をうかがわせる。報告では1033点を図化した。出土した木製品は下駄、櫛、傘、漆椀(飯椀・汁椀・壺椀・平椀・各椀蓋・腰高など)、漆器容器、膳・折敷、箸、匙、刷毛、搗粉木、定規、篋、横槌・木槌、柄、鋏(風呂部)、砥石台、枳形製品、人形・玩具・ミニチュア)、木筒、曲物、不明製品、樽・桶・栓、建築部材・建築関連製品、仏具(位牌)、弓などで、飲食器、調理用具、調度品、工具、玩具などである。木製品の性質上、調度品などは使用時の状態をとどめていることはなく部品が出土するため、品名を確定できない木製品も多く図化した遺物にも品名、何に使用したか不明な製品も多く、これらは形状などから「～状製品」とした。

### 下駄 (1～144)

SK3から出土した下駄は最小個体数で531個体が出土した。そのうち分類可能なのは338個体である。このうち144個体を図化した。

1～78は連歯下駄で、1～56の台の平面形は角形、57～78の台の平面形は丸形である。1は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の後ろに穿たれている。2は歯の横断面は台形。後穴は後歯の後ろに穿たれている。3は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。4は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。右の足跡が残る。5は後歯の前後に穴が穿たれている。6は歯の横断面は台形。後歯の前に後穴が穿たれている。7は後歯の前に後穴が穿たれている。右の足跡が残る。8は歯の横断面は台形。後歯の前に後穴が穿たれている。9は歯の横断面は長方形。後歯の前に後穴

が穿たれている。10は後歯の後ろに後穴が穿たれている。11は歯の横断面は台形。後歯の前に後穴が穿たれている。足跡が残る。12は歯の横断面は台形。後歯の前に後穴が穿たれている。13は後歯の前に後穴が穿たれている。欠損した前歯と後歯に材を釘で固定し補修している。後歯の材は欠損、釘が残っている。14は後歯の後穴は前に穿たれている。足跡が残る。15は台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。16は後歯の前に後穴が穿たれている。17は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。18は後歯の前に後穴が穿たれている。19は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。20は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。21は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。左の足跡が残る。22は歯の横断面は台形。台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。23は歯の横断面は長方形。台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。24は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。欠損した前歯部分に材を釘で固定し補修している。後歯の材は欠損、釘が残っている。左の足跡が残る。25は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。右の足跡が残る。指跡と踵骨隆起間の長さは20cm。26は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。27は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。28は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。右の足跡が残る。29は後歯の前に後穴が穿たれている。欠損した前歯部分に材を釘で固定し補修している。前歯の材は欠損、釘が残っている。30は後歯の前に穿たれている。左の足跡、指から小指外転筋と小指屈筋から踵隆起の跡が残る。足跡の長さ20.4cm、幅は6.9cm。31は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。32は後穴は後歯の前に穿たれている。33は台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。34は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。35は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。36は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。左の足跡が残る。37は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。右の足跡が残る。38は後歯の後ろに後穴が穿たれている。39は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。40は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。41は後歯の前に後穴が穿たれている。使用により摩耗し台下面の歯の痕跡は確認できない。前歯部分の釘は歯の補修痕か、もしくは、使用により鼻緒を固定することができないため草履を固定した釘の可能性がある。42は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。43は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。44は後歯の前に後穴が穿たれている。45は歯の横断面は長方形。台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。46は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。47は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。48は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。左の足跡、指から小指外転筋と小指屈筋から踵隆起の跡が残る。足跡の長さは21.6cm、幅は7.4cm。49は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。50は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。51は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。左の足跡が残る。52は後穴は後歯の前に穿たれている。53は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。54は歯の横断面は台形。台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。55は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。56は歯の横断面は台形。後穴は後歯の後ろに穿たれている。足跡が残る。57は後歯の前に後穴が穿たれている。58は歯摩耗。下手の後ろ側が穿たれている。59は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。60は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。61は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。62は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。63は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。64は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。65は歯の横断面は台形。後穴は後歯



の前に穿たれている。66は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。67は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。台上面に釘が残る。釘は前壺周辺、側面、後部に残っている。草履を固定した釘と考えられる。68は歯の横断面は台形。台上面に印。後穴は後歯の前に穿たれている。左の足跡、指から小指外転筋と小指屈筋から踵隆起の跡が残る。足跡の長さは21.6cm、幅は7.4cm。69は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。70は歯の横断面は台形。後穴は後歯の後ろに穿たれている。足跡が残る。71、72は前壺と後穴は無く、前壺部分と後穴部分、後ろ部分に草履を固定したと考えられる釘と釘痕が残る。73は後歯の前に後穴が穿たれている。台上面に釘が残る。釘は前壺後ろ、後歯部分に残っている。草履を固定した釘と考えられる。74は台の中央部分、間重能の横断面は五角形。歯の横断面は台形。後穴は後歯の後ろに穿たれている。欠損した前歯は残った部分を鼻重能部分まで切取ってから材を釘で固定し補修している。75は76と対か。歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。76は歯の横断面は台形。台の中央部分、間重能の横断面は六角形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。77は台の中央部分、間重能の前よりの横断面は五角形で後ろ部分は斜めに切り取られている。歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。足跡が残る。78の間重能は山形に切り取られている。後穴は後歯の前に穿たれている。

79～84は刳下駄で、台の平面形は角形である。79は裏面の前歯部分をU字形に刳り抜き前壺を穿孔している。後歯は独立している。80は裏面の間重能部分を刳り抜き接地面としている。前歯の接地面、間重能、後歯の接地面はほぼ同間隔である。前歯部分は方形に刳り抜き前壺を穿孔している。81は裏面の間重能部分を刳り抜き接地面としている。前歯の接地面、間重能、後歯の接地面はほぼ同間隔である。前歯部分は方形に刳り抜き前壺を穿孔している。82は裏面の間重能部分を刳り抜き接地面としている。前歯の接地面、間重能、後歯の接地面はほぼ同間隔である。前歯部分は長方形に刳り抜き接地面は凹形になっている。前壺部分は方形に刳り抜き穿孔している。83は裏面の前歯部分を山形に刳り抜き前壺を穿孔している。後歯は独立している。84は裏面の間重能部分を刳り抜き前部分の接地面とし、後歯は連歯下駄と同じ歯を切り出している。

85～135は露卯下駄で、臍穴に嵌め込まれた歯が台部を貫通している。85～108の台の平面形は角形、109～135の台の平面形は丸形である。85は前歯、後歯の臍穴は1。歯は欠損している。86は前歯、後歯の臍穴は2。歯は残存している。足跡が残る。87は前後の歯は残存しているが台の底近くまで摩耗している。前歯、後歯の臍穴は1。足跡が残る。88は前歯の臍部分が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。足跡が残る。89は前歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。台上面に印。90は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。91は歯が欠損している。前歯、後歯の臍穴は2。92は歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。足跡が残る。93は後歯の臍部分が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。台上面に印。94は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。95は前後の歯が残存しているが台の底近くまで摩耗している。前歯、後歯の臍穴は2。右の足跡、指から小指外転筋と小指屈筋から踵隆起の跡が残る。足跡の長さは22.4cm、幅は7.2cm。96は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。台上面に印。97は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。98は後歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。左の足跡が残る。99は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。100は後歯が残存している。台上面に印。前歯、後歯の臍穴は2。101は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。足跡が残る。102は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。103は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。台上面に印。足跡が残る。104は前後の歯が残存している。前歯、後歯の臍穴は2。105は前後の歯が

残存している。前歯、後歯の齧穴は2。台上面に印。106は前歯が残存している。前歯、後歯の齧穴は2。後歯の齧穴は破損している。後歯は欠損しているが、補修に使用した釘が齧穴の左右に2本ずつ残る。107は前後の歯が残存している。前歯、後歯の齧穴は2。台上面に印。右の足跡、指から小指外転筋と小指屈筋から踵隆起の跡が残る。足跡の幅は7.3cm。108は前後の歯が残存している。前歯、後歯の齧穴は2。足跡が残る。109は後歯が残る。前歯、後歯の齧穴は1。110、112～116は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。111は前歯、後歯の齧穴は1。117は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。台裏面の鼻重能、間重能に鉋痕が残る。118は前歯が残存しているが前歯、後歯の底まで摩耗している。台の齧穴は1。119～123は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。124は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は2。125は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。126は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。台裏面の鼻重能、間重能に鉋痕が残る。127～129は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。130は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は3。前歯の齧穴は中央が方形で左右の齧穴は長方形である。131は前後の歯が残存している。前歯、後歯の齧穴は1。台裏面の鼻重能、間重能に鉋痕が残る。132は後歯が残存している。前歯、後歯の齧穴は3。133は歯が欠損している。前歯の齧穴は3、後歯の齧穴は2。134は歯が欠損している。前歯、後歯の齧穴は1。135は前歯が残存している。前歯の齧穴は4。後歯の齧穴は3。前歯の中央の2つの齧穴は長方形、左右の齧穴は方形、後歯の中央の齧穴は長方形、左右の齧穴は方形。

136～139は陰卯下駄で、台部に彫られた溝に歯が嵌め込まれている。136は台の平面形は角形。台上面に草鞋を固定したと考えられる釘と釘痕が残る。上面に印。137は台の平面形は丸形である。138は鼻緒を通した後歯の跡があることから陰卯下駄の後歯と考えられる。139は陰卯下駄の歯。歯を嵌込んだ跡が残る。

140～144は草履下駄などで、140は後歯部分が欠損している。草履を固定した釘と釘穴が残る。141は草履を張り付けた釘が4箇所に残っている。底は中央部が凹んでいる。142は板材の中心線に草履を固定した釘が残っている。143は草履を固定した釘は板材の外周部分に固定されている。144は草履を固定した釘は板材の外周部分に固定されている。

#### 櫛 (145～166)

145は上面形の一方が直線で片面が緩やかなカーブを描く。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が細かい。漆が塗布された資料で表面茶色、金色で竹を描く。146は上面形の一方が直線で片面が緩やかなカーブを描く。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。147は背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。148は上面形が緩やかに反っている。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は丸い。目が細かい。149は上面形が直線的。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。150は上面形が直線的。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で断面は楔形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。151は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。152は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。153は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。154は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の

上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。**155**は背がカーブを描く。上面形は両側に膨らむレンズ形。背の上面は丸く断面は滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。**156**、**157**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。**158**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆が塗布された資料で表面に黒色の漆が塗布されている。**159**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。**160**は上面形が緩やかに反っている。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。**161**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。**162**は上面形が緩やかに反っている。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。**163**、**164**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は丸く断面は逆滴形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。**165**は上面形が両側に膨らむレンズ形。背がカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が粗い。漆などの表面装飾は認められない。**166**は上面形が緩やかに反っている。背が緩やかなカーブを描く。背の上面は直線的で角は面取りが行われ、断面は楔形を呈する。目が細かい。漆などの表面装飾は認められない。

#### 傘 (167 ~ 174)

傘の部品、柄と轆轤が出土している。**167**は番傘の頭轆轤。変形が著しく横方向に潰れている。柄が内面に潰れた状態で残り、柄を固定するための臍穴がある。表面装飾は認められない。**168**は蛇の目傘の頭轆轤。変形が著しく横方向に潰れている。柄を固定するための臍穴がある。**169**は蛇の目傘の手前轆轤。変形が著しく横方向に潰れている。表面の木地に黒色の彩色、その上に茶褐色の半透明な膜が確認できる。**170**は蛇の目傘の手前轆轤。小骨を繋げる部分から下。2本の細い沈線は黒漆、その下は黒漆が塗られている。**171**は変形が著しく横方向に潰れている。全体に黒漆が塗られている。**172**は変形が著しく横方向に潰れている。小骨を繋げる部分から下。2本の細い沈線は黒漆、その下は黒漆が塗られている。**173**は傘の柄の石突部分で、竹の節部分に3つの円柱形の材を詰めて竹材を補強している。**174**は傘の柄部分。

#### 飯椀 (175 ~ 299)

大振りが高台の高い椀を飯碗とした (**175 ~ 229**)。 **175**は胴部が外側に開く。高台は高く高台内の挽きは浅い。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印。**176**は胴部が外側に開く。高台は高く高台内の挽きは浅い。内面は赤色、外面は黒色。高台外周に轆轤の跡がある。高台内に正方形の凹みがある。**177**は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは浅い。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印。**178**は高台が高く高台内の挽きは浅い。胴部、口縁部は欠損している。内外面は赤色、高台内黒色。高台内に赤色で印。**179**は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。赤色。**180**は胴部が外側に開く。高台は高く高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。内面は赤色、外面は黒色。**181**は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。**182**は胴部がやや外側に開く。高台は高く高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。内面は赤色、外面は黒色。**183**は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。**184**は高台が高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。**185**は胴部が外側に開く。高台は高く高台内の挽きは深い。高台内に印。赤色。**186**は胴部が丸形を呈する。



高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。187は胴部が直線的に立ち上がる。高台は高く高台内の挽きは浅い。赤色。188は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。高台内に赤色で印。189は胴部が丸形を呈する。高台は高く高台内の挽きは深い。内外面は赤色、高台内黒色。高台内に黒色で印「うつみ」。190は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に柘文様が3単位で描かれる。191は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。欠損はない。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に植物文様が3単位で描かれる。192は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。赤色。外面に灰色で丸に植物文様が3単位で描かれる。193は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に橋文様が3単位で描かれる。194は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に鶴文様が3単位で描かれる。195は腰部が張り胴部は開き直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に井、花文様が3単位で描かれる。196は腰部が張り胴部は開き直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰褐色で丸に幾何学文様、花文様が3単位で描かれる。197は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に丸に籠目花卉文様が3単位で描かれる。198は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深く轆轤痕が残る。内面は赤色、外面は黒色。外面に丸に笹文様。残存部が少なく単位は不明。199は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に植物文様が3単位で描かれる。200は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に籠目花卉文様が3単位で描かれる。201は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に松、植物、鶴が描かれる。高台内に印。202は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で海老が3単位で描かれる。203は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。黒色。外面に○が描かれる。破損のため単位は不明。204は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。赤色。外面に黒色で唐草文が描かれる。205は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は茶色。外面に灰褐色で唐草文が描かれる。206は同様の出土遺物から、腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がると推定される。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で垣根、桜が描かれる。207は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。赤色。外面に黒色で垣根、桜が描かれる。IV-168図355と組み。208は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。高台内赤色で印。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色・黄褐色・金色で植物が描かれる。209は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰褐色で蔦が描かれる。210は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で菖蒲が描かれる。211は腰部が胴部中程にある。高台内の挽きは深い。黒色。212は腰部が胴部中程にある。高台は低く高台内の挽きは深い。口縁部は玉縁。赤色。213は腰部が胴部中程にある。高台は低く高台内の挽きは深い。残存部から形状を復元実測した。黒色。口唇部は赤色。214は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。215は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に植物が描かれる。残存部から形状を復元実測した。216は器厚

が薄い資料である。内面は赤色、外面は黒色。217は腰部が張り胴部は開きながら直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。218は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は黒色、外面は赤色。外面に赤色で丸に松が3単位で描かれる。219は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に松が3単位で描かれる。220は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は黒色、外面は赤色。外面に赤色で楓が3単位で描かれる。221は腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。外面に灰色で雪暗が描かれる。高台内に黒色で印。222は腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。223は腰部を面取り。胴部はやや丸味を帯びて立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。224は腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。高台は高く高台内の挽きは深い。高台内に黒色で印。茶色。口唇部と畳付は黒色。225は腰部を面取り。胴部はやや丸味を帯びて立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。226は腰部を面取り。直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。227は腰部を面取り。直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は黒色、外面は赤色。228は腰部を面取り。直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。229は腰部を面取り。直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は黒色、外面は赤色。

汁椀 (230～281)

小振りの椀を汁椀にした。230、231は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。232は腰が張り胴部は直線的に開く。黒色。口唇部は玉縁で赤色。畳付は赤色。口縁部、胴部に欠損が見られるがほぼ完形で残存部から実測図を作成した。233は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。内面は赤色、外面は黒色。234は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて開く。内面は赤色、外面は黒色。235は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。赤色。畳付は黒色。口縁部は欠損しているが口縁部も黒色と考えられる。236は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。内面は赤色、外面は黒色。237は胴部の張りは少なく、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。238は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。赤色。口唇部は玉縁で黒色。畳付は黒色。239は腰部が張り、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。口縁部、胴部に欠損が見られるがほぼ完形で残存部から実測図を作成した。240は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。内面は赤色、外面は黒色。241は腰部が張り、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。242は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて開く。黒色。口唇部は赤色。243は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて開く。黒色。口唇部は赤色。244は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。赤色。残存部から形状を復元実測した。245は胴部の張りは少なく、胴部は直線的に開く。口唇部は玉縁で黒色。赤色。246は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて開く。黒色。247は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。赤色、高台内は黒色。高台内印、赤色。248は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。赤色、高台内は黒色。高台内印、赤色。249は腰部の張りは少なく、胴部は丸味を帯びて開く。赤色、高台内は黒色。高台内印、赤色。250は腰部が張り、胴部はほぼ垂直に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印。251は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色、高台内は黒色。残存部から形状を復元実測した。252は腰部が張り、胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に隅立て四つ目文様が3単位で描かれる。残存部から形状を復元実測した。253は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に三つ鱗文様が3単位で描かれる。残存部から形状を復元実測した。254は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。

外面に黄褐色、赤色で丸に釘抜文様が2単位で描かれる。255は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に文様が灰色で3単位で描かれる。256は腰部が張り、胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に三つ鱗文様が3単位で描かれる。257は腰部が張り、胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に柘文様が3単位で描かれる。残存部から形状を復元実測した。258は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に植物文文様が3単位で描かれる。259は腰部が張り、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に對の扇文様が3単位で描かれる。260は腰部が張り、胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に籠目三つ巴文様が3単位で描かれる。261は腰部が張り、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で梅鉢文様が3単位で描かれる。262は腰部の張りは少なく、胴部は直線的に開く。茶色。赤色と金色で幾何学文様が描かれる。263は腰部の張りは少なく、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。264は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で植物、流水が描かれる。残存部から形状を復元実測した。265は腰部が張り、胴部は直線的に開く。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で花卉が描かれる。266は腰部が丸く、胴部は丸味を帯びて立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で網目文が描かれる。267は腰部が張り、胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は茶色。外面に黄褐色で楓、松葉が描かれる。268は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。赤色。269は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。270は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。茶色、口唇部と畳付は黒色。271は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。赤色。272は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。赤色。口唇部と畳付は黒色。完形だが変形が著しい。273は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。赤色。274は腰部を面取り、稜線は明確でない。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。赤色。口唇部は黒色。275は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で「沢」の印。276は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。高台内に赤色で「×」の印。度の木炭粉が混和している。277は腰部が一直線になる、いわゆる「一文字」。胴部はやや丸味を帯びて開く。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。残存部から形状を復元実測した。278は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。口唇部は黄褐色。外面に黄褐色で市松文様、水平直線が描かれる。279は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。茶色。外面に黄褐色で垣根、花卉が2単位で描かれる。280は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は玉縁。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。外面に赤色で垣根、花卉が2単位で描かれる。281は腰部を面取り、稜線は明確。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低く高台内の挽きは深い。黒色。外面に金色で菊が描かれる。

#### 壺椀 (282～289)

筒形の椀で胴部が垂直に立ち上がる椀を壺椀とした(282～289)。胴部にタガがある資料と無い資料に分かれる。282は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。内面は赤色、外面は緑色。283は高台脇から腰部にかけて面取



りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。赤色、口唇部、高台内は黒色。284は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。内面は赤色、外面は黒色。285は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。茶色。高台内に印。286は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で文様。287は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。黒色。外面に灰色で雪輪を描く。288、289は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる筒形の椀。胴部に帯状の加飾。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で松、植物、鶴、亀を描く。

#### 平椀 (290～296)

壺椀同様、胴部が垂直に立ち上がる。口径に対して高さが低い。胴部にタガがある資料と無い資料に分かれる。290は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。胴部に帯状の加飾。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に三つ星文様が3単位で描かれる。291は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。胴部に帯状の加飾。赤色。畳付は黒色。292は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。胴部に帯状の加飾。黒色。293は高台脇から腰部にかけて面取りされ二段の稜があり、胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。胴部に帯状の加飾。赤色。口唇部、高台内黒色。高台内印の傷。294は高台脇から腰部にかけて面取りされる。胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀を描く。295は高台脇から腰部にかけて面取りされる。胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。296は高台脇から腰部にかけて面取りされる。胴部はほぼ垂直に立ち上がる浅い椀。黒色。外面に灰褐色で植物が描かれる。

#### 腰高 (297～300)

高い高台に皿状の胴部がつく。297は浅い皿状の胴部と高い高台からなる。高台は皿部分より高さがある。高台内に轆轤痕が残る。内面は赤色、外面は黒色。外面に茶褐色で松、植物、鶴、亀が描かれる。298は浅い皿状の胴部は欠損している。高台内の挽きは他の資料より浅い。内面は赤色、外面は黒色。299は浅い皿状の胴部と高い高台からなる。高台は皿部分より高さがある。高台内は他の資料に比べ深く削られている。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰褐色で松、植物、鶴、亀が描かれる。300は浅い皿状の胴部と高い高台からなる。高台は皿部分より高さがある。高台内は他の資料に比べ深く削られている。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。

#### 皿もしくは鉢 (301・302)

301は高台脇から腰部にかけて面取りされる。口縁部は外反する。赤色。残存部から形状を復元実測した。302は高台部分のみの出土。高台の幅が広く皿もしくは鉢と考えられる。内面は赤色、外面は黒色。

#### 杯 (303～311)

器厚は薄く、ほとんどの資料で内面に文様が描かれる。303は胴部が緩やかに開き、口縁部は内湾する。高台内の挽きは直線的。赤色。残存部から復元実測した。304～306は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きはレンズ状。赤色。残存部から復元実測した。307は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きは直線的。赤色。残存部から復元

実測した。308は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きは直線的。赤色。内面に金色で船、海が描かれる。残存部から復元実測した。309は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きは直線的。赤色。内面に金色で月、秋草が描かれる。310は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きはレンズ状。赤色。内面に金色で植物が描かれる。311は胴部が浅く、胴部から口縁にかけて直線的に開く。高台内の挽きは直線的。赤色。口唇部金色。内外面に金色で牡丹が描かれる。

#### 飯椀・汁椀蓋 (312～378)

飯椀と汁椀の蓋である。口径と器高から飯椀と汁椀の蓋を明確に区別することができない。312は腰部が丸く胴部は外側に開く。内面は赤色、外面は黒色。313は腰部が張り胴部は緩やかに開く。内面は赤色、外面は黒色。314は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面赤色、外面黒色、口唇部と畳付は黒色。315、317は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面赤色、外面黒色。318は腰部が丸く胴部は外側に開く。赤色。口唇部は黒色。319は腰部が張る。内面は赤色、外面は黒色。320～322は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面赤色、外面黒色。323は腰部が丸く胴部は緩やかに立ち上がる。赤色、口唇部、畳付は黒色。324は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる赤色、口縁部は黒色。325は腰部が丸く胴部は外側に開く。内面は赤色、外面は黒色、摘み内は黒色。326は腰部が丸く胴部は外側に開く。内面は赤色、外面は黒色。327は腰部が張り胴部は緩やかに開く。口縁部は玉縁。赤色。摘み内に黒色で「七」。328は腰部が張り胴部は緩やかに開く。口縁部は玉縁。赤色。摘み内に黒色で印。329は腰部が丸く胴部は緩やかに立ち上がる。赤色。摘み内に黒色で「七八」。330は腰部が丸く胴部は外側に開く。口縁部は玉縁。赤色。摘み内に黒色で印。331は腰部は丸く胴部は緩やかに立ち上がる。赤色、摘み内は黒色。摘み内に赤色で印。332は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。赤色、摘み内は黒色。摘み内は赤色で印。333は変形が著しい。腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。赤色、摘み内は黒色。摘み内は赤色で印。334は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に三つ巴文が3単位で描かれる。摘み内に黄褐色で草文が描かれる。335は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で花卉が3単位で描かれる。摘み内に赤色で草文が描かれる。336は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に井桁、植物文が描かれる。摘み内に赤色で草文が3単位で描かれる。337は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に井桁、植物文が3単位で描かれる。摘み内に黄褐色で草文が描かれる。338は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に笹文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。339は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に桔梗文が3単位で描かれる。摘み内に赤色で草文が描かれる。340は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に蕪文が3単位で描かれる。摘み内に黄褐色で草文が描かれる。341は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に竹文が3単位で描かれる。摘み内に黄褐色で草文が描かれる。342は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。赤色。外面に灰色で丸に笹文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。343は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。344は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に違い鷹の羽文が3単位で描かれる。摘み内に赤色で草文が描かれる。345は腰部が丸く胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に三つ巴文が3単位で描かれる。摘み内に赤色

で草文が描かれる。346 は腰部が丸く胴部は緩やかに立ち上がる。赤色。外面に灰色で丸に桐文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。347 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に文が3単位で描かれる。摘み内に赤色で草文が描かれる。348 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。349 は腰が張り胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に笹文が3単位で描かれる。摘み内に灰色で草文が描かれる。350 は胴部のみ。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に梅鉢文が描かれる。351 は腰部が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で梅鉢文が3単位で描かれる。赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。352 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に茶褐色で植物が描かれる。摘み内に茶褐色で草文が描かれる。353 は腰が丸く胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。摘み内に赤色で草文が描かれる。354 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に茶褐色で松、植物、鶴、亀が描かれる。摘み内に茶褐色で丸に草文が描かれる。355 は腰が張り胴部は直線的に開く。赤色。外面に黒色で垣根、花卉が描かれる。摘み内に黒色で丸に草文が描かれる。356 は腰が張り胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で楓が描かれる。摘み内に赤色で丸に草文が描かれる。357 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松が描かれる。摘み内に赤色で亀が描かれる。358 は腰が張り胴部は緩やかに開く。内面は赤色、外面は黒色。胴部に黄褐色で植物が描かれる。摘み内に黄褐色で丸に草文が描かれる。359 は腰が張り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で松葉、花卉が描かれる。摘み内に黄褐色で丸に草文が描かれる。360 は胴部が浅く胴部から口縁にかけて直線的に開く。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。口唇部と畳付は黒色。外面に茶色で松葉が2単位で描かれる。摘み内は茶色で松葉が描かれる。361 は腰が張り胴部は緩やかに立ち上がる。口縁部は玉縁。黒色。外面に黒色で植物文が描かれる。摘み内に植物が赤色、灰色で描かれる。362 は腰が張り胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。外面に黒色で垣根、花卉が描かれる。摘み内に黒色で花卉が描かれる。363 は腰部を面取り胴部は緩やかに立ち上がる。赤色。口唇部、畳付は黒色。364 は腰部を面取り胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は茶色。口唇部、畳付は黒色。365 は腰部を面取り胴部は緩やかに立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は茶色。口唇部、畳付は黒色。366 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は茶色。口唇部、畳付は黒色。367 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。口唇部、畳付は黒色。368 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。赤色。口唇部、畳付は黒色。369 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。黒色。370 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きはレンズ状。赤色。口唇部、畳付けは黒色。371 は高台脇が一直線になるいわゆる「一文字」。胴部は直線的に立ち上がる。高台内の挽きはレンズ状。黒色。372 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。口唇部は黒色。373 は腰部を面取り胴部は直線的に開く。黒色。内面、外面、摘み内に灰色で花卉が描かれる。374 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。黒色。内面に赤色で竹、摘み内に植物が描かれる。375 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。茶色。外面に黄褐色で垣根、花卉、摘み内に茶褐色で花卉が描かれる。376 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。黒色。内外面に赤色で輪、花卉が描かれる。摘み内に赤色で花卉が描かれる。377 は腰部を面取り胴部は直線的に立ち上がる。黒色。外面に灰色で帯状の市松文様が描かれる。



摘み内に灰色で文が描かれる。378は腰部を面取り胴部は直線的に開く。茶色。外面と摘み内に黄褐色で楓が描かれる。

#### 壺椀・平椀蓋 (379～387)

被せ蓋で壺椀、平椀の蓋である。椀の大きさによっては、平椀蓋が壺椀、壺椀蓋が平椀蓋という場合もある。379は被せ蓋。壺椀の蓋と考えられる。黒色。外面、内面、摘み内に灰色で雪が描かれる。380は被せ蓋。壺椀の蓋と考えられる。赤色。口唇、畳付は黒色。381は被せ蓋。壺椀の蓋と考えられる。黒色。382は被せ蓋。平椀の蓋と考えられる。内面は赤色、外面は黒色。外面は灰色で松、植物、鶴、亀が描かれる。高台内は灰色で草文が描かれる。383は被せ蓋。平椀の蓋と考えられる。内面は赤色、外面は茶色。384は被せ蓋。平椀の蓋と考えられる。茶色。385は被せ蓋。平椀の蓋と考えられる。内面は赤色、外面は黒色。386は被せ蓋。平椀の蓋と考えられる。黒色。387は被せ蓋のミニチュア。赤色。端部黄色。

#### 文様等のある漆椀 (388～467)

変形のため図化できない資料のうち、文様、文字が記されている資料を中心に掲載した。

388は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。389、390は飯椀。高台は高く高台内の挽きは浅い。高台に轆轤痕が残る。内面は赤色、外面は黒色。391は飯椀。高台は高く高台内の挽きは浅い。赤色。高台内に黒色で印。392は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色、高台内は黒色。高台内に赤色で印。393は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。高台内に黒色で「平」。394は飯椀。高台は高く高台内の挽きは浅い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に文。395は飯椀。腰部は面取りされている。高台は高く高台内の挽きは深い。黒色。高台内に赤色で印「木村」。396は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に文が3単位で描かれる。397、398は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。399は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に文が3単位で描かれる。400は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に終文が3単位で描かれる。401は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。高台内に黒色で印。402は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。赤色。高台内に黒色で印「清」。403は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印。404は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で楓。405は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。406は飯椀。高台は高く高台内の挽きは深い。内面は赤色、外面は黒色。407は椀。腰部を面取り。高台は低い。直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。408は椀。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低い。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。409は飯椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で桜。410は飯椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に竹文。411は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で菊、高台内に赤色で草文が描かれる。412は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で菊が描かれる。413は椀。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。高台は低い。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。414は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。415は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面高台内に赤色で雪輪が描かれる。416は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に竹文が描かれる。417は椀。赤色。418は椀。高台は低い。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印「丸

に上」が描かれる。419は椀。高台は低い。赤色。高台内に黒色で印。420は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で松、植物、鶴、亀が描かれる。421は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に松文が3単位で描かれる。422は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に植物文が3単位で描かれる。423は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に隅立て四つ目文が描かれる。424は椀。高台は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色で丸に文が描かれる。425は椀。高台は低い。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。黒色。外面に赤色で丸に三つ柏文が描かれる。426は高台が低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に文が描かれる。427は椀。高台は低い。腰部を面取り。内面は赤色、外面は緑色、高台内は黒色。428は椀。高台は低い。赤色。429は椀。高台は低い。赤色。430は椀。高台は低い。黒色。高台に帯文が描かれる。431は椀。黒色。外面に赤色で竹が描かれる。432は椀。内面は赤色、外面は黒色。高台内に赤色で印。433、434は椀。赤色。高台内に黒色で印。435は椀。内面は赤色、外面は黒色。436は椀。赤色、高台内は黒色。437は高台内を放射状に8分割する線が刃物でつけられている。438は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で丸に文。摘み内に草文が描かれる。439は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で丸に蝶、摘み内に草文が描かれる。440は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。外面に黄褐色・赤色で丸に三つ鱗、摘み内に赤色で草文が描かれる。441は椀蓋。赤色。外面に灰色で丸に松、摘み内に灰色で草文が描かれる。442は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で唐草、摘み内に赤色で草文が描かれる。443は椀蓋。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。444は椀蓋。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。黒色。外面に灰色・赤色で垣根、花卉、摘み内に灰色・赤色で花卉が描かれる。445は椀蓋。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。黒色。外面に赤色で雪輪、摘み内に赤色で雪輪が描かれる。446は椀蓋。摘み高は低い。腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。447は椀蓋。摘み高は低い。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。口縁部・畳付は黒色。448は椀蓋。摘み高は低い。449は椀蓋。摘み高は低い。赤色、摘み内は黒色。赤色で印。450は椀蓋。摘み基部から胴部が一直線になるいわゆる「一文字」。胴部は直線的に立ち上がる。摘み高は低い。黒色。外面に黄褐色で楓、摘み内に黄褐色に楓が描かれる。451は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。胴部に赤色で丸に片喰、摘み内に赤色で草文が描かれる。452は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。外面に赤色で雁が描かれる。453は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。胴部に赤色で桐が描かれる。454は椀蓋。摘み基部から胴部が一直線になるいわゆる「一文字」。胴部は直線的に立ち上がる。摘み高は低い。内面は赤色、外面は黒色。455は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。摘み内に赤色で印。456は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。摘み内に赤色で印「か」。457は腰部を面取り。胴部は直線的に立ち上がる。摘み高は低い。内面は赤色、外面は緑色、摘み内は黒色。458は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。459は椀蓋。摘み基部から胴部が一直線になるいわゆる「一文字」。胴部は直線的に立ち上がる。摘み高は低い。内面は赤色、外面は黒色。外面に灰色で七宝文が描かれる。460は椀蓋。内面は赤色、外面は黒色。461は椀蓋。赤色、摘み内は黒色。摘み内に赤色で印。462は椀蓋。赤色。口唇部、畳付は黒色。463は椀蓋。赤色、摘み内は黒色。摘み内に赤色で印。464は椀蓋。赤色、摘み内は黒色。摘み内に赤色で印。465は飯椀。内面は赤色、外面は黒色。466は椀蓋。赤色。摘み内に黒色で印。467は椀。赤色。畳付は黒色。

漆容器 (468～484)

468は鉢形容器。高台は認められない。平底。内面は茶褐色、外面は茶褐色。乾燥した塗膜は脆い。

底径は推定で 19.8cm。469 は鉢形容器。口縁部、胴部のみ出土で底部は不明。外面に 3 本の稜線がある。内面は赤色、外面は黒色。470 は耳盥の取手部分。取手は胴部に溝を彫りはめ込んでいる。木地に黒色の彩色があり、その上に茶褐色の漆を塗布している。471 は鉢形容器。内面は赤色、外面は黒色。外面に蒔絵が施されている。赤色で植物を描いた上に金色で蒔絵を施している。472 は棗の身。黒色。内外面とも漆の塗膜に光沢がある。胴部から底部にかけてはざらついた表面に仕上げられている。口縁部と蓋受けの表面は平滑に仕上げられている。473 は棗の身。漆塗りなどの表面装飾なし。474 は容器の身。底部から胴部には水平の凹みが 6 本彫られている。内面に漆などの装飾は認められない。外面と底面に黒色の塗膜が認められるが脆い。475 は棗の身。木地に灰褐色の下地が塗布されている。内面は茶褐色の塗膜が残っている。外面は塗膜が失われている、底部は黒色の塗膜が残っている。476 は容器。竹を横方向に切断し、口縁部と底部を面取りし丸く仕上げている。漆塗りなどの表面装飾はない。477 は容器の一部か。表面は黒色。木地の上に下地の塗布が確認できる。残存部分の最大径は 7.7cm、厚さは 2.1cm。478 は容器の蓋。上面は轆轤で細かな筋が彫られている。茶褐色。木地に灰色と黒色の下地の塗布が確認できる。479 は容器の蓋。側面には轆轤で細かな筋が彫られている。茶褐色。480 は容器の身。側面は黒色、内面は赤色、底部は黒色。外面に赤色で唐草文が描かれ、その上に金色で蒔絵が施される。481 は棗の蓋。内面は赤色、外面は黒色。上面は半球状。482 は棗の蓋。内面は茶色、外面は黒色。内外面とも漆の塗膜に光沢がある。483 は棗の蓋。484 は棗の蓋。上面は水平で胴部は垂直に立ち上がる。内面は黒色、外面は赤色。

#### 膳・折敷 (485 ~ 499)

485 は膳の底板。側板は失われている。内面は赤色、外面は黒色。外面中央に赤色で「○○○○北日野屋」。486 は膳の底板。側板、脚は失われている。足の接続部分が残っている。底板の四隅を切断した不等辺の八角形。内面は赤色、外面は黒色。487 は膳の底板。底板の四隅を切断した不等辺の八角形の膳。側板、脚は失われているが足の接続部分が残っている。内面は赤色、外面は黒色。488 は蝶足膳。側板は残存、脚部は失われている。底板の隅は谷形に切断されている。側板も底板の隅に合わせた加工が施されている。側板の内側は垂直ではなく曲面を描く。黒色、底板の小口と側板の上端部は赤色。489 は胡桃足膳の底板。側板は失われている。底部に胡桃の殻を接着した円形の脚部の痕跡が残る。接着剤は灰褐色を呈する。底板の四隅は面取りされ丸く仕上げられている。茶色。490 は膳の底板。側板、脚は失われている。内面に漆が付着している。内面は赤色、外面は黒色。491 は膳の側板。隅の部分で四隅を丸く仕上げた膳。赤色、側板の上端部は黒色。492 は膳の脚。平面形は五角形。外面は黒色。底板との接続部分に接着剤が付着している。493 は膳の脚。L 字形の板二枚を組み合わせ一つの脚にしている。外面は黒色。494 ~ 497 は折敷の底板。底板の四隅を切断した不等辺の八角形。側板を固定した釘跡が残る。498、499 は折敷の脚。逆凹形を呈する。底板との接続のための木釘痕。脚同士を接続する棒を接続した孔がある。

#### 箱 (500 ~ 502)

500 は箱の蓋。底板の四隅を切断した不等辺の八角形。上面は面取りがされ曲面に仕上げられている。黒色。501 は箱の身。側板と重ねた重箱を固定するための材が底に残る。底板の四隅を切断した不等辺の八角形。上面角は面取りが行われている。黒色。502 は箱の身。底板の四隅を切断した不等辺の八角形。重ねた重箱を固定するための材が底に残る。内面は黒色、外面は赤色。

#### 杓子・匙 (503 ~ 516)

503 は杓子。皿の先端部が欠損している皿部の内面は赤色、皿部の縁から外側、柄は茶色。木地に暗褐色の下地が確認できる。504 は杓子。皿の先端部と皿の側面が欠損している。茶色。木地に



褐色の下地が確認できる。505は杓子。皿の先端部が欠損している。茶色。木地に灰褐色の下地が確認できる。506、507は杓子。皿の先端部と皿の側面、柄が欠損している。茶色。木地に黒色の下地が確認できる。508は杓子。皿の先端と柄が欠損している。皿部の内面は赤色、皿部の縁から外側、柄は茶色。木地に褐色の下地が確認できる。外面に赤色で植物文。509は杓子。皿の先端部と柄が欠損している。皿部の内面と皿部の外側から柄の裏面は赤色、皿部の縁から柄の上面は黒色。木地に褐色の下地が確認できる。510は杓子。柄が欠損している。表面に漆などの表面装飾は認められない。511は杓子。皿の先端部と柄が欠損している。赤色。木地に黒色の下地が確認できる。512、513は匙。先端部と皿部の側面が欠損している。竹の節を生かしてつくられており、柄の皿部近くの節から先の柄上面と皿部内面は赤色、他の部分は茶色。514は匙。赤色。木地に褐色の下地が確認できる。515は匙。柄が欠損している。表面に漆などの装飾は認められない。516は匙。ほぼ完形。皿部は深く皿部外面に工具痕が残る。

#### 箸 (517～530)

517は両口箸。両端が削られた両口箸。断面は丸形。表面に漆などの表面装飾は認められない。518は片口箸。一端が尖った片口箸。断面は楕円形。表面に漆などの表面装飾は認められない。519は棒状の箸。端をとがらせる加工は施されていない。断面は円形、表面に漆などの表面装飾は認められない。520は片口箸。一端が尖った片口箸。断面は長方形。表面に漆などの表面装飾は認められない。521は棒状の箸。端をとがらせる加工は施されていない。断面は八角形。表面に漆などの表面装飾は認められない。522は片口箸。一端が尖った片口箸。断面は多角形。表面に漆などの表面装飾は認められない。523は菜箸。一端が欠損しているが、太さと残存部の長さから菜箸とした。欠損部は残存部に比べ細く一端が尖っていると考えられる。断面は長方形。表面に漆などの表面装飾は認められない。524は菜箸。一端が欠損しているが、太さと残存部の長さから菜箸とした。欠損部は残存部に比べ細く一端が尖っていると考えられる。断面は多角形。表面に漆などの表面装飾は認められない。525は菜箸。一端が尖っている。断面は多角形。表面に漆などの表面装飾は認められない。526は菜箸。一端が尖っている。断面は不整形。表面に漆などの表面装飾は認められない。527は菜箸。一端が欠損している。断面は楕円形。対の箸を紐で繋げるための穴があげられている。表面に漆などの表面装飾は認められない。528は塗箸。両端が欠損している。断面は変形のため楕円形となっている。表面は赤色。529は塗箸。両端が欠損している。断面は変形のため楕円形となっている。表面は赤色と黄褐色の塗り分け。530は塗箸。両端が欠損している。断面は変形のため楕円形となっている。表面は赤色。

#### 楊枝状製品 (531～534)

531～534は楊枝状製品。一端が尖っている。断面は長方形。

#### 搦粉木 (535・536)

535は搦粉木。先端部が丸く、上端部は欠損しているが壁などに引っ掛けるための紐を縛る穴が開けられていたと考えられる。536は搦粉木。先端部が丸い。

#### 刷毛 (537～556)

一枚の板を刷毛の形状に成形し、先端部を割って毛を挟み糸で固定している。毛を固定した糸は腐食している。537～539、542、545～547は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が弧を描く。柄に穿孔。540は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が弧を描く。柄に穿孔。表面に黒褐色の付着物。541は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が弧を描く。柄に穿孔、印「中」。表面に黒褐色の付着物。543は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が弧を描く。柄に穿孔。表面に黒褐色の付着物。544は先端部の幅

に比べ柄の幅が広く肩が弧を描く。柄に穿孔。表面に黒褐色の付着物。肩部分が焼成し、炭化している。548は先端部の幅に比べ柄の幅が狭く肩が弧を描く。柄に穿孔。表面に黒褐色の付着物。549は先端部の幅に比べ柄の幅が狭く肩がS字状で表面に刃物による2本の長方形の印がある。柄に穿孔。550は幅が狭く肩が撫で肩。551は先端部の幅に比べ柄の幅が狭く肩が撫で肩。柄にあたる部分の長さが肩から下に比べ短い。柄に穿孔。552は肩が撫で肩。表面に黒褐色の付着物。553は肩が撫で肩。554は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が撫で肩。柄にあたる部分の長さが肩から下に比べ短い。柄に穿孔。555は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が撫で肩。柄にあたる部分の長さが肩から下に比べ短い。柄に穿孔。表面に黒褐色の付着物。556は先端部の幅に比べ柄の幅が広く肩が張る。柄にあたる部分の長さが肩から下に比べ長い。

#### 篋状製品・杓子状製品 (557～590)

板材を加工した篋で柄と刃部からなる。刃のある先端部は緩やかな曲線を描き膨らむ。刃の逆側は先端部から柄の端までのラインは一直線。刃の下端から柄につながるラインは直線を呈す資料、やや膨らんで柄につながる資料、弧を描き柄につながる資料がある。刃は使用によって摩耗し製品加工時のままの資料は無いが、刃の先端は金属製の刃物でいう両側が削られた両刃、片側が削られた片刃がある。柄は直線。557は小形の篋。刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインはやや膨らんでいる。558の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは直線である。559の刃は両刃。560の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインはやや膨らんでいる。柄の端は削られている。561の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは内側に削られている。562の刃は摩耗している。刃の下端から柄につながるラインは直線である。柄の端に引っ掛けるための不整形の穿孔がある。563の刃は摩耗している。刃の下端から柄につながるラインは内側に弧を描く。564、565の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは内側に弧を描く。566の刃は摩耗している。刃の下端から柄につながるラインは内側に弧を描く。567の刃は欠損している。刃の下端から柄につながるラインはやや膨らんでいる。柄の端に引っ掛けるための長方形の穿孔がある。568の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインはやや膨らんでいる。569の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは内側に弧を描く。570の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは直線である。柄の端に引っ掛けるための不整形の穿孔がある。571の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインはやや膨らんでいる。柄の角が面取りされている。柄の端に引っ掛けるための不整形の穿孔がある。572の刃は両刃。先端部は摩耗している。刃の下端から柄につながるラインは直線である。573、574の刃は両刃。刃の下端から柄につながるラインは内側に弧を描く。柄の端に引っ掛けるための不整形の穿孔がある。575は先端部と柄が破損している。576の刃は両刃。先端部と柄が欠損している。577の形状は包丁に似る。刃は摩耗している。刃の部分は柄の長さより長い。先端部と柄の端に釘穴があり、板材を二次利用して加工したと考えられる。578の形状は包丁に似る。刃は両刃。柄は先端部が幅広くなっている。579～585は先端部が柄から両側に広がる資料。580は柄から先端の平坦部にかけての肩部分は直線。断面は柄から先端部にかけて細くなっている。581は柄から先端の平坦部にかけての肩部分は直線。断面は柄から先端部にかけて細くなっている。先端部は摩耗している。582は柄から先端の平坦部にかけての肩部分は内側に弧を描く。先端部は摩耗している。柄の側面に工具痕が残る。液体などを混ぜるといった用途が考えられる。583の先端部は欠損、柄の部分が残存している。柄は面取りされ角は丸く仕上げられている。柄の端に引っ掛けるための不整形の穿孔、釘が残る。582同様大形の資料で、液体などを混ぜるといった用途が考えられる。584は柄から先端の平坦部にかけての肩部分は内側に弧を描く。585の先端部は楕円形。柄の角は面取りされており丸く仕上

げられている。586は先端部に櫛状の4本の突起がある。587～590は平面形が楔形を呈する篋状製品。588の先端部は両面が削られ尖っている。589の先端部と基部が両面から削られ尖っている。590の先端部と基部は弧を描くことから曲物の板を転用した資料と考えられる。

羽子板形製品 (591～592)

板材を切り出した柄のついた資料で凸形を呈する。先端部の広がりや肩部分は直線的で斜めに切られている。鍔板として使用されたものか。591は柄の端に引っ掛けるための穴が穿たれている。先端部にも穿孔がある。592は炭化した材を切り出している。表面の炭化に比べ裏面の炭化は著しい。

柄・柄状製品 (593～608)

包丁、工具など刃物の柄と考えられる。ほとんどの資料で金属部分は失われている。593は面取りされ断面は楕円形で茎を嵌め込んだ穴がある。594～596は面取りされ角は丸く仕上げられている。断面は隅丸長方形。茎を嵌め込んだ穴がある。597は断面形が滴形。茎を嵌め込んだ穴と固定するための穴が穿たれている。598は面取りされ断面は八角形。茎を嵌め込んだ穴がある。599、600は面取りされ角は丸く仕上げられている。断面は楕円形。茎を嵌め込んだ穴がある。601は面取りされ角は丸く仕上げられている。断面は隅丸長方形。602は先端部に幅1.8cmの溝が彫られている。先端部を割り、割れ部分に刃を挟み、溝に口輪が巻かれていたと考えられる。裏面は欠損しているが、面取りされ角は丸く仕上げられている。断面は隅丸長方形と考えられる。603は柄元が柄尻に比べ太くなっている。先端部の幅1.6cm。凹みは口輪の跡と考えられる。茎を嵌め込んだ穴がある。604は先端部に幅1.4cmの溝が彫られている。溝に茎を固定するための口輪が巻かれていたと考えられる。面取りされ、断面は八角形。605は柄を柄尻から5cmまで割り茎を挟んだと考えられる。茎を固定するための銅製の金具が残る。606は断面が六角形。先端部に13箇所の穴が開けられている。607は柄尻から先端部にかけて細くなっている。柄尻に引っ掛けるための穴が穿たれている。608は両端が欠損している。角は面取りされ断面は隅丸長方形。

槌 (609～611)

木槌と横槌が出土している。609は木槌。頭部と柄が木製。頭部の断面は円形。両端部は丸く仕上げられている。臍穴、柄は長方形で柄の片側は削られ握りの微調整が行われている。柄の長さは14.8cm、頭部の長さ8.6cm、幅2.8cm。610は横槌。一木を削り作られている。叩く部分の底から柄が伸びている。先端部が欠損している。長さ23.8cm、幅6cm。611は横槌。一木を削り作られている。叩く部分の底から柄が伸びている。裏面が欠損している。長さは30.8cm、槌部分は17cm、柄は13.8cm。幅8.9cm。

鍬 (612～617)

風呂鍬の風呂部。風呂鍬は柄、風呂部、柄の3部から構成される。資料は金属製の刃と柄を接続する風呂部である。柄と金属製の刃は出土していない。612は平面形が長方形で柄を接続する穴の平面形は台形。横断面はレンズ形。柄の接続角度は71°。613は半分以上が欠損している。平面形は逆台形。横断面はレンズ形。柄の接続角度は73°。614は平面形が逆台形で先端部と基部は丸くなっている。横断面はレンズ形。柄を接続する穴の平面形は台形。柄の接続角度は79°。615は平面形が逆台形で先端部と基部は丸くなっている。横断面はレンズ形。柄を接続する穴の平面形は台形。柄の接続角度は75°。616は基部が丸くなっている。横断面はレンズ形。柄を接続する穴の平面形は台形。柄の接続角度は66°。617は平面形が逆台形で先端部と基部は丸くなっている。横断面はレンズ形。柄を接続する穴の平面形は台形。柄の接続角度は55°。



### 砥石台 (618～626)

長方形の材の上面に長方形の凹みがある資料を砥石台とした。ほとんどの資料の接地面は中央部が凹んでいる。618は底部の中央部は台形に削られ凹んでおり、両端が接地するようになっている。砥石を固定する部分は長方形。619は底部がやや凹んでおり、両端が接地する。砥石を固定する部分の平面形は五角形。620は一端が切断されている。底部はやや反っており設置状況は悪い。砥石を固定する部分は長方形。621は底部が若干凹んでおり両端が接地する。砥石を固定する部分は長方形。622は底部がやや凹んでおり、両端が接地する。砥石を固定する部分は長方形。623は底部が平坦で底面全体が接地する。砥石を固定する部分は不整五角形。624は底部が平坦で底面全体が接地する。砥石を固定する部分は長方形。625、626は底部がやや凹んでおり、両端が接地する。砥石を固定する部分は長方形。

### 枅形製品 (627～629)

枅形製品とされる資料。側板は薄板でなく角材を同じ形状に切断して組み合わせ底板を木釘で固定している。一般的な枅とは異なるが形状から枅形製品とした。外周に比べ内面は小さい。627と628の大きさに差はなく、629は大きさが違うだけで627、628と構造が同じである。規格品と大小2種類の大きさの資料が出土している。627は外周が長軸11.5cm、短軸11.3cm、高さ3.6cm。内側は長軸5.2cm、短軸5cm、深さ3.2cm。側材と底板は6本の木釘で固定している。628は外周が長軸11.5cm、短軸11.2cm、高さ3.8cm。内側は1辺5cm、深さ3.2cm。側材と底板は4本の木釘で固定している。629は外周が1辺8.8cm、高さ3cm。内側は長軸3.8cm、短軸3.7cm、深さ2.6cm。側材と底板は4本の木釘で固定している。

### 定規 (630)

630は定規。長さ40.8cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。墨で板材に目盛りが記されている。先端部に引っ掛けるための方形の穴が穿たれている。

### 台状製品 (631)

631は台状製品。台形の板材に材を嵌め込んでいる。

### 曲物 (632)

632は曲物。漆容器の使用。底部と側板が残存している。内面に漆が付着している。側面に墨書。

### 糸巻 (633)

633は糸巻。断面はレンズ状で端部は面取りによって丸くなっている。各辺は内側に緩やかに削られている。

### 人形・玩具 (634～752)

ここでは木製品のなかで人形、玩具とおもわれるものについて記載しておく。人形のカシラについては加納克己氏、瀧見英明氏の教示によるものである。樹種については観察表に表記しておく。

634～650は操り人形のカシラで、654～657、659～663は操り人形の手と脚である。634は勢彫り(きおいぼり)の甲人形(かぶとにんぎょう)のカシラである。勢彫りとは顔面器官の目や口、鼻等を力強く見せるための彫り方である。甲人形とは端午の節句に用いられた人形である。喉木は彫付けである。喉木彫付けとはカシラと首が一体で彫られたものである。喉木の下端部にはカシラを支えるための握りとなる棒状の串を差し込む小穴(串穴)が観察される。頭部には植毛のための小穴が連鎖状にあり、毛(髪)を止めた竹串が残っている。635は勢彫りの金平のカシラである。喉木は彫付けで、胴串(ドグシ・ドウグシ)を差し込む為の穴(カマ穴)が観察される。胴串は顔を操る際の把手である。植毛の小穴は観られず浅い溝が頭頂部から両顎までみられる。後頭部中央には穴が観

察される。後頭部の穴は結髪をするための止め棒を差し込む穴と思われる。顔面と後頭部に分かれる。金平とは坂田金時の子で勇壮な物語の登場人物で、強い者の代表である。636は勢彫りの金平のカシラである。喉木は彫付けでカマ穴が穿たれている。頭部には植毛の小穴が連鎖状にあり竹串が残存している。637は勢彫りの金平のカシラである。カマ穴があり、植毛の小穴が頭部と顎に連鎖状に穿たれ竹串が残存している。唇に赤色、眼球に黒色の彩色痕が観察される。638は女のカシラである。カマ穴があり、植毛の小穴、竹串が観察される。顔面の彫りは耳と口のみで他は描いたと思われる。639は甲人形のカシラである。カマ穴は無く、串穴がある。竹串が残存した植毛の小穴が頭部と鼻の下にみられる。黄土色の彩色痕が全体に見られる。640は中を削り抜いた後頭部のみのカシラである。喉木は彫付けで、カマ穴がある。植毛の連鎖状小穴はなく、頭頂部に釘状のものが5本観察される。胡粉が残存している。641は後頭部のみ残存のカシラである。635と同様、顔面と後頭部を貼り合わせたカシラである。喉木彫付けでカマ穴があり、植毛の連鎖状小穴はないが、後頭部に1箇所竹串が残った小穴が穿たれている。また全体に黒色が観察される。642のカシラは喉木彫付けで、串穴が観察される。植毛穴は無い。喉木は裾がやや広がるタイプである。全体に黄土色の彩色痕が観察される。643は首管式（差込式）のカシラである。首管式のカシラは、人差し指を喉木の穴に入れ操る方式のものである。前面に胡粉が見られ、喉木の裾に焼けた痕跡が観察される。644は烏帽子を被った首長型のカシラである。カマ穴も串穴もないものである。目、鼻、耳、口は彫り表現しているが、彫りは甘い。烏帽子や目、眉、口内に黒色が観察される。645は首長型のカシラである。目と思われる彫りがみられる。646は首長型のカシラで半分のみ残存。647～649は棒状の人形である。簡単な作りである。647の先端部はやや尖っている。目、口、耳は浅く彫り表現している。頭部には黒色が観察される。648、649は素朴な顔が浅く彫られ、首も表現されている。650は首長型の人形で烏帽子、顔の彫りは浅いが表現が巧い。全体に黒色が観察される。烏帽子は縞状に彩色されていた痕跡が観られる。651は人形の胴部と考えられる。首を挿したと思われる穴、また下端部にも穴を穿っている。背面左上部や前面右腹部に釘が残存している。背面中央部には長方形の凹みが彫られている。凹みは人形を操る際の道具を差し込んだものと考えられる。652は削り抜き型の人形の胴部の半身である。上部は首を差込むように彫られている。図の右写真下方部の脹らみが腹部、上部の脹らみが胸部で、円形部は肩（上腕部）と推測される。下方部に3箇所止釘、下端部際に穿孔が観察される。653は裸人形である。削り出しで成形しているが、腕は別作りである。港区の増上寺子院群のBM179から同様の人形と腕が出土している。本資料は下腹部に穴が穿たれている。右肩部に小穴がありが可動式の腕を取り付けたものと考えられる。また、小穴の周りに円状の痕跡が観察される。654～657は操りの手である。654～656は精巧な作りの手である。基部の小穴は手を操るための附属品を取り付ける為のものか。654は掌を広げた右手で胡粉が観察される。掌に止釘が打たれている、手に何か持たせたものか。底面に穿孔あり。655は何かを持ち握った形状の左手である。基面に穿孔あり。656は指を軽く曲げた形状の左手である。腕の下方部外側に釘穴が観察される。胡粉残存。657は軽く握った形状の左手で、何か持たせたものと考えられる。一木で仕上げ掌は削り抜いて仕上げている。658は陽物である。一木で削り出し、細部の表現も丁寧である。基部に竹串が刺さったままの状態であることから何かに固定して使用したと考えられる。濃い臙脂色の彩色痕が見られる。659～663は操りの脚である。足は別作りで取り付けるが本地点からは出土していない。659は短めの脚で上面に竹串と共に小穴が5箇所観察される。660の上部中央に釘穴と思われる穿孔がみられる。660上面際と側面二箇所、釘穴痕が観察される。662は上部際に小穴がみられ、全体に黄土色の彩色痕が観察される。脹脛の表現がされている。663は最も精巧に作ら

れた脚である。上面に1箇所、上面右側面に2箇所、大きく湾曲に刳られた左側面際に、2箇所釘穴が穿たれている。臀部と脛脛の表現がされている。また、臙脂色の彩色痕が観察される。足の出土例は千代田区弥勒寺・栖岸院跡調査の弥勒寺115号遺構の乳児の墓に見ることができる。115号からは操り人形3体が手足、肩板等が木刀、独楽、下駄、漆箱と共に出土している。664は中央に穿孔、孔に棒状のものが残存している。差し込んだ棒を止めるための小孔が両側面に観察される。糸を巻き付ける糸枠、束を分ける道具（舞羽）の一部に類似している。器種は明確でない。665は足が可動式の人形と思われる。両側面下に3mm程の穿孔がありおそらく足を取り付ける穴と推測される。また、胴部中央に小穴、腕を表現したのか片方に削り加工している。顔面の一部に黒色が残存している。666～670は鳥または魚と考えられる一群であるが不明。666の羽の様に見える部分の長方形片6枚は貼り付けてある。671は獅子頭の下顎である。小穴が3箇所あるが上顎とのジョイント用か。墨書が観られる。672は獅子頭である。深く削出して表現し、鼻の穴も削り開けている。頭部の小穴は毛を植えたと思われる竹串が残っている。頭頂部の長方形の溝は角を差し込む為のものと思われる。また両側面には耳を取り付ける穴や釘穴が観察される。赤色の彩色痕が残存している。精巧な獅子頭である。673は竹馬の馬頭である。目、鼻孔、口は削出している。頭部後方中央の穴、また両側面の穴は跨るための棒を取り付けるためのものか、若しくは鬘（たてがみ）や耳を付ける為のものか。674は竹馬である。馬頭と棒がセットで出土している。両側面の穴は耳を取り付ける為のものと考えられる。鼻先の裏面は削り薄くなっている。675は鳥と考えられる。腹部にある小穴は足を差し込む為のものか、木片が残存している。上部は平坦に削られている。おそらく首を据えたと推測される。676の頭部は宝珠、胴部には節が表現され、高欄や欄干の擬宝珠に似ている。677は蠟燭形製品である。芯、胴部には白色の彩色痕が観察される。下端部に穿孔あり。678は太鼓形製品である。中央には細い溝が切り込まれ、上下の際には圏線が刻まれている。底面には無数の突き痕が、また胴部の一部に竹串が残存した小穴、彩色痕が観察される。679はリング状製品である。果梗（軸）は差込みである。底面の萼（がく）の表現もされている。精巧な作りである。680は瓢である。焼け焦げが片面のみに見られる。681は刳り抜きで彫られた船である。彩色痕が観察される。682は舟の形をしているが性格は不明である。大の文字が彫られている。両縁には竹串が残ったままの小穴が複数みられる。683～688の器種は不明である。683の樹種はサワラで削出している。684は楕円形を呈し、2箇所を削り僅かに凹ませている。685は薄いドーナツ形をしたものであるが、4箇所小穴が穿たれている。686はヒノキの割材で作られたもので上端の切断面はきれいに整形されている。また、下方部中央に小さな孔が穿たれている。687はヒノキで作られているものである。先端部はやや細く削り出されているが何かに差し込んで使用したものであろうか。688はヒノキで削出されたものである。左側の端部は平にカットされ、下の部分は僅かに削られ下方部に向かい丸味を持たせている。右側の先端は尖らせている。左側を差し込んで使用したものであろうか。用途は不明である。689、690は三味線の竿の最上部にある海老尾と呼ばれている部品である。樹種はサワラ材である。両脇の3箇所の穿孔は3本の糸巻を設置するためのものである。689の中央の小穴には竹串が挿したままの状態であった。糸巻きを模した竹串か。三味線の完形にちかいものは、新宿区圓應寺跡の3才児の墓2号遺構から、羽子板等と共に出土している。691～695、697は砲弾形の独楽である。691の上面は平坦で、やや丸味のある砲弾形を呈し、心棒（軸）のないタイプである。彩色痕が見られる。692はやや太めの砲弾形で、上面は平坦で文様らしき刻みが無数観られる。胴部中央付近から下方部にかけて鋭く削られている。心棒があるタイプである。693の上面は平坦に近く中央に心棒の竹串を残した軸穴を設けている。胴部中央に細く溝を彫り巡らしている。上部に赤色の彩色



痕が観察される。694は692と形状は類似するが、中央付近から軸穴にかけ円錐状に削り込んでいる。695は細めの砲弾形で下方部に向かい徐々に尖らせているものである。軸穴は浅い抉りで、心棒の一部が残存している。煤がみられる。696は陣笠を逆さにした形状のものである。1/3欠損、斜めに穿たれた穴は中心よりずれた箇所にあるため独楽ではないかもしれない。697は小形の砲弾形を呈する。頭を白色に塗彩した心棒が先端部まで差し込まれている。698は薄い円形を呈したものである。性格は不明。上面は白色の彩色が観られ、裏面に墨書が観察される。699、700は浄土双六の賽子である。699には「南・無・分・身・諸・□」とある。欠損した一文字はおそらく「仏」の文字であろう。700には「南・無・妙・法・身・佛」と墨書されている。双六には絵が描かれたものと文字だけのものがある。江戸時代に制作されたものには肉筆と木版刷りがあったが木版刷りが広まったとされる。浄土双六は絵双六の前身であるといわれている。また、浄土双六の前身は文字だけの「名目双六」があり、これは天台宗の初学の修行僧を遊びながら学ばせるために考案された双六であるという。振り出しは「南閩浮州」、上がりは「法身」である。700は「南無妙法身佛」と墨書された「浄土双六」の賽子である。701・702は将棋の駒である。701は「王将」と漆書きされた駒である。被熱し少し変形している。702は駒先と駒尻幅の差が少なく幅広の駒で、文字の痕跡は確認できない。703～720は羽子板である。樹種はアスナロ、モミ属やツガ属などがある。掲載数が多いので特徴あるもののみ記述する。703は上部が欠損しているが、割れ口は破損した後工具でカットしたと思われる。704は左縁は斜めに欠損し、右側面には意図的に付けたキズが観察される。705は僅かに胡粉の彩色痕が観察される。706の柄は細身で、付け根部のカットの湾曲は緩やかである。樹種はモミ属であるが、大きな節目がある板材を使用している。黄土色の彩色痕が観察される。710は胡粉が残存しており裏面には追い羽根の突き痕が観察される。712はやや小振りであるが、706同様に大きな節目がある板材を使用している。715は小振りで彩色と追い羽根の突き痕が観察される。718の樹種はツガ属である。被熱し焼け焦げたものであるが、石畳文様と白色の彩色痕が観察され、付け根部の2箇所のカットは丁寧である。720は出土した中で最も小振りである。柄はためて付け根部のカットの湾曲は少ない。無数の切り傷が観察される。721～734は模造刀である。柄（つか）には円形と隅丸方形、楕円形を呈するものがある。刀身部が欠損しているものが多い。ここでは特徴的なもののみ記載しておく。721と731以外は柄と刀身の部分は一体で削出している。732は刀身は別に作り柄に差し込んでいる。721は最も長い刀身の刀である。柄はなく茎（なかご）がむき出しのままである。彩色痕が確認される。722は刀身のみで、鎬（しのぎ）が表現されている。724aは柄と刀身が一体形で、四隅を面取りした724bの鐔と共に出土している。725の柄は円形を呈するものである。726の柄は全体に白色痕が顕著である。733は茎、柄は欠損している。柄のみであるが中央部分は赤茶色の彩色が濃くみられる。中央の小さな穴は釘穴である。735～739は刀の鐔である。735は木瓜形で、上下面黒漆で彩色を施している。中央の鐔孔の長さ15mm、幅3mmである。736は木瓜形で、鐔孔は長さ36mm×幅6mmである。737は木瓜形で鐔孔は長さ22.5mm×幅7.5mmである。鐔孔の脇には小穴が穿たれている。738、739は薄い板状の鐔である。738の大半は欠損しているが木瓜形に透かしを施している。739は八角形を呈し鐔孔は長さ24mm×幅6mmである。740～748は鞘である。鞘の作り方は、板を成形後半割して2つのパーツにし、刀身の形に彫り削り抜き貼り合わせている。鞘の頭頂部の鑰（こじり）の形状は丸味のあるものと角形がある。740～742は全体に白色、黒色が薄く観られ、黄土色が斑状で観察される。743は黒色と白色の彩色痕、744は黄土色の彩色痕が観察される。749～752も操り人形の胴串と思われるが、明らかではない。749、750、752は削出しで作られており、柄部から先の削り出された部分は刀身と異なり

平坦でなく棒状に近い。胴串は操りのカシラのカマ穴に差込んで使用するものである。751の上部断面は楕円形であるが下方部に向かい菱形になる。上部と差し込まれた材の下方部には孔が穿たれている。752の断面は菱形を呈し底部を除き白色に彩色されている。底部は白色が剥落したのか赤茶色になっている。

#### 木簡 (753～830)

墨書の記載方法は「奈良文化財研究所 木簡データベース」ホームページの「凡例」を参考にした。墨書の解読は小松愛子が行った。分類もデータベースを参考にした。ホームページ <http://www.nabunken.jp/Open/mokkan/mokkan2.html> 753～774は長方形の板材の一端を尖らせた資料。上端が失われ下端の尖った部分を残す資料はこの中に入れた。753は片面に墨書が認められるが判読できない。754は墨書が認められない。755は片面に墨書が認められる。墨書「□□村伊右衛門」。756は両面に墨書が認められる。墨書「〈〉九郎左衛門殿二郎右衛門」。757は両面に墨書が認められる。墨書「〈〉〔四合ニタ又左衛門内カ〕・〈〉・〈〉下□〔条カ原カ〕村吉兵衛」。758は両面に墨書が認められるが判読できない。759は上端が欠損している。片面に墨書が認められる。墨書「甘ろ漬」。760は上端が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「〈〉\了左衛門殿○〈〉カ・了左衛門〈〉」。761は上端が欠損している。墨書は認められない。762は上端が欠損している。上端に紐を通した穴が穿たれている。片面に墨書が認められる。墨書「〈〉三拾枚\稲垣清左衛門様○村田〈〉」。稲垣清左衛門は大聖寺藩士。763は墨書が認められない。764は墨書が認められない。765は上端が欠損している。片面に墨書が認められるが判読できない。766～769は上端が欠損している。墨書は認められない。770は上端が欠損している。片面に墨書が認められるが判読できない。771は上端が欠損している。墨書は認められない。772は上端が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「□□〔村正吉カ〕・正吉」。773は両端が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「□□〔今村カ〕・□□衛門」。774は両面に墨書が認められる。墨書「松平飛騨守様江戸本郷御屋□〔敷カ〕□〔様カ脇カ〕ニ而\大井左五右衛門殿○大井市兵衛・□百弍拾目包共○自加州大□〔正カ〕寺」。大井市兵衛、左五右衛門は大聖寺藩士。775～785は長方形の板材に紐を結ぶための切り込みを一端の左右に入れた資料。一端を尖らせた資料、尖らせていない資料、下端が失われている資料もこの中に入れた。775は下端が尖っている。両端が欠損している。片面に墨書が認められるが判読できない。776は下端が尖っている。墨書は認められない。777は上端が丸く仕上げられ下端は尖っている。側面3箇所穿孔。側面の穴の一つは表面から裏面へ穿たれた穴と繋がっている。この側面の穴の先端は尖っており表面から裏面へ通した穴を木釘などで固定したものと考えられる。両面に墨書が認められる。墨書「延宝八\〈〉・〈〉」。778は下端が尖っている。片面に墨書が認められる。墨書「石村八郎左衛門様石村八十郎」。779は下端部の左右が切られて細くなっている。表面に穿孔された穴は上端の左右の切り込みの片側まで達している。両面に墨書が認められる。墨書「江戸深川引込町二而\山崎権左衛門殿江御届ケ\権左衛門殿へ申上候其〈〉ニ御指置可被下候○かしま\東主膳内\宮川文左衛門・醤油五升入○壺樽」。深川引込町は深川海辺大工町裏町の異名（「深川町方書上」）。東主膳は鹿島神宮禰宜。780は下端部が欠損している。片面に墨書が認められる。墨書「納三斗五升入\西〈〉〔十二カ〕月廿二日\〈〉」。781は端部が尖っていない。片面に墨書が認められる。墨書「一色五左衛門様○山内九右衛門」。一色五左衛門、山内九右衛門は大聖寺藩士。782は下端部が欠損している。墨書「□田村/〈〉/□□□〔平カ〕右衛門/」。783は端が尖っている。墨書は認められない。784は端部が尖っていない。片面に墨書が認められるが判読できない。785は端部が尖っていない。両面に墨書が認められる。墨書「〈〉\忠右衛門殿・〈〉\三〈〉」。786～814は長方形の木簡。上端、

下端が欠損している資料もこの中に入れた。786 は片面に墨書が認められる。墨書「采女様御こたつふとん」。采女は大聖寺 2 代藩主前田利明の 4 男利昌か。787 は上端が丸く仕上げられ下端の角は面取りされている。片面に墨書が認められる。墨書「進上\干鱈筋七つ」。788 は下端が欠損している。両端に墨書が認められる。墨書「上々□極炭東孫〈〉・十九大山〈〉」。789 は上端が欠損している。片面に墨書が認められるが判読できない。790 は上端が欠損している。片面に墨書が認められるが判読できない。791 は上端が欠損している。下端の角は面取りされている。両面に墨書が認められる。墨書「〈〉 右衛門・〈〉 右衛門」。792 は上端が欠損している。下端の角は面取りされている。片面に墨書が認められる。墨書「中村純庵」。793 は片側が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「いろはにはへと・〈〉」。794 は片側が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「〈〉 吉兵衛〈〉・仏」。795 は片面に墨書が認められる。墨書「かや町二丁目」・茅町 2 丁目は富山藩上屋敷に隣接する下谷茅町 2 丁目カ。796 は上端の小口に 1 箇所、下端の小口に 2 箇所穿孔されている。表面の側面に 5 箇所穿孔されている。片面に墨で模様が描かれている。797 は上端の左右が切られ細くなっている。両面に墨書が認められる。墨書「八〇小□村〇彦兵衛・四斗五 〈〉」。798 は両面に墨書が認められる。墨書「見書□□・〈〉」。799 は片面に墨書が認められる。下端角と側面が欠損している。墨書「□〔大カ〕 □〔六カ〕」。800 は両面に墨書が認められるが判読できない。801 は両面に墨書が認められるが判読できない。802 は片面に焼印が押される。803 は両面に墨書が認められる。墨書「長命草入・〈〉」。「長命草」は煙草の意。804 は片面に墨書が認められる。墨書「□□□〔冬カ冬カ〕」。805 は両端が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「上 〈〉・松□」。806 は紐を通す穴が穿たれている。両面に墨書が認められる。墨書「近江や与兵衛・□\□」。807 は紐を通す穴が穿たれている。両面に墨書が認められる。墨書「□主計・〈〉 \久右衛門」。808 は紐を通す穴が 2 箇所穿たれている。片面に墨書が認められる。墨書「□戸天神〈〉 丁\山田屋左五右衛門様貴下〇同\七郎兵衛」。809 は上端角が面取りされている。下端は欠損している。片面に墨書が認められる。墨書「δ〇上」。810 は両端が丸く仕上げられている。紐を通す穴が穿たれている。片面に墨書が認められる。墨書「〈〉 〇青山左助」。青山左助は富山藩士。811 は上端角が面取りされている。紐を通す穴が穿たれている。墨書「/上イ/δ//和州吉野郡□□〔新住カ〕]\村松三郎右衛門・上々吉廿本之内\六メ式百目入」。新住は現在の奈良県下市町新住。812 は下端角が面取りされている。紐を通す穴が穿たれている。墨書「〈〉 伊奈半左御代官所\ 〈〉 花又村米□〔屋カ〕七左衛門・〈〉」。花又村は現在の東京都足立区花畑。813 は紐を通す穴が穿たれている。片面に墨書が認められる。墨書「筒屋源八郎荷物」。814 ~ 821 は細長い板材の下端を斜めに切って山形に数字を墨書している資料。新宿区細工町遺跡で同様の資料が出土している。814 は下端が欠損している。片面に墨書が認められる。墨書「δ十二」。815 は下端の一方の角を斜めに切断した細長い板材。上端は欠損している。墨書は認められない。816 は上端が欠損している。墨書が片面に認められるが判読できない。817 は両端が欠損している。両面とも墨書で目盛りが書かれている。目盛りの間隔は揃っていない。818 は下端の一方の角を斜めに切断した細長い板材。片面に墨書が認められる。墨書「δ二十一δ」。819 は下端が欠損している。片面に墨書があるが判読できない。820 は下端の一方の角を斜めに切断した五角形の細長い板材。片面に墨書が認められる。墨書「δ二十七δ」。821 は細長い板材の下端の一方の角を斜めに切断した細長い板材。両面に墨書が認められる。墨書「δ五・δ」。822 は羽子板状の製品。両面に墨書があるが判読できない。823 は両面に模様らしきものと墨書が確認できる。両側が欠損しているために判読できない。824 は片面に墨書があるが判読できない。両端と片方に直径 1mm 以下の穴が穿たれている。別の製品を転用したと考えられる。825 は上端の左右を切り山形に仕上げ



ている。両面に墨書が認められる。墨書「β 未年中月日時方共因天諸難滅一代叶心願如意秘行所・β γ / 月日日 \ 月日日 \ 月日日 // < 急急如律令南方一代天守給所」。826 は上端の左右を切り山形に仕上げている。下端が欠損している。両面に墨書が認められる。墨書「善太夫・<」。827 は円形の板材で中央に穴が穿たれている。墨書は両面に認められる。墨書「大・小」。大小札。828 は篋状の製品で両面に墨書が認められるが判読できない。829 は両端が欠損している。片面に墨書が認められる。墨書「δ [○に五]」。830 は両端が欠損している。墨書は片面に認められる。墨書「菩薩 <」。曲物・桶・樽 (831 ~ 944)

円盤状の曲物・桶・樽の底板、蓋板、側板である。部品はばらばらになって出土し、底板、蓋板は大きさと厚さで区別することがあるが、側板が残る桶・樽の中には底板が薄い資料があり、底板、蓋板の厚さや大きさと単純に区別できないため、部材が揃っている資料、大形の樽・桶が明確に区別できる資料以外は区別していない。831 は墨書があることから蓋板と考えられる。墨書「松 < \ <」。832 は墨書があることから蓋板と考えられる。摘みを固定した穴が穿たれている。墨書「葉の \ 一 \ <」。833 は墨書があることから蓋板と考えられる。墨書「ひき < \ <」。834 は墨書があり、摘みを固定した穴が穿たれていることから蓋と考えられる。墨書「進上 \ 鰹たゝき」。835 は焼印があり摘みを固定した穴が穿たれていることから蓋と考えられる。836 は刃物で印がつけられている。穴が穿たれているが摘みの穴かは不明。837 は焼印があり摘みを固定した穴が穿たれていることから蓋と考えられる。焼印は長方形の枠内に「さゝや」。838 は両面に赤色顔料による文字が書かれているが読めない。839 は墨書があることから蓋板と考えられる。840 は上面の径より下面の径が小さく、側面に側板を固定するための木釘の痕跡があることから樽の底板か。3つの穴が穿たれている。二次加工によるものか。上面の墨書も樽として使用されていた時はなかったと考えられる。841 は柄杓。柄、側板、底板が残る。柄は破損しているが、部品が組み合わせさった状態で出土した。842 は側板と底板7枚すべて残っている。側板内面の凹みから蓋板があったと考えられる。843 は蓋板。上面に黒色漆が塗布され螺鈿が施される。844 は墨書があり、摘みの桜皮が残っていることから蓋と考えられる。墨書「治郎右衛門様」。845 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「庄兵衛」。846 は墨書があることから蓋と考えられる。847 は墨書があることから蓋と考えられる。3つの穴が穿たれている。墨書「□[加カ]」。848 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「加々や \ 長兵衛」。849 は墨書があることから蓋と考えられる。850 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「いせや \ 八兵衛」。851 は墨書があることから蓋と考えられる。852 は墨書があることから蓋と考えられる。2枚の板を2本の木釘で接続している。墨書「三」。853 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「< \ 長兵衛」。854 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「五」。855 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「□[納カ]」から「納豆」と考えられる。856 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「□右衛門」。857、858 は同じ資料の部品で857 は側板。3枚の側板が残っている。側面に墨書。858 は蓋板。側板と同じ墨書。859 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「納豆 \ < 坊」。860 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「□[納カ]」。861 は摘みを固定した穴が穿たれている。2枚の板を2本の木釘で接続している。墨書「せ主より \ <」。862 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「院 \ □[豆カ]」。863 は墨書があることから蓋と考えられる。864 は墨書があることから蓋と考えられる。865 は墨書があることから蓋と考えられる。2枚の板を2本の木釘で接続している。866 は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「▲」。867 は摘みを固定した穴が穿たれている。墨書があることから蓋と考えられる。2枚の板を2本の木釘で接続している。墨書は「▲」。868 は墨書があることから蓋と考えられる。2枚の板を2本の木釘で接

続している。墨書「▲」。869は墨書があることから蓋と考えられる。870は刃物で印がつけられている。871は楕円形で、墨書があり摘みを固定した穴が2箇所。桜皮が残っていることから蓋と考えられる。墨書「きつれ〈〉 \ \ 〈〉 \ \ 〈〉」。872は楕円形で墨書、摘みが無いことから底板と考えられる。873は楕円形で墨書、摘みが無いことから底板と考えられる。874は樽の蓋板。栓を嵌め込む穴がある。栓の穴の径は2cm。875は墨書があることから蓋と考えられる。墨書「寺」。876は摘みを固定した穴が穿たれている。墨書があることから蓋と考えられる。墨書「□〔願カ〕林寺」。877は樽の蓋板で墨書がある。栓を嵌め込む穴がある。栓の穴の径は2cm。878は樽の蓋板で墨書がある。栓を嵌め込む穴がある。栓の穴の径は1.2cm。879は樽の蓋板で墨書がある。摘みを固定した穴が穿たれている。墨書は「味〈〉」。880は手桶の側板と把手を接続する側板。タガ痕が残る。口径は推定28.6cm、底径は推定16.6cm。881は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴が残っている。882は樽の蓋板で墨書がある。墨書「上□ \ \ δ新〈〉 \ \ 百」。883は墨書があり摘みを固定した穴が穿たれていることから蓋と考えられる。墨書「池ノはた」。884は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴が残っている。885は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴が残っている。墨書「上〈〉」。886は桶の側板で木釘で固定されている。内面に底板痕、外面にタガ痕が残っている。887は蓋板の痕跡があることから樽と考えられる。底板、側板が出土。把手を取り付けたと考えられる穴が穿たれている。2次加工と考えられる。888は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。墨書「□〔堺カ〕八百や \ \ 上々吉新大梅〈〉 \ \ 五兵衛」。889は丸い押印があることから蓋板と考えられる。890は焼印があることから蓋板と考えられる。891は刃物による印、摘みを固定した穴が穿たれていることから蓋板と考えられる。892は樽の蓋板で墨書があるが読めず。板を接続した釘穴がある。893は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。894は樽の蓋板で、板を接続した釘穴がある。墨書はあるが読めず。895は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。896は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。897～899は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。900は樽の蓋板で墨書がある。栓を嵌め込む穴がある。栓の穴の径は4cm。板を接続した釘穴がある。901は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。902は樽の蓋板で栓を嵌め込む穴がある。栓の穴の径は2.8cm。板を接続した釘穴がある。墨書があるが読めず。903は摘みを固定した穴が穿たれており墨書があることから蓋板。墨書「三拾把」。904は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。905は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。906～908は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。909は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。接続は鉄釘による。910は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。911は墨書がある。墨書「五大力菩薩」。当初樽の蓋板としたが墨書から守り札の可能性もある。912は樽の蓋板で墨書がある。墨書「紀州田辺」。913は樽の蓋板で墨書がある。板を接続した釘穴がある。墨書「木香丸 \ \ 数式百五拾 \ \ 木香丸無仁」。木香丸は、植物木香の根から製した腹痛薬の名。914は樽の蓋板で焼印がある。板を接続した釘穴がある。915は釣瓶の部材と考えられる。916は釣瓶と考えられる。底板と側板、把手の金具は綱を繋げるための金具である。917は把手のある蓋。上面と摘みは黒色。918は蓋。刻印がある。印記「〈〉 \ \ 長兵」。919は蓋。上面に刃物による文字がある。920は蓋。取手を固定した釘穴が残る。921は樽の側板。側面に墨書。墨書「切漬 / □ \ \ 八 /」。922は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。923は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。墨書「□ \ \ 白」。924は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。925は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。墨書「□ \ \ や」。926は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。927は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。墨書「屋久右衛門」。928～933は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。934は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。

墨書「〈 九兵衛〇伊勢」。935は樽の側板。側面に墨書。936は樽の側板。側面に墨書。墨書はあるが読めず。937は樽の側板。側面に焼印がある。焼印「δ〔丸に山〕」。938は樽の側板。側面に墨書。939は樽の側板。タガ跡が残る。側面に墨書。940は手桶の把手を接続する部分。側面に墨書。墨書「伊勢屋」。941は手桶の把手を接続する部分。側面に墨書。墨書「十一月〈 〉\□」。942は手桶の把手を接続する部分。側面に墨書。墨書「□〔桶カ〕」。943は手桶の把手を接続する部分。側面に墨書。944は手桶の把手を接続する部分。側面に墨書。

#### 樽・徳利などの栓（945～957）

栓には樽だけでなく徳利の栓、角樽の栓などがある。樽の栓は蓋板にはまった状態で出土すれば樽の栓として区別することができるが形状などで区別することができないため「樽などの栓」とした。945、949、950、946は樽・徳利などの栓。紐を固定するための穴が穿たれている。947は樽・徳利などの栓。側面に切り込みがあり、紐を固定するための穴が穿たれている。948は樽・徳利などの栓。底部と上部が面取りされている。紐を固定するための穴が穿たれている。墨書が側面にある。951は樽・徳利などの栓。上部に水平の稜線がある。紐を通す穴と側面2箇所穴が穿たれている。952は樽・徳利などの栓。上部に水平の稜線がある。紐を固定するための穴が穿たれている。953は樽・徳利などの栓。上部は面取りされ丸く仕上げられている。上部に方形の穿孔がある。954は角樽などの栓。角樽などに嵌る尖がった下部と上部の飾りの部分に分かれる。変形しているが上部の横断面は六角形。上部は面取りされて丸く仕上げられている。955は角樽などの栓。角樽などにはまる下部と上部の飾りの部分に分かれる。下部、上部ともに円筒形。上部に紐を通すための穴が穿たれている。956は角樽などの栓。角樽などに嵌る尖がった下部と上部の飾りの部分に分かれる。上部の横断面は隅丸長方形。957は角樽などの栓。角樽などに嵌る尖がった下部と上部の飾りの部分に分かれる。上部の横断面は八角形で角が面取りされている。上部の上下の角が面取りされている。

#### 調度、建築材（958～1024）

958は棒状の製品をかけるための板で2枚が対になり壁に鉄釘で固定される。引っ掛ける部分が2箇所。959は鴨居。溝が深いことから鴨居と判断した。短く切断されていることから、建物寸法に合わせ切断された鴨居の材を二次利用したか、廃材となってから二次利用されたが、建築材として利用後に鉄釘が長押側から二次利用されている。960は敷居。溝が浅いことから敷居と判断した。建物寸法に合わせ切断された敷居の材を二次利用したか、廃材となってから二次利用されたと考えられる。961は溝が彫られており、鴨居に似るが溝は1本のため別の建築部材と考えられる。962はリング状の製品。断面形は正方形。穿たれた穴に桜の皮が残っている。本資料と対になる部材と丸い部分に嵌める棒状の部材からなると考えられる。棒状の部材を挟んで桜の皮で部材同士を結んだと考えられる。963はリング状の製品。断面形は正方形。穿たれた穴は2箇所。本資料と対になる部材と丸い部分に嵌める棒状の部材からなると考えられる。棒状の部材を挟んで桜の皮で部材同士を結んだと考えられる。964は鉤。上部に紐などを結び付けるための切り欠き、下部は引っ掛ける部分になっている。表面は火熱を受けていないことから囲炉裏の自在鉤ではないと考えられる。965は調度の部材。表面は茶色の漆が塗られている。966は調度の部材。表面は黒色の漆が塗られている。灰白色の下地が残る。967は調度の部材。表面は赤色の漆が塗られている。黄灰色の下地が残る。968は調度の部材。接続のための穴が穿たれている。969は調度の部材。脚部分か。接続のための木釘が残っている。970は調度の部材。表面は黒色の漆が塗布されている。文様は金色と茶色で描かれる。971は調度の部材。表面は黒色と赤色の漆で文様が描かれている。972は湯桶の把手。断面は円形。表面は黒色の漆が塗られている。973は掛軸の軸。表面に黒色の漆が塗布されている。974は位牌



の台座部分か。975は位牌の台座部分。前面に蓮弁が彫られ、上面に「久」が彫られている。一部しか残っていないが表面に黒色の漆が塗布されている。976は板材で1.7cmの円形の穴が穿たれている。片方が丸く仕上げられている。墨書がある。977は破魔弓の部材と考えられる。978は板材で穴が2箇所穿たれている。下の穴には鉄釘が残る。穿たれている細長い部分には漆が塗布されていないことから、調度の部材と考えられる。979は調度の部材。長方形の彫りこみと穿孔がある。980は長方形の板材で直径2.2cmの穴が穿たれている。981は長方形の板材で接続のための木釘が残る。墨書がある。墨書「□〔みカ〕ん」。982は板材の稜端に切り込みがある。983は板材で墨書がある。984は滴形の板材。985は調度の部材。両端の断面形は正方形。中央部にかけて面取りが行われ丸く細く仕上げられている。小口に鉄釘、胴部に穿孔が認められる。986は臍穴が2箇所彫られた角材。側面と端部が面取りされ端部の断面は隅丸方形、中央部は蒲鉾形になっている。臍穴に嵌められた部材は断面形が長方形、木釘で固定されている。987は調度の部材。板材に穴を穿ち角材を嵌めている。側面に釘穴が穿たれている。988は木の節部分を加工したもの。989は一木を削りだした製品で直径4mmの穴が穿たれている。990は板材に鋸歯状の削りがあり、墨で模様がある。991は棒状製品。断面形は円形。992は2枚の円形の板材を合わせた製品で中央部が穿たれている。表面の3箇所の孔は2枚の板材を固定するための穴と考えられる。片面、接合部分には断面形が三角形の溝が13条彫られている。反対側の部材には溝と重なる部分が凹み、黒く変色している。993は円形の板材に臍穴があり板材がはめられている。994～1013は襖などの部材と考えられる。建物の大きさに合わせて襖の大きさを調整。その際に切断された部材と考えられる。994は漆塗りの角材を切断した資料。板目と柃目の角は黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。一方の柃目に墨書はあるが読めず。995は漆塗りの角材を切断した資料。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。996は漆塗りの角材を切断した資料。一方の小口の角が面取りされている。全面に黒色の下地が塗られ板目と柃目の角に茶色の漆が塗られている。997、998は漆塗りの角材を切断した資料。一方の小口の角が面取りされている。板目と柃目の角は黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。999は漆塗りの角材を切断した資料。板目側の小口の角が面取りされている。反対側の小口に段差がある。板目と柃目の角は黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。一方の柃目に墨書がある。1000は漆塗りの板材を切断した資料。一方の板目の端部に段差がある。段差が無い板目と柃目の角は黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1001は漆塗りの角材を切断した資料。板目側の小口の角が面取りされている。反対側の小口に段差がある。板目と柃目の角は黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。一方の柃目に墨書がある。1002は角材で一方の板目側の小口の角が面取りされている。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1003は漆塗りの角材を切断した資料。一方の小口の角が面取りされている。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1004は漆塗りの角材を切断した資料。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1005は漆塗りの角材を切断した資料。一方の板目側の小口の角が面取りされている。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。一方の柃目に墨書がある。1006は漆塗りの角材を切断した資料。一方の小口が臍になっている。板目と柃目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。穴が穿たれている。1007は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柃目に溝が彫られる。小口の断面は凹形。一方の小口の角が面取りされている。板目と溝が彫られていない柃目に黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1008は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柃目に溝が彫られる。溝の断面は台形。一方の小口の角が面取りされている。板目と溝が彫られて

いない柾目に黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1009は漆塗りの角材を切断した資料。上部に溝が彫られている。溝が彫られた部分以外に黒色の下地が塗られ茶色の漆が塗られている。1010は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柾目に溝が彫られる。溝の断面は台形。一方の小口の角が面取りされている。板目と溝が彫られていない柾目に黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1011は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柾目に溝が彫られる。溝の断面は台形。一方の小口の角が面取りされている。溝を除いた部分に黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1012は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柾目に溝が彫られる。溝の断面は台形。一方の小口の角が面取りされている。板目と溝が彫られていない柾目に黒色の下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。溝側と面取りされた小口と逆側に墨書。1013は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柾目に溝が彫られる。溝の断面は台形。一方の小口の角が面取りされている。板目と柾目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1014は漆塗りの角材を切断した資料。一方の柾目に溝が彫られる。一方の小口の角が面取りされている。板目と柾目の角は黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。1015は漆塗りの角材を切断した資料で半分が欠損している。黒い下地が塗られその上に茶色の漆が塗られている。残っている板目の面には下地、漆が塗られておらず、釘穴があることから部材の接合部分と考えられる。1016は調度品の部材と考えられる。黒色の漆が塗布されている。1017～1024は凸形の板材で大きさにばらつきがある。両端が穿孔され鉄釘が打たれている。両面もしくは片面に墨書がある。1017は墨書「寄合所ノ小書院ノ□〔方カ〕廊下南ノ立付道ノ外・西ノ方」。1018は墨書「小書院〈〉\東ノ〈〉\西ノ立付\□〔少カ〕入側・〈〉〔廊下カ〕\北」。1019は墨書が確認できなかった。1020は墨書「御居間北側\西□〔カ〕一番\〈〉・〈〉」。1021は墨書が確認できなかった。1022は墨書「〈〉次間小二\入側西より〈〉\〈〉・〈〉」。1023は墨書が確認できなかった。1024は墨書「文九郎δ\文九郎δ\文九郎δ」。他の資料には建物に関する墨書であるが、この資料の墨書は人名が書かれている。両端が穿孔されている点は他の資料と共通する。

#### 弓 (1025～1029)

出土した弓は一木の先端部、両端部を割り、切り込みを入れて反らせ、籐で固定することによって弓を反らせている。弓は折れた状態で出土した。1025は弓の弦をかけた部分が残る。断面形は蒲鉾形で先端部は7つに割られる。分割は先端から24cmに及ぶ。籐が巻かれている。先端部からの分割の深さ、現在の和弓の形状から弓の「小反」から「胴」に当たる部分で弦をかける部分は「本弭」と考えられる。丸い部分が外側、平らな部分が射手側と考えられる。1026は断面形が蒲鉾形で図の左側が4つに割られる。籐が巻かれている。丸い部分が外側、平らな部分が射手側と考えられる。1027は弓の弦をかけた部分が残る。断面形は蒲鉾形で先端部は5つに割られる。分割は先端から45cmに及ぶ。籐が巻かれている。先端部からの分割の深さ、現在の和弓の形状から弓の「姫反」から「鳥打」に当たる部分で弦をかける部分は「末弭」と考えられる。丸い部分が外側、平らな部分が射手側と考えられる。1028は断面形は蒲鉾形で籐が巻かれている。先端部は7つに割られる。分割は折れた部分から25cmに及ぶ。籐が巻かれている。丸い部分が外側、平らな部分が射手側と考えられる。1029は弓の弦をかけた部分が残る。断面形は蒲鉾形で先端部は5つに割られる。分割の深さは36cm以上。

(4) 金属製品 (IV-232 ~ 242 図1 ~ 126)

1 ~ 15 はキセルの雁首、17 ~ 24 は吸口。キセルは古泉弘の行った分類を参考に火皿と雁首の接続部分に巻かれる補給帯などの部品を除く部品数、形状から分類を行った。

雁首

I類 いわゆる太閤張り、水口キセルと呼ばれる油返しの湾曲が大きくラウとの接続部に肩がある。

II類 油返しの湾曲がII類より小さく肩がある。

III-1類 油返しの湾曲がII類より小さく肩の無い資料。

III-2類 油返しの湾曲がII類より小さく肩の無い資料で雁首部分を鍛造し肩の段差を成型している資料。

IV類 油返しの湾曲がIII-1・2類より小さく肩の無い資料。

V類 雁首が直線的で火皿と雁首の接合部分は斜めである。

雁首と対になる吸口をI・II類、吸口III-1・IV・V類、吸口III-2類に分類した。吸口をI・II類、III-1・IV・V類としたのは吸口の形状が同じで区分できないためである。分類可能な資料は77個体、分類できない破片の最小個体数は58点である。材質分析を行ったキセルは銅亜鉛合金で表面に施された銀色の表面装飾は認められない。分析を行っていない資料、破片資料の中にも表面に施された銀色の表面装飾は認められない。1は雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。2は雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。3は雁首III-1類。補強帯に見える帯は溶接材で腐食により段差ができ帯状に見える。首部の溶接は吸口側から見て上側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。4は雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。5は雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。6は雁首III-1類。補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。火皿の側面は丸味を帯び稜線がある。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首左側に敲打による凹みがある。ラウが残る。7は雁首III-1類。補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。8は雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。9は雁首III-1類。補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。10a・10bは雁首に吸口を差し込んで使用する。ラウは無い。10aは雁首III-1類。補強帯に見える帯は火皿と一体で雁首と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。雁首との接合部分に金属を巻き付け雁首と同じ左側に溶接が行われ、火皿側を丸く仕上げている。10bは吸口III-1類。吸口に雁首を嵌る部分を溶接し吸口の雁首側に雁首との接合部分に金属を巻き付け雁首と同じ左側に溶接が行われている。若干の変形のため10aに10bを使用時のように嵌め込むことはできないが、吸口側の金属板を巻き



付けた段は雁首の接合部分の凹みに嵌るようになっている。両資料とも地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。11は雁首Ⅲ-1類。16の吸口と対になる資料。火皿に補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。火皿の吸口側が穿孔されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。雁首に唐草文様の彫金が施されている。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。12は雁首Ⅲ-1類。火皿と雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。13は雁首Ⅳ類。火皿と雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て上側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。14は雁首Ⅳ類。雁首の上部に金属板を折り曲げ箱状の部品を溶接している。首部の溶接は吸口側から見て上側にある。地金の腐食が進行しており錆を除去した腐食部分は緑色部、赤褐色部、銅色部など色調が観察されるが、部分的に地金が残っており金色を呈し、溶接部も腐食によって銀色から、やや白味を帯びた金色が観察される。15は雁首Ⅱ類。油返しが細くラウを接合することを考慮すると肩があったと考えられる。補強帯は無く腐食により溶接部が浮き出している。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の腐食が進行しており錆を除去した腐食部分は緑色、赤褐色、銅色などの色調が観察されるが、部分的に地金が残っており金色を呈する。溶接部は腐食によって赤褐色、やや白味を帯びた金色が観察される。16は吸口Ⅲ-1類。11の雁首と対になる資料。唐草文様の彫金が施されている。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。17は吸口Ⅲ-1・Ⅳ・Ⅴ類。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。18は吸口Ⅲ-1・Ⅳ・Ⅴ類。端部近くがややくびれている。地金の色調は金色、溶接部は金色。19は吸口Ⅲ-1・Ⅳ・Ⅴ類。端部近くがややくびれている。地金の色調は金色、溶接部は腐食のため灰色から、やや白味を帯びた金色。20は吸口Ⅲ-1・Ⅳ・Ⅴ類。地金の色調は金色、溶接部は腐食のため灰色から、やや白味を帯びた金色。21は吸口Ⅰ・Ⅱ類。端部近くがややくびれている。吸口側、肩の角はほぼ直角である。肩の吸口側はどのような構造で吸口に溶接されているか不明である。肩と吸口の溶接部分は一直線になるように接続されている。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。ラウが残る。22は吸口Ⅰ・Ⅱ類。吸口側、肩の角は丸味を帯びている。肩と吸口の溶接部分は一直線になるように接続されている。地金の腐食が進行しており錆を除去した腐食部分は緑色、赤褐色、銅色などの色調が観察されるが、部分的に地金が残っており金色を呈する。溶接部は腐食によって赤褐色、やや白味を帯びた金色が観察される。ラウが残る。23は吸口Ⅰ・Ⅱ類。吸口側、肩の角は丸味を帯びている。肩と吸口の溶接部分は一直線になるように接続されている。地金の腐食が進行しており錆を除去した腐食部分は緑色、赤褐色、銅色などの色調が観察されるが、部分的に地金が残っており金色を呈する。溶接部は腐食によって赤褐色、やや白味を帯びた金色が観察される。ラウが残る。24は吸口Ⅰ・Ⅱ類。吸口側、肩の角は丸味を帯びている。肩と吸口の溶接部分は一直線になるように接続されている。肩に彫金で「重久」と彫られている。端部近くがややくびれている。地金は金色を呈する。溶接部はやや赤味を帯びた金色が観察される。ラウが残る。

25～30は簪である。25は竹の節が再現されている。地金の色調は金色。26は上端部が加工されている。地金の色調は赤銅色。27は上端部が加工されている。地金の色調は金色。28、29は上端部が加工されている。地金の色調は赤銅色。30は上端部が加工されている。断面形は六角形。地金の色調は赤銅色。

31は長方形の手鏡。摘みを通す穴が2箇所にある。文様は竹に寅、花。「天下一」銘。地金の色は銀色。

32～35は毛抜き。32は表面の腐食が進んでいる。地金の色は赤味を帯びた金色。33は表面の腐食が進んでいるが、使用に耐えられる弾力を残している。地金の色調は黒鉄色。34は使用に耐えられる弾力を残している。刻印「石川 喜兵〇」地金の色調は黒鉄色。35は表面の腐食が進んでいるが、使用に耐えられる弾力を残している。地金の色調は黒鉄色。

36は筭。胴部の地板部分に金具が取り付けられた形跡がある。地板前面に文様が施されている。地金の色調は赤銅色。

37～42は小柄。37a、37bは小柄から刃を取り外した状態。37aの刃には「近江守源宗利」銘。茎に細かい格子状の筋がある。地金の色調は黒鉄色。37bの小柄は地板部分に獅子2頭、文様が施されている。37bに板材を巻き付け溶接した痕跡は認められず、重量も他の小柄に比べて重いことから、鋳造品である可能性が高い。38は小柄に刃身が嵌った状態で出土した。刃身には銘らしきものが認められるが腐食のため判読できない。小柄は板材を鍛造し棟方部分で溶接している。戸尻は別パーツを嵌め込み溶接している。地金の色調は赤銅色。溶接部分は銀色。丸に四つ目結、丸に井桁の文様が配されている。地金の色調は金色。39は小柄に刃身が嵌った状態で出土した。全体的に腐食が進んでおり、刃の銘は確認できない。小柄は板材を鍛造し棟方部分で溶接している。地金の色調は赤銅色。溶接部分は腐食のため確認できない。文様は植物文か。刃の地金は黒鉄色。40は小柄。刃身の先端部は欠損している。小柄は板材を鍛造し棟方部分で溶接している。戸尻は別パーツを嵌め込み溶接している。文様は笠。地金の色調は金色。溶接部分は金色。刃の地金は黒鉄色。41は小柄。刃身の先端部は欠損している。小柄は板材を鍛造し棟方部分で溶接している。戸尻は別パーツを嵌め込み溶接している。地板部分に馬3頭の文様が施されている。地金の色調は赤銅色。溶接部分は銀色。42は小柄の刃身。腐食が進んでおり、銘は判読できない。43は刀柄の縁。鍛造した側板の上部に刀を嵌め込む部品が溶接されている。側板の溶接は反り側に施されている。側面に斜線状の文様。地金の色調は赤銅色。

44、45は切羽。44は地金の色調は金色。45は側面にギザギザがある。地金の色調は赤銅色。

46は杓子。棒材を鍛造して成形している。皿の平面形は楕円形、柄は直線ではなく皿部分から徐々に細くなり柄の中央付近から幅広になり先端部近くは細くなる。柄の先端部は蕾状に成形されている。柄の断面は隅丸長方形から先端部は楕円形になる。地金の色調は金色。

47は匙。棒材を鍛造して成形している。皿の平面形は滴形。柄は直線的で皿部分から徐々に細くなる。柄の先端部は耳かき状に成形されている。地金の色調は金色。48は匙。棒材を鍛造して成形している。皿の平面形は滴形。柄は直線的で皿部分から徐々に細くなる。柄の先端部は耳かき状に成形されている。地金の色調は金色。

49は鍋や薬缶などの金具。板材を鍛造して成形している。胴部へ金具を固定するための穴が3箇所、取手を取り付けるための穴1箇所が穿たれている。地金の色調は赤銅色。

50は風鈴。鋳造物。釣鐘形の製品で上部に紐を繋げる穿孔された突起がある。内側に「舌」を取り付けるための穴を穿った突起がある。地金の色調はやや白味を帯びた金色。

51は容器の身。底と側板には溶接痕は確認できない。一体成形されているように見える。

52は竿秤の分銅。表面の腐食はほとんど認められない。「正得」「天下一」の刻印がある。上面にある竿秤にかけるための紐を通す部分は、本体の方形の臍穴に嵌め込んでいる。

53は容器蓋の摘み。芯は穴を穿った鉄に2枚の穴を穿孔した銅の板材を被せ、銅材と芯の穴に銅の角材を通し固定している。芯に通した銅材の先端部には正方形の穿孔した銅材を嵌め込んでいる。

54は香炉の蓋。外周に香が通る穴が穿たれている。中央部を穿孔し摘みを通してしている。摘み周り

には花卉が彫刻されている。地金の色調は赤銅色。

55 はピンセット形製品。細長い菱形の板材の先端部を細く鍛造し中央部で折り曲げている。一部変形しているが、保存状態は良好で使用されていた当時の弾力を保持している。

56 は火箸。断面が正方形の棒材の先端部を鍛造して尖らせている。先端部の横断面は円形。上端部は切込みを入れている。地金の色調は赤銅色。

57 は簪。断面が正方形の棒材の先端部を鍛造して尖らせている。先端部の横断面は円形。上端部は板材を接続しているが、溶接の有無は確認できなかった。地金の色調は赤銅色。

58 は柄。板材を丸めて溶接して上端部に丸く加工した部品を溶接し、先端部に花卉状の部品を接合している。溶接部分の地金の色調は銀色。上端部と柄の部分の地金の色調は赤銅色。

59～61 は水滴。59 は中央の水入れ口には細長い板材を長方形の筒状に折り曲げた部品、風穴には細長い板材を丸い筒状に曲げた部品をそれぞれ溶接している。表面は腐食が著しい。錆を除去した地金の色調は赤銅色。60 は中央の水入れ口には細長い板材を長方形の筒状に折り曲げた部品、風穴には細長い板材を丸い筒状に曲げた部品をそれぞれ溶接している。風穴の対角線上に筒形の部品が溶接されているが本体には穿孔されていない。表面は腐食が著しい。錆を除去した地金の色調は赤銅色。61 は中央の水入れ口の細長い板材を長方形の筒状に折り曲げた部品は欠損している。溶接の痕跡がある。風穴には細長い板材を丸い筒状に曲げた部品を溶接している。この水滴は欠損部を含め、上板と側板が一体となった板材を折り曲げ、底板を溶接、風穴と水入れ口の穴に部品を溶接している。59、60 も同じ構造と考えられる。地金の色調は赤銅色。

62、63 は鉤形製品。62 は板材を鉤形に切り取り上端部に切り込みを入れて鍛造し紐を通す穴を成形している。片面に花、片面に文様がある。地金の色調は金色。63 は棒材を丸く鍛造し両端を尖らせ鉤形に鍛造している。上端部は折り曲げて紐を通す穴を成形している。地金の色調は赤銅色。

64 は金具。角材の中央を鍛造し両端部は丸く鍛造しU字形に折り曲げている。中央の穴に引っ掛けるための金具を接続している。地金の色調は赤銅色。

65 は把手の部品。角材を丸く鍛造し両端を細くし端部の縦断面はT字形に仕上げている。地金の色調は赤銅色。

66 は把手。調度品の紐をかけるための金具か。リングとリングの基部、円盤状の飾り金具からなる。リングの基部は細長い板材を半分折り曲げ筒状の部品を溶接しリングと飾り金具を嵌めている。地金の色調は赤銅色。リング基部の筒状の部品の溶接部の金属色は白味がかかった赤銅色。

67 はフック形製品。棒材を丸く鍛造し先端部を鉤形に折り曲げている。基部の断面は長方形で固定のための穴が穿たれている。円盤状の飾り金具が嵌められている。地金の色調は金色。

68 は飾り金具。調度などの角に取り付けられる飾り金具。固定のための穴が穿たれている。唐草文様が彫られている。地金の色調は赤銅色。

69、70 は銅釘。棒材を丸く成形し円形の頭を鍛造している。地金の色調は赤銅色。

71 は燭台。脚部を折りたためることができる燭台。中央部を穿孔した受皿、それぞれ穿孔した3本の脚部を蠟燭を差し込む針に通し、針の下端部に穿孔した六角形の板材を嵌めて下端部を鍛造して固定している。脚の1つには切り込みに細長い板材を丸く鍛造した金具が取り付けられている。地金の色調は赤銅色。

72 はすくい網。銅線を杓子形に成形し杓子の皿部分に真鍮線で金網が編まれている。柄は真鍮線を縄状に撚ったものを巻き付けている。銅線は赤銅色、網と柄に巻き付けられた真鍮線は金色。

73 は不明製品。



74 は鍋の口縁部。

75～79 は握り鋏。75 は刻印がある。遺存状態は良好で使用されていた当時の弾力を保持している。地金の金属色は黒鉄色。76 は腐食が進んでいるが使用されていた当時の弾力を保持している。地金の金属色は黒鉄色。77 は腐食が進んでいる。地金の金属色は黒鉄色。78 は腐食が進んでいるが使用されていた当時の弾力を保持している。地金の金属色は黒鉄色。79 は先端部と片方の刃が欠損している。

80～83 は火箸。80 は棒材の先端を尖らせ上端を丸めている。81 は棒材の先端を尖らせ上端を丸めている。上端に火箸同士をつなげた金具が残っている。82 は棒材の先端を尖らせ上端を丸めている。83 は棒材の先端を尖らせ上端部は段を付けて細長くして木製の柄に接続している。柄の材が残っている。

84 は金具。板材を切り取った金具で先端部は尖っている。

85 は灯火具。底部のリングに灯芯を取り付けた金具が取り付けられている。部品の接続方法は表面の腐食のため確認できない。

86a・86b は五徳。同一個体。断面は三角形。铸造品と考えられる。

87 は火打鎌。持ち手部分の材が残っている。

88 は刃物か。地金の色調は銀色。端部はやや黒味を帯びた帯状で刃物が刃損したものか。

89 は金具。リング状の金具で取手などの部品か。

90 は把手。両端部は細く成形されている。地金の色調は黒鉄色。

91 は把手。一端は鉤状に成形されている。両端部に調度品などに接続するための金具が残っている。

92～94 は金具。92、93 は細長い板材の一端を鉤状に成形、一端は穿孔されている。94 は細長い板材の一端を鉤状に成形。一端は欠損している。

95 は混炉の目皿と考えられる。

96、97 は雨樋の樋受け金具。96 は横断面は長方形。樋を乗せる U 字形部分の端部が穿孔され樋を固定するための銅線が残っている。底部に樋を固定するための釘穴が穿たれているが腐食によりふさがっている。地金の色調は黒鉄色。97 は横断面は長方形。樋を乗せる U 字形部分の端部が穿孔されている。反対側の一端は先端部が欠損しているものの尖っており、建物側に突き刺して固定していたと考えられる。地金の色調は黒鉄色。

98～102 は金具。98 は板材を折り曲げ別の部品を挟んでいる。地金の色調は黒鉄色。99 は一端が尖っておりこの部分を柄などに嵌め込んだものか。地金の色調は黒鉄色。100 は中央部の横断面は不整形、一端は尖っており断面形は正方形、もう一端の断面形は不整形。こちらが柄などに接続されていたと考えられる。地金の色調は黒鉄色。101 はリング状の金具で一部欠損している。固定のための穴が2箇所穿たれている。地金の色調は黒鉄色。102 は台形の板材で断面形は楔形。

103～119 は工具。103 は棒状の鉄が横断面楕円形の柄に嵌められている。先端部は欠損しているため用途は不明。104～106 は小刀。横断面が隅丸長方形の柄に刀身が接続されている。107 は篋。楕円形の柄に篋状の板材が接続されている。108 は先端部に嵌めた金属部分が欠損しているため用途は不明。楕円形の柄に鉄材が接続されている。109 は先端部に嵌めた金属部分が欠損しているため用途は不明。基部に引っ掛けるための金具が嵌められている。110 は揉錐。先端部の金属部分の横断面は長方形。先端部は欠損している。111 は揉錐。先端部の金属部分の横断面は長方形。先端部は欠損している。112 は墨壺のカルコか。柄の横断面は六角形で上端部と先端部は面取りが行われ丸く仕上げられている。先端部に針が嵌められている。113 の柄は変形している。横断面が

方形の柄に釘が打たれている。114は棒状の鉄が横断面が楕円形の柄に嵌められている。先端部は欠損しているため用途は不明。115は千枚通し。横断面は円形。柄に接続された刃の横断面は正方形。基部は切り込みが入れられ花卉状になっている。腐食しているが、引っ掛けるための金具が取り付けられていた痕跡がある。116は先端部は三又。柄に接続する部分と考えられる部分は細くなっている。地金の色調は黒鉄色。117釘形の製品。横断面形は正方形。118は鋺形の製品。破損のため用途は不明。地金の色調は黒鉄色。119は鉄槳道具の渡し金。耳盥、渡し金、かね碗、かねつぎセットのひとつ。渡し金の端部で雲形に切られた彫金が行われた板材の端部に板材を被せている。被熱により変形し表面は腐食している。地金の色調は黄色味を帯びた赤銅色から金色。

120は高台の無い碗形の容器で口縁部に正方形の摘みがある。表面に漆が塗られている。内面は赤色、外面は黒色。地金の色調は銀色。

121は高台の有る碗形の容器。胴部と高台は一体で底部が溶接されている。口縁部は内側に折り曲げられている。地金の色調は金色。溶接部は腐食のため色調は確認できなかった。

122は金網。銅線に真鍮線が編みこまれている。

123は灯火具。

124は調度金具。

125は雲形の錠前。

#### (5) 銭貨 (IV-243～246 図1～84)

銭貨の分類基準などは、第9節銭貨の章を参照願いたい。

SK3は天和2(1682)年の火災後の、加賀藩邸から大聖寺藩への敷地割り変更に伴う盛土であるC層上面から掘り込まれた、最大幅南北53.8メートル、東西19.7メートル、確認面からの深さが最深部で4.3メートルの不整形の巨大な土抗である。構築理由は土取りと思われ覆土は泥土で構成され、陶磁器・木製品を大量に含んでいる。銭貨は意識的にはなく、他の廃棄物に混入して廃棄されたとされる。

SK3南側西壁肩部にC面焼土層(元禄16年の火災層)が堆積していることから、遺構の下限は1703年以前であることは明確である。また陶磁器の廃絶年代から1680年代後半に埋没したと思われる。

出土している銭貨の枚数は、I期古寛永通宝が53枚、II期新寛永通宝文銭が40枚、渡来銭・模倣銭が12枚、雁首銭が1枚である。総枚数111枚と1遺構としては多量であるが、遺構の規模を考えると、それほど多量とは言えない。以下個別に詳述する。

1～4は古銭界では芝銭と呼ばれた一群で、1は二草点手型と思われる。2、3は「寛永通寶」字のすべての頭点が、草書体となっていることから、四草点型に比定される。4は不草点型である。5、6は坂本鑄とされ、5は特に「永」字フ画末端が大きく跳ね上がっていることから、跳永型に分類される。6、7は「永」字以外は跳永型に似るが、「永」字が通常の手書体であることから、正永型と思われる。8～12は従来水戸銭と呼ばれていたもので、この中で唯一8の長永型是水戸鑄である可能性が高いと考えられている。9は流永型、10は狭足寛型、11は全体的に勁(強い)文なことから勁永型と思われる。12は「寶」字足が短いことから短足寶型に分類される。13、14は勇文型。15は潤縁・潤字なことから、仙台銭と呼称されてきた、潤字型と考えられる。16は「永」字縦画太く、横画が細いことから太細型と思われる。17・18は「通」が著しく縮んでいることから、縮通型と考えられる。古銭界では、上越国高田鑄とされている。19、20は長門鑄の確度が高い麗書型である。「永」字柱

が反りかえっている。21 は俯頭永型、22 は岡山銭と称されてきた縮字型である。23 は「寶」字が仰ぎ傾斜していることから、斜寶型に分類される。従来豊後国竹田鑄とされてきたが、伝世の枝銭と文献の照合により、信濃国松本鑄の可能性が考えられている（静岡いづみ会 1990）。24 ～ 26 は称井之宮式縮寛型。27 ～ 32 は従来、建仁寺銭と呼ばれていたもので、27 ～ 30 が「寛」字目部分と後ろ足の末尾までの距離が短い（狭寛）、大字型、30、31 が「寛」字目部分と後ろ足の末尾までの距離が長い（広寛）、小字型である。

35 ～ 45 はⅠb期に属すると思われる古寛永通宝で、明暦期に鑄銭された可能性が高い。35 ～ 40 は称鳥越式大字型、41・42 は正足寶型、43 ～ 45 は旧説では駿河国沓谷鑄とされた銭である。43 が高寛型、44・45 が低寛型である。

46 ～ 74 はⅡ期に属する新寛永通宝文銭である。46 ～ 59 は正字背文型、60 ～ 66 が中字背文型、67 が深字背文型、68 ～ 73 が細字背文型、74 は背「文」点が左側に退くことから退点文型に比定できる。

75 ～ 84 は渡来・模鑄銭で 75、76 が皇宋通宝、77、78 は治平元宝、79 ～ 81 が元豊通宝、82 は元符通寶、83、84 は永樂通寶である。

Ⅱ期新寛永通寶文銭のなかで、前述の型式以外に、縮字背文型、織字背文型、島屋型などが伝世資料から存在がわかっているが、当遺構からは出土していない。当遺構は陶磁器の出土状況から 1680 年代後半に埋没したと考えられるが、Ⅱ期新寛永通寶文銭と同一の銭文を持ち背面の「文」がない銭、いわゆる文無背銭は出土していない。

これまでに東京大学本郷構内の遺跡の中で外来診療棟地点 SU2 から縮字文無背銭が出土している。SU2 は元禄 16（1703）年の火災遺構で、本遺構年代からは 10 年強の年代差が考えられるが、従来延宝期とされている文無背銭は出土していない。しかしながら、Ⅱ期新寛永通寶文銭の文無背銭・島屋型が占める正確な比率については、明らかにはなっておらず、他の文銭に比べ少ないとされているのみで、本遺構の出土状況から、延宝期の鑄銭を否定できるものではない。太宰府天満宮や長坂遺跡の出土例と合わせても、まだまだ是非を判断することは難しいため、より多くの出土例を待つ必要が考えられる。

## (6) 石製品（Ⅳ-247、248 図 1～35）

### 硯（1～6）

1～5 は粘板岩。1 は四隅が丸く削り込まれている。四寸五分×三寸。大振り。2 は三寸五分×二寸。3 は四隅が丸く削り込まれている。4 は硯背に文字が刻まれている。小振り。5 は砥石に転用しようとしたのか縁がきれいに打ち欠いてある。表、背、縁の四面に、いたずら書きのような「岡村 平尾」などの文字が重ねて書かれている。背の文字の上から擦痕有り。6 は異形硯。頁岩。海部欠損。外面は黒く塗られている。硯背がわずかに窪んでいる。

### 砥石（7～16）

7、8 は定型化した砥石。粘板岩。比較的均一に摩耗しているが、やや中央部分が反っている。表面は劣化のためか凹凸が見られ一部分剥離している。8 には石の摂理面がある。9 は流紋岩。断面形は方形で 4 面を使用し、右手前から左奥に向かって使用痕が残る。火熱を受け、表面は全面スガがべったりと付着している。10 は流紋岩。幅の狭い 1 面のみを使用し、残りの面には 1.2cm 幅の鑿痕が全面に残る。使用面は手前と奥が摩耗しており、全面を使用して研いだのではなく部分的に小さいものを研ぐために使用したのかもしれない。11 は珪長岩（虎縞あり。沼田砥？）。断面形は方形で 4 面を



使用している。右手前から左奥に向けて摩耗し、中央部分が大きく反っている。12は粘板岩。幅の広い1面と、側面の2面を使用している。13は流紋岩。持ち砥。細い先端部を使用していた痕跡も見られる。14は粘板岩。2面を使用している。右手前から左奥に向けて摩耗し、中央部分が大きく反っている。15は流紋岩。折れており、裏面には自然に剥離したような面が残る。表面には右手前から左奥に向かって使用痕が残る。他の面も中央部分が右手前から左奥に向けて摩耗している。16は粘板岩。温石として使用しようとしていたのか、途中まで穴が開けられている。

砥石を必要とする物として、本地点の金属製品の出土状況を見つみると小刀などが出土している。比較的均一に摩耗している砥石は、包丁、小刀、剃刀などを中砥や仕上げ砥として砥いだものであろう。大きく反っている砥石も出土しており、鎌のような大形の道具類に使用されたと考えられる。また、カンナくずや、建築部材の切れ端のような遺物も出土しており、屋敷の造成時におけるカンナなどの工具を研いだものかもしれない。木製品には砥石の台も出土している（IV-189図）。砥石の形に合わせてはめ込むようになっており、一つ一つ形が異なる。照合してみたが、出土した砥石に合うものは確認できなかった。

#### 軽石（17、18）

17は中央部に紐を通すための穴が3つ開けられている。18は裏の平らな面が使用面で全面がすり減っている。

#### その他（19、20）

19は獣脚。変質凝灰岩（グリーンタフ）。どのようなものに付けられていたかは不明。20は表面に浮文様が刻まれている。性格不明。

#### 碁石及び碁石状石製品（21～27）

碁石は加工が施され径2.0cm～2.2cmでほぼ円形の一群である。碁石状石製品は形はあまり整っていないが、比較的薄く大きさも碁石に近く碁石としてほぼ使われたのではと考えられる一群である。21～27は全体的に雑な作りであるが、22以外は碁石として加工されていると考えられる。22は形も歪んでおり、碁石状石製品と分類しているものである。21～25は頁岩でやや灰色がかかった黒色である。26、27は粘板岩。被熱で変色したものと思われる。26は暗灰褐色と灰色が斑に入っている。27は暗灰褐色。一部剥離している。

#### 石の結晶（28）

水晶。長さ4.7cm、重さ13.1g。無色透明。六角柱状で先端は六角錐。水晶は「水精」などとも言われ玉石として珍重されていた。

#### 火打ち石（29～35）

いずれも白色系の石材で29、31、33は玉ずい、30、32、34は石英である。29は火熱を受け、表面にはススがべったりと付着している。56.4gと大きく、使用した痕跡はない。30、31は使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられる。大きさも16.1g、17.6gと大きく使用中のものではないかと考えられる。32～35は7～9.5gと小さく、使用痕が多く見られる。再利用するには小さく廃棄されたものと考えられる。

### (7) 動物製品（IV-49図1～10）

1は貝バレットである。ハマグリ of 右殻。最大幅9.4cm、最大長7.6cm。内面全面に赤漆が薄く付着し、外面にも部分的に付着している。2は貝柄杓である。イタヤガイ of 右殻。最大幅9.0cm、残存長7.6cm。棒に付けて柄杓として使用した。3は短冊状鹿角製品。薄い板状で先端部は欠損しており、

残存長7cm、幅1.8cm。上方に穴が2箇所穿たれており、側縁には左右に2箇所ずつ小さな抉りが見られる。穴の周辺には擦痕が見られこの穴に紐状の物を通し使っていたのであろう。両面にはコンパス状の工具によって彫り込まれた円を組み合わせて作った模様が二つ連続して刻まれている。線刻の中には黒漆を下地として白い塗料（胡粉？）が充填されていたものと思われる。表面に彫られている模様の有無の違いはあるが、同様の形態のものが本地点を含め9箇所ですべて合計17枚確認されている。いずれも骨角製品で完形のものには長さは8～9cmほどである。本製品は下端が欠損しているが、ほぼ同じような規格を持っていたと考えられる。用途については、熊野比丘尼が持っていたビンザサラではないかと考えている。研究編、大貫浩子「「ビンザサラ」考」に詳しく述べたので参照されたい。

4は櫛払い。化粧道具の櫛の歯を掃除する道具。鹿角製品。頭部欠損。2列の植毛孔を僅かに残す柄。先端に向かって細くなっている。表面には植毛孔の位置決めをするための「×」が刻まれている。

5は櫛払い。柄欠損。表には植毛孔が2列に並んでいる。裏面には溝が2本切っており、表の植毛孔につながっている。全体が丁寧に磨かれ、裏面には赤漆で斜格子模様が描かれている。櫛払いは、他の遺跡でも出土例が多数あるが、模様が入っている繊細な作りのものは珍しい。

6は双六などの駒か。鹿角製品。径は1.9cm、厚さは0.3cmと薄い。

7は基石。白。二枚貝。チョウセンハマグリ？

8は双六などの駒か。鹿角製品？径は2.0cm、厚さは0.5cm。両面に塗布された白い塗料（胡粉？）がわずかに残る。

9、10は筭か。9は鹿角製品か。残存9.4cm。頭部先端部欠損。

10は大形家畜の四肢骨。長さは15.3cm。断面形は四角。先端に向かって細くなっている。

### 第3節 包含層出土 磁器・陶器・土器

#### (1) E層 (IV-250 図1～16)

1、2は肥前系磁器(JB)である。1はいわゆる初期伊万里白磁碗でJB-1-a。畳付の釉は削り取られ、高台内まで施釉される。2は畳付の削り込みが浅く、その周囲が面取りされた青磁仏飯器でJB-8-b。畳付に熔着痕が認められる。

3～9は陶器である。4は肥前系(TB)、7は丹波系(TK)、他は瀬戸・美濃系(TC)である。3は白天目碗でTC-1-b。4、5は皿である。4は灰釉砂目皿でTB-2-b。見込みおよび畳付に4箇所砂目痕があるが、一部その砂目痕が畳付をはみ出して高台脇にまでおよぶ箇所もある。5は外面にしのある灰釉菊皿でTC-2-k。内面には型打成形時の布目痕が認められる。見込みにはトチ痕が3箇所ある。6は底部に3足を有す鉄釉香炉でTC-9-b。底部内面には直径6cm弱の輪トチ痕、口縁部には敲打痕が認められる。7、8は播鉢で、7はTK-29、8はTC-29に分類される。7は口縁部が肥厚し、内外面に括れを有す。口縁部から体部内面に自然釉が掛かる。播目は6条1単位で施され、体部内面下半に熔着痕が認められる。畳付脇は強くナデ調整される。8の口縁部は水平方向に伸び、その端部は上方に小さく立ち上がる。播目は16条1単位で9単位施されるが、播目の上から施釉され、播目は釉で覆われている。底部内面および外周は摩滅している。9は鉄釉が施釉された壺・甕の蓋である。裏側に右回転糸切り痕がある。

10～15は土器(DZ)である。10～12はかわらけ(DZ-2)である。10はDZ-2-a。口縁部はわずかに外反し、灯心痕が1箇所認められる。11はDZ-2-k。器厚がやや厚く、体部が底部から比較的直線的に開くものである。還元焼成により内外面ともに黒色化している。12は手づくねのかわらけでDZ-2-g。いわゆる白かわらけで、口縁部は括れ、口唇部は小さく内傾する。体部内面にごく薄く赤色付着物が認められる。13、14は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。ともに体部内面に団子状の内耳が1箇所残る。13の外面にはススが付着している。15は輪積成形無印の塩壺でDZ-51-aa。やや小形のものである。16はミニチュアの白磁碗で、JB\_2001\_Wに分類される。高台は無釉であるが釉垂れが多く、畳付に釉着痕が観察される。畳付外側脇に段差が観察される。釉は厚く施されている。

#### (2) E面上層 (IV-251、252 図17～56)

17～31は磁器で、22～25、28、29は景德鎮窯系(JA1)、他は肥前系(JB)である。17～21は碗である。20は高台の断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c、他はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-aに分類される。17はやや幅広の畳付を有し、そこに粗砂が多く付着する。20は高台内に「福」字銘が書かれている。21は外面に褐釉、内面に透明釉が掛け分けされた碗である。高台高がやや低く、畳付および高台内中央付近に粗砂が付着する。22～27は皿である。22～25はJA1-2に分類され、23が色絵、他は青花皿である。23は呉須に赤、緑、黄色の上絵付が施される。高台内には呉須で二重圏線に「天啓年製」銘が書かれている。24は型押成形の八角皿で、高台形も八角形を呈す。畳付と高台内に白色砂が付着する。26、27はいわゆる初期伊万里で、26は白磁、27は染付である。26は蛇ノ目高台を有すものでJB-2-h。見込みには砂目痕が5箇所あるが、蛇ノ目高台の内側にも砂が輪状に付着する。27はJB-2-a。見込みおよび畳付に砂目痕が3箇所遺存する。28、30は鉢である。28は青花端反鉢でJA1-5。口縁部に虫喰いがある。30は高台断面が三角形を呈す鉢でJB-5-f。



29は青花坏でJA1-6。腰が張り、口縁部は外反する。畳付から高台内は無釉である。31は桃形を呈す染付合子蓋である。型打成形で、外面には半菊(?)と葉の陽刻が施される。把手は別作りで貼り付けられたものであるが、欠損のため形状は不明である。

32～42は陶器で、34は京都・信楽系(TD)、37は産地不明(TZ)、42は肥前系(TB)、他は瀬戸・美濃系(TC)である。32～34は碗である。32は白天目碗でTC-1-b。高台内の削り込みが非常に浅い。33は内外面に鉄絵が施された平碗でTC-1。底部内面にはトチ痕が2箇所残る。34はいわゆる軟質施釉陶器の楽焼風筒形碗でTD-1-1。胎土は赤橙色を呈し、白色粒子を含む。畳付を含め内外面に白釉が施釉される。高台内は一部欠損しているが、「の」ノ字状に削り込まれたものか。35～37、39は皿である。35は灰釉直重ね痕のある皿でTC-2-b。畳付脇にススのような付着物が認められる。36は長石釉丸皿でTC-2-c。底部内外面にトチ痕が2箇所残る。37は高台高が高く浅い皿でTZ-2。口縁部2箇所が外側から押され、やや変形している。畳付以外にはうのふ釉が施釉され、部分的に青緑釉が施釉される。畳付には砂目痕が4箇所ある。39は二次的な火熱を受けているが、いわゆる御深井釉が施釉された形皿でTC-2-x。内面にはわずかに葉脈のようなものが陽刻されていたことがわかる。3足を有し、足の先端部は無釉である。38は鉄釉が施釉された端反形坏でTC-6。40は鉄釉丸形片口鉢でTC-23-b。外面の口唇部直下に熔着痕が認められる。41、42は蓋である。41は鉄釉が施釉された蓋物の蓋である。表側にはトチ痕が2箇所残る。42は青緑釉が施釉された壺・甕の蓋である。蓋裏に右回転糸切り痕が認められる。

43～56は土器(DZ)である。43～53はかわらけ(DZ-2)で、43～46、49、52、53には口縁部に灯心痕がみられ、特に52はタール状のものが全周している。43～48、51、52はDZ-2-a。43～46はいずれも体部中程に括れを有し、44、46は加えて口縁部が肥厚する。器厚も比較的厚い。47、48は器高がやや低く、底部外周の糸切り痕をケズリ調整している。また底部は赤色化している。51は内面が黒色化している。52は底部脇がやや強くナデ調整され、括れる。49、50はDZ-2-k。49は体部が底部から直線的に立ち上がる。口縁部が一部赤色化している。53はDZ-2-b。54、55は輪積整形された塩壺(DZ-51)である。54は二重枠の方形の刻印があるが、摩滅のため文字の判読ができない。DZ-51。55は54より小振りのもので、刻印はみられない。DZ-51-aaに分類される。56は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋でDZ-00-a。裏側には指頭圧痕が認められる。

### (3) D3層 (IV-253～255 図57～96)

57～67は磁器で、57、60は景德鎮窯系(JA1)、他は肥前系(JB)である。57～59、65は碗である。57は青花丸碗でJA1-1。高台内には呉須で銘が書かれている。58は高台の断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。59は染付丸碗でJB-1。絵付はいわゆる荒磯文碗によく見られるものと同じタイプのものであるが、底部欠損のため見込みには二重圏線のみが残存する。65はいわゆる初期伊万里染付碗でJB-1-a。畳付は平らにケズリ調整され、そこには焼成時の砂粒が付着する。高台内には「大明」銘が書かれている。60～64は皿である。60は青花皿でJA1-2。畳付に粗砂が付着する。61は染付砂目皿でJB-2-a。焼成不良のため呉須の発色は鈍く、胎土も完全に磁胎化していない。畳付まで施釉され、見込みには輪状の熔着痕も認められる。また畳付および見込みの砂目痕は7箇所ある。62、63は体部が輪花に型打成形された染付皿でJB-2-a。ともに口鏽が施される。64はいわゆる初期伊万里の蛇ノ目高台を有す青磁端反皿でJB-2-h。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、そこに鉄釉が施釉されるが、中央付近は渦状に、その外側には波状文のようなケズリを施している。なおこの部分には輪状の熔着痕が認められる。蛇ノ目高台の外側に獣足が

貼り付けられ、蛇ノ目高台部分には砂が付着する。66は型押成形で、二枚貝の形を呈す染付合子の身でJB-18。67は色絵蓋物の蓋である。

68～83は陶器で、68、69、75は肥前系(TB)、71～74、76～82は瀬戸・美濃系(TC)、70は産地不明(TZ)、83は志戸呂系(TF)である。68～72は碗である。68はいわゆる卵手でTB-1-j。畳付には砂目痕が4箇所ある。69はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。70は体部が底部から「ハ」ノ字状に開く碗でTZ-1。71、72はともに腰が張り、体部が内傾した丸碗である。71はTC-1-aj。長石釉がやや厚く施釉され、器面には粗い貫入が目立つ。72はTC-1-ag。鉄釉に灰釉が流し掛けされ、高台内には墨書があるが判然としない。73～79は皿・平鉢である。73はピン痕がある灰釉端反皿でTC-2-y。74、78は長石釉が施釉された皿でTC-2-c。ともに見込みにピン痕が3箇所ある。74は口縁部が外反し、底部は碁笥底状に削り込まれている。高台内に輪トチ痕が認められる。78は畳付まで含めて総釉掛けされている。75は灰釉砂目皿でTB-2-b。見込み中程に段を有す。見込みの砂目痕は2箇所残る。76は灰釉直重ね皿でTC-2-b。見込みにはヘラ状のもので陰刻が施される。77はピン痕がある灰釉皿でTC-2-a。外反する口縁部の数箇所を指で押さえ、窪ませている。79はいわゆる笠原鉢でTC-2-v。内面に鉄絵が施され、畳付まで含めて総釉掛けされる。高台内には輪トチ痕が2箇所残る。80は織部徳利でTC-10-k。82は底部がベタ底の壺・甕でTC-15-e。体部外面下半に縦しのご状のくぼみが確認される。なお本製品の体部上半は欠損しているが、その割れ口は二次調整されている。底部内面にトチ痕が3箇所ある。81は袴腰の鉄釉香炉・火入れでTC-9-f。高台は輪高台状に削り込まれるが、成形が雑で、畳付に糸切り痕が残る。口縁部には敲打痕が認められる。83は鉄釉が施釉された志戸呂系蓋物の蓋である。

84～95は土器(DZ)である。84～92はかわらけ(DZ-2)である。84～88、90には灯心痕が認められるが、90は灯心痕が口縁部だけでなく、内底部にまでおよぶ。84～88、90はDZ-2-a。84～86は体部が外側に直線的に開く。90は底部が部分的にケズリ調整される。89、91は手づくねでDZ-2-g。いわゆる白かわらけで、口縁から内底部はナデ調整され、底部と体部の境目付近には指圧頭痕が認められる。92はDZ-2-kに分類される。体部1箇所が赤色化している。93は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。団子状の内耳が1箇所残る。内底部および外面にススが付着する。94は輪積成形の塩壺で、二重枠の「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-c。底部に繊維状の圧痕が認められる。95は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋でDZ-00-a。器面の摩滅が著しい。96はミニチュアの染付碗でJB-2001\_Wに分類される。山水文様、外面口縁部付近と高台脇に圈線を描いている。畳付のみ無釉で砂粒の付着痕が観察される。釉が厚いため文様は薄くぼんやりしている。

#### (4) D2層 (IV-255～268 図97～246)

磁器 (97～104、106～146)

106、107、116、125、126、133、134、143は景德鎮窯系(JA1)、140は龍泉窯系(JA4)、他は肥前系(JB)である。

97～104、125、126は碗で、97、101が白磁、98が青磁と透明釉、102が色絵、他は染付あるいは青花である。97～99は底部無釉碗でJB-1-b。98は口縁部から外面は青磁、内面は透明釉が施釉される。青磁釉はやや厚く施釉され、ガラス質である。100はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。口鏽が施され、高台内には二重角枠「福」字銘が書かれている。102はJB-1。丸形碗で、外面は赤、茶色で花唐草文が施文される。101は高台の断面形が三角形を呈す碗でJB-1-c。103はいわゆる初期伊万里筒形碗でJB-1-k。器壁がやや厚く、内面はロクロ目が顕著である。104はJB-1-a。比較的

小振り、口縁部は外反する。畳付には砂目痕が3箇所ある。125、126は端反形碗でJA1-5。蛇ノ目状の幅広高台を有すが、その外周は雑にケズリ調整される。

106～108、110～124、129～131は皿・平鉢である。106、107、116は青花皿でJA1-2。106、107はともに虫喰いが顕著で、畳付に砂が付着している。116は畳付から高台内は無釉である。108、111、112、117、130、131はいわゆる初期伊万里でJB-2-a。130は青磁、131は青磁染付、他は染付が施される。108は大きく欠損しているがいわゆる芙蓉手皿か。111の畳付には砂がやや多く付着する。117はいわゆる日字鳳凰文皿である。130、131はともに口縁部数箇所を外側から押し、緩やかに変形させている。130の内面の文様はヘラ状のもので陰刻されたものである。畳付の内外両側をケズリ調整している。131の口縁部は強く内湾している。110、114、129はいわゆる初期伊万里の蛇ノ目高台皿でJB-2-h。110は染付、114は辰砂と染付、129は青磁である。110は畳付の釉の拭き取りが雑で、砂が多く付着する。129は蛇ノ目高台の周囲に3足を有す。足の表面には陽刻が認められるがモチーフは不明。見込みはヘラ状のもので陰刻が施される。なお畳付には鉄錆のようなものが付着している。113、115、118～120は高台の断面形が三角形を呈す皿でJB-2-c。113、115は染付、118～120は白磁である。115、118～120は型打成形された皿である。115は見込み周囲に陰刻で雲文、花文などの陰刻が施される。高台内には銘が書かれている。118は口縁部が多角形を呈し、口錆が施された皿である。内面には丸と花文を組み合わせた丸文の陽刻が施される。119、120は口縁が輪花に成形された皿である。119の見込み周囲には花卉状の陽刻が施され、裏側には型打の際の布目痕が顕著に認められる。121は貼付高台の染付変形皿でJB-2-r。口錆が施される。122、123は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた青磁皿でJB-2-k。122の口縁部はわずかに外反する。123の蛇ノ目釉剥ぎ部分に直重ね痕が認められる。124は赤と黒で色絵が施された皿でJB-2-l。122、123と同じく見込みが蛇ノ目釉剥ぎされた皿であるが、畳付以外は施釉され、釉剥ぎした部分にも赤で圏線を施し、その間に黒で松葉が描かれているが、この松葉は輪状の熔着痕の上に描かれたものである。

109、128は大皿・大平鉢である。109は高台断面形状が「U」字状を呈すものでJB-3-b。畳付は内外両側を削り、面付けしている。128は高台内蛇ノ目釉剥ぎされた青磁大皿でJB-3-c。型打成形で、見込みには陽刻が施され、口縁部は輪花状を呈す。釉剥ぎ部分には鉄が塗布されているが、その部分には輪状の熔着痕が認められる。

127、132は鉢である。127は高台断面がシャープな「U」字状を呈すものでJB-5-b。高台内には銘が書かれるが、欠損のため「宣」ともう一文字があることがわかる程度である。132はいわゆる初期伊万里染付鉢でJB-5-a。畳付に砂が付着している。

133～136は坏である。133、134は青花でJA1-6。134は蛇ノ目高台を有し、その部分は無釉にされる。135、136は染付端反形坏でJB-6-b。ともに高台内に銘が書かれている。135にのみ底部内面に二重圏線が施される。

137は染付猪口の輪高台を有すものでJB-7-b。体部は「ハ」の字状に直線的に開いて立ち上がる。高台内に「宣徳年製」銘が書かれている。

138は脚部のえぐりが浅く、面取りが施された染付仏飯器でJB-8-c。胎土は灰色を呈し、呉須の発色も鈍い。

139、140は香炉・火入れである。139は染付され、輪高台を有すものでJB-9-c。高台内には幅5～7mm、長さ2～2.5cmほどの無釉部分が3箇所認められる。140は内外面施釉された青磁でJA4-9。底部には円盤状露胎部を有し、その外側に陽刻が施された3足を有す。



141 は染付瓶で JB-10。ロクロ成形された後、頸部から胴部にかけて縦方向の面取りが施される。畳付には砂がやや多く付着する。

142 は色絵段重で JB-13-c。色絵は赤、黒、黄、緑で施されている。

143 は型作りの白磁の水注で JA1-27。横手を有す。体部は縦半部の2つのパーツから成り、そこに注口および把手を貼り付けている。

144～146 は型作りの合子身と蓋である。144 は破片のため形状、釉調ともに不明。受け部を有すことから身であろう。JB-18。145 は貝形、146 は鳥形を呈す合子蓋である。ともに型作りで、無釉の内面にはナデの痕跡が認められる。

#### 陶器 (105、147～211)

105、147～158 は碗である。105、147～150、157 は肥前系陶器碗 (TB-1) である。105 はいわゆる陶胎染付碗で TB-1-f。高台高が高く、腰部が張り、体部は緩やかに外側へ開き気味に立ち上がる碗である。内外面に染付が施され、畳付脇の釉はやや幅広く削られ、稜を有す。また器面全体に大きめの貫入が認められる。畳付内側に砂目状に砂が集中する箇所が3箇所認められる。147、148 はいわゆる呉器手碗で、147 は TB-1-j、148 は TB-1-a に分類される。147 はいわゆる卵手で、畳付に砂目痕が4箇所ある。149、150、157 は TB-1。149 は外面上半から内面は青緑釉、外面下半は灰釉が掛け分けされた碗である。畳付に砂目痕が4箇所ある。150 は鉄釉碗である。削り出し高台であるが、畳付に糸切り痕が認められる。157 は渦状に白土刷毛目が施された平碗。刷毛目は内面から体部外面上半に施される。畳付釉は削り取られる。見込みにはピン痕状の痕跡が2箇所認められる。151～156 は瀬戸・美濃系陶器碗 (TC-1) である。151 は柿釉天目碗で TC-1-a。削り出し高台であるが、高台内の削り込みが非常に浅い。また畳付に糸切り痕が残る。152、155、156 は TC-1。152 は鉄釉碗である。腰が張り、稜を有す。畳付釉は拭き取られるが、その内側には砂が付着する。155 は腰が張った灰釉碗。体部1箇所に鉄絵が施される。胎土は灰色を呈し、比較的緻密である。畳付の釉は拭き取られるが、拭き取りがあまく、畳付に輪状の熔着痕が認められる。156 は体部外面に細かい糸目のある鉄釉碗。口縁部はいわゆる沓茶碗のように変形している。153 は灰釉が流し掛けされた柿釉丸碗で TC-1-ag。高台は「ハ」の字状に開き、中程が括れる。畳付中央が溝状に窪まされ、畳付外周が浮いたような状態となっている。154 は飴釉が施釉された平碗で TC-1-ah。高台周囲の釉は拭き取られる。158 は京都・信楽系灰釉平碗で TD-1-h。見込みには少し大きめのピン痕が3箇所ある。また高台内には楕円形に「京」の刻印がある。

159～183、187 は皿・平鉢である。159～161 は肥前系 (TB-2) である。159 は青緑釉輪剥皿で TB-2-a。見込みは青緑釉、外面は灰釉が掛け分けられる。砂目痕が見込みに1箇所、畳付には3箇所残る。160 は透明釉砂目皿で TB-2-d。いわゆる卵手で、見込みには鉄絵が施される。砂目痕は見込みに3箇所あるが、高台脇に熔着痕が認められる。161 は見込みは青緑釉、外面は灰釉が施釉されるものである。青緑釉輪剥皿 (TB-2-a) の見込みが釉剥される前の焼成法を用いたもので、砂目痕が見込みと畳付に4箇所あるが、畳付のそれは高台脇にまでおよぶ。TB-2-b。162～180、187 は瀬戸・美濃系 (TC-2) である。162 は灰釉鉄釉掛分皿で TC-2。灰釉が施釉された部分には鉄絵も施される。見込みには3つのピン痕が1単位で、それが円周状に3単位認められる。高台内まで施釉されるが、畳付内側に輪状に熔着痕が認められる。163、164 は灰釉端反皿で TC-2-y。163 は見込みにピン痕が5箇所ある。畳付から高台内の釉は拭き取られる。164 は見込みには直重ね痕、高台内は釉が拭き取られ、そこに円錐ピン痕が5箇所認められる。165、167 は見込みに直重ね痕がある灰釉皿で TC-2-b。165 の灯芯痕は口縁部内側には若干認められる程度であるが、口縁部外側は

それより顕著である。また高台内にも灯芯痕がわずかに確認できる。166は見込みにピン痕が3箇所ある長石釉皿でTC-2-c。畳付部分が二次的に削り取られる。口唇部に灯芯痕が認められる。168はいわゆる志野織部皿でTC-2-s。見込みに輪状の熔着痕がある。169～171は鉄絵皿でTC-2-j。内外面に長石釉が施釉され、内面に鉄絵が施される。高台内釉は拭き取られる。また見込みや底部に1～2箇所ピン痕が残る。172、173は外面にしごきのある灰釉菊皿でTC-2-k。ともに口縁部付近に緑釉が流し掛けられる。型打成形で内面は菊花状にされ、見込みには沈線状の圏線を有す。2-kでも初現的な様相を呈すものである。174～176は灰釉輪髡皿でTC-2-m。174は見込みに凸帯を有し、その部分の釉が削られ無釉にされている。また見込み中央に印花文を有すなど、初現的な2-mの様相を呈す。なお本品は二次的な火熱を受ける。175も見込みに凸帯を有すが、174より低く、釉は拭き取られただけのもとなっている。釉剥ぎ部分に輪状の熔着痕が認められる。口縁部内側には砂が集中する箇所が認められる。176は見込みの釉を輪状に拭き取っただけのもであり、175同様、その部分に輪状の熔着痕が認められる。高台内には墨書がある。177は灰釉ヒダ皿でTC-2-n。白濁したガラス質の灰釉が厚く施釉され、器面には大きめの貫入がみられる。高台内は施釉されるが、畳付周囲の釉は拭き取られる。口縁部には灯芯痕が認められる。178は口縁部数箇所が外側から押さえられ変形された灰釉皿でTC-2。高台内の釉は拭き取られ、見込みにはピン痕が3箇所ある。なお口縁部1箇所が浅い「U」字状に削られ、その周囲に灯芯痕が集中する状況が看取される。179、180は3足を有す灰釉形皿でTC-2-x。ともに植物の葉をモチーフとした形皿であるが、内面はその葉脈まで陽刻により表現されている。179は裏側にピン痕が3箇所ある。180は足の周囲の釉が一部拭き取られる。187はいわゆる黄瀬戸鉢でTC-2-w。総釉掛けされ、高台内の釉のみ拭き取られる。口縁部内側に波状文状の沈線が施される。見込みにはピン痕が3箇所、高台内には団子状トチ痕が4箇所認められる。181、182は京都・信楽系(TD-2)である。181は京都・信楽系皿でTD-2。立ち上がりが低く、口縁部の一部が変形した皿である。見込みの文様は呉須で施文され、高台内には浅い円刻の中に、二段角方形枠に「建」の篆書体と思われる刻印がある。いわゆる肥前系京焼陶器皿(TB-2-c)の元となった皿か。182はいわゆる軟質施釉陶器の形皿でTD-2。3足を有す。器面全体が白化粧され、見込みには赤、緑、黄の色絵が施される。183は志戸呂系皿でTF-2。内外面無釉で、裏側に右回転糸切り痕がある。見込み中央は円形に赤色化し、口縁部には一部二次調整したような痕跡が認められる。なお本品は見込みの調整が粗く、皿ではなく蓋の可能性もある。

184、197は壺・甕である。184は肥前系ロクロ成形のものでTB-15-a。内外面に白土により刷毛目が施される。197は瀬戸・美濃系の高台のあるものでTC-15-f。二耳壺と思われる。

185、186、188は大皿・大平鉢である。186は肥前系(TB-3)、他は瀬戸・美濃系(TC-3)である。185はいわゆる笠原鉢でTC-3-a。口縁部内側のみに緑釉が流し掛けされる。畳付から高台内の釉は拭き取られるが、その部分に粘土塊が2個付着する。見込みには足付きトチ痕が2箇所残る。186は白土刷毛目が施された鉢でTB-3-a。体部下半から畳付外周はケズリ調整される。見込みおよび畳付には砂胎土目痕が4箇所残る。188は灰釉に緑釉が流し掛けされたいわゆる黄瀬戸鉢でTC-3-b。ともに見込みに印花文と、その周囲に櫛描きで圏線が施される。見込みには団子状トチ痕が4箇所残り、畳付周囲の釉は拭き取られる。

189はいわゆる煙硝播でTC-64。口縁部は外反し、端部は内側に折り返され、玉縁状を呈す。見込みは露胎にされ、口縁部から体部上半に柿釉が施釉される。露胎部分に一部熔着痕が認められる。口縁部釉が二次的に剥落している。

190～193は瀬戸・美濃系香炉・火入れで、190は灰釉香炉でTC-9-a、191は鉄釉香炉でTC-

9-b、192、193は袴腰の柿釉香炉でTC-9-fに分類される。190、192は3足を、191、193は輪高台を有す。190、192には口縁部内側に敲打痕が認められる。190の足はよく見られる三角錐状のものではなく、紐状のもの両側を摘んで貼り付けたものである。口唇部から内面の釉が雑に拭き取られている。

194は灰釉が施釉された足付きの水盤でTC-5-f。口縁部が一部押さえられ変形している。底部の釉は拭き取られる。底部には団子状トチ痕が2箇所、見込みにはピン痕が2箇所残る。また体部と底部の境あたりに熔着痕が認められる。

195、196は瓶である。195は瀬戸・美濃系鉄釉瓶でTC-10。飴釉が流し掛けられる。底部周辺の釉は拭き取られ、畳付には団子状トチ痕が3箇所ある。196は備前系瓶でTE-10。口縁から胴部にかけて自然釉が掛かる。胴部中程に熔着痕が認められる。

198～206は播鉢である。198～202は瀬戸・美濃系でTC-29。198の口縁部は小さく内側に折り返され、玉縁状を呈す。播目は細かく、20条1単位で施される。199の口縁部は外側に折り返され、それが体部外面にほぼ密着し縁帯状を呈す。播目は10条1単位で施される。200～202の口縁部は外側に折り返され、口縁部内側に顕著な段を有すものである。200の播目は12条1単位で施され、底部内外面に団子状トチ痕が4箇所ある。201の播目は19条1単位で施され、200と同じく底部内外面に団子状トチ痕が4箇所あるものであるが、団子状トチが置かれた部分の釉は不整形に拭き取られている。底部の摩滅が著しい。202は外側に折り返した口縁端部を内傾気味に立ち上げている。播目は11条1単位で施される。203～205は無釉焼き締め丹波系播鉢でTK-29。203は体部外面の指圧痕が顕著である。播目は6条1単位で施される。底部に熔着痕が認められる。204は外面に鉄泥が施される。口縁部は内傾する。口唇部は平坦にされ、その直下は浅い溝状のものが巡る。播目は5条1単位でやや粗く施される。底部外周にわずかに播目痕が認められる。205も内外面に鉄泥が施されるが、底部の泥土は拭き取られる。播目は7条1単位で施される。体部内面にわずかに熔着痕が認められる。206は内外面に薄く錆釉が施釉された志戸呂系播鉢でTF-29。底部には右回転糸切り痕が認められる。播目は金櫛状の細かいもので密に施される。残存状態が不良のため判然としないが、少なくとも底部に1箇所胎土目のようなものが認められる。

207は瀬戸・美濃系銚子でTC-27。蓋受け、上手の把手、3足を有す。注口はロクロ成形で半筒形にされたものが貼付られている。受け部、足の先端まで含めて総釉掛けされる。底部内面にピン痕が3箇所、底部には輪状のトチ痕が認められる。

208～211は蓋で、210が肥前系、他は瀬戸・美濃系である。208は橋状の摘みを有す鉄釉壺・甕の蓋である。裏側の口縁部付近に輪状の熔着痕と、中央に右回転糸切り痕が認められる。209、211は水注の蓋である。209は灰釉が総掛けされ、表、裏側に1箇所ずつ熔着痕が認められる。210は鉄釉壺・甕あるいは水注の蓋と考えられるものである。口縁部付近に輪状の熔着痕と、中央に右回転糸切り痕がある。

#### 土器 (212～246)

212～233はかわらけ(DZ-2)である。212、214～216、219～222、224、225、228、229、231、232は口縁部に灯心痕がある。213、221、231は底部が熱により赤色化している。212～217、219、221、222、225、229、231、233はDZ-2-aに分類される。213、215、233の底部には離れ糸切り痕が認められる。212は体部外面のロクロ目が顕著である。214は体部下半に段を有す。219は内底部と体部境を強く撫でてている。221の口縁部は外反し、灯心痕は体部内面中程まで及ぶ。底部は円形に赤色化し、繊維状の圧痕が認められる。222は内底部と体部境が強く



撫でられ溝状に窪む。また底部と体部の境に段を有す。タール状の灯心痕が口縁部を全周する。231は底部に糸切り痕の糸尻が2箇所認められ、体部と底部の境に段を有す。218、220、224はDZ-2-k。218、224の胎土は赤、黒色などの粒子を多く含む粗いものである。体部は強く内湾し、口縁部がわずかに外反する。糸切り痕は比較的粗い。220は器高が低く、体部中程に緩やかな稜を有す。223、230はDZ-2-b。ともに底部と体部の境に段を有す。226～228は底部が平滑な上製かわらけでDZ-2-d。226は上製かわらけの内外面に金箔が貼られたいわゆる金箔かわらけである。227は底部にいわゆる三つ星のあるものである。底部に一部糸切り痕のような痕跡が認められる。228はいわゆる内ぐもりのあるものである。232はDZ-2。胎土は淡赤褐色を呈し、器面には金雲母が多くみられる。型作りで、内面はナデ、外面は底部も含めてミガキ調整される。

234～236は火鉢（DZ-31）である。234、235は軟質瓦質丸火鉢でDZ-31-b。体部外面はミガキ調整される。また口縁部内側には敲打痕が認められる。234は口縁部外側に面取りが施される。底部の足は琴柱に似た形状を呈す。体部が一部円形に赤色化している。236は土師質風炉でDZ-31-h。器高がやや低い筒形を呈すが、胴部の上から1/3ほどのあたりが屈曲するものである。口縁部から体部中程にかけてU字状の窓が1箇所あけられる。体部中程には逆三角形の押印文が施される。口縁部、窓部分はミガキ調整、他は内外面ともにナデ調整される丁寧な作りのものであるが、わずかに体部内面に輪積み整形の痕跡も認められる。なお底部には足が貼付られていた痕跡がある。

237、238は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。ともに団子状の内耳が1箇所残るが、237は耳が付けられた部分の体部が幾分膨らみ、238は耳が付けられた部分の体部は窪む。

239は軟質瓦質の瓦燈の蓋の鐔部分である。DZ-45。

240～245は塩壺（DZ-51）である。240は輪積成形で二重角椀「ミなど藤左衛門」の刻印のある塩壺でDZ-51-a。内面が白色化している。241、242は輪積成形で二重角椀の「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-c。同刻印を有すものであるが、241の方が小形で、頸部の括れも、指頭痕も明瞭である。243は板作成形で「いつミや 宗左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-ad。胎土は白色に近く、混和物も少ない。体部はゆるやかな袋状を呈す。内面には布目が顕著に残る。244、245ロクロ成形で壺形を呈すものでDZ-51。244は底部に糸切り痕が残るが、欠損のため回転方向は不明である。

246は軟質瓦質の火消し壺の蓋である。

#### (5) D1層（IV-269～293 図247～489）

##### 磁器（247～325）

261、262、296、304は景德鎮窯系（JA1）、297は産地不明（JZ）、他は肥前系（JB）である。

247～257、259、260は碗で、249は青磁、251は青磁染付、260は白磁、他は染付である。247～249はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。247は焼成が不良で呉須は黒ずみ、畳付に砂が付着する。249の高台は兜巾高台状で、口縁部はわずかに外反する。見込みは一段割り込まれる。250、251は底部無釉碗でJB-1-b。250は口縁部直下内面の透明釉がやや厚く施釉される。251は天目形を呈し、外面は青磁釉、内面は透明釉と染付が施される。252～257は高台の断面形が三角形を呈す碗でJB-1-c。252、257はいわゆる芙蓉手の碗で、高台内には252は「大明」銘、257は異形字が書かれている。255、256も高台内に銘が書かれている。255のそれは寿福の変形文字か。259はいわゆる初期伊万里の筒形碗でJB-1-k。胎土は灰色味をおび、呉須も黒ずむ。畳付には砂が付着する。260は腰が張り、体部中程に括れを有し、口縁部が外反する碗である。畳付の釉は削り取ら

れるが、処理があまく、畳付に熔着痕が認められる。JB-1。

261～292、294、299～301、303は皿・平鉢である。261、262は青花、268、292は白磁、269は褐釉、273、274、281～286、294、299～301は青磁、303は鉄釉、270は色絵、他は染付である。261、262は青花皿でJA1-2。262は型打成形の輪花皿で、体部内面には陽刻がある。二次的な火熱を受ける。263～269、275～277、279、288、299、300、303はいわゆる初期伊万里の皿でJB-2-a。263から268はいずれも型打成形の皿で、263～267は体部が捻子花や菊花状に、268は内面に陽刻が施される。モチーフは異なるが、263～267の絵付はいずれも見込み周囲に圏線を1本、その中央に一枚絵、裏文様はなしというパターンが共通する。なお265、266は口銹を有す。275はいわゆる日字鳳凰文皿である。276は口縁部がわずかに外反し、その部分に圏線が1本巡る。299、303は輪高台の周囲に3足を有し、見込みにヘラ彫りによる陰刻が施された皿である。299の畳付には多量の砂が付着している。303は口縁から体部が輪花にされ、見込みには陰刻の他に、型作りで透明釉が施釉された梅と切り竹が貼付られる。畳付内外側に砂が付着する。なお本品と類似し、青磁釉が施釉されたものが三股青磁古窯跡から出土している（長崎県波佐見町教育委員会1998『三股青磁窯跡』）。300は型打成形で体部に縦しのが施され、さらに見込みにヘラ彫りによる陰刻が施される。270～274、290～292は高台の断面形が三角形を呈す皿でJB-2-c。270～273は高台内にハリ支え痕が1箇所ある。270は見込みに色絵の痕跡のみが残る。畳付内側に砂が付着する。271は口縁部が小さく外反する。高台内には角椀銘が書かれている。273は罍皿である。内面全体に陰刻が施されるが、見込みの雷文は型押で、他の文様はヘラ状のもので施されている。274は体部が底部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する皿である。見込み中央付近が内面全体よりわずかに低く円形に削り込まれている。290は型打成形され、内側面に細かいしのがを有す。欠損のため判読できないが、二重角椀銘が書かれている。291は深めの皿で、体部内面の釉下にカナナ痕が認められる。見込み中央が一段低くされ、その部分に稜を有す。292は体部がハの字状に外側へ大きく開き、器高が低い皿である。内面全体に型打成形により陽刻が施される。高台内にハリ支え痕が1箇所ある。278はJB-2-s。畳付には砂が多く付着する。280は糸切り細工の形皿でJB-2-r。281～285は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされたものでJB-2-k。丸皿が中心であるが、281のような罍皿のようなもの、282、283のように口縁部が外反するものもある。いずれも畳付には砂、蛇ノ目釉剥ぎ部分には輪状の熔着痕が認められる。286は見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小さいものでJB-2-l。口縁部はわずかに外反する。底部施釉され、畳付釉のみケズリ調整される。287、294はJB-2。287は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿と思われるが欠損のため、底部の様子が不明。内面に染付が施される。294は高台高が高く、体部が内湾しながら低く立ち上がり、口縁部が小さく外反する平鉢である。付高台で、高台内に段を有す。289、301は蛇ノ目高台を有す初期伊万里皿でJB-2-h。ともに畳付の釉は拭き取られる。301は高台内まで一部施釉されるが、畳付釉はケズリ調整される。

293、295は大皿・大平鉢である。293は高台断面の形状が「U」字状を呈す染付大皿でJB-3-b。高台内には丸に「福」字の変形字と思われる銘と、大きめのハリ支え痕が4箇所ある。295は高台断面が逆台形を呈すものでJB-3-f。いわゆる古九谷様式の青手の大皿である。高台内には角椀銘が書かれる。

296～298、302は鉢である。296は白磁端反鉢でJA1-5。底部は碁笥底であるが、そのすぐ脇を畳付状に浅く削り込んでいる。見込みには毛彫りで陰刻が施される。297は手づくねで、底部に足を有す色絵鉢でTZ-5。口縁部は細かい輪花にされ、体部の一部が大きく窪まされている。体部内

外面には毛彫りで花びら、あるいは葉脈のような陰刻が施される。底部に残る足も全体が紫色に塗られる。298は高台断面形が「U」字状を呈す染付鉢でJB-5-b。高台内の銘は「誉」字銘か。302は高台内が蛇ノ目釉剥ぎされた青磁鉢でJB-5-c。口縁部は輪花にされ、体部内側面と口縁部直下外面の雷文はヘラ彫りによる陰刻、見込みは型打による陰刻が施される。畳付まで施釉され、畳付内側の付け根あたりにチャツ痕が認められる。

258、304～311は坏である。258は白磁丸形坏でJB-6-a。体部外面のロクロ目が顕著である。304は青花坏でJA1-6。高台は蛇ノ目高台状にされ、無釉である。305～311は染付坏で、305～307は丸形を呈すものでJB-6-a、308～311は端反形を呈すものでJB-6-bに分類される。305、308は底部無釉である。306、307の畳付には砂が付着する。307はその大半が欠損しているが、高台内に銘がある。310、311はそれぞれ高台内に「宣徳年製」、「太明成化年製」銘が書かれている。なお310の見込みには輪状の擦痕が認められる。

312は染付が施された脚部のえぐりが深い仏飯器でJB-8-a。胎土は淡灰色を呈し、呉須も黒ずむ。底部無釉である。

313は青磁香炉で、底部に円盤状の露胎部があるものでJB-9-a。露胎部の周囲と残存する足の先端に熔着痕が認められる。

314～316は瓶である。314は白磁で、型打成形され、外面上半が菊花状を呈す。底部無釉である。JB-10。315、316はいわゆる初期伊万里の染付瓶でJB-10-e。ともに畳付の釉はケズリ調整されるが、315の底部全体にはやや粗い砂が、316は畳付脇に細かい砂が付着する。

317は白磁壺・甕でJB-15。ロクロ成形で、高台は削り出し高台である。肩部に環状の耳が1箇所残り、その下にノミ状のもので太短いしのが帯状に巡らされる。頸部の欠損部には敲打痕が認められる。

318は染付水滴でJB-19。型作りで、2パーツ以上を貼り合わせたものである。

319～325は蓋である。319、320、325は青磁、321、322、324は染付、323は白磁である。319～321は壺・甕の蓋である。摘みの形状は319は環状、320は型作りで獅子形を呈す。320の獅子形の摘みは、白磁に鉄釉が縦半分のみ施釉される。322の無釉の内面には同心円状のケズリがある。端部が一部欠損するが、割れ口の状態から二次的に欠損部を調整した可能性もある。蓋物の蓋か。323は水注の蓋である。324は楕円形の合子の蓋か。手づくねである。325は青磁香炉の蓋か。表側には陰刻がある。また大きさの異なる穴が6個開けられている。

#### 陶器 (326～441)

326～351は碗である。326～337、349、351は肥前系(TB-1)のものである。326～330はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。330は兜巾高台状を呈し、体部外面に青緑釉が流し掛けられる。331はいわゆる卵手でTB-1-j。器厚も比較的薄く、畳付には砂目痕が3箇所ある。332、333はいわゆる京焼風陶器で、332は外面に主文様があるものでTB-1-b、333は内面に主文様があるものでTB-1-cに分類される。332の高台内には浅い円刻の中に一行書「清水」の銘が、333の高台内には浅い円刻の中に小判形の銘がある。334は内外面に白土渦刷毛目が施された丸碗でTB-1-d。胎土は暗灰色を呈し、高台高が高いものである。畳付に砂が付着する。335は青緑釉が施釉された丸碗でTB-1-i。内面には透明釉が施釉され、畳付から高台内は無釉である。336、337、349、351はTB-1。336、337は器形的にはいわゆる呉器手碗に近い碗であるが、336は胎土が赤橙色を呈し、透明釉が施釉された碗であり、337は胎土が淡灰色を呈し、灰釉が施釉された碗である。なお337の畳付はケズリ調整されるが、そこに熔着痕が認められる。349は平碗である。胎土は緻密で淡灰色を呈す。畳付は内外両側が削られ、高台断面形は三角形を呈す。内面には白土による象嵌、外面に



は白土による渦刷毛目が施される。351 は口縁部がわずかに外反する碗である。胎土は白色を呈し、黒色粒子をやや多く含む。内面には灰釉、外面には白釉? が施釉される。畳付の釉は拭き取られるが、雑であり、熔着痕が認められる。338 ~ 347 は瀬戸・美濃系碗 (TC-1) である。338 ~ 340 は天目碗で TC-1-a。338 は大振りで、口縁部直下の括れもしっかりとしたものである。口唇部内側直下に熔着痕がある。339 は黒釉が比較的厚く施釉され、口唇部内外面には鉄釉が浸け掛けされる。見込みには輪状の擦痕が認められる。340 は小振りの天目碗である。畳付のケズリが雑なものである。341、342 は長石釉丸碗で TC-1-j。341 は体部上半に段を有す。343 は腰が張った、灰釉丸碗で TC-1-aa に分類される。底部付近は無釉で、釉は浸け掛けされる。344 はいわゆる尾呂茶碗で TC-1-o。内外面にうのふ釉が流し掛けられる。345 ~ 347 は鉄釉碗である。345 は筒形碗で TC-1-ai、346、347 は丸碗で TC-1-ag に分類される。345、346 は口縁部に飴釉が浸け掛けされる。345 の底部は赤色顔料が塗られ、その上に黒色のタール状のものが付着する。347 は口縁部がわずかに外反する碗であるが、口縁部の大半が細かく叩かれ二次調整されている。また一部畳付にも敲打痕のような痕跡が認められる。348 は京都・信楽系の灰釉碗で TD-1。ロクロ成形であるが、体部が図のように菱形に変形され、そのうち1面に藤の花の銹絵染付が施される。350 は産地不明の陶器碗で TZ-1。比較的大振りな丸碗である。胎土はにぶい橙色から白色を呈し、黒色粒子を少量含む、やや粗い。畳付以外、内外面に白釉が施釉され、外面には鉄で絵付が1箇所施される。

352 ~ 376、379、381 ~ 385、387 ~ 390 は皿・平鉢である。352 ~ 360、379、381 ~ 385、387 は肥前系のもの (TB-2) である。352 ~ 354、384 は青緑釉輪剥皿で TB-2-a。いずれも外面には透明釉が施釉される。353 の輪剥部分には輪状の熔着痕と砂目痕が4箇所ある。354 は口縁部外反し、一部変形されたもので、353 同様、輪剥部分に輪状の熔着痕と砂目痕が3箇所ある。384 は高台高の高い平鉢である。わずかに残存する口縁部には指で小さく押し、変形させた痕跡がある。畳付から高台内は無釉である。内面の釉剥ぎ部分には赤色顔料が施され、5箇所の目跡がある。355 ~ 357 はいわゆる京焼風陶器皿で TB-2-c。355、356 は高台内に浅い円刻を施し、その中に刻印を有す。355 は四隅が変形された角枠に「建」の篆書体か。356 は角枠に「都」の篆書のような文字と、行書の「清水」の2つの刻印を有す珍しいものである。357 は高台部のみ残存するものであるが、高台内が蛇ノ目釉剥ぎされ、そこにチャツ痕が残存する。なお本品は二次的に周囲を打ち搔いたような痕跡がみられる。358、360、385 は透明釉が施釉された砂目皿で TB-2-d。いわゆる卵手の製品で、358、360 は畳付まで、385 は畳付以外、高台内まで施釉される。358 は砂目痕が畳付のみに3箇所残存する。360 の砂目痕は見込みに5箇所、畳付に4箇所確認される。385 は変形平鉢である。輪高台を有し、内面にはヘラ状のものによる陰刻が施される。畳付に砂目痕が4箇所残る。359、387 は灰釉砂目皿で TB-2-b。359 は畳付まで施釉される。見込みは一段低く削られ、小さな段を有す。見込みと畳付に砂目痕が4箇所ある。387 は外面に鉄泥が施された上に灰釉、内面は灰釉と青緑釉が掛け分けされる。見込みと畳付には白色砂目痕が6箇所ある。なお本製品は将来青緑釉砂目皿として TB-2-b から分離される可能性もある。379、381 は刷毛目皿で TB-2-g。379 は残存する部分を見る限り、外面は無釉である。また見込み周囲上半には刷毛目が施され、緑釉も流し掛けされるが、その下半から見込みは露胎とされる。高台にはアーチ状のケズリが1箇所ある。なおその相対する位置にも大半が欠損しているが、アーチ状のケズリがあった痕跡が認められる。見込みには目跡が4箇所ある。381 は畳付以外の底部には鉄釉が、体部外面から内面は白土刷毛目に飴釉が施される。見込みには3箇所の白色の胎土目と、それらとやや離れた位置に、しかも大きさも向きも異なった胎土目のような痕跡が1箇所認められる。また畳付にも胎土目痕が5箇所ある。382、383 は

象嵌が施された皿でTB-2-h。382は内面に3種類の印花と圏線に白土が充填されたもの。外面下半に鉄釉、外面体部上半から内面に灰釉が施釉される。畳付周囲の釉は拭き取られるが、そこに熔着痕や砂胎土目痕が残る。見込みには砂胎土目痕が5箇所残る。383の外面は畳付までも含めて白化粧されるが、その畳付には繊維状の圧痕が認められる。361～375、390は瀬戸・美濃系皿・平鉢(TC-2)である。361、362、374は灰釉端反皿でTC-2-y。361、362は一部高台内まで施釉される。361は見込み、高台内ともにピン痕が5箇所確認されるが、高台内には円錐ピンと思われる粘土塊がそのまま付着している。体部内外面に熔着痕が認められる。362も見込みにはピン痕が5箇所確認され、高台内には輪状トチ痕が認められる。374は畳付脇が水平に削られ、底部は無釉である。363は直重ね痕がある灰釉丸皿でTC-2-b。体部外面のケズリが顕著である。364、365は長石釉が施釉された丸皿でTC-2-c。ともに見込みにピン痕が3箇所ある。366は鉄絵蘭竹文皿でTC-2-j。総釉掛けされ、畳付には熔着痕がみられる。見込みと高台内にはピン痕が3箇所ある。367～370は外しのある菊皿でTC-2-k。いずれも型打成形で見込みは菊花状にされるが、見込みにも沈線状の円圈あるいは花卉状の陰刻を有す。367はいわゆる黄瀬戸釉が施釉され、口縁部に緑釉が浸け掛けされる。見込みにピン痕が3箇所ある。368は高台内まで一部施釉され、畳付に熔着痕が認められる。見込みにピン痕が3箇所ある。371は灰釉輪禿皿でTC-2-m。高台内の削り込みがごく浅い。372、375はTC-2。372はいわゆる御深井釉が施釉された丸皿で、高台無釉である。375は口縁部5箇所を押さえ、大きめの輪花にされた灰釉皿である。総釉掛けされ、畳付の釉は拭き取られる。底部にはピン痕が3箇所と、ヘラ書きで「天下一ノ不□」とある。373はいわゆる志野織部皿でTC-2-s。鐔状の口縁部を有し、そこに鉄絵が施される。畳付から高台内は無釉である。390はいわゆる笠原鉢でTC-2-v。器高が非常に低いものである。総釉掛けされ、見込み、高台内に胎土目痕が3箇所残る。376は京都・信楽系のいわゆる軟質施釉陶器の形皿でTD-2。胎土は白色を呈す。白化粧され、見込みには赤、茶で色絵が施される。底部には足が1箇所残る。なお本製品と極似する皿がD2層で確認されている(D2層182)。388、389は藁灰釉が施釉された産地不明皿・平鉢でTZ-2。388は口縁部が緩やかな輪花を呈す。胎土は緻密で、淡灰色を呈す。底部無釉であるが、体部と底部の境には滴状に釉溜まりが認められる。389は底部以外施釉され、見込みには餡釉が流し掛けられる。胎土は緻密で、灰白色から淡橙色を呈す。見込みには目跡が1箇所ある。

377、378、380、386、391は大皿・大平鉢である。377、378、380、386は肥前系のもの(TB-3)である。377、378、380は刷毛目が施されたものでTB-3-a。377、380の外面上半は白化粧され、内面は鉄釉と青緑釉が流し掛けされる。見込みには砂胎土目痕が6箇所ある。378は内側面は白土による渦刷毛目と透明釉が施釉され、見込みは鉄泥が渦刷毛状に施されたものである。見込みには砂胎土目痕が7箇所あるが、畳付にも同様の痕跡が残る。386は象嵌大平鉢でTB-3-b。高台内は無釉、畳付釉は拭き取られる。見込みには白色胎土目痕が6箇所、畳付には7箇所確認される。391は瀬戸・美濃系のいわゆる黄瀬戸鉢でTC-3-b。畳付およびそのすぐ内側部分の釉のみ拭き取られる。見込みには輪トチあるいは板トチ痕と思われる3つで1組の目跡が2箇所認められる。

392はいわゆる煙硝播鉢でTC-64。口縁部から体部外面上半は鉄釉が施釉され、内面は露胎にされる。畳付が1段削り込まれ段差を有す。

393～396は坏で、393は肥前系のものでTB-6、他は瀬戸・美濃系でTC-6に分類される。393は濁った鉄釉、394は鉄釉、395は柿釉、396は灰釉が施釉される。いずれも削り出し高台で、底部は無釉である。

397～402は瀬戸・美濃系香炉・火入れで、397、398、402はいわゆる袴腰のものでTC-9-f、

399～401は鉄釉が施釉されたものでTC-9-bに分類される。397、398、401、402には口縁部に敲打痕が認められる。398は3足を有し、腰部付近に鱗状の陽刻がある。400の口縁部内側の釉は拭き取られる。底部中央付近の内外面および割れ口にタール状の付着物が認められることから、欠損後、二次的な利用がなされた可能性もある。

403～411は瓶である。403、404は瀬戸・美濃系でTC-10。ともに底部が幅広の蛇ノ目高台状に削り込まれたもので、403は畳付を、404は畳付脇から畳付の釉が拭き取られる。403は胴部と畳付に熔着痕が認められる。404も畳付に熔着痕がみられる。また欠損した頸部は2次調整されている。405～410は備前系のいわゆる伊部手の泥土が施された瓶である。胎土は405～408、410は赤味を帯びたものであり、409は暗褐色を呈す。409以外はすべて刻印を有す。405～407はフラスコ形を呈すものでTE-10-b。いずれも畳付脇がケズリ調整され、稜を有す。405の胴部下半には自然釉が掛かる。406は火襷が認められる。408、410はTE-10。408、410は胴部4箇所がくぼまされるものであり、410は外面に火襷が認められる。409は外面が丁寧にナデ調整され、器厚も薄いものでTE-10-aに分類される。肩から胴部中程に自然釉が掛かる。411は志戸呂系でTF-10に分類される。頸部は欠損しているが、いわゆる由衛門徳利であろう。胴部が釣鐘形を呈すことから、由衛門徳利の中でも初現的なものである。胴部には鉄釉が浸け掛けされ、底部は無釉で、熔着痕が認められる。

412～418は壺・甕である。412、413は肥前系ロクロ成形のものでTB-15-a。412は鉄釉、413は体部上半に青緑釉、下半に鉄釉が施釉される。ともに内面まで施釉されるが、施釉具合をみるとムラがあることから、口縁部から流し込み、あるいは回し掛けたものと思われる。412の高台は削り込み高台で、畳付には糸切り痕が認められる。414は瀬戸・美濃系ベタ底のものでTC-15-e。肩部に紐状の外耳を有すもので、底部まで鉄釉が施釉される。畳付脇と口唇部直下の内側に輪状に熔着痕が認められる。なお口唇部は摩滅し、無釉となっている。415は京都・信楽系のいわゆる腰白茶壺でTD-15-a。内面胴部中程に粘土の継ぎ目が認められる。416～418は丹波系のものでTK-15。416の胎土はにぶい橙色を呈し、1～2mm大の半透明の石や赤色粒子を多く含み粗い。胴部に括れを有し、その部分から下はナデ調整、上はロクロ目を残し意匠としている。胴部下端には細い帯状の凸帯を作り出し、その表面に陰刻を施している。底部脇の括れた部分は無釉、他は鎊釉を施釉し、口縁から胴部中程には鉄釉が浸け掛けされる。底部の釉は拭き取られる。なお外面全体に自然釉が掛かる。417の胎土は淡灰色を呈し、1～2mm大の黒色粒子や半透明の石をやや多く含み、多孔質である。胴部内面に粘土の繋ぎ目が顕著に認められる箇所があり、その粘土の上には指頭圧痕も確認される。外面には鉄釉に黒釉が流し掛けされ、内面および底部は無釉にされる。418の胎土は全体的には淡灰色を呈すが、その中に縞状に黒色あるいは白色の胎土を含む。また、1～3mm大の白色の石も少量含む。外面には鎊釉が施釉され、灰釉が流し掛けされる。底部は無釉で、熔着痕が認められる。

419は瀬戸・美濃系の灰釉水注でTC-27-d。

420～431は播鉢である。420～424、431は瀬戸・美濃系でTC-29。420、421の口縁部は外側に折り返されるが、体部にまだ完全には付かない段階のものである。420は口縁部1箇所を軽く指で押さえ、注口としている。播目は11条/1単位で12単位施される。底部には右回転糸切り痕と、トチ痕が2箇所残存する。421は底部内面から体部下半の摩滅が著しいが、播目は10条/1単位で10単位施される。底部内面にはトチ痕が3箇所確認できる。底部脇に播目痕が認められる部分がある。422は外側に折り返された口縁部が体部に密着し、口唇部直下の外側に稜を有すものである。播目は11条/1単位で、底部内面にはトチ痕が3箇所残る。底部は無釉で、右回転糸切り痕が顕著である。



423、431 の口縁部は外側に折り返され、そこから上方に立ち上げられたものである。423 の播目は11条 /1 単位で12単位施され、底部内面にはトチ痕が4箇所ある。底部は粗くナデ調整され、釉は拭き取られる。431 の播目は16条1単位で施され、底部内面にトチ痕が2箇所残る。体部内面の底部との境付近は摩滅がひどく完全に露胎となっている部分もある。424 の口縁部は内側に折り返され、体部に貼り付けられたものである。播目は11条 /1 単位で施されるが、播目が口縁部の折り返された部分にまでおよぶ。底部には成形時に切り離された際の粘土塊が残存し、底部が浮いている。425～430 は丹波系でTK-29に分類される。425 は体部外面にはロクロ目が顕著なものである。播目は6条 /1 単位で隙間なく密に施される。底部以外には鉄泥が施される。426～428 は口縁部断面形が方形を呈すもので、体部外面には指圧痕が顕著に認められる。また426、428 の播目は9条 /1 単位で施される。428 は口縁部外側から摘み出されたような注口が1箇所ある。427 の播目は7条 /1 単位で比較的密に施される。体部内面下端あたりに陶片が1箇所付着する。なお底部には熔着痕が認められる。429 は口縁部断面形が三角形を呈すもので、播目は7条 /1 単位で施される。体部外面下端付近に播目状の痕跡のある小さな陶片が1箇所熔着する。430 の口縁部断面形も三角形を呈すが、そこに段を有すものである。播目は6条11単位で施される。底部外周に熔着痕、全体にごく薄く植物繊維状の圧痕が認められる。

432～441 は蓋である。432～434 は肥前系の壺・甕の蓋である。432、434 は青緑釉、433 は鉄釉が施釉される。432 は受け部分がほぼ円形に欠損しているが、その部分の断面がきれいに調整された様子が見える。何らかの2次利用を考えたのか。433 は裏側に右回転糸切り痕と輪状の熔着痕が認められる。434 は裏側中央に円柱状の凸部を有し、その部分の先端には右回転糸切り痕が認められる。435～441 は瀬戸・美濃系の蓋である。435、438、440、441 は鉄釉、436 は鉛釉、437 は白釉、439 は錆釉が施釉される。435 は鉤状の摘みを有す壺・甕の蓋で、裏側は糸切り痕がケズリ調整される。436 は橋状の摘みを有す壺・甕の蓋である。437、438 は水注の蓋である。ともに裏側にわずかに糸切り痕が残存するが、その部分を437 はケズリ調整、438 はナデ調整している。439～441 は落とし蓋タイプの壺・甕の蓋か。439 は表側に胎土目痕が3箇所、裏側に右回転糸切り痕がある。440 は表側に左回転の糸目状の沈線が施されたものである。表側は蓋の中央付近に、裏側は蓋の外側付近に輪状の熔着痕が認められる。441 の表側には焼成時の降灰が著しい。裏側は蓋の端部に2箇所胎土目痕が残る。

#### 土器 (442～489)

442～472 はかわらけ (DZ-2) である。444～446、450～459、462、464～467、469、471、472 は灯心痕がある。また445～447、449、458、459、470 は体部ないし底部が赤色化している部分がある。442、443、445～449、451、454～457、461、463、467、469 はDZ-2-a。442、445、447、454 は底部に離れ糸切り痕が認められる。443 は体部中程と底部脇が強く撫でられ、括れを有す。446 は体部中程が括れ、底部外面と体部の境に段を有す。447 は底部内面と体部の境がなでられ、やや幅広の溝状に窪む。449 は体部が直線的に開き気味立ち上がり、口縁部が肥厚する。451 の灯心痕は口縁部に小さく2箇所みられる程度である。454 の底部には複数の糸切り痕が確認される。457 は口縁部内側直下に括れを有す。444、452、453、458～460、464、470 はDZ-2-b。444 は器面が黒色化している。452 は外面底部と体部の境目が顕著で、口縁部にはタール状の灯心痕がほぼ全周する。458 はタール状の灯心痕が口縁部をほぼ全周し、体部中程が輪状に赤色化している。459 は体部と底部の境目が顕著である。470 の底部はナデ調整され、糸切り痕は確認できない。口縁部付近が二次的な火熱を受ける。450、462、465、466、468 は小林D類、

梶原Ⅱ a群に属するものでDZ-2-k。450は器厚が厚く、体部が直線的に開くが、内面はナデ調整され丸味を帯びる。462は体部が内傾し、口径に比して器高がやや高いものである。底部に残存する糸切り痕も比較的粗いものである。465は底部外面と体部の境に段を有す。466は内面体部と底部の境が溝状にくぼむ。口縁部数箇所が浅い「U」字状にカットされている。468は底部が円盤状に突出する。471は底部穿孔されたものでDZ-2-i。471は灯心痕が口縁部ではなく、底部内面に円形に確認される。本製品の底部には二次穿孔が1箇所あるが、その部分は一方の灯心痕に近接する。472は底部平滑の上製かわらけでDZ-2-d。いわゆる内ぐもりのあるものである。

473は軟質瓦質丸火鉢でDZ-31-b。外面は底部以外ケズリ、ミガキ調整され、底部には足が2箇所残る。口縁部には敲打痕が認められる。

475は土師質の壺・甕でDZ-15。輪積みで、胴部内面には粘土継ぎ目と指頭圧痕が認められる。体部外面には半球形の耳が2箇所付くが、耳は1箇所穿孔されている。頸部が撫でられ受け部のような立ち上がり有す。内面全体にスス状のものが付着することから蓋を伴う火消し壺の可能性もある。なお本品と先述の474と一緒に出土している例が、萩藩毛利家屋敷跡遺跡63-1K-2地下式土坑で確認されている。

476は土師質瓦燈の身でDZ-45。受け部から立ち上がる舌状の突出部が残存する。体部内面中程に粘土継ぎ目が確認される。底部は平滑で、器面は摩滅する。

474、477～482はほうろく（DZ-47）で、481が瓦質、他はすべて土師質のものである。474は透明釉が施釉された足付きのほうろくである。灰器か？胎土は橙褐色を呈し、やや粗く軟質である。ロクロ成形で、口縁部が極端に内傾する。口縁部数箇所が外側から押され歪められるが、押された場所には細い金串状のものが格子目文の陰刻が施される。内面はナデ調整、外面はケズリ、ナデ調整されるが、外面にはケズリ調整の際の細かい擦痕も多数みられる。底部外周に足が貼付られるが、その足の先端は外側に折り返され、底部脇に貼付られる。内外面に透明釉が施釉されるが、格子文や体部内面にわずかに白化粧の痕跡が認められる。なお本品と同様の胎土で透明釉が施釉された口縁部破片が1点出土しているが、その破片の格子文は内側に当て布をして型押で陽刻されたものであり、474と酷似した製品が複数個体存在していた可能性がある。477～479は丸底のものでDZ-47-a。477～480は体部外面から内面はナデ調整され、底部外面は縮れたような状況を呈し、外面全体にスス状のものが付着し、黒色化している。477、478、480は団子状の内耳を有すが、477に残る内耳のすぐ脇には、内側から外側へ穿孔された直径7mmほどの二次穿孔が確認される。その孔が穿たれた高さは団子状内耳の穿孔部とほぼ同じ高さである。477、489は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、体部が内傾気味に立ち上がる。481、482は平底のものでDZ-47-b。481の底部中央は縮れたような状態を呈す。その周囲から体部との境付近はケズリ、体部から内面はナデ調整される。口唇部も比較的平らに調整される。残存する立ち上がりを見る限り、耳などは確認されない。底部内面中央付近に角枠の刻印がある。外面は底部中央が白色化、他は斑に黒色化している。482の胎土は、他の土師質ほうろくの胎土がにぶい橙色を呈すのに対し、明橙色を呈すものである。また体部と底部の境には明瞭な稜を有し、体部が外側へ開き気味に気味に立ち上がり、内面には2箇所団子状の内耳が残る。わずかに残存する底部外面には擦痕が認められるが、スス状の付着物は認められない。

483～485は塩壺（DZ-51）で、いずれも輪積成形されたものである。483は器面の摩滅が著しいものであるが、方形の刻印のあるものでDZ-51。484、485は二重角枠の「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-cに分類される。483、484の内面は白色化している。

486は器種不明の軟質瓦質製品である。輪積成形され、筒形を呈す。外面はミガキ、内面はナデ

調整される。

487、488 は断面がドーム形を呈す塩壺の蓋で DZ-00-a。487 は内外面に指頭圧痕が認められる。488 は内外面ともに白色化している。489 は土師質の蓋である。胎土は白色を呈し、受け部も 487、488 と比べて外側へ開き気味である。天井部の表側には繊維状の圧痕、内面にはナデが確認される。

#### (6) C3 層 (Ⅳ-294 図～301 図)

C3 層出土遺物は、天和 2 (1682) 年の火災後の造成土のうち、C2 層分布域で C2 層下に堆積したロームブロック主体土に包含された遺物群を示す。

##### 磁器 (490～547)

490～499 は磁器碗である。490 は染付碗で、JB-1-a に分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付両端は面取りされ、特に内側の釉際に砂が熔着している。体部はやや腰が張りながら立ち上がる。文様は、外面に一重網目文が描かれている。見込みには焼成時の降灰物による熔着痕が認められる。推定残存個体数 5 個体。491～496 は、高台断面が三角形を呈する染付碗で、JB-1-c に分類される。491 は口径 11.5cm を測る大振りの碗形である。釉は畳付を除き、全面に施され、貫入が認められる。文様は外面に草花文、見込み二重圏線内に草花文が描かれ、高台内には「宣明年製」銘が書かれている。492 は口径 9.6cm を測る小振りの碗である。文様は外面に岩と草花が描かれ、高台内には御殿下記念館地点 276 号遺構などで事例が認められる二重圏線が描かれている。493 は外面に海浜図が描かれている。494 は口径に対し器高が 0.42 と低い碗形である。文様は外面に草花文、高台に鋸歯文が描かれている。器面整形、文様描写ともに丁寧な作りである。被熱している。495、496 は腰が張り、体部がほぼ直立する碗形である。495 は体部に丸文と寿字文を散らし、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。496 は白泥による型紙摺りによってサギが描かれている。主文様には背を向け振り返る雌雄一対のサギ、従文様には羽ばたく 1 羽のサギを描き、染付で目と足下の草花文を描いている。本碗形は江戸遺跡での類例は少ないが、金沢城下ではたびたび認められ、加賀藩に嗜好されていた可能性がある。497 は色絵うがい茶碗で、JB-1-t に分類される。胎土は灰白色を呈し、有田内山以外の製品と考えられる。見込みには青、黄、緑、黒絵の具によって花文が描かれている。特に黒絵の具は輪郭に用いられている。被熱している。498 は染付碗の胴部片で、JB-1 に分類される。体部には五三桐文が巡らされている。被熱している。499 は 498 の蓋である。外面には、身同様五三桐文が巡らされている。被熱している。推定残存個体数 9 個体。

500～511、512、518、522 は皿・平鉢である。500 は景德鎮窯系の青花皿で、JA1-2 に分類される。高台断面は三角形を呈し、内傾する。畳付外側には丁寧なケズリが施されている。高台内に釉飛びが認められる。見込みには花文が描かれている。裏文様も描かれているが、詳細は不明。501～503 は染付七寸皿で、JB-2-c に分類される。501 は型打ち成形による 12 単位の輪花皿である。体部の立ち上がりは比較的急で、口縁部で外反する。高台内にはハリ支え痕が 3 箇所認められる。文様は見込みに花鳥文が、見込み周囲には輪花を単位とした窓絵が配され、鳥文と宝珠文が交互に描かれている。裏文様は 1 本の細線による梅唐草文が描かれている。被熱している。推定残存個体数 8 個体。502 は型打ち成形によって成形され、体中位に稜を有する。また見込み周囲には 1 段が設けられている。高台内にはハリ支え痕が 3 箇所認められる。文様は見込みに 2 匹の鯉と水草が、裏文様は縁取りを有する花唐草文が描かれている。口縁部には口銹が施されている。高台内には二重角枠内に異形字の「角福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数 8 個体。503 は丸皿である。体部は緩やかに内湾して口縁部に移行する。高台内にはハリ支え痕が 3 箇所認められる。見込みにはオモダカと思



われる植物が描かれ、見込み周囲には墨弾きによって雲形文が8単位配されている。高台内には一重圏線が描かれ、中央に一重角枠内に「角福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数4個体。504は白磁五寸皿で、JB-2-cに分類される。型打ち成形によって成形され、口縁部は鐔状に外反する。器面は乳白色を呈する。推定残存個体数2個体。505は染付四寸皿で、JB-2-sに分類される。高台はU字形を呈し、暈付露胎幅は3mmを測る。素地は灰褐色を呈する。口径対底径比は、約1.8:1を測る。見込み文様は二重圏線によって区画され、周囲には草文が描かれている。見込みは欠損しているため不明。外山の製品と考えられる。被熱している。506は染付皿で、JB-2-dに分類される。丁寧に作られている。高台断面はU字形を呈し、暈付は丁寧なナデ整形が施されている。見込み中央に縁取りを有す四弁花文が描かれ、その周囲に二重圏線が巡る。口唇部には口鏽が施されている。口縁部内側には二重圏線で区画された帯文内に縁取りを有す幾何学文が描かれている。裏文様は1本の細線による花唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に「宣嘉年製」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数4個体。507は染付皿で、JB-2-eに分類される。型打ち成形によって成形されている。暈付はナデによって丸く整形され、高台断面は三角形を呈す。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。見込みには型打ちされた「涼」字が白抜きされ、背景は石畳文と墨弾きによって縁取られた唐草文で埋められている。裏文様には1本の細線による花唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に二重角枠内「角福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数6個体。508、509は糸切り細工の貼付高台による形皿で、JB-2-rに分類される。508は白磁で、見込みには菊花文様が陽刻されている。被熱している。推定残存個体数3個体。509は青磁染付である。茄子をかたどった器形で、ヘタを染付で描き、ヘタの葉脈を放射状の陽刻線で表し、ヘタの輪郭などを呉須で描いている。被熱している。推定残存個体数7個体。510は見込み蛇ノ目釉剥ぎ白磁皿で、JB-2に分類される。高台断面は逆台形を呈し、暈付外側が面取りされている。暈付と見込み蛇ノ目釉剥ぎ部分を除き透明釉が施され、暈付釉際には砂が熔着している。また見込み蛇ノ目釉剥ぎ部分には直重ねによる環状熔着痕が認められる。被熱している。511は景德鎮系の青花皿で、JA1-2に分類される。高台は幅広のU字形を呈し、暈付両端は面取り後に、ナデ調整されている。口径対底径比は1.5:1と底径が大きな製品である。器高も低く、体部中位で屈曲し、口縁部は鐔状を呈す。内外面の屈曲部と口唇部に虫喰いが認められる。見込みには中国・唐の文人、韓愈(768~824)の『晚春』「草樹知春不久歸 百般紅紫鬪芳菲 楊花榆莢無才思 惟解漫天作雪飛」が書かれている。被熱している。512は色絵平鉢で、JB-2-dに分類される。色調は乳白色を呈し、いわゆる柿右衛門様式の製品である。高台断面はU字形を呈し、全体的に丁寧に整形されている。文様は黒、青、赤絵の具を用いて、内外面に梅花を散らしている。被熱している。推定残存個体数7個体。518、522は染付七寸皿で、JB-2-cに分類される。518の高台はやや内傾し、断面形は三角形を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は外曲する。高台内中央にハリ支え痕が2箇所認められる。口唇部には口鏽が施されている。文様は見込み全面を使い海浜図が描かれ、裏文様は縁取りを有す唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に「(大)明成(化)年製」銘が書かれている。被熱している。522の高台断面は三角形を呈し、やや内傾する。体部は、型打ち成形によって成形され、高台際で内曲し、逆ハの字状に開き、八角形に形作られている。高台内にはハリ支え痕が認められる。口唇部には口鏽が施されている。見込みには花文が、内側面には器形に沿って染付線とダミで8単位に区画された窓絵内に鳳凰文と花文が交互に描かれている。裏文様は七宝文が散らされている。被熱している。514は青磁大皿で、JB-3-fに分類される。高台はやや内傾し、断面形は三角形を呈する。体部は型打ち成形によって、8単位の輪花を形成する。高台内にはハリ支

え痕が認められる。青磁釉は青緑色に発色している。被熱している。

513、515～517、519～521は鉢である。513は色絵鉢で、JB-5-bに分類される。高台断面はU字形を呈し、高台高は13mmを測る。青、黄、緑、黒絵の具を用いて、外面は花文様で埋め尽くし、見込みは縦方向の色絵線によって区画され、区画内を花文様で埋めている。高台内は同心円状の帯文で埋め、中央にいわゆる「誉」字銘が書かれている。被熱している。515は青磁鉢で、JB-5-bに分類される。高台断面は三角形を呈する。体部は型打ち成形によって、12単位の輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。青磁釉は淡青緑色に発色している。被熱している。516は色絵鉢で、JB-5-fに分類される。色調は白濁色を呈する。高台はやや内傾し、断面形はU字形を呈する。体部はやや腰が張り、口縁部は屈曲し、やや内湾ぎみに鏝状に開く。文様は赤、黄、青、黒絵の具を用いて、外体部、口縁部内側に草花文が描かれている。被熱している。517は516の蓋である。摘みはやや外傾する。形態的には丸碗の蓋と変わらない。文様は外面に描かれ、身と共通する。被熱している。推定残存個体数6個体。519は染付鉢で、JB-5-fに分類される。高台断面は三角形を呈し、畳付は丁寧に丸く整形されている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、体中位で外曲しさらに内湾し、口縁部でわずかに外反して直立する。文様は口縁部下に墨弾きによる波濤文様を描いた帯文を巡らす。また高台内、高台際、体下半に二重圈線が巡らされている。被熱している。推定残存個体数2個体。520、521は白磁鉢で、JB-5-fに分類される。520は型打ち成形によって内面に細かい菊花文様を形成し、その文様単位に連動して口縁部は輪花を形成する。推定残存個体数2個体。521は型打ち成形によって12単位の菊花状輪花を形成する。内外面共に稜線を有する。

523～529は小坏である。523～527は端反小杯で、JB-6-bに分類される。523は外面に唐花唐草文、見込みに花文を描き、高台内には「(宣)徳年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。524は外面に笹文を描いている。畳付には砂が熔着している。推定残存個体数4個体。525は白磁小杯である。全体的に薄手に作られている。色調はややくすんだ白色を呈し、見込みには降灰による熔着痕が認められる。526は染付小杯である。外面には花岩文が描かれている。527は白磁小杯である。被熱している。528は丸碗形の坏で、JB-6-aに分類される。外面に草文が描かれている。口径5.0cm、器高3.2cmと小振りで、ミニチュアの可能性もある。529は端反小杯で、やや腰が張った器形を呈している。外面には草文が描かれている。口径3.9cm、器高3.0cmと小振りで、ミニチュアの可能性もある。被熱している。

530、531は猪口である。530は染付猪口で、JB-7-bに分類される。口唇部には口銹が施されている。外面には梅花と松葉が描かれている。被熱している。531は色絵猪口で、JB-7-bに分類される。畳付幅は6mmを測り、蛇ノ目状を呈している。釉は畳付際まで丁寧に掛けられ、釉調はやや灰色を帯びている。体部には黒絵の具で輪郭線を描き、赤、青、緑、黄絵の具で埋めて、菊花、草文を描いている。被熱している。推定残存個体数2個体。

532、533は仏飯器で、JB-8-bに分類される。脚部のえぐりが浅いタイプで、体部は丸味を帯びて立ち上がり、逆ハの字状に開く。文様は体下半にダミ線による帯文を描き、その上に3単位の花文と草文を描いている。

534は景德鎮窯系の青花香炉・火入れで、JA1-9に分類される。高台断面はU字形を呈し、畳付には焼成後と考えられる顕著な研磨痕が認められる。体部は筒形を呈す。畳付と内体部下半を除き、透明釉が施されている。体部には蝶、草文が描かれている。被熱している。

535は瓶で、JB-10-eに分類される。胎土は灰白色を呈する。底部は碁笥底で、多量の砂が熔着している。体部はラッキョウ形を呈し、最大径は中位にある。また体中位には沈線状の凹みが巡ってい

る。文様は草文が描かれているが、呉須の色調は黒色に近い。

536は筒形蓋物の身で、JB-13-bに分類される。高台断面はU字形を呈し、やや内傾する。体部はやや開きぎみに直立する。釉は口唇部、口縁内側、畳付以外に施されている。文様構成は欠損部が多いため不明である。被熱している。537は型作りの蓋物でJB-13-dに分類される。底部欠損。体部はやや外傾する筒形を呈し、型打ち成形によって12角形に成形され、各面は染付線によって区画され、袈裟襷文、瓔珞文が交互に陽刻され、ダミが掛けられている。被熱している。推定残存個体数2個体。538は537の蓋である。身と同様の文様構成が放射状区画によって描かれている。被熱している。

539～541は壺である。539は染付壺で、JB-15に分類される。胎土の色調は灰白色を呈する。高台断面は逆台形を呈し、畳付両端が面取りされている。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、最大径は肩部付近にある。文様は体上半に笹蔓文が描かれている。口縁部を欠損するが、欠損面には細かい剥離が入っていることから、再加工された可能性がある。540は色絵壺で、JB-15に分類される。胎土は灰白色を呈する。高台はU字形を呈し、畳付外側が釉際まで面取りされている。高台内には「の」の字状のケズリが認められる。体部中位に最大径を持ち、口縁部は直立する。また体中位には円形の剥離痕があり、把手が付けられていたことが確認される。文様は高台と口縁部に染付線を巡らし、体部には赤、黒、黄絵の具を用い、蔓文を描き、口縁部には黒絵の具を用い、鋸歯状文が巡らされている。541は染付壺の胴部片で、JB-15に分類される。体中位には2条の隆帯が巡る。口縁部は直立し、口唇部のみ露胎。また内体部は流し掛けによって下半に無釉部分が広がっている。文様は断片的であるが、体部に梅、月などが描かれ、口縁部に袈裟襷文が描かれている。被熱している。

542は合子の身で、JB-18-aに分類される。内体部は流し掛けによって施釉され、口縁部内側の釉際は波打っている。文様は体上半部に赤絵の具によって梅唐草文が描かれているが、ほとんど剥げ落ちている。543は542の蓋である。身と同様に内体部は流し掛けによって施釉されており、露胎部幅は約1cmと広く、釉際は波打っている。文様は赤絵の具によって中央に海浜図？、その周囲に内側から二重圏線、蔓文、一重圏線、蓮弁文、一重圏線が描かれているが、ほとんど剥げ落ち、詳細は不明である。

544は青磁花生で、JB-22に分類される。高台断面は長方形を呈し、体部は鼓形を呈する。体中位には陽刻文様が施されている。釉は口縁部内側から畳付を除く底部にかけて施され、色調は淡青緑色を呈する。被熱している。

545～547は蓋である。545は蓋物の蓋である。体部はドーム形を呈し、端部はやや外反する。外面の釉は端部まで丁寧に掛けられているが、内面は流し掛けにより釉際は波打っている。文様は3単位の丸文を配し、その間に七宝文を散らしている。546は色絵壺の蓋である。外面に梅唐草文が上絵の具によって描かれているが、色調は被熱による変色のため不明である。内面無釉。被熱している。547は蓋物の蓋である。体部はドーム形を呈し、中央には逆円錐台形状の摘みが貼り付けられている。陶器 (548～577)

548～552、559は碗である。548、549は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。胎土は淡黄褐色を呈し、緻密であるが、やや軟質感がある。釉は畳付を除く器面全体に施され、細かい貫入が認められる。548の高台高は外寸で12mmを測り、やや外傾している。550は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台高は外面6mmに対して、内面4mmとやや高台内のケズリが浅い。高台内中央には「の」の字状のケズリが認められる。釉は焼成不良のためやや白濁し、全体に貫入が入る。高台内には「清水」印が押されている。551は京焼風陶器平碗で、TB-1-cに分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台高は外面



6mm、内面 3mm と高台内のケズリは浅い。高台内中央には円圏ケズリが施され、その中に「清水」印が押されている。底部を除き透明釉が施され全面に貫入が入る。見込みには呉須を用いて山水文が描かれている。552 は灰釉碗の底部片で、TZ-1 に分類される。胎土は淡～灰褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含む。硬質である。高台外面は算盤玉状に張り出し、高台内は左回転で削られ、兜巾状の張り出しが認められる。体部は高台脇に明瞭な稜を有し、逆ハの字状に立ち上がる。内体部にはロクロ成形右回転による逆「の」の字状の成形痕が、また見込みには茶溜まりが認められる。底部を除き灰釉が掛けられているが、体部には縦方向の掻き落としが認められる。559 はいわゆる沓茶碗で、TC-1-an に分類される。胎土は黄白色を呈し、きめ細かいがやや軟質感がある。高台断面は方形を呈し、やや外傾する。体部は腰が張って立ち上がり、口縁部は外反する。文様部分が押さえられ上面形は不整楕円形を呈する。長径は 12.8cm を測る。釉は畳付を除き、灰釉が施されている。体部には鉄絵によって草花文が描かれている。被熱している。

553 ～ 558 は皿・平鉢である。553、554 は青緑釉見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-a に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。553 は口縁部が外反し、見込み側面に 1 段稜を有す。見込み釉剥ぎ部と畳付には 3 箇所目砂目積み痕が認められる。釉は底部を除き、内外面ともに深緑色を呈する青緑釉が掛けられている。口縁部が外反する器形は、青磁見込み釉剥ぎ皿と同様、初現的な様相と考えられる。554 の体部は丸味を帯びて開き、見込みに青緑釉、外面体部に透明釉が掛けられている。555 は灰釉丸皿で、TC-2-b に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質で白色砂粒を多量に含む。高台断面は三角形を呈し、高台脇は強く削られ、明瞭な稜を有する。見込みには高台径同等の環状熔着痕が認められる。556 は長石釉丸皿で、TC-2-c に分類される。胎土は黄白色を呈し、ややざらつき感がある。高台高は内側で 1mm 未満と極めて低い。高台内には 3 箇所目砂目積み痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がるが、ロクロ目が顕著に認められる。器面全体に長石釉が施されている。557 は灰釉輪剥端反皿で、TC-2-m に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。高台は付高台で、大きく外傾する。体部は緩やかに丸味を帯びて開き、口縁部で外反する。見込み周囲を環状に釉剥ぎし、その内側はわずかに低くなり稜を有す。釉調は淡灰緑色を呈し、施釉面全体に貫入が入る。底部は無釉である。558 は灰釉ヒダ皿で、TC-2-n に分類される。胎土は灰白色を呈し、ざらつき感がある。高台断面は三角形を呈し、体部は腰が張って立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部は型打ち成形によって菊花状の細かい輪花を形成している。釉は畳付を除く全面に施され、釉厚は約 1mm と厚く、色調はやや白濁した灰褐色を呈し、全面に貫入が入る。

560 は鉄釉小坏で、TC-6 に分類される。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒を含む。高台断面は三角形を呈し、外傾する。体部は丸味を帯びて立ち上がる。底部を除き、鉄釉が施されている。被熱している。

561 ～ 564 は香炉・火入れである。561 は鉄釉筒形香炉で、TC-9-a に分類される。底部には粘土紐を折つぶした脚が貼り付けられている。また底部中央には逆「の」の字状のケズリが施されている。底部周囲にはクランク状の一段を設け、体部は直立し、口縁部はやや肥厚する。外体面に鉄釉が施されている。被熱している。562 は京焼風陶器香炉で、TB-9-b に分類される。胎土は褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台高は外側で 5mm、内側で 3mm を測り、高台内のケズリは浅い。高台内中央に「小松吉」印が押されている。体部は筒形を呈し、口縁部は内曲する。被熱している。563、564 は鉄釉香炉で、TC-9-b に分類される。胎土は黄白色を呈し、きめ細かいがやや軟質である。563 は底部縁辺に粘土紐による脚が 3 足貼り付けられている。体部は底部際から大きく開く筒形を呈する。底部を除き、鉄釉が施されている。内底部には直径 43mm を測る環状熔着痕が、底部脇に

は直径 13.8cm を測る環状熔着痕が認められる。口唇部には著しい敲打痕が認められる。564 は輪高台で、高台断面は逆台形を呈する。体部はやや内傾ぎみに直立し、口唇部でやや肥厚する。体部外面に鉄釉が施されている。口唇部には敲打痕が認められる。被熱している。

565 は刷毛目大皿・大平鉢で、TB-3-a に分類される。胎土は茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は逆台形を呈し、外端の面取りは観られない。体部は逆ハの字状に立ち上がり、口縁で外曲する。見込み中央は兜巾状に盛り上がっている。見込み中央には同心円状のその周囲には波状の内側面には細かい格子状の刷毛目文様を描いている。内面から外体部中位まで透明釉を施し、内側面には緑釉を流し掛けしている。566 は台付鉢で、TZ-5 に分類される。胎土は黄白色を呈し、ざらつき感がある。台部はハの字状に開き、畳付際で直立する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部は輪花を形成するが、欠損部が多く単位は不明。長石釉と思われる白濁色を呈する釉が畳付を除き、全面に施され、釉厚は 1～2mm と厚い。被熱している。

567 は水指と考えられる蓋物で、TB-13 に分類される。口縁部を欠損する。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部は平底で、右回転のケズリによって丁寧に整形されている。体部は右回転のロクロ成形によって丸味を帯びて立ち上がり、体中位にくびれを有する。さらに口縁部に向けて内湾しながら開き、口縁部はやや内湾する。口唇部には蓋受けのために突起が張り出す。外面には淡黄褐色を呈する灰釉が叩き付けられた様に流し掛けられている。被熱している。568 は 567 の蓋である。体部は浅い皿状を呈し、上面中央部には粘土塊を 3 本の指でつまんで、押しつけた摘みが貼り付けられている。外面には淡黄褐色を呈する灰釉が掛けられている。被熱している。

569～571 は壺である。569 は福建・広東系三彩壺の胴部片で、TA9-15 に分類される。胎土は褐色を呈し、白色微粒を含む。きめ細かいが、やや軟質である。最大径は体部上方に有すると考えられ、胴部器厚は 3～4mm と薄い。文様は体部下位に 3～4 条を 1 単位とする沈線が 2 本巡り、中位には唐花唐草文が貼り付けられている。残存破片では黄釉、緑釉が確認される。被熱している。570 はいわゆる腰白茶壺で、TD-15-a に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。最大径は体上半に有し、肩部は大きく内湾し、頸部で屈曲、直立する。頸部脇には 1 条の沈線が巡っている。口縁部は外側に折り曲げられ、玉縁状を呈す。肩部には粘土紐の貼り付けによる把手が 4 箇所認められる。釉は体部下半に灰釉が、口縁部内側から体下半にかけて、鉄釉が掛けられている。底部には墨書が認められるが、判読不明。被熱している。571 は鉄釉壺で、TC-15 に分類される。胎土は黄白色を呈し、きめ細かいがやや軟質である。高台断面は方形を呈し、やや外傾する。体部はほぼ直線的に開き、最大径は肩部にある。肩部は強く内曲、頸部から口縁部は直立し、口唇部は玉縁を呈する。底部を除き、鉄釉が掛けられている。被熱している。

572 は茶入で、TC-26 に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部は平底で、右回転の回転糸切り痕が残る。体部はやや開きながら直立し肩部で強く内曲する。頸部から口唇部に掛けては緩やかに外反し口唇部は玉縁を呈する。口縁部内側から胴下半にかけて鉄釉が施され、頸部から体上半部にはさらに弧状を描く帯文状に重ね掛けされている。被熱している。

573 は鉄釉播鉢で、TC-29 に分類される。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。底部は平底で、糸切り痕を残す。体部はハの字状に立ち上がり、口縁部下でクランク状に外側へ開き、口縁は折り返され縁帯を有する。播目は 1 条 10 単位からなる。器面全体に鉄釉が施されている。見込みから内側面下部は使用による摩耗で、釉、播目ともに磨滅している。

574 は火鉢で、TB-31 に分類される。胎土は褐色を呈し、丁寧に水簸された素地が用いられており、硬質かつ緻密である。高台は逆台形を呈する。体部は高台際から直接立ち上がり、円筒形を呈する。

体上半には方形の開口部が開けられている。現存部において内面には五徳状の突起が存在した痕跡は認められない。釉は体中位と畳付を除き、透明釉が施されている。文様は鉄絵を埋めた象嵌文様によって描かれ、口縁部、体中位露胎部、体下半の3単位で構成される。口縁部文様帯は横位の沈線で区画され、その中にキャタピラー状の沈線を巡らせている。体中位露胎部文様帯は、雲形文で埋められている。体下半は被熱による釉の変色が著しく詳細は不明だが、上下を横位の沈線で区画され、キャタピラー文、花文?が確認される。被熱している。

575は乳棒で、TE-65に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密で焼き締められている。下面はドーナツ状に著しく摩耗している。また残存範囲上端には相対する一对の孔が穿たれている。器面の色調は自然釉によって暗褐色を呈する。木製などの柄を差し込み穿孔部に釘を打って固定したと推定される。

576、577は蓋である。576は壺・甕の蓋である。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。下端部には右回転の糸切り痕が残る。体部は逆ハの字状に開き上端部は外湾する。上面中央に粘土塊を3本の指でつまんで押しつけた摘みが貼り付けられている。上面に鉄釉が掛けられている。577は水注の蓋である。胎土は黄灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。円盤状の身の上面中央部に円柱状の摘みが貼り付けられている。上面に灰釉が掛けられている。

#### 土器 (578～594)

578～583はかわらけである。578は右回転の糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、暗赤褐色微粒を含む。体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込みには中央から凸凹凸凹の順で環状成形痕が認められる。口唇部には灯心痕が付着している。579は右回転の糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微粒を少量含む。体部はほぼ直線的に立ち上がる。見込みには環状成形痕の上に横方向のナデ整形が認められる。口唇部には灯心痕が付着している。580は右回転の糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微粒を含む。底体間に明瞭な稜を有し、体部はやや外反する。581は右回転の糸切り痕を有し、DZ-2-bに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微粒を含む。腰折れ状痕が認められる。582は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。胎土は橙褐色を呈する。左回転のロクロ成形によって作られている。底部内外面にうちぐもりが認められる。583は離れ糸切りによるかわらけで、DZ-2-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、黒色微粒を含む。体部はほぼ直線的に立ち上がる。見込みには中央から凸凹凸凹の順で環状成形痕が認められる。見込み中央に直径4mmの二次穿孔が認められる。

584は灰器と考えられる胴部片で、DZ-47に分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質である。内外面ともに丁寧にナデ整形されている。外体部には2条の沈線が巡り、下半部には斜方向の集合沈線が施されている。また内外面ともにタール状の黒色付着物が認められる。

585、586はほうろくである。585は土師質丸底ほうろくで、DZ-47-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、暗赤褐色微粒を含む。内側面には平面円形を呈す中空の内耳が貼り付けられている。586は軟質瓦質平底ほうろくで、DZ-47-bに分類される。胎土は表面灰褐色、内部黒褐色を呈し、白色微粒を少量含む。底部全面に縮緬状圧痕が認められ、体下半部には指頭圧痕が認められる。内側面には粘土紐による工字状の内耳が貼り付けられている。

587～590は塩壺である。587～589は壺形塩壺である。587は一重角枠内に「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘の刻印が押された輪積み成形による塩壺で、DZ-51-dに分類される。胎土は白色粒を多量に含むが、色調は被熱による変色のため不明。588は一重角枠内に「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の刻印が押された輪積み成形による塩壺で、DZ-51-bに分類される。胎土は橙褐色を呈し、



白色微粒を含む。体部は寸胴で頸部の括れも弱い。内体部横断面は五角形を呈し、布目圧痕が認められる。589は二重角椀内に「泉州麻生」銘の刻印が押された板作り成形による塩壺で、DZ-51-hに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微粒を少量含む。底部は内側から押し込まれ、内体部には2箇所縫い目痕が認められる。590は鉢形塩壺で、DZ-51-xに分類される。胎土は灰白色を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は内湾する。全体的に丁寧なナデ整形が施されている。被熱している。

591～594は塩壺の蓋である。591は輪積み成形塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微粒を多量に含む。内面に布目痕が認められる。592は板作り成形の塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。胎土は黄灰白色を呈する。被熱している。593は鉢形塩壺の蓋で、DZ-00-kに分類される。淡褐色を呈し、白色微粒を含む。内面には雲母が塗られている。表面は著しく剥離し、刻印の有無は確認できない。594は碁笥の蓋と考えられる蓋形製品である。胎土は土師質で、橙褐色を呈し、白色微粒を含む。表面は浅いドーム状を呈し、周囲には左方向へのケズリが巡っている。内面には身を受ける凸帯が巡り、凸帯外側に器面は左方向のケズリによって整形されている。被熱している。同製品がD面焼土で、碁石に覆い被さった状態で出土している（IV-65 図511）。

595は動物で、DQ\_1200\_M2fに分類される。二次的被熱あり。動物の種類は不明である。尾があり両手を顎下に置き屈む姿勢の動物である。台中央に穿孔あり。596はミニチュアの染付碗で、JB\_2001\_Wに分類される。山水文様と外面口縁部付近、高台脇に圈線を描いている。畳付は熔着痕が観察される。釉が厚いためか文様は薄くぼんやりしている。口唇部は細かく割れている。597はミニチュアの白磁碗で、JB\_2001\_Wに分類される。高台内無釉、畳付は熔着痕が観察される。口唇部は596同様細かく割れている。

## (7) C2層（IV-301～321 図）

C2層出土遺物は、天和2（1682）年の火災後に盛土造成された、ロームブロック主体造成土中に瓦礫廃棄処理された焼土層出土遺物群を示す。10ライン以西のCライン、Fラインと2ライン周辺のSD422上に集中している。また本焼土層出土遺物と、加賀藩邸御殿空間内に位置する医学部教育研究棟地点での同火災廃棄資料との間に十数例の接合資料が確認されたことにより、本資料は火災後の屋敷内再開発に伴い、造成土に乗じて瓦礫処理されたことが明らかになり、加賀藩御殿空間内で使用されていた食器類として評価される一群である。なお出土遺物の注記にはSD422が含まれるが、SD422上に廃棄された焼土層で、性格はC2層と同一である。また本焼土層の拡がりには隣接する中央診療棟地点と第2中央診療棟地点でも黒多門邸地境溝（中央診療棟地点12号組石、本地点SD422）からその西側の富山藩邸に伸びる道上でも確認され、各々K面焼土、3層（4面）焼土と呼称している。

### 磁器（598～752）

598～603は染付碗である。598は青花碗で、JA1-1に分類される。畳付外側はケズリにより面取りされている。見込みには「大明成化年製」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数2個体。599はJB-1-cに分類される。高台内には二重圈線が描かれ、体部下半には幾何学文様で埋めた花卉状文様が描かれている。600、601はJB-1-dに分類される。600は体部に桔梗、瓢箪を描き、高台内に「太明年製」銘が書かれている。601は底部片で、高台断面はU字形を呈するが、やや幅広である。見込みには二重圈線内に五弁花文が描かれ、高台内には二重圈線が描かれている。また見込みには被熱による高台熔着痕が認められる。推定残存個体数3個体。602は筒形碗で、JB-1-kに分類される。高台断面は長方形を呈す。体部には菊花文が3単位描かれている。釉はやや青灰色を帯び、

釉垂れ、釉切れが認められる。603 はうがい茶碗で、JB-1-t に分類される。高台断面はU字形を呈す。見込みは紅葉文で埋められ、外面には折枝紅葉文が描かれている。高台内には二重圏線内に「宣徳年製」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数5個体。

604～685は皿・平鉢である。604～606、608は景德鎮系磁器皿で、JA1-2に分類される。604は青花7寸皿である。畳付両端は面取りされ、高台内にはカンナ痕が巡る。口唇部には虫喰いが認められる。見込み周囲には緩やかな1段が設けられている。見込み側面には花唐草文が描かれ、見込み周囲の区画帯文様は、数種類のバリエーションが認められる。高台内には二重圏線内に「大明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。605は色絵輪花皿である。体部は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇部には口銹が施されている。見込み文様は黒絵の具で線書きし、緑、青、黄絵の具で彩色している。被熱している。606は白磁皿である。口縁部は輪花を形成し、見込みには型打ち成形によって捻子花状の陽刻文が施されている。608は深めの青花皿である。畳付外側が面取りされている。口縁部内側には雷文が巡り、見込みには兔、松、欄干などが描かれている。高台内には二重圏線内に「大明成化年製」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数4個体。607は漳州窯系の形皿で、JA2-2に分類される。平面形は八角形を呈する。畳付両端は面取りされ、高台内には1～2mm大の砂粒が多量に熔着している。見込みは吹き墨によって方形に白抜きされ、福字が書かれている。被熱している。推定残存個体数2個体。609は漳州窯系の大皿で、JA2-3に分類される。胎土は灰褐色を呈する。外面にはロクロ目を残し、口縁部は外曲する。畳付から高台内にかけて多量の砂が熔着している。釉は緑灰色を帯び、高台内中央付近に露胎部を残す。見込み文様は黒絵の具で線書きし、青絵の具で彩色している。被熱している。610はトルコ・イズニク窯の色絵大皿片で、TA10-3に分類される。全て同一個体である。aは底部片、bは高台片、c～eは体部片、fは口縁部片である。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。素地上に白化粧土を施し、透明釉を掛けている。文様は黒絵の具で線書きし、青、赤、緑絵の具で彩色している。被熱している。17世紀前半の製品で、東京国立博物館所蔵品に類例がある。611は色絵8寸皿で、JB-2-sに分類される。胎土は灰褐色を呈する。高台高は低いが、高台内のケズリは深い。見込みには花文が描かれ、赤、黒絵の具で線書きし、黄、青絵の具で彩色している。嬉野市吉田2号窯跡の製品と考えられる。被熱している。612～616はいわゆる初期伊万里の皿で、JB-2-aに分類される。612は青磁で、見込みにヘラ書きによる花文が描かれている。釉調は淡青色を呈す。被熱している。613は染付形皿である。高台は輪高台を呈し、体部は型打ち成形によって成形されている。見込みには幾何学文、花文などを描いた丸文を散らし、口唇部には口銹が施されている。裏文様は七宝文を散らし、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数7個体。614は染付7寸皿である。胎土は灰白色を呈す。見込みには芙蓉手文様が描かれている。器面には貫入が入り、釉飛びが認められる。被熱している。推定残存個体数6個体。615、616は染付6寸皿である。見込みには四方襷で埋めた雲形文、鳥が描かれ、内側面には如意頭文を巡らせている。高台内には二重角枠内に「角福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数6個体。617、619～622は、JB-2-cに分類される。617は染付7寸皿である。型打ち成形によって捻子花状の輪花を形成する。見込み中央には異形字文が、周囲には窓絵文様と扇面、軍配が、内側面は捻子花状の区画内に七宝繋ぎ文、卍繋ぎ文、花文が描かれている。高台内には一重圏線が施されている。被熱している。推定残存個体数3個体。619は染付7寸皿である。体部は外曲し、鐔状を呈す。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込みに岩、松を背景に2頭の鹿を描き、裏文様には折枝と鳥を描いている。口縁部下の圏線は、一重と二重の2パターンが認められる。高台内には二重角枠内「渦福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数

3 個体。620 は染付 7 寸皿である。口縁部は外曲し鏝状を呈す。見込み文様には墨弾きが用いられている。被熱している。621 は染付 7 寸皿である。見込み中央に丸文を見込み周囲には二重圏線を描き、それを跨いで如意頭状の区画を配し、唐草文とダミによる塗りつぶしを交互に描いている。裏文様には樹木が描かれている。被熱している。推定残存個体数 2 個体。622 は染付 7 寸皿である。内側面には型打ち成形によって唐草状の陽刻を施し、その部分を白抜きで表している。被熱している。618 は染付 7 寸皿で、JB-2-d に分類される。高台内にハリ支え痕が認められる。見込み周囲に鳳凰、牡丹を描き、裏文様に縁取りを有する梅花唐草文が描かれている。高台内に二重角枠内に異形字銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数 8 個体。623 は白磁皿で、JB-2-d に分類される。型打ち成形によって菊花状に成形されている。素地は乳白色を呈する。畳付幅は 4mm と広い。高台内にハリ支え痕が認められる。被熱している。624 は染付輪花 8 寸皿で、JB-2-c に分類される。口縁部は 8 単位の輪花を形成する。高台内にハリ支え痕が認められる。見込み丸文内に鳳凰文を描き、それ以外を牡丹唐草文で埋めている。裏文様は 1 本線による梅花唐草文が描かれている。推定残存個体数 3 個体。被熱している。625 は染付 7 寸皿で、JB-2-d に分類される。高台内にハリ支え痕が認められる。見込みを二重圏線で区画し、周囲に唐花を描いている。裏文様は縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。被熱している。3 個体が熔着した状態で出土している。推定残存個体数 5 個体。626 は染付 7 寸皿で、JB-2-d に分類される。口縁部が外反する。高台内にハリ支え痕が認められる。見込みには龍と牡丹唐草文が描かれ、裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。高台内に二重角枠内に異形字銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数 3 個体。627 は染付 7 寸皿で、JB-2-c に分類される。高台内にハリ支え痕が認められる。見込み周囲に墨弾きによる異形字を配した帯文を巡らし、その上に輪郭を墨弾きで描いた花文を描く窓絵を配している。被熱している。推定残存個体数 2 個体。629 は染付 8 寸皿で、JB-2-c に分類される。口縁部は外反し、高台内にハリ支え痕が認められる。見込み一面に桐文を描き、裏文様は 1 本線による梅花唐草文が描かれている。被熱している。推定残存個体数 2 個体。医学部教育研究棟地点 SP699 と接合。628、630 は白磁 7 寸皿で、JB-2-d に分類される。器面は乳白色を呈す。被熱している。628 は推定残存個体数 5 個体。630 の畳付幅は 3mm と広く、高台は内傾する。高台内にハリ支え痕が認められる。見込みには型打ち成形による陰刻で秋草が描かれている。推定残存個体数 6 個体。631 は色絵 6 寸皿で、JB-2-c に分類される。器面の色調はわずかに灰色を帯びる。高台断面は三角形を呈し、内傾する。高台内にハリ支え痕が認められる。型打ち成形によって口縁部は内曲し、8 単位の輪花を形成する。見込み文様は染付で岩、鳥、竹を描き、黒、緑、黄、赤、茶絵の具を用いて枝、花、葉、鳥を彩色している。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。被熱している。推定残存個体数 4 個体。632、633 は染付 6 寸皿で、JB-2-d に分類される。高台は畳付がやや幅広の三角形を呈する。高台内にハリ支え痕が認められる。口縁部は外反し、口唇部には口鏽が施されている。見込み周囲から内側面にかけて波文、桜花文が描かれている。裏文様は 632 が縁取りを有す梅花唐草文、633 が蔓文が描かれている。632 の底部には「大明成（化年製）」銘が認められる。被熱している。ともに推定残存個体数 4 個体。634 は染付 6 寸皿で、JB-2-d に分類される。型打ち成形によって口縁部は輪花を形成し、口唇部には口鏽が施されている。高台内にハリ支え痕が 3 箇所認められる。見込みには獅子？と桜花文が描かれ、裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。推定残存個体数 8 個体。被熱している。635 は染付 5 寸皿で、JB-2-c に分類される。高台内中央にハリ支え痕が 1 箇所認められる。見込みに鹿、見込み周囲に円圏の区画を施し、内側面に紅葉を描いている。口唇部にはダミが掛けられている。裏文様には蔓文が描かれている。被熱している。636 は染付 5 寸皿で、JB-2-d に分類される。口縁部は外反



する。見込み周囲には6単位の分銅形窓絵内に墨弾きによって梅文、異形字が交互に描かれている。高台内には二重角枠内に「角福」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。637は染付5寸皿で、JB-2-cに分類される。高台は14mmと高く、線書きによる櫛歯文様が描かれている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に雲龍文を描いている。裏文様には蔓文を描き、高台内には二重角枠内に「渦福」を書いている。推定残存個体数4個体。被熱している。638は染付5寸皿で、JB-2-cに分類される。口縁部は外反する。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには垣根に蔓草を、内側面には牡丹唐草文を描いている。裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれているが、ダミが縁取りを越える部分が有り、ややラフさが感じられる。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。639は染付5寸皿で、JB-2-cに分類される。体部はクランク状に成形され、高台内にハリ支え痕が認められる。口唇部内側に口鏽が施されている。見込みには鳳凰文が、内側面には牡丹唐草文が描かれ、裏文様には線書きによる梅花唐草文が描かれている。被熱している。640は色絵5寸皿で、JB-2-cに分類される。口縁部は外反し、輪花を形成する。見込み周囲と体部の稜部分に二重圏線による区画を施し、見込みと内側面には黒、赤、緑、黄絵の具によって花文が、二重圏線間には赤絵の具によって櫛歯文が描かれている。裏文様は染付圏線のみ。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。641は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。型打ち成形によって8単位の輪花を形成する。また体部は高台脇から屈曲して立ち上がり稜を有する。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に花文を描いている。裏文様は縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。642は染付5寸皿で、JB-2-cに分類される。体部はやや腰が張り、口縁部で外反する。高台内中央にはハリ支え痕が1箇所認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには鹿が、内側面には牡丹唐草文が描かれている。裏文様は5単位の区画されている。高台内には二重角枠内に「角福」銘が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。643は染付4寸皿で、JB-2-cに分類される。畳付には砂が熔着している。見込み周囲を二重圏線によって区画し、型紙摺りによって見込み中央に花文を、内側面に七宝繋ぎ文を描いている。推定残存個体数5個体。被熱している。644は染付4寸皿で、JB-2-cに分類される。口縁部は外曲し、鏝状を呈する。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み周囲を二重圏線によって区画し、見込みに団龍文を内側面に牡丹唐草文を描いている。裏文様は線書きによる唐草文が描かれている。推定残存個体数3個体。全個体の高台内側に環状の擦痕が認められる。被熱している。645は染付4寸皿で、JB-2-cに分類される。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。内側面を芙蓉手状に区画し、草を描いている。推定残存個体数4個体。646は白磁菊花皿で、JB-2-dに分類される。型打ち成形によって菊花形に成形されている。高台高は9mmと高く、体部は扁平である。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。647は白磁5寸皿で、JB-2-cに分類される。体部は型打ち成形によって菊花形に成形されている。推定残存個体数3個体。648は白磁3寸皿で、JB-2-dに分類される。型打ち成形によって菊花状に成形され、口縁部は輪花を形成する。色調はやや乳白色を呈する。被熱している。649は白磁3寸皿で、JB-2-dに分類される。口縁部は外曲し、型打ち成形によって菊花状の陽刻が施されている。器面の色調は乳白色に近い。推定残存個体数6個体。650は染付6寸皿で、JB-2-dに分類される。高台断面は三角形を呈するが、畳付幅はやや広い。体部は型打ち成形によって6単位の輪花を形成する。高台内にはハリ支え痕が数箇所認められる。口唇部には口鏽が施されている。見込み周囲を二重圏線によって区画し、見込みには柘榴を内側面には手書きで雨降り文を描いている。裏文様には縁取りを有す梅花唐草

文が描かれ、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数9個体。被熱している。651は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。体部が腰が張り、口縁部は輪花を形成する。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込みには団龍文、牡丹唐草文が、内側面には海浜図が描かれている。裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には「○明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。652は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。型打ち成形によって8単位の輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に雪輪文を描いている。裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。653は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は腰が張り、口縁部は外反する。見込み中央に七宝文が描かれ、裏文様には獅子と牡丹唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。654はJB-2-dに分類される。体部は腰が張り、型打ち成形によって捻子花状の陽刻区画が施されている。口縁部は8単位の輪花を形成する。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込みには龍が、内側面には柴垣文が描かれている。裏文様には唐花唐草文が描かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。655は染付3寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は腰が張って立ち上がり、口唇部には口銹が施されている。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み中央に七宝文を描き、裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。656は染付皿の底部片で、JB-2-dに分類される。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み周囲を花丸形の二重線でご区画し、見込み中央に花文を、内側面に柴垣を描いている。裏文様は高台脇に鋸歯状文が認められる。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。被熱している。657は染付皿の底部片で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって方形状に成形されていると考えられる。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込み一面に楼閣山水文が描かれ、裏文様には梅花唐草文が描かれている。658は青磁6寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって成形され、高台脇と体中位に稜を有し、口縁部は輪花を形成する。釉調は精白色を呈し、口唇部には口銹が施されている。推定残存個体数2個体。被熱している。659は青磁皿の底部片で、JB-2-dに分類される。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込み周囲に一段を有す。釉調は青白色を呈する。660は白磁4寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって捻子花状の陽刻が施され、口縁部は6単位の輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。色調は乳白色を呈する。推定残存個体数2個体。被熱している。661は白磁皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によってクランク状に成形され、口縁部は7単位の輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。色調は乳白色を呈する。被熱している。662は瑠璃釉皿の底部片で、JB-2-dに分類される。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。被熱している。663は白磁皿の底部片で、JB-2-dに分類される。内側面には型打ち成形によって蔓文が陽刻されている。色調は乳白色を呈する。被熱している。664は染付4寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は丸味を帯びて立ち上がる。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央には五弁花文、内側面に梅花唐草文が描かれている。裏文様には縁取りを有す如意頭唐草文が描かれ、高台内には二重角枠内に銘が描かれているが、欠損のため詳細は不明。推定残存個体数2個体。665は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は腰が張って立ち上がり、口唇部には口銹が施されている。見込み、内側面、裏文様に扇面が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数6個体。被熱している。666は染付5寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は高台脇から屈曲して立ち上がり、型打ち成形によって菊花を形成する。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込みと裏文様に牡丹唐草文が描かれ

ている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。667、668は染付皿で、JB-2-dに分類される。体部は高台脇で屈曲し外反して立ち上がり口縁部で鉤形に内曲する。型打ち成形によって八角形に成形されている。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み中央には副弁を有する五弁花文が内側面には雨降り文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。667の裏文様は梅と鳥が、668は縁取りを有する如意頭唐草文が描かれている。668は有田町南川原窯ノ辻窯跡8層出土遺物に類例が認められる。推定残存個体数は、667が6個体。668が2個体。被熱している。669は染付皿で、JB-2-dに分類される。体部は高台からそのまま直線的に開いて立ち上がる。高台内は蛇ノ目凹形高台状に一段が設けられている。高台内中央にはハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口銹が施されている。内側面には紅葉と流水文が描かれ、裏文様には楼閣山水文が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数8個体。被熱している。670は染付3寸皿で、JB-2-dに分類される。体部は高台からそのまま直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。畳付は施釉され、底部は無釉。内側面に雨降り文が、裏文様には柴垣と樹木が描かれている。671は染付八角皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって八角形に成形され、口縁部は外反し輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に雪輪文を描いている。裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。672は染付四方皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって、四角形に成形されている。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面には各コーナーに窓絵を配し、梅と扇面を交互に描いている。裏文様には草花が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数5個体。被熱している。673は染付四方皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって二段角の方形に成形されている。見込みには宝珠、団龍文を描き、内側面下部には牡丹唐草文、上部には楼閣山水文が描かれている。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数6個体。被熱している。674は染付四方皿で、JB-2-dに分類される。型打ち成形によって方形に成形されている。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。見込み一面に牡丹唐草文を描き、裏文様には鳥、梅が描かれている。高台内には「大(明成)化年製」が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。675は染付四方皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって方形に成形されている。見込みに釉飛びが認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲から内側面下部にかけて柴垣と樹木が描かれ、裏文様には桜花と流水文が描かれている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。被熱している。676は染付四方皿で、JB-2-dに分類される。体部は型打ち成形によって二段角の方形に成形されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面をコーナー単位で4区画し、竹と墨弾きによる梅を交互に描いている。裏文様には梅と鳥が描かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。677は染付7寸皿で、JB-2-nに分類される。高台高は最大2.1cmを測り、体部はかなり扁平である。見込み文様は、雲形状に縁取られた区画内を唐草で埋め、薄ダミで塗り潰している。この文様は、区画内を唐草で埋め、薄ダミで塗り潰すという点で、伊万里市日峯社下窯跡から出土した染付大皿に類似例を見ることができる。裏文様は牡丹唐草文を巡らし、高台には雷文が描かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。678は染付6寸皿で、JB-2-nに分類される。高台高は1.7cmを測り、体部はかなり扁平である。見込み文様は被熱により判断が困難であるが、全面に墨弾きによって蜀江文と考えられる文様が描かれている。裏文様は牡丹唐草文が巡り、高台には染付線による縁取



りを有した櫛歯文が巡る。櫛歯文の長さは7mmで高台高の1/2以下である。また櫛歯文下には一重圏線が施されている。推定残存個体数2個体。被熱している。679は糸切り細工成形による染付変形小皿片で、JB-2-nに分類される。器形、法量は不明。見込み文様は、野菜文と考えられる葉が描かれている。葉の根本が一方向に揃い、個々の葉の葉脈は細かく枝分かれしている。なおかつそのうちの一枚が裏返っている構図は、伝世品の大根文皿や、鍋島家伝来の『図案帳』に見ることができる。裏文様は、無文の可能性が高い。高台には丁寧に縁取りされた櫛歯文が巡る。その長さは、高台高の1/2以下と短い。680は染付変形皿で、JB-2-rに分類される。高台及び体部の平面形は、木瓜形と推測される。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に雪輪文を描いている。裏文様には牡丹唐草文を、高台には左に傾斜する雷文を描いている。高台内には二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。681は染付変形皿で、JB-2-rに分類される。底部はベタ底で、無釉。体部は型打ち成形によって、舟形に成形され、側面には2段の菊花文が陽刻されている。見込みには松が描かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。南川原窯ノ辻窯跡出土製品に同一の土型と考えられる類例が認められる。682は白磁変形皿で、JB-2-rに分類される。高台及び体部の平面形は、分銅形を呈する。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲には器形に沿った帯文が陽刻されている。推定残存個体数3個体。被熱している。683は青磁変形皿で、JB-2-rに分類される。破片形状から平面形は伝世品(柴田夫妻コレクション2-127などに類似する)折紙形と推定される。釉調は淡深緑色を呈する。見込みには文字文様が陽刻されている。被熱している。684は染付変形皿で、JB-2-rに分類される。高台平面形は楕円形を体部平面形は木瓜形を呈すると推定される。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、内側面に雪輪文が描かれている。裏文様には牡丹唐草文が、高台には右に傾斜する雷文が描かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。680とは雷文の傾きが異なるが、同一個体の可能性が高い。685は染付変形皿で、JB-2-rに分類される。体部は型打ち成形によって木瓜形に成形されている。見込み周囲に宝珠文が、裏文様には牡丹唐草と龍が、高台には線書きによる櫛歯文が描かれている。高台内には二重角枠に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数6個体。被熱している。

686～691は大皿・大平鉢である。686は青磁大皿で、JA4-3に分類される。素地は灰褐色を呈する。口縁部は外曲し輪花を形成する。体部は型打ち成形によって菊花状を呈する。釉調は被熱による変色も考えられるが、やや褐色を帯びた深緑色を呈している。687は漳州窯系の大皿で、JA2-3に分類される。素地は灰褐色を呈し、気泡を含む。高台断面はやや内傾する台形を呈し、畳付際には砂が熔着している。白化粧を施した上に透明釉を掛け、白泥によって草花文を描いている。いわゆる餅花手である。釉調はやや緑がかり、随所に釉ムラ、釉飛びが認められる。被熱している。688～690は色絵大皿で、JB-3-fに分類される。688の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、内傾する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。被熱のため文様の詳細は不明であるが、内外面共に黄絵の具による帯文の窓絵を配したいわゆる百花手と推定される。高台脇内外ともに染付圏線が描かれている。被熱している。689の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、やや内傾する。口縁部内外に一重線、高台に二重線、高台内際に一重圏線、高台内に二重圏線が描かれている。被熱のため詳細は不明であるが、見込み、裏文様共に草花文が描かれていると推定される。いわゆる五彩手である。また高台畳付に緑絵の具が塗られている。被熱している。690の素地は灰白色を呈する。高台断面は台形を呈し、やや内傾する。被熱のため詳細は不明であるが、見込みは色絵亀甲文で埋められ、裏文様には染付による折枝松葉文?が描かれている。いわゆる五彩手である。被熱している。

689 と 690 に熔着資料があることから、これらの大皿は重ねて収蔵されていたと推定される。691 は青磁大皿で、JB-3-f に分類される。素地は灰白色を呈する。口縁部は鏝状に外曲し、二重沈線が巡っている。釉調は青白色を呈する。被熱している。

692 ～ 695 は景德鎮窯系の鉢である。692 は青花鉢で、JA1-5 に分類される。畳付外側はシャープに面取りされている。体部には獅子が描かれ、高台内には二重圈線内に「(更) 蘭斎製」銘が書かれている。推定残存個体数 2 個体。被熱している。693 は青花鉢で、JA1-5 に分類される。畳付はシャープに整形され、高台内には砂が熔着している。見込みには花卉文を内外側面には芙蓉手文様が描かれている。被熱している。中央診療棟地点 L32-1、24 と同一製品である。694 は黄地緑彩鉢で、JA1-5 に分類される。陰刻によって獅子の輪郭を描いている。推定残存個体数 2 個体。被熱している。695 は黄釉鉢で、JA1-5 に分類される。底部には透明釉が施され、「○明○○○○」銘が書かれている。推定残存個体数 3 個体。被熱している。694 と同一製品の可能性有り。696 は染付平鉢で、JB-2-d に分類される。高台高は 17mm と高い。口縁部は稜をもって開き、輪花を形成する。高台内にはハリ支え痕が認められる。文様帯は二重圈線によって見込み、内側面下部、上部に区画され、内側面下部には波頭文、上部には唐草文が描かれている。見込み文様は欠損のため不明。裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。被熱している。697 は染付鉢で、JB-5-f に分類される。口縁部は稜をもって開き、兜鉢状を呈する。口唇部は平坦に成形され、染付されている。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込みと内側面两部分を二重圈線によって区画し、見込みには鳳凰文が内側面上部には花唐草文が描かれている。外側面は稜を境にして、下部には蝶、花が、上部には蓮弁文が描かれている。被熱している。698 は瑠璃釉鉢の底部片で、JB-5-b に分類される。高台高は 21mm と高い。高台から底部にかけてやや釉ムラが認められる。被熱している。699 は染付平鉢で、JB-2-d に分類される。高台から体部へは滑らかに移行し、口縁部は S 字状に外反する。高台内にはハリ支え痕が認められる。見込み周囲を二重圈線で区画し、内側面に松竹梅文を描いている。裏文様には雨降り文が描かれている。高台内には二重圈線が引かれ、二重角枠内に異形字銘が書かれている。推定残存個体数 4 個体。被熱している。700 は染付鉢で、JB-5-b に分類される。口縁部は鏝状に外曲し輪花を形成する。口縁部には桜唐草文が、裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には「大・〇・」銘が認められる。被熱している。701 は染付平鉢で、JB-2-d に分類される。体部は型打ち成形によって 16 単位の輪花を形成する。高台内中央にハリ支え痕が 1 箇所認められる。見込み周囲には龍と宝珠を描き、内側面には唐花唐草文を描いている。裏文様には牡丹唐草文が描かれている。高台内には「○明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数 3 個体。被熱している。702 は白磁平鉢で、JB-5-b に分類される。体部は型打ち成形によって 8 単位の輪花を形成する。また内側面に輪花単位で唐花が陽刻されている。口唇部には口鏽が施されている。色調は乳白色を呈する。推定残存個体数 13 個体。被熱している。703 は白磁輪繫ぎ文平鉢で、JB-2-d に分類される。体部上半に輪繫ぎ文を透かし彫りと陽刻で表現し、その下に紅葉、流水文が陽刻されている。口唇部には口鏽が施されている。高台内にはハリ支え痕が認められる。色調は乳白色を呈する。被熱している。伝世品では柴田夫妻コレクション 5-119 に類例がある。704 は白磁輪花鉢で、JB-5-b に分類される。体部は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇部には口鏽が施されている。推定残存個体数 2 個体。被熱している。705 は白磁輪花鉢で、JB-5-b に分類される。体部は型打ち成形によって 5 単位の輪花を形成し、内側面には輪花単位で窓絵が施され、獅子、梅などが陽刻されている。口唇部には口鏽が施されている。色調は乳白色を呈する。推定残存個体数 2 個体。被熱している。706 は白磁鉢で、JB-5-b に分類される。高台高は 11mm と高い。口縁部は強く外反する。被熱している。707 は白磁鉢で、JB-5-b に分類さ

れる。口縁部は外反する。708、709は染付四方鉢で、JB-5-bに分類される。体部は型打ち成形によって二段角の方形を呈する。被熱している。708の体部には鳳凰文、梅文が交互に描かれ、709の体部には各辺に円形状の文様が、内側面上部にも文様が描かれているが、呉須がかなり滲んでおり意匠は不明である。また高台には線書きによる櫛歯文が巡っている。708の推定残存個体数3個体。710は染付輪花鉢の体部片で、JB-5-bに分類される。口唇部には口銹が施されている。外体部及び内体部上半には雪輪文が、外体部下半には牡丹唐草文が描かれている。被熱している。711は白磁輪花鉢で、JB-5に分類される。高台は碁笥底状を呈し、体部は型打ち成形によって5単位の輪花を形成する。推定残存個体数2個体。被熱している。712は白磁輪花鉢で、JB-5-bに分類される。体部は型打ち成形によって5単位の輪花を形成する。口唇部には口銹が施されている。推定残存個体数4個体。被熱している。713は青磁輪花鉢で、JB-5に分類される。体部は型打ち成形によって6単位の輪花を形成し、口縁部は外反し、鉤状に立ち上がる。釉調は青白色を呈する。被熱している。714は瑠璃釉鉢で、JB-5に分類される。口唇部には口銹が施されている。外体部には雲龍文が陰刻されている。被熱している。715は染付輪花鉢で、JB-5-bに分類される。口縁部はやや外反し、輪花を形成する。内側面には梅が、裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。被熱している。716は色絵鉢で、JB-5-bに分類される。内側面には色絵によって草花が描かれ、裏文様には染付による文様が描かれている。被熱している。伝世品では柴田夫妻コレクション3-177に類例がある。717は染付鉢の口縁部片で、JB-5-bに分類される。口縁部は外反し鉤状に立ち上がる。口唇部には口銹が施されている。口縁部内側には桐文が巡り、内側面には竹、松が描かれている。裏文様には縁取りを有す牡丹唐草文が描かれている。被熱している。718は白磁鉢の口縁部片で、JB-5-bに分類される。口縁部は外曲する。口縁部内側には雷文が、内体部には放射状の沈線が陰刻され、裏文様には青海波が陰刻されている。被熱している。

719は景德鎮窯系の白磁小杯で、JA1-6に分類される。畳付幅は広く、底部無釉。体部は腰が張り、口縁部で外反する。また高台脇にカンナ痕が認められる。釉飛びが認められる。720～726は端反形小杯で、JB-6-bに分類される。720は染付小杯で、体部文様は列点文を地文とし、鷺と葵状の植物を描いている。高台内には「宣徳年製」銘が書かれている。推定残存個体数3個体。被熱している。721は染付小杯で、体部に鶉？と草が描かれている。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。722は染付小杯で、体部に草花を描いている。地面を表すダミが高台まで及んでいる部分が認められる。推定残存個体数8個体。723は白磁小杯である。被熱している。724は染付小杯で、高台脇に蓮弁文が、体部に唐花唐草文が描かれている。高台には「大明嘉靖年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。見込みに畳付の熔着痕が認められる。被熱している。725は染付小杯で、体部に竹、梅を描き、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。726は薄瑠璃釉小杯で、外体部には草が、内側面には蓮弁文が描かれている。727は染付小鉢の底部片で、JB-5-bに分類される。畳付幅は2.5mmと広く、高台から体部へは滑らかに移行する。見込みには二重圏線内に五弁花文が描かれている。高台内には二重圏線が施されている。推定残存個体数4個体。被熱している。728は染付小鉢で、JB-5-bに分類される。高台脇に稜を有し、体部は太鼓形を呈し、口縁部で外反する。体部には草が描かれ、高台内には「製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。729は筒形小鉢で、JB-5-bに分類される。口唇部には口銹が施されている。体部には雨降り文が描かれ、雲の輪郭は墨弾きによって描かれている。高台内には二重圏線内に「大明年製」銘が書かれている。被熱している。730は青磁小鉢で、JB-5-bに分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付両端が面取りされている。



高台及び底部に砂が熔着している。体部はやや開き気味に立ち上がり、ケズリによる2条の細沈線と1条の太沈線の組み合わせで、縞状の模様が施されている。口唇部には口銹が施されている。青磁釉は淡青白色を呈する。731は染付小杯で、JB-6-dに分類される。体部は列点文で地文を施し、鷲と沢瀉を描いている。高台内には「宣徳年製」銘が認められる。推定残存個体数5個体。被熱している。732は白磁小皿で、JB-2-dに分類される。木杯形を呈する。733は鍋島様式の染付小鉢で、JB-5-gに分類される。体中位にくびれを有する。くびれ部分には七宝繋ぎ文を施した帯文が巡り、その上部には笱文と推定される文様が描かれている。医学部教育研究棟地点SK769、SD4695に同一個体あり。

734～736は猪口で、JB-7-bに分類される。734は白磁猪口である。口唇部には口銹が施されている。体部に白泥の型紙摺りによる花文が3単位施されている。推定残存個体数18個体。数個体が熔着している。被熱している。735は青磁掛け分け猪口である。外面に青磁釉、内面に透明釉が掛けられている。青磁釉は青白色を呈す。推定残存個体数3個体。被熱して熔着している。736は染付猪口である。体中位に唐草文が巡る。推定残存個体数3個体。被熱して熔着している。

737～740は瓶である。737～739は瓠形で、JA1-10に分類される。737は青花で、平面形八角形を呈する。体部上下の貼り合わせ部が認められる。文様はいわゆる祥瑞手で、各面に幾何学文、花文が交互に描かれている。底部無釉で、「上」の刻印が押されている。被熱している。738は青花の胴部片である。体部上下の貼り合わせ部が認められる。唐草が描かれている。被熱している。739は色絵である。体部上下の貼り合わせ部が下体部中央、体中位頸部、上体部中央の3箇所認められる。文様は四方襷、亀甲文などの幾何学文で地文を構成し、頸部には蓮弁文、丸文、上体部に窓絵に寿字文、体中位頸部に瓔珞文、下体部に窓絵に草花文、底部脇に雷文、幾何学連続文が描かれている。被熱している。740は白磁瓶で、JB-10-aに分類される。長頸瓶と推定される。平面形は10角形を呈する。釉調はやや青味を帯びる。内面無釉。被熱している。

741～746は、蓋物とその蓋である。741は景德鎮窯系の蓋物で、JA1-13に分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付両端が面取りされている。体部は筒形を呈し、高台脇屈曲部の釉は剥離している。口唇部はやや内側に張り出し、平坦に整形されている。体上部には把手の剥離痕が認められる。文様は体上半と口縁部内側に蝶、草花が描かれている。被熱している。伝世品では徳川美術館所蔵の「花蝶文染付獅子耳水指」に類例が認められる。742は白磁蓋物底部片で、JB-13-aに分類される。体部には紅葉が陰刻されている。被熱している。743は、蓋物の蓋である。型打ち成形によって中心付近と外端脇に微隆帯が巡り、紅葉が陰刻されている。被熱している。742に伴う可能性が高い。744は筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。体部には桜花を地文で埋めている。被熱している。745は筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。体部には草花が描かれている。被熱している。746は745の蓋である。摘みは円筒形を呈し、体部はドーム形を呈する。身と同一文様が放射状に描かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。

747、748は壺である。747は青花壺片で、JA1-15に分類される。高台から底部は無釉である。内面の釉には釉ムラが認められる。中央診療棟地点遺構外出土遺物9と同一個体と推定される。被熱している。748は青磁壺で、JA1-15に分類される。体部は外反気味に立ち上がり、頸部で強く内湾する。青磁釉は青灰白色を呈し、全面に貫入が認められる。内面と胴下半部に施されている他、頸部と肩部に隆带状に掛けられている。体上半部は露胎上に鱗状などの地文を釘彫りによって陰刻し、鉄漿を施している。その上に白濁釉によって梅、文字をイッチン状に描き、青、黒絵の具で彩色している。上端部と畳付には二次加工による研磨痕が認められる。SU390、SE399出土遺物と接合する。被熱している。伝世品では徳川美術館所蔵「青磁獅子耳付花生」に類品が認められる。

749 は合子で、JB-18-b に分類される。底部はベタ底で、外端が鉤形に削り取られている。口唇部から口縁部内側と底部が無釉である。体部には紗綾形と考えられる地文と桜花が陰刻され、薄瑠璃釉が掛けられている。内面は透明釉。被熱している。

750 は銚子で、JB-27-a に分類される。体部文様は唐草を地文とし、鳳凰文が描かれている。蓋受け部には部分的に無釉部が認められる。推定残存個体数3個体。被熱している。751、752 は銚子の蓋である。751 は750 に伴う蓋で、器形は円盤状を呈し、球状の摘みが貼り付けられている。外端部から下面が無釉である。被熱している。752 の器形は浅い傘状を呈し、球状の摘みが貼り付けられている。外端部から下面が無釉である。被熱している。

#### 陶器 (753 ~ 770)

753 ~ 763 は碗である。753 は京焼風陶器丸碗で、TB-1-b に分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台内には直径30mm、深さ1.5mmを測る大形の円圏ケズリが認められ、中央に「清水」印が押されている。やや被熱している。754、755 は呉器手碗で、TB-1-a に分類される。胎土は黄白色を呈し、気泡を含む。畳付を除き、透明釉が施され、全体に細かい貫入が認められる。755 は口縁部がやや外反し、畳付に砂目痕が4箇所認められる。756 は鉄釉丸碗で、TC-1-o に分類される。胎土は黄白色を呈し、白色砂粒を微量含む。畳付を除き、暗茶褐色の地に細かい茶褐色の斑状模様を配する鉄釉が施され、口縁部内側には褐色及び白色の筋状の模様を呈している。757 は平碗の底部片で、TD-1-h に分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台内には楕円形枠内に「音羽」印が押されている。758 は平碗で、TD-1-h に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。見込みにはピン痕が3箇所認められる。759 は丸碗で、TD-1-c に分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、緻密である。畳付外側は面取りされ、高台内には円圏ケズリが認められる。高台内には楕円形枠内に「清閑寺」印が押されている。760 ~ 762 は「仁清」印を有する碗である。760 はTD-1-c に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。畳付外側は面取りされ、高台内のケズリは中心から偏り、畳付幅は2~5mmを測る。畳付内側のケズリによって底部際に細い溝状の彫り込みが認められる。底部中央には兜巾状の張り出しが認められる。高台脇にはカンナ痕が認められる。釉はやや白濁し、口縁部には銹絵によって網目文が描かれている。761 は底部片で、TD-1-c に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。畳付外側は面取りされ、高台内のケズリは中心から偏り、畳付幅は3~5.5mmを測る。畳付内側のケズリによって底部際に細い溝状の彫り込みが認められる。底部中央には兜巾状の張り出しが認められる。高台脇にはカンナ痕が認められる。762 は底部片で、体部の傾きからTD-1-h と推定される。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。畳付外側には面取りが認められる。畳付幅3.5mmと広い。畳付内側のケズリによって底部際に細い溝状の彫り込みが認められる。底部中央には兜巾状の張り出しが認められる。釉はやや白濁している。被熱している。763 は平碗で、TB-1 に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒を微量含む。硬質かつ緻密である。高台は外傾し、3箇所を掻き取られた割高台を呈す。高台は左回転によって整形されている。底部を除き茶褐色を呈する鉄釉が施され、見込みには褐釉が流し掛けされている。

764、765 は皿・平鉢である。764 は灰釉端反皿で、TC-2-y に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台の約半分が剥離され、残存していない。見込みにはピン痕が4箇所認められる。釉はやや緑掛かった灰釉で、底部が拭き取られている。765 は灰釉摺絵皿で、TC-2-e に分類される。胎土は灰白色を呈し、気泡を若干含む。高台は付高台で、体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で輪花を形成する。また見込み周囲には1段が設けられている。見込みにはピン痕が認められ

る。見込みには草花が、鉄絵、型紙摺りによって描かれている。釉はいわゆる御深井釉である。被熱している。

766は刷毛目大平鉢で、TB-3-aに分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微粒子を含み、硬質である。口縁部は鉤形を呈する。見込みは圏線によって区画され、波状刷毛目文を施し、褐釉を流し掛けしたのち、見込みから外体部上半にかけて透明釉を流し掛けしている。

767、768は香炉・火入れである。767は鉄釉袴腰香炉で、TC-9-fに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質である。体部から口縁部内側にかけて茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。768は鉄釉香炉で、TC-9-fに分類される。底部には獣足風の脚が貼り付けられている。見込みには目痕が3箇所認められる。黒褐色を呈する鉄釉が、底部を除き施されている。被熱している。

769は鉄釉水注で、TC-27-aに分類される。胎土は黄白色を呈する。肩部に3条の沈線が巡っている。被熱している。

770は京焼風陶器蓋物の蓋である。表面に山水と推定される文様が描かれている。被熱している。  
土器 (771～780)

771～777はかわらけである。771～773は右回転の回転糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。771の胎土は淡褐色を呈し、赤色微粒子を含む。体部はやや外反し、見込みには同心円状の整形痕が認められる。772の胎土は橙褐色を呈し、赤色微粒子、白色微砂粒を含む。体部はやや内湾し、見込みには同心円状の整形痕が認められる。口唇部には灯心痕が認められる。773の胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。体部は外反し、口縁部で内湾する。見込みには同心円状の整形痕が認められる。口唇部には灯心痕が認められる。774、775は左回転の回転糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。774の胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を微量含む。体部はやや外反し、見込みには渦巻き状の整形痕が認められる。775の胎土は褐色を呈し、白色微砂粒を微量含む。体部は外反し、口縁部で内湾する。見込みには同心円状の整形痕が認められる。776は左回転の離れ糸切り痕を有し、DZ-2-aに分類される。胎土は褐色を呈し、白色微砂粒、雲母を少量含む。体部は外反し、口縁部で内湾する。見込みはほぼ平滑に整形されている。口唇部に灯心痕が認められる。777は左回転の回転糸切り痕で、DZ-2-bに分類される。底体間には明瞭な稜を有し、体部はほぼ直線的に開く。見込みには逆「の」の字方向の渦巻き状整形痕が認められる。底部中央には直径2.5mmを測る孔が穿たれているが、端部に顕著な剥離痕が認められることから、焼成後穿孔と推定される。見込みにはススが付着している。

778はほうろくで、DZ-47-aに分類される。胎土は褐色を呈す。底体間にはケズリが認められる。ドーム状の内耳は中空である。外側面にススが付着している。

779は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-dに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含む。内面には布目痕が認められる。体部には一重角椀に「天下一御塩壺師堺見など伊織」銘の刻印が押されている。

780は輪積み成形塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を含む。内面に布目痕が認められる。

## (8) C層 (IV-321～325 図)

C層出土遺物は天和2(1682)年の火災後の造成土のうち、C2層分布域以外でC1層、C3層の層序識別ができなかった区域出土遺物の総称である。

781～798は磁器である。781は白磁碗で、JB-1-cに分類される。器面色調はやや白濁色を呈し、



全体に細かい貫入が認められる。782は染付碗で、JB-1-cに分類される。腰の張りは弱く、高台脇から緩やかに内湾しながら立ち上がる。文様は3単位の雪輪文で構成され、雪輪内には鹿が描かれている。783は景德鎮窯系の青花皿で、JA1-2に分類される。畳付は鋭くヘラケズリされている。施釉状態は粗雑で高台内に釉切れが認められる。また畳付には砂が熔着している。見込みには日字鳳凰文が描かれ、裏文様は無文である。784は瑠璃釉皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は逆台形を呈し、口縁部は輪花を形成する。畳付を除く全面に薄瑠璃釉が施されている。見込みは型打ち成形によって中央に「の」の字方向の渦巻き文が、側面に花文が陰刻または陽刻されている。785は染付皿で、JB-2-cに分類される。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。見込みには草花文を描き、側面の窓絵には花文と宝珠文が交互に8単位配されている。裏文様は線書きによって4単位の区画され、略された花文のワンポイントが描かれている。786は色絵皿で、JB-2-cに分類される。複数個体が出土している。高台断面は三角形を呈するが、畳付はほぼ平坦に整形されている。体部は丸味を帯びて立ち上がり口縁部で外湾する。器面色調はやや灰色を帯び、全体に細かい貫入が認められる。見込みには黒、赤、緑、青、黄絵の具を用い、見込み中央には如意頭を巡らせた円圈状の区画を配し、区画内外にわたり、折枝文が描かれている。裏文様は赤絵の具によって、高台に2本、体部下半に1本の圈線が巡らされている。いずれの破片も被熱し、上絵付け、釉薬共に変質し、焼土が付着している。787は染付皿で、JB-2-aに分類される。高台断面は細身の逆台形を呈し、やや内傾する。体部は緩やかに開き、上半部でやや内湾する。見込み文様は二重圈線による区画内に樓閣山水文が描かれ、裏文様には略された花文が3単位配されている。高台内には「大明」銘が書かれている。788は白磁小皿で、JB-2に分類される。型打ち成形により菊花状の輪花に形成されている。789は白磁形皿で、JB-2-rに分類される。高台は糸切り細工による貼り付け高台である。体部は型打ち成形によって5単位の輪花を形成し、見込み周囲には陽刻による文様が施されている。790は小坏で、JA1-6に分類される。高台は蛇ノ目高台を呈し、畳付外側が面取りされている。底部無釉である。見込みには荒磯文が染付されている。791は染付仏飯器で、JB-8-cに分類される。高台は蛇ノ目高台を呈し、脚部は短く、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。釉は生掛けで、底部は無釉である。見込みには灰の熔着痕が認められる。792、793は染付壺で、JB-15に分類される。792は口縁部欠損。高台断面は台形を呈し、底部無釉である。体部には一本線による花唐草文が描かれている。793は口縁部欠損。高台断面は三角形を呈する。また高台は不整形円形を呈し、整形も粗雑に行われている。体部は腰が張って立ち上がり、最大径は体上半部にある。文様は体上半部に花文様を描いた丸文が3箇所配されている。口縁部欠損面は比較的細かく打ち掛かれており、再加工された可能性が高い。794は染付端反小坏で、JB-6-bに分類される。器壁は全体的に薄く成形され、丁寧に作られている。体部文様は流水文と紅葉が描かれ、高台内には一重圈線が巡る。795は青磁合子で、JB-18-bに分類される。型押し成形によって、八角形に形作られている。高台断面は長方形を呈するが、高台外側に青磁釉が厚く掛かっているため、視覚的には碁笥底状に受け止められる。青磁釉は畳付、蓋受け部を除き全面に施され、淡青緑色を呈する。796～798は蓋である。796は丸碗の蓋である。摘み断面はU字形を呈する。外面には、花文が描かれている。797は色絵蓋物の蓋である。高台状の摘みを有し、体部はほぼ直線的に開く。文様は赤絵の具を基調に、8単位の丸文が描かれ、丸文内は赤絵の具によって幾何学文が、黄絵の具によって花文が交互に描かれている。摘み内には赤絵の具によって一重角枠内に「角福」銘が描かれている。798は白磁壺の蓋である。球状の摘みを有し、体部はドーム状を呈し、端部はほぼ水平に張り出す。釉は外面のみに掛けられている。

799～816は陶器である。799は灰釉碗でTB-1-iに分類される。高台断面は台形を呈し、底部

中央には兜巾が認められる。高台脇はシャープに削られ体部とは明瞭な境界を有す。体部は緩やかに内湾しながら開き、口縁部で外反する。胎土は淡黄白色を呈し、緻密である。釉は底部以外に施され、色調は褐色を呈すが、体下半部は焼成不良のため白濁している。見込みには降灰による斑点が認められる。**800**は象嵌文碗で、TB-1-kに分類される。高台断面はU字形を呈する。体部は腰が張って立ち上がり、上半部はほぼ直立する。胎土は茶褐色を呈し、緻密である。文様は口縁部と体中位に櫛歯状工具によって集合沈線を施した後、それらの間に波状集合沈線を施し、白泥で埋めている。畳付を除き透明釉が施されているが、焼成不良のため、白濁している箇所が多く認められる。**801**は陶胎染付碗で、TB-1-fに分類される。高台断面は三角形を呈し、高台高は12mmと高い。体部は高台脇から緩やかに内湾ぎみに開きながら立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。器面全体に白泥を施しその上に海浜図が染付されている。釉は畳付を除き掛けられ、全面に貫入が認められる。**802**は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。高台断面は台形を呈し、高台脇はシャープに削られ体部とは明瞭な境界を有す。体部はやや腰が張り、緩やかに内湾して立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。畳付には3箇所の窯道具痕が認められる。釉は底部を除き施釉され、全面に微細な貫入が認められる。色調は透明感のある緑灰色を呈す。**803**は呉器手碗で、TZ-1に分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質かつ緻密だがややざらつき感がある。高台断面は三角形を呈し、やや外傾する。畳付は丸く整形されている。高台内中央には兜巾が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部でやや外反する。畳付を除き、白化粧土を施した上にやや緑味を帯びた灰釉が掛けられている。全体に細かい貫入が認められる。被熱している。**804**、**805**は青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。嬉野市内野山北窯跡出土製品を指標とする製品である。高台断面は台形状を呈し、体部は緩やかに丸味を帯びながら浅く開く。胎土は黄白色を呈し、緻密である。底部を除く外面には灰釉が、見込みには青緑釉が施され、中央部が蛇ノ目状に釉剥ぎされている。**804**の畳付には顕著な摩耗痕と微細剥離痕が認められ、使用するにあたり、研磨された可能性がある。**805**の蛇ノ目釉剥ぎ部と畳付には4箇所の砂目痕が認められる。**806**は二彩手皿で、TB-2-gに分類される。高台断面は長方形を呈し、高台内は大きく削り込まれている。体部は浅く開き、口縁部でS字状に折り返され、鏢状に成形されている。胎土は暗褐色を呈し、白色微砂粒を含み、硬質かつ緻密である。畳付と口縁部を除き、鉄釉が施され、見込みは釉が渦巻き状に削り取られている。口縁部にのみ緑釉が施されている。見込みと畳付には砂目痕が認められる。**807**は長石釉皿で、TC-2-cに分類される。胎土は黄灰白色を呈し、やや軟質である。高台は低く、断面形は三角形を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、ケズリによる明瞭な稜線が2本認められる。高台内には3箇所の円錐ピン痕が認められ、そのうち1箇所は熔着している。釉は器面全面にやや灰色を帯びた長石釉が施されている。**808**は灰釉輪剥皿で、TC-2-mに分類される。胎土は黄白色を呈し、やや粗い。高台幅は5mmと細く、断面形は三角形を呈する。底部厚は11mmと厚く、体部は極緩やかに丸味を帯びて開き、口縁部で外反する。釉は底部を除き施され、見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎしている。また蛇ノ目釉剥ぎ部の内側は円形状に1段低く削られている。色調は灰白色を呈する。**809**は菊皿で、TC-2-kに分類される。胎土は黄白色を呈し、やや粗い。高台断面は三角形を呈し、体部は丸味を帯びて開く。見込みは型打ち成形によって、菊花状に成形され、器面には成形時の布目痕が認められる。また口唇部は花卉に合わせた輪花を形成している。体部外面にも花卉に合わせた放射状の沈線が施されているが、かなり雑に施され、輪花とは対応していない。釉は見込みから外体部中位まで灰釉が施され、見込みには緑釉が流し掛けされている。見込みには円錐ピン痕が3箇所認められる。**810**はいわゆる笠原鉢で、TC-3-aに分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は逆台形

を呈し、豊付端部は丸味を帯びて整形されている。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反し、口縁部内側はケズリによる明瞭な稜を有し、口唇部は玉縁状に整形されている。釉は透明で、全面に施されている。見込みには鉄絵によって草花文が描かれ、緑釉が流し掛けされている。また見込みにはピン痕が2箇所認められる。被熱している。**811**は飴釉仏飯器で、TC-8に分類される。胎土は黄灰白色を呈し、やや硬質である。脚端部は鐔状に広がり、脚部は円筒形を呈し、ナデによって丁寧に整形されている。体部は脚部上に貼り付けられ、やや腰が張って立ち上がる。釉は脚部を除き、飴釉が施されているが、焼成不良のため白濁している。**812**は灰釉瓶で、TC-10-hに分類される。胎土は灰白色を呈し、やや軟質である。高台は碁笥底を呈し、体部下半に最大径を有する。頸部から口縁部までは円筒形状に立ち上がり、口縁部はクランク状に屈曲する。頸部にはS字状の把手が一对貼り付けられている。全体的に著しく被熱しており釉調は不明である。**813**は鉄釉瓢形瓶の胴部片で、TB-10に分類される。胎土は黒褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質かつ緻密である。内外面に鉄釉が施されているが、内体部下半は流し掛けによって縞状になっている。**814**は瀬戸・美濃産の鉄釉播鉢で、TC-29に分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、やや軟質である。底部はケズリが施されているものの、糸切り痕が残存する。体部は逆八の字状に直線的に開き、口縁部はクランク状に屈曲し、口唇部断面は三角形を呈する。播目は1条15単位である。器面全面に錆釉を施した後、体部下半が拭き取られている。底部には重ね積みによる目痕が残存部で3箇所、推定4箇所認められる。内体部下半は著しく摩耗し、播目内以外の釉はほぼ完全に擦り取られている。**815**は肥前産播鉢の口縁部片で、TB-29-bに分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質かつ緻密である。口縁部は内側が隆帯状に肥厚し、口縁端部は外反する。口縁部内外面には錆釉が施されている。**816**は常滑焼と推定される陶管片である。胎土は灰褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含む。硬質である。ジョイント部はクランク状に屈曲しており、内側屈曲端部が使用によるものか、残存範囲において全面剥離している。内面には縦方向の櫛目整形痕が認められる。釉は外面に鉄釉が、内面に鉄泥が施されている。形態・規模から井戸枠に使用されたものと推定される。

**817**～**823**は土器である。**817**は左回転ロクロ成形のかわらけで、DZ-2-aに分類される。本来の胎土色調は淡褐色を呈しているが、器面ほぼ全面が酸化炎焼成のため、黒褐色に変色している。口縁部はやや内湾して立ち上がる。見込みは中央から凸、凹、凸、凹の同心円状整形痕が認められる。**818**は右回転ロクロ成形のかわらけで、DZ-2-aに分類される。胎土は褐色を呈し、暗赤褐色微粒を含む。体部は内湾して立ち上がる。口唇部には灯心痕が2箇所認められる。**819**はあんかで、DZ-63に分類される。胎土は褐色を呈し、雲母微粒を含む。平面楕円形を呈するドーム形を呈しており、上部には円形を呈する開口部を有す。体上部には長方形のスリットが3箇所、その左手に三角形、さらに横長楕円形のスリットが続く。**820**は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。胎土は橙褐色を呈する。底部には円錐台形の脚が貼り付けられ、脚外周はナデ整形が施されている。残存部では1基確認される。口縁部はやや内湾するが、口唇部には著しい敲打痕が認められる。また内体部上半には使用時のスス痕が著しく付着している。**821**は丸底ほうろく体部片で、DZ-47-aに分類される。胎土は陶褐色を呈し、雲母、白色微砂粒を含む。体部は横方法のナデ整形によって丁寧に整形されている。**822**は輪積み成形による塩壺で、DZ-51-aaに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色微砂粒、長石粒を含む。体部は円筒形を呈し、口縁部は一旦括れ、端部で外反する。内面には輪積み痕が認められる。**823**は輪積み成形塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色砂粒を含む。受け部はハの字状に開く。



## (9) C面焼土 (IV-325 ~ 329 図 824 ~ 861)

C面焼土出土遺物は、C面上に構築されたSK3埋没後の整地層CR1面直上に堆積し、A層にパックされている焼土層出土遺物群を指す。本焼土層は天和2年の火災以降に生じた火災による瓦礫廃棄層である。またA面上に構築されたSD236の溝底には宝永4(1707)年の富士山噴火によって降灰した火山灰が敷き詰められていたことから、A面造成はそれ以前と位置付けられる。よって本焼土層の発生年代は1683~1707年に絞られ、その間の文献記録から、本郷邸が全焼した水戸様火事(元禄16[1703]年)に要因を求めることができる。なお、出土遺物の注記にはSK03西側焼土と記載されている。

824~844は磁器である。824は色絵碗で、JB-1-dに分類される。高台高は8mmと高い。口唇部には口銹が施されている。外面には染付と色絵を併用して菊と牡丹が描かれ、ダミで描かれた岩の稜線には墨弾きが用いられている。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央と内側面上半に染付と色絵を併用した七宝文が描かれている。色絵の具は黄、赤、緑が使用されている。推定残存個体数12個体。被熱している。825は824に伴う蓋である。摘み高は7mmを測り、やや外傾する。端部には口銹が施されている。文様構成は碗と同様であるが、内面の七宝文は周囲のみである。被熱している。826は染付碗で、JB-1-dに分類される。体部には墨弾きを用いた丸文が描かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。827は826の蓋である。文様構成は碗と同様である。被熱している。828は染付うがい茶碗で、JB-1-tに分類される。口唇部には口銹が施されている。見込みには雁と葦が、外面には桜花が描かれている。被熱している。829~834は皿・平鉢である。829は染付3寸皿で、JB-2-eに分類される。口縁部は外反し、輪花を形成する。見込み周囲を二重圏線で区画し、見込み中央に副弁を有する五弁花、内側面には松竹梅文が描かれている。裏文様には縁取りを有する如意頭唐草文が描かれている。高台内には「太明○化年製」銘が書かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。830は染付四方皿で、JB-2-eに分類される。体部は型打ち成形によって方形に成形されている。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、中央に五弁花を内側面には宝珠と唐花を交互に描いている。裏文様には縁取りを有す如意頭唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。推定残存個体数2個体。被熱している。831は染付6寸皿で、JB-2-eに分類される。高台内にはハリ支え痕が認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み周囲を二重圏線で区画し、中央に副弁を有する五弁花文を内側面に草花を描いている。裏文様には縁取りを有す唐草文が描かれている。高台内には「○嘉年製」銘が書かれている。被熱している。832は染付4寸皿で、JB-2-eに分類される。高台内中央にはハリ支え痕が1箇所認められる。口唇部には口銹が施されている。見込み中央にコンニャク印判による五弁花文を描き、内側面には墨弾きを用いて波頭文?と花が描かれている。裏文様には線書きによる如意頭唐草文が描かれている。推定残存個体数4個体。被熱している。833は染付皿で、JB-2-eに分類される。高台内中央にはハリ支え痕1箇所が認められる。見込み中央にコンニャク印判によって副弁を有する五弁花文が描かれ、内側面には墨弾きを用いて波状文様が描かれている。裏文様には蔓草状の文様が描かれている。推定残存個体数5個体。被熱している。834は青磁小皿で、JB-2-eに分類される。釉調はやや灰色を帯びた青白色を呈し、全面に貫入が認められる。口唇部には口銹が施されている。835~837は大皿である。835は染付大皿で、JB-3-bに分類される。高台内にはハリ支え痕が6箇所認められる。見込みには鶉?、雪輪、竹が描かれ、内側面には花文様を地文として、木瓜形の窓絵を配し、梅、草花などが描かれている。裏文様には縁取りを有す梅花唐草文が描かれている。高台内には二重

圏線が描かれている。被熱している。836は青磁大皿で、JA4-3に分類される。胎土は灰褐色を呈する。高台内には蛇ノ目状の釉剥ぎが施されている。口縁部は外反し、6単位の輪花を形成する。釉調は緑褐色を呈する。見込み中央に花卉状の貼り付け文があり、周囲はヘラ彫りによって蓮弁文が施されている。被熱している。837は蛇ノ目凹形高台青磁大皿で、JB-3-dに分類される。蛇ノ目釉剥ぎ部にはチャツの熔着痕が認められる。釉調はやや緑味を帯びた青白色である。見込みにはヘラ彫りによって花文が描かれている。被熱している。838は青花鉢で、JA1-5に分類される。畳付外側釉際は面取りされている。高台内側にはカンナ痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。断片的ではあるが、見込みと裏文様には風景が描かれている。高台内には二重圏線内に「○○○製」銘が書かれている。被熱している。839は青磁染付小杯で、JB-6-aに分類される。高台内と内面が透明釉、外面が青磁釉で掛け分けられている。青磁釉はややくすんだ青白色を呈す。口唇部には口銹が施されている。見込みには型紙摺りと手書きを併用して花籠を描いている。推定残存個体数3個体。被熱している。840は糸切り細工による菱形蓋物で、JB-13-dに分類される。底部は無釉で、四隅には脚が貼り付けられている。体部には唐花唐草文が描かれている。底部には墨が付着し、釘書きによって文字が彫られている。被熱している。841は840に伴う蓋である。対角線長軸方向に橋状摘みが貼り付けられている。表面には唐花唐草文が描かれている。842は筒形蓋物で、JB-13-bに分類される。底部はベタ底で、無釉である。体部には帯線による文様が描かれている。被熱している。843は842に伴う蓋である。ドーム形を呈する。表面には身と同様の文様が描かれている。被熱している。844は染付壺で、JB-15に分類される。高台は算盤玉状を呈する。体部には蝶、草花が描かれており、図示できなかったが、頸部にはコンニャク印判による雲形文、口縁部には幾何学文による帯文が描かれている。被熱している。

845～857は陶器である。845～847は碗である。845は京焼風陶器碗で、TB-1-bに分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台内中央には円圏ケズリが認められ、その中に「小松吉」銘の刻印が押されている。846は陶胎染付碗で、TB-1-fに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。体部には山水文が描かれている。被熱している。847は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質である。釉はやや緑味を帯びている。848～851は皿である。848は青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、緻密である。見込みに青緑釉、外体部に透明釉が掛けられている。高台内には花押が墨書されている。849は灰釉丸皿で、TC-2-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質である。高台断面は三角形を呈し、畳付は直重ね焼成における熔着剥離痕が認められる。見込みに環状熔着痕が認められる。850は鉄釉小皿で、TF-2に分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微砂粒を含む。硬質かつ緻密である。底部には右回転の回転糸切り痕を残す。底部を除き、鉄漿が掛けられている。851は三足を有す皿状製品片で、TD-2と考えられる。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。器体は板作り成形で、意匠に伴う微隆起を作出し、それに沿って鉄絵による上絵付けが施されている。底面の脚は枝状に繋がり、接地部分を除き茶絵の具で彩色されている。乳頭状の二脚には接地部分に×の釘彫りが認められる。もう1箇所脚では体部との接合部が中空になっており、体部に施された直径1mmを測る五弁花状の穿孔部と繋がる構造を呈す。被熱している。852は腰白茶壺で、TD-15-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。外面から口縁部内側にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。頸部には一条の稜が巡り、その下に橋状把手が4箇所貼り付けられている。口縁部は外曲し、玉縁を呈する。被熱している。853は鬚水入れで、TC-25に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。体部には鉄絵によって桜花が摺絵されている。

底部無釉。被熱している。854は搦鉢で、TK-29に分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微砂粒を極多量、長石粒を含む。硬質である。口縁部は2条の沈線を有す縁帯を形成する。搦目は8条1単位で構成され、密に施されている。鉄鏝が掛けられている。855は灰釉餌入れで、TC-30に分類される。胎土は灰白色を呈す。底部を除きやや緑味を帯びた灰釉が掛けられている。口唇部には敲打痕が全周し、底部には墨書が認められる。856、857は蓋である。856は水注の蓋である。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。器体は円盤状を呈し、球状の摘みが貼り付けられている。外面には鉄絵によって花文が摺絵されている。下面無釉。被熱している。857は蓋である。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。鉤状の摘みが貼り付けられている。擦り合わせ部を除き、錆釉が掛けられている。被熱している。

858～861は土器である。858は右回転の回転糸切り痕を有すかわらけで、DZ-2-aに分類される。胎土は黄灰褐色を呈し、白色微砂粒を含む。体部はやや外反し、見込みには同心円状の整形痕が認められる。被熱している。859は左回転の回転糸切り痕を有すかわらけで、DZ-2-bに分類される。胎土は陶褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。腰折れ状痕が認められる。860は底部穿孔上製かわらけで、DZ-2-iに分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色微砂粒を微量含む。底部にはDZ-2-cにおける渦巻き状の沈線が認められ、ほぼ中央に直径4mmを測る焼成前穿孔が認められる。被熱している。861は輪積み成形塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土はやや赤味を帯びた淡褐色を呈し、白色微砂粒を少量含む。端部全域に剥離痕が認められ、二次加工された可能性がある。



## 第4節 遺構出土 磁器・陶器・土器 (IV-330～522 図)

### SD1 (IV-330 図)

1～3は磁器である。1は鉢でJB-5-bに分類される。体部は型打ち成形により輪花を形成し、高台内には銘を有す。2は猪口でJB-7-bに分類される。高台内の「大明成化年製」銘は型紙摺りによって描かれている。3は仏飯器でJB-8-cに分類される。4～6は陶器である。4は灰釉小坏でTD-1-gに分類される。5は灰釉油受け皿でTD-40-bに分類される。6は灰釉二合半徳利でTC-10-cに分類される。釉は付け掛けで施され、体部に列点による「久〇」の釘書きが認められる。

### SK2 (IV-330～332 図)

本遺構からは多量の遺物が出土している。年代的には瀬戸・美濃系磁器製品(3, 4)などの存在と、湯呑み碗JB-1-oが確認されないことから、東大Ⅷa段階に比定できる。

1～6は磁器である。1～2は染付碗で、1はJB-1に分類される。器形は小丸碗に似ているが、高台径が広く、畳付が外面から大きく三角形に削られている点の特徴である。2はJB-1-mに分類される。3, 4は端反碗でJC-1-dに分類される。4は高台内に銘款を有す。5は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿でJB-2-1に分類される。見込みにコンニャク印判による五弁花文が描かれている。口唇部には3箇所、5箇所の敲打痕が認められ、灯心痕が付着していることから、油皿に(再)利用されたことが窺われる。6は小坏でJB-6-aに分類される。

7～26は陶器である。7は小杉碗でTD-1-dに分類される。体部には鉄絵の具によって簡略された根引き松が描かれている。8は太白手蛇ノ目凹形高台染付皿でTC-2-tに分類される。9は鉢でTC-5に分類される。口縁部は輪花を形成し、見込み側面にはうのふ釉が流し掛けられ、見込みには推定5箇所の目痕が認められる。10は香炉・火入れでTD-9-cに分類される。口唇部約1/2に敲打痕が認められ、火入れとして使用されたことが窺える。11, 12は二合半灰釉徳利で11はTC-10-aに、12はTC-10-cに分類される。体部には列点による釘書きが施されている。12は「久〇」。13, 14は一升徳利でTC-10-eに分類される。ともに列点による釘書きが施され、13は「久〇」、14は「一△」である。また13の肩部欠損面は二次加工が施され、再利用されたことが窺える。15は水滴でTC-19に分類される。上面には陽刻による文様が施されている。16は片口でTC-23-bに分類される。見込みには3箇所の目痕が認められる。底部には墨書が認められる。17は餌入れでTC-30に分類される。底部には墨書が認められる。18は柄杓でTD-32に分類される。体内面には鉄絵による1条の圏線が施されている。19は青土瓶でTZ-34-aに分類される。底部露胎部にはスス痕が認められる。20は青土瓶の蓋で19の蓋と推定される。21, 22は鉄釉土瓶でTZ-34-eに分類される。21の注口はS字状を呈し、接合部分には4箇所の漉し穴が穿たれている。胴下半部の露胎部にはスス痕が認められる。23は油受け皿でTD-40-bに分類される。外面露胎部には重ね焼きによる熔着痕が認められる。24～26は土瓶の蓋で、24は、中央部に緑釉が掛けられている。25は灰釉土瓶の蓋である。26は鉄釉土瓶の蓋で、22の蓋と推定される。

27～37は土器である。27は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。口唇部には著しい敲打痕が認められる。28は硬質瓦質丸火鉢でDZ-31-dに分類される。体部外面に全域に印刻が施されている。29は硬質瓦質筒形火鉢でDZ-31-jに分類される。体部中央付近に穿孔が認められる。30～34は灯火具である。30は脚付油受け皿で、DZ-40-aに分類される。口唇部に灯心痕が認められ、単一で使用されたことが窺われる。31は油受け皿でDZ-40-bに分類される。32～34はひょうそくである。

32はDZ-44-cに、33、34は透明釉が掛けられ、DZ-44-bに分類される。33は、底部中央部が穿孔され、芯支え内に貫通している。35、36は塩壺でDZ-51-wに分類される。36の口唇部外側には敲打痕が巡っている。37は塩壺の蓋でDZ-00-dに分類される。

SU11 (IV-332 図)

1は染付皿でJB-2-eに分類される。体部は型打ち成形によって成形され、見込み側面には陽刻が認められる。被熱している。2は合子でJB-18-bに分類される。体部全面に丁寧に縁取られた唐草が描かれている。被熱している。3、4は合子の蓋である。3は2の蓋である。被熱している。4はドーム形を呈する。型押し成形で作られ、外面全面に陽刻が施されている。被熱している。5は陶胎染付丸碗でTB-1-fに分類される。被熱している。6はかわらけでDZ-2-bに分類される。

SU12 (IV-332～334 図)

被熱した陶磁器が含まれており、一部は火災時の廃棄と考えられる。被熱資料の年代より、元禄16年の火災による可能性が高い。

1、2は染付皿で、JB-2-eに分類される。1は見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が、裏文様は圏線による唐草文が描かれている。2は、灰色を帯びた色調を呈し、裏文様には圏線による唐草文が描かれている。3は染付皿で、JB-2-gに分類される。高台幅は付け根で8mmと広く、外側がやや内傾している。見込みには焼成時に付いた灰の熔着痕が認められ、嬉野市不動山窯跡、伊万里市弥源次窯跡などで生産された粗製品と考えられる。4は香炉でJB-9-cに分類される。畳付以外全面に施釉されている。5～17は陶器である。5、6は京焼風陶器平碗でTB-1-cに分類される。5の高台内には「の」の字状のろくろ痕と「木下弥」の刻印が、6には円圏と異体字の刻印が施されている。7は天目碗でTC-1-aに分類される。釉は漆黒釉で、全面に縦方向の茶色線状斑文様が入る。被熱している。8、9は灰釉碗でTC-1-cに分類される。高台内には円圏が認められる。9は著しく被熱している。10は京都・信楽系の平碗でTD-1-hに分類される。見込みには目痕が、高台内には円圏が認められる。また畳付外側は丁寧に面取りされている。見込み文様は銕絵染付によって草花文が描かれている。高台内に「清閑寺」銘の刻印が施されている。11～14は皿・平鉢である。11、12は見込み青緑釉蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-aに分類される。13は京焼風陶器でTB-2-cに分類される。高台内中央には「の」の字状の削り痕が認められる。見込みには山水文が描かれ、高台内に「山原仟」銘の刻印が施されている。14は瀬戸・美濃産の灰釉皿で、TC-2-bに分類される。見込みには直径4cmを測る環状熔着痕が認められる。被熱している。15は京都・信楽系の鉢で、TD-5に分類される。ロクロ成形後に、口縁部を方形状に整形している。底部は碁笥底状を呈し、見込みには目痕が認められる。対角のコーナー2箇所は体部上半には銕絵染付による草花文が描かれている。被熱している。16は片口でTC-23-bに分類される。底部以外に灰釉が施され、体部には緑釉が流し掛けされている。高台は付高台で、接合部分で欠損しているが、二次加工の痕跡は認められない。17は甕で、TF-15に分類される。口縁部から体部上半にかけて残存する。口縁部断面はT字状を呈し、口唇には3条の沈線が巡る。体部には残存部分全域にわたって沈線が施されている。また内外面共に、鉄泥がほぼ全域に掛けられている。形態から、備前産の甕を模倣した製品と推定される。18～21はかわらけでDZ-2-bに分類される。いずれの製品も口唇部に灯心痕が認められる。22は塩壺で、DZ-51-iに分類される。内側二段角枠の「泉州麻生」印が施されている。内面には布目痕が認められる。

SK91 (IV-334 図)

1は埋甕に用いられた常滑焼大甕で、TG-15に分類される。検出段階で、すでに胴上半部は欠損し、残存部も著しく破損していた。色調は橙褐色を呈する。

#### SE108 (IV-335 図)

1 は染付皿で、JB-2-e に分類される。見込みは草花文が、裏文様には縁取り無しの如意頭唐草文が、高台内には「大明成化（年製）」銘が書かれている。2 は壺の底部片で、TC-15 に分類される。全面に鉄釉を施した後、底部部分を拭き取っている。3 は有耳壺で、TC-15-f に分類される。口縁から胴部に掛けて約 1/3 が残存しているのみである。肩部には把手の痕跡が認められ、その間隔から二耳壺、もしくは三耳壺であったと考えられる。

#### SU132 (IV-335 ~ 337 図)

1、2 は染付碗で、JB-1-u に分類される。1 はコンニャク印判による丸文を散らし、2 は紅葉が描かれている。また 2 の見込みには、茶筌痕と推定される同心円状の微細擦痕が認められ、体部片には漆継ぎによる補修痕が認められる。3 ~ 7 は陶器碗である。3、4 は呉器手碗で、TB-1-a に分類される。4 の内底部には微細擦痕が認められる。5 は京焼風陶器丸碗で、TB-1-b に分類される。体部には山水文が描かれ、高台内には「清水」銘の刻印が施されている。6 は京焼風陶器平碗で、TB-1-c に分類される。見込みには山水文が描かれている。高台内には判読不明な刻印が施されている。7 は瀬戸・美濃産灰釉碗で TC-1-c に分類される。本類形のなかでも小振りな製品である。8 は青緑釉見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TB-2-a に分類される。9 は青緑釉蛇ノ目釉剥ぎ平鉢で、TB-2-a に分類される。10、11 は同一個体の手鉢片で、10 が釣り手、11 が釣り手の付け根から口縁部にかけての破片で、TD-5 に分類される。他に破片はなく、全体像は不明。10 の釣り手は太めの粘土紐に扁平の粘土紐を螺旋状に巻き付けた形態を呈す。11 の口縁は弧状を呈しており、輪花を形成していた可能性もある。また内面には青絵の具によって植物文が上絵付けされている。割れ口には漆継ぎによる補修痕が認められる。12 は笠原鉢で、TC-3-a に分類される。見込みには鉄絵によって草花文が描かれ、緑釉が流し掛けられている。13 は片口で、TB-23-a に分類される。体部上半には波状の刷毛目が、内面には直線状の刷毛目が薄く施され、その上に全面に透明釉が掛けられている。14、16 は播鉢で、14 が TC-29 に、16 が TK-29 に分類される。14 の口縁は大きくクランク状に張り出し、口唇は三角形の断面を呈する。16 は 2 条の沈線を有する縁帯を呈し、下端部が大きく張り出している。15 は瀬戸・美濃産の壺・甕の蓋である。上面には環状熔着痕が、下面には回転糸切り痕が認められる。釉は鉄釉が上面にのみ掛けられ、口唇部には灯心痕が認められ、油受け皿として利用されたことが窺われる。17 ~ 20 はかわらけで、DZ-2-b に分類される。17 の体部外面にはロクロ痕が顕著で、表面が波状を呈す。18 の口唇部にはほぼ全面に灯心痕が付着している。19、20 の器面は黒褐色を呈し、底部の糸切り痕は離し糸切り痕と推定される。21 は塩壺で、DZ-51-d に分類される。刻印の上半部は欠損しているが、輪積み成形で作られていることから、「天下一御壺塩師堺見など伊織」と考えられる。

#### SE159 (IV-337 ~ 339 図)

1 ~ 4 は染付碗で、1、2 は JB-1-q に分類される。1 は口縁内側に四方襷文による帯文が巡り、高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。2 の体部と見込みには、蕪文が描かれている。また漆継ぎによる補修痕が認められる。3 は小振りの碗で、JB-1-g に分類される。体部には唐草文が巡り、見込みには焼成時の熔着痕が認められる。4、5 は染付皿で、4 は JB-2-g に、5 は JB-2-e に分類される。5 の口縁は輪花を形成し、口鏽が施されている。文様は、見込み中央に手書き五弁花文が描かれ、周囲は花唐草文で埋められている。裏文様には縁取りを持つ唐草文を巡らせ、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。6 ~ 12 は陶器碗である。6 ~ 8 は体部に 2 条の沈線を巡らし、鉄釉を流し掛けた碗で、TC-1-f に分類される。ただし 7、8 の高台内の渦巻きは不明瞭であり、6 のみ鉄釉が口縁に流し掛けられている。9 は灰釉丸碗で、TC-1-c に分類される。10 は御室碗で、TC-1-d に分類される。



体部には呉須によって山水文?が描かれている。11は半球碗で、TD-1-bに分類される。畳付外側は丁寧に面取りされている。文様は体部に鉄絵が描かれているが、欠損のため詳細は不明。12は京都・信楽系の平碗でTD-1-hに分類される。畳付外側は丁寧に面取りされている。また高台内には墨書が認められるが、判読不明。13は水滴で、TC-19に分類される。上面には型押しによる陽刻文様が描かれている。底部露胎部分には黒色付着物が認められる。墨であろうか。14、15は瀬戸・美濃産の灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。15の体部には「ゑ」の釘書きが施されている。16は志戸呂の徳利で、TF-10に分類される。底部には外側からの二次穿孔が認められ、植木鉢として再利用されたことが窺われる。17～21は土器である。17～19はかわらけで、DZ-2-bに分類される。17には灯心痕が認められる。20は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。口唇部ほぼ全面に敲打痕が認められる。また口唇から体部内側上部にかけてスス痕が付着している。底部には円錐台形状の脚が3箇所付けられているが、全て擦り取られて、その痕跡を残すのみである。21は把手付きのほうろくで、DZ-47に分類される。胎土は土師質で、非常に固く、丁寧に作られている。本体部分は円形を呈し、体部は内湾して立ち上がる。把手部分は接合部からS字状に膨らみ、端部が外反している。上面には直径4mmの孔が穿たれている。接合部の表面は丁寧にナデ調整で仕上げられている。内底面と底部外周にススの付着が認められる。

SU247 (IV-339～343 図)

本遺構からは多量の遺物が出土した。一部には火災による被熱痕が認められ、覆土にも焼土が含まれることから、火災による一括廃棄と推定される。JB-1-u (1～3) がまとまって出土していること、JB-1-vが認められないことから、東大編年IV b 期に位置付けられ、元禄16年の火災による廃棄と推定される。

1～20、32は磁器である。1～3は染付碗でJB-1-uに分類される。いずれも文様は手書きで描かれ、高台内に「大明年製」銘を持つ。2は被熱している。4は染付碗でJB-1-gに分類される。やや小振りな碗である。5～11は皿・平鉢である。5、6、11はJB-2-eに分類される。5は口唇に口鏽が施され、見込みにはコンニャク印判によって龍文が描かれている。裏文様は縁取り無しの如意頭唐草文が描かれ、高台内に1箇所のハリ支え痕が認められる。6は7寸皿で、高台高12mmとやや高めの高台を有す。裏文様は縁取り無しの如意頭唐草文が描かれ、高台内には一重圏線内に「成化年製」銘が書かれている。また1箇所のハリ支え痕が認められる。11は口径8cmを測る小皿で、見込みにはコンニャク印判によって菊が描かれている。7はJB-2-sに分類される。口縁が緩やかに外反する。高台断面は幅広の三角形を呈し、畳付釉際には砂が付着している。外面は釉垂れが認められ、生掛けと考えられる。色調は灰色を帯びている。裏文様は無い。8、9は、JB-2-gに分類される。高台断面は逆台形状を呈し、畳付釉際には砂が付着している。外面は釉垂れが認められ、生掛けと考えられる。色調は灰色を帯びている。裏文様は無く、1条の圏線が巡る。8は見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。10は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿で、JB-2-kに分類される。12、13は仏飯器で12はJB-8-cに、13はJB-8-bに分類される。13の五三の桐の線書き部分は型紙摺りである。14は青磁香炉・火入れで、JB-9-eに分類される。高台は蛇ノ目凹形高台を呈する。16は白磁の壺でJB-15、15はその蓋である。やや灰色を帯びた色調を呈す。17は色絵瓶でJB-10に分類される。頸部には圏線が、体部には鳳凰文?が赤絵の具で描かれている。被熱している。19は段重の身でJB-13-cに、18はその蓋である。いずれも小破片で詳細は不明だが、平面形は方形または長方形を呈すると推定される。19の高台外側は釉剥ぎされており、2段以上の容器であったことが判る。18の蓋は身と同形で張り出しはない。双方とも被熱している。20は板作りの型押し成形による水

滴で、JB-19に分類される。上面には陽刻と染付による文様が描かれている。32は白磁小坏で、JB-6-aに分類される。

21～31、33～41は陶器である。21、22は京焼風陶器丸碗でTB-1-bに分類される。21は著しく被熱している。高台には刻印が施されているが、欠損のため印銘は不明。22の高台内には、直径5mmの円圈ケズリとそれに掛かり「福」の刻印が施されている。23、24は刷毛目碗でTB-1-dに分類される。23は内外面共に渦巻き状の刷毛目が施されている。被熱している。24も内外面共に渦巻き状の刷毛目が施されているが、内面には刷毛目上に鉄絵文様が描かれている。25は鉄釉碗でTF-1に分類される。暈付を除く全面に施釉されている。被熱している。26は天目碗でTC-1-aに分類される。被熱している。27、28は京都・信楽系半球色絵碗でTD-1-bに分類される。高台外側は丁寧に面取りされている。上絵は被熱のため変色しているが、金、赤、青絵の具で描かれている。29、30は皿で、29はTC-2-bに分類される。見込みには直径5.6cmを測る環状熔着痕が認められる。30はTC-2-kに分類される。見込みには型打ちによる菊花文が、裏面にはヘラ削りによる菊花文が施されている。31は見込み蛇ノ目釉剥ぎ平鉢でTB-2-aに分類される。暈付から高台内を除き、内外面共に透明釉が施されている。被熱している。33、34は象嵌大平鉢でTB-3-bに分類される。33の暈付外側は大きく面取りされ、見込みには砂胎土目積みによる砂目痕が認められる。34の見込み砂目痕は、焼成後に研磨されている。ともに被熱している。35は刷毛目甕でTB-15-aに分類される。体上半部に刷毛目文様が施され、その上を鉄釉、緑釉で掛け分けている。見込みには砂目痕が、暈付には胎土目が熔着している。36は香炉でTC-9に分類される。口縁から体上半部にかけて、鉄絵文様が描かれている。被熱している。37は五合徳利でTC-10-dに分類される。頸部から体上半部にかけてうのふ釉が流し掛けられている。釘書きが認められる。被熱している。38は灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。被熱している。39、40は備前産の瓶である。39はTE-10-bに分類される。口縁は緩やかに外反し、玉縁状を呈する。胴部はラッキョウ形状に拡がり、底部付近に最大形を有する。底部外縁部には、幅約5mmの面取りが施されている。底部には「X」状のヘラ書きが認められる。被熱している。この形態的特徴から、志戸呂の鉄釉徳利（TF-10）のモデルと考えられる。40は小瓶で、TE-10に分類される。体上部に1段の膨らみを有し、体部は2箇所平坦面を作出している。底部には右回転の回転糸切り痕を残している。被熱している。41は瀬戸・美濃の壺・甕の蓋である。底面には回転糸切り痕を残す。表面には鉄釉が施されている。

42～53は土器である。42～45はかわらけで、DZ-2-bに分類される。42、44の口縁には灯心痕が認められ、42、45は被熱している。46、47は油受け皿でDZ-40-dに分類される。46の底部は、平滑に磨かれている。また受け部には黒色に変色した部分が3箇所認められ、スス状の光沢物質が付着している。47は内外面共に、銀彩が施された痕跡が認められる。48は土師質風炉でDZ-31-hに分類される。円錐台形状の三足を有する。49は瓦燈のドーム部分でDZ-45に分類される。銀彩が施されている。調光用のスリットは体部の長方形、肩部の円形孔以外に、体下半部にも円形の孔が認められる。50はほうろくでDZ-47-aに分類される。半球状の内耳を有し、内底面に刻印が施されている。51、52は板作り成形の塩壺で、DZ-51-iに分類される。底部は内面から押し込まれ、体部には内側二段角「泉州麻生」銘の刻印が施されている。53は板作り成形の塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。

#### SD259 (IV-344 図)

本遺構出土遺物には被熱している製品が多く含まれており、火災時の一括廃棄が想定される。年代的には、C面焼土と接合関係を含む同一個体が存在することから、元禄16年の火災による廃棄と考えられる。東大編年IV b期に位置付けられる。

1は染付碗でJB-1-eに分類される。口径11.8cmを測る大振りの碗で、高台内には一重圏線内に「富貴長春」銘が書かれている。複数固体出土している。2は猪口でJB-7-aに分類される。底部は蛇ノ目凹形高台である。可視的痕跡は認められないが、底部が放射状に破損していることから、被熱による可能性が高い。3は白磁のうがい茶碗でJB-1-tに分類される。口唇には口錆が施されている。被熱している。4は染付皿でBJ-2-eに分類される。見込み中央には手書きによる五弁花文、周囲には花唐草文が描かれている。裏文様は縁取りのない如意頭唐草文が描かれ、高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。底部は放射状に破損していることから、被熱による可能性が高い。5はTD-5に分類される。胎土は淡黄色を呈し、畳付以外に透明釉が施されている。口縁には鉄絵によって幾何学文様が描かれている。口径10.2cmに対し、器高が8.1cmを測る腰高の碗形で、口縁部は緩やかに外反する。体部下半には、整形時の削り痕が顕著に認められる。法学部4号館地点E8-2号土坑出土の京焼系陶器碗に共通する製品である。若干被熱している。6、7、8は平碗でTD-1-hに分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側は丁寧に面取りされている。6の見込みには鉄絵によって植物文が描かれている。7は銹絵染付によって、見込み側面に笠文などが、外面には宝珠文が描かれている。いずれも被熱している。9は壺・甕で、TK-15に分類される。口縁はT字状を呈し、口唇には2条の沈線が巡る。体部中央やや下方に隆帯が巡り、頸部から隆帯間は糸目状の沈線文で充填されている。10、11はかわらけでDZ-2-bに分類される。10は被熱している。12はほうろくでDZ-47-aに分類される。半球状の内耳が貼付されている。

SE326 (IV-345 図)

1は染付皿でJB-2-eに分類される。見込み一面に草花文が描かれ、裏文様は圏線のみである。2は陶器碗でTB-1に分類される。色調は暗緑灰色を呈す。3は京焼風陶器丸碗でTB-1-bに分類される。底部中央に「清水」銘の刻印が施されている。4は内野山窯跡を指標とする青緑釉蛇ノ目釉剥ぎ陶器皿で、TB-2-aに分類される。蛇ノ目釉剥ぎ部分と畳付に砂目痕が認められる。5はかわらけでDZ-2-bに分類される。口唇部ほぼ全域で灯心痕が認められ、体部中位まで達している箇所もある。6は板作り成形の塩壺でDZ-51-iに分類される。底部は内面から押し込まれている。内側二段角「泉州麻生」銘の刻印を持つ。本遺構はSK3に切られているものの、SK3坑底以下まで掘られた近代以降の攪乱の影響も受けており、瀬戸・美濃産染付端反碗の小片も数点含まれている。そのため6に関しては混入の可能性が考えられる。7は西行で、DZ\_1109\_Hoに分類される。出土時は布に包まれていた。体部の接合部は一箇所のみであることから、板状の粘土を丸め成形したと推測される。僧衣全体に布目が観察される。首部は差込んで貼付け、僧衣の袖、荷、手に持つ笠は別作りで貼付けている。風呂敷包みの荷が剥がれ落ちた跡に櫛目が観察される。笠は首部同様、差込み式と思われる、胸部に孔が穿たれている。足は工具で抉り切り取り作出、襟や衣の襷は彫り表現している。底部から胸部にかけ大きく開口している。胎土は灰褐色で器壁は厚い。

SU327 (IV-345～347 図)

本遺構からは、1650年代中頃に始まったとされる金彩製品(19)、1654年以降使用が認められた「天下一」刻印の塩壺(32)の存在から、廃棄の上限は1650年代後半に位置付けられる。また暗赤色を呈する赤絵の色調や(2、3、17)、「壽福」(18)「角福」(3、19)などの銘款、先述した塩壺の刻印が二重角枠であることなどから、下限は60年代と想定され、東大編年Ⅲa期に位置付けられる。

1は景德鎮窯系の色絵碗でJA1-1に分類される。外面、見込みに唐子が楽器、凧、鞠などで遊んでいる様子が描かれている。基本的には頭、手、遊具を染付線で描き、衣類を緑、赤、黄絵の具で表現している。高台内には染付によって「大明成化年製」銘が書かれている。2室、3室、SK517で接合



している。2～14は、肥前系磁器碗である。2、3は色絵碗でJB-1-cに分類される。2は外面に幾何学文、動物文を描いた丸文を散らし、見込みには染付による二重圏線内に色絵による草花文が、赤、黄、黒、緑絵の具を用いて描かれている。3室出土。3は外面に幾何学文、風景などを描いた丸文を3箇所散らし、見込みには草花文が描かれている。高台内には染付によって、二重角枠内「角福」銘が書かれている。2室出土。4は底部無釉青磁碗でJB-1-bに分類される。2室出土で、SK517、SK518と接合する。5～7は白磁碗でJB-1-cに分類される。5は1室より出土。6は4室より出土。7は口唇部に口銹が施されている。2室より出土。8、12は染付碗で、JB-1-aに分類される。一重網目文内に魚？を描いている。高台際や口縁内側に釉垂れが認められ、生掛けの可能性が高い。畳付には砂が付着している。2、3室出土。12はやや腰の張る碗形を呈す。体部外面には草花文が描かれた2単位の窓絵を配している。9～11、13、14は染付碗で、JB-1-cに分類される。9は外面に蔓草文、見込み中央に二重圏線内に草花文が描かれ、高台内には「大明年製」銘が書かれている。1、3室出土。10は口径9.1cmを測る小振りの碗で、外面には草花文、見込み中央には二重圏線が描かれている。2室出土。11は体部が緩やかに内湾しながらハの字状に開く小振りの碗である。体部外面には捻子花状の幾何学文が描かれ、高台内には「太明成化年製」銘が書かれている。2室出土。13は腰の張る碗形を呈し、底径は4.2cmを測り口径の約1/2と広い器形である。体部外面には草花文が描かれ、高台内には「製」銘が書かれている。本碗形は国元金沢市内に類例が多く、前田家が好んで購入した可能性が高い。2室出土で、SK517、SK518と接合する。14はやや灰色がかった黄白色を呈し、随所に釉飛び、釉切れが認められる。体部外面には蔓草文が描かれている。15、16は小坏である。15は白磁坏で、JB-6-aに分類される。3、4室出土。16は口縁が外反するJB-6-bに分類される。「壽」字を3方に配し、その間を縦縞状のしのぎ文で埋めている。底部無釉である。3室出土。17は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。体部外面には赤絵の具によって丸文が描かれている。口縁の二重圏線、高台際の一重圏線、高台内の一重圏線も全て赤絵の具である。3室出土。18～21は皿である。18は染付7寸皿で、JB-2-cに分類される。口縁は外反し、高台高は外面で1.5cmと高く成形されている。高台内には一重圏線内に「壽福」銘が書かれている。本銘はいわゆる「誉」字と称される銘である。3室出土。19は7寸皿で、JB-2-cに分類される。体部は焼成時の歪みで変形しているが、本来は緩やかに内湾して立ち上がったものと推定される。口縁は折り返しにより玉縁を形成している。見込みには呉須によって鳥が描かれているが、鳥の輪郭、木の付け根、鳥が留まる岩の水際の苔などに呉須の輪郭線をなぞって金彩が施されている。裏文様は蔓草文が描かれ、高台内には一重角枠内に「福」？銘が書かれている。3、4室出土。20は染付皿で、JB-2-aに分類される。見込み側面は型打ち成形によって輪花を形成している。2室出土。21は染付形皿で、JB-2-aに分類される。体部は、ロクロ成形後の型打ちによって成形されている。口唇には口銹が施されている。見込みには鳥、花などが描かれ、側面には3方に植物を描いた窓絵を配し、袈裟襷文で埋められている。裏文様は3方に植物文を散らし、高台内には「大明」銘が書かれている。1室出土で、SK517と接合。22は青磁の掛け花生で、JB-22に分類される。底部を欠損している。ロクロ成形によって象牙状に成形されている。口縁部下2.5cmに直径7mmの吊り掛け用の孔が穿たれている。青磁釉は口唇以外全面に施されている。無釉の口唇は両端が面取りされており、やや波打ち、砂が付着するなど、やや粗雑に製作された感があり、蓋状の別パーツが存在した可能性がある。2室出土。23は鉄釉碗でTC-1-agに分類される。体部下半から底部以外に鉄釉が施され、内外面ともに黒釉が流し掛けられている。口唇部には敲打痕が認められる。3室出土。24、25は皿で、24はTB-2-dに分類される。非常に浅く立ち上がり、口縁で1段を有する。畳付以外に透明釉が施され、細かい貫入が入っている。畳付には砂目痕が認めら

れる。色調はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、TB-1-aに類似する。1室出土。25はTC-2-yに分類される。体部は高台脇に緩やかな稜を有し、口縁で外反する。釉は畳付以外灰釉が施され、高台内は軽く拭き取られている。見込みには型押しによる二重沈線が巡り、側面との境に1段を有する。見込み、高台内側ともに3箇所ピン痕が認められる。3室出土。26は片口で、TC-23-bに分類される。口縁部内側から外面胴部下半にかけて、飴釉が掛けられている。内面には飴釉が極めて薄く掛けられている。3室出土。27は播鉢でTC-29に分類される。口縁はクランク状に外反し、口唇断面は三角形を呈する。播目の間隔は広く、ほとんど重なりが認められない。見込みには重ね焼き痕が認められる。3、4室出土。28～31はかわらけで、DZ-2-aに分類される。28、30、31の口縁には灯心痕が付着している。28は1室出土。29、30は3室出土。32は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-cに分類される。二重角枠内に「天下一堺ミなと藤左衛門」銘の刻印が施されている。2室出土。33はドーム形の塩壺蓋で、DZ-00-aに分類される。3室出土。34は火消壺の蓋である。3室出土で、SK518と接合。

SK333 (IV-348 図)

1は白磁の小坏で、JB-6-bに分類される。2は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。畳付以外は全て施釉されている。3は京都・信楽系の丸碗でTD-1-cに分類される。底部には畳付を除き、鉄泥が施されている。口唇部には鉄絵で口銹を施し、体部には鉄絵によって山水文が描かれている。4～9はかわらけであるが、4、6、7はDZ-2-aに、5、8はDZ-2-bに、9は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。7の底部周囲はロクロ成形後にケズリ調整が施されている。4～6、8の口唇には灯心痕が認められる。内外面ともほぼ全面にススが付着している。10は板作り成形の塩壺で、DZ-51-fに分類される。底部は欠損しているが、一部に粘土紐の痕跡が認められ、いわゆる3ピース成形によって作られている。刻印は一重角枠内に「御壺塩師堺湊伊織」銘である。11は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。

SK388 (IV-348～350 図)

1～14は磁器である。1～6は碗である。1、2は肥前の端反碗でJB-1-nに分類される。1は口径8.6cmを測る小振りの碗形で、外面に幾何学文、口縁部内側に帯文、見込みに山水文が描かれている。2は内外面とともに一重網目文が描かれている。3はJC-1-gに分類される。肥前の小丸碗(JB-1-j)のコピー製品である。4、5は瀬戸・美濃の端反碗で、JC-1-dに分類される。外面に描かれた花文の花びらの輪郭は毛彫りによる陰刻描写で描かれている。5の外面文様は線書きで描かれ、ダミ技法は用いられていない。6はJC-1-eに分類される。高台断面は方形を呈し、畳付幅は3mmを測る。3～6の呉須はいわゆる地呉須ではない。7～9は皿である。7は口径10cmを測る小振りの皿で、JB-2-eに分類される。高台はやや幅広で、体部は高台脇から屈曲して立ち上がる。口唇部は輪花を形成する。裏文様には縁取りのない梅花唐草文が巡っているが、17世紀後半に見られる梅花唐草文とは表現が異なる。高台内には銘が書かれている。8、9は形皿でJC-2-eに分類される。見込みには型打ち成形による陽刻文様を施し、ダミが掛けられている。10～12は小坏である。10はJC-6-aに分類される。11は腰が張る器形を呈し、JB-6に分類される。12は薄手小坏で、JB-6-dに分類される。見込みには呉須と鉛ガラスを混合したいわゆる江戸絵付によって蝶、花、文字(七百歳寿)が上絵付けされている。13、14は蓋である。13はJB-1-p、14はJB-1-nの蓋である。

15～27は陶器である。15～17、19は碗で、15はTC-1-cに分類される。16は刷毛目端反碗で、TB-1-hに分類される。内外面ともに打ち刷毛目による文様が施されている。17はTC-1-dに分類される。体部には呉須によって山水文が描かれている。19は平碗で、TD-1-hに分類される。高台内に墨書が認められる。18は皿でTC-2-eに分類される。見込みには型紙摺りによる鉄絵文様が描か

れている。20は刷毛目鉢で、TB-3-aに分類される。見込みには波状の刷毛目文様を施した後、鉄釉、緑釉が流し掛けされているが、釉は掛けられていない。口唇部から口縁下付近までに鉄釉が掛けられているのみである。21はTC-5-mに分類される。体部は高台脇から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁で外反する。また口縁には推定5単位のくぼみを付け、輪花を形成している。内外面ともに横縞状の刷毛目が施されている。22～25は徳利である。22、23、25はつけ掛けによる二合半徳利で、TC-10-cに分類される。22には列点による「久〇」の釘書きが、25にも欠損のため判読不明であるが、列点による釘書きが施されている。24は一升徳利で、TC-10-eに分類される。体部には列点による釘書きが施されている。26、27は蓋である。26は急須の蓋で、27は青土瓶の蓋である。26の胎土は茶褐色を呈し、表面には白土が掛けられ、染付が施されている。

本遺構の遺物年代は、一部に18世紀前半の遺物を含むが、主体は東大編年Ⅷc期にある。

#### SU390 (Ⅳ-350・351 図)

1、2は碗で、1はJB-1-aに、2はJB-1-cに分類される。1の高台は逆台形を呈し、畳付外面が面取りされている。釉垂れ、釉飛びが認められる。3、4は油壺でJB-12に分類される。3の色調は灰褐色で、赤、青、黒絵の具による色絵が施されている。4も色絵製品であるが、被熱のため色調は不明である。5は小瓶でJB-10に分類される。口縁部が欠損している。被熱している。6は青磁合子の蓋である。表面の青磁釉は深緑色に発色している。被熱している。7、8は呉器手碗でTB-1-aに分類される。8の体部は腰の張りが弱く、上部に2条のロクロ成形痕が認められる。9は志戸呂産と考えられる碗で、TF-1に分類される。高台内のケズリの回転方向は右回転である。体部下半には2条の稜が施されている。10は小振りの碗で、TD-1-cに分類される。体部には銹絵による文様が描かれている。11は錢甕で、TC-15-aに分類される。底部脇に「〇に上」の刻印が施されている。12～14はかわらけで、DZ-2-bに分類される。14の口縁には残存部全域にわたり灯心痕が付着している。

#### SU436 (Ⅳ-351～352 図)

1は染付碗で、JB-1-uに分類される。高台内には「大明年製」銘が書かれている。2は染付小坏で、JB-6-aに分類される。体部には海老文が三方に配されている。3は小形の白磁形皿でJB-2-rに分類される。糸切り細工成形によって成形し、型打ちによって菊花状に仕上げている。高台は貼り付け高台で、高台内は無釉である。4、5は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。5の体部には鉄釉によるワンポイント文様が施されている。見込みには微細擦痕が観察される。6は刷毛目鉢でTB-5-aに分類される。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。釉は畳付以外に掛けられ、刷毛目は外面が打刷毛目、見込みと底部が渦巻き状に施されている。また内側面には鉄、緑による蔓草文が描かれている。7、8は舟徳利で、TC-10-fに分類される。柿釉を施した上に鉄釉が流し掛けられている。7の口縁は鏝状に張り出している。9～16はかわらけで、DZ-2-bに分類される。またすべてに灯心痕が認められる。17、18はほうろくで、DZ-47-aに分類される。半球状の内耳を有する。19、20は板作り成形の塩壺である。19は「御壺塩師堺湊伊織」の刻印を有し、DZ-51-fに分類される。20は、DZ-51-iに分類される。底体部間に環状の粘土紐をあてる3ピース成形で、内側二段角の「泉州麻生」銘の刻印が施されている。21は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。

#### SU445 (Ⅳ-352・353 図)

1は染付碗で、JB-1-uに分類される。高台内には「大明年製」銘が書かれている。2は蛇ノ目凹形高台の青磁鉢で、JB-5-dに分類される。露胎部にはチャツ痕が認められる。見込みに全面に片切彫りによる草花文が描かれている。被熱している。3は染付壺で、JB-15に分類される。体部はロクロ成形後に縦方向に4単位のくびれが付けられ、横断面が木瓜形を呈す。口縁部には蓮弁文を施した帯



文が巡り、肩部には獅子・花唐草文、体部には松竹梅文が描かれている。そのうち獅子、蔓部分以外の花唐草、梅花の線書きは、型紙摺りによって描かれている。被熱している。4は壺の蓋である。松竹梅文が描かれているが、梅花の線書きが型紙摺りによって描かれている。意匠、描画技法の共通点から3の蓋と考えられる。5は白磁の大形長形瓶で、JB-10-aに分類される。被熱している。6、7はかわらけで、DZ-2-bに分類される。被熱のため変形している。7は特に著しい。8、9はDZ-15に分類される。袋状を呈する製品であり、9は8と同一製品と考えられる。被熱している。10～12は、器種不明製品である。表面から外面に掛けてはナデによって非常に平滑に整形されている。底部は無調整で、表面はざらざらしている。また表面には火襷状の黒色帯が観察される。被熱している。8～12は関連する可能性もある。13は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。14はミニチュアの銕絵染付の壺で、TD\_2006\_Wに分類される。器壁は非常に厚く貫入が観察される。底部はロクロ目、釉を丁寧に取り、フラットに仕上げている。極めて小さいが精巧な作りである。

SU446 (Ⅳ-354～361 図)

本遺構出土遺物の廃棄年代は、広東碗 JB-1-m (7) が存在し、JB-1-n、JB-2-i や瀬戸・美濃産の磁器製品が存在しないことから、東大編年Ⅶ期に位置付けられる。

1～28は磁器である。1、2は半球碗でJB-1-fに分類される。2の高台には金彩によって帯文が施されている。3はいわゆる望料碗で、JB-1-qに分類される。体部には梅花文、口縁部内側には四方襷文、見込みには環状松竹梅文が描かれている。4～6は小丸碗で、JB-1-jに分類される。いずれも口縁部内側に帯文を持ち、見込みには手書きによる五弁花文が描かれている。7は広東碗でJB-1-mに分類される。また8は7の蓋である。身、蓋ともに体部内外面に捻子花状の幾何学文様、高台(摘)には幾何学文様、高台内(摘み内)には銘款が描かれている。9、10は鉢でJB-5-bに分類される。9の見込みには環状松竹梅文が、10の見込みにはコンニャク印判による五弁花文が描かれ、高台内には「崩れ渦福」銘が書かれている。11は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付碗で、JB-1-xに分類される。畳付幅は4mmと広く、高台断面は逆台形を呈する。器高は5cmと低く、口縁部は外反する。12～14は蛇ノ目凹形高台で高台高が低いタイプの皿で、JB-2-jに分類される。高台脇からやや腰が張って立ち上がり、口縁部は輪花を形成する。また口唇は平坦に整形されている。裏文様は縁取りの無い唐草文で、高台内には二重角枠内「渦福」銘が書かれている。15、16は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿で、JB-2-mに分類される。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花文が描かれている。17は釉剥ぎ径が小さく、底部施釉の染付皿で、JB-2-lに分類される。18は口径44.5cmを測る大皿でJB-3-bに分類される。見込みには二重圈線が巡らされているが、文様はそれを跨いで全面に描かれている。裏文様は縁取りを有する梅花唐草文で、高台内には「太明成化年製」銘が書かれている。また高台内のハリ支え痕は現存で12箇所認められる。19はJB-2-oに分類される。体部は高台脇からほぼ水平に拡がり、腰が張って立ち上がる。口縁部は輪花を形成している。見込み文様は中央に環状松竹梅文、側面に唐草文、それを区画する花文を巡らした帯文の3構成からなっている。裏文様は縁取りを有する如意頭唐草文が描かれ、高台内には「太明成化年製」銘が書かれている。また高台内には現存で4箇所のハリ支え痕が認められる。20は色絵小杯で、JB-6-aに分類される。高台径は1.9cmと小さく、体部はやや腰が張って立ち上がる。体外面には赤絵の具によって海老文が3箇所配されている。見込みには紅または漆と思われる茶褐色の物質が付着している。21は仏飯器でJB-8-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、見込みには焼成時の灰が熔着している。22は油壺で、JB-12に分類される。最大径は体部中央やや上方にあり、頸部径は1.7cmと狭い。23は蓋物の身でJB-13-aに分類される。また24はその蓋である。焼成不良で釉が溶けきっておらず、呉須の発色も悪い。24の摘みは欠損

しているが、その台座部分には葉が貼り付けられている。25は白磁壺の蓋である。26～28はいわゆる望料碗の蓋である。26には漆継ぎによる補修痕が認められる。27は摘み内に銘が書かれている。

29～60は陶器である。29～31は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。いずれも見込みには微細な擦痕が観察される。32は腰が張り、体部には2条の沈線が巡る灰釉碗で、TC-1-fに分類される。体部には鉄釉の流し掛けが施されている。見込みには黄白色を呈する付着物が認められる。また底部には墨書が認められる。33はいわゆる拳骨茶碗で、TC-1-pに分類される。体部上半には指頭圧痕が巡り、畳付以外に黒釉が施されている。畳付には菊花状の刻印が施されている。34は柳茶碗で、TC-1-gに分類される。体部には鉄絵による柳文が描かれている。35、36は京都・信楽系の半球碗で、TD-1-bに分類される。35は緑、赤絵の具によって上絵付けされている。37、38はいわゆる銚絵染付の小杉茶碗で、TD-1-dに分類される。ともに松の先端部に呉須が用いられている。39は柿釉の油皿で、TC-2-oに分類される。見込みには重ね焼き時の環状熔着痕が認められる。40、41は輪高台の灰釉香炉で、TC-9-aに分類される。42、43は灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。42の釉調は灰緑色を呈し、線状の釘書きによって、「八十」と書かれている。43の釉調は黄白色を呈し、列点による釘書きが施されているが、欠損のため詳細は不明である。44、45は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。44の釉調は緑灰色を呈し、線状の釘書きによって「久〇」と書かれている。45の釉調は黄白色を呈し、線状の釘書きによって、「久〇」と書かれている。46は一升徳利で、TC-10-eに分類される。鉄釉が施されている。47は志戸呂産の徳利で、TF-10に分類される。最大径は体中央部に有し、底部脇の面取りはあまり大きくない。48は蓋物でTD-13-cに分類される。体部には銚絵染付によって松が描かれている。底部には「に」の墨書が認められる。49は灰釉餌入れで、TC-30に分類される。50、51は花生けで、TC-22-bに分類される。50は体下半部で、51は体上半部で灰釉、柿釉が掛け分けられている。52は水甕で、TC-15-cに分類される。体部全面にヘラ削りによる文様を施し、鉄釉、緑釉を流し掛けしている。見込みには残存部で2箇所が目痕が認められる。53は灰釉植木鉢で、TC-21に分類される。高台にはアーチ状の挟りが3箇所認められる。54は播鉢で、TL-29に分類される。口縁には2条の沈線が施された幅4cmの縁帯を有す。底部はやや外反気味の高台が作出されている。畳付表面は摩耗によって平滑になっているが、意図的に磨かれた可能性もある。色調は重ね焼きの影響で、縁帯下までが光沢のある焦げ茶色を呈し、それ以下は暗赤褐色を呈す。但し、底部、見込み共に明確な焼台痕は認められない。口縁部の一角は、注ぎ部として張り出しているが、その左端に扇形枠内に「上」の刻印が施されている。55、56は柿油受け皿で、TC-40-cに分類される。ともに受け部は口縁より低い。外面には重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。57、59、60は橋状摘みを有する壺の蓋である。57は底部がヘラ削りによって丁寧に整形され、周囲が面取りされていることから、橋状摘みではあるが、汁次の蓋の可能性がある。57、60には灰釉が、59は鉄釉が施されている。また60の底部には墨書が認められる。58は鉄釉土瓶の蓋と考えられる。鉄釉が施されている。

61～90は土器である。61～67はかわらけで、61、62は左回転の糸切り痕が認められ、DZ-2-bに分類される。61は口縁部全域に灯心痕が認められる。63は底部が平滑に整形されたいわゆる上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。64、67はいわゆる「離れ糸切り」による糸切り痕が認められ、DZ-2-aに分類される。65、66は透明釉が施されたかわらけで、DZ-2-hに分類される。ともに左回転の糸切り痕を有し、65の口縁部には灯心痕が認められる。68、69は土師質植木鉢で、DZ-21-aに分類される。68はナデによって全体的に平滑に仕上げられ、底部際には面取りを有し、底部もナデによって整形されている。底部中央が穿孔されている。69は左回転の糸切り痕を残し、底部

縁辺が穿孔されている。70は土師質の鉢で、DZ-5に分類される。口縁は内湾し、底部には左回転の糸切り痕が認められる。71は鍔付角火鉢で、DZ-31-cに分類される。鍔部分には漆喰が塗られている。72は硬質瓦質筒形火鉢で、DZ-31-jに分類される。体部は丁寧に磨かれて光沢を有し、回転押形文が施されている。口縁部には剥離痕が残存部全域に認められる。73、74は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。73の底部にはチヂレ目とスタレ状圧痕が認められる。また口縁部内側と脚部底面は研磨による二次加工が施されている。74の底部にはスタレ状圧痕が認められ、脚接合部は指ナデによって丁寧に整形されている。口縁部全域にわたり剥離痕が認められ、内体部上半にはスス状の黒色付着物が観察される。75は硬質瓦質丸火鉢で、DZ-31-dに分類される。体部は丁寧に磨かれ、光沢を有し、二条の沈線による区画内に押形文が施されている。口縁部は内湾し、内側には剥離に、上面には研磨による二次加工痕が認められる。76は土師質筒形風炉で、DZ-31-hに分類される。外面は丁寧に磨かれ光沢を有し沈線での区画内に押形文が施されている。口縁の半円形カット部分外側には、敲打痕が観察される。77、78は油受け皿で、無釉の77がDZ-40-dに、透明釉が施された78がDZ-40-bに分類される。79はひょうそくで、DZ-44-bに分類される。釉調は茶褐色を呈し、底部中央には孔が穿たれている。80は透明釉が施されたひょうそくで、DZ-44-gに分類される。体部に注口状の灯心受けが付けられ、口縁は大きく内湾し、蓋受けが設けられている。灯心受け先端部には灯心痕が認められる。81は丸底のほうろくで、DZ-47-aに分類される。82、83は七輪のさなで、DZ-48-aに分類される。内面には白色付着物が観察される。84、85はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。86は火消し壺の蓋である。内面全域にはタール状の黒色付着物が観察される。87～89は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。87、88の色調は橙褐色を呈し、89は淡褐色を呈し、金雲母を多く含む。87、89の内面には布目圧痕が認められる。90は裱人形で、DQ\_1110\_M2fに分類される。雲母粉が顕著で硬質感がある。後出するM2o成形の裱人形と異なり袖は短く、全体の彫りは深く丁寧である。

SK466 (IV-361・362 図)

本資料の廃棄年代は、JB-2-c (2)、TB-1-a (6、7)、刻印を有するTB-1-b (8)の存在や、TC-29 (14)の口縁部が、クランク状に屈曲し、口縁断面が三角形を呈する縁帯を有している段階であることから、1660～70年代の様相と考えられ、東大編年Ⅲb期に位置付けられる。ただし被災した資料が無いことから、天和2 (1682)年の火災以前の廃棄と考えられる。

1は色絵皿でJB-2-bに分類される。赤、緑、黄絵の具によって上絵付けされている。口縁欠損部に漆継ぎ痕が観察される。D1層D7グリッド出土資料と接合する。2は染付皿で、JB-2-cに分類される。圏線のための染付で、色絵素地の可能性もある。3は染付皿で、JB-2-sに分類される。厚手の高台を呈し、外面には釉垂れが認められる。見込みに折り紙文様がラフに描かれている。嬉野市不動山窯跡などで生産された粗製品と共通する。4は瓶で、JB-10-eに分類される。高台豊付の釉拭き取りは雑で、砂が熔着している。5は壺で、TC-15-fに分類される。口唇と底部以外に灰釉が施されている。口唇には重ね焼きによる熔着痕が認められる。6、7は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。6は体部中央に緩やかな稜を有す。8は京焼風陶器碗で、TB-1-bに分類される。主文様は欠損により不明であるが、底部には「清水」銘の刻印が施されている。9は天目碗で、TC-1-aに分類される。10は青緑釉輪剥平鉢で、TB-2-aに分類される。釉は高台内まで及んでいる。豊付は平滑で、二次的に研磨された可能性が高い。11は仏飯器で、TB-8に分類される。胎土は暗橙褐色を呈し、底部を除き鉄釉が施されている。12は鉄釉香炉で、TC-9-bに分類される。体部中央に明瞭な稜を有する。口唇平坦部の釉は拭き取られ、内外両端には細かい敲打痕が認められる。また内底部には黄灰色の付着物が認められる。



13は瓶で、TC-10-hに分類される。頸部には表面が菊花状に型押しされたボタン状の突起が1対貼り付けられている。底部を除き鉛釉が施されている。14は瀬戸・美濃産の播鉢で、TC-29に分類される。口縁は外側に折り返され、クランク状の縁帯を呈する。口唇際には沈線状の凹みが巡っている。内底部付近は釉、摺目ともに摩耗し、素地が露出している。口唇部には内面に向かう細かい剥離痕がほぼ全域で認められるが、敲打痕の可能性も考えられる。15は丹波産の播鉢で、TK-29に分類される。内外面ともに底部際に重ね焼きによる播鉢陶片熔着痕が認められる。16～25はかわらけである。17、18、19は、DZ-2-aに分類される。17、23は右回転である。16、19、21～25はDZ-2-bに分類される。そのうち16、18、20、22～24は左回転である。17は底部中央に焼成後の穿孔が認められる。灯心痕は17～19、21、22、25に認められる。26は瓦燈のドーム部で、DZ-45に分類される。肩部には前面に3箇所、背面に1箇所の孔が穿たれている。27は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。

#### SK518 (IV-363 図)

1は高台無釉青磁碗で、JB-1-bに分類される。口縁は緩やかに外反し、体部中央に稜を有す。2は染付碗で、JB-1-cに分類される。見込み中央と高台内に「大明成化年製」銘が書かれている。3は染付皿の底部片で、JB-2-cに分類される。4～6は染付皿で、JB-2-aに分類される。型打ち成形によって輪花を形成している。4は口鏽が施されている。また焼成不良のため、釉が白濁している。6は口縁が大きく内湾する。見込みには焼成時の灰の熔着痕が認められる。7は丸碗形の小坏で、JB-6-aに分類される。8は端反形の小坏で、JB-6-bに分類される。底部は無釉で、暗茶褐色を呈する漆状の物質が付着している。9は呉器手碗の胴部片で、TB-1-aに分類される。10は灰釉丸皿で、TC-2-aに分類される。見込みにはピン痕が3箇所認められる。11～13はかわらけで、DZ-2-bに分類される。11、12に灯心痕が認められる。14は壺・甕の蓋と考えられる瓦質製品である。上面にはスタレ状圧痕が認められる。また内面中央部にはタール状物質が付着している。

#### SK548 (IV-363 図)

1は灰釉水注の蓋である。上面に灰釉が施されている。2、3はかわらけで、DZ-2-aに分類される。いずれも灯心痕が認められる。

#### SK552 (IV-364 図)

1は染付筒形碗で、JB-1-kに分類される。2、3は端反形の小坏で、JA1-6に分類される。3は高台無釉。4は天目碗の胴部片で、TC-1-aに分類される。体部上半で内傾ぎみにシャープに屈曲し、口唇部はシャープに外反する。5は鏝折れヒダ皿で、TC-2-nに分類される。畳付以外に灰白色の釉が厚く掛けられ、全面に細かい貫入が入る。6は端反形の陶器碗で、TZ-1に分類される。胎土は硬質で、白色微砂粒を含む暗灰褐色を呈する。底部を除き藁灰釉が掛けられ、外面には鉄絵文様が描かれている。釉の特徴から山口から九州地方に生産地を求めることができよう。7はかわらけで、DZ-2-aに分類される。口縁には灯心痕が認められる。8はかわらけで、DZ-2-kに分類される。底部には墨書が認められる。

#### SK557 (IV-364～366 図)

1、2は染付皿で、JB-2-cに分類される。底部中央にハリ支え痕が1箇所認められる。2には一重角枠内「角福」銘が書かれている。3は青磁の香炉で、JB-9-aに分類される。外面と脚には型押しによって陽刻文が施されている。4は筒形の蓋物で、JB-13-bに分類される。5、6は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。7は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。底部には「小松吉」銘の刻印が施されている。8、9は天目碗で、TC-1-aに分類される。体部の稜は緩やかに内湾している。10は焼締

め陶器丸碗で、TE-1に分類される。やや腰の張る大振りの碗形で、内面は非常に平滑に仕上げられている。11は灰釉丸皿で、TC-2-bに分類される。見込みには環状熔着痕が認められる。12は象嵌大平鉢で、TB-3-bに分類される。6箇所、砂胎土目痕が認められる。高台外側は面取りされていない。13は鉄釉片口鉢で、TC-23-bに分類される。14は鉄釉香炉で、TC-9-bに分類される。高台はなく、粘土紐による脚が3箇所貼り付けられている。体部中央には竹節状の隆帯が巡っている。口唇部は無釉で、内側に著しい敲打痕が認められる。15は壺の蓋である。摘みはなく、表面には鉄釉が施されている。また両面共に直線状の熔着痕が認められる。16～31はかわらけである。16、17、19、20、25、27はDZ-2-aに、18、21～24、26、28～31はDZ-2-bに分類される。17～26、28、29、30は左回転である。17の外面には放射状の墨書が認められる。17、19、20～26、28、29の口縁部には灯心痕が認められる。19、21、22、26、28、29は腰折れ技法によって成形されている。30の底部中央には二次穿孔が認められる。31は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。器厚は全体的に2mm弱と非常に薄く成形されており、底部は黒色に変色している。32は土師質角火鉢で、DZ-31-eに分類される。口縁はL字状を呈し、上面の平坦部は非常に平滑に成形されている。表面は黒銀色を呈し、塗装が施された可能性がある。33はほうろくで、DZ-47-aに分類される。胴部下端には1条の沈線が巡り、内面には粘土紐の貼り付けによる半球状の内耳を有する。34、35は「天下一御壺塩師堺見など伊織」銘の刻印を有する輪積み成形の塩壺で、DZ-51-dに分類される。36は塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。37は坊主人形で、DD\_1114\_Heに分類される。胎土は精製度、白色度が高い上手のものである。体部は手捻りで、法被（はっぴ）や手足、耳は別作りし貼り付けている。法被の襷、胸部、胴部の表現は彫り描き表現している。頭部は型成形で口は小さく開けている。頭部に墨の彩色痕、袖の内側には朱色が観察される。右足は折り曲げ一方は投げ出している。人形の内部の成形法は、同様の人形が中央診療棟地点F33-3から出土しており観察できる。

SU593 (IV-367～371 図)

本資料は、JB-1-i (4、5)、JB-1-qの蓋や青磁染付碗の蓋が存在し、JB-1-mが無いことなどから、東大編年VI b期に位置付けられる。

1～20は肥前磁器である。1～3は薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。1は菊花文、2、3は草花文が描かれている。2、3は1と比較して、器厚、畳付幅が厚く、やや粗雑な成形となっている。4、5は小広東碗で、JB-1-iに分類される。4は外面に幾何学文、見込み中央に昆虫文が描かれている。5は外面、見込み中央ともに寿字文が描かれている。6は筒形碗で、JB-1-lに分類される。屈曲部分は非常にシャープなケズリ整形が施され、垂直部下端が隆帯状に下方へ張り出している。高台は露胎部分において両面ともに丁寧に削られ、その部分の断面形は三角形を呈する。7～10は皿・平鉢である。7は7寸皿で、JB-2-eに分類される。胎土は灰白色を呈し、底部厚は8mmとやや厚めの成形である。底部にはハリ支え痕が1箇所認められる。文様は、見込みに手書きによる五弁花文が、裏文様に縁取りのない唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。8は鍋島色絵皿の底部片で、JB-2-nに分類される。見込みには全体に薄ダミを施し、墨弾きによって流水文と、型抜きされた紅葉文が描かれている。紅葉文は葉脈・葉柄、葉形の鋸歯状輪郭を黒絵の具によって上絵付けされた葉と、染付によって描かれた葉があり、後者は葉全体を緑絵の具で埋めている。裏文様は残存部位が少なく本破片のみでは詳細は不明であるが、葉先が裏返るその描写方法から、折り枝木蓮文と考えられる。高台には丁寧に縁取られた櫛歯文が巡り、その上下に1条の圏線が描かれている。本資料と同一製品と考えられる破片が、SU1125、SD259、SU446より出土している。9は蛇ノ目凹形高台の高台高が低いタイプの皿で、JB-2-jに分類される。見込み周囲には2重圏線が描かれ

ているが、文様はそれを越えて器面全面に描かれている。高台内には二重角枠を有す銘款が書かれているが、欠損のため詳細は不明である。10は見込み蛇ノ目細剥ぎ染付皿で、JB-2-1に分類される。11、15は染付鉢で、11はJB-5-bに、15は筒形を呈しているが、底部の特徴からJB-5-dに分類される。12～14は小坏で、JB-6-fに分類される。14はやや腰が張る器形を呈している。文様は、12は上絵付けで、赤絵の具による海老文が三方に配されている。13、14は菊花文が描かれている。16は御神酒徳利で、JB-11-bに分類される。17は染付大皿で、JB-3-bに分類される。口径は33.8cmを測る。高台内には6箇所ハリ支え痕が認められる。裏文様は四方に宝珠文を配し、高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。18～20は蓋で、18がJB-1-q、19がJB-1-e、20がJB-1-gに伴う蓋である。20は青磁染付で、青磁釉は淡青灰色を呈している。19、20の内面には手書き五弁花文が、20の摘み内には二重角枠内に「渦福」銘が描かれている。

21～46、60は陶器である。21は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。見込みには微細擦痕が多数認められる。22は有段碗で、TC-1-fに分類される。半筒状の体部には2条の沈線が巡り、鉄釉が流し掛けされている。見込み周囲にはドーナツ状の微細擦痕が認められる。23～25は京都・信楽系の半球碗で、TD-1-bに分類される。23、24の胎土は灰褐色を呈し、体部上半に鉄絵文様が描かれている。25の胎土は黄白色を呈し、金、赤、青絵の具などによって上絵付けされている。26は平碗で、TD-1-hに分類される。胎土は灰白色を呈し、見込みにはピン痕が認められる。27は杉形碗で、TD-1-bに分類される。文様の根引き松は銹絵染付によって描かれているが、松葉はススキ状に退化し、呉須は先端部に列点状に使用されている程度である。28は鉄釉皿で、TC-2-zに分類される。胎土は黄白色を呈し、高台内側際には団子状の目痕が、見込みにはピン痕が認められる。釉調は暗茶褐色を呈し、畳付を除き施釉されているが、高台内はほぼ拭き取られている。29は油皿で、TC-2-oに分類される。内外面ともに直径約7cmの環状熔着痕が認められる。口唇部にはかすかに灯心痕の痕跡が観察される。30は変形鉢で、TC-5に分類される。高台は碁笥底状の輪高台で、体部中位から隅丸方形に整形され、口縁部は内側二段角の胴張り方形を呈している。胎土は淡黄白色を呈する。文様は、体部上半の一辺に鉄絵による鋸歯状文様が描かれ、見込みに唐草文様が描かれている。31、32は香炉である。31は半菊状の陰刻文様を持ち、TC-9-dに分類される。底部には粘土紐の貼り付けによる脚が3足貼り付けられている。胎土は白色粒を含む灰褐色土で、釉調は鶯色に近い。32は灰釉香炉で、TC-9-aに分類される。口径5.7cmを測る小形香炉で、高台は輪高台を呈す。33は灰落として、TD-24に分類される。底部はベタ底で高台は持たない。胎土は砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。体部には上絵付けが施されているが、風化によって詳細は不明である。本来の口縁は無く、欠損部を二次加工によって研磨し、新たな口縁を作出している。体部文様から本来の器高は現存の倍近くあったものと考えられ、灰落として判断した。また内高の約1/2程度まで炭片を少量含む灰が充填されており、欠損後に香炉・火入れとしての転用を目的として再加工されたものと考えられる。34は底部釉拭き取りの灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。35～37は五合徳利で、TC-10-dに分類される。35、37には線刻による「久〇」の釘書きが、36には列点による「八十」の釘書きが施されている。38は一升徳利で、TC-10-eに分類される。線刻による釘書きが認められるが、欠損のため詳細は不明である。39は志戸呂産の徳利で、TF-10に分類される。胴部には「久」と詳細不明の墨書が認められる。40は半胴甕で、TC-15-aに分類される。柿釉が全面に掛けられ、底部部分を拭き取っている。内底部と畳付には団子トチ痕が認められる。41は柿釉甕で、TC-15-bに分類される。体上半には数条の沈線が巡り、黒釉が流し掛けされている。内底部には4箇所の団子トチ痕が認められる。底部には「ニツ二」の墨書が認められる。42は水注で、TC-27に分類される。底部は碁笥底



状に成形され、胴部は丸く膨らむ。肩部には粘土紐による把手が2箇所貼り付けられ、一方の下部からはほぼ直立する注口が貼り付けられている。底部を除き柿釉が施され、体上半には黒釉が流し掛けされている。43は柄杓形の餌入れと考えられる製品で、TD-32に分類される。体部は半筒形を呈し、口縁直下に上下に孔を有す半月形のソケットが付けられている。内体部中央付近に、1条の沈線が巡る。底部を除き柿釉が施されている。44は油受け皿で、TC-40-cに分類される。受け部先端と外体部中央付近に重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。45、46は土瓶の蓋である。45の表面は白化粧土を施し、染付によって幾何学文を描いている。身との接合部を除き、透明釉が掛けられている。46は表面に透明釉を掛け、内面は無釉である。60は火鉢で、TZ-31に分類される。胎土は橙褐色を呈し、硬質である。口縁から底部にかけて白化粧を施し、透明釉が掛けられている。また体上部には白土を隆帯状に盛り付けて唐花状の文様を描いている。

47～59、61～72は土器である。47～57はかわらけである。47はDZ-2-dに分類される。見込みは一段盛り上がり、底部もやや上げ底状に成形されている。胎土は暗灰褐色を呈し、外面には火襷状の黒色帯が放射状に認められる。48～51は口径約4寸前後を測る製品で、DZ-2-bに分類される。48～50には灯心痕が認められる。52は口径約3寸を測る製品で、DZ-2-bに分類される。53～56は口径7cm前後を測る製品で、DZ-2-bに分類される。55、56の底部には墨書が認められる。56は焼成後に底部中央に直径約1cmの孔が穿たれている。57は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。口縁残存部ほぼ全域にわたり灯心痕が認められる。58、59は硬質瓦質丸火鉢で、DZ-31-dに分類される。58は口縁部下には半菊状の押形文を、体下半部には細かい斜格子状の押形文を全面に施した後、横方向のヘラ削り調整が施され、押形文を擦り消している。59の体部には渦巻き状の押形文が2段、全面に施されている。体中位で欠損しているが、割れ口がほぼ水平であること、研磨されたように摩耗していることから、二次加工された可能性が高い。61、62はひょうそくである。61は無釉で、DZ-44-cに分類される。62は透明釉が施釉され、DZ-44-bに分類される。底部には固定用の孔が穿たれ、灯心受けのスリットはV字状に整形されている。63は七輪の風口で、DZ-48-aに分類される。通風口には「八三」の刻印が認められる。64、65は七輪のサナで、DZ-48-aに分類される。66、67はロクロ成形の塩壺で、66は「播磨大極上」の刻印を持ちDZ-51-uに、67は無印でDZ-51-wに分類される。ともに底部の回転糸切り痕は左回転である。68は火消し壺の蓋である。内面から外面下部にかけて、黒色タール状物質が著しく付着している。69、70は塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目圧痕が認められる。69の上面には「上」と書かれた墨書が認められる。70の器高は1.1cmと低い。71はカンテラの蓋と考えられる製品である。型押し成形によって作られた円盤状の本体上面には、円錐台形状の摘みと、浮文による菊花文が施され、透明釉が掛けられている。裏面は無釉で、成形時の指紋が顕著に残っている。72は犬で、DD\_1204\_M2eに分類される。全体を胡粉で白色に彩色している。また、背に黒色、耳内側には朱色が僅かに観察される。尾は欠損している。上手のものである。

SK596 (IV-372 図)

1は菊皿で、TC-2-kに分類される。底部を除き、灰釉が施されており、見込みには3箇所のピン痕が認められる。2～4は左回転のかわらけで、2はDZ-2-aに、3、4はDZ-2-bに分類される。2、3には灯心痕が認められる。5は瓦燈の受け部で、DZ-45に分類される。底部にはスタレ状圧痕が認められる。

SK607 (IV-372 図)

1はミニチュアの施釉碗で、DD\_2001\_Wに分類される。器壁は厚く虫喰いが観察される。口縁部

から内側に、緑釉と鉄釉で交互に縞模様（6本単位）を3箇所描いている。また、見込みには鉄釉で五芒星を描き中を緑釉で彩色している。貼り付け高台で中央を削り畳付を作出している。東大構内で出土したミニチュアの中で最も古い。

#### SU631（IV-372～375 図）

本資料は、磁器碗にJB-1-d（2）が含まれ、染付皿は器高が低く、裏文様に圏線唐草文が多く認められること（4、7）や、塩壺の刻印などの様相から、東大編年IV b 期に位置付けられる。また被熱資料を含むことと、C面で検出されていることから、元禄16年火災時の一括廃棄資料と考えられる。

1～14は磁器である。1は染付碗で、JB-1-eに分類される。底部厚8mmを測るやや厚手の作りである。高台内には「大明年製」銘が書かれている。2は青磁染付碗で、JB-1-dに分類される。口縁には口銹が施され、青磁釉は青白色を呈する。見込みには二重圏線と菊花文が描かれている。菊花文は見込み中央から口縁に掛けて描かれ、茎は圏線の下を通っているように分断されて表現されている。高台内には「大明成化年製」銘が書かれている。被熱している。3～8は染付皿で、JB-2-eに分類される。3の裏文様は圏線唐草文で、高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。4は見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。裏文様は圏線唐草文で、高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。5は見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が描かれ、周囲には墨弾きによる波状文を描きダミで埋めている。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。被熱している。6は裏文様に縁取りのない如意頭唐草文を描き、高台内には「成化年製」銘が書かれ、ハリ支え痕が1箇所認められる。7は見込みに漢詩と一葉を描いている。裏文様は圏線唐草文で、高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。被熱している。8は底部中央で厚さ9mmを測る厚手の作りで、釉は青白色を呈し、内外面ともに釉垂れが認められる。見込みに植物文を描き、裏は無文である。9、10は染付鉢で、JB-5-bに分類される。9の外面には梅樹文と橋が描かれている。10は外面全面に縁取りを有する花唐草文が描かれている。11、12は仏飯器で、11がJB-8-c、12がJB-8-bに分類される。12は被熱している。13は瓶で、JB-10に分類される。底部は碁笥底状に成形されている。被熱している。14は筒形の蓋物で、JB-13-bに分類される。焼成不良による釉の白濁、釉飛びが認められる。

15～32は陶器である。15は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。16、17は陶胎染付碗で、TB-1-fに分類される。白化粧土を薄く掛けた上に染付し、透明釉を掛けている。16は山水文が、17は唐草文が描かれている。18、19は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。18は底部の釉を拭き取っている。見込みには同心円状の微細擦痕が認められる。19は底部無釉で、見込みには直線状の微細擦痕が認められる。被熱している。20は見込み蛇ノ目剥ぎ皿で、TB-2-aに分類される。底部を除き、透明釉が施釉されている。21は京焼風陶器皿で、TB-2-cに分類される。底部を除き透明釉が施釉されている。被熱している。22は三脚を有する形皿で、TC-2-xに分類される。体部は葉形状にかたどられ、葉脈を陰刻で表現している。底部には円錐状の脚が貼り付けられている。釉はいわゆる御深井釉で、青緑色を呈している。底部無釉。23は灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。口縁は鏝状に張り出し、4箇所の凹みを有する輪花状を呈している。見込みには鉄絵による型紙摺りの草花文が描かれている。24は五合徳利で、TC-10-dに分類される。著しく被熱し、釉調は不明である。25は備前産の徳利で、TE-10-aに分類される。体部は底部からハの字状に拡がり、屈曲して肩部に向かい緩やかに内湾する。体上半には微細な糸目が施されている。底部には刻印が認められる。被熱している。26は志戸呂産の徳利で、TF-10に分類される。体部には鉄泥が掛けられている。底部は上げ底で、面取りされていない。27は丸碗形の片口鉢で、TC-23-bに分類される。見込みには3箇所のピン跡が認められる。被熱している。28は花生で、TD-22に分類される。板作り成形によって断面台形状

を呈する四角柱形に成形している。体部は二重構造で内枠（本体）と透かし彫りが施された外枠（装飾体）からなり、口縁及び底部で接続している。脚部は四角柱のパーツを貼り付けている。外枠は四周に亀甲文などの透かし彫りを施し、板部分には陰刻と粘土紐の貼り付けによって環状吊り手を表した装飾を施している。また全体に鉄絵によって飾り金具を表現し、また呉須を併用して唐草文様などを描いている。底部を除き透明釉が施釉されている。29は灰釉摺絵鬘水入れで、TC-25に分類される。板作り成形により、底部を除き淡緑灰色を呈する灰釉が施されている。体部両面には鉄絵の型紙摺りによって草花文が描かれている。30は水指もしくは水注の蓋と考えられる製品である。円盤状を呈し、表面中央には粘土紐による摘みが貼り付けられているが、欠損のため形状は不明である。表面には淡緑灰色を呈する灰釉が施され、鉄絵による型紙摺りによって草花文が描かれている。31、32は瀬戸・美濃産の播鉢で、TC-29に分類される。31の口縁は外側への折り返しによってクランク状の縁帯を作出している。釉は暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。内底部から内体部下半にかけては、摺目、釉はもちろん素地までも著しく摩耗している。また底部も研磨され、素地が露出している。32の口縁は内側へ折り返され、玉縁状を形成している。黒茶褐色を呈する鉄釉が全面に掛けられ、底部部分を拭き取っている。また底部は摩耗によって一部素地が露出している。

33～41は土器である。33～39はかわらけで、DZ-2-bに分類される。33、35、38は左回転、37は離れ糸切りで、34、36は糸尻が欠損しているが、その可能性が高い。37、38は被熱している。39は底部、口縁ともに著しい摩耗が認められ、研磨された可能性も指摘できる。40、41は板作り成形の塩壺で、40は「御壺塩師堺湊伊織」銘の刻印を有し、DZ-51-fに、41は長方形二重枠内側二段角の「泉州麻生」銘の刻印を有し、DZ-51-iに分類される。

SK734 (Ⅳ-376 図)

1はかわらけで、DZ-2-bに分類される。口縁には灯心痕が顕著に認められる。2は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。口縁部内側に著しい敲打痕が認められる。3は舟カマドで、DZ-31-kに分類される。底部には円錐台形状の脚が4箇所貼り付けられ、スダレ状圧痕が観察される。体部内面には指頭圧痕が認められる。

SU774 (Ⅳ-377 図)

1～2は染付碗で、JB-1-cに分類される。1には「大明」、2には「角福」銘が書かれている。3は端反形染付小坏で、JB-6-bに分類される。体部は縦方向の集合沈線によって3分割され、沈線間には寿字文が書かれている。高台無釉。4は陶器皿の底部で、TB-2-dに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質であること、透明釉が暈付を除き施釉されていること、暈付に砂目痕が認められることから、内野山窯跡の製品と考えられる。見込みには高台際から中央方向へ向かう多数の剥離痕が認められることから、二次加工によって円盤状の形状を作出していることが窺われる。5は菊皿で、TC-2-kに分類される。口縁部には緑釉が流し掛けられている。6は桶形の鉢で、TC-5に分類される。底部は碁笥底状を呈し、体部は緩やかに開く筒形を呈する。口縁は逆L字状に内側へ張り出している。体部上部と下部には箍を模した隆帯が巡っている。底部を除き飴釉が掛けられているが、内面は薄く掛けたくえで、口縁内側に再度施している。また体上半にはうのふ釉が流し掛けられている。口縁両端は敲打によって釉が剥落している。7は水注の蓋である。円盤状を呈し、表面には波状条線が二重に巡らされている。全面に鉄釉が施され、内面は拭き取られている。8～12はかわらけで、8、11、12が、DZ-2-a、9、10がDZ-2-bに分類される。8～11には灯心痕が認められ、特に9、10が著しい。13はほうろくで、DZ-47-aに分類される。板作り成形による中空の内耳が貼り付けられている。14、15は輪積み成形の塩壺である。14には「ミなと藤左衛門」銘の刻印が施されている。DZ-51-a



に分類される。15は表面の風化が著しく判読は困難であるが、部分的に長方形二重枠が認められることから「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の刻印と推定される。DZ-51-cに分類される。

#### SK797 (IV-378 図)

1は染付碗で、JB-1-dに分類される。体部主文様が高台上半にかけて描かれている。2は青磁大皿で、JB-3-cに分類される。高台内蛇ノ目無釉部には鉄泥が施されている。青磁釉は深緑色を呈している。見込み全体に片切彫りによる文様が描かれている。3は染付小坏で、JB-6-aに分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付には砂が熔着している。4は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。色調は淡黄白色を呈する。5は砂目皿で、TB-2-dに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、透明釉が施されている。見込みには半月形の砂目痕が現状で3箇所認められる。内野山窯跡の製品と考えられる。6は灰釉皿で、TC-2-bに分類される。見込みには環状熔着痕が認められる。7は鉄釉壺で、TC-15に分類される。底部を除き、焦げ茶色を呈する鉄釉が掛けられている。8～11はかわらけである。8、9、11はDZ-2-aに、10はDZ-2-bに分類される。9、10には灯心痕が認められる。12、13は塩壺である。12は輪積み成形の塩壺で、口縁部が欠損しているため、刻印の一部しか残存していないが、一重枠に「門」の字が読み取れることから、DZ-51-bと考えられる。13は板作り成形の塩壺で、内側二段角の「泉州麻生」で、DZ-51-iに分類される。底部成形は3ピースから成る。

#### SU799 (IV-379 図)

1は高台無釉の白磁碗で、JB-1-bに分類される。2は丹波産の播鉢で、TK-29に分類される。見込みには焼成時の重ね焼きによる陶片痕が認められる。3～5はかわらけである。3、5はDZ-2-a、4はDZ-2-kに分類される。いずれも口縁には灯心痕が認められ、5は底部中央に焼成後の二次穿孔が認められる。

#### SD803 (IV-379 図)

1は青花の鉢で、JA1-5に分類される。高台は蛇ノ目高台で、底部無釉である。体部には草花文が描かれ、花卉に墨弾き技法が用いられている。2は陶器碗で、TC-1-aaと考えられる。胎土は淡黄白色を呈し、よく水簸され硬質である。釉は底部を除き施され、やや白濁した灰白色を呈する。3は天目碗で、TC-1-aに分類される。口縁はほぼ垂直に立ち上がり、屈曲部から2cmを測る。釉は焼成不良のため、全面的に縮れが認められ、やや白濁した暗茶褐色を呈する。4は長石釉丸皿で、TC-2-cに分類される。見込みと高台脇に円錐ピン痕が認められる。5～9はかわらけである。5～7はDZ-2-aに分類される。6の底部中央に二次穿孔が認められる。5、7の口唇部には、灯心痕が認められる。8は手づくねかわらけで、DZ-2-gに分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色砂粒を含む。底部にはスタレ状圧痕が認められる。底部中央には二次穿孔が、口縁には灯心痕が認められる。9はDZ-2-kに分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含む。口縁には灯心痕が認められる。10は軟質瓦質丸火鉢で、DZ-31-bに分類される。体部外面は丁寧に磨かれ、光沢を有している。底部にはほぼ円柱形の脚が貼り付けられている。

#### SU804 (IV-380～382 図)

1は高台無釉の青磁碗で、JB-1-bに分類される。青磁釉の色調は、やや灰色を帯びた青白色を呈し、体部下半には釉垂れが認められる。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎによる底部無釉の青磁皿で、JB-2-kに分類される。口縁は外反し鏢状を呈する。畳付外側は面取りされている。3は色絵皿で、JB-2-cに分類される。口唇部には口鏤が施されている。見込み周囲には赤絵の具によって雲形繋ぎ状の帯文が描かれ、見込みには草花文様が描かれているが、残存部位が少なく詳細は不明である。裏文様は高台内に1条、高台に2条、体部下半に1条の圏線が染付され、上絵による文様が描かれているが、詳細は不

明である。4は染付皿で、JB-2-cに分類される。高台径は口径の2/5と小さく、体部は高台脇から丸味を帯びて立ち上がり、中位で屈曲して外反する。見込み文様は菱形と円形の区画内に描かれている。裏文様には花松葉文が描かれている。SE2295掘方、SK2083と遺構間接合する。5は白磁鉢で、JB-5-fに分類される。型打ち成形によって作られ、見込み上半にはひょうたん形の浮文を巡らせている。6は見込み蛇ノ目釉剥ぎによる青磁皿で、JB-2-hに分類される。高台径は6cmと小さく、畳付幅12mmを測る蛇ノ目高台を呈する。体部は直線状に開き、口縁部でS字状を成す。また外面から凹みを付けられ、4単位の輪花を形成する。体部中央には獣足が3箇所貼り付けられている。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされ、鉄泥が内外釉際に沿って2条施されている。蛇ノ目釉剥ぎ部は、内径5.7cm、外径9cmを測り、直径6.8cmの環状熔着痕が認められる。青磁釉の色調は、やや灰色を帯びた青緑白色を呈する。7は碗の蓋である。摘み内には「宣徳年製」銘が書かれている。器形から丸碗の蓋と考えられるが、銘款の特徴より、JB-1-cに伴う可能性が高い。8、9は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。ともに口径11cmを測る。10は灰釉碗で、TC-1-aaに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや軟質である。釉はやや白濁した灰釉が底部を除き掛けられ、全体に細かい貫入が認められる。11は鉄釉丸碗で、TC-1-agに分類される。胎土は淡黄白色を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で外反する。底部を除き黒茶褐色を呈する鉄釉が施されている。12は京焼風陶器丸碗で、TB-1-bに分類される。高台内の円圏ケズリは直径2.8cmと大きい。体部には鉄絵による文様が描かれている。残存率が低く詳細は不明であるが、楼閣山水文以外の文様と推定される。高台内には「寶」の刻印が認められる。13は京焼の平碗で、TD-1-hに分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付外側が面取りされている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁で緩やかに外反する。また口縁は対になる2箇所を内側へやや凹ませており、その部分の見込みには銹絵染付による文様が描かれている。見込みには3箇所の目痕が認められる。SK847と遺構間接合する。14はTB-2-dに分類される。残存部において見込み、畳付に各々3箇所の砂目痕が認められる。胎土は淡黄白色を呈し、器面全体が施釉されている。15は灰釉端反皿で、TC-2-yに分類される。高台脇に稜を有し、体部はハの字状に立ち上がり口縁で緩やかに外反する。残存部において見込み、高台内側際に各々1箇所の円錐ピン痕が認められる。底部を除き淡緑灰色を呈する灰釉が掛けられている。16は灰釉端反皿で、TC-2に分類される。胎土は淡黄白色を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁で外反する。見込みには直重ね積みによる環状熔着痕が認められる。やや白濁した灰釉が、畳付を除き掛けられている。17、18は菊皿で、TC-2-kに分類される。17は底部を除き、黄釉が施され、体上半部に緑釉が流し掛けされている。畳付に目痕が認められる。18の胎土は白色微粒を多量に含む灰白色を呈し、やや底部を除き黄色味を帯びた灰釉が施されている。見込みにはピン痕が認められる。また見込みには型打ち時の布目圧痕が認められる。19は瀬戸・美濃産の播鉢で、TC-29に分類される。口縁断面は口唇が内側へ張り出す三角形を呈し、注口が設けられている。底部はヘラ削りによって整形され、糸切り痕は残存していない。また体部との境が面取りされている。20は丹波産の播鉢で、TK-29に分類される。口縁は内側へ張り出す断面三角形を呈し、1箇所の注口が設けられている。播目は5条1単位で内体部全面にほぼ隙間無く施されている。21は志戸呂産の播鉢で、TF-29に分類される。口縁部は断面三角形を呈する縁帯を形成し、1条の沈線が巡る。注口が設けられている。底部には右回転の回転糸切り痕が認められる。底部を除き、やや白濁した鉄泥が掛けられている。この3点は産地は異なるが、口径22～24cm、器高9～10cmと、法量がほぼ揃う小振りの製品という点で共通する。22は鉄釉壺の蓋である。上面中央の摘みは高さ1～2mmと低い。23～35はかわらけで、23～26、28、29、31、32、35がDZ-2-a、27、30、33、34がDZ-2-bに分類される。23、24に右回転、25、27～

35に左回転の糸切り痕が認められる。灯心痕は23、26、28～33で認められ、特に29、30に著しい。また25、28は底部内外面ともに黒く煤けている。36は土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。底部には円錐台形状の脚が3箇所貼り付けられ、体部には、先端部幅1cm、基部幅3cmを測る断面台形状の耳状把手が2箇所貼り付けられている。口縁は内湾し、頂部は平坦に整形されている。37は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-cに分類される。体部には二重角枠の「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の刻印が施されている。

#### SK805 (IV-382～384 図)

1は染付皿で、JB-2-aに分類される。見込みには形骸化した日字鳳凰文が描かれている。2は染付皿で、JB-2-sに分類される。畳付には砂が熔着し、釉垂れが認められる。口縁には口鏽が施されている。3～5は蛇ノ目釉剥ぎによる青磁皿で、JB-2-kに分類される。青磁釉は青白色を呈し、外面には釉垂れが認められる。6、7は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。8は鉄釉丸碗で、TC-1-agに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、畳付以外に鉄釉が掛けられ、口縁部内側から内部部にかけてうのふ釉が流し掛けされている。9は菊皿で、TC-2-kに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、底部以外に黄釉が施され、口縁内側には緑釉が流し掛けされている。見込みには4箇所の目痕が認められる。10は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青緑釉皿で、TB-2-aに分類される。口径7寸と大振りの製品で、口縁は逆U字状に外湾し、口縁上には5箇所の凹みを付け、輪花を形成している。見込みには青緑釉が、外面には畳付を除き透明釉が施されている。SK1023と遺構間接合する。11は刷毛目鉢で、TB-3-aに分類される。畳付外側の面取りはほとんど認められない。焼成不良のため釉は白濁している。見込みには6箇所の砂胎土目痕が認められる。12は瀬戸・美濃産の播鉢で、TC-29に分類される。口縁はクラック状に外反し、断面三角形の縁帯を形成する。内底部付近の播目は摩耗が著しい。13～21はかわらけで、14～16、18～20がDZ-2-a、17、21がDZ-2-bに分類される。14、15、17～19、21に、左回転の糸切り痕が認められる。13、15～21に灯心痕が認められる。17、20、21はほぼ口縁全周に認められる。22、23はほうろくで、DZ-47-aに分類される。23は粘土紐の貼り付けによるドーム形の内耳が認められる。

#### SU845 (IV-384 図)

1は染付小皿で、JB-2-aに分類される。見込みは型打ち成形により、菊花状の浮文が施されている。

#### SK847 (IV-384 図)

1は型打ち成形による変形皿で、TC-2-xに分類される。型打ちによって八つ手状の葉を形成し、底部には猫足状の脚が貼り付けられている。胎土は淡黄白色を呈し、灰白色の釉が底部中央を除き、掛けられている。見込みにはほぼ直線状に5箇所の目痕が認められ、輪トチと推定される環状熔着痕が認められる。2はかわらけで、DZ-2-aに分類される。内面には漆が塗られている。

#### SU874 (IV-385 図)

1は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。2は瀬戸・美濃の灰釉丸碗で、TC-1に分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや緑味を帯びた灰釉が畳付を除き掛けられている。3は京焼風陶器平碗で、TB-1-cに分類される。高台断面は長方形を呈し、畳付外側は面取りされている。口縁から見込み中央に向けて呉須絵によるススキ文が描かれている。4は菊皿で、TC-2-kに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、底部を除き黄緑味を帯びた灰釉が掛けられ、口縁内側には緑釉が流し掛けされている。5は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-cに分類される。体部には二重角枠に「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の刻印が施されている。また底部付近にはタタキ時の板材木目痕が認められる。

#### SK883 (IV-385 図)



1は西行で、DQ\_1109に分類される。成形技法については研究編を参照されたい。背面は無文で荷や僧衣の表現はなく滑らかに調整されている。鉄錆状のものが観察される。首部は別作りで貼付けるタイプである。器壁は厚く胸部まで開口している。東大構内で出土した人形のなかで最も古い。

SU979 (IV-386・387 図)

1は祥瑞手の青花皿で、JA1-2に分類される。高台は若干内傾し、釉際には砂が熔着している。体部は高台脇から1段稜を介して立ち上がり、上半部はS字状を呈する。稜の部分には虫喰いが認められる。見込み文様は梅花を中心に放射状の区画内に幾何学文を描く。高台内には二重角枠内に「角福」銘が書かれている。SR1857と遺構間接合する。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青磁皿で、JB-2-kに分類される。高台断面は三角形を呈し、熔着のためか畳付に微細剥離が認められる。青磁釉は青白色を呈し底部を除き施釉されているが、内外面ともに釉飛びが認められる。3、4は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。3の畳付は二次調整によって平坦に再調整されている。5は刷毛目大平鉢で、TB-3-aに分類される。砂胎土目積みによって窯詰めされている。畳付には面取りは観られず、胎土目剥離時の打撃により、大きく剥離している。見込み文様は白泥による刷毛目を蛇ノ目状に巡らせ、緑釉が流し掛けされている。6は柿釉小坏で、TC-6に分類される。底部無釉。見込みには3箇所が目痕が認められる。7は香炉で、TC-9-fに分類される。底部はそろばん玉状を呈し、猫足状の脚が3箇所貼り付けられている。口縁はやや外反すると考えられるが、著しく敲打され全面にわたり素地が露出している。釉はやや黄緑味を帯びた飴釉が掛けられている。8は舟徳利の底部片で、TC-10-fに分類される。上端割れ口全面に二次加工の剥離痕が認められ、再利用されたことが窺われる。9～12はかわらけで、9はDZ-2-a、10～12はDZ-2-bに分類される。9、11には左回転の糸切り痕が認められる。9～11には灯心痕が認められる。12は内面にススの付着が認められる。13は軟質瓦質角火鉢で、DZ-31-fに分類される。底部各コーナーに円錐台形状の脚が貼り付けられている。脚の先端部は著しく摩耗している。体部と口縁平坦部は非常に丁寧な磨かれている。口縁内側には敲打痕が認められる。

SK1023 (IV-387～393 図)

本遺構は、D2面検出遺構であり、廃絶年代は1660年代が想定される。肥前磁器では「角福」銘を持つJB-2-c(5)や、かなり省略された「日字鳳凰文」皿(12)、肥前陶器では刷毛目大平鉢が一定量含まれていること、陶器碗が、呉器手碗と天目でほぼ構成されていること、かわらけではDZ-2-aが主体を成していること、DZ-51-cに分類される二重角枠内「天下一堺ミなど藤左衛門」銘の塩壺が出土していることから、組成の主体は、東大編年Ⅲa期にあたる1650～60年代に位置付けられる。但し、JB-1-b、JB-2-aに分類される肥前磁器、87のDZ-51-ahなどが含まれており、廃棄年代の幅がやや広い可能性もある。

1～21は磁器である。1、2は高台無釉碗で、JB-1-bに分類される。1は染付碗で、高台断面は逆台形を呈し、腰の張りは弱い。釉は焼成不良のため白濁し、釉垂れ、釉飛びが認められる。2は白磁碗で、高台内はアーチ状に整形されている。体部は高台脇からほぼ直線状に開き、体中位で内湾し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。全体にロクロ痕が認められるが、特に口縁部付近では沈線状に深くなっている。釉は焼成不良のため白濁し、細かい釉飛びが認められる。漆継ぎ痕が認められる。3は染付碗で、JB-1-cに分類される。畳付には砂が熔着している。高台内には「製」と推定される銘が書かれている。4は漳州窯系の色絵皿で、JA2-2に分類される。高台には多量の砂が熔着している。胎土は灰褐色を呈するが、底部付近は中心が黒褐色を呈すサンドイッチ状の様相を呈している。釉調は乳灰褐色を呈し、厚さのむらが著しい。見込み文様は赤、緑、黒絵の具によって描かれている。

SK2163、SK3281と遺構間接合する。5は染付皿で、JB-2-cに分類される。高台断面はやや内傾する三角形を呈し、底部中央にハリ支え痕が1箇所認められる。見込みには花鳥文が描かれ、高台内は二重角枠内に「角福」銘が書かれている。6は白磁皿で、JB-2-cに分類される。高台径は4.8cmと小さく、口縁は外反する。見込み側面には型打ち成形によって梅文が陽刻されている。また見込みには微細擦痕が多量に認められる。7は色絵皿で、JB-2-aに分類される。畳付は高台内外面から面取りされ、シャープな三角形を呈する。底部厚は1cmと厚く、体部は短く立ち上がり、型打ち成形によって輪花を形成している。見込みには染付によって七宝繫ぎ文で埋められた雲形文と花鳥文が描かれ、雲形文は赤絵の具によって縁取られている。また黄、赤絵の具によって雲が描かれている。底部には「□製」銘が書かれている。8～14、16は染付皿で、JB-2-aに分類される。8の高台は低く、体部は型打ち成形によって、捻子花状の輪花を形成している。胎土は灰白色を呈する。見込みには簡略化された柳文が描かれている。9の高台断面は逆台形を呈し、畳付には砂が熔着している。体部は型打ち成形によって輪花を形成し、口唇には口鏽が施されている。見込みには簡略化された柳文が描かれている。10の高台は低く、砂が窯着している。体部は型打ち成形によって輪花を形成している。釉は青緑白色を呈し、釉垂れが認められる。11の高台はやや内傾した逆台形を呈している。胎土は灰褐色を呈する。見込みには簡略化された柳文が描かれている。12の高台は内傾した逆台形を呈し、高台高は低い。胎土は灰白色を呈するが、焼成不良のため橙褐色に発色した部分がある。釉も白濁し、釉垂れが認められる。見込みには簡略化された日字鳳凰文が描かれている。13の高台は断面逆台形を呈し、高台内の削りは深い。胎土は灰白色を呈する。釉はやや白濁し、釉飛びが認められる。14は高台無釉で、高台断面はシャープな逆台形状を呈する。釉は青緑白色を呈し、釉垂れが認められる。見込み文様は著しく簡略化された日字鳳凰文と考えられる。16の高台は逆台形状を呈し、体部は高台脇からハの字状に開き、口縁部で屈曲して垂直に立ち上がる。見込みには細かい渦巻き状のロクロ目が顕著に認められる。釉は青緑白色を呈し、釉垂れ、釉切れ、手痕が認められる。15は染付皿で、JB-2-cに分類される。胎土は乳白色を呈する。釉は青緑白色を呈し、釉垂れ、釉飛びのほか、全面に細かい貫入が認められる。17、18は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青磁皿で、JB-2-kに分類される。17の畳付は著しく摩耗し滑らかな状態を呈している。高台無釉部分に墨書が認められる。18の畳付には直重ねの製品を外した時の剥離痕が認められ、体部外面には直重ねで窯詰めされた製品の口縁部片が熔着したままの状態になっている。19は染付皿で、JB-2-cに分類される。高台断面は長方形を呈し、やや外傾する。体部は高台脇からほぼ水平に開き、大きく内湾してハの字状に立ち上がる。胎土は灰白色を呈する。見込み文様は岩と花、裏文様は折れ松葉が二方に描かれている。20は小鉢で、JB-5-fに分類される。見込み側面には型打ち成形によって放射状の陰刻が施されている。21は青磁壺で、JB-15に分類される。全体的に薄手に成形されている。底部と頸部には鉄泥が掛けられおり、口縁内側から口唇部は無釉、口縁外側には青磁釉が掛けられている。

22～50は陶器である。22～24は呉器手碗で、TB-1-aに分類される。22、23は淡黄白色の胎土で、畳付を除き細かい貫入の入る透明釉が施されている。22では内側面と底部に釉が切れた箇所が認められる。23の底部はきれいなアーチ状に整形されている。24の胎土は22、23に比してやや灰色を帯び、それに伴い器面の色調も淡灰黄白色を呈している。また釉も22、23と比較して厚く掛けられており、貫入も深い。25は外面青緑釉、内面透明釉に掛け分けられた高台無釉丸碗で、TB-1-iに分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付には目痕が観察される。26は外面緑釉、内面透明釉に掛け分けられた丸碗で、TB-1-iに分類される。底部はアーチ状に整形され、中心付近のみ無釉である。畳付には砂目痕が認められる。底部無釉部分に墨書が認められる。27は鉄釉碗で、TB-1に分類さ

れる。胎土は橙褐色を呈し、白色微粒を含む。釉は底部を除き鉄釉が施されているが、焼成不良のため発色は悪い。28～30は天目碗で、TC-1-aに分類される。28の胎土は淡黄白色を呈し、底部を除き焦茶色を呈する鉄釉が施されている。29の胎土は硬質で、鉄分を含む淡褐色を呈する。釉は底部を除き柿釉調の斑点を伴う黒釉が施されている。30は他の2点に比べて器高が低く、高台断面は内側が外傾する逆台形を呈する。釉は底部を除きうのふ釉を含む飴釉が施されている。見込み付近には茶筌痕と推定される円弧状の長い擦痕が多量に認められる。31～33は灰釉丸碗で、TC-1-aaに分類される。いずれも胎土は淡黄白色を呈し、高台は内側が外傾する断面逆台形状を呈する。釉は底部を除きやや白濁し、全体に微細貫入を伴う灰釉が施されている。34～41は陶器皿である。34はいわゆる卵手と称される内野山窯跡を指標とする透明釉、砂目積の製品で、TB-2-dに分類される。見込み畳付ともに5箇所、砂目痕が認められる。見込み文様は、陰刻による圏線と草状文様に、鉄絵の具を充填した象嵌技法によって描かれている。SU744、SR1856、SK2033、SK2256、SX2257と遺構間接合する。35は灰釉丸皿で、TC-2-aに分類される。高台高は約1mmと低く、断面形はやや内傾する逆三角形を呈する。体部は高台脇からほぼ直線的に立ち上がる。釉調は明灰褐色を呈する。高台内に2箇所、見込みに1箇所円錐ピン痕が認められる。36は長石釉丸皿で、TC-2-cに分類される。高台高は約1mmと低く、断面形はやや内傾する逆三角形を呈する。体部は丸味を帯びて立ち上がるが、高台際は鋭く削られている。底部の一部を残し、淡黄白色を呈する長石釉が施されている。高台内、見込みに円錐ピン痕が認められる。37、38は灰釉端反皿で、TC-2-yに分類される。37の高台断面は逆台形を呈し、高台高は約1mmと低い。高台際は鋭く削られ、1段稜を有する。体部は直線的に開き、口縁部で外反する。高台内側際に円錐ピン痕が認められる。口縁部の一部をアーチ状に剥離し再加工している。アーチ状再加工剥離面をはじめ、体側面には内外面ともにスス状物質の付着が顕著に認められる。灯火具として二次利用されたことが考えられる。38の高台断面は逆三角形を呈し、高台高は1mm未満とほとんど痕跡に近い状態である。高台際は鋭く削られ、1段稜を有する。見込み、高台内ともに3箇所の円錐ピン痕が認められる。37と同じ様に口縁部の一部をアーチ状に剥離し、そこも含め、口唇部には数箇所にスス状物質の付着痕が認められる。灯火具に二次利用されたことが考えられる。39は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿で、TC-2-mに分類される。胎土は鉄分を含む淡黄褐色を呈する。高台断面は三角形を呈し、体部はほぼ直線状に立ち上がる。釉はやや灰色を帯びた淡青緑色で、見込み輪剥部と、底部以外に施されている。40は菊皿で、TC-2-kに分類される。胎土は淡黄白色を呈する。底部を除き黄釉が施され、口縁部には一部緑釉が流し掛けられている。見込みの菊花文は型押しによって、外側面の菊花文はヘラ削りによって陰刻されている。見込みには3箇所の目痕が認められる。41はTC-2-sに分類される。高台断面はU字形を呈し、丁寧に整形されている。体部は高台脇からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反し、鐔状の口縁を形成する。釉は見込みに長石釉が薄く掛けられ、鐔部には若干黄緑味を帯びた黄釉が掛けられている。見込みには鉄絵によって笹文が描かれている。また見込み、畳付ともに窯詰め時の環状痕が認められる。42は刷毛目平鉢で、TB-2-g、43、44は刷毛目大平鉢で、TB-3-aに分類される。いずれも畳付外際の面取りは認められない。42は外体部上半から見込みにかけて、白泥を流し掛けした後、見込みに同心円状の刷毛目調整を施している。その上に緑釉によって弧状文様が散りばめられている。畳付には5箇所、見込みには6箇所の砂胎土目痕が認められる。43は見込みに白泥による同心円状の刷毛目調整を施した後、見込みに緑釉を流し掛け、さらに口唇より鉄釉を掛けている。見込みには5箇所、畳付には6箇所の砂胎土目痕が認められる。44は見込みに白泥による渦巻き状の刷毛目調整を施した後、緑釉、鉄釉によって蔓草文?を描いている。見込み、畳付に砂胎土目痕が認められる。45～47は香炉・



火入れである。45は灰釉を施し三足を有する製品で、TC-9-aに分類される。足は剥落し、口唇内側に顕著な敲打痕が認められる。46はTC-9-bに分類される。断面長方形を呈する輪高台を有し、体下半は袴腰状に張り出し、稜線から高台にかけて数条の沈線が巡る。体上部は太鼓状に膨らみ、口縁は玉縁を形成する。口縁下には4条の波状沈線が巡り、把手状の摘みが貼り付けられている。口縁内側から底部脇までは鉄釉が施され、内面には透明釉が施されている。SK1024に同一個体有り。47はTB-9-cに分類される。底部を欠損し、体上半約1/3が残存するにすぎない。体下半はハの字状に開き、屈曲して直立する。屈曲部は張り出している。口縁はほぼ直角に外反し、帯状を呈する。外面に1条、上部に2条の沈線が巡る。外面には錆釉が施され、体上半に上段が3条下段が2条一对の刷毛目文様によって掻き落とされている。武雄市釜ノ頭窯跡に類例が求められる。48は焼締めの瓶で、TE-10に分類される。寸同形を呈する瓶で、底部には藁状圧痕、火襷、刻印が認められる。体部には鉄泥が施されている。49、50は蓋である。49は蓋受けを有する山形を呈す。蓋受け先端以外に鉄釉が施されている。外面には3条の沈線を巡らせ、藁灰釉が2箇所流し掛けされている。摘みは円形の鉤状摘みの四辺を押し上げた四角形を呈する。内面蓋受け内側には逆の「の」字方向の渦巻き状のロクロ成形痕が認められる。胎土は白色粒を少量含有する灰褐色を呈し、硬質である。産地不明。50は瀬戸・美濃系の鉄釉壺の蓋である。底部には糸切り痕を残し、体部はやや外反する皿状を呈する。外面中央には鉤状の摘みを有し、その周囲には直径55mmを測る環状熔着痕が認められる。

51～83はかわらけである。51、52、55、56、58～60、63、66～69、71～75、77～79、81～83はDZ-2-aに分類される。54、57、61、70、76はDZ-2-bに、53、62、64、65、80はDZ-2-kに分類される。51～53、56、77は右回転の糸切り痕が認められる。51、52、56は、離れ糸切りで、灯心痕が認められる。53は灯心痕が認められる。54、55、57～63、65～76、78～83左回転の糸切り痕が認められる。62の色調は橙褐色を呈し、見込みには渦状痕の一端に横方向にナデ消しが、底部には板目状圧痕が認められる。60は、口縁がやや内湾気味に直立し、内底部に同心円状の凹凸が認められる。63、70、75、76、80、83はいわゆる腰折れ状痕が認められる。そのうち70、76、80、83に灯心痕が認められる。55、59、61、64、68、71、78、81には、灯心痕が認められ、そのうち59、68は離れ糸切りである。54の底部には「船頭」と書かれた墨書が認められる。64の胎土は暗灰褐色を呈す。84は輪積み成形の塩壺で、DZ-51-cに分類される。体部には二重角枠内に「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印が施されている。85は瓦燈の油皿台で、DZ-45に分類される。直線的に開く体部形態や本体との接続部が小さいことから、円筒形の身の付属品と考えられる。皿状の表面には「廿九」と推定される線刻が施されている。86は土師質の平底ほうろくで、DZ-47-bに分類される。色調は橙褐色を呈する。底部は平底で、スタレ状圧痕が認められる。体部は内湾気味に立ち上がり、底部との境にはヘラ削りが施されている。体上半から内部にかけては横方向のナデ調整が施されている。内体部にはドーム状を呈する内耳が、V字状に3箇所貼り付けられている。87は袋状を呈する輪積み成形の塩壺で、DZ-51-ahに分類される。3段の粘土紐で成形されている。88は輪積み成形による塩壺に伴うドーム形の蓋で、DZ-00-aに分類される。

#### SK1091 (IV-393・394 図)

1は半球形薄手染付碗で、JB-1-fに分類される。体部には松竹梅が描かれている。2は染付碗で、JB-1-dに分類される。高台高は7mmを測り、豊付際まで施釉されている。3は染付皿で、JB-2-fに分類される。体部はやや腰が張って立ち上がり、口縁部で外反する。また口縁部は6単位の輪花を形成している。底部中央にハリ支え痕が1箇所認められる。文様は見込み中央に海浜図、側面には松竹梅文が2単位配されている。裏文様は線書きによる如意頭唐草文、高台内には「大明□製」銘が書か

れている。4は染付鉢で、JB-5-bに分類される。底部厚は9mmを測り、色調は灰色を帯びる。体部には染付によって花鳥文が、見込みには二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。5、6は半球形の染付小坏で、JB-6-fに分類される。5の体部には羽子板と羽根が、6の体部には松？が描かれている。また6の高台周囲と見込みには茶褐色の付着物が認められる。7は染付壺で、JB-15に分類される。体部一面にはやや黒味がかった呉須によって花唐草文が描かれている。8は壺の蓋である。色調はやや灰色を帯びている。表面には草花文が描かれている。9は陶胎染付丸碗で、TB-1-fに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白泥を施した上に染付されている。焼成不良のためか、呉須の発色は青と暗茶褐色が斑状に混在する。10は灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。胎土は緻密で白色粒子を多量に含む。色調は灰褐色を呈する。底部を除きやや緑がかった灰釉が掛けられている。見込みには鉄絵を用いた摺絵によって草花文が描かれている。11は灰釉香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。高台は輪高台で、体部は筒形を呈す。立ち上がりの屈曲部はやや鏢状に張り出している。体部中位には緑釉が流し掛けられている。口唇部は使用時の敲打痕によりほぼ全面釉が剥落している。12は灰釉二合半徳利で、TC-10-aに分類される。釉表面には光沢が無く、ざらついていることから被熱していると考えられる。体部には「長」の釘書きが、底部には「十」？の墨書が認められる。13～15は左回転ロクロ成形のかわらけで、DZ-2-bに分類される。いずれも灯心痕が認められる。16は丸底ほうろくで、DZ-47-aに分類される。外面全体にススが付着している。17は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。口唇部には使用時の敲打痕が著しく認められ、口唇部内側には敲打痕を研磨して平滑にした摩耗痕が認められる箇所がある。18は板作り成形の塩壺で、DZ-51-mに分類される。体部は2ピース成形で、底部は外側からはめられている。内面上半には布目痕が顕著に認められる。印銘は摩耗によって明瞭ではないが、「泉川麻玉」と考えられる。19は鉢形の塩壺で、DZ-51-zに分類される。胎土は黒色、白色粒を少量含み、色調は淡橙褐色を呈す。外面は非常に丁寧に磨かれている。20は輪積み成形塩壺に伴うドーム形の蓋で、DZ-00-aに分類される。色調は暗橙褐色を呈す。

SK1093 (IV-395・396 図)

本資料は、染付にコバルトが用いられているが、印刷技法による描写がないことから、東大編年Ⅸ期(1870～80年代)に帰属すると考えられる。本遺構の位置は、東京大学建物配置変遷図によれば、1880～1893年までお雇い外国人教師が居住した教師館の裏手付近にあたり、西洋食器が含まれていることからもお雇い外国人教師の生活に関する資料と推定される。

1～3はヨーロッパ製の白磁皿で、JA8-2に分類される。1は楕円形を呈し、底部はベタ底で、体部はハの字状に立ち上がる。見込みには1段稜が付けられている。釉は全体に施され、外体部には長円部残存部において目痕が1箇所認められる。おそらく長円部にて対になっていたと考えられる。見込み側面には金彩による圏線が2条上絵付けされている。底部には紋章とその周囲に「PORCELAIN OPAQUE」「BRIDGEWOOD & SON」の銘款と刻印が施されている。サンプルン・ブリッジウッド&サンは、1805年頃にロンドンで創業したメーカーで、スタッフォードシャー窯業群に属し、「アンカー・ポタリー」と称した。2は碁笥底状の底部からハの字状に立ち上がり、体中位で屈曲して外反するいわゆる鏢皿の形状を呈する。釉は器面全体に掛けられ、乳白色を呈している。外体部上部に3箇所の目痕が認められる。高台内には「3 1/2R VILLEROY & BOCH BP」の印銘が認められる。3も2と同様の器形を呈するが、体下半部の立ち上がりが浅い。釉は器面全体に掛けられ、外体部上部には3箇所の目痕が認められる。高台内には「3 1/2 VILLEROY & BOCH MN」の印銘が認められる。ヴィレロイ&ボッホ社は1836年に設立されたドイツの陶磁器メーカーである。4～6は小

杯である。4は薄手小杯で、JC-6-dに分類される。高台はクランク状に屈曲して立ち上がり、体部は半球形を呈する。高台には櫛形文が巡り、底部には銘が染付されている。見込みには鉛ガラスと呉須によるいわゆる江戸絵付と金彩によって海浜図が描かれている。5は体部が面取りされ、直線状に立ち上がる器形で、JC-6-fに分類される。高台内には「松風」と考えられる銘款が描かれている。6は端反形の小坏で、JC-6-bに分類される。体部に描かれた染付にはコバルトが使用され鮮明な発色である。7は染付急須で、JC-16に分類される。底部は無釉で渦巻き状のケズリが施されている。体部下半は蓮弁状に面取りされている。漉し孔は7箇所穿たれ、注口は直線的に伸びる。把手先端は四弁花状にかたどられている。文様はコバルトによって花文様が描かれている。8は急須の蓋である。通気口が1箇所穿たれている。身との接地部分は無釉で、白濁したアルミナが塗布されている。9は軟質瓦質植木鉢で、DZ-21-bに分類される。底部には糸切り後にヘラ削り調整が施されている。

#### SU1101 (IV-396～398図)

1は染付碗で、JB-1-uに分類される。体部にはコンニャク印判で菊花、紅葉が描かれている。高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。2、3は染付皿で、JB-2-eに分類される。2は見込み中央白抜きで、手書きの五弁花文が描かれている。裏文様の如意頭唐草文は葉の部分のみ縁取りが施されている。高台内にはハリ支え痕が1箇所認められ、「太明年製」銘が書かれている。3は内外面ともにコンニャク印判による花文が散らされている。4は端反形の白磁小坏で、JB-6-bに分類される。5は香炉・火入れで、TC-9-eに分類される。胎土は灰白色を呈する。釉は口縁部に灰釉が、胴部から底部に掛けて鉄釉が施されている。体部には横位方向に集合細沈線を施した後、縦位方向に太沈線が施されている。6は五合徳利で、TC-10-dに分類される。胎土は淡黄褐色を呈し、白色砂粒を含む。釉は口縁から頸部にかけてうのふ釉が、体部から底部にかけて飴釉が掛けられ、底部の釉は拭き取られている。肩部下には△に・の釘書きが施され、底部には墨書が認められる。7は丸碗形の片口で、TC-23-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色粒を多量に含み硬質である。内面には錆釉が施され、口縁部内側から外体部にかけて鉄釉が施されている。8は灯火皿で、TC-2-pに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色粒を多量に含み硬質である。口縁には鏝形の把手が貼り付けられている。見込みから底部上半にかけて、緑味を帯びた灰釉が施されている。9、10は播鉢である。9はTL-29に分類され、口縁部内側に扇枠内に「上長」銘の刻印が施されている。10はTC-29に分類され、口縁部はクランク状を呈し、縁帯幅は3cmを測る。11～14はかわらけで、DZ-2-bに分類される。いずれも灯心痕が認められる。15は土師質筒形涼炉の底部片で、DZ-49に分類される。「大平」銘の刻印が施されている。16は板作り成形の塩壺で、DZ-51に分類される。内面には顕著な布目痕が認められ、底部は内側からはめ込まれている。体部表面は著しく摩耗しているため、刻印は不明である。17はミニチュア鉢で、DZ\_2003\_Wに分類される。総釉で、内外面胴部中央に沈線がみられる。口縁部は丸味があり、胴下部際を面取りしている。精緻な作りのものである。胴部の一部が欠損しているため器種は明確ではないが鉢とした。

#### SD1103 (IV-398～406図)

本遺構は、中央診療棟地点2号、10号組石から続く富山藩邸との地境石組溝で、幕末まで使用されていた遺構である。石組は周囲の盛土造成に伴い増築され、溝底レベルも土層堆積により徐々に嵩上げされたことが確認されている。その結果、中央診療棟地点2号組石出土遺物と同様に1～133までの溝覆土出土遺物にはかなりの年代幅が認められる。一方、本遺構の構築年代は134～137の底石下出土資料が示すように1650年代頃と推定される。そして天和3年の盛土造成に伴う石組増築時の裏込めに伴う資料が139～144である。



1～44は磁器である。1～10は染付碗で、1、5～7は、JB-1-gに分類される。胎土は灰白色を呈する。1の外面の釉には釉垂れが、見込みには降灰痕が認められる。体部には梅花文が描かれ、底裏銘はかなり崩れた「大明年製」と思われる。5の葉文はコンニャク印判である。6、7には木橋と梅花文が描かれている。木橋のモチーフは長崎県波佐見町高尾窯跡、木場山窯跡などに類例があり、JB-1-uに先行することが考えられる。底裏銘は崩れた「大明年製」である。2は、JB-1-eに分類される。焼成不良のため、釉は白濁し、呉須の発色も悪い。体上半部の花文葉はコンニャク印判と思われる。底裏銘は一重角枠が認められることから、「渦福」と推定される。3、4は、JB-1-fに分類される。3は、体下半部に氷裂文を上半に折枝文が描かれている。4は草花文が描かれている。8は筒形碗で、JB-1-lに分類される。外面には蛸唐草文、口縁内側には四方櫛の帯文、見込みには丸文が描かれている。底裏銘は二重角枠に「筒江」銘が書かれている。9は瀬戸・美濃の端反碗で、JC-1-dに分類される。推定口径11.7cmを測る大振りの碗である。文様は毛彫りによる線書き表記を施した上に、ダミを掛けている。10は湯呑み碗で、JC-1-eに分類される。大振り、厚手で、高台断面は長方形を呈し、畳付幅は5mmを測る。11は染付大皿で、JB-3-bに分類される。釉調は乳白色を呈し、全面に細かい貫入が入る。高台内には4箇所ハリ支え痕が認められる。見込み側面の唐草文は縁取りされているが、裏文様の如意頭唐草文は太線書きのみである。底裏銘は「大明成化年製」である。12は染付七寸皿で、JB-2-eに分類される。胎土は灰白色を呈し、釉は部分的に白濁が認められる。高台断面はU字形を呈し、高台高は1cmと高い。見込み全面に花鳥文が描かれ、裏文様は太線書きの簡略化した如意頭唐草文が描かれている。底裏銘は不明。13は色絵皿底部片で、JB-2-cに分類される。いわゆる「古九谷様式」といわれる肥前初期色絵である。二次火熱を受け、色調・文様はほとんど判断できないが、裏面に黒絵の具による線書きと、黄絵の具による上絵付けがわずかに観察される。14は蛇ノ目凹形高台の高台高が低いタイプで、JB-2-jに分類される。口縁は輪花を形成している。蛇ノ目無釉部には、窯道具の環状痕が認められる。見込み文様には環状松竹梅文が、側面には花唐草文が描かれている。裏文様は太線書きによる唐草文が描かれ、底裏銘は「筒江」である。15、16は口縁が輪花を形成する深手の染付皿で、JB-2-fに分類される。胎土は灰白色を呈する。裏文様は太線書きの簡略化した如意頭唐草文で、底裏銘は「大明年製」である。15の高台内にはハリ支え痕が1箇所認められる。16の見込み文様は、コンニャク印判による五弁花文が描かれている。SK1112と遺構間接合する。17はJB-2-aに分類される。外面には釉飛びが多く認められ、見込みには降灰痕が認められる。18はJB-2-gに分類される。胎土は灰白色を呈し、焼成不良のため、釉は白濁している。外面には釉飛びも認められる。19はJB-2-eに分類される。口縁は輪花を形成している。見込みは白抜きで、側面には松竹梅文が描かれている。裏文様は太線書きの如意頭唐草文が描かれ、底裏銘は「□□年製」である。20は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、底部施釉のうち高台径が小さいタイプで、JB-2-lに分類される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部には重ね積みによる環状痕が認められる。21は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、高台無釉の染付製品で、JB-2-kに分類される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部には重ね積みによる環状痕が認められる。22は見込み蛇ノ目釉剥ぎ、底部施釉のうち、高台径が大きいタイプで、JB-2-mに分類される。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花文が描かれている。23はJB-2-eに分類される。口径7.5cmを測る小振りの染付皿で、高台高は8mmと高い。整形、施文ともに丁寧に作られている。高台内には二重圏線が巡る。24は染付小坏で、JB-6-aに分類される。胎土は灰白色を呈し、畳付釉際の処理も甘い粗製品である。25は紅皿で、JB-6-eに分類される。型作り整形のため高台に縮れが認められる。外面の菊花文の型押しには対峙する2単位の草花文の陰刻が認められる。被熱している。26は染付鉢で、JB-5-bに分類される。口径26cmを測る大形の鉢である。外面には花唐草

文、見込みには楼閣山水文が描かれ、口縁内側には四方櫛文の帯文が巡る。焼継ぎによる補修が施されている。SK1112、SK1114と遺構間接合する。27は白磁の坏で、JB-6-dに分類される。体部は直立し、口縁部で若干外反する。28～32は仏飯器で、28がJB-8-b、29～32がJB-8-cに分類される。31、32の底部には墨書が認められる。33～35は香炉・火入れである。34は蛇ノ目高台を呈する青磁製品で、JB-9-bに分類される。胎土は灰白色を呈し、青磁釉は淡緑褐色に発色している。内面は無釉で、内底部には砂が多量に付着している。また平縁に形成された口縁部両端には使用による敲打痕が認められ、特に内側で顕著である。33、35は蛇ノ目凹形高台を呈する製品で、JB-9-eに分類される。33は染付で、蛇ノ目無釉部に墨書が認められる。35は青磁染付で体部上半が染付、下半から底部にかけて青磁釉が施されている。36は染付瓶で、JB-11-bに分類される。最大径を体下半部に有するラッキョウ形を呈する。被熱している。37は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。高台畳付幅は広く、蛇ノ目高台状を呈する。見込み文様はコンニャク印判によって描かれている。38、39は染付花生けで、JB-22に分類される。39の底部はそろばん玉形を呈し、体部は鼓状に外反する。39は型作り成形で胴部は2枚の形を貼り合わせている。また底部も割れ口の観察から貼り合わせられたことが認められる。頸部には粘土紐による耳状の把手が対峙して貼り付けられている。40～44は蓋である。40、41は丸碗の蓋である。40の内面には二重圏線内に手書き五弁花文が描かれ、摘み内には二重角枠内「渦福」銘が書かれている。42～44は蓋物の蓋である。42、43には鉤状摘みが、44には橋状摘みが付けられている。43の表面にはコンニャク印判によって桐文が散らされている。

45～106は陶器である。45～64は碗である。45は京焼風陶器平碗で、TB-1-cに分類される。見込みには楼閣山水文が描かれている。底部中央には直径6mmの円圈があり、その脇に「清水」印が押されている。46は錆釉丸碗で、TZ-1に分類される。胎土はやや軟質で、淡橙褐色を呈す。高台内の削りは右回転を示す。錆釉は器面全面に施されている。見込みには漆が付着しており、食器以外の用途で使用されたことが窺われる。47は天目碗で、TC-1-aに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、硬質である。高台脇はシャープに削られ、口縁部の立ち上がりは、緩やかなS字状を呈す。釉は見込みから外面中位にかけて天目釉が比較的厚く掛けられている。48～50は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。胎土は白色粒子を含む灰白色を呈し、硬質である。釉はやや緑掛かった灰釉が、見込みから底部脇まで施されている。48の見込みには、同心円状の微細擦痕が観察される。49の釉際には熔着痕が認められる。51は御室碗で、TC-1-dに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや気泡を含む。体部には山水文と推定される文様が、呉須で描かれている。52、53は腰錆碗で、TC-1-uに分類される。52は腰が張り、器高は5.3cmを測る。一方、53は半球状を呈し、器高は4.2cmを測り、生産年代の時間差が認められる。54はいわゆる拳骨茶碗で、TC-1-pに分類される。高台は蛇ノ目高台を呈し、体部には推定8箇所凹みの凹みが施されている。釉は畳付以外に黒釉が施されているが、高台脇は拭き取られている。また体部には長石釉の流し掛けが認められる。55は灰釉碗で、TC-1に分類される。胎土は淡黄灰褐色を呈し、やや粗い。釉は全面に施釉されている。口縁部には連弧状の染付文様が巡る。56は灰釉丸碗で、TC-1に分類される。胎土は淡黄白色を呈する。釉は畳付を除き施釉され、全体に細かい貫入が入る。57は灰釉筒形碗で、TC-1に分類される。胎土は淡灰白色を呈し、やや粗い。釉は畳付を除き施釉され、全体に細かい貫入が入っている。58は色絵半球碗で、TD-1-bに分類される。緑絵の具で草花文が上絵付けされている。59は平碗の底部片で、TD-1-hに分類される。胎土は淡灰白色を呈し、緻密である。底部に「御次」の墨書が認められ、奥御殿空間で使用された食器と考えられる。60は半筒形の鉄絵碗で、TD-1-iに分類される。胎土は淡黄灰白色を呈し、緻密である。釉は底部を除き施釉され、全体に細かい貫入が入っている。見込みには目痕が2箇所認

められる。61は曆手の筒形碗で、TD-1-jに分類される。体部には黒、赤絵の具によって大小曆が書かれている。部分であるが、「八大」「九小」が読み取れ、「九小」左側の文字がわずかに残っており、その筆跡から「小」即ち「十小」と考えられる。18世紀以降では、元禄6(1693)年、元文元(1736)年、延享2(1745)年、延享3(1746)年、宝暦5(1755)年、明和元(1764)年、寛政10(1798)年、文化4(1807)年、文化5(1808)年、文化14(1817)年、文政9(1826)年が該当する。62は比較的薄手の丸碗で、TD-1に分類される。高台脇は水平に削られ、稜を介して体部は丸味を帯びて立ち上がる。胎土は淡橙褐色～淡灰白色を呈し、緻密である。見込みから高台脇稜にかけて暗茶褐色を呈する鉄釉が掛けられている。63はいわゆる小福で、TD-1-oに分類される。やや腰が張る器形を呈し、口縁にかけて緩やかに内傾し、口縁で外反する。底部中央には円圈が削られている。釉は厚さ約1mmの透明釉が底部を除き施釉され、全体的に細かい貫入が入る。体上半に鉄絵による文様が描かれている。64はいわゆる大福で、TD-1-nに分類される。高台は畳付幅が5mmを測る逆台形状を呈し、畳付外側は面取りされている。高台内の削りは右回転である。体部はやや腰が張る器形を呈し、口縁にかけて緩やかに内傾し、口縁で外反する。見込みには残存部において2箇所目の目痕が認められる。体中央部には波状の沈線が巡り、見込みから体上半までは灰釉が施され、体下半には鉄釉が掛けられている。65～71は皿・平鉢である。65は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青緑釉皿で、TB-2-aに分類される。釉調は内外面ともに深緑色を呈する。66は灰釉丸皿で、TC-2-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色粒子を含む。見込みには直径6cmを測る環状熔着痕が認められる。67～69は、灰釉摺絵皿で、TC-2-eに分類される。胎土は灰白色を呈する。67はやや白濁した灰釉が施されている。67、69は呉須で、68は鉄絵で摺絵花文様が描かれている。68は見込み残存部において2箇所目の目痕が認められる。70は志戸呂産錆釉皿で、TF-2に分類される。胎土は白色粒子を含む茶褐色を呈する。見込みから外体部中位にかけて錆釉が施されている。口唇部には灯心痕が認められる。71は京焼風陶器皿の底部片で、TB-2-cに分類される。高台断面は長方形を呈し、畳付外側は面取りされている。高台高は1.5cmを測る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎされている。見込みには口縁を始点とした放射状文様が呉須で描かれている。72は象嵌平鉢で、TB-2-hに分類される。畳付外側は大きく面取りされている。見込みから外体部中位にかけて、やや白濁した透明釉がラフに掛けられ、外体部下位には錆釉が施されている。見込み残存部には砂胎土目痕が5箇所認められる。見込み象嵌文様の白泥もむらが激しく雑である。73は灰釉見込み蛇ノ目釉剥ぎ平鉢で、TC-2-uに分類される。胎土は淡黄灰白色を呈し、やや軟質である。釉はやや黄緑がかった灰釉が見込みから外体部中位まで施され、見込み蛇ノ目釉剥ぎされている。見込み側面には呉須によって蔓文が描かれている。74～79は香炉・火入れである。74は鉄釉香炉・火入れで、TC-9-bに分類される。高台は輪高台で、体部は直立する。体部下半に3条の沈線が巡る。釉は内体部中位から高台脇に掛けて施されている。口唇には敲打痕が著しく観察される。75は灰釉香炉・火入れ底部片で、TC-9-aに分類される。底部には脚が貼り付けられているが、脚は無釉である。底部に墨書が認められる。76は灰釉香炉・火入れで、TC-9-aに分類される。高台は輪高台で、体部はやや外傾する。口縁は鉤形を呈する。釉は口縁から体下半屈曲部にかけて施されている。77は鉄釉香炉・火入れで、TC-9-bに分類される。底部は平底で、3足の脚が貼り付けられている。釉は口縁内側から体下半屈曲部にかけて施されている。78、79は灰釉摺絵香炉・火入れで、TC-9-cに分類される。筒形胴部の外形に沿って3足の脚が貼り付けられ、口縁内側から体下半屈曲部にかけて灰釉が施されている。脚は無釉である。摺絵は鉄絵によって描かれている。80～85は瀬戸・美濃産の瓶である。80は二合半徳利で、TC-10-aに分類される。薄青緑色の灰釉が掛けられ、体部には「太」の釘書きが施されている。81、82は二合半徳利で、TC-10-cに分類される。



81 は薄黄緑色の灰釉が掛けられ、肩部に直径 1cm を測る孔が二次的に穿たれている。82 は薄青緑色の灰釉が掛けられ、体部に「? 与イ」の釘書きが施されている。底部脇にはつけ掛け時の指痕が認められる。83～85 は五合徳利で、TC-10-d に分類される。83 は褐色を呈する飴釉が掛けられ、底部の釉は拭き取られている。体部には「八に三」の釘書きが施されている。84 は飴釉が掛けられているが、不均一に掛けられているため、褐色～暗黄褐色と斑状に発色している。底部の釉は拭き取られている。体部には「Lに久〇」の釘書きが施されている。85 は淡深緑色を呈する灰釉が掛けられ、底部の釉は拭き取られている。体部には「ろじや?」を含む釘書きが施されている。86 は志戸呂産徳利の胴部片で、TF-10 に分類される。口縁部には鉄釉が体部には鉄泥が掛けられている。また体部には墨書が認められるが、詳細は不明である。87 は瀬戸・美濃産の油壺で、TC-12 に分類される。胎土は灰褐色と呈し、やや緑がかった灰釉が高台を除き掛けられている。口縁部欠損。88 は水滴で、TD-19 と考えられる。高台はハの字状に外傾し、畳付外側は面取りされている。体部は半球形を呈し、口縁部約 1/2 に板細工による蓋が貼り付けられている。蓋表面には花文と「本山一」の文字が陽刻されている。体部中位には注口へつながる直径 5mm の孔が穿たれ、粘土板を丸めた注口が体部に貼り付けられている。釉は灰白色を呈する不透明な灰釉が、底部を除き掛けられている。89 は水滴の体上部片で、TC-19 に分類される。胎土は白色粒子を含む淡褐色を呈し、硬質である。体部は型押し成形による平面六角形を呈する上下 2 パーツの貼り合わせによって成形されているが、体下部は欠損のため残存しない。上部表面には陽刻による花文が一面に施され、角際に注口を配し、中央やや端寄りに空気孔が穿たれている。中央部は器面より約 2mm の高さを持つが、側面にも陽刻が施されていることから、成形型には注口部も想定されていることが窺われる。釉は淡暗緑褐色を呈する灰釉が掛けられている。90 は灰釉植木鉢で、TC-21 に分類される。胎土は黄白色を呈する。口縁内側から底部脇にかけて灰釉が掛けられている。高台にはアーチ状を呈する水はけ用の切り欠きが 3 箇所認められる。底部中央には直径 23mm を測る排水用の円孔が穿たれている。体部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部は鉤形に開く。底部には墨書が認められるが、遺存状態が悪く内容は不明である。91 は丸碗形の片口鉢で、TC-23-b に分類される。胎土は黄白色を呈する。底部を除き、飴釉が掛けられているが、焼成不良のため発色は悪い。見込みには目痕が 3 箇所認められる。92 は朝顔形の花生で、TC-22-b に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。頸部には 1 対を成す耳状突起が貼り付けられている。釉は体下半部に鉄釉、上半部に灰釉が掛けられている。93 は灰落として、TD-24 に分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、やや軟質である。口縁部から底部際まで透明釉が掛けられ、体部には上絵付けによる亀甲文様が描かれているが、細部は不明である。口唇には使用時の敲打痕が顕著に認められる。94 は灰釉水注で、TC-27-c に分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや軟質である。底部と蓋受け部分を除き、灰釉が掛けられている。体部には型紙摺りによって花文が描かれている。95 は丹波産の播鉢で、TK-29 に分類される。胎土は白色粒子を多量に含む暗褐色を呈し、硬質である。口縁部は縁帯を呈し、2 条の浅い沈線が巡る。見込み脇と底部端には、重ね焼窯詰め時にあてがわれた陶片痕が認められる。体部上半に鉄釉が薄く掛けられている。96 は瀬戸・美濃産の播鉢で、TC-29 に分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや軟質である。口縁部は幅約 3cm を測る縁帯を形成し、わずかにクランク状を呈している。見込み脇と底部端には、重ね焼窯詰め時にあてがわれた団子状目痕が認められる。97～99 は油受け皿である。97 は瀬戸・美濃産で、TC-40-c に分類される。98、99 は志戸呂産で、TF-40 に分類される。胎土は白色粒子を含み暗茶褐色を呈する。油回収用のスリットが 98 では 2 箇所、99 では 3 箇所認められる。100 は京都・信楽系と考えられる陶器片である。正面は上端部へ向かってわずかに広くなる逆台形状を呈する。横断面形はわずかに弧を

描いている。また破片下端部の割れ口には幅 14mm を測る他パーツとの組み合わせと考えられるほぞ穴痕が認められる。それらの状況から側板から続く手桶の把手上端部片と推定される。胎土は淡黄白色を呈し、きめ細かく硬質である。釉は透明釉が掛けられ、表面には上絵付けによって梅花文が描かれている。被熱している。101～106は蓋である。101はTB-15の蓋である。胎土は橙褐色を呈し、硬質である。表面には深緑色を帯びた鉄釉が掛けられているが、釉飛びが著しい。102は水注の蓋である。94に伴う可能性が高い。表面には灰釉が掛けられている。103は合子の蓋である。胎土は黄灰白色を呈し、きめ細かい。表面に灰釉が掛けられている。104は合子の蓋である。胎土は淡黄白色を呈し、やや軟質である。体部内面が下端部に向けて内傾している。釉は身との合わせ部分を除き、灰釉が掛けられている。表面には型紙摺りによる草花文様が描かれている。105は土瓶の蓋と考えられる。胎土は淡褐色を呈し、きめ細かく硬質である。表面に灰釉が掛けられている。106は土瓶の蓋と考えられる。白色微粒子を含む胎土は暗茶褐色を呈し、きめ細かく硬質である。表面に鉄釉が掛けられている。

107～131は土器である。107～114は左回転のかわらけで、DZ-2-bに分類される。107、108、111の口縁部には灯心痕が認められ、112、113の底部には墨書が認められる。115は土師質の鉢で、DZ-5に分類される。底部には離れ糸切り痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり口縁部は内湾する。内外面ともにナデによって丁寧整形されている。また口唇部内側には敲打痕が認められ、火入れとして使用された可能性がある。116は土師質の鉢で、DZ-5に分類される。底部には左回転の糸切り痕が認められる。体部は丸味を帯びて立ち上がり、中位付近から直線的に開き口縁に至る。口唇部は平坦に整形されている。117は硬質瓦質筒形涼炉の底部片と考えられ、DZ-49に分類される。底部には一重楕円形枠内に「新兵衛」の刻印が施されている。118、119は施釉土師質油受け皿で、DZ-40-bに分類される。118の外面には受け部と同径の環状熔着痕が認められる。119の外面にはススが付着している。120、121は土師質油受け皿で、DZ-40-dに分類される。表面には銀彩が施されている。122は脚付きの油受け皿で、DZ-40-cに分類される。表面には銀彩が施されている。123～126は板作り成形の塩壺である。123は面取り一重角枠の「泉川麻玉」銘の刻印が施され、DZ-51-mに分類される。2ピース成形で、底部は内側から押し込まれている。124は二重角枠の「泉州麻生」銘の刻印が施され、DZ-51-hに分類される。内面には布目痕が観察される。125は二重角枠内側二段角の「泉州麻生」銘が施され、DZ-51-iに分類される。3ピース成形で、内面には布目痕が観察される。126は面取り一重角枠の「泉川麻玉」銘が施され、DZ-51-mに分類される。内面には布目痕が観察される。127、128はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。128は左回転のロクロ成形で、口縁部が外反している。129、130は筒形塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。内面には布目痕が観察される。131は鉢形塩壺の蓋で、DZ-00-eに分類される。一重角枠二段角の「イツミ 花焼塩 ッタ」銘の刻印が陽刻されている。

132は碁石状製品でDQ\_4004\_Hに分類される。掌握痕確認される。133は独楽で、DQ\_4002\_Mに分類される。キラが顕著で堅緻である。中央に径7mmほどの穿孔、上面に2本の沈線を施している。

134～138は石組底石下より出土した遺物である。134は景德鎮窯系の青花芙蓉手皿で、JA1-2に分類される。高台は内傾し、畳付はシャープに面取りされている。高台内には放射状のカンナ痕が認められる。見込み側面は型打ちによって成形されているが、残存部が少なく意匠は不明である。釉には釉飛び、虫喰いが認められる。135は染付4寸皿で、JB-2-aに分類される。高台は低く、断面形は逆台形を呈す。砂が熔着している。見込みには簡略化した海浜図、側面には蝶が描かれている。136は見込み蛇ノ目釉剥ぎ底部無釉の青磁皿で、JB-2-kに分類される。口縁は屈曲し、折縁形を呈

する。この手の口縁形態を有する皿は、長崎県波佐見町中尾上登窯跡 E トレンチ 9 層出土遺物、物原 A 地点 7 層出土遺物に類例が求められ、内湾形に先行する製品であることが確認され、1650 年代前半に比定される。137 は角瓶の胴部と推定される磁器片で、JB-10 に分類される。板作り成形による製品で、釉は鉄釉が施され、一部透明釉を施した白抜き部分があり、文様を構成しているものと考えられる。138 はかわらけで、DZ-2-a に分類される。底部には離れ糸切り痕が認められる。

139 ～ 144 は石組裏込めより出土した遺物である。そのうち 140 を除く資料は、本地点基本層序 C3 層に対応する裏込め層位より出土した資料で、天和 3 (1683) 年増築期に伴うものである。139 は糸切細工の貼付高台による形皿で、JB-2-r に分類される。見込みには花文が、側面には花唐草文と亀甲文が、裏文様には折枝梅花文が描かれている。140 は高台無釉の染付皿で、JB-2-a に分類される。見込み文様は著しく簡略化されており意匠は不明である。141 は丸碗形の小杯で、JB-6-a に分類される。口縁と高台に圈線が染付されている。142 は白磁壺の蓋で、JB-15 に分類される。143 は灰釉平鉢で、TB-2-i に分類される。高台断面は長方形を呈し、体部は丸味を帯びて立ち上がるが、口縁部付近で外反する。体部外面は輪花状に成形されている。見込み周囲には 2 条の沈線が巡っている。釉は畳付を含む器面全体に施され、呉器手碗状の細かい貫入が入っている。高台内側にチャツ状の窯道具熔着痕が認められる。144 は瀬戸・美濃の播鉢片で、TC-29 に分類される。錆釉が施されている。播目は 1 単位 10 条で、内底部付近は使用の結果、釉、播目ともに摩耗しきっている。

#### SU1110 (IV-407・408 図)

1 は染付皿で、JB-2-g に分類される。見込みにはコンニャク印判によって五弁花文が描かれている。高台内には「渦福」銘が書かれている。2 は端反形の小坏で、JB-6-b に分類される。体部には海老文様が 3 方に描かれている。内面には漆が付着しており、漆パレットとしても利用されたことを窺わせる。3 は染付猪口で、JB-7-b に分類される。体部には幾何学文を描いた帯文が口縁下、底部上に巡り、花文を描いた丸文が 3 方に配されている。見込みには二重圈線内に手書き五弁花文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。4 は染付蓋物の蓋である。表面中央には橋状摘みが貼り付けられている。身との擦り合わせ無釉部には、砂が付着している。5 は灰釉丸碗で、TC-1-c に分類される。胎土は淡黄灰白色を呈し緻密で、釉調はやや黄緑がかっている。6 は京都・信楽産の丸碗で、TD-1-c に分類される。高台内側は外傾し、畳付外側はわずかに面取りされている。胎土は硬質で、灰白色を呈する。釉は底部を除き施され、比較的細かい貫入が全体に入っている。7 は色絵平碗で、TD-1-h に分類される。高台内側はやや内傾し、畳付外側は面取りされている。高台内中央には円圈ケズリが施されている。胎土は緻密であるがやや軟質で、淡黄白色を呈する。見込みには菊花文が上絵付けされているが、風化により色調は不明である。8 は象嵌大平鉢で、TB-3-b に分類される。畳付外側の面取りは、幅 10mm を測る。底部と外体部中位を除き、鉄釉が施されている。見込みには唐草文、幾何学文などの陰刻を同心円状に施した後、刷毛によって白泥を施しているが、陰刻が浅いため、ほとんど充填されていない。9 は褐釉壺で、TC-15 に分類される。胎土はやや軟質で、淡黄白色を呈する。釉は褐釉が施されている。10 は灰釉香炉・火入れで、TC-9-a に分類される。底部は碁笥底状の輪高台を呈し、体部はほぼ垂直に立ち上がり、円筒形を呈す。胎土は淡黄白色を呈し、比較的緻密である。釉は底部脇から口縁内側にかけて施されている。露胎部にはタール状の付着物が多量に認められる。11 は京都・信楽産の香炉・火入れで、TD-9 に分類される。体部は円筒形を呈し、口縁はやや内側へ突出する。高台は花卉状に削り出され、五脚を形成している。胎土は黄白色を呈し、緻密である。釉は高台脇から口縁内側に掛けて施され、体部には錆絵染付によって竹文が描かれている。12 は灰釉甕で、TC-15 に分類される。高台断面は方形を呈し、体部は胴下半で屈曲し、ほぼ垂



直に立ち上がる。口縁は若干内側へ突出し、口唇はわずかに凹んでいる。体上部に2条、体下部屈曲部に3条の沈線が巡る。内底部にはトチ痕が認められる。体部には鉄絵文様が描かれているが、欠損のため詳細は不明である。被熱している。13は褐釉壺で、TC-15-fに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、緻密である。肩部、頸部間に8条の集合沈線が巡る。釉は高台脇から口縁内側にかけて施されている。内面には漆が、外面にはススが付着している。14は灰釉片口で、TC-23-bに分類される。胎土は灰白色を呈し硬質であるが、気泡を含む。内底部には3箇所が目痕が認められる。釉はやや緑がかった灰釉が、底部を除き施されている。15は堺産の播鉢で、TL-29に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色粒子を含む。底部はベタ底で、筋状の圧痕が認められる。播目は9条1単位で、口縁から見込みにかけて施されている。口縁内側には1条の隆帯が巡り、その直下に施されたナデ整形によって播目の上端が揃えられている。見込み側の播目下端は底体間より見込み側へ約2cm伸びている。内体部中位から見込みにかけては、使用による摩耗によってかなり平滑になっている。16～20は左回転ロクロ成形のかわらけで、DZ-2-bに分類される。16、19には灯心痕が認められ、16は銀彩が施されている。21は瓦燈の身で、DZ-45に分類される。舌状突起の高さは15mmを測る。外面には銀彩が施されている。22は土師質火消壺で、DZ-31-iに分類される。底部には板状圧痕が観察され、円錐台形状の脚が3箇所貼り付けられている。体部内側には輪積み成形痕が観察される。被熱している。23、24は無脚の油受け皿で、DZ-40-dに分類される。左回転のロクロ成形によって成形されている。23の受け開口部は浅いU字形を呈し、幅5cmを測り、銀彩が施されている。器面約1/2の範囲にタール状付着物が認められる。24の器面は黒褐色を呈し、胎土はかなり軟質である。受け部は14mmと高く、開口部は逆台形を呈し、推定幅約3.5cmを測る。

SK1114 (IV-409～418 図)

本遺構は、SK1115-1と重複し、それより新しい遺構で、ともに動物遺体を多量に含み、廃棄遺構として利用された遺構である。年代的には、JC-1-dに器高が低く、文字と区画を取り入れた文様が認められること(14、15)などの様相から、Ⅷc期を下限とする一括廃棄資料である。また大聖寺藩邸出土資料において過去にも事例が認められる「俵次」の釘書き資料が3例出土している(26、27、34)。26はほぼ完形の鍋島染付5寸皿で、幕末においても藩邸内で散見される資料と位置付けられる。

磁器 (1～78)

1～5、7～9、12、17は肥前磁器碗である。1は丸碗で、JB-1-eに分類される。主文様は4単位の丸文を配し、その間を葵唐草文で埋めている。見込みにも二重圏線内に同様の唐草文が1ポイントで描かれ、口縁内側には四方襷を描いた帯文が巡る。2は薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。胎土は灰白色を呈する。草花文が描かれている。3は小広東碗で、JB-1-iに分類される。推定口径8cmと小振りで、外面には連鎖文が、見込みには一重圏線内に文字文様が描かれている。4は小丸碗で、JB-1-jに分類される。外面には花、蝶文が、見込みには蝶文が描かれている。5は筒形碗で、JB-1-lに分類される。焼成不良のため、釉、呉須の発色が悪い。7は体部がハの字状に開く碗で、JB-1-pに分類される。口径9.5cmと小振りである。文様は全て線書きで描かれ、ダミは用いられていない。8は蛇ノ目状高台を呈す端反碗で、JB-1-nに分類される。畳付は蛇ノ目状を呈しているが、接地点は外端部にある。文様は細い線書きによって竹が描かれ、幹の部分のみダミが施されている。9は湯呑み碗で、JB-1-oに分類される。文様は線書きによって描かれている。12、17は端反碗で、JB-1-nに分類される。12は染付碗で、主文様は「福寿」を書いた帯文で4単位の区画され、各区画には菱形の窓絵を配し、植物文を描いている。17は色絵碗で、金、黒絵の具などで竹文が描かれている。6、

10～24は瀬戸・美濃産磁器碗である。10は染付丸碗で、JC-1-aに分類される。呉須の色調は鮮やかな藍色を呈し、細線書きによって龍が描かれている。その様相から関西系の可能性もある。焼継ぎによる補修痕が認められ、高台内には朱書きによって「一」が書かれている。6、11、13～16、18～20は端反碗で、JC-1-dに分類される。16は口縁部が比較的強く端反り、初出的な様相を残している。主文様には海浜図が描かれている。6も海浜図が描かれているが、16に対し、器厚が厚く、文様も簡略化されている。色調は白濁色を呈し、若干焼成不良と考えられる。18は16同様に器壁が薄い、呉須の発色は鮮やかな藍色を呈し、緻密な描写で梅文が描かれていることから、関西系の可能性もある。11は文様帯を2区分し、海浜図が描かれている。口径10.5cmを測る比較的大振りの製品である。14は文様帯を幾何学文で3単位に区画し、太線で縁取られた区画には笹文が描かれている。15は残存率約1/3のため区画単位は不明だが、寿字文で区画し区画内には草花文が描かれている。また焼継ぎによる補修痕が認められる。13は口径8.4cmとやや小振りの碗形である。畳付は平坦に整形され、断面形は長方形を呈す。呉須は鮮やかな藍色を呈し、文様は細線書きを主体に描かれている。その様相から関西系の可能性がある。19、20は高台無釉の蛇ノ目高台である。畳付は斜めにカットされ、接地面は外端部にある。文様は線書き、ダミともに鮮明に描かれており、いわゆる瀬戸の地呉須とは様相が異なる。21は湯呑み碗で、JC-1-eに分類される。鷲文が描かれている。22、23は染付丸碗で、JC-1-aに分類される。口径は22が8.8cm、23が8.3cmを測る小振りの製品である。22の高台は外側に一段を有する。22の文様はいわゆる地呉須で描かれているため、ボテッとした感があるが、23は線書き、ダミともに鮮明に描かれている。24は体部が逆ハの字状に開く碗で、JC-1-fに分類される。口径は8.9cmを測る小振りの製品である。高台もハの字状に外傾している。文様は松竹梅文が緻密に描かれ、呉須の色調は鮮やかな藍色を呈し、関西系の可能性もある。25～33は肥前磁器皿である。25は鍋島染付五寸皿で、JB-2-nに分類される。見込みには桔梗文が描かれ、葉脈はダミの濃淡で表現されている。裏文様は4単位の七宝繋ぎ文が三方に配され、紐部分は縁取りが施されていない。高台の櫛歯文も縁取りが施されていない。26は型打ち成形によって32単位の輪花を形成する染付皿で、JB-2-eに分類される。高台は断面U字状を呈し、やや幅広である。見込みには氷裂文を描き、梅花文を散らしている。口唇も染付されている。裏文様は簡略化された梅花文を三方に配し、高台内には「太明年製」銘が書かれている。また高台内には「俵次」の釘書きが施されている。27、29は染付輪花皿で、JB-2-qに分類される。27は見込み全体に松と海浜図を描き、墨弾きによって雲の輪郭を表現している。口唇も染付されている。裏文様には線書きによる唐草文が巡る。また高台内には「俵次」の釘書きが施されている。29は焼成不良のため、全体的に白濁し呉須の発色も悪い。見込み全体に墨弾きを併用して楼閣山水文が描かれている。裏文様は線書きによって七宝文が三方に配されている。28は色絵二寸皿で、JB-2-eに分類される。見込みには赤絵の具によって草花文が描かれている。30～33は高台高の高い蛇ノ目凹形高台染付皿で、JB-2-iに分類される。30は口縁に8単位の輪花を形成している。文様は、見込みに環状松竹梅文を描き、周囲は蛸唐草文で埋めている。裏文様は線書きによって梅花唐草文が描かれ、高台脇には=×文が巡らされている。高台内凹形部には「成成年製」銘が書かれている。31は口縁部が約1/4しか残存していないが、そのスパンより8単位の輪花を形成していると推定される。見込みには環状松竹梅文を描き、周囲は鹿子唐草文で埋められている。裏文様には線書きによる唐草文が描かれている。高台内凹形部には銘が書かれているが、欠損のため詳細は不明である。底部から体部にかけて、焼継ぎによる補修痕が認められ、高台内蛇ノ目無釉部に「八」が朱書きされている。32は口縁部が輪花を形成し、そのスパンから8単位と推定される。見込みには環状松竹梅文を描き、周囲は鹿子唐草文で埋められている。裏

文様は線書きによって唐草文が描かれ、高台内凹形部には「成化年製」銘が書かれている。33は胎土は灰白色を呈し、器面の施釉部分は淡青灰色を呈する。体部は8単位の輪花を形成し、口唇部には口銹が施されている。見込みには楼閣海浜図が描かれている。裏文様は無文である。34は口縁が輪花を形成する小鉢で、JB-5-bに分類される。外面には芙蓉手文様が、口縁部内面には四方襷文を描いた帯文が、見込みには二重圏線内に花文が描かれている。高台内には「俵次」の釘書きが施されている。35～37は高台断面がU字状を呈する丸碗形の鉢で、JB-5-bに分類される。35は外面に赤、青、黒、黄絵の具を用いて鶴文などが描かれている。口縁部内側には四方襷を描いた帯文が、見込みには二重圏線内に環状松竹梅文が染付されている。底部には焼継ぎによる補修痕が認められる。36の胎土は灰白色を呈する。外面主文様には草花文が、口縁部内側には工字状文を描いた帯文が、見込みには二重圏線内に主文様と共通する草花文が描かれている。37は外面に鶴を描き、口縁部内側には袈裟襷を描いた帯文が、見込みには二重圏線内に環状松竹梅文が描かれている。38は端反形の小坏で、JA3-6に分類される。外面には褐釉、内面には透明釉が施され、口唇部は無釉である。口唇部内面の透明釉が釉際で肥厚している部分が認められ、伏せ焼によって焼成されたことが推定されるが、畳付付近に多量の熔着物が付着している点が気になる。39、40は端反形の薄手小杯で、JB-6-cに分類される。39は白磁小杯である。40は口縁部内側に鋸歯状文様を配した帯文が、見込みには二重圏線で区画された丸文内に富士山が描かれている。41～44は半球形の小坏で、JB-6-fに分類される。40、41の胎土は白色を呈し器壁も薄く文様も比較的丁寧に描かれている。42、43の胎土は灰白色を呈し、40などに比べて器壁も厚い。文様は同一で、簡略化されて描かれている。45は端反形の薄手小坏で、JC-6-dに分類される。見込みには富士山と推定される山と「□雪 / 天下雨 / 片雪 / 日東寒」が書かれている。使用された呉須は瀬戸の地呉須とは様相が異なり、筆致も細線で精緻であることから、関西系の可能性もある。焼継ぎによる補修痕が認められる。46は木杯形の小坏で、JC-6-dに分類される。器壁は薄く、丁寧に整形されている。外面には染付文様が描かれているが、欠損のため詳細は不明である。焼継ぎによる補修痕が認められ、高台内には朱書きで「下」と鉛ガラスで「キ」が書かれている。47は油壺で、JB-12に分類される。体部上半には鹿子唐草が、下半には蓮弁文が描かれている。48～54は丸碗形の蓋物の身で、JB-13-aに分類される。48は外面全面に蛸唐草が描かれている。高台内には釘書きによって根引き松が描かれている。49は線書きによって丸文と鳳凰文が描かれている。50は蔓花文が描かれている。51は釉が白濁し、焼成不良と考えられる。外面は6単位の区画され、呉須の発色は濃い藍色を呈す。52は外面に蔓草文が描かれている。53は蓋受け部の釉剥ぎ範囲がほぼ口唇部のみと狭い。色調は灰白色を呈し、見込みには黒斑が認められる。外面文様は3単位の区画内に簡略された海浜図が描かれている。54は連続する雲形区画内に宝珠と笹・鳥?が交互に描かれている。55、56は段重の身で、JB-13-cに分類される。下段受け部釉剥ぎ部分には全面にアルミナが付着している。文様は3単位で構成されている。57は染付土瓶で、JC-34に分類される。やや扁平の球形を呈し、胴下半部に最大径を有する。高台を有し、高台内はアーチ状に整形されている。茶漉し穴は直径2～3mmを測り、4箇所、5箇所、4箇所と交互に3列穿たれ、全体として六角形状を呈する。底部無釉部に被熱痕跡は認められない。58は染付急須で、JC-16に分類される。やや扁平の球状を呈し、鉄砲口と考えられる注口部には同内径の茶漉し穴が1箇所穿たれている。被熱痕跡は認められない。59は散り蓮華で、JC-20に分類される。型打成形で作られているため、底部無釉部には地散れ目が認められる。見込み周囲には陰刻によって蛸唐草を描き、ダミで埋めている。見込みは陽刻による文様が描かれている。60は染付水滴で、JB-19に分類される。板作りの型押し成形で、底部内面には布目痕が認められる。表面には陽刻によって牡丹文が描かれ、葉



の部分にダミで埋めている。61～64は植木鉢で、JC-21に分類される。61は高台から体部に直線的に移行する猪口状の形態で、口縁部は屈曲して鏝状を呈す。高台には水抜きのための3連アーチ状の挟り込みが認められる。口縁部内側から底部脇にかけて、薄瑠璃釉が施されている。62は湯呑み碗状の形態を呈し、口縁は鏝状を呈す。釉は口縁部内側から高台外面まで施されている。畳付は水抜きのためにアーチ状の挟り部が設けられ、残存部で2箇所認められ、全体として3箇所存在したものと考えられる。63は筒形を呈し、残存部において内面、底部は無釉である。文様は毛彫りによって輪郭を表し、ダミで埋めている。64は湯呑み碗状の形態を呈し、口縁部は湾曲して鏝状を呈す。高台には水抜きのためにアーチ状の挟りが3箇所設けられている。釉は内体部中位から高台外面にかけて施されている。焼継ぎによる補修痕が認められる。65はJB-1-eの蓋である。表面には金魚と水草が、裏面下端には櫛歯文を配した帯文、中央には水草が描かれている。66～70はJB-1-nの蓋である。66の表面文様は、壽福・松葉を描いた帯文によって3単位に区画され、竹・梅を描いている。摘み内には銘が書かれている。裏面下端には雷文を描いた帯文、中央には竹が描かれている。67の表面文様は、幾何学文を描き、裏面下端にはダミによる帯文、中央には花卉状の文様が描かれている。68の表面文様は、ハート形の窓絵を流水文で繋ぎ周囲をダミで埋めている。裏面下端には、5重の同心円を描いた半円形幾何学文を交互に配した帯文、中央には花文が描かれている。摘み内には二重角枠内に銘が書かれている。69の表面文様は、線書きによって丸文、鳳凰文が交互に配され、裏面下端は幾何学文を配した帯文、中央には花文が描かれている。摘み内には二重角枠内に銘が書かれている。70の表面文様は、4単位に区画され、金、黄、黒、赤絵の具によって雲形文、幾何学文などが描かれている。摘み内には赤絵の具によって一重角枠内に銘が書かれている。71～74はJB-13の蓋である。71は、逆円錐台形状の摘みを有し、摘み周辺が一段下がっている。文様は69と同様の丸文、鳳凰文である。72は撥形を呈する橋状摘みを有し、表面には幾何学文様が描かれている。身掛かりの無釉部にはアルミナが付着している。73は鉢形を呈する橋状摘みを有し、表面は流水状の文様で埋められている。身掛かり部の無釉部にはアルミナが付着している。74は摘み部を欠損し、その形状は不明である。表面には花唐草文が描かれている。75はJB-15の蓋である。そろばん玉状を呈する摘みを有す。見掛かり部の無釉部には、アルミナが付着している。焼継ぎによる補修痕が認められ、裏面に鉛ガラスによってX字状の記号が書かれている。76はJB-18-bの蓋である。色調は灰白色を呈し、呉須の発色も黒ずんでいる。見掛かり部の無釉部には墨の付着が認められる。77はJC-1-aの蓋である。摘み内には二重角枠内に銘、裏面中央には一重圏線内に「道光年製」銘が書かれている。文様は細線による輪郭とダミを用い、比較的精緻に描かれていることから、関西系の可能性も考えられる。78はJC-1-dの蓋である。表面には海浜図、裏面下端にはダミを用いた帯文、中央には二重圏線内に海浜図、摘み内には一重角枠内に銘が書かれている。

#### 陶器 (79～130)

79、80は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。ともに胎土は灰褐色を呈し、硬質である。80の釉は若干緑味を帯びている。高台内には直径35mmを測る焼成時の環状熔着痕が認められる。81はいわゆる腰鍔碗で、TC-1-uに分類される。胎土は白色を呈する。外体部中位には数条の沈線が巡り、それを境に上部から見込みにかけて灰釉が、下部から底部にかけて畳付を除き鍔釉が施されている。82は灰釉端反碗で、TD-1-gに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。底部以外に灰釉が施され、全体に細かい貫入が認められる。83は平碗の底部片で、TD-1-hに分類される。高台内には墨書で「弍」と書かれている。84は油皿で、TC-2-oに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、やや硬質である。底部以外に柿釉が施されている。見込みには直径約4cmを測る不整円形の環状熔着痕が、

外体部中位には油受け皿との重ね焼と考えられる直径6.5cmを測る環状熔着痕が認められる。85は太白の蛇ノ目凹形高台丸皿で、TC-2-tに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。透明釉下には白泥は施されていない。見込み中央には帆船が、周囲には扇面文が描かれている。86は筒形小杯で、TD-6に分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、軟質である。全面に白泥を施した上に、底部を除き鉛釉が掛けられている。高台内を除き白泥には細かい貫入が認められる。文様はイチン状に盛り上がり、黒色を呈する。高台内には同技法により「道八」銘が書かれている。87～93は灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。胎土は、灰褐色を呈し、白色微砂粒を多量に含み、硬質である。87の胴部上半には熔着痕が1箇所認められ、また上下に「-△」と書かれた列点状の釘書きが認められる。88の体部には、上下に「-△」と書かれた列点状の釘書きが認められる。89の口縁部は断面三角形を呈し、口唇部には重ね焼きによる熔着痕が認められる。体部には上下に「八川」、それに隣接して「甲」と書かれた列点状の釘書きが認められる。90には肩部に2箇所の熔着痕が認められる。体部には、上下に「八川」、それに隣接して「甲」と書かれた列点状の釘書きが認められる。91には体部に1箇所の熔着痕が認められる。また上下に「久○」と書かれた列点状の釘書きが認められる。92の体部には、上下に「久○」と書かれた列点状の釘書きが認められる。93の体部には熔着痕が認められる。釘書きはない。94～97は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。94、96、97の胎土は淡黄白色を呈し、95のみ白色微砂粒を多量に含む灰褐色を呈する。94には上下に「三庄」と書かれた列点状の釘書きが認められる。95には上下に「久○」と書かれた列点状の釘書きが認められる。96の体部には熔着痕が認められる。また「○」内に文字を入れた列点状の釘書きが認められるが、文字は不明。97は釘書きは認められない。98は柿釉徳利で、TC-10-gに分類される。胎土は淡褐色を呈し、緻密である。体部中位には集合条線が施されている。外面全体に柿釉が施され、底部は拭き取られている。また体部中位には意図的な釉垂れが全周する。99～101は墨書を有する陶器片である。99は半胴甕の底部片で、TC-15-aに分類される。底部には「三年」の墨書が認められる。100は柿釉甕の口縁部片で、TC-15-bに分類される。割れ口に「丹次殿」の墨書が認められる。「丹次」は遺物の年代観から、吉田丹次茂為（1773～1854）の可能性が高い。茂為は文化8年正月に養父了休の隠居に伴い、家督相続（300石、御小姓組）。御射手、御弓土蔵奉行、御勝手方元メ役、御先筒頭などを歴任した大聖寺藩士である（『加賀市史料』（二～四、大聖寺藩士由来帳）による）。101は捏鉢の底部片で、TC-5-iに分類される。底部に「比ぬし糸□」の墨書が認められる。102は柿釉甕で、TC-15-bに分類される。胎土は白色粒を含み、明灰褐色を呈する。底部以外に柿釉が施され、肩部に鉄釉が流し掛けされている。103は水滴で、TC-19に分類される。胎土は明灰褐色を呈し、緻密である。畳付外側は面取りされ、丁寧に整形されている。口縁部には半月形状の水受けが貼り付けられ、表面には白泥による型紙摺りで花文が描かれている。104、105は植木鉢で、TC-21に分類される。104は灰釉植木鉢で、高台にはアーチ状を呈する水切り用の挟りが4箇所認められる。口縁部内側から高台脇にかけて灰釉が施され、高台内には鉄泥が掛けられている。105は鉄釉植木鉢で、高台にはアーチ状を呈する水切り用の挟りが残存部で1箇所認められる。口縁部内側から高台脇にかけて、鉄釉が掛けられている。106は花生で、TC-22-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、緻密である。頸部には鉤状突起が2箇所貼り付けられている。底部には糸切り痕を残すが、幅約8mmを測るハの字状の削り込みが認められる。体下半には柿釉が、上半には灰釉が施されている。107は焼締め播鉢で、TL-29に分類される。口縁には2条の沈線を有する縁帯が設けられ、注ぎ用の張り出し部端には沈線状に指頭圧痕が認められる。底部の高台を形成させるための沈線は退化し、非常に浅い。内面の播目は1条10単位で構成され、口縁部から底部方向にむけて隙間なく施される。口縁部内側には1条の

沈線を巡らせ、その上の播目は擦り消されている。108は鍋で、TZ-33-aに分類される。胎土は暗灰褐色を呈し、緻密かつ硬質である。釉は底部を除き、暗茶褐色で非常に光沢のある鉄釉が施されている。器壁は平均2.5mmと薄く、丁寧に作られている。109～112は土瓶である。109はTZ-34-aに分類される。体部片で注口、吊手、底部は残存していない。胎土は淡褐色～灰褐色を呈し、緻密かつ硬質である。最大径に対し器高が高く、体部は瓜状を呈し、6単位の凹凸が作出されている。釉は青緑釉が施されている。110はいわゆる青土瓶で、TZ-34-aに分類される。注口部は残存していない。胎土は淡褐色を呈し、緻密かつ硬質である。釉は口唇部外端から底部にかけて、青緑釉が施されているが、焼成不良による白濁が随所に認められる。底部にはスス痕が認められる。111はTZ-34-iに分類される。胎土は暗褐色を呈し、緻密で固く焼き締められている。器壁は約2mmと非常に薄く、丁寧に作られている。注口部の茶漉し穴は上下に2箇所穿たれている。内体部に透明釉が掛けられている。文様は、白泥イッチンによって輪郭、下地を描き、その上に緑、黄色、紫、黒絵の具を用い、蔓花文が描かれている。112は三彩土瓶で、TZ-34-cに分類される。注口部、底部は残存していない。胎土は黄白色を呈し、緻密でやや硬質である。釉は透明釉が底部を除き、施されている。文様は黒、緑絵の具によって描かれている。113～117は行平鍋である。113はTZ-42-aに分類される。胎土は灰褐色を呈し、緻密かつ硬質である。把手上面には型押しによって鶴が陽刻されている。釉は底部を除き、灰釉が施されている。見込みには目痕が認められる。底部にはスス痕が認められる。114はTZ-42-cに分類される。胎土は橙褐色を呈し、緻密かつ硬質である。体部上部には飛びカンナ文が螺旋状に巡る。把手と内面には鉄釉が、外面中位には鉄泥が掛けられている。把手正面には型押しによって猿が陽刻されている。底部にはスス痕が認められる。115はTZ-42-cに分類される。胎土表面は暗茶褐色、断面は灰褐色を呈し、緻密かつ硬質である。体部には飛びカンナ痕がらせん状に巡る。内面と注口部内面には、透明釉が掛けられている。把手上面には型押しによって人物、鶏が陽刻され、下面には「ㄣ(かぎ)子」が陽刻されている。底部にはスス痕が認められる。116は把手片で、TZ-42-dに分類される。胎土は橙褐色を呈し、やや軟質である。外面には鉄釉が、内面には緑釉が掛けられている。把手下面には、鳥蔦? / 樂全と刻印されている。117は把手片で、TZ-42-dに分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、やや軟質である。外面には鉄釉、内面には透明釉が掛けられている。把手正面には型打ちによって蔓文が陽刻され、下面には梅花状の一重枠内に刻印が認められる。118、119は油受け皿である。118はTC-40-cに分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質である。釉は柿釉が全面に施され、外面は拭き取られている。外面には本製品同士の重ね焼きと考えられる直径68mmを測る環状熔着痕が認められる。119はTD-40-bに分類される。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。内面には透明釉が掛けられているが、受け部先端は釉剥ぎされている。120～130は蓋である。120は土瓶(TD-34)の蓋である。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。蓋本体はほぼ平坦で粘土紐細工の獅子?の摘みが貼り付けられている。表面には白土で化粧掛けを施し、鉄絵文様を描き透明釉が掛けられている。直径2mmを測る空気孔が1箇所穿たれている。裏側には「道八」銘が書かれている。121、122はいわゆる青土瓶(TZ-34-a)の蓋である。胎土は黄白色を呈し、緻密である。122は釉が斑状に白濁していることから、100とセットの可能性が高い。裏面には墨書が認められる。123は急須(TZ-16)の蓋である。ドーム形を呈する本体に鏢状に伸びる下端部と、球形の摘みが付く。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。表面を白土で化粧掛けし、鉄、緑絵の具で花卉状の文様を描き、透明釉を施している。124、125は鉄釉土瓶(TZ-34-e)の蓋である。124の胎土は白色、黒色粒子を多量に含み、硬質であるがざらついている。色調は暗茶褐色を呈する。摘みには菊花状の沈線が付されている。125の胎土は断面では暗灰褐色、露胎部では白色斑点が多量に入る暗灰褐色



を呈し、緻密かつ硬質である。126は灰釉土瓶（TZ-34-g）の蓋である。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。球状の摘みが付されている。127はイッチン土瓶（TZ-34-i）の蓋である。胎土は淡褐色を呈し、やや硬質である。表面に鉄釉を施し、白土イッチンで文様を描いている。128は灰釉行平鍋（TZ-42-a）の蓋である。胎土は露胎部では灰白色、断面では灰褐色を呈し、ややざらつき感を有す。釉は身との接地面を除き、施されている。体中位には数条の集合沈線が巡る。129は急須の蓋（TZ-16）である。胎土は橙褐色を呈し、硬質であるが、やや粗い。内外面ともに意図的に渦巻き状の凹凸を作出し、円錐状の摘みを付している。130は行平鍋の蓋（TZ-42-c）である。胎土は淡褐色を呈し、緻密かつ硬質である。表面は無釉で非常に密な飛びカンナ痕を巡らせ、中央に逆円錐台形状の摘みが付けられている。文様は、白土イッチンと緑釉によって蔓草文が描かれている。内面は身との接地部を除き、透明釉が掛けられている。

#### 土器（131～156）

131～138はかわらけである。131、132、134は左回転のかわらけで、DZ-2-bに分類される。腰折れ状痕が認められる。131の口縁部には灯心痕が認められる。133は上製カワラケで、DZ-2-dに分類される。135は離し糸切りによるかわらけで、DZ-2-bに分類される。底部ほぼ中央部が穿孔されている。136は離し糸切りによるかわらけで、DZ-2-bに分類される。底部を除き、白色塗布物が認められる。137、138は油皿に使用された施釉かわらけで、DZ-2-hに分類される。口縁部には灯心痕が認められる。139は軟質瓦質植木鉢で、DZ-21-bに分類される。底部には左回転の糸切り痕が認められ、中央部には直径約15mmを測る不整円形の焼成前穿孔が認められる。140は硬質瓦質筒形火鉢で、DZ-31-jに分類される。口縁部下に1条の沈線を巡らせ、その沈線から底部にかけて線状の押形文が全面に施文されている。また口唇部から底部にかけて丁寧に磨かれ、光沢を有している。141は土師質涼炉と考えられる製品の内部パーツ下半部で、DZ-49に分類される。残存部での形態は撥形を呈する。高台は蛇ノ目状を呈し、外側には幅約4cmを測る抉りが認められ、その配置から3箇所存在していたことが窺える。体部の括れ部を上端位置としたハート形を呈する窓が1箇所設置されている。内面にはロクロ目を残すが、表面は非常に丁寧な磨きが施され、平滑に仕上げられている。胎土は硬質で、橙褐色を呈す。142は土師質施釉油受け皿で、DZ-40-bに分類される。内側から切り欠いた半円形の開口部を有する受けは、口縁部とほぼ同じ高さで揃えられ、その先端部は釉剥ぎされている。143は施釉土師質ひょうそくで、DZ-44-bに分類される。灯心支えの円柱状突起は緩やかな撥形を呈し、三角形の切り欠き窓を有する。先端部には灯心痕が認められる。144は硬質瓦質筒形涼炉で、DZ-49に分類される。外面は丁寧に磨かれ、光沢を發している。底部には高台が貼り付けられるが、4箇所のアーチ状を呈する切り欠きが施された結果、5足の脚状を呈している。欠損部位が多いため、詳細は不明だが、体下半部には扇形の窓が開けられている。口縁部内側には煮沸具を支えるための凸帯と推定される付帯パーツ貼り合わせのため、長さ約4cm、幅約2mmを測る沈線状の彫り込みが巡る。145は七輪の風口で、DZ-48-aに分類される。板作り成形による。使用のため内面が白色化している。146は七輪の目皿で、DZ-48-aに分類される。器形は皿状を呈し、直径12mmの孔が梅鉢状に6箇所穿たれている。色調は淡褐色を呈している。147～149はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。色調は橙褐色を呈し、底部には左回転の糸切り痕が認められる。150～152はロクロ成形の塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。150、151は淡褐色を呈し、150には白色微粒が含まれている。152は橙褐色を呈し、金雲母を含む。断面形は逆台形を呈し、上面には指頭圧痕が認められるなど、緩やかな起伏がある。下面外端には断面半円形状の低い凸帯が巡る。153、154は火消壺の蓋である。胎土は橙褐色を呈する。摘みは欠損している。内面から外側面にか

けて丁寧に成形されている。内面にはスス状付着物が認められる。

#### 人形・玩具 (155)

155 はミニチュアの塔で、DQ\_3002\_M2 に分類される。貼り合わせは対角線状で行っている。全体に胡粉（白色）が観察される。156 は鯉で、DD\_1220\_M2e に分類される。胡粉が観察され、裏面は指頭押圧痕が顕著である。

#### SK1114・SK1115-1 (IV-418～420 図)

遺構半截中に出土し、分別不可能な遺物を一括した。1 は染付半球碗で、JB-1-f に分類される。鶴が描かれている。2 は広東碗で、JB-1-m に分類される。胎土はやや灰色味を帯びている。見込みには三足ハマ痕が認められる。外面には楼閣山水文が描かれているが、呉須の発色はやや黒味を帯びている。3、4 は丸碗形の蓋物で、JB-13-a に分類される。3 は蛸唐草文が描かれているが、主たる蛸唐草文の中心には梅花が描かれている。4 は口唇部、壘付ともに釉際の処理が甘く、波打っている。文様は亀甲繫ぎによって3単位に区画され、各単位内に鶴が描かれている。5 は蓋物の蓋である。表面中央には板細工による撥形の橋状把手が貼り付けられている。文様は蝶、蔓が描かれている。6 は平碗の底部片で、TD-1-h に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。釉は底部以外に施され、やや青味を帯びている。高台内には「廣」と書かれた墨書が認められる。7 は筒形水注の底部片で、TD-27-d に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。高台壘付幅は約5mmを測り、外端は面取りされている。器壁は約2mmと丁寧に作られている。体部下端には把手の剥離痕が認められ、断面形は隅丸長方形を呈していたことが確認される。体部には銹絵で菊花文が描かれている。高台内には墨書が認められるが、記載内容は不明である。8 は柿釉壺で、TC-15-b に分類される。胎土は黄白色を呈し、やや硬質である。体部上半にはらせん状の沈線が数条巡っている。内底部には不整楕円形を呈する目痕が4箇所認められる。釉は底部を除き、柿釉が施され、体部上半には3箇所鉄釉が流し掛けされている。底部には墨書が認められる。9～17 は灰釉二合半徳利である。9～16 はつけ掛けによって施釉されTC-10-cに、17 は底部釉拭き取りによって施釉されTC-10-aに分類される。釉の色調は素地の色調を反映し、9、11、13、16、17 が灰褐色を呈し、10、12、14、15 が黄白色を呈している。また素地には白色粒子が多量に含まれている点で共通する。11、15、17 の体部には窯詰め時の熔着痕が認められ、11、15、17 には底部に本製品口径サイズの円形熔着痕が、13 には口唇と底部両方に認められる。いずれの製品にも列点状の釘書きが認められ、9～12 は「久〇」、13 は「門」、14 は「久叶」、15 は「玉川」、16 は「八川」、17 は「八若」と書かれている。18、19 は五合徳利で、TC-10-d に分類される。18 は胎土、釉調ともに灰褐色を呈し、胎土には白色粒子が多量に含まれている。底部の釉は拭き取られている。体部には列点状の釘書きが認められ、「カメ」と書かれている。19 は胎土、釉調ともに黄白色を呈し、底部の釉は拭き取られている。体部には列点状の釘書きが認められ、「八九？」と書かれている。20 は灰釉土瓶で、TZ-34-g に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密かつ硬質である。注口はいわゆる鉄砲口で、茶漉し穴はなく、注口内径と等しい直径12mmを測る孔が穿たれている。釉は焼成不良のため白濁している。底部はススが付着している。21 は灰釉土瓶の蓋である。20 の蓋と考えられる。胎土は黄白色を呈し、緻密かつ硬質である。上面中央には扁平球状の摘みが付けられている。釉は表面に施され、身同様白濁している。22 は青土瓶で、TZ-34-a に分類される。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。注口はいわゆる鉄砲口で、茶漉し穴は直径8mmを測る孔が上下2箇所穿たれている。底部脇には乳房状の脚が3箇所貼り付けられているが、接地していない。体部中位から口唇外側にかけて青緑釉が施されている。底部にはススが付着している。23 は汁次 (TC-27-b) の蓋である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。

中央には表面を花卉状に型押しした釦状の摘みが貼り付けられている。表面には柿釉が施されている。**24**は青土瓶の蓋である。胎土は灰白色を呈し、緻密かつ硬質である。中央には表面を花卉状に型押しした釦状の摘みが貼り付けられている。表面には青緑釉が施されている。**25**は鍋で、TZ-33-aに分類される。胎土は淡黄白色を呈し、硬質である。体部は半球状を呈し、口縁はクランク状に立ち上がる。口唇部には粘土紐の貼り付けによる山状の吊り手が一對貼り付けられている。底部脇には乳房状の脚が貼り付けられているが、いずれも接地していない。内底部には目痕が3箇所認められる。底部を除き、柿釉が施され、無釉部全面にススが付着している。**26**は硬質瓦質丸火鉢で、DZ-31-dに分類される。体部表面の色調は暗茶褐色を呈する。底部には円錐台形状の脚が貼り付けられている。体部上半には沈線が巡り、下半にはキャタピラー痕状の押形文が巡る。口縁と2～3本目の沈線間は非常に丁寧に磨かれ、漆黒の光沢を帯びている。内面上部全体にススの付着が認められ、口唇部には著しい敲打痕が認められる。**27**は左回転のかわらけで、DZ-2-bに分類される。底体間には腰折れ状痕が認められる。**28**は有脚施釉油受け皿で、DZ-40-aに分類される。胎土は橙褐色を呈し、比較的硬質である。内側から切り欠いた半円形の開口部を有する受けは、口縁部とほぼ同じ高さで揃えられている。底部は円錐状にくり抜かれ、無釉である。**29**はロクロ成形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。胎土の色調は淡橙褐色を呈し、暗赤褐色粒子を含む。左回転のロクロ成形によって成形され、口縁部は外側にやや突出する。**30**は塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母を少量含む。上面には指頭圧痕が認められ、型押し成形されたことが窺われる。

**31・32**は碁石状製品で、DQ\_4004\_Hに分類される。掌握痕が顕著である。**31**は白色の彩色痕が観察される。

#### SK1115-2 (IV-420 図)

**1～6**は掘方出土の遺物である。**1**は一升徳利で、TC-10-eに分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色粒子を多量に含む。釉は緑味を帯びた灰釉で、底部は拭き取られている。体部はほぼ寸胴で、頸部には数条の沈線が巡っている。体部には破線状の釘書きによって「久〇」と書かれている。**2**は壺の蓋(TC-15)である。胎土は黄白色を呈し、釉は緑味を帯びた灰釉が施されているが、焼成不良のため、やや白濁している。表面中央には粘土紐による橋状把手が貼り付けられている。**3**は鉢形の塩壺で、DZ-51-zに分類される。胎土は淡橙褐色を呈する。表面は丁寧に磨かれている。内底部から口縁にかけてタール状付着物が認められ、灯火具として再利用された可能性がある。**4**は塩壺の蓋で、DZ-00-dに分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、金雲母を含む。上面には指頭圧痕が認められる。

**5**はミニチュアの染付碗で、JB\_2001\_Wに分類される。畳付は釉剥ぎで、高台内に染付で「金？」銘を描いている。**6**はミニチュアの釜形土製品で、DQ\_2011\_Wに分類される。

#### SL1124 (IV-420 図)

**1**は腰鏝碗で、TC-1-uに分類される。便槽の坑底より出土した。胎土は黄白色を呈し、やや粗さがある。体部にはらせん状を呈す数条の沈線が巡り、沈線の上から見込みに掛けて灰釉、沈線から底部にかけて鉄釉を掛け分け、畳付の釉を拭き取っている。見込みには漆皮膜が付着しており、漆容器として再利用されたことが窺われる。

#### SU1125 (IV-421 図)

**1**は鍋島色絵皿で、JB-2-nに分類される。7寸皿と推定されるが、小片が十数点出土しているにすぎず、全体像を復元することはできない。見込み文様は、器面全体に薄ダミを施し、墨弾きによって流水文、楓文を描いている。楓の葉は白、赤、緑、黄で構成され、白い葉は、墨弾きの葉形に黒絵の具で葉脈を描いている。赤い葉は、輪郭、葉脈を赤絵の具で線書きし、全体を薄い赤絵の具で塗りつ



ぶしている。緑の葉は、全体を緑絵の具で塗りつぶしているが、二次被熱の影響で詳細は不明である。黄色の葉は、葉脈を呉須で描き、黄色絵の具で塗りつぶしている。裏文様は、染付唐花文皿（(財)今右衛門古陶磁美術館所蔵）など鍋島最盛期の製品と位置づけられる一群と同類の折り枝木蓮文が描かれている。高台には、丁寧に縁取られた櫛歯文と、その上下に圏線が巡らされている。高台高は18mm、櫛歯長は8mmを測る。また、器面には被熱による変質が認められる破片もあることから、火災を原因とする破損によって廃棄されたと考えられる。本資料は、A面上に構築された18世紀代を下限とする複数の遺構から出土している（SD259、SU446-b層、HWK2・SK33）。さらに、本地点以外にも、第2中央診療棟地点など広範囲に渡って分布しており、造成関連の土砂移動による一次的もしくは二次的廃棄の結果と推定される。しかし、分布範囲がいずれも大聖寺藩邸であることから、大聖寺藩邸内で所持されていたと考えられる。一方、廃棄年代は先述したように、一部の破片に被熱痕跡が認められること、最も古い供伴遺物事例が18世紀第1四半期に比定されることから、享保15年、もしくは元文3年の火災に伴う廃棄と考えられる。2は糸切り細工の貼り付け高台による白磁形皿で、JB-2-rに分類される。体部は型打ち成形によって葉を象っており、見込みには陽刻によって葉脈が表出されている。底部無釉。3は染付鉢で、JB-5-bに分類される。胎土はやや灰色味を帯びている。器壁は底部で12mmと厚い。外面には八つ橋が、見込みには二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。高台内にはやや崩れた「大明年製」銘が書かれている。4は刷毛目丸碗で、TB-1-dに分類される。胎土は淡褐色を呈し、緻密かつ硬質である。内外面、底部ともに渦巻き状の刷毛目を施している。5はせんじ碗で、TD-1-iに分類される。胎土は淡褐色を呈し、緻密かつ硬質であるが、やや微粒子を含む。全体的に丁寧に整形され、畳付外側は面取りされている。見込みには直径3mmを測る目痕が認められる。外面には銕絵文様が描かれている。また高台内には墨書が認められる。6は丸碗形の灰釉片口で、TC-23-bに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質であるがややザラザラしている。底部を除き、やや緑味を帯びた灰釉が掛けられている。見込みには目痕が認められる。被熱している。7は五合徳利で、TC-10-dに分類される。胎土は黄白色を呈し、やや硬質である。肩部はやや稜を有し、数条の沈線が巡っている。外面全面に灰釉が施釉され、底部は拭き取られている。色調は黄緑色を呈する。体部には実線による釘書きによって「久〇」と書かれている。8は二合半徳利で、TC-10-aに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。器形は雨滴形の形状を残してはいるが、最大径は体中位に移行している。外面には灰釉が施釉され、底部は拭き取られている。体部には実線による釘書きで「△内に〇」が書かれている。被熱している。9は播鉢で、TL-29に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質である。白色粒子を含む。底部には高台を有し、口縁部には2条の沈線が巡る縁帯を有す。10条1単位の播目が口縁から見込みに向けて施され、上端は横ナデによって擦り消し、揃えられている。下端は底体間の屈曲部より2～3cm底部寄りに引かれている。見込みの播目は放射状を呈す。高台内と見込みには焼台の痕跡が認められる。10は水注の蓋である。胎土は淡褐色を呈し、やや硬質である。表面には粘土紐の貼り付けによる橋状摘みが貼り付けられている。表面に鉄釉が施されている。11は鉢形塩壺の蓋で、DZ-00-eに分類される。胎土は淡褐色を呈する。表面には内側二段角の二重角枠内に陽刻による「イツミ / 花焼塩 / ツタ」の刻印が認められる。

SK1131 (IV-422～425 図)

本遺構は、肥前磁器ではJB-1-j (2)、JB-1-l (3、4) を含み、JB-1-r (5) が高台脇に一段を有する初現的様相を呈していること、TF-10 (23、24) が寸胴形で、重ね焼きによって生産された製品であること、DZ-51-w の蓋受けが明確であることなどから、東大編年VI a 期に比定される資料である。

1～11は磁器である。1～5は碗である。1は丸碗で、JB-1-eに分類される。外面には花唐草文、

口縁部内側には袈裟襷文、見込みには二重圏線内に手書き五弁花文が描かれている。高台内には二重角枠の「渦福」銘が書かれている。2は小丸碗で、JB-1-jに分類される。外面文様は幅広の区画線が1本引かれ、その上下に笹文が描かれている。口縁部内側には袈裟襷文が、見込みには二重圏線内に線書きのみの手書き五弁花文が描かれている。3、4は筒形碗で、JB-1-lに分類される。3は焼成不良のため、釉がやや白濁している。文様は、外面に花唐草文、高台脇に折れ松葉文、口縁部内側に袈裟襷文、見込みには一重圏線内にコンニャク印判による五弁花文を描いている。漆継ぎによる補修痕が認められる。4は外面に蛸唐草文、高台脇に鋸歯状文、口縁部内側には袈裟襷文、見込みには二重圏線内に環状松竹梅文を描いている。漆継ぎによる補修痕が認められる。5は朝顔形を呈する碗で、JB-1-rに分類される。高台脇には二段の稜を有してハの字状に開く。体部には花文が、口縁部内側には袈裟襷文が、見込みには二重圏線内に線書きによる簡略化された五弁花文が描かれている。漆継ぎによる補修痕が認められる。6は染付四寸皿で、JB-2-fに分類される。口縁部は8単位の輪花を形成する。釉は塗りむらが認められ、見込みには釉飛びが、高台内には凹凸が認められる。文様は、見込み側面には花唐草文が描かれているが、花の部分はコンニャク印判で描かれている。見込み中央の五弁花文もコンニャク印判である。裏文様は、太線による唐草文が描かれている。高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。7は見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径の小さい皿で、JB-2-lに分類される。全体的に厚手に作られており、釉むらが認められる。蛇ノ目釉剥ぎ部には重ね焼き時の砂が熔着し、畳付にも多量の砂が熔着している。文様は見込み蛇ノ目釉剥ぎ外側に二重斜格子文が描かれている。8は丸碗形の鉢で、JB-5-bに分類される。文様は外面に鷲、四阿、松を描き、口縁部内側に丸文を並べダミで塗りつぶした帯文を、見込みには二重圏線内に環状松竹梅文を描いている。呉須の発色は群青色を呈している。9、10は半球形の小坏で、JB-6-fに分類される。9、10ともに施釉部分ほぼ全面に細かい貫入が認められる。11は碗（JB-1-q）の蓋である。1の蓋と考えられる。表面には花唐草文、内面端部には袈裟襷文による帯文が巡り、中央には二重圏線内に手書き五弁花文が描かれている。摘み内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。

12～28は陶器である。12は灰釉丸碗で、TC-1-cに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。白色粒子を含む。釉は底部を除き、やや緑がかった灰釉が掛けられている。見込みから底体間にほぼ環状方向の集合擦痕が認められる。13、14は、腰が張り体部に2条の沈線が巡り、鉄釉が流し掛けされる碗で、TC-1-fに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。13は腰の張りがやや弱く、高台内の渦巻き整形もやや不明瞭である。14の高台内渦巻きは顕著で、中央部は畳付近くまで突出している。ともに見込みから底体間にほぼ環状方向の集合擦痕が認められる。15は半球形の灰釉碗で、TD-1-bに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側は面取りされている。釉は底部を除き灰釉が施され、全体に微細な貫入が認められる。16は灰釉銹絵碗で、TD-1-nに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。高台はハの字状に開き、畳付外側は面取りされている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、上半付近から内傾し、口縁は外湾する。体部には銹絵文様が描かれている。17はいわゆる石皿で、TC-2-fに分類される。胎土は黄白色を呈し、砂粒を少量含む。高台は蛇ノ目状に幅広く、口縁は鏝状に水平に開く。見込みには目痕が5箇所認められる。文様は茎と葉を呉須で、花を鉄絵で描いている。18は鉄釉皿で、TC-2に分類される。胎土はやや灰色掛かった褐色を呈し、硬質である。高台断面は逆台形を呈し、高台内の削りがやや浅い。体部は緩やかに内湾しながら開き、口縁部はひだ状に成形されている。見込み中央には菊花文が陰刻されている。釉は全面に柿釉が薄く掛けられ、高台内を蛇ノ目状に拭き取っている。また口縁部から体中位にかけて黄釉が流し掛けされる。19は油皿で、TC-2-oに分類される。胎土はやや茶色味

を帯びた暗灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。柿釉が全面に掛けられ、体下半部から底部にかけて拭き取られている。見込みには直径約4cmの環状熔着痕が、底部には底径とほぼ同じ直径約5cmの環状熔着痕が認められる。20は筒形の香炉・火入れで、TF-9に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質かつ緻密である。釉は外体部に鉄釉が掛けられている。口縁部には敲打痕が認められるが、特に内面が顕著である。21は灰釉五合徳利で、TC-10-dに分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、白色粒子を含み、硬質かつ緻密である。釉は全面に黄緑味を帯びた灰釉が掛けられ、体下半から底部にかけて拭き取られている。体中央部に線状の釘書きが認められるが、欠損のため詳細は不明である。22は灰釉一升徳利で、TC-10-eに分類される。口縁部を欠損する。胎土は黄白色を呈し、硬質である。肩部には3～4条の集合沈線が巡る。釉はやや緑掛かった灰釉が掛けられ、体下半から底部にかけて拭き取られている。体下半部には熔着痕が認められる。頸部割れ口内面には剥離痕が全面に認められ、ほぼ水平に二次加工されている。23、24はいわゆる由右衛門徳利で、TF-10に分類される。胎土は茶褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質かつ緻密である。23は口縁部、底部を欠損する。胴部やや上方に凹みが1箇所認められる。頸部には鉄釉が施されている。肩部には焼成時の環状熔着痕が認められる。24は口縁部、底部を欠損する。頸部には鉄釉が、胴部には鉄泥が掛けられている。胴部に墨書が認められるが、詳細は不明である。25はいわゆる半胴甕で、TC-15-aに分類される。胎土は若干橙色味を帯びた淡褐色を呈し、黒色粒子、白色粒子を含む。釉は底部を除き、柿釉が施されている。底部中央には底部からの敲打による直径約2cmを測る円形の二次穿孔が認められ、植木鉢として利用されていたことが窺われる。26は花生で、TC-22-bに分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体下半部を鉄釉、上半部を灰釉で掛け分け、灰釉には貫入が認められる。27は片口鉢で、TC-23-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。見込みには半月形の目痕が3箇所認められる。底部を除き、灰釉が掛けられている。28は蓋物(TF-13)の蓋である。胎土は暗灰褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質かつ緻密である。表面平坦部端部に1条の沈線が巡る。釉は表面に鉄釉が掛けられている。

29～46は土器である。29～38はかわらけである。29～32、37は、DZ-2-aに、33はDZ-2-bに分類される。29～37は左回転のロクロ水引き成形による製品である。そのうち29、31、37は離し糸切りである。29、32の口縁部には灯心痕が認められる。34～36の外面には墨書で「小」と書かれており、35、36の見込みにも判読不明であるが、墨書が認められる。38は施釉かわらけで、DZ-2-hに分類される。右回転のロクロ水引き成形によって成形されている。器面全面に透明釉が掛けられている。口縁部には灯心痕が認められる。39は硬質瓦質丸火鉢で、DZ-31-dに分類される。底部に貼り付けられた円錐台形状の脚先端には顕著な摩耗痕が認められる。体部は丁寧な磨かれ、光沢を放っている。口縁部下と体部中央に沈線が巡り、それに囲まれ花文様の陰刻が巡っている。体部下半には縦方向の列点文が15～20mm間隔で、3段巡っているが、上段は7単位、中段は9単位、下段は10単位の列点で構成されている。口唇部には敲打痕が認められる。内面は口縁部下約4cmが被熱によって橙褐色に変色している。40は土師質丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。底部全面にチヂレ目が認められ、円錐台形状の脚先端は摩耗している。口唇部外側には敲打痕が認められ、内面口縁部下2.5cmまでスス痕が認められる。また外面にはタール状物質の付着物が認められる。41は土師質ひょうそくで、DZ-44-cに分類される。左回転のロクロ水引き成形によって成形され、体部はハの字状に立ち上がる。見込み中央の灯心支え上半全面に灯心痕が認められる。42は板作り成形による塩壺で、DZ-51-gに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を少量含む。底部は内側からはめられ、内体部上半には布目痕が認められる。外体部には一重角椀の「泉湊伊織」銘の刻印が押されてい



る。43はロクロ成形による塩壺で、DZ-51-wに分類される。胎土は橙褐色を呈する。口唇部内側に凸帯が巡る。44～46は板作り成形の塩壺の蓋で、DZ-00-cに分類される。45、46の内面には布目圧痕が認められる。

SD1134 (IV-425 図)

1は青磁皿で、JB-2-fに分類される。口縁部を欠損する。体部側面残存部には縦方向の稜線が認められることから、輪花を形成していることが窺える。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。青磁釉の色調は、水色を呈している。2は鍋島様式の色絵菊唐草文小鉢で、JB-5-gに分類される。高台脇に稜を有し体部は逆ハの字状に直線的に開く。体部には蔓と葉、花卉の輪郭を染付で描き、赤、黄、緑絵の具で花卉、葉を塗りつぶしている。器面、上絵の具の爛れた状況より火災によって被熱、破損したことが窺われる。同一器形、意匠の伝世品が、佐賀県立九州陶磁文化館所蔵品に認められる。(佐賀県立九州陶磁文化館 2006 作品 132)。また、高台部の形状は異なるが、同一意匠の色絵素地が鍋島藩窯から出土している(鍋島藩窯研究会 2002 Fig.82 538)。本資料は、本遺構の他、SU446、SK1112、SK1253からも出土している。いずれも元禄16年の火災後の整地面(A面)に構築された遺構で、遺構間最大距離は約50mに及ぶ。各々の遺構から出土した共伴資料の年代観は、18世紀前葉、18世紀中葉、18世紀末から19世紀初頭と幅広く、2次的廃棄の可能性が極めて高い出土状況を示している。その中で最も古い共伴資料を持つ遺構一括資料から、本来は18世紀前葉に廃棄されたことが想定される。そして本資料が被災していることから、元禄16年の火災以後に本郷邸を襲った享保15(1730)年、もしくは元文3(1738)年の火災の可能性が考えられる。3は左回転ロクロ水引き成形によるかわらけで、DZ-2-bに分類される。内外面の一部に砥の粉状の白色付着物が認められる。また口唇部に灯心痕が認められる。

SU1137 (IV-425・426 図)

1、2は薄手半球碗で、JB-1-fに分類される。1の文様は、高台脇に雪輪を巡らし、その上に2種類の花文様を対に描いている。2の文様は、梅、竹が描かれている。3は丸碗で、JB-1-uに分類される。文様は、コンニャク印判で松を、筆で山を描いている。高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。また見込みには白色物質が付着している。4は丸碗で、JB-1-eに分類される。外面を青磁釉、内面を透明釉で掛け分けている。口唇部には口錆が施されている。見込みには二重圏線内にコンニャク印判による五弁花文が描かれている。5は丸皿で、JB-2-gに分類される。胎土は灰白色を呈する。高台断面は逆台形に近いU字形を呈し、畳付には砂が熔着している。見込み文様は二重圏線によって区画され、中央にコンニャク印判による五弁花文、周囲には割菊、斜格子文が交互に配されている。裏文様には簡略化されたハート形唐草文が描かれている。高台内には一重圏線内に「大明年製」と推定されるかなり崩れた銘が書かれている。6は丸碗形の小坏で、JB-6-aに分類される。高台は蛇ノ目高台を呈す。外面下半に菊花、上半に四方嚢が描かれている。口唇部は釉が拭き取られたようにわずかに露胎していることから、蓋物のミニチュアの可能性もある。7は半球形の小坏で、JB-6-fに分類される。施釉部全面に細かい貫入が認められる。8は白磁小杯で、JB-6に分類される。口径に対し、器高は約1/3と低く、皿状を呈している。施釉部ほぼ全面に貫入が認められる。9は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。表面の透明釉はやや青味を帯びた発色をしている。文様は幾何学文、草花文を描いた丸文を配している。10はいわゆる御室碗で、TC-1-dに分類される。胎土は黄白色を呈する。釉は底部を除き施され、全面に細かい貫入が認められる。体部には呉須によって文様が描かれている。11は灰釉輪髡皿で、TC-2-mに分類される。胎土は黄白色を呈する。高台断面は三角形を呈し、外側脇に一段稜を有する。見込み輪髡部は内側がわずかに隆起している。釉は底部と輪髡部を除き、や

や白濁した灰釉が施されている。また輪剥部外側に重ね焼きによる環状熔着痕が認められる。12は輪高台形皿で、TC-2-iに分類される。胎土は黄白色を呈し、やや軟質である。体部は型打ち成形によって、木瓜形を呈している。高台内に墨書が書かれている。13は五合徳利で、TC-10-dに分類される。体部は雨滴形を呈するが、やや肩部が張り出している。肩部には数条の沈線が巡る。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁は鉤形に外反する。体部には飴釉が施され、底部は拭き取られている。その上に口縁部下から肩部に掛けてうのふ釉が流し掛けされている。体部には約3mm幅の沈線による、「ㄣ三」の釘書きが認められる。14は丸碗形の片口鉢で、TC-23-bに分類される。胎土は灰白色を呈する。見込みには4箇所目痕が認められる。釉は底部を除き、灰釉が施され、体中位には横方向に鉄釉によるアクセントが付けられている。15は左回転ロクロ水引き成形によるかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部に灯心痕が認められる。16は土師質角火鉢で、DZ-31-eに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒子を少量含む。底部はチヂレ目が顕著で、円錐台形状の脚が4箇所貼り付けられている。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は鉤状に内側へ屈曲する。口縁部上面平坦部は丁寧に磨かれている。口縁部内側突端部には敲打痕、ススの付着が認められる。17は土師質無釉油受け皿で、DZ-40-dに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒子を少量含む。全面に銀彩が施されている。18は板作り成形による塩壺で、DZ-51に分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母微粒子を少量含む。底部は外側からはめ込まれている。内面には布圧痕が顕著に認められる。また外体部には製作時の指頭圧痕が観察される。

#### SK1140 (IV-427・428 図)

大半の遺物に被熱痕跡が認められ、13の形態、16の存在などから、享保15(1730)年、もしくは元文3(1738)年の火災による廃棄資料と考えられる。

1は半球碗で、JB-1-fに分類される。外面には草花文が描かれている。顕著な被熱痕は認められないが、破損状態から火災によるものと推定される。2は丸碗形の小坏で、JB-6-aに分類される。外面には草花文が描かれている。顕著な被熱痕は認められないが、破損状態から火災によるものと推定される。3は青磁筒形香炉・火入れで、JB-9-cに分類される。畳付幅は約6mmを測り、両端が面取りされている。また露胎部には鉄泥が掛けられている。高台脇には3条の縦方向の沈線を有す脚が3箇所貼り付けられている。体部はわずかに開きながら直線状に立ち上がり、口縁部でL字状に内側へ屈曲する。釉は内面と畳付を除き施され、色調は水色を呈す。見込みには直径5.5cmを測る環状熔着痕が認められる。被熱している。4は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。釉は気泡を含み、宝珠文を描いた染付文様もにじんでいる。顕著な被熱痕は認められないが、破損状態から火災によるものと推定される。5は筒形の蓋物で、JB-13-bに分類される。体部約1/2のみ残存する。呉須の色調は鮮やかな藍色を呈しているが、全体的ににじんでいる。顕著な被熱痕は認められないが、破損状態から火災によるものと推定される。6は丸碗形の蓋物で、JB-13-aに分類される。文様は2単位の窓絵を配し、草花文で埋めている。底裏銘は二重角枠内に「渦福」が書かれている。被熱している。7は6の蓋である。欠損してはいるが、表面中央部には橋状形の摘みを有している。被熱している。8は筒形の蓋物で、JB-13-bに分類される。器面にはススが付着しており、被熱時の影響と推定される。9は8の蓋である。断面形はドーム状を呈し、端部が水平に張り出す。中央には円柱形の摘みを有している。8同様、器面にはススが付着しており、被熱時の影響と推定される。10は白磁の壺で、JB-15に分類される。畳付と口唇部を除き、施釉されている。器面にはススが付着しており、被熱時の影響と推定される。11、12は蓋物の蓋である。欠損してはいるが、ともに表面中央部には橋状形の摘みを有している。顕著な被熱痕は認められないが、破損状態から火災によるものと推定される。

13は五合徳利で、TC-10-dに分類される。口縁部欠損。胎土は黄白色を呈す。体部形態は寸胴形に近づいているが、頸部はまだなで肩を呈している。外面全体に灰釉を施釉し、底部を拭き取っている。また頸部にはうのふ釉が流し掛けされる。体部には沈線による「二」の釘書きが認められる。被熱している。14は鉄釉瓶で、TB-10に分類される。胎土は暗褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台断面は長方形を呈し、やや外傾する。体部はほぼ球形に近く、口縁部はラッパ状に開く。ロクロ水引き成形は右回転、底部ケズリは左回転である。外面全体と畳付を除く底部に鉄釉が施釉されているが、体上半と下半は掛け分けられ、体下半は拭き取られ釉厚は薄い。また口縁部から肩部に掛けて、藁灰釉が流し掛けされている。15は鬢水入れで、TC-25に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。体部に型紙摺りによる鉄絵文様が描かれている。被熱している。16は蓋物（TD-13-d）の蓋である。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。表面には放射状と同心円状の沈線による格子状のしのぎが施され、白泥と鉄絵によって梅文が描かれている。中央には蔓状の摘みが貼り付けられている。被熱している。17はいわゆる腰白茶壺で、TD-15-aに分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。頸部には粘土紐の貼り付けによる橋状把手が4箇所付けられている。釉は口縁部内側から体下半にかけて鉄釉が、体下半から底部にかけて灰釉が掛けられている。被熱の痕跡は認められないが、内外面にススの付着が認められる。

SL1143（IV-429 図）

1は便槽として利用された大甕で、TG-15に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質である。体下半部には重ね焼き時の陶片が熔着し、斜方向の環状熔着痕が認められる。この環状熔着痕を境に上部は光沢を有し、下部は光沢がない。内面には輪積み痕と指頭圧痕が認められる。

SK1151（IV-428、429 図）

1～7は磁器で、1～3、7は瀬戸・美濃系、4～6は肥前系である。1～3は端反形碗でJC-1-dで、染付された呉須には細かな気泡が多く確認される。1は高台内に角枠銘が書かれている。2は比較的大振りで、器厚も薄い。3は腰が張り、器高が低い。4、5は染付皿で、4はいわゆる鍋島でJB-2-n、5は蛇ノ目凹形高台の高台高が低い皿でJB-2-jに分類される。4はやや小さめの五寸皿である。内面の絵付は呉須により縁取りされ、塗り埋められるなど丁寧に描かれているが、裏文様の四つ玉からなる七宝結び文の紐部分は線描きのみで、櫛高台といわれる高台部分の染付も線描きのみで表現されるなど簡略化が進んでいる。なお本製品と同一と思われる皿が、錦糸町駅北口遺跡第51号遺構から出土している（墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団1996）。5の口縁部は小さく外反し、玉縁状を呈す。器面は灰色味を帯び、呉須は滲む。高台内中央の一段低い部分の周囲に、円形に白色の耐火粘土のような付着物が認められる。6は器厚がごく薄い坏でJB-6-c。底部内面には色絵が施されるが、葉と茎は黒で縁取りされ、花は赤で縁取りされ塗り埋められる。7は端反形碗の蓋である。摘み部分の端部がわずかに膨らむ。

8～13は陶器である。8、9は京都・信楽系の碗で、8はいわゆる小杉茶碗でTD-1-d、9は灰釉平碗でTD-1-hに分類される。8の灰釉はガラス質で、器面には細かな貫入が目立つ。高台脇が小さく面取りされる。9も高台脇が小さく面取りされ、高台内には墨書が書かれている。10～13は蓋で、10、12は瀬戸・美濃系、11、13は産地不明である。10は灰釉が施釉された落とし蓋である。蓋裏は無釉であるが、受け部の屈曲する部分には帯状に白泥が塗布されている。蓋物か土瓶の蓋か。11は産地不明の鉄釉土瓶の蓋である。裏側中央付近がやや大きく円形に削り込まれている。なお実測図にも示したが、表側の最も突出した部分は釉が剥けている。表側を下にして焼成した際に釉剥げたのか。12は瀬戸・美濃系灰釉壺・甕の蓋である。橋状の摘みが貼り付けられている部分は、撫でて



一段窪ませてある。13は産地不明の灰釉土瓶の蓋である。

14～17は土器である。14は透明釉が施釉されたかわらけでDZ-2-h。器面は剥離し、透明釉は部分的に残るのみである。口縁部には灯心痕が認められる。15はロクロ成形、筒形、無印の塩壺でDZ-51-w。口唇部は内傾している。底部には左回転の糸切り痕がみられる。16は京都・信楽系の土師質の涼炉でDD-49。胎土は白色を呈し、砂をやや多く含む。胴部は二重構造になっており、内外ともにロクロ成形されたものが貼付られている。胴部外面は左上から右下に斜め方向で、多角形の面取りが全体に施され、1箇所が円形窓状に削りとられている。頸部には丸ノミ状のもので縦しのごが入れられる。口縁部内側には歪な四角錐の突起が2個残る。底部はケズリ調整されるが、外周3箇所が琴柱状にケズリ調整され、足にされる。内側円筒部はロクロ成形後、ナデ調整され、外面の円形窓の裏側の位置に大きめな方形窓が1箇所、それと相対する位置に小さな方形窓が1箇所開けられている。また円筒形から外側へ開く部分境付近内面に、円形に細い溝状のケズリが施され、その上には直径1.5cmほどの円孔が少なくとも4箇所残るが、欠損部分も同間隔で円孔があったとすれば、実測図のように6個の円孔を有すものであったか。なお外面の円形窓の右下には小判形の「あわた」の刻印がある。また左上には「聴泉」刻印がある。この2つの刻印は一緒に確認される傾向があるとされる(両角2005)「松湯聴泉」か。17は断面形が長方形を呈す、無印の塩壺蓋でDZ-00-d。下面には指頭圧痕が顕著である。

#### SE1155 (IV-429 図)

1は円盤状製品で、JB\_4008\_Aに分類される。染付皿の転用品である。

#### SK1159 (IV-429・430 図)

1は半球碗で、JB-1-fに分類される。高台高は2.5mmを測り、しっかりと作られている。体部文様は丸に四割り菱を三方に配している。2は染付五寸皿で、JB-2-fに分類される。口縁部はやや外反し、8単位の輪花を形成している。見込み文様は二重圏線による区画を設けているが、その両側に花唐草文を描いている。裏文様は線書きによる如意頭形唐草文が描かれている。底裏銘は一重圏線内に「□□年製」銘が書かれている。3は染付四寸皿で、JB-2-eに分類される。焼成不良のため、釉に斑点状の白濁が認められる。高台内中央にハリ支え痕が1箇所認められる。文様は、見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が、周囲には墨弾きによる捻子花文が描かれている。裏文様は圏線唐草文が描かれている。4、5は半球形の小坏で、JB-6-fに分類される。4の体部には花、蝶が描かれている。5は白磁である。6はいわゆる腰鏝碗で、TC-1-uに分類される。体上半から見込みにかけて灰釉を、体下半から底部にかけて鉄釉を施し、豊付を拭き取っている。掛け分け部には数条の沈線が巡っているが、不明瞭である。7は平碗で、TD-1-hに分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台は内側が外傾し、豊付外側は面取りされている。高台内中央には円圏状のケズリが認められる。見込みには橘が上絵付けされているが、上絵の具の剥落が著しく、一部に金彩が残るのみである。8は輪剥皿で、TB-2-aに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台脇にはケズリ整形時のカンナ目が認められる。釉は外体部に透明釉を施し、見込みは青緑釉と鉄釉で掛け分けられている。9は丸碗形の片口鉢で、TC-23-bに分類される。注口部は欠損。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈す。釉は底部を除き、灰釉が掛けられている。見込みには目痕が2箇所認められる。10、11は壺・甕の蓋で、TC-15に分類される。表面中央に粘土紐の貼り付けによる橋状の摘みを有す。10の裏面は無釉であるが、11は鉄泥が掛けられている。12は底部に渦巻き状沈線が施された上製かわらけで、DZ-2-cに分類される。底部の渦巻き状沈線は3条1単位である。13、14は左回転ロクロ水引き成形によるかわらけで、DZ-2-bに分類される。口唇部に灯心痕が認められる。15は板作り成形による

塩壺で、DZ-51-i に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色粒子を含む。2ピース成形で底は内側からはめられている。内面には斜方向の布目痕が認められる。刻印は内側二段角二重角枠内の「泉州麻生」銘である。16は鉢形塩壺の蓋で、DZ-00-e に分類される。胎土は淡橙褐色を呈し、暗赤褐色粒子を含む。表面に内側二段角二重角枠内に「イツミ / 花焼塩 / ツタ」の刻印が認められる。また表面には放射状のスス痕が認められ、裏面にはタールが付着している。17は板作り成形の塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色、黒色、暗赤褐色微粒子を少量含む。裏面には非常にきめ細かい布目痕が認められる。18は土師質懷炉で、DZ-54 に分類される。胎土は淡褐色を呈し、金雲母、黒色、暗赤褐色微粒を微量含む。中央に刻印が認められるが、詳細は不明。

SK1160 (Ⅳ-430～439 図)

総個体数 404 点を数える遺構一括資料である。磁器には瀬戸・美濃系 (JC) のものを含む。磁器碗は端反形碗 (JB-1-n、JC-1-d) を中心に、湯呑碗 (JB-1-o、JC-1-e)、幅広高台を有す碗 (JB-1-s) などが認められるが、端反形碗には 2 のような異形字を染付されたものも含む。また磁器皿には蛇ノ目凹形高台の高台高の高いもの (JB-2-i)、磁器坏には器厚のごく薄いもの (JB-6-c、JC-6-d) が比較的多く認められる。以上のような様相から東大編年Ⅷ d 期に比定される遺構一括資料である。

磁器 (1～40、121)

1～9は碗で、1～3、8は肥前系、他は瀬戸・美濃系の染付碗である。1、2、5～9は端反形碗である。1、2、8はJB-1-n、5～7、9はJC-1-dに分類される。1は白化粧され、見込みには渦状銘が書かれている。2は焼成不良で胎土が完全に磁胎化していない。外面には異形字の文様が染付される。5の見込みには「寿」字銘が書かれている。7はいわゆる仙芝祝寿文と口鏽が施されている。8は胎土が灰色味を帯びる。9の胎土もやや灰色味を帯びるが、釉の質感はガラス質の強いものである。やや幅広の暈付を有す。残存する見込みには「年製」と書かれている。3はいわゆる湯呑碗でJB-1-o。呉須が全体に滲む。高台内の銘は「乾」の篆書体か。4はいわゆる広東碗でJC-1-c。10～17は皿・平鉢で、17が瀬戸・美濃系、他は肥前系である。10は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す染付色絵皿でJB-2-e。高台内にハリ支え痕が1箇所残る。割れ口に漆継痕跡が認められる。11は志田窯を指標とする染付皿でJB-2-p。白化粧されている。高台内にはハリ支え痕が3箇所残る。12～14は蛇ノ目凹形高台の高台高が高い染付輪花皿でJB-2-i。いずれも白化粧され、染付されている。12は口鏽が施され、高台内にはチャツ痕が認められる。13は高台内に墨書のような痕跡が2箇所あるが判然としない。なお口縁部数箇所に「U」字状に削り込んだような痕跡が認められる。14は口鏽が施され、高台内にチャツ痕と墨書がある。15は蛇ノ目凹形高台の高台高が低い染付皿でJB-2-j。体部立ち上がりは直線に近く、裏文様はかなり簡略化された本分類の後出的な特徴を示すものである。16は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた染付皿でJB-2-m。胎土は灰色を呈し、呉須も黒ずむ。蛇ノ目釉剥ぎ部分にはアルミナ砂が塗布される。17は輪高台を有す染付皿でJC-2-b。コバルトによる染付で、器面全体が青味を帯びる。見込みには「道光年□ (製か?)」、高台内には二重角枠銘と細線釘書きで「俵」と書かれている。18、19は肥前系染付鉢で、18はいわゆる八角鉢でJB-5-e、19は高台の断面形が「U」字状を呈す輪花鉢でJB-5-bに分類される。ともに白化粧が施され、染付される。18には焼継痕が認められる。なお本製品の高台は蛇ノ目凹形高台であるが、暈付にはアルミナ砂と思われる白色砂が付着している。20～25は瀬戸・美濃系坏で、20～22は丸形坏でJC-6-a、23、24は器厚のごく薄いものでJC-6-d、25は端反形坏でJC-6-bに分類される。20は外面瑠璃釉、内面に透明釉が施釉される。口縁部外側に一部熔着痕が認められる。22は暈付内側部分が一段低く削り込まれ、階段状を呈す。高台内には角枠銘が書かれている。23、24は内面に金彩を含む色絵が

施される。23の壘付脇には櫛歯文、高台内には角椀銘が染付される。なお高台内には銘を二方向から挟むように赤色の上絵？が施される。24は口唇部にも金彩が施される。25は呉須で輪郭線を描き染付される丁寧な絵付のものである。高台内には「大明成化年製」と推測される銘が書かれている。26～28は瀬戸・美濃系爛徳利でJC-4。26は赤絵、他は染付が施される。26の壘付脇は面取りされている。28も壘付脇は面取りされ、底部中央に墨書がある。29は瀬戸・美濃系御神酒徳利でJC-11-b。頸部は欠損しているが、残存する形状から鶴首を有すものと推測される。染付はコバルトによるものである。30～33はいずれも染付が施された蓋物である。30、33は瀬戸・美濃系でJC-13。33は蓋受けが内傾する段重で、見込みにも染付が施される。底部合わせ目にアルミナ砂が付着する。なお本製品は二次的な火熱を受ける。31、32は肥前系で、31は段重でJB-13-c、32は丸碗形蓋物でJB-13-aに分類される。31の底部合わせ目にはアルミナ砂が付着する。焼継痕が認められる。34～40は蓋で、38、39は瀬戸・美濃系、他は肥前系である。38が色絵、他は染付が施される。34～36は丸形碗の蓋である。37は蓋物の蓋である。38～40は端反形碗の蓋である。38の色絵は黒色で輪郭線を描き、赤、青色で塗り埋め、赤色で圏線が描かれている。40の摘み内には角椀銘が書かれている。121は瀬戸・美濃系白磁の牛形製品である。形作りで、中空。無釉の底部には穿孔が1箇所ある。水滴あるいは人形か。

#### 陶器 (41～109)

41～48、53は碗で、41、48は瀬戸・美濃系、53は萩系、他は京都・信楽系である。41は刷毛目碗でTC-1。白化粧後、透明釉が施釉されたもので、刷毛目は外面にのみ施される。42はいわゆる小杉茶碗でTD-1-d。壘付にピン痕が1箇所残る。43は灰釉端反碗でTD-1-g。44～47は平碗でTD-1-hに分類され、45には透明釉、他は灰釉が施釉される。45～47の高台内には墨書がみられるが、45、47は「式」か？48は京焼風灰釉平碗でTC-1-n。高台内まで施釉される。53はいわゆるピラ掛け碗でTH-1-b。49、50は皿である。49は京都・信楽系灰釉皿でTD-2-b。見込みにピン痕が3箇所あり、口縁部には灯心痕が認められる。50は肥前系刷毛目形皿でTB-2-g。平面形は小判形を呈す。見込み釉下には細かい布目が観察され、体部外面に熔着痕が認められる。51、52は鉢である。51はヨーロッパのプリントウェアでスープボールと推測されるものでTA8-5に分類される。底部は欠損しているが、口縁部形状は楕円形を呈し、相対する位置に2つの紐状の把手が貼付られる。52は瀬戸・美濃系刷毛目鉢でTC-5-m。口縁部は輪花にされ、その断面形は逆「く」の字状を呈す。内外面に白土による渦状刷毛目が施される。底部内面にはピン痕が5箇所みられる。55は京都・信楽系灰釉筒形香炉・火入れでTD-9-c。口縁部は内側に折り返され、わずかに肥厚。壘付には熔着痕、高台内には墨書がある。墨書は「奥」の一字以外は欠損のため不明。56は産地不明の爛徳利でTZ-4。壘付は面取りされ、体部外面には鉄絵が施される。57～85、88は瓶である。57～85は瀬戸・美濃系、88は産地不明である。57～66、68～72は灰釉が浸け掛けされ二合半徳利でTC-10-c。同じ二合半でも器高に高低があり、胴部の形状も寸胴形、寸胴より胴部中程に最大径があるもの、壘付脇が窄まるものとバリエーションがある。しかしいずれも頸部は短く、口縁部は折り返され頸部に密着するものである。57、59、61～64には胴部に熔着痕が認められる。57～66、68に点刻による釘書きがあり、57～62は「久〇」、63、64は「一」に「△」、65は「八」に「川」ともう1箇所あるが判読できない。66は欠損のため判然としない。68は「八」に「三」と「キ」の2箇所ある。墨書は62、64、66、71、72にあり、62は判然としないが、66は「いせ定」「に□」、71「ふく」「福」、72は「一」に「△」と判読できる。64は胴部に二次的な円孔が穿たれている。また頸部から上方が欠損しているが、欠損部も二次的に調整したような痕跡も認められ、意図的に加工あるいは欠



損したものを加工し、使用していた可能性がある。67、73～78は灰釉五合徳利でTC-10-d。いずれも体部が寸胴形を呈し、頸部が短いものである。67の底部には「久〇」の墨書があり、二次的な火熱を受ける。75、77、78には胴部に熔着痕が認められる。73、74、77、78は点刻の釘書きがあり73は「一」に「△」、74は「久」、「一」に「△」、77は「〇」に「□」、「キ」、78は「八」に「三」と判読され、二合半の徳利と共通するものも多い。79は容量が一升ある灰釉徳利でTC-10-e。相対する位置に点刻で「久〇」の釘書きが2箇所認められる。なお肩部から上方が欠損しているが、その部分を一部打ち搔き、二次調整したような痕跡がある。80～83はいずれも灰釉瓶の破片でありTC-10としたが、器厚や径などから80は10-e、81、83は10-aあるいはc、82は10-dの可能性が高い。80～83はいずれも焼成前にヘラ状のもので線刻が施され、80は「割」、81は「海」、82は「七十□」、83は「万あるいはカ」と「八」に「三」と判読できる。84、85は体部が窪ませられたいわゆるぺこかん徳利でTC-10-g。84は鉄釉、85は柿釉が施釉され、ともに底部に熔着痕が認められる。なお85は胴部にも熔着痕が認められる。88はロクロ成形の瓶と考えられるものである。TZ-10。胎土は白色を呈し、非常に緻密である。底部以外には黒釉が施釉され、胴部下半にしのご状のヘラ彫りが施される。無釉の底部には右回転糸切り痕が確認されるが、その中央に径3.5cmほどの穿孔が1箇所認められる。その割れ口を観察すると細かな調整痕が看取されることから、意図的に穿孔した可能性がある。54、86は壺・甕である。54は産地不明でTZ-15。胎土は緻密で暗茶褐色を呈す。内面は横位に鉄釉が施釉される。口唇部の釉は拭き取られる。東大編年Ⅷd期に比定される工学部14号館地点のSU392では本製品と酷似するものが3点出土している。86は瀬戸・美濃系柿釉灰釉流し掛け壺・甕でTC-15-b。底部内面に団子状トチ痕が4箇所ある。内面には白色の付着物が認められるが、特に底部に著しい。底部には墨書で「文化十ノ西ノ□月ノ□ノ□十」とある。文化十年は西暦1813年であり、出土遺物全体の様相をみると、これが本遺構の上限となろう。87、89は播鉢で、87は産地不明でTZ-29、89は堺系でTL-29に分類される。87の胎土は白色を呈し、比較的緻密である。鉄釉が施釉されるが、内面は拭き取られ、播目は金串状のもので13条1単位で17単位入れられている。高台は削り出し高台で、畳付は面取りされている。高台内中央も浅く削り込まれ施釉されるが、その中に「□見」の墨書がある。89の口縁部内外面直下は強く撫でられ、内面は播目との境に明瞭な凸部を有す。また浅い注口部が作り出され、播目は10条1単位で施される。底部内外面に焼台痕跡が確認される。90～92はいずれも錆釉が施釉された糸目土瓶で、90は産地不明でTZ-34-e、91、92は瀬戸・美濃系でTC-34に分類される。いずれも底部には形骸化した足を有し、スス状の付着物が認められる。90の漉し孔は4孔、91は3孔、92は2孔とすべて異なる。また底部にはいずれも刻印があり、90は「八」に「兵」、91は「〇」に「本」と「□」に「駄」の2個、92は長方形枠に「八」に「三駄知」の刻印が確認される。なお91の底部には墨書があるが、判読できない。93、94はトビガンナが施された行平鍋で、93がTZ-42-c、94はその蓋である。93の底部外面にはタール状の付着物が認められる。95は瀬戸・美濃系灰釉植木鉢でTC-21。畳付は浅く削り込まれ、輪高台状にされる。底部に穿孔1箇所を有す。96、97は油受け皿で、96は志戸呂系でTF-40、97は京都・信楽系でTD-40に分類される。96は内面に鉄釉が施釉されるが、釉が受け部口縁外面付近に垂れている。受け部の相対する位置に凸レンズ状スリットを2箇所有す。97は内面に透明釉が施釉される。受け部に「V」字形のスリットを1箇所有す。外面にはスス状の黒色付着物が認められる。なお本製品は皿部分が欠損しているが、欠損部を一部二次調整されたような痕跡があり、意図的に皿部分を小さくし、使用した可能性もある。98～109は蓋である。98～100、109は急須の蓋である。98の摘みは亀形が貼り付けられたものである。99は松葉の鉄絵が施される。109は三彩が施

される。103、104は青土瓶の蓋、101は水注の蓋か。102は白土染付が施された土瓶か急須の蓋か。摘みは手づくねの獅子のようなものが貼り付けられている。105は形作りの蓋である。急須の蓋か。鉄絵が施される。106～108は三彩土瓶の蓋である。106、108は蓋裏に墨書があり、106は「豊次」、108は「御頭」と判読される。

#### 土器 (110～120)

110～112はかわらけで、112のみにいわゆる「内ぐもり」がみられる。110はDZ-2-b。111は磨きかわらけの底部平滑なものでDZ-2-d。111の胎土は白色である。112は見込みに「寿」字の浮文のあるものでDZ-2-j。「寿」字には金彩が施されている。113は土師質丸火鉢でDZ-31-a。3足を有す。口縁部には敲打痕が認められる。外面が全体に黒ずみ、また局所的に底部中央も円形に黒ずんでいる。114、115は透明釉が施された油受け皿で、114が無脚のものでDZ-40-b、115が脚付きでDZ-40-aに分類される。ともに受け部分が皿より低くなった後出的様相を示すものである。114は受け部のアーチ形の切り込み付近にわずかに灯心痕が看取される。116、117はロクロ成形筒形無印の塩壺でDZ-51-w。ともに底部には左回転糸切り痕がある。118、119は塩壺の蓋で、118は断面逆台形、無印のものでDZ-00-d、119は断面長方形、無印のものでDZ-00-gに分類される。118の裏側には墨書があるが判然としない。また表側には手のひらの皺のような痕跡が認められる。119の裏側には細かな布目痕が残り、全体に赤化している。120はいわゆるボウフラの蓋である。胎土は白色を呈し、非常に緻密。表側は丁寧なミガキ調整が施され、裏側は中央が五角形を呈するような面取りが施される。なお図化できなかったが、本製品の身と考えられる破片が数点確認されていることから、蓋と身が同時に廃棄されたものと推測される。

#### SK1189 (IV-440～442図)

1～12はすべて肥前系磁器で、11が白磁、他は染付が施されている。1～7は碗である。1は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗でJB-1-d。高台内には「大明年製」銘が書かれている。2は半球形碗でJB-1-f。3、6、7はJB-1-dの小振りの碗でJB-1-u。3の絵付はコンニャク印判によるものである。高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。6は器厚が厚く、釉調は灰色味を帯びる。高台内にひどく崩れた銘が書かれている。7の絵付の笹文は手描き、松はコンニャク印判によるものである。4、5は絵付や作りが粗雑な碗でJB-1-g。ともに器厚が厚く、釉調も灰色味を帯びる。4の高台内には「渦福」銘が書かれている。8、9は絵付、作りの粗雑な皿でJB-2-g。ともに器厚が厚く、見込みにはコンニャク印判五弁花文がある。8の高台内には銘が書かれているが、ひどく崩れたもので判読できない。10、11は坏である。10は丸形坏でJB-6-a。高台は高く、「ハ」の字状に開き、いわゆる兜巾高台状を呈す。11は半球形坏でJB-6-f。12は鉤状の摘みを有す蓋物の蓋である。表側には黒ずんだ呉須によるコンニャク印判による施文がある。

13～27は陶器である。13～19は碗で、13は肥前系、19は京都・信楽系、他は瀬戸・美濃系である。13は陶胎染付碗でTB-1-f。畳付に白色砂が付着する。14～16は灰釉碗でTC-1-c。いずれも器高が高く、大振りで、体部も直立からやや外側へ開き気味に立ち上がる1-cの初出的な特徴を有す。16の高台割れ口や高台脇は黒ずんでおり、灯心痕の可能性もある。17はいわゆる御室碗でTC-1-d。畳付以外はガラス質の灰釉が施され、体部外側1箇所にも呉須が流し掛けされる。口縁部外側に1箇所熔着痕が認められる。18はいわゆる腰鏝碗でTC-1-u。体部が外側へ開き気味に立ち上がり、器高も比較的高い1-uの古手の特徴を有す。高台内に白色粗砂を多く含む細紐形の熔着痕が認められる。19は半球形色絵碗でTD-1-b。色絵の色調は剥落のため不明。畳付脇が小さく面取りされる。高台内中央に小さく円形の削り込みがみられる。20～23は皿・平鉢で、20、23は肥前系、21、22は

瀬戸・美濃系である。20、23は輪剥皿でTB-2-a。20は青緑釉、23は灰釉が施釉される。20の体部外面の削りは顕著である。口唇部外側にごく小さな敲打痕のような傷がみられ、その部分に所々黒色の付着物がみられる。灯火皿として利用されたものか。23の輪剥部分は蛇ノ目状に釉が削り取られ、その部分に段差が生じている。高台内には墨書があるが、欠損のため判読できない。21はいわゆる御深井皿でTC-2-eに分類される。底部内面にはピン痕が3箇所認められる。22は灰釉輪禿平鉢でTC-2-u。輪禿部分は釉を蛇ノ目状に拭き取ったもので、その部分には輪状の熔着痕がみられる。なお畳付にもほぼ同径の熔着痕が認められることから、重ね積み焼成されたことが推察される。また体部内面には唐草のような染付が施される。24は瀬戸・美濃系盤口形の鉄釉花生でTC-22-a。頸部に耳が2個貼り付けられている。25は瀬戸・美濃系錆釉播鉢でTC-29。口縁部は縁帯状を呈す。播目はかなり摩滅しているが、14条1単位で12本入れられている。底部には右回転糸切り痕と団子状トチ痕が2箇所に残る。26、27は肥前系片口鉢である。26は深いタイプで、内面と外面上半に刷毛目が施されたものでTB-23-aに分類される。畳付脇には焼成前に付けられたと思われる手跡のような楕円形のくぼみが2箇所みられる。口唇部の釉は拭き取られている。27は浅いタイプで、内外面に刷毛目が施され、見込み蛇ノ目釉剥ぎされたものでTB-23-bに分類される。蛇ノ目釉剥ぎ部分の拭き取りは雑で、その部分に輪状の熔着痕が認められる。また畳付にも重ね積みした際についたと思われる白土が付着している。

28～38は土器である。28～35はかわらけである。29、31、34には口縁部に灯心痕が認められるが、29～31はそれがほぼ口縁部全体におよぶ。28、31、33は底部が輪状あるいは局所的に赤化している。28、29、31、32はDZ-2-a、30、34はDZ-2-b、33はDZ-2、35は磨きかわらけで、底部が平滑なものでDZ-2-dに分類される。36は土師質丸火鉢でDZ-31-a。底部に3足を有す。口唇部、畳付脇、足とその周囲は丁寧にミガキ調整される。畳付中央には、繊維状の痕跡が残る。37は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。畳付脇は横位にケズリ調整される。底部内面は黒色化している。体部外面には墨書がみられ、同じ文字あるいは記号のようなものが繰り返されている。38は断面形が凹形を呈し、無印の塩壺の蓋でDZ-00-c。裏側に比較的細かい布目痕が残る。

SU1192 (IV-443、444 図)

1～12は肥前系磁器で、4が白磁、9が青磁、他はすべて染付である。1～5は碗である。1、2、5はJB-1-dの小振りの碗でJB-1-u。1の高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれている。2、5の絵付はコンニャク印判によるものである。5の高台内にも銘があるが、欠損のため判読できない。3、4は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が低いものでJB-1-e。4は口鏽が施される。6、7は皿である。6は南川原窯ノ辻窯跡を指標とするものでJB-2-d。高台内にはハリ支え痕1箇所と、「太明成化年製」銘がある。7は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈すものでJB-2-e。高台内の銘は欠損しているため判読できない。8、9は鉢である。8は高台の断面形状が三角形を呈すものでJB-5-f。口鏽と見込みに手描き五弁花文が施される。高台内には「大明年製」銘が書かれている。9は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた鉢でJB-5-h。蛇ノ目釉剥ぎ部分は全体より一段低く削り込まれ、その部分にはチャツ痕が認められる。体部外面はロクロ目が顕著で、体部内面はヘラ状のもので陰刻が施される。10、11は底部が輪高台状を呈す猪口でJB-7-b。10には口鏽が施され、高台内には「大明年製」銘が書かれている。12は扁平な球形を呈す合子の蓋である。表側には型打ちで陽刻の紗綾形文を施し、部分的に染付される。

13～15は陶器である。13は瀬戸・美濃系陶器の容量が五合の飴釉徳利でTC-10-d。いわゆる尾呂徳利で、体部は雨滴状を呈し、頸部も長く、頸部から肩部にかけて灰釉が流し掛けされる。14、



15は堺系播鉢でTL-29。14は高台を有し、高台内に焼台痕跡が認められる。播目は11条1単位で施される。15は内から外へ押し出すような形で口縁部を広げ注口部とし、その部分の両端を軽く押さえている。注口端には扇形の銘が刻印されている。播目は10条1単位で施される。

16～23は土器である。16～20はかわらけである。16はDZ-2-a。底部に離れ糸切り痕がみられる。17～20はDZ-2-b。いずれもほぼ口縁部全体に灯心痕が認められる。21、22は板作成形、2ピースからなり、大柀「泉州麻生」の刻印のある塩壺でDZ-51-i。内面にはともに粗い布目状のものを捻ったような痕跡がある。21の底部内面には内側から外側へ粘土塊を押し込んだ様子が残る。23は断面形が凹形を呈す無印の塩壺蓋でDZ-00-c。裏側にはナデ調整後、中央付近にヘラ状のもので浅く円刻が施されている。

#### SU1194 (IV-445 図)

1～3は肥前系磁器である。1は染付のいわゆる小丸碗でJB-1-j。見込みには昆虫文、口縁部内側には四方襷文が施文される。2は形作りの白磁合子でJB-18。平面形は卵形を呈す。釉下にはケズリ調整された痕跡が残る。3は染付丸碗の蓋である。文様は細線描き、蓋裏中央には崩れた環状松竹梅文が施される。

4～7は陶器で、4～6は瀬戸・美濃系、7は京都・信楽系である。4は透明釉が施釉された腰が張る丸碗でTC-1。口縁部は内湾し、肥厚している。見込みにはトチ痕が3箇所ある。5、6は容量五合の徳利でTC-10-d。5の表面は何かの影響で白色化しているが、いずれも灰釉が施釉される。5の胴部には墨書で「久〇」、6の胴部には点刻の釘書きで同じく「久〇」と書かれている。なお6の釘書きのすぐ下に墨の痕跡が残る。また6は二次利用されたらしく、肩部から上方が削り取られ、割れ口が丸味を帯びるように調整されており、その内面をみると、錆状の付着物が肩部から底部まで帯状に認められる。7は透明釉が施釉された汁次の蓋か。摘みは菊花状を呈す。

#### SK1231 (IV-445、446 図)

1～4はすべて肥前系染付磁器である。1、2は碗である。1は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた碗でJB-1-x。絵付はコンニャク印判によるものである。2は高台断面形がシャープな「U」字状を呈す碗でJB-1-e。高台内には銘が書かれている。3は半球形坏でJB-6-f。絵付はコンニャク印判と墨弾きを併用したものである。4は丸形蓋物でJB-13-a。

5～10は陶器で、5は肥前系、8は志戸呂系、他はすべて瀬戸・美濃系である。5は陶胎染付蓋物の蓋である。受け部釉は拭き取られる。6はいわゆる腰錆碗でTC-1-u。器高が高く、体部も外側へ開き気味に立ち上がる1-uでも比較的古手のものである。7、8は瓶である。7は容量が一升以上ある灰釉徳利でTC-10-e。まだ頸部が長く、肩部付近の線書きの釘書きも太くしっかりとしたものである。8は口縁部から頸部に鉄釉が浸け掛けされたいわゆる由右衛門徳利でTF-10。肩部付近に輪状の熔着痕が認められる。胴部と底部に墨書がみられるが、底部のものは「〇」に「伊」と判読できる。9は鉛釉が施釉された二耳壺でTC-15-f。10は鉤状の摘みの付く無釉の壺・甕の蓋である。裏側に右回転糸切り痕跡が残る。

11～17は土器である。11～16はかわらけで、いずれの口縁部にも灯心痕がみられるが、11、13は点々と数箇所に、12はほぼ全周、14は口縁の1/3ほどに集中してみられるなど付き方には差がみられる。なお15、16は底部中央に二次的な穿孔を1箇所有す。また口縁部一箇所が「V」あるいは「U」字状に二次的に削られ、その部分のみに集中的に灯心痕が認められる。以上のことから、灯火皿として使用しやすいように二次的に加工し、利用していたことが推察される。11、12はDZ-2-a。11の底部には離れ糸切り痕がみられる。13～16はDZ-2-b。13、15の底部には腰折れ状痕が

確認される。16は磨きかわらけで底部が平滑なものでDZ-2-dに分類される。17は板作成形、「泉川麻玉」の刻印のある塩壺でDZ-51-m。底部には外側より押し入れた粘土がはみ出している。

18はミニチュアの染付の鉢で、JB\_2003\_Wに分類される。蓋物と思われる口縁部、畳付は無釉である。蛇ノ目高台で、高台脇と外面口縁部下に圈線を巡らしている。外面には四方襷に蓮弁文を描いている。19はミニチュアの蓋で、DQ\_2013\_Mに分類される。菊花形でキラが観察される。胎土は粗い。SK1253 (IV-446～448 図)

1～9、17、18はすべて肥前系磁器である。1～5は碗で、4が白磁、他はすべて染付が施される。1は梅樹文が描かれた粗製の碗でJB-1-v。高台内にはかなり崩れた「大明年製」と思われる銘が書かれている。2、5は半球形碗でJB-1-f。2は高台内に「大明成化年製」銘が書かれている。3、4は高台の断面形状が「U」字状を呈し、高台高の低い碗でJB-1-e。ともに高台内のケズリが浅い。6～8は染付皿で、6、8は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す皿でJB-2-e。8は複数個体確認される。7は腰が張り、口縁部が輪花にされた皿でJB-2-fに分類される。高台内には崩れた「大明年製」銘が書かれ、割れ口には漆継痕跡が認められる。9、17は坏である。9は染付された丸形坏でJB-6-a、17は白磁に金で文字が書かれた端反形坏でJB-6-bに分類される。18は色絵瓶でJB-10。胴部には赤色で丸文、圈線が施される。

10～16、19は陶器で、10、11、16は肥前系、12～14、19は瀬戸・美濃系、15は京都・信楽系陶器である。10～15は碗である。10は渦刷毛目が施された丸碗でTB-1-d。畳付に白色砂が多く付着する。11はいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-b。外側に主文様の鉄絵があるタイプとしては器高が低く、鉄による山水文もかなり雑であり、後出的様相を呈すものである。12～14は灰釉碗でTC-1-c。12は灰釉が薄掛けされた後、全体により濃い灰釉が流し掛けられている。15は見込みに花の鉄絵がある平碗でTD-1-h。畳付脇は小さく面取りされている。16は京焼風陶器鉢でTB-5-c。高台内には径3cm弱の小さな円刻と、チャツ痕が認められる。19は体部がらっきょう形を呈す灰釉水注でTC-27-d。注口が緩やかなS字状を呈し、肩が張り、体部が釣鐘形を呈す。このタイプの水注の中でも比較的古手の特徴を有す。二次的な火熱を受ける。

20～35は土器である。20～30はかわらけで、灯心痕は21～24、26の口縁部に認められるが、口縁部全体にタール状のものが付着するのは24のみで、他は口縁部数箇所点々とみられる程度である。20～22はDZ-2-a。20の底部には離れ糸切り痕がみられる。23～29はDZ-2-b。いずれにも腰折れ状痕が確認される。25は糸切りが雑で、切り離れた際の細かい粘土塊が底部に残存している。30は耳かわらけでDZ-2-e。底部には左回転糸切り痕、口縁部の窪み部分には手跡がみられる。31は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。体部は低く、口唇部外側が浅く「U」字状に窪まされ、受け部状を呈す。底部と体部の境は強くなでられ括れている。32は土師質油受け皿でDZ-40。底部が欠損しており、脚部を有すものか否かは不明である。内外面にわずかに銀彩の痕がある。33、34は鉢形を呈す塩壺である。33は口縁部が直立するものでDZ-51-y。底部には右回転糸切り痕がある。34は底部が碁笥底状を呈すものでDZ-51-zに分類される。内面には細かい布目が認められる。35は断面形が凹形を呈す無印の塩壺の蓋でDZ-00-c。

SU1264 (IV-448～451 図)

総個体数101点を数える遺構一括資料である。12、13のような肥前系磁器の大形長頸瓶(JB-10-a)、19、20のような内面に鉄絵を有す肥前系陶器のいわゆる京焼風陶器碗(TB-1-c)、銹絵あるいは銹絵に上絵付が施された京都・信楽系陶器半筒形碗(TD-1-i)などが出土している。以上のような様相から東大編年IV b～V a期に比定される遺構一括資料である。遺物の大半が二次的な火熱を受けてい

るが、遺物年代観から享保あるいは元文の火災に伴い廃棄された可能性が高い。なお本遺構出土遺物は、12、13のような大形長頸瓶、9、10のように同一のものが複数個体確認されるもの、いわゆる上製かわらけ（DZ-2-d）が最小個体数で30枚以上含まれるなど、やや特異な組成を呈している。

1～8はSU1264一括遺物で、9～48はSU1264下層焼土層出土遺物である。遺物は層位上げをしたが、その大半が二次的な被熱を受けており、出土遺物の多くは下層焼土層に伴うものと思われる。**磁器**（1、2、9～18）

すべて肥前系磁器である。1は色絵、11は青磁、12、13、16、17は白磁、他はすべて染付である。1はいわゆる古九谷様式の色絵大皿の破片でJB-3-f。被熱のため釉調や絵付が不鮮明であるが、いわゆる青手の破片と思われる。2、9は鉢である。2は高台の断面形状がシャープな「U」字状を呈すものでJB-5-b、9は三角形を呈すものでJB-5-fに分類される。9は型打ち成形で口縁部および体部が八角形を呈し、口縁が施される。外面の絵付も非常に丁寧な手描きによるものである。本遺構内で同一のものが最小個体数で5個体確認されている。10は底部が輪高台状にされた猪口でJB-7-b。器厚が薄く、比較的小振りなものである。本遺構内で同一のものが最小個体数で4個体確認されている。11は蛇ノ目高台を有す香炉・火入れでJB-9-f。畳付脇は小さく面取りが施される。底部内面には輪状の白色粗砂痕跡が認められる。12、13大形長頸瓶でJB-10-a。ともに胴部は球形に近い形状を呈し、細長い頸部を有す。口縁は小さく折り返され、玉縁状を呈す。12の畳付は内外両側がケズリ調整されている。また高台外面に1箇所線書きの釘書きが認められる。14、15は筒形蓋物で、14はJB-13-b、15はその蓋である。14の底部は蛇ノ目状に削り込まれる。15の無釉の受け部には白泥状のものが塗布されている。16、17は壺で、16はJB-15、17はその蓋である。17の無釉の受け部には白色粗砂が付着する。18は大形蓋物の蓋である。輪高台状の摘みを有し、無釉の受け部には白泥状のものが塗布される。

**陶器**（3、19～29）

3、19～22は碗である。3は京都・信楽系半筒形碗でTD-1-i。外面には鉄絵が施され、内面底部にはピン痕が1箇所残る。本品は二次的な火熱を受けていない。19、20は肥前系の見込みに鉄絵のある、いわゆる京焼風陶器碗でTB-1-c。ともに高台内に銘はないが、浅い円刻がある。21、22は瀬戸・美濃系である。21は灰釉碗でTC-1-c。TC-1-cの中では小振り、形態もいわゆる御室碗のように腰が張り、器高も低いタイプである。22は京焼風の平碗でTC-1-n。見込みには花文と思われる銕絵染付が施される。高台内が円形にごく浅く削り込まれている。23～25は瀬戸・美濃系鉄釉瓶で、23、24は五合徳利でTC-10-d、25は一升徳利でTC-10-eに分類される。23、25は胴部が釣鐘形を呈す、いわゆる尾呂徳利で、頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けられる。ともに胴部に線書きの釘書きがみられる。なお23の頸部割れ口には漆継痕跡が認められる。24はうのふ釉の流し掛けもなく、形態も最大径が胴部中程にある寸胴形を呈すことから、23、25より後出的様相を呈すものである。26、27は香炉・火入れである。26は京都・信楽系の形作りのものでTD-9-a。底部は輪高台状に削り込まれ、畳付から内側には白泥のようなものが塗布されている。色絵は体部四方と底部内面1箇所に施される。27は瀬戸・美濃系のいわゆる御深井でTC-9-cに分類される。3足を有し、体部外面に鉄の摺絵が施される。28は瀬戸・美濃系灰釉片口鉢でTC-23-b。底部内面にトチ痕2箇所、口縁部外面付近に熔着痕が認められる。29は瀬戸・美濃系鉄釉挿鉢でTC-29。口縁部断面形は方形を呈すが、その外面は強くなでられ、括れている。また口縁部内側には幅1cmほどの明瞭な凸帯部を有す。播目は13条1単位で比較的粗い間隔で施される。底部内外面には団子状トチ痕が3箇所残る。

**土器**（4～8、30～48）



すべて二次的火熱を受ける。4～7、30～46はかわらけである。いずれの皿の口縁部にも灯心痕は認められない。4、33、35、36はDZ-2-b。いずれの底部にも腰折れ状痕が確認される。5～7、39～46は底部平滑の磨きかわらけでDZ-2-dに分類される。いずれも口径は約10.5cm、器高が約1.8cmほどの寸法のものであり、渦状の糸切り痕がみられるものはない。外面はいずれもケズリ調整後、丁寧にミガキ調整されている。同法量、同整形のものが被災し、まとめて廃棄された可能性が高い。46の畳付外面にはケズリが残り、底部中央には二次穿孔が認められる。30～32、34、37、38はDZ-2-aに分類される。30の底部には離れ糸切り痕がみられる。47は土師質丸火鉢でDZ-31-a。外面には銀彩が施され、底部には足が2個残る。口縁部内側には敲打痕が認められる。8、48は塩壺蓋である。8は断面凹形で無印のもの蓋でDZ-00-c、48は断面凸形の蓋でDZ-00-kに分類される。48の表側は丁寧にミガキ調整され、外周より少し内側に圏線状の浅い削り込みが巡る。裏側はケズリ調整痕が残るが、表側同様磨き調整されている。

SK1328 (IV-452 図)

1～3は肥前系磁器碗である。1は高台径が大きく腰が張った染付碗でJB-1-w。器厚が厚く、胎土は灰色味を帯び、呉須も黒ずむ。2は薄手の半球形染付碗でJB-1-f。3は高台断面がシャープな「U」字状を呈し、高台高が低いものでJB-1-e。外面は青磁釉、内面は透明釉が掛け分けられる。

4～7、11は陶器である。4、5は碗である。4は内面に鉄絵のある、肥前系のいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-c。見込みがわずかに盛り上がっている。高台内の銘はない。5は瀬戸・美濃系灰釉錆釉掛分碗でTC-1-ac。体部数箇所が窪まされている。幅広の畳付には「○」を2個連ねたような刻印と熔着痕が認められる。6は瀬戸・美濃系のいわゆる灰釉御深井皿でTC-2-e。見込みの摺絵はかなり潰れたものである。7は志戸呂系の鉄釉蓋物の蓋である。受け部に熔着痕が認められる。

8～10は土器である。8は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。体部と底部境は面取りされる。外面全体にススが付着するが、特に面取り部分のススは顕著である。9、10はDZ-2-bに分類される。

11はミニチュアの播鉢で、TE\_2012\_Wに分類される。底径は小さく器高が高いタイプである。見込みの播目はクロスパターンである。縁帯内側の張り出しは少なく外面に2本の沈線が観察される。

SK1409 (IV-453、454 図)

1～3はすべて肥前系染付磁器である。1は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿でJB-2-k。口縁部以外の内面、高台付近を中心にタール状の付着物が認められる。2、3は蓋物で、2は丸形を呈すものでJB-13-a、3は筒形を呈すものでJB-13-bに分類される。

4～15は陶器である。4～6は瀬戸・美濃系碗である。4は灰釉有段碗でTC-1-f。削り込み高台であるが、畳付幅が一定ではない。5は刷毛目碗でTC-1-s。畳付から高台内は無釉。6は灰釉碗でTC-1-cに分類される。7は瀬戸・美濃系灰釉澀瓶でTC-28。欠損しているが、紐状の把手が付くものである。釉だれが著しく、それにより畳付が一部浮いている。8は堺系播鉢でTL-29。播目は8条1単位で、間隔が比較的広いものである。畳付は輪高台状にされ、その内側と底部内面に輪状の焼台痕が残る。9～13は瀬戸・美濃系瓶である。9、10は灰釉が拭き取りされ、容量が二合半のものでTC-10-aに分類される。ともに折り返された口縁部が頸部に付かないタイプであるが、9は胴部がすでに寸胴形に近いものとなっている。また釘書きは線書きされたものであるが、9は10に比べて線が細く、点刻に近いものとなっており、9の方が後出的な特徴を有す。ちなみに胴部の釘書きは9は「一」に「△」、10は「久○」と判読される。なお9の高台内には輪状の熔着痕が認められる。11は灰釉が浸け掛けされた容量が二合半のものでTC-10-c。口縁部は9、10同様、折り返されるが頸部には付かないタイプであり、折り返しも小さい。胴部には線書きの釘書きで「村田」と判読される

が、ちょうど欠損部分にあたり釘書きはさらに続く可能性もある。なお11の口唇部は釉が削り取られ、丸味を帯びている。12、13はともに底部釉が拭き取りされた容量が五合のものでTC-10-dに分類される。12は鉛釉、13は黄釉が施釉される。13は胴部が寸胴形を呈し、釘書きも12と比べると点刻に近いものとなっており、13の方が後出的な特徴を有す。ちなみに釘書きは12は「久ヨ」、13は「久〇」と判読される。12の釘書きのすぐ脇に歪な三角形の穿孔が認められ、その割れ口は平滑に成形され、意図的に穿孔した可能性もある。14、15は蓋である。14は薩摩系鉄釉土瓶の蓋である。表側に輪状の熔着痕が認められる。摘みは欠損。15は志戸呂系鉄釉蓋物の蓋である。蓋裏に輪状の熔着痕が認められる。

16～21は土器である。16～17はかわらけでDZ-2-a。16の口縁部にはタール状の灯心痕がほぼ全周する。底部内面が一部赤化している。17は器厚が非常に薄いもので、底部外面には墨書がある。18、19は足付きの土師質丸火鉢でDZ-31-a。ともに口縁部には敲打痕が認められる。18は外面が丁寧にミガキ調整され、縦位に列点が筋状に施される。なお口縁内側直下にはススが輪状に付着する。20は土師質のさなである。上端には「U」字状のスリットが1箇所残る。内面中程から下端はケズリが顕著。内面は白色化している。21は板作成形で3ピースからなる大柶「泉州麻生」の刻印のある塩壺でDZ-51-i。胎土は白色である。内面には粘土を強く絞ったような螺旋状の痕跡が認められる。

22は唐人の人形で、DD\_1100\_Hoに分類される。京都の手捻りの人形に多くみられる技法で頭部、袖、手足は別作りで貼付けている。底部は開口し足を貼付している。緑色と黒褐色と釉が観察される。SK1415 (IV-454 図)

1、2は肥前系染付磁器である。1は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す鉢でJB-5-b。見込みにはコンニャク印判五弁花文が施される。2は脚部削り込みが浅く、畳付が面取りされた仏飯器でJB-8-c。3はかわらけでDZ-2-b。底部に腰折れ状痕が確認される。底部内面1箇所に灯心痕状のものが付着する。

SU1474 (IV-455、456 図)

1～5はすべて肥前系磁器で、4は青磁、それ以外は染付されたものである。1、2は碗で、1はコンニャク印判で施文された1-d小振りの碗でJB-1-u、2は半球形碗でJB-1-fに分類される。3は糸切り細工貼付高台の形皿でJB-2-r。口径、高台ともに一部が山形に成形された歪な五角形を呈す。内面は山の稜線が陽刻され、山形を呈す部分の内面にダミによる染付が施される。なお本製品はいわゆる組物であり、最小個体数で7個体以上ある。4、5は脚部の削り込みが浅く、畳付脇が面取りされた仏飯器でJB-8-c。ともに透明釉は浸け掛けされ、畳付付近は無釉である。

6～16は陶器で、6～8は肥前系、9～16は瀬戸・美濃系である。6～10は碗である。6はいわゆる内面に鉄絵のある京焼風陶器でTB-1-c。TB-1-cは平碗が多いが、本製品は半球形碗に近い。7、8はいわゆる陶胎染付碗でTB-1-f。ともに外面に染付が施され、腰が張る丸碗である。9は灰釉薄掛け碗でTC-1-c。高台は無釉で、高台内に指圧痕のような痕跡が認められる。10はいわゆる御室碗でTC-1-d。外面にワンポイントの染付が施される。高台付近は無釉で、高台内には「〇」に「清」の刻印と、墨書があるが、墨書は非常に薄く判読できない。11、12は皿である。11は見込みに鉄の摺絵のあるいわゆる御深井皿でTC-2-e。見込みにはトチ痕が3箇所ある。12は型打ち成形の内外面にしのごのある菊皿でTC-2-k。見込みに沈線状の圏線がある。口縁部も「V」字状に浅く削り込まれ、細かな菊花形にされる。13は鉢でTC-5。内外面に白釉を浸け掛けされるが、外面は拭き取られている。なお体部上半には白釉の上にガラス質の透明釉が施釉され、大きめの貫入がみられる。外面の体部上半の透明釉と下半の白釉の間には隙間がある。底部内面にはピン痕が1箇所、外面には

輪状の熔着痕が認められる。14は黄釉が施釉された香炉・火入れでTC-9-d。外面の半菊状しのはぎは2箇所あるが、位置関係から推測すると本来は3箇所に施されたものか。底部には貼付られた足が1個残る。15、16は丸形片口鉢でTC-23-b。15は飴釉、16は透明釉に緑釉が流し掛けされたものである。ともに底部内面にトチ痕が3箇所ある。16のみ注口が残存するが、それはロクロ成形で半筒形に成形されたものが口唇部から貼付られる。

17～20は土器である。17は無釉、脚無の油受け皿でDZ-40-d。18、19はともに板作成形の3ピースからなる塩壺である。内面には細かな布目と粘土の継目が残る。18は大枠の「泉州麻生」の刻印のあるものでDZ-51-i、19の刻印は摩滅しているが、角枠に「泉」は判読できる。DZ-51。19の口縁部と胴部1箇所は赤化し、胎土が焼締まっている。20は断面が凹形を呈し、無印の塩壺蓋でDZ-00-c。胎土は黒ずんだ橙色を呈し、細かい白色砂をやや多く含むものである。蓋裏には細かい布目が残る。

SE1559 (IV-456 図)

1～4はすべて肥前系磁器で、1以外はすべて二次的な火熱を受ける。1、2は碗である。1は底部無釉染付碗でJB-1-b。2は白磁のいわゆるうがい茶碗でJB-1-tに分類される。口鏽が施される。3は染付壺でJB-15。4は色絵壺・甕の蓋である。被熱しているため原色は不明な箇所もあるが、外面に赤ないし黒色で輪郭線を描き、赤、黒、緑色で塗られた花樹が描かれる。

5～7は陶器で、5、6は瀬戸・美濃系、7は備前系である。5は底部にトチ痕が3箇所ある灰釉端反皿でTC-2-y。釉は総掛けされ、高台内は拭き取られる。6は黒釉二耳壺でTC-15-f。内面まで施釉され、口唇部釉は拭き取られる。7はロクロ成形された無釉焼き締め瓶でTE-10-b。頸部付近から上が欠損しているが、恐らく胴部がやや細長い三角フラスコのような形状を呈す瓶であろう。畳付脇は面取りが施されるが、底部には植物繊維の痕跡がみられる。なお畳付脇には「○」に「大」の刻印がある。

8～10は土器である。8、9はかわらけでDZ-2-aに分類される。8は口縁部にタール状の灯心痕がほぼ全周する。9は畳付脇がやや強くナデ調整される。10は塩壺蓋でDZ-00-a。胎土に白色粒を多く含み、蓋表側に繊維状の痕跡がみられる。

SK1560 (IV-457 図)

1、2は肥前系磁器で、高台の断面形が三角形を呈す碗でJB-1-c。1は染付と色絵を組み合わせたもので、2は白磁である。1の高台内には「大明年製」銘が書かれている。3、4は陶器である。3は肥前系のいわゆる呉器手碗でTB-1-a。体部は開き気味に立ち上がり、口縁部付近がわずかに括れる。4は備前系の無釉焼締め皿でTE-2-a。ロクロ成形で、口縁部にはタール状の灯心痕がみられる。5～8は土器である。5、6はかわらけである。5はDZ-2-a。底部に離れ糸切り痕がみられる。6はDZ-2-b。6の胎土は白色を呈す。底部に腰折れ状痕が確認される。8は断面がドーム形、無印の塩壺の蓋でDZ-00-a。手づくねで、蓋の表側に墨書がある。

7はミニチュアの片口鉢で、DQ\_2007\_Wに分類される。1/3残存、胴部中央は大きく張り出し、口縁部に向かい窄まる。口縁部は僅かに外反する。内外面とも丁寧に調整されている。欠損しているため注口は確認できない。

SG1586 (IV-457～459 図)

1～4は染付碗である。1は丸碗で、JB-1-gに分類される。釉には微細気泡がほぼ全面に入る。2は丸碗で、JB-1-uに分類される。全面に微細な貫入が認められる。体部には雪輪草花文が描かれ、高台内には一重圏線内に「太明年製」銘が書かれている。3は丸碗で、JB-1-gに分類される。胎土は



灰白色を呈す。外面には二重網目文が、見込みには菊花文が、内側面には一重網目文が描かれ、高台内には二重角枠内に「渦福」銘が書かれている。4は筒形碗で、JB-1-1に分類される。釉全体に微細気泡を含む。外面には矢羽文を巡らし、口縁内側には四方襷文、見込みには二重圏線内に手書きによる五弁花文が描かれている。遺構裏込め上層出土。5は高台無釉碗の底部片で、JB-1-bに分類される。見込みには時計回りの渦巻き状ロクロ口目が認められる。6、7は小坏である。6は端反形を呈し、JC-6-bに分類される。裏込め出土。7は丸碗形を呈し、JC-6-aに分類される。外面には幾何学文を描いた丸文が認められる。8～11は皿である。8は見込み蛇ノ目釉剥ぎ青磁皿で、JB-2-kに分類される。見込み蛇ノ目部には重ね焼き時の痕跡として砂が環状に付着している。9は青磁陽刻形皿片で、JB-2-rに分類される。高台は糸切り細工による貼り付け高台で、やや内傾して貼り付けられている。見込みには陽刻によって文字と流水文が表されている。10は蛇ノ目凹形高台皿のうち、高台高の低いタイプで、JB-2-jに分類される。蛇ノ目状露胎部には白泥が塗られている。文様は見込みに環状松竹梅文が、内側面に墨弾きによる千鳥と青海波が描かれ、裏文様には線書きによる簡略化された唐草文が描かれている。11は見込み蛇ノ目釉剥ぎ染付皿のうち高台径が小さいタイプで、JB-2-lに分類される。胎土は灰白色を呈す。見込み蛇ノ目状露胎部には重ね焼きによる環状痕が認められる。内側面には二重斜格子文が描かれている。12は花生で、JB-22に分類される。底部欠損。体部は球状に膨らみ、口縁は朝顔形に開く。口縁部外側、特に外反付け根部分には釉飛びが認められる。13は蓋物の蓋である。ドーム形を呈し、中央には撥形の橋状摘みが貼り付けられている。身との擦り合わせ部にはアルミナが付着している。文様は窓絵を配し、その間を墨弾きによる花文で繋いでいる。焼継ぎによる補修痕が認められる。

14は京焼風陶器平碗底部片で、TB-1-cに分類される。見込みには簡略化された楼閣山水文が描かれている。15は半球碗で、TD-1-bに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質である。高台断面は長方形を呈し、豊付外側は面取りされている。裏込め出土。16はいわゆる御室碗で、TC-1-dに分類される。胎土は黄白色を呈す。体下半には回転ヘラ削り痕が顕著に認められる。17は青緑釉輪剥皿で、TB-2-aに分類される。内面には青緑釉、外面には底部を除き、やや白濁した透明釉が掛けられている。豊付及び見込み輪剥部には砂目痕が3箇所認められる。18は灰釉端反皿で、TC-2-yに分類される。胎土は灰白色を呈す。直重ねによる窯詰めによって、見込みには環状熔着痕が、豊付には剥離痕が認められる。釉は見込みにのみ掛けられている。19は二合半徳利で、TC-10-cに分類される。底部欠損。胎土は灰褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。釉はやや緑味を帯びた灰釉が底部を除く外面に掛けられている。口唇部には釉の剥離が認められる。20は半胴甕で、TC-15-aに分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色砂粒を含み、硬質である。露胎部には黒鉄色を呈する物質が器面から斑点状ににじみ出ている。見込みには3箇所の目痕が認められ、口唇部のうち残存部分に熔着痕が1箇所認められる。底部を除き、柿釉が施されている。21は捏鉢で、TC-5-lに分類される。胎土は黄白色を呈し、白色砂粒を含む。底部は蛇ノ目高台状を呈しているが、凹形部は直径3cmと小さく、意匠として削られているに過ぎない。蛇ノ目部も扁平ドーム状のあげ底を呈し、接地面は外端部にある。見込みには重ね焼き用の団子を置くための不整楕円形状釉剥ぎが6箇所認められる。釉は底部を除き、やや黄緑味を帯びた灰釉が施されている。22は産地・器種不明の容器である。残存部では円筒形を呈し、底部はベタ底である。底部には右回転の回転ヘラ削り痕が認められる。胎土は暗橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。釉は底部を除き、柿釉が施されているが、内面の釉調は暗い小豆色を呈している。残存部外面上端で器面がわずかに内傾している部分があり、口縁部に繋がると思われる。上端欠損面には二次加工が施されている。23は播鉢で、TC-29に分類される。胎土はやや灰色を帯び

た黄白色を呈す。口縁部は断面三日月状の縁帯を呈し、幅は25mmを測る。内側面は浅いクランクを形成する。播目は1単位18条からなり、見込みは直線状に1単位を引いた後、見込み外縁に沿って円形状に1単位引かれている。また内面底体間には4箇所の子痕が認められる。24は油受け皿で、TC-40-cに分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質である。油皿受け先端と、外側面には重ね焼き時の熔着痕が認められる。体部には柿釉が施され、外面は拭き取られている。25は土瓶の蓋である。胎土は淡橙褐色を呈し、白色粒子、黒鉄色含有物が認められる。摘みは表面に菊花状の陰刻が施されている。釉は白化粧土を施した上に灰釉が掛けられている。内面には直径約4cmを測る環状熔着痕が認められる。31、32は大甕の口縁部片で、TG-15に分類される。31は外へ張り出すT字状口縁を呈し、口唇部はほぼ水平である。内面には指頭圧痕が認められる。32も外へ張り出すT字状口縁を呈しているが、31に比して張り出しが短く、内傾している。内面には指頭圧痕が認められる。

26～30はかわらけである。26～28は左回転の糸切り痕が認められ、DZ-2-bに分類される。28は灯心痕と外側面にスス痕が認められる。29は上製かわらけで、DZ-2-dに分類される。胎土は橙褐色を呈し、硬質かつ緻密である。見込み中央が黒ずんでいる。30は底部穿孔かわらけで、DZ-2-iに分類される。胎土は淡褐色を呈し、暗赤褐色含有物と金雲母を微量に含む。底部はヘラ削りによって調整され、糸切り痕は残存していない。底部中央の穿孔は焼成前穿孔であるが、使用によって断面鼓状に摩耗している。33は硬質瓦質壺の口縁部片で、DZ-15-aに分類される。体部には縦方向のミガキが、肩部から口縁部にかけては横方向のミガキが認められる。34は土師質筒形火鉢の胴部片で、DZ-31-iに分類される。胎土は橙褐色を呈し、金雲母を微量含む。口縁下には1条の沈線が、体部には回転押形文が巡る。35は輪積み整形の塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土は暗橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。表面にはナデ整形が施されている。

36はミニチュアの碗で、JB\_2001\_Wに分類される。花唐草文様で貫入が観察される。37は鉢で、DQ\_2003\_Wに分類される。肩が張り首に向かい窄まり、口縁部は広く外反する。同様のものが東大編年Ⅷa～Ⅷd期の工学部14号館地点SK292から出土している。38はミニチュアの蓋で、DD\_2013\_Mに分類される。陽刻の菊花文様で、縁に向かい二本の沈線を施している。上面は緑釉を施し裏面は無釉である。

SD1601 (IV-459、460 図)

1～6は溝内、7～9は掘方の遺物である。1～3、7、8は陶器で、1、3、7、8は肥前系、2は瀬戸・美濃系である。1～3は二次的な火熱を受ける。1はいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-b。畳付以外施釉される。2、7は皿で、2は内外面にしのぎのある菊皿でTC-2-k。型打ち成形で内面を菊花状にし、口縁部は浅く「V」字形に削り、口縁部も菊花状にされる。底部内面にトチ痕が3箇所ある。7は灰釉砂目皿でTB-2-b。砂目は畳付と見込みに3箇所ある。総釉掛けされる。3は大平鉢でTB-3-a。高台以外鉄釉を施し、内面の釉を渦状に削り込んでいる。口縁部には青緑釉が浸け掛けされる。底部内面に6箇所の砂目痕がある。8はロクロ成形された壺・甕でTB-15-a。外面上半は青緑釉と白土刷毛目、下半は錆釉、内面には透明釉が施される。畳付は削り込まれ、輪高台状を呈す。4～6、9は土器である。4、5、9はかわらけで、4、5はDZ-2-a、9はDZ-2-gに分類される。4の口縁部にはタール状の灯心痕が付着する。9は手づくねである。胎土は橙色を呈し、白色粒子をやや多く含む。口縁部付近は丁寧なナデ調整されるが、外面下半は指頭圧痕が残る。6は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。体部に二次的な穿孔が1箇所認められる。

SD1603 (IV-460、461 図)

1、2は掘方、他は溝内の遺物である。陶器すべてと12のかわらけは二次的な火熱を受ける。1、

2は肥前系染付磁器である。1は高台の断面形が三角形を呈す鉢でJB-5-f、2は壺でJB-15に分類される。1は型打ち成形で、内面に捻子花と菊花文の陽刻が施される。また高台内には一重圏線に「大明宣徳年製」銘が書かれている。

3～9は陶器で、3～8は瀬戸・美濃系、9は肥前系である。3は鉄釉丸碗でTC-1-ag。口縁部がわずかに外反する。削り出し高台で、一部ススが付着している。4は黒釉天目碗でTC-1-a。口縁端部の外反は弱く、短い。5は高台を有す飴釉壺でTC-15-f。外耳の痕跡が1箇所残る。6は鉄釉香炉・火入れでTC-9-b。高台は碁笥底状に削り込まれ、無釉である。口唇部の釉は拭き取られる。7は黒釉花生けでTC-22-a。口縁部は盤口形を呈し、頸部に紐状の外耳が2箇所ある。8は錆釉が施された播鉢でTC-29。底部内面はかなり摩滅し、播目が消失しているが、播目は10条1単位で施される。底部端に重ね焼きされた際の播目痕が認められる。底部には右回転糸切り痕がある。9は象嵌の大平鉢でTB-3-b。底部内面には砂目痕が7箇所ある。高台内も含め、高台周囲には錆釉が薄く施され、畳付脇はやや幅広く面取りが施される。

10～14は土器である。10～13はかわらけである。10、11はDZ-2-a。10の底部は黒色化している。11は口縁部2箇所に灯心痕が認められる。12、13はDZ-2-b。12の底部には切り離された際に生じたと思われる粘土塊が付着している。14は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。体部と底部境は面取りが施され、外面にはスス付着する。

#### SD1604 (IV-462 図)

1～6はすべてかわらけで、2はDZ-2-a、他はDZ-2-bに分類される。4以外はすべて口縁部に灯心痕が認められる。1～3はタール状の灯心痕が口縁部を全周する。1は切り離した際の小さな粘土塊が底部に残る。

#### SD1605 (IV-462 図)

1は肥前系陶器のいわゆる呉器手碗でTB-1-a。高台内がアーチ状にやや深く削られている。

#### SD1607 (IV-462 図)

1は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。畳付脇は小さく面取りされる。団子状の内耳が3箇所ある。

#### SD1608 (IV-462、463 図)

1～4は肥前系染付磁器で、1～3は皿、4は坏である。1、2は初期伊万里皿でJB-2-a。型打ち成形で、体部が輪花にされる。3は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す皿でJB-2-e。4は端反形坏でJB-6-b。高台内には一重圏線に「角福」銘が書かれている。

5～11は陶器で、5、7、8は肥前系、6は産地不明、9～11は瀬戸・美濃系である。5、6は碗である。5はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。高台内はアーチ状に外側より深く削り込まれる。6はTZ-1。胎土は緻密な黄白色を呈す。高台は「ハ」の字状に開き、アーチ状にやや深く削り込まれている。畳付に胎土目痕が1箇所ある。体部外面には幅の狭い横位のケズリが施される。7～10は皿である。7、8は青緑釉輪剥皿でTB-2-a。8は外面に灰釉、内面に緑釉が施される。7、8ともに見込みの輪剥部分は一段低く削り込まれ、その部分に砂目痕が認められる。9、10は型打ち皿である。9は外面にしのごのある菊皿でTC-2-k。見込みに沈線状の圏線あり、その周囲にトチ痕が3箇所認められる。10はヒダ皿でTC-2-n。ガラス質の白釉が厚く施されるが、高台周囲の釉のみ拭き取られる。11は灰釉瓶でTC-10。いわゆる柑子口の瓶で、外耳を2個有す。

12～16はかわらけで、12以外、すべての皿の口縁部に灯心痕が認められるが、特に16はタール状の灯心痕がほぼ全周する。12、14、16はDZ-2-a。12は底部に離れ糸切り痕がみられる。13、15はDZ-2-b。16は器面および胎土が黒色化している。



SD1609 (IV-463 図)

1 は肥前系陶器筒形碗で TB-1。胎土、釉調などはいわゆる呉器手碗に酷似する。畳付以外高台内まで透明釉が施釉される。

SD1610 (IV-463 図)

1 は肥前系染付磁器のいわゆる初期伊万里の皿で JB-2-a。畳付両脇が小さくケズリ調整される。2 はかわらけで DZ-2-a。底部には離れ糸切り痕がみられる。口縁部には灯心痕がほぼ全周する。

SK1632 (IV-464 図)

1、2 肥前系染付磁器である。1 は半球形碗で JB-1-f。高台内に二重角枠「渦福」銘が書かれている。2 は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す皿で JB-2-e。見込みにはコンニャク印判五弁花文がある。高台内に銘が書かれているが、欠損のため判読できない。3～9 は陶器で、3～6、9 は瀬戸・美濃系、7 は京都・信楽系、8 は肥前系である。3～7 は碗である。3 は鉄釉天目碗で TC-1-a。削り出し高台で、畳付に糸切り痕がみられる。4 は灰釉錆釉掛け分け碗で TC-1-ac。体部外面には長石釉が散らされる。高台は蛇ノ目高台である。5、6 は灰釉薄掛け碗で TC-1-c。ともに体部はほぼ直立し、器高が高い大振りなものである。7 は平碗で TD-1-h。薄造りで、畳付脇は小さく面取りされる。8、9 は香炉・火入れである。8 は陶胎染付で TB-9-a。残存する体部の割れ口が二次的に調整されている。9 は飴釉が施釉された袴腰の香炉・火入れで TC-9-f。底部には3足が貼り付けられ、露胎となっている。体部外面と底部との境に熔着痕がみられる。口縁部には敲打痕が認められる。10 はかわらけで DZ-2-a。口縁部には灯心痕が認められる。

SD1648 (IV-464 図)

1～3 はかわらけである。1、2 は DZ-2-a。1 の底部には離れ糸切り痕がみられる。タール状の灯心痕がほぼ全周する。2 は体部が「ハ」の字状に短く立ち上がり、口縁部直下外面は強くなでられ小さく括れる。底部断面は凸レンズ状を呈し、中央ほど器厚が薄い。3 は DZ-2-b。口縁部に灯心痕が認められる。

SD1649 (IV-464 図)

1、2 は肥前系染付磁器である。1 は初期伊万里の皿で JB-2-a。胎土は灰色味を帯び、呉須も黒い。内面にハリ支え痕が3箇所ある。2 は端反形坏で JB-6-b。3 は瀬戸・美濃系陶器で、柿釉が施釉された赤津半胴・錢甕で TC-15-a。生産地において「孫太」と呼称されるものか。体部外面に熔着痕が認められる。畳付脇にヘラ書きで窯印と思われる刻印がある。口縁部には敲打痕が認められる。4 はかわらけで DZ-2-b。内面が赤化している。

SF1687 (IV-465 図)

1 は丹波系陶器播鉢で TK-29。播目は7条1単位で施される。口唇部1箇所を平らに押さえて注口部としている。底部外周に幅1cm前後の焼台痕が認められる。なお本製品の底部1箇所に二次的な細い半円状穿孔がみられ、その部分の割れ口は丁寧に調整されている。2 はかわらけで DZ-2-a。口縁部1箇所が二次的に細い半円状に打ち欠かされている。なお2のかかわりけは、1の内面底部に口縁部を下に伏せた形で出土したものだが、かわらけの半円状の割れ口と播鉢の底部の半円状の割れ口のサイズはほぼ同じであり、前述のような状態で使用することを意識して二次的な加工が施されたものか。

SF1689 (IV-465 図)

1 は土師質丸火鉢で DZ-31-a。外面は丁寧に横位のケズリ、ミガキ調整される。内面は粘土紐の継目あたりに指頭圧痕が集中する。口縁部が赤化している。

SB1697 (IV-465 図)

1 はかわらけで DZ-2-a。黒色化したものである。口縁部にはほぼタール状の灯心痕が全周する。底部には離れ糸切り痕がみられる。

SK1698 (IV-465 図)

1～3 はすべて瀬戸・美濃系陶器灰釉皿である。1 は型打ち成形で、外面にしのぎのある菊皿で TC-2-k。高台と体部境に稜を有す。内面は型打ちで菊花状にされ、口縁部は浅い「V」字状に削り込まれ輪花にされる。2 は見込みに輪状の直重ね痕のある皿で TC-2-b。3 は底部内面に4箇所ピン痕がある灰釉端反皿で TC-2-y。口縁部1箇所に灯心痕が認められる。

SE1706 (IV-466 図)

1 は肥前系染付磁器で、高台の断面形が三角形を呈す皿で JB-2-c。高台内にピン痕が1箇所残る。2、3 は陶器である。2 は肥前系のいわゆる京焼風陶器で TB-1-c。高台内には行書で「清水」の刻印がある。3 は器種不明の志戸呂系陶器である。表側は鉄釉が施釉され、裏側は無釉である。二次的な火熱を受ける。4、5 はかわらけで DZ-2-a。5 は体部外面にやや凹凸が目立つ。5 のみ口縁部に灯心痕が1箇所認められる。

SF1721 (IV-466 図)

1 は瀬戸・美濃系陶器の鉄釉舟徳利で TC-10-f。畳付脇が幅広くケズリ調整されている。本品は底部付近のみ残存するものであるが、胴部の割れ口をみると割れ口が丸味を帯びており、二次的に調整された可能性がある。また外面は被熱し、器面が剥離し、露胎となっていることから、かなりの高温に曝されたか、あるいは長時間被熱した可能性もある。

SD1723 (IV-466、467 図)

1～3 は肥前系磁器であり、1、3 は二次的な火熱を受ける。1 は高台の断面形がシャープな「U」字状を呈す染付皿で JB-2-e。口鏽が施され、高台内にピン痕が1箇所ある。2 は高台断面形が三角形を呈す白磁鉢で JB-5-f。色調は乳白色を呈し、口縁部数箇所が外側から押され、輪花状を呈す。3 は白磁端反形坏で JB-6-b。口鏽が施される。4～8 は陶器で、7 が丹波系、他はすべて瀬戸・美濃系である。7 以外、二次的な火熱を受ける。4、5 は皿で、4 は外面にしのぎのある灰釉菊皿で TC-2-k、5 は灰釉脚付形皿で TC-2-x に分類される。4 は型打ち成形で、口縁部は浅く「V」字状に切り込みを入れ、菊花状を呈す。見込みには輪状の沈線がみられる。5 はいわゆるタタラ作りの形皿で、平面形が植物の葉のような形状を呈す。底部には足が1箇所と、トチ痕が1箇所残る。6 は鉄釉筒形香炉・火入れで TC-9-b。削り出し輪高台を有し、口唇部の釉は拭き取られる。7 は丹波系播鉢で TK-29。播目は6条1単位である。鉄泥が施される。8 は鉄釉壺・甕の鉤状の摘みを有す蓋である。裏側には右回転糸切り痕跡が残る。

SD1725 (IV-467 図)

1、2 は肥前系磁器皿で、1 は高台の断面形が三角形を呈す染付皿で JB-2-c。高台内にピン痕が1箇所ある。2 は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿で JB-2-k。蛇ノ目部分には輪状の熔着痕が認められる。畳付に二次的にケズリ調整された痕跡が認められる。3～6 は陶器で、3、4 は肥前系、5、6 は瀬戸・美濃系である。3 はいわゆる呉器手碗で TB-1-a。畳付の釉は拭き取られる。4 は TB-1。畳付の釉は拭き取られるが、畳付内外に砂が多く付着する。5、6 は灰釉皿である。5 は見込みに直重ね痕がみられる皿で TC-2-b。二次的な火熱を受ける。6 は輪剥皿で TC-2-m。見込み中央は一段低く削り込まれ、その周囲の釉が拭き取られる。輪剥部分にはトチ痕が3箇所認められるが、高台内にも1箇所トチが付着した状態が認められる。なお高台部は無釉であるが、全体にススが付着し、黒色化している。7、8 は土器である。7 はかわらけで DZ-2-b。底部には腰折れ状痕が確認さ

れる。口縁部に灯心痕が1箇所認められる。8は破片であるが、平底のほうろくと推定されるものでDZ-47-b。器面全体が黒色を呈す。体部外面には数箇所の指頭圧痕があり、体部と底部の境はやや幅広くケズリ調整される。

**SF1727 (IV-468 図)**

1は丹波系播鉢でTK-29。外面には鉄泥が施される。播目は8条1単位。なお本品は炉状遺構の灰層下で検出されたものである。割れ口が一部丸く摩耗した箇所があるが、炉状遺構として使用中に摩耗したのか、あるいは炉状遺構に付設する為に意識的に加工したものかは判断できない。

**SD1747 (IV-468、469 図)**

1～6、25は磁器で、6が景德鎮窯系、他は肥前系である。1～3は高台の断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c。いずれも高台内に銘があり、1は一重枠に「大明成化年製」、2、3は「宣明年製」銘である。4は初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の染付皿でJB-2-s。全体に灰色味を帯びる。畳付釉は削り取られる。5は染付丸形坏でJB-6-a。5は染付である。6は青花鉢でJA1-5。腰部や口縁部には虫喰いが認められる。畳付両側は削られ、高台の断面形が台形を呈す。割れ口に漆継痕跡が残る。7～9は陶器である。7、8は瀬戸・美濃系灰釉輪剥皿・平鉢でTC-2-m。8の高台はいわゆる兜巾高台である。ともに見込みは蛇ノ目状に拭き取られ、その部分に輪状の熔着痕が認められる。9は京都・信楽系鉢でTD-5。胎土は非常に緻密な乳白色を呈し、外面には黒釉、内面には透明釉が施釉される。高台内は「ハ」の字状に削り込まれ、無釉である。10～24は土器である。10～22はかわらけで、15～18、22の口縁部に灯心痕がみられる。10、11、13、14、18、20はDZ-2-aに分類される。20は底部外側が赤化している。10、13の底部には離れ糸切り痕がみられる。12、15～17、19、21、22はDZ-2-bに分類される。23は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。団子状の内耳が2箇所残る。底部と体部境はケズリ調整される。外面にススが付着する。24は断面形がドーム形を呈す、無印の塩壺蓋でDZ-00-a。二次焼成により胎土が焼締まっている。

25はミニチュアの白磁碗でJB\_2001\_Wに分類される。腰が張り丸味が強く、器高の高いもので、高台は無釉で歪みがある。虫喰いが観察される。

**SB1780 (IV-469 図)**

1は肥前系磁器の初期伊万里染付碗でJB-1-a。2は瀬戸・美濃系灰釉皿でTC-2-b。削り出し高台である。見込み輪状の直重ね痕が認められる。3はかわらけでDZ-2-b。底部に腰折れ状痕が確認される。口縁部1箇所に灯心痕が認められ、底部は赤化している。

**SB1782 (IV-470 図)**

1～3は肥前系磁器皿である。1は高台の断面形が三角形を呈す染付皿でJB-2-c。高台内にピン痕が1箇所ある。2は初期伊万里染付皿でJB-2-a。型打ち成形で、体部が輪花にされる。3は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた青磁皿でJB-2-k。口縁部はわずかに外反し、蛇ノ目部分に輪状の熔着痕が認められる。4～7は陶器で、7は丹波系、他はすべて瀬戸・美濃系である。4は鉄釉鉛釉流し掛け碗でTC-1。体部外面に糸目状のケズリが認められる。器厚は薄い。5、6は外面にしのみのある灰釉菊皿でTC-2-k。ともに型打ちで、体部内面は菊花状に成形され、口縁部は浅く「V」字状に削り込まれ輪花状を呈すが、5の方が内面の花卉の表現が細かく、緑釉が流し掛けられる。ただし外面のしのみは、5は非常に浅く、粗い。7は内外面に鉄泥が施された播鉢でTK-29。播目は6条1単位で密に入れられる。

**SL1783・SL1784 (IV-470 図)**

1は肥前系磁器染付壺でJB-15。2はかわらけでDZ-2-a。底部には離れ糸切り痕がみられる。口縁



部にタール状の灯心痕がほぼ全周する。

**SL1784** (IV-470、471 図)

1は肥前系磁器染付丸形坏でJB-6-a。2、3は陶器碗である。2は瀬戸・美濃系鉄釉天目碗でTC-1-a。2は厚く施釉され、外面高台付近に釉溜まりができています。3は外面に鉄絵のある肥前系のいわゆる京焼風陶器碗でTB-1-b。高台内の削りが浅く、行書で「清水」と刻印される。4～7は土器である。4、5はかわらけでDZ-2-b。ともに腰折れ状痕が確認される。4は軟質瓦質のような胎土である。5は口縁部1/2ほどに灯心痕が認められる。6、7は瓦燈の蓋と身でDZ-45。ただし径が異なるので、対ではないようである。6は胴部に長方形のスリットが3箇所ある。空気孔はスリット上方に3箇所、相対する位置に1箇所ある。受け皿端部には灯心痕が認められるが、その端部を二次的に平らに削ったような痕跡が認められる。7の受け部には舌状の立ち上がりを有す。底部脇は面取りされる。

**SK1798** (IV-472 図)

1は軟質瓦質角火鉢でDZ-31-f。器面が全体に白色化し、底部内面中央は円形に摩滅している。

**SF1804** (IV-471 図)

1は瀬戸・美濃系陶器鉄釉筒形片口鉢でTC-23-a。底部は碁笥底である。口縁部には敲打痕がみられるが、敲打痕は欠損している注口部までおよんでおり、敲打痕は注口欠損後についたものである。

**SB1822** (IV-471 図)

1は肥前系磁器の初期伊万里染付皿でJB-2-a。内面にピン痕?が1箇所認められる。2、3は肥前系陶器である。2は透明釉砂目皿でTB-2-d。胎土はいわゆる卵手で、見込みには目跡が3箇所残る。畳付の釉のみ削られ、高台内まで全釉掛けされる。3は象嵌大平鉢でTB-3-b。外面下半も鉄釉が渦刷毛状に薄く施釉される。内面に団子状の砂目痕が6箇所ある。

**SR1826** (IV-473 図)

1～5は磁器で、1、2は瀬戸・美濃系、3～5は肥前系である。4は白磁、他は染付されたものである。1、2は端反形碗でJC-1-d。ともに器高が低く、口縁部内側の文様は圏線のみという後出的な様相を呈す。呉須には細かな気泡が多くみられる。3は糸切細工、貼付高台の形皿でJB-2-r。口縁部、高台とも長方形を呈すが、口縁部四隅には、しのぎが入れられる。高台内には「富貴長春」銘が書かれている。4はいわゆる紅皿でJB-6-e。形作りで、外面には細かいしのぎがある。5は広東碗蓋である。摘み内に銘がある。6～9は陶器で、6は肥前系、7、8は瀬戸・美濃系、9は産地不明のものである。6、7は皿である。6は青緑釉輪剥皿でTB-2-a。輪剥部分と畳付に砂目痕が2箇所残る。7はいわゆる御深井皿でTC-2-e。底部内面には鉄の摺絵と、その周囲にトチ痕が2箇所残る。8は容量が二合半の灰釉徳利でTC-10-c。頸部が短く、肩が張るタイプである。口唇部の釉は拭き取られる。無釉の底部には「㈬半」の墨書がある。これと同様の文字が釘書きされた徳利が、工学部1号館地点でも一升、五合、二合半の各容量で確認されている。9は鉄釉土瓶の蓋である。10、11は土器である。10は無脚で、透明釉が施釉された油受け皿でDZ-40-b。底部には左回転糸切り痕がある。11は土錘と推定される。胎土は明橙色を呈し、小さな気泡がみられる。円筒状に成形した後、中央を穿孔している。

**SF1845** (IV-474 図)

1は丹波系陶器播鉢でTK-29。炉状遺構の中に丸瓦とともに埋設されていたものである。播目は8条1単位で入れられ、口縁部1箇所を上下から押さえ外側へ押し出すようにして注口部を作り出している。なお二次的に口縁部1箇所を浅く「V」字状にカットし、底部も不整形に穿孔しているが、元々欠損していた箇所を加工、整形した可能性もある。底部付近は強く二次的に被熱したように器面が赤化している。

## SR1855 (IV-474～477 図)

SR1855は遺物を層位上げしており、1～23は砂利層、24～42は砂利下層から出土したものである。

1～5、24～30は磁器で、25は景德鎮窯系で、他は肥前系である。1～3、24は碗である。1は鉄釉が施釉された初期伊万里でJB-1-a。口縁部は緩やかに外反する。畳付の釉は削り取られる。なお口縁部の割れ口部分に釉が掛かっており、焼成前にすでに口縁の一部が浅い「U」字状に欠けていた可能性がある。2は底部無釉青磁碗でJB-1-b。3、24は高台の断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c。24の高台内には染付で一重圏線と銘が書かれている。4、5、25、26は皿である。4は初期伊万里染付皿でJB-2-a。いわゆる日字鳳凰文皿と思われる。5、26は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎ青磁皿でJB-2-k。26の口縁端部は外反する。25は青花皿でJA1-2。胎土はやや黄色味を帯びた乳白色で、ガラス質である。呉須は黒ずむ。高台の釉は削り取られる。漆継されていた痕跡が割れ口に認められる。27は脚部の削りが浅い染付仏飯器でJB-8-b。畳付には砂が付着する。28は高台状の露胎部を有す青磁香炉・火入れでJB-9-c。方形の足が3箇所貼付られていた痕跡が残る。29は初期伊万里の染付瓶でJB-10-e。畳付内側に砂が多量に付着する。30は白磁筒形蓋物でJB-13-b。

6～16、31～41は陶器である。6～9、31、32は碗である。6～8は肥前系で、6、7はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。8は体部が直線的に開き、透明釉が施釉された碗でTB-1-j。いわゆる卵手の製品で、底部内面には砂目痕が2箇所残る。9、31は瀬戸・美濃系である。9は灰釉碗でTC-1-aa。31は鉄釉碗でTC-1-ag。畳付以外、高台内まで施釉される。32は産地不明灰釉碗でTZ-1。胎土は緻密で灰色を呈す。畳付も含めて総釉掛けされるが、畳付には砂目痕が3箇所ある。10～15、33～39は皿である。10、15、33は肥前系(TB-2)である。10は透明釉が施釉された皿でTB-2。削り出し高台で、畳付まで含めて総釉掛けされる。底部内面には砂目痕が4箇所ある。15はTB-2。焼成不良であり、釉がとび、下地の白化粧土が露出している。胎土は緻密で、にぶい橙色を呈す。化粧土は畳付以外全体に施される。底部内面に細長い砂目痕が4箇所ある。33は肥前系青緑釉輪剥皿でTB-2-a。見込みの蛇ノ目部分は1段低く削り込まれ、その部分には砂目痕が4箇所ある。11～14、34～39は瀬戸・美濃系である。11、34は見込みに輪状の直重ね痕がある灰釉皿でTC-2-b。ともに削り出し高台である。12は見込みに3箇所のピン痕のある灰釉皿でTC-2-a。底部中央には径5mmほどの二次的な穿孔が認められる。13、36～38は外面にしのごのある灰釉菊皿でTC-2-k。型打ち成形で、口縁部は浅い「V」字状に切り込みを入れ、菊花状にしている。見込みには輪状の沈線とピン痕がある。14はいわゆるタタラ成形で葉形にされた脚付灰釉形皿でTC-2-x。灰釉は青味を帯びたいわゆる御深井釉に近いものである。3足が貼付られていたと推定されるが、3つの足で囲まれた部分の釉は拭き取られ、その部分にピン痕が1箇所認められる。35は長石釉丸皿でTC-2-c。総釉掛けされ、見込みにはピン痕が1箇所、高台内には輪状の熔着痕が認められる。39はいわゆる志野織部皿でTC-2-s。口縁部外面から内面に掛けて藁灰釉のような白濁した釉が施釉されるが、見込みの釉は拭き取られる。見込み部分には輪状の熔着痕が認められる。16は瀬戸・美濃系鉄釉坏でTC-6。底部内面にピン痕が3箇所ある。40は丹波系播鉢でTK-29。播目は6条1単位で密に施され、体部外面には指頭圧痕が認められる。41は瀬戸・美濃系鉛釉蓋である。擬宝珠形の摘みを1つ有す。裏側は無釉であるが、輪状の熔着痕が認められる。蓋物の蓋か。

17～23、42は土器である。17～19、42はかわらけで、17、42は口縁部に灯心痕が認められる。17、19、42はDZ-2-a。42の底部には離れ糸切り痕がある。18はDZ-2。内面に墨書があるが細片のため判読できない。20は土師質丸底のほうろくでDZ-47-a。体部と底部の境が面取りされる。団子状の内耳が1箇所残る。底部にはススが付着する。21、22は輪積成形の塩壺である。21はDZ-

51、22 は一重椀「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のあるもので DZ-51-b。22 の内面は二次焼成により淡桃色を呈す。23 は断面形がドーム形を呈す塩壺の蓋で DZ-00-a。器高が高く、天井部と受け部との境が丸味を帯びている。

#### SR1856 (IV-477、478 図)

1、2 は肥前系染付磁器皿である。1 は初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の皿で JB-2-s。呉須は全体に黒ずむ。2 は糸切り細工、貼付高台の皿で JB-2-r。高台は方形を呈す。高台内には二重角椀「渦福」銘が書かれている。

3～13 は陶器で、3、4、6、9、10 は肥前系、5、7、8、11～13 は瀬戸・美濃系のものである。3～5 は碗である。3 はいわゆる呉器手碗で TB-1-a。見込み付近に渦状の細かい擦痕が多数認められる。4 は外面に鉄絵のある、いわゆる京焼風陶器碗で TB-1-b と思われる。体部が外側に開き気味に立ち上がり、器高も高い。また高台内の削り込みが外側より内側が浅いなど、初出の様相を呈すものである。5 は瀬戸・美濃系の尾呂茶碗で TC-1-o。幅広の蛇ノ目高台を有し、内外面ともに口縁部より少し下の辺りから底部付近にかけてうのふ釉が流し掛けされる。6～8、10 は皿である。6、10 は見込み蛇ノ目釉剥皿で TB-2-a。6 は高台内がアーチ状に大きく削り込まれる。内外面に灰釉が施釉され、豊付釉のみ拭き取られる。見込みの蛇ノ目部分は一段低く削られ、その部分に輪状の熔着痕が認められる。10 は青緑釉が施釉されたものである。見込みが蛇ノ目状に一段低く削り込まれ、薄く錆釉が施釉され、その周囲にはヘラ状のもので陰刻が施される。蛇ノ目部分には砂目痕が5箇所ある。豊付の釉は拭き取られる。7 は見込みにピン痕が2箇所残る灰釉皿で TC-2-a。削り出し高台であるが、豊付のケズリは雑である。8 は見込みに輪状の直重ね痕のある灰釉皿で TC-2-b。高台内に深めの沈線が圈線状に一周している。9 は刷毛目鉢で TB-5-a。刷毛目が波状に白化粧土で施され、体部上半は緑釉と黄釉を掛け分け、下半には鉄釉を施釉している。11 は灰釉香炉・火入れで TC-9-a。底部には円錐状の足が2箇所残る。口縁部には敲打痕が認められる。12 は錆釉播鉢で TC-29。播目は12条1単位で、やや粗く入れられている。底部には右回転糸切り痕が残る。底部内面付近は、摩滅し、露胎している。13 は鉄釉壺・甕の鉤状摘みを有す蓋である。

14～16 はかわらけで、口縁部に灯心痕が認められる。14 のそれは口縁部をほぼ全周する。14 は DZ-2-a、15、16 は DZ-2-b に分類される。

#### SR1857 (IV-479～481 図)

1～14 はすべて肥前系磁器である。1～5、9～12 は染付、6～8、13 は青磁、14 は白磁である。1～8 は皿である。1 はいわゆる初期伊万里で JB-2-a。豊付の釉は削り取られるが、砂が多く付着している。見込みには「大明成」の銘が書かれている。2～4 は高台の断面形が三角形を呈す染付皿で JB-2-c。2 の高台内には「角福」銘が書かれ、ハリ支え痕が1箇所認められる。3 の高台内にもハリ支え痕が1箇所ある。5 は初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の皿で JB-2-s。6～8 は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿で JB-2-k。高台以外は施釉されるが、6 は高台に、7 は高台と蛇ノ目釉剥ぎ部分に輪状に、8 は蛇ノ目釉剥ぎ部分全体に砂が付着している。9 は高台断面形が「U」字状を呈す大皿・大平鉢で JB-3-a。釉は生掛けされ、高台脇には手痕が認められる。10 は体部が丸形を呈す鉢で JB-5。外面には一重網目文が染付される。11、12 は坏で、11 は端反形を呈すもので JB-6-b、12 は丸形を呈すもので JB-6-a に分類される。12 には漆継痕が認められる。13 は底部蛇ノ目釉剥ぎされた香炉・火入れで JB-9-b。内外面施釉され、蛇ノ目部分にも錆釉が施釉される。なお蛇ノ目部分には輪状の熔着痕が認められる。外耳が2箇所残る。14 は蓋物の蓋である。受け部の釉は拭き取られている。



15～32は陶器である。15～19は碗で、15は肥前系、16は産地不明、17～19は京都・信楽系である。15はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。16は灰釉碗でTZ-1。胎土は比較的緻密で、淡灰色を呈す。畳付と高台内中央部分のみ釉が拭き取られる。口縁部から体部外面上半に緑釉が流し掛けされる。17、18はTD-1。17は白色の胎土に透明釉が施釉されたもの。無釉の高台内には「○」の中に「□」に「佐」という刻印がある。これと同様の刻印をもつ碗が御殿下地点902号遺構でも出土しているが、それは腰が張り、外面に銹絵染付が施された碗である。18は黄白色の胎土に灰味をおびた透明釉が施釉されたもの。高台内には小判形に「京」の刻印がある。19は透明釉が施釉された丸碗でTD-1-c。畳付脇は面取りが施される。高台内中央に小さな円刻が施され、その脇に楕円に「清閑寺」の刻印がある。20～26は瀬戸・美濃系皿である。20、21は灰釉端反皿でTC-2-y。20は見込みにピン痕が3箇所、21は見込みに輪状の直重ね痕がある。22は鉄釉輪禿皿でTC-2-m。口縁端部が上方に立ち上がる。蛇ノ目状の輪禿部分には輪状の熔着痕が認められる。23は外面にしのぎのある灰釉菊皿でTC-2-k。内面は型打ちで細かな菊花状にされ、見込みは沈線が一周する。口唇部は「V」字状に削られ菊花状にされる。高台は外側に開く。24は口縁直下に沈線が2本、見込み周囲に沈線が2本巡る灰釉皿でTC-2。口唇部は22とよく似た断面形状を呈すが、部分的に指でくぼまされている。25、26は輪高台を有す形皿でTC-2-i。25は木瓜形を呈す。灰釉が施釉されるが、高台内は無釉である。26の口縁部は葉状を呈す。白色のガラス質の釉が施釉され、器面には大きな貫入がある。畳付の釉のみ削られる。27～29は香炉・火入れで、27、28は瀬戸・美濃系、29は肥前系である。27は鉄釉が施釉されたものでTC-9-b。底部には足が2箇所残る。内外面施釉されるが、口唇部の釉は拭き取られる。体部外側2箇所、底部内面に熔着痕が認められる。28は灰釉が施釉されたものでTC-9-a。口唇部には敲打痕が認められる。29は青緑釉が施釉されたものでTB-9-d。欠損のため全体的な形状は不明だが、高台数箇所に角張ったアーチ形のスリットが入れている。30は京都・信楽系の黒釉茶入れでTD-26。肩が張ったいわゆる肩衝茶入である。底部には右回転糸切り痕が残る。釉は浸け掛けされる。31、32は播鉢で、31は瀬戸・美濃系でTC-29、32は丹波系。31は内外面に鑄釉が施釉され、播目は太めのもので、9条1単位で、やや間隔をあけて施される。32は8条1単位で播目がかかなり密に施されている。底部の器厚が非常に厚い。

33～39は土器である。33～37はかわらけで、33～35、37には灯心痕が認められるが、33、35はそれが口縁部を全周する。33～35、37はDZ-2-a。34の底部には離れ糸切り痕がみられる。37は畳付脇にケズリが施される。36はDZ-2-b。内面のみ器面が黒色化している。38、39は輪積成形の塩壺でDZ-51。38は一重枠の「堺見」のみ刻印が残る。39は刻印の方形枠が一部残存するのみで判読できない。胴部下半に右斜め上方向の擦痕がある。

SR1858 (IV-482 図)

1、2は肥前系磁器皿である。1は高台の断面形が三角形を呈す染付皿でJB-2-c。型打ちで、口縁部が輪花にされ、口銹が施される。2は見込み蛇ノ目釉剥ぎ皿でJB-2-l。蛇ノ目釉剥ぎ部分と畳付に砂が付着している。3、4は陶器である。3は京都・信楽系碗でTD-1-c。高台脇はやや幅広く面取りされる。白泥による細かい渦刷毛目が内外面にみられる。高台内には小判形の銘がある。4は肥前系刷毛目平鉢でTB-2-g。畳付脇に面取りが施される。底部内面に砂目痕が5箇所ある。5は土器で、輪積成形、「天下一御壺塩師堺見など伊織」の刻印のある塩壺でDZ-51-d。

SR1859 (IV-482～484 図)

1～6、19はすべて肥前系磁器で、4が青磁染付、6が白磁、他はすべて染付が施される。1～3は皿である。1は蛇ノ目高台を有すものでJB-2-h。蛇ノ目部分は鉄が施釉され、その部分に直重ね

痕が認められる。2は初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の皿でJB-2-s。3は高台断面がシャープな「U」字状を呈すものでJB-2-eに分類される。4、5は丸形坏でJB-6-a。5は二次的な火熱を受けている。6は壺・甕の蓋である。

7～14は陶器である。7～9、13は肥前系、10、12は瀬戸・美濃系、11は備前系、14は丹波系である。7、8はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。8は体部中程がわずかに括れる。9～11、13は皿である。9は青緑釉輪禿皿でTB-2-a。見込みと畳付に半月状の砂目痕が4箇所ある。口縁部に1箇所、二次的に浅く「U」字状にカットした痕跡が認められる。10は外面にしのぎのある菊皿でTC-2-k。削り出し高台であるが、高台内の削りが浅い。口唇部に局所的に灯心痕が認められる。11はロクロ成形された皿でTE-2-a。焼き締めされたものである。口縁部を上下に挟む扁平な耳が1箇所残る。灯火皿か。13は肥前系刷毛目平鉢でTB-2-g。底部内面には砂目痕が5箇所みられる。12はいわゆる煙硝播でTC-64。内外面体部下半および底部は無釉である。内面中程に熔着痕が認められる。14は丹波系播鉢でTK-29。畳付のすぐ上が強く括れ、それより上側の外面に沈線がある。播目は7条1単位で施される。

15～18は土器である。15、16はかわらけでDZ-2-b。ともに底部には腰折れ状痕が確認される。15の口縁部に灯心痕が認められる。17は輪積成形、無印の塩壺でDZ-51-aa。胎土に砂を多く含む。口縁部内側に指頭圧痕が顕著に認められる。18は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋でDZ-00-a。

19はミニチュアの蓋で、JB\_2013\_Mに分類される。摘み部は貼付で、裏面は無釉である。上面に花卉文様を描いている。

#### SU1886 (IV-484 図)

1は景德鎮系の青花碗でJA1-1。高台は削り出しで、兜巾高台状を呈し、無釉である。透明釉は青味を帯びる。2は棒状土製品である。胎土は均質で、淡桃色を呈す。ほぼ完形であるが、裏面は剥離している。直方形の枠内に文字あるいは記号のような押印がある。なお本製品と同器種と思われるものが、D面焼土でも2点(IV-65 図514、515)出土している。

#### SU1892 (IV-484、485 図)

1、2は磁器、3～6は陶器、7、8は土器である。1、2はいずれも肥前系磁器である。1は高台断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c。高台内に二重角枠の「福」字銘が書かれている。2は高台断面形が三角形を呈す色絵染付皿でJB-2-c。裏文様は染付と色絵で、見込みは色絵で絵付けが施される。色絵はザクロか。3は肥前系刷毛目大平鉢でTB-3-a。見込みには砂目痕が5箇所残る。4～6は瀬戸・美濃系陶器である。4は黒釉丸碗でTC-1-ag。削り出し高台であるが、高台内の削りが浅い。高台付近の釉は拭き取られる。見込みには擦痕が認められる。5は鉄釉が施された舟徳利でTC-10-f。肩部には自然釉がみられる。6は柿釉壺・甕の蓋である。裏側には右回転糸切り痕が残る。7、8はかわらけでDZ-2-a。7の口縁部には灯心痕は認められないが、小さく「U」字状にカットされている箇所が1箇所ある。8は口縁部に灯心痕が1箇所認められる。

#### SK1952 (IV-485 図)

本遺構は層位上げをしている。1、2、4は焼土層、3、5～8は砂層、9、10は掘方から出土したものである。なお1、2、4は二次的な火熱を受ける。1は肥前系磁器の白磁端反形坏でJB-6-b。2～5、9、10は陶器である。2は京都・信楽系、10は肥前系、他は瀬戸・美濃系である。2は非常に薄造りの碗でTD-1。被熱しているため釉調が判然としないが、灰釉ないし透明が施釉され、口唇部には鉄が施される。なお外面には渦刷毛目のような文様もわずかに確認できる。器形は杉形に近いが、口縁部はわずかに外反する。畳付は内外側ともに面取りされる。見込みには目跡が2箇所ある。3は灰

釉碗で TC-1-aa。高台脇から胴部にかけてケズリが顕著である。4 は鉄釉瓶で TC-10。5 は錆釉挿鉢で TC-29。挿目は 14 条 1 単位で施され、畳付にはトチ痕が 4 箇所ある。なお本製品は底部付近のみが出土しているが、割れ口は二次的に調整され丸味を帯びている。9 は透明釉が施釉され、見込みにヘラ状の陰刻がある皿で TC-2-b。高台は無釉で、高台内にケズリの縮れが残る。見込みには輪状の直重ね痕が認められる。10 は肥前系灰釉砂目皿で TB-2-b。畳付以外、高台内まで施釉される。見込みには砂目痕が 3 箇所、畳付には 2 箇所残る。6～8 はかわらけで DZ-2-a。いずれもタール状の灯心痕が口縁部を全周する。また 6 の内面には砂と鉄塊が付着している。

SK1962・SK1965・SK1966 (IV-486、487 図)

遺物総量は多くないが、完形率が比較的高い。

1～4、22 は肥前系磁器である。1 は高台の断面形が三角を呈す染付碗で JB-1-c。2 は底部無釉の見込み蛇ノ目釉剥皿で JB-2-k。見込み蛇ノ目釉剥ぎ部分は全体より一段低く削り込まれ、直重ね痕が認められる。青磁釉は生掛けされる。3 は白磁の合子で JB-18。手づくねで小判形に成形され、底部付近のみ長辺方向に面取りしている。4 は蓋物の蓋である。

5～16 は陶器である。5～11 は碗で 5～8 は肥前系、9～11 瀬戸・美濃系碗である。5～7 はいわゆる呉器手碗で TB-1-a。いずれも腰が張り、器高が高いタイプである。5、6 の高台内側はアーチ形に削り込まれる。8 はいわゆる京焼風陶器の外面に主文様があるもので TB-1-b。高台内中央付近に浅い円刻が施され、「小松吉」の銘が刻印される。9 は高台無釉の灰釉丸碗で TC-1-aa。10 は長石釉丸碗で TC-1-aj。胎土は乳白色で、釉の発色は白から透明に近いものである。高台無釉である。11 は鉄釉丸碗で TC-1-ag。高台は兜巾高台状を呈す。12～16 は皿で、12、16 は肥前系、13～15 は瀬戸・美濃系である。12 は青緑釉輪剥皿で TB-2-a。畳付脇はケズリ調整され、稜を有す。16 は砂目皿で TB-2-b。口縁部のすぐ内側には渦状の文様が陰刻され、外面鉄釉、内面緑釉が施釉される。内面には砂目痕が 7 箇所、畳付にも砂目痕が少なくとも 3 箇所認められる。13 は外面にしのごのある菊皿で TC-2-k。高台と体部の境は強く撫でられ、稜を有す。内面は型打ち成形で菊花状にされ、口唇部は「V」字状に浅く削り込まれ、細かな菊花形にされる。見込みにピン痕が 3 箇所ある。14 は輪高台を有す灰釉形皿で TC-2-i。内側面は菊花状にされ、見込みにはクローバーのような押形文が施される。口唇部にも小さく「V」字状のしのごが入れられ、細かい輪花状を呈すが、口縁部 1/2 ほどには敲打痕とわずかに灯心痕も認められる。15 は灰釉輪禿皿で TC-2-m。見込みは一段低く削り込まれる。

17～21 は土器である。17、18 はかわらけで、ともに灯心痕がみられるが、17 は底部のみに確認される。17 は DZ-2-a、18 は DZ-2-b。18 の底部には腰折れ状痕が確認される。19、20 は丸底ほうろくで DZ-47-a。19 は口縁がやや内傾する。紐状の内耳が口縁部から逆「く」字形に貼り付けられる。底部は比較的丁寧にナデ調整され、底部によくみられる縮れがみられない。全体的にススが付着するが、特に外面は著しい。20 の底部と体部境付近は面取りされる。通常ある内耳をもたないが、二次的に体部 1 箇所に円孔が穿たれ、その内側は摩滅している。内外面底部にススが付着する。21 は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋で DZ-00-a。一部赤化している。

22 は円盤状製品で、JB\_4008\_A に分類される。白磁碗の転用品である。

SK1966 (IV-487、488 図)

2 は肥前系の初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の染付磁器皿で JB-2-s。胎土はやや灰色を呈す。1、3～6 は陶器で、1 が京都・信楽系、3 が肥前系、4～6 は瀬戸・美濃系のものである。1 は平碗で TD-1-h。見込みには染付と目跡が 3 箇所、高台内には楕円形に「京」の



刻印がある。3、4は皿で、3は青緑釉輪剥皿でTB-2-a。高台脇の調整は雑である。見込みにはわずかに砂目痕が認められる。4は見込みに直重ね痕のある灰釉皿でTC-2-bに分類される。5は体部がらつきょう形を呈す灰釉水注でTC-27-d。緑釉が流し掛けられ、内面も施釉される。6は鎊釉播鉢でTC-29。底部には右回転糸切り痕が認められるが、外周は摩滅し、露胎している。播目は11条1単位で施され、外面底部付近の釉は拭き取られる。底部内面にはわずかに団子状トチ痕が2箇所確認される。7～9はかわらけですべてに灯心痕が認められる。7、9はDZ-2-a。7の底部には離れ糸切り痕がみられる。8はDZ-2-b。口縁部の灯心痕が局所的に削り取られ、口縁部内側が平らになっている。

#### SK2039 (IV-488 図)

1は陶器、2～5は土器である。1は肥前系陶器(TB)のいわゆる京焼風陶器でTB-1-b。半球形を呈し、外面の相対する位置に絵付けが施される。高台内が一段浅く削り込まれ、その中に行書の「清水」の刻印が施される。2～3はかわらけでDZ-2-a。3の底部には離れ糸切り痕がみられる。2、3の口縁部には灯心痕が全体にみられる。5は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、団子状の内耳が2箇所残る。底部にはチヂレがみられ、内外面にススが付着する。

#### SK2044 (IV-489 図)

1～3は磁器で、1、3は肥前系、2は景德鎮窯系である。1、2は皿である。1はいわゆる初期伊万里染付皿でJB-2-a。器厚は全体に薄く、高台内には二重角枠に「福」銘が書かれている。2は青花皿でJA1-2。器厚は薄く、呉須の発色も良好である。畳付外側の釉は小さく削り取られる。高台内には一重圏線に「雅」銘が書かれている。3は染付された壺・甕あるいは蓋物の蓋である。裏側は無釉で、中央付近が円盤状に小さく削り出される。円盤状の凸部の外側に輪状の熔着痕が認められる。

#### SD2082 (IV-489～491 図)

1～8は磁器で、1が青磁、3が白磁、他は染付が施されたものである。4、5は景德鎮窯系、他はすべて肥前系である。1～3は碗である。1は底部無釉碗でJB-1-b。口縁はわずかに肥厚し、外反する。2は高台断面が「U」字状を呈すものでJB-1。焼成不良で、器形は肥前系陶器のいわゆる京焼風陶器碗の器形と酷似するものである。いわゆる拳骨茶碗のように体部数箇所にくぼみがある。3はいわゆるうがい茶碗でJB-1-tに分類される。4～8は皿である。4、5は青花皿でJA1-2に分類される。4は腰が張った鏝皿で、呉須の発色も良好である。5は丸形皿で、高台内にカンナ痕が顕著に認められる。呉須の発色は鈍い。6、8はいわゆる初期伊万里の皿・平鉢でJB-2-a。釉は生掛けされる。8は型打ち成形でされ、体部はゆるやかな輪花を呈す。内面には布目痕が認められる。7は初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製の染付皿JB-2s。口縁部は緩やかに外反する。

9～14は陶器で、9は肥前系、他は瀬戸・美濃系である。9は肥前系の碗でTB-1。胎土は緻密な灰色を呈す薄造りな碗である。口縁は不整円形を呈す。高台は撥形に開き、高台内はアーチ状に削り込まれている。畳付は平坦で、その外周は小さく面取りされる。畳付まで含めて透明釉が総掛けされ、畳付には砂目痕が5箇所ある。10～12は皿で、10、11はピン痕のある灰釉端反皿でTC-2-yに分類される。10は見込みにピン痕が1箇所残り、高台にススが付着する。11は総釉掛けされ、見込みと高台内にピン痕が1箇所残る。12は長石釉皿でTC-2-c。高台内に3箇所ピン痕が確認される。13は鉄釉香炉・火入れでTC-9-b。総釉掛けされ、底部に3足を有す。底部内外面には4～5mm大のトチ痕が認められる。14は鎊釉播鉢でTC-29。播目は17条1単位として6単位施され、間隔が広い。内面の団子状トチ痕部分と底部付近の釉は拭き取られている。

15～22は土器である。15～20はかわらけである。18以外すべてに灯心痕が認められるが、20の灯心痕は口縁部の3箇所に点在する程度で、他のものはほぼ口縁部を全周する。特に19は、

内外面ともに口縁部から底部中央にかけて舌状に集中する箇所がある。15～17、20はDZ-2-a、18、19はDZ-2-bに分類される。16の体部外面はロクロの凹凸が目立つ。20の外面の底部と体部境には小さな段差がある。21は軟質瓦質の瓦燈の上皿でDZ-45。端部は丁寧にミガキ調整されていたようだが、端部内側は二次的な調整痕が認められる。皿内に「廿九」のヘラ書きがある。22は土師質の管状製品である。表面は摩滅しているが、器形は完全な状態である。性格は不明。

SK2083 (IV-491 図)

1、2は肥前系磁器の染付端反坏でJB-6-b。ともに高台内に銘があるが、1は「太明成化年製」と判読できる。3～7は陶器である。3～6は碗で、3、5、6は肥前系、4は京都・信楽系である。3、5はいわゆる呉器手碗でTB-1-a、6は灰釉平碗でTB-1に分類される。6の豊付釉は削り取られ、器面には比較的細かな貫入がみられる。4は非常に緻密な胎土の腰張り灰釉碗でTD-1。高台内が一段小さく削り込まれ、その中に長方形枠の銘がある。7は瀬戸・美濃系の外面にしのごある灰釉菊皿でTC-2-k。口唇部は平らにされ、「V」字状に浅く削り込まれ、細かな菊花形にされる。口縁部には緑釉が流し掛けられる。見込みには3箇所目跡がある。8～14は土器である。8～13はかわらけで、11はDZ-2-b、それ以外はDZ-2-aに分類される。8、9の底部には離れ糸切り痕、11の腰折れ状痕が確認される。8は高台脇が強くナデられ、稜を有す。底部の一部は赤化し、口唇部3箇所に灯心痕が認められる。9は底部に裏側から二次的な穿孔が1箇所施される。12の底部も一部赤化している。13は口唇部に2箇所灯心痕が認められる。14は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋でDZ-00-a。胎土は粗く、白色砂を多く含む。内外目にススが付着する。

SK2098 (IV-492 図)

1、2は肥前系染付磁器である。1は底部無釉、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた皿でJB-2-k。豊付外周は面取りされ、内面に染付が施される。蛇ノ目部分に輪状の熔着痕が認められる。2はいわゆる初期伊万里の瓶でJB-10-e。豊付周囲には粗い砂が付着する。直接接合はしないが、破片から外面には一重網目文が染付されていたことがわかる。3～6は陶器で、3、4は肥前系、5、6は瀬戸・美濃系である。3はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。大振りで、高台高も高い。高台内はアーチ状に深く削り込まれ、「ハ」の字状に開く。4は青緑釉輪剥皿でTB-2-a。見込み中央付近に砂目痕が1箇所認められる。5は脚付きの灰釉形皿でTC-2-x。タタラ成形で、木の葉形を呈す。内側面には縦位の細かい沈線がある。底部には3足が貼り付けられる。6は高台を有す鉄釉壺・甕でTC-15-f。外面はケズリが顕著で、胴部中程に稜を有す。内面も施釉される。7、8は土器である。7はかわらけでDZ-2-a。残存する口縁部全体に灯心痕が認められる。8は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。内耳が1箇所残り、体部外面と底部境には面取りが施される。底部にはススが付着する。

SK2105 (IV-492、493 図)

1は景德鎮窯系磁器の青花鉢でJA1-5。幅広の高台を有し、口縁部は外反する。内外面に呉須で渦状の圏線が描かれる。本製品は多くの遺構や包含層から破片が出土し、接合している。2～5は陶器で、2は瀬戸・美濃系、3、5は肥前系、4は丹波系である。2は灰釉皿でTC-2-a。見込みにはピン痕が少なくとも2箇所残る。底部中央が高台より外側へ突出し、豊付が浮く。3は刷毛目が施された大平鉢でTB-3-a。底部内面には砂胎土目痕が5箇所認められる。豊付外側が小さく面取りされる。5は象嵌の壺・甕の蓋である。受け部は削り出しである。4は播鉢でTK-29。小さな注口部が1箇所ある。播目は7条1単位で施される。6はかわらけでDZ-2-b。底部には腰折れ状痕が確認される。

SK2111 (IV-493、494 図)

1～3は肥前系染付磁器である。1は高台の断面形が三角形を呈す皿でJB-2-c。豊付に白色砂が付

着する。2は高台断面形が三角形を呈す鉢でJB-5-f。薄造りで、絵付も丁寧なものである。高台内には二重圏線と「宣徳年製」銘が書かれている。3はいわゆる初期伊万里の瓶でJB-10-e。胴部のロクロ目が顕著である。畳付釉は平らに削り取られているが、粗い砂が多く付着する。

4～6は陶器である。4は肥前系のいわゆる呉器手碗でTB-1-a。器面に細かい貫入が目立つ。5は瀬戸・美濃系透明釉形皿でTC-2-i。輪高台を有す。型打ち成形で内側面は捻子花状を呈し、見込みは逆「の」字状の陽刻が施される。口縁は緩やかな輪花にされる。高台内および高台脇の釉は拭き取られるが、高台内には輪状トチ痕が認められる。なお口縁部には灯心痕がほぼ全周している。6は丹波系錆釉播鉢でTK-29。播目は7条1単位で密に施される。内面の底部と体部境付近は重ね積み焼成された際に溝状に窪んだと思われる痕跡が認められる。また底部付外周にも播目の痕跡が認められる。胴部下半は右上から左下方向にナデ調整され、括れる。

7～12は土器である。7～11はかわらけでDZ-2-a。9、10の底部には離れ糸切り痕がみられる。7、9、10には口縁部に灯心痕が認められるが、10はそれが口縁部を全周している。11は二次的な火熱により、内面は局所的に赤化し、外面は黒色化している。12は土師質丸底ほうろくでDZ-47-a。内側面に内耳が2箇所残るが、内耳が貼り付けられた部分の外側は、体部が外側へ盛り上がる。底部は内外面ともに二次焼成により黒色化している。

#### SK2135 (IV-495 図)

1～3は瀬戸・美濃系陶器である。1、2は皿で、1は外面にしのぎのある灰釉菊皿でTC-2-k。型打ち成形で内面は菊花状にされるが、その際の布目痕が残る。口唇部は「V」字状に浅く削り込まれ、細かな菊花形にされる。見込みにはピン痕が2箇所残る。2は灰釉端反皿でTC-2-y。口縁部は強く外反する。見込みにはピン痕が1箇所残る。3は灰釉袴腰香炉・火入れでTC-9-f。熔着痕が口唇部、底裏、底部内面に残るが、底部内面のものは長辺7mm、短辺3mmほどの小さな長方形の痕跡が円周状に2箇所認められる。

4～7は土器である。4、5はかわらけで、DZ-2-a。ともに口縁部に灯心痕が認められるが、4はタール状の灯心痕が口縁部を全周する。5は底部と体部の境に切れ目が看取される。6、7は塩壺である。6は輪積成形、無印のものでDZ-51-aa。体部は底部からやや内傾して立ち上がり、頸部を境に口縁部は外側に小さく「ハ」の字状に開く。外面はかなり摩滅しているが、縦位の幅広の面取りが施されていることが確認できる。内頸部から輪積み痕までの間に細かい布目痕が認められる。7はロクロ成形で、壺形を呈し、一重角枠に「三など久左衛門」の刻印のあるものでDZ-51-t。胎土はにぶい橙色を呈し、黒色粒子をやや多く含む。底部には左回転糸切り痕が認められる。底部はきわめて厚い。内面は二次焼成されたため黒色化している。

#### SK2148・SK2149 (IV-495、496 図)

1は瀬戸・美濃系鉄釉播鉢でTC-29。口縁部は外側に折り返されるが、体部には密着していない。播目は15条1単位で施される。底部は内外面ともに摩滅が著しい。2～6はかわらけでDZ-2-a。2、3は胎土がにぶい橙色を呈す。2は口縁部がわずかに内傾する。口縁部にはタール状の灯心痕が全周する。3の底部には離れ糸切り痕がみられるが、部分的にナデ調整される。口縁部の相対する位置に灯心痕が認められる。4、5は胎土が赤橙色を呈す。4は体部中程がわずかに括れる。5、6は畳付脇が強く撫でられ、外面に稜を有す。

#### SK2154 (IV-496、497 図)

1～5は肥前系染付磁器で、1は碗、2～5は皿である。1は朝顔形のいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。器面全体が青味を帯び、大きめの貫入がみられる。百間窯跡に酷似した碗が確認されるが、



それは高台脇の稜がなく、内面の絵付が底部付近にある。2～5はいわゆる初期伊万里の皿でJB-2-a。2は型打ち成形され、内面が菊花状にされる。3も型打ち成形され、口鏽が施される。4は呉須が黒ずむ。5は体部が直線的で、「ハ」の字状に開く。6～10は陶器で、6は肥前系(TB)、7～10は瀬戸・美濃系(TC)である。6は灰釉碗でTB-1。胎土は緻密で淡灰色を呈す。高台径は大きく、内側はアーチ形に大きく削り込まれている。畳付は無釉。7は灰釉皿でTC-2-a。見込みと高台内にピン痕が3箇所ある。8は織部徳利でTC-10-k。底部付近の釉は拭き取られている。9は灰釉鳥形の水滴でTC-19。形作りであるが、羽の表現はへら状のもので陰刻されている。背中に空気孔と思われる孔が1箇所穿たれ、嘴から排水するようになっている。10は鉄釉壺・甕の蓋である。裏側には右回転糸切り痕が残る。11～17は土器である。11～16はかわらけで、すべて口縁部に灯心痕が認められるが、13は口縁部全体に認められる。11～15はDZ-2-aに分類される。13の口縁内側は小さく内傾している。14の底部には離れ糸切り痕がみられる。15、16の胎土は黒色化している。15は体部中程に強いナデが施され、括れる。16はDZ-2-k。器面全体が細かく剥離したようになり、口縁部のそれも敲打痕なのか、剥離なのか判別しがたい。

17は車輪状製品で、DD\_4009\_Mに分類される。上下縁部は面取りを施している。上面の円形に凹ませた部分に草花文様を陽刻し、全体を緑釉で装飾している。中央は斜面を形成し穿孔している。文様を施した縁に擦痕が観察される。性格が不明の為、便宜上車輪状製品とした。本郷遺構内で出土した人形・玩具のなかで最も古いものである。

SF2172 (IV-497 図)

1は炉状遺構の坑底付近から出土した瀬戸・美濃系錆釉播鉢TC-29。畳付周辺の釉と、底部内面の団子状トチを置く部分のみが歪な長方形に釉を拭き取られ、その部分に団子状トチ痕がみられる。播目は10条1単位で9単位が施された播鉢である。注口部が割れ口にわずかに残る。

SK2208 (IV-497、498 図)

1～9すべてかわらけである。3～6は口縁部に灯心痕が認められ、特に5、6はそれがほぼ全周している。1、2、6はDZ-2-b。6の底部と体部の境に切れ目が看取される。3～5、7、9はDZ-2-a。3は内面の底部と体部境付近が凸状に盛り上がるが、底部中央付近にむかって徐々にくぼむ。口縁部の一部が二次的に小さく「U」字状に削られている。底部は赤化している。5の糸切り痕はやや粗い。8はDZ-2-k。底部糸切り痕はやや粗く、底部は赤化している。

SE2241 (IV-498、499 図)

1～6は肥前系磁器である。1～3は染付碗で、1は底部無釉碗でJB-1-b、2、3は高台の断面形が三角を呈す碗でJB-1-cに分類される。2、3の高台内には一重圏線に「製」銘が書かれている。4、5は型打ち成形され体部が輪花を呈す染付皿である。いわゆる初期伊万里でJB-2-aに分類される。6は高台内が蛇ノ目釉剥ぎされた青磁大皿でJB-3-c。釉剥ぎ部分には鉄が施釉されるが、そこに輪状の直重ね痕が認められる。内面にはへら状のものによる陰刻文がある。

7～12は陶器で、7～9は肥前系(TB)、10は産地不明(TZ)、11、12は瀬戸・美濃系(TC)のものである。7はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。畳付に砂が付着する。8、9、11、12は皿である。8、9は透明釉が施釉された砂目皿でTB-2-d。ともに畳付の釉は削られている。8は見込みが一段低くなっている。砂目痕は見込みに4箇所、畳付に2箇所ある。9は見込み、畳付ともに砂目痕が5箇所ある。器厚も厚く、高台径も大きいことから鉢の可能性もある。11は長石釉丸皿でTC-2-c。高台内の釉は拭き取られている。12は鉄釉輪髻皿でTC-2-m。輪髻にされた部分に輪状の直重ね痕が認められる。10は産地不明の灰釉鉢でTZ-5。胎土は比較的緻密な淡灰色を呈し、高台を除きガラス質の灰釉が施

釉される。畳付から高台内は白化粧が施される。

13～15はかわらけで、13、14の口縁部には灯心痕がほぼ全周する。13、15はDZ-2-a。13の底部には離れ糸切り痕がみられる。15は底部脇が強くナデ調整される。14はDZ-2。見込み中央の窪みが顕著である。

#### SU2245 (IV-499～502 図)

1～15は磁器である。1、2、6～10は景德鎮窯系、3は産地不明、4、5、11～15は肥前系である。1～5は碗である。1、2は青花でJA1-1。1はいわゆる蛇ノ目高台を有し、畳付から高台内は無釉である。口縁部には虫喰いが認められる。2の高台はカンナ痕が顕著である。高台内には一重圏線に「成化年造」銘が書かれている。3は白磁でJZ-1。底部内面には団子状の目跡が3箇所認められる。体部外面のロクロ目が顕著である。4はいわゆる初期伊万里染付碗でJB-1-a。高台には鉄釉が施釉される。5は底部無釉青磁碗でJB-1-b。6～13は皿である。6～10はJA1-2。6、7、9は青花、8、10は色絵である。いずれも虫喰いが顕著である。8は色絵鶏形形皿である。形作りで、皿の表裏で異なる色調の鶏を表現している。すなわち表側は鶏形に呉須で鶏を描き、赤や緑の色絵を施し、裏側は鶏形に陽刻された白磁胎の上に赤、緑、黒で色絵が施される。三つ葉形の3足は貼付で、足の先端は無釉である。9は高台周囲に砂が多く付着する。10は裏文様にも色絵が施される。高台内には二重圏線に「天啓年製」銘が書かれている。11～13はいわゆる初期伊万里染付皿でJB-2-a。14はほぼ完形のいわゆる初期伊万里染付鉢でJB-5-a。15は染付筒形香炉・火入れでJB-9-c。輪高台を有し、高台内には角椀銘があるが、欠損のため判読できない。

16～31は陶器である。16～18は碗である。16、17は肥前系のいわゆる卵手の碗でTB-1-j。ともに薄造りで、口縁部は外反する。16の見込みと高台には砂目痕が5箇所ある。18は産地不明の灰釉碗でTZ-1。胎土は緻密で灰白色を呈す。内面には鉄で和歌のようなものが散らし書きされる。19～26はすべて瀬戸・美濃系皿・平鉢である。19、20は見込みにピン痕が3箇所ある灰釉端反皿でTC-2-y。21は見込みに直重ね痕のある灰釉皿でTC-2-b。22は灰釉皿でTC-2。23は鉄絵皿でTC-2-j。高台内の釉は拭き取られ、見込みにピン痕が3箇所ある。24はいわゆる志野織部皿でTC-2-s。口縁部に緑釉を浸け掛けしている。表裏に輪状の熔着痕が認められる。25、26は形皿である。25は型打ち成形され、輪高台を有すものでTC-2-i。畳付も含め全体に御深井釉を意識したような透明釉が施釉される。26はタタラ成形された脚付き形皿でTC-2-x。底部に4足が貼付られる。口縁部の長辺の相対する位置の半分ほどをヒダ状にし、短辺中程が緩やかに外側に張り出す。全体にガラス質の長石釉が施釉され、器面には大きな貫入がみられる。27は胴部がらつきょう形を呈す瀬戸・美濃系灰釉水注でTC-27-d。注口内側に方形の孔が1箇所穿孔される。胴部に熔着痕が認められる。28は備前系瓶でTE-10。外面全体に鉄泥が施されるが、底部外周に熔着痕がわずかに認められる。胴部4箇所に指2本で押さえたような窪みがある。底部には窯記号と推測される「八」に「十一」のヘラ書きがある。29～31は瀬戸・美濃系の蓋である。29、30は鉤状つまみのある壺・甕の蓋である。ともに蓋裏は無釉で、右回転糸切り痕がある。30の摘みの周囲にはピン痕が2箇所ある。31は灰釉水注の蓋である。手づくねで、無釉の底裏にはケズリ調整痕が認められる。

32～47は土器である。32～45はかわらけである。32、35～37、41、42、43には灯心痕が認められ、特に43はそれが内外面全体に及ぶ。32、36はDZ-2-b。ともに底部に腰折れ状痕が確認される。36の見込みは小さくくぼむ。33はDZ-2-k。糸切り痕跡はやや粗い。34、35、37～44はDZ-2-a。37の口縁部は外反し、体部中程と底部境付近に稜を有す。糸切り痕はやや粗い。38の胎土は還元焼成により黒色化している。40は局所的に黒色化し、器厚が厚い。41も40と同じ

く還元焼成されたためか黒色化しているが、それが胎土にまでおよぶ。42は局所的に黒色化している。45の底部には繊維状の痕跡が認められ、糸切り痕が消されている。46は軟質瓦質丸火鉢でDZ-31-b。外面にはミガキが施される。底部には3足が貼付られている。47は輪積成形、袋状の塩壺でDZ-51-ah。胎土は白色に近い橙色を呈す。

SE2295 (Ⅳ-502、503 図)

1～5は覆土、6～13は掘方出土遺物である。

1～3、6～8は肥前系磁器である。1、2は碗である。1は高台の断面形が三角を呈す染付碗でJB-2-c。高台内に銘が書かれている。2はいわゆる初期伊万里青磁碗でJB-1-a。ガラス質の青磁釉が施釉されるが、高台脇の釉が拭き取られている。3は型打ち成形された染付六角鉢でJB-5-b。南川原窯ノ辻窯跡の製品と推定される上質なものである。見込みには手描きの四弁花文、高台内には一重圏線に「大明成化年製」銘が書かれている。二次的な火熱を受ける。共伴する他の陶磁器の様相を考えると、本品は混入の可能性がある。6は高台の断面形が三角を呈す白磁碗でJB-1-c。見込みに渦状の擦痕が認められる。7は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉皿でJB-2-k。わずかに残る体部立ち上がり付近に明瞭な稜をもつ。蛇ノ目釉剥ぎ部分に輪状の直重ね痕がある。8は白磁油壺でJB-12。

4、9～13は陶器で、9、13は肥前系、10は産地不明(TZ)、4、11、12は瀬戸・美濃系である。4、13が皿、それ以外はすべて碗である。4は長石釉皿でTC-2-c。見込みには細長い目跡が4箇所認められる。9はいわゆる呉器手碗でTB-1-a。胎土は赤橙色を呈す。10は産地不明の碗でTZ-1。胎土は緻密な灰白色を呈す。削り出し高台で、やや「ハ」の字に開く。高台を除き白濁した藁灰釉が施釉されるが、底部内面は小さな粘土塊が残されまま施釉されている。11、12は鉄釉丸形碗でTC-1-ag。11の体部はロクロ目が顕著である。12は口縁部には体部とは透明度の異なる鉄釉が浸け掛けされる。高台内の釉は拭き取られる。13は透明釉が施釉された砂目皿でTB-2-d。胎土はいわゆる卵手といわれる緻密なもので乳白色呈す。畳付も含め、総釉掛けされている。

5はかわらけでDZ-2-a。口縁部1箇所に灯心痕が認められる。

SK2352 (Ⅳ-503～510 図)

総個体数167点を数える遺構一括資料である。磁器は肥前系(JB)を中心に、景德鎮窯系(JA1)、漳州窯系(JA2)も含む。肥前系磁器はいわゆる初期伊万里のものが碗、皿の中心をしめるが、高台断面形が三角形を呈す碗、皿(1-c、2-b、c)も認められる。陶器では瀬戸・美濃系(TC)がその中心で、天目碗(1-a)、いわゆる白天目碗(1-b)、灰釉皿(2-a、b)や長石釉皿(2-c)、菊皿などの型打ち成形皿なども目立つ。肥前系(TB)のいわゆる呉器手碗(1-a)は、その大半がいわゆる卵手(1-j)のものである。また皿では透明釉が施釉された砂目皿(2-d)なども出土している。以上のような様相から東大編年Ⅱ～Ⅲa期に比定される遺構一括資料である。

磁器 (1～28)

1～5は肥前系磁器碗である。1、4、5はいわゆる初期伊万里でJB-1-a。1は染付、4、5は白磁であり、5は器面に貫入が目立つ。1は体部が1箇所窪まされている。2は底部無釉碗でJB-1-b。3は高台断面形が三角形を呈す染付碗でJB-1-c。6～8、10～16は皿である。6～8は景德鎮窯系のものでJA1-2。6は色絵、7、8は青花である。6の見込みに描かれた茎の部分がわずかに盛り上がる。型打ち成形で陽刻が施された上に色絵が施されたものか。8はいわゆる饅頭心の皿である。10～16は肥前系のいわゆる初期伊万里皿でJB-2-aに分類される。12が白磁、他は染付が施される。10～12は型打ち成形される。10の内側面には蓮弁の陽刻、11の内側面には窓絵の陽刻がみられる。また外面には布目痕が顕著に認められる。12は内側面に縦筋が陰刻され、見込みに花文が陽刻され、口鏤



が施される。14はいわゆる日字鳳凰文皿である。15、16はともに釉ムラと手痕が認められる。17～19は大皿・大平鉢である。17、19はいわゆる初期伊万里でJB-3-a。17は青磁で、内面にはヘラ状のもので陰刻の草花文が施される。18は高台断面が三角形を呈すものでJB-3-fに分類される。18は高台内に一重圏線と「角福」銘がある。この製品はSK2044、SK2414、SK1023、SK2046などと遺構間接合している。9は肥前系のいわゆる初期伊万里の青磁鉢でJB-5-a。型打ち成形で体部が輪花され、内面中央の鳥は胴部は搔き落とし、その後胴部の輪郭、羽、足などを染付している。本製品は百聞窯跡などで類例がある。20～24は坏である。20、21は景德鎮窯系青花坏でJA1-6。ともに腰が張る坏である。削り出し高台で、畳付から高台内は無釉である。22～24は肥前系の坏で、22、23は染付、24は白磁である。22は丸形のものでJB-6-a、23、24は端反形のものでJB-6-b。23は畳付から高台内が無釉にされる。25、26は肥前系染付小瓶でJB-10。25は蛇ノ目高台を有し、畳付から高台内が無釉にされる。26は二次的な火熱を受ける。27は肥前系染付餌入れでJB-30。ロクロ成形後、面取りされ、体部は歪な十角形を呈す。把手は欠損している。28は肥前系磁器染付壺・甕の蓋である。環状摘みが貼付られている。受け部に熔着痕が認められる。

#### 陶器 (29～60)

29～36は碗である。29～31、35は肥前系である。29～31は卵手の緻密な胎土の碗でTB-1-jに分類される。29は畳付に砂目痕が3箇所ある。35の胎土は非常に緻密な灰色を呈す。外面は白土の細かい渦刷毛目が施され、畳付も含めて透明釉が施釉される。高台は削り出し高台で、畳付には砂目痕が5箇所ある。TB-1。32～34は瀬戸・美濃系天目碗でTC-1-a。32は内外面ともに柿釉に鉄釉が流し掛けされる。33、34の見込みには細かな擦過痕が認められる。36は産地不明の碗でTZ-1。胎土は緻密な淡灰色を呈し、器厚が非常に厚い。畳付を除き透明釉が施釉され、外面には青、白色で上絵付が施される。なお内面の調整が甘く、ロクロ目が目立つことから袋物の可能性もある。37～47、49はすべて瀬戸・美濃系皿・平鉢である。37～42は灰釉端反皿でTC-2-y。38、40、41は畳付まで含めて総釉掛けされる。37～41は見込みにピン痕がみられ、37、38、41は3箇所、39、40は5箇所ある。37はそのピン痕部分に金?が埋められている。38の高台内には輪状の熔着痕が認められる。また見込みに多くの気泡状の膨らみがみられる。42は見込みに輪状の直重ね痕がある。高台の釉は拭き取られる。43は見込みに輪状の直重ね痕のある灰釉皿でTC-2-b。釉は浸け掛けされている。44は型打ちされ体部が輪花を呈す灰釉皿でTC-2-i。輪高台を有す。45は外面にしのごのある灰釉菊皿でTC-2-k。内外面ともに体部は細かい菊花状を呈し、口縁部全体に緑釉が浸け掛けされる。見込みにはピン痕3箇所が一行に並んだ状態でみられる。46は灰釉輪禿皿でTC-2-m。見込み周囲の無釉の凸帯部は顕著なものである。高台はスズ状のものが付着し、黒ずむ。47はヒダ皿でTC-2-n。長石釉が厚く施釉され、大きめの貫入が器面全体にみられる。畳付と畳付内側の釉は拭き取られる。49はいわゆる笠原鉢でTC-2-v。口縁部の緑釉は厚く施釉され、釉溜まりができてい。見込みには目跡が2箇所残る。48は肥前系の刷毛目が施された大平鉢でTB-3-a。見込みには砂胎土目痕が6箇所ある。50は瀬戸・美濃系灰釉坏でTC-6。底部は碁筒底である。畳付脇には目跡状の痕跡が3箇所認められる。51は備前系伊部手瓶でTE-10。52は丹波系の灰釉壺でTK-15。胎土はやや粗く、白色粒子を多く含む。内面胴部中程に粘土紐の継目と、その周囲に指圧痕がわずかに残る。口縁部から外面体部上半のみ灰釉が施釉されるが、釉際を意識して施釉されている。粘土紐の両端が摘まれた形状の耳を有し、その残存位置などを考えると四耳壺か。53は透明釉が施釉された瀬戸・美濃系丸形片口鉢でTC-23-b。注口部は粘土板を半筒状にして貼り付けたものと思われる。見込みにはピン痕が2箇所残る。54は瀬戸・美濃系鉄釉水注でTC-27-a。肩部から胴部上半に灰釉

が流し掛けられる。注口部内側に不整円形の孔を1箇所あけ、筒状の注口を貼付している。把手は欠損。55～57は丹波系播鉢でTK-29。55は播目が7条1単位で施され、内面底部と体部の境付近に方形の熔着痕が3箇所看取される。底部は平らにケズリ調整されている。56は使用頻度が高かったのか内面播目の摩滅が著しい。播目が7条1単位で施され、内面胴部中程に輪状の直重ね痕が認められる。57は注口が1箇所ある。播目は6条1単位で施されるが、他の2点と比べると播目が密に入れられている。内面底部と体部の境付近に方形の熔着痕が5箇所と、底部外周には焼成後、取り出した時に出来たと思われる傷が認められる。58は産地、器種ともに不明の製品である。板状の粘土を貼り合わせ、歪な杓形に成形される。底部には焼成前に工具痕が押し当てられたような痕跡がある。底部を除き外面には灰釉、鉄釉が流し掛けされ、幅広の面には釉下に白泥で文字が書かれている。片側は「小」と判読できるが、もう片側は欠損のため判読できない。「大」か。59、60は瀬戸・美濃系蓋で、59は鉄釉壺・甕の蓋、60は灰釉水注の蓋である。59の裏には右回転糸切り痕がある。60は手づくねで、鉤状の摘みを貼り付け、裏側はケズリ調整される。

#### 土器 (61～90)

61～84はかわらけで、61～66、70～74、76、79、81、82には灯心痕がある。61～64、66、71～74、76、79～84はDZ-2-aに分類され、62、66、79、81の底部には離れ糸切り痕がみられる。61は内面全体に灯心痕が認められる。63は口縁部から内面にかけて局所的に灯心痕が集中するが、その部分の口縁が緩やかな「U」字状にカットされ、平らに調整されている。76は畳付脇に強いナデの痕跡がある。内外面ともに底部を除く全体にタール状の灯心痕が認められる。80は口縁部1/2ほどが二次的な火熱を受け、赤化している。81は75と同じく畳付脇が帯状に削り調整されている。65、68、69はDZ-2-b。65の底部には腰折れ状痕が確認できる。67、70はDZ-2-k。75、77、78はDZ-2に分類される。75の外面の底部と体部境付近には帯状にケズリが残る。77はいわゆる磨きかわらけに酷似するが、底部に右回転糸切り痕が認められる。底部にはいわゆる内ぐもりがある。78は手づくねでDZ-2-g。底部はヘラ削り調整後、ナデ調整しているが、底部と体部境付近にはケズリがやや顕著に残る。85は瓦燈でDZ-45。内側面には粘土の継ぎ目、底部内面にはケズリ、底部には板目状の痕跡が認められる。86、87は輪積成形で二重角椀「ミなど藤左衛門」の刻印のある塩壺でDZ-51-a。ともに内面の粘土の継ぎ目が顕著である。87の外面下半に筒状のもので横位に撫でなられた痕跡が認められる。88、89は断面形がドーム形を呈す塩壺蓋でDZ-00-a。88の裏側には細かな布目状の痕跡が認められる。90は軟質瓦質火消壺の蓋である。内外面ともにナデ調整されるが、肩部外面は横位に削られ、面取りされたようになっている。

#### 人形・玩具 (91)

91は唐人で、JB\_1100\_Hに分類される。灯芯押さえといわれている鉄釉かき分け人形である。底部は無釉で砂粒が観察される。SK3から出土したIV-133 図681と同様の成形である。

#### SK2358 (IV-511 図)

1は肥前系陶器のいわゆる卵手の碗でTB-1-j。器厚は非常に薄い。高台内側は強く削られ、断面形はアーチ状を呈す。畳付には砂目痕が3箇所ある。

#### SD2388 (IV-511 図)

1は肥前系磁器染付筒形碗でJB-1-k。いわゆる初期伊万里で、畳付から高台内まで白色砂が多く付着する。内面のロクロ目が顕著である。2は瀬戸・美濃系陶器柿釉天目碗でTC-1-a。口縁部に灰釉が浸け掛けされる。3～5は土器である。3、4はかわらけで、DZ-2-a。3の体部下半は強く撫でられ、やや括れる。4の口縁部2/3ほどにタール状の灯心痕が認められる。5は底部平底の土師質ほ

うろくで DZ-47-b。底部脇には 2 回にわたり強くケズリ調整された痕跡が帯状に認められる。底部には幅 5mm 強のスノコ状の凹凸が認められる。

**SK2441** (IV-511、512 図)

1～6 は陶器である。1、2 は肥前系陶器のいわゆる呉器手碗で TB-1-a。畳付以外は透明釉が施釉されるが、その上に緑釉が流し掛けられる。1 は高台内側が外側より深く削られ、断面形がアーチ状を呈す。2 は高台内側と外側の削りがほぼ同じ高さである。3 は胎土が橙褐色を呈すためか、全体的に明褐色の釉調を呈す。TB-1。4～6 は瀬戸・美濃系陶器である。4 は灰釉端反皿で TC-2-y。口縁部は小さな鏝状を呈す。畳付以外施釉される。5 は肩が張った瓶で TC-10。胎土は比較的緻密で、黄白色を呈し、器面には透明釉が施釉され緑釉が流し掛けられる。6 は鉄釉播鉢で TC-29。播目は 13 条 1 単位。口縁部内側に階段状の張り出しを有す。内面には団子状の熔着痕が 2 箇所ある。なお底部釉はほぼ剥落し、底部内面の播目も摩滅が著しいことから使用頻度の高さが想定される。7～9 は土器である。7 はかわらけで DZ-2-a。8 は軟質瓦質丸火鉢で DZ-31-b。底部には足が 2 箇所残る。口縁部から外面は一見すると硬質瓦質の製品と思われるほど丁寧ミガキ調整される。9 は土師質丸底ほうろくで DZ-47-a。団子状の内耳が 1 個残る。底部内外面にはススが付着している。

**SK2445** (IV-512 図)

1 は磁器、2、3 は土器である。1 は景德鎮窯系青花皿で JA1-2。外面から高台内にかけてカンナ痕が顕著である。2、3 はかわらけである。2 はかわらけで DZ-2-a。胎土は黒色化し、口縁部にはタール状の灯心痕が認められる。3 はかわらけで DZ-2-k。灯心痕が口縁部全体に認められる他、見込みに金属状の付着物がある。埴場に転用されたものか。

**SB2457** (IV-512、513 図)

1、3～5 は肥前系磁器で、いわゆる初期伊万里である。1 は染付碗で JB-1-a。3、4 は染付皿で JB-2-a。3 は型打ち成形されたものである。5 は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉皿 JB-2-k。高台はケズリ調整されているが、畳付幅が均一ではない。2 は景德鎮窯系形皿で JA1-2。形作りで、絵付には呉須と辰砂を併用する。底部には 3 足を有すが、これも形によるものである。なお足は型打ち成形後にケズリ調整され、縦位に面取りされる。足の周囲には葉脈状の陽刻もみられる。6 は瀬戸・美濃系陶器灰釉端反皿で TC-2-y。見込みにはピン痕が 5 箇所看取され、高台内には円錐ピンが 1 個残る。7 はかわらけで DZ-2-a。口縁部には灯心痕が認められる。

**SK2477** (IV-513、514 図)

1～4 は肥前系磁器である。1 は高台断面形が三角形を呈す染付碗で JB-1-c。高台内に一重圏線と角椀銘が書かれている。2 は高台断面形が三角形を呈す染付皿で JB-2-c。いわゆる芙蓉手の皿である。3、4 は鉢である。3 はいわゆる初期伊万里染付鉢で JB-5-a。本品は他に D2 層、D3 面に帰属する SK2529 と遺構間接合している遺物であり、D2 層中に廃棄されていたものが、二次廃棄されて D2 面の遺構である本遺構へ混入した可能性が高い。4 は高台断面形が三角形を呈す染付鉢で JB-5-f。内面には型打ちにより陽刻が施される。高台内には一重圏線と「大明宣徳年製」銘が書かれている。

5～10 は陶器である。5 は肥前系のいわゆる呉器手碗で TB-1-a。6 は産地不明の陶器碗で TZ-1。胎土は緻密な明灰色を呈す。器厚は薄い。見込みには唐草文が陰刻され、その上から白化粧され透明釉が施釉される。口縁部は口鏝状にされる。見込みにごく小さい目跡のような痕跡が 2 箇所確認される。7 は瀬戸・美濃系灰釉端反皿で TC-2-y。総釉掛けされ、見込みにはピン痕が 5 箇所、高台内には輪状の熔着痕と円錐ピンと考えられるものが 1 個認められる。8、9 は丹波系播鉢で TK-29。ともに口縁部に浅い「U」字状の注口を 1 箇所有す。8 は完形に近く、口縁部は内側へ折り返されるタイ



プのもの。播目は6条1単位で施される。9は口縁部の断面形が三角形を呈すもの。播目は7条1単位で施される。内外面に重ね焼きされた痕跡が認められる。10は肥前系壺・甕の蓋である。鉤状の摘みを有し、無釉の蓋裏には右回転糸切り痕跡が残る。

11はかわらけでDZ-2-a。

**SK2535** (IV-515 図)

1、2は肥前系染付磁器である。1はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。見込みにも染付がわずかにみられるが、銘か文様かは不明である。2はいわゆる初期伊万里皿でJB-2-a。内面文様は日字鳳凰文であるが、呉須は黒ずむ。畳付の内外側がケズリ調整される。3は瀬戸・美濃系陶器鉄釉播鉢でTC-29。口縁部内側に階段状の張り出しをもち、外側は比較的強くナデ調整されている。畳付脇には3箇所、4はかわらけでDZ-2-d。内黒が1箇所ある。5～7はDZ-2-a。6のみ口縁部1箇所に灯心痕が認められる。

**SK2560** (IV-515 図)

1は志戸呂系陶器の香炉・火入れでTF-9。胎土は緻密で茶褐色を呈す。口縁部内側から畳付脇まで鉄釉が施釉される。底部内面には輪状の直重ね痕が認められる。口縁直下の括れ部分に、摘んだような形状の耳を2個有す。

2はミニチュアの五重塔で、DD\_3002\_M2f分類される。朱色の彩色が観察される。高さが44mmと小形である。同形のものがⅦ期に比定された工学部14号館地点SK330から出土している。

**SK2567** (IV-516 図)

1～3は肥前系磁器である。1、2はいわゆる初期伊万里染付碗で、1は底部無釉でJB-1-b、2はJB-1-aに分類される。3はいわゆる初期伊万里色絵皿でJB-2-h。高台は蛇ノ目高台で、口鏤が施される。見込みには色絵の痕跡がわずかに認められる。4、5は瀬戸・美濃系陶器皿である。4は灰釉皿でTC-2。高台内は無釉である。見込み周囲に沈線が1本巡る。5は灰釉輪髹皿でTC-2-m。本製品の中央付近には、内外面ともに帯状にタール状のものが認められる。6～10はかわらけで、6、7、10には灯心痕がほぼ口縁部全体に認められる。6～9はDZ-2-a。6、8の底部には離れ糸切り痕がみられる。10はDZ-2-kに分類される。

**SE2572** (IV-516 図)

1は肥前系陶器皿でTB-2-d。型打ち成形で体部は輪花にされる。胎土はいわゆる卵手といわれる黄白色の緻密な胎土で、透明釉が施釉される。内面には砂目痕が5箇所ある。2はかわらけでDZ-2-a。口縁部全体に灯心痕が認められる。

**SE2574** (IV-516、517 図)

1～5は肥前系染付磁器である。1～3はいわゆる初期伊万里で、1は碗でJB-1-a、2、3は皿でJB-2-aに分類される。1、3の胎土は灰色を呈し、呉須が黒ずむ。4は端反形坏でJB-6-b。5は合子の蓋である。6～8は陶器で、6、7は瀬戸・美濃系、8は丹波系である。6は木の葉形を呈す形皿でTC-2-i。輪高台を有す。長石釉が比較的厚く施釉され、大きめの貫入がみられる。7は鉄釉播鉢でTC-29。播目は14条1単位で施される。内面底部付近に長辺約7cm、短辺約3cmほどの不整長方形の熔着痕が認められる。8も播鉢でTK-29。外面には大きめの指圧痕が認められ、播目は6条1単位で施される。9、10はかわらけでDZ-2-aに分類される。9の胎土は白色を呈す。10は口縁部に灯心痕が1箇所認められる。

**SK2715** (IV-517～519 図)

1は肥前系磁器の水滴でJB-19。外面には染付が施されるが、呉須は黒ずむ。底部は無釉である。

2～16は陶器である。2は京都・信楽系の軟質施釉陶器碗でTD-1-l。胎土は白色からにぶい橙色を呈し、やや粗い。内外面ナデ調整されるが、外面胴部から高台脇まではケズリ調整される。畳付も含めて全体に白化粧が施されていたようだが、部分的に残るのみである。また釉薬も土中の酸化により飛散している。3～9は瀬戸・美濃系陶器皿である。3はピン痕のある灰釉丸皿でTC-2-a。高台内に3箇所ピン痕がある。内面3箇所に緑釉が流し掛けられている。口縁部1箇所に灯心痕が認められる。4、5は見込みに3箇所のピン痕がある灰釉端反皿でTC-2-y。5は鐔状の口縁部を有す。高台内は無釉。内面には沈線状の圈線が2本ずつ二重に施される。7は型打ち成形により、体部が緩やかな輪花形を呈す灰釉形皿でTC-2-i。見込みにはピン痕が3箇所あるが、その部分に赤色の付着物が認められる。輪高台を有し、高台内は無釉である。6は長石釉丸皿でTC-2-c。ピン痕が見込みと高台内にそれぞれ2箇所残る。8、9はいわゆる志野織部皿でTC-2-s。ともに鐔状の口縁部を有し、8の口縁部には緑釉が、9には灰釉が施釉される。またともに見込みには輪状の直重ね痕が認められる。10は瀬戸・美濃系灰釉端反形坏でTC-6。11、12は瀬戸・美濃系のいわゆる織部徳利でTC-10-k。器面には草花文の鉄絵が施される。13は内面に鉄釉が施釉された産地不明の壺・甕でTZ-15。胎土は比較的緻密な淡い灰色を呈し、黒色粒子を少量含む。合わせ口焼成で、口唇部の外側に近い部分のみ円帯状に釉が拭き取られ、その部分のすぐ内側に輪状の熔着痕が認められる。内面には粘土紐の繋ぎ目と指圧痕が認められる。14は瀬戸・美濃系花生けでTC-22-a。盤口形の口縁部を有し、頸部は縦位の幅広の面取りが施され、外耳を2個有す。釉は口縁部から肩部までは鉄釉、肩部以下は灰釉が施釉されるが、灰釉は畳付内側まで施される。15は備前系播鉢でTE-29。口縁部には外側に小さく摘み出されたような形の注口部がわずかに確認できる。16は瀬戸・美濃系鉄釉壺・甕の蓋である。裏側には右回転糸切り痕があり、その部分のみ鉄釉が拭き取られる。

17～34はかわらけで、18～21、23～26、28、30～32は口縁部にタール状の灯心痕が認められる。17～27、30はDZ-2-a。17、18は黒色化しているが、17は胎土までも黒色化している。23は畳付脇が強くナデ調整される。28、29、31はDZ-2-k。28も23と同じく畳付脇が強くナデ調整される。32～34は手づくねでDZ-2-g。32～34の胎土は白色を呈し、白色粒子を少量含む。

SK2721 (IV-520 図)

いずれも皿である。1は肥前系磁器染付皿でJB-2-a。いわゆる初期伊万里で、内面には吹墨で絵付が施される。2、3はかわらけでDZ-2-a。3には灯心痕が3箇所認められる。

SK2965 (IV-520、521 図)

1～11は磁器で、6は景德鎮窯、他はすべて肥前系である。1～6は碗で、2は色絵、他は染付が施される。1はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。見込みに二重角枠銘が書かれている。2～5は高台断面が三角形を呈す碗でJB-1-cに分類される。2は乳白色の生地に色絵が施される。外面の色絵は完全に剥落し、痕跡のみ認められる。文様は草花文か。4と5は高台内に銘があり、4は「宣徳年製」、5は「宣明」と書かれている。6は青花碗でJA1-1。高台内には一重圈線内に「成化年製」銘が書かれている。7、8は皿である。7は口縁部が輪花にされた青磁皿でJB-2。内面には白泥型紙摺りで桐花文と梅花文が施される。8は見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉皿でJB-2-k。口縁部は小さく外反し、畳付脇は面取りされている。9はいわゆる古九谷様式の色絵大皿でJB-3-f。高台内にはハリ支え痕跡が1箇所と角枠銘が看取される。内面の色絵は全体に酸化し黒ずんでいるが、染付二重圈線内に、黒で輪郭線、そこに緑、黄、茶などで塗り埋めたものである。10は白磁端反形坏でJB-6-b。11は染付壺・甕の蓋と思われる。

12、13は陶器碗である。12は肥前系のいわゆる呉器手碗でTB-1-a。13は京都・信楽系の草花

文が銹絵染付された碗でTD-1。体部数箇所が押され、口縁部が意図的にゆがめられている。器面はロクロ目が顕著である。高台は削り出し高台で、高台内には楕円に「藤」の刻印がある。

14～18は土器である。14は軟質瓦質の火消壺でDZ-31-i。外耳が相対する形で2つ、底部には3足を有す。内外面ともにナデ調整されるが、底部には部分的に繊維状の圧痕が認められる。底部は被熱し、一部白色化している。15～17はかわらけでDZ-2-a。15、16は口縁部全体に灯心痕が認められる。15は完全に黒色化している。18は輪積成形で二重椀「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のある塩壺でDZ-51-c。

SK3054 (IV-522 図)

1は肥前系白磁丸形坏でJB-6-a。2は瀬戸・美濃系陶器灰釉丸皿でTC-2-a。ピン痕が見込みに1箇所、底部には2箇所残る。削り出し高台で、高台内の釉は拭き取られる。

SD3528 (IV-522 図)

1～6は磁器で、5は景德鎮窯系、他は肥前系である。1～4はいわゆる初期伊万里碗で、4が青磁、他は染付されたものである。1、3、4はJB-1-a、2は筒形碗でJB-1-kに分類される。1は天目形を呈すものか。3は呉須の発色が悪く、滲む。4は見込みが一段低くされ、稜を有す。畳付は内外面ケズリ調整される。5は青花鉢でJA1-5。6は内面にヘラ状の陰刻が施された平鉢でJB-2。口縁部は強く外反し、断面形が逆「く」の字状を呈す。口唇部には口銹が施される。7～10は瀬戸・美濃系陶器である。7は白天目碗でTC-1-c。口縁部は小さく外反する。8は長石釉丸皿でTC-2-c。畳付まで含めて総釉掛けされる。高台内にピン痕が1箇所残る。9、10は鉄釉播鉢でTC-29。9は口縁部断面形が三角形を呈す。10は口唇部直下の内面がわずかに突出する。11～14は土器である。11～13はかわらけである。11、12はDZ-2-a。胎土は肌色を呈し、口縁部には灯心痕が認められる。11は底部と体部の境に切れ目が看取される。12は体部中程が緩やかに括れる。底部の糸切り痕は雑にナデ調整される。13はいわゆる耳かわらけでDZ-2-e。底部には左回転の糸切り痕がみられるが、外周部分はケズリ調整される。14はロクロ成形、壺形を呈し、角椀「三など作左衛門」刻印がある塩壺でDZ-51-ai。胎土は明橙色からにぶい橙色を呈し、白色砂を少量含む。底部には左回転糸切り痕が認められる。頸部の括れは弱く、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。内面底部中央は盛り上がる。



## 第5節 瓦 (IV-523～541 図)

軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、蠟燭棧瓦、道具瓦（熨斗瓦、菊丸瓦、鬼瓦など）、海鼠瓦、塙の順に掲載し、出土遺構名はそれぞれの遺物の下に記載している。分類は加藤氏の分類（加藤1992）に拠っている。

### 軒丸瓦 (IV-523 図～528 図1～67)

1～12の瓦当文様は無剣梅鉢紋Aで、梅鉢の花弁断面の稜線が台形状になっているものである。中心部が隅丸の五角形が配置されるものが多い。1～4は金箔が施されており、包含層D2層からの出土である。部分的に下地の漆が残る。5、8は縁に「⊖」の刻印が刻まれている。6は二次焼成を受け赤変している。1～12の軒丸瓦は東大編年Ⅱ～Ⅲa期の遺構から出土している。

13～24の瓦当文様は無剣梅鉢紋Bで、梅鉢の花弁断面の稜線がなだらかな台形状になっている。一部に無剣梅鉢紋Aが摩滅してしまったものも含む可能性がある。13、14は金箔が施されている。部分的に下地の赤漆が残る。13～24の軒丸瓦は東大編年Ⅲ～Ⅳb期の遺構から出土している。

25～33の瓦当文様は無剣梅鉢紋Cである。梅鉢の花弁の断面が稜線がなく丸味のあるものである。梅鉢の花弁がやや小振りになっている。東大編年Ⅲ～Ⅳb期の遺構から出土している。25は筒部の玉縁部よりも釘孔が設けられている。二次焼成を受け部分的に薄橙色に変色している。26は他と比べて小振りである。裏面が欠損しているため軒丸瓦の分類に入れたが、鬼瓦の部分である可能性が高い。

34～45の瓦当文様は幼剣梅鉢紋Cである。梅鉢の花弁の断面形が稜線がなく丸味のあるものである。34は二次焼成を受け赤変している。38のSE326は東大編年Ⅲb期、43のSK1966、44のSR1855はⅢa期に比定されている。幼剣梅鉢紋は、Ⅳ期で上屋敷になるのをきっかけに使用し始めたのではなく、上屋敷になる以前から使用されていたことがわかる。45は光沢がある。裏面に突起が付いており、建物の隅角につけられる隅丸瓦である。突起は雨水が入るのを防ぐためと考えられている。筒部は欠損している。遺構外であるので年代は不明であるが、19世紀以降のものではないかと考えている。

46～52の瓦当文様は連珠三つ巴文Aである。巴文と連珠の間に圏線がめぐり、14～16個の珠紋が巡る。

53～57の瓦当文様は連珠三つ巴文Bである。巴文の尾が接して圏線がめぐり、16個の珠文が巡る。52、54、56は二次焼成を受け赤変している。57はSF1845の炉状遺構の中に据えられていた挿鉢の中心部分から出土したものである。挿鉢の欠損している底部の代わりに据えられて二次利用されている。ややすが付着しているが、大きく二次焼成を受けてはいない。

58～62の瓦当文様は連珠三つ巴文Cである。巴文と連珠の間に圏線がめぐらない。14～16個の珠文が巡る。59、60は二次焼成を受け赤変している。

63～65の瓦当文様は星梅鉢紋である。梅鉢の花弁断面の稜線はなだらかな台形状になっている。富山城の石垣の裏から星梅鉢紋の瓦が出土しており、利家の時代に星梅鉢紋が使用されていた可能性が指摘されている。看護師宿舎地点などの富山藩邸内の調査で、星梅鉢文の瓦が多く出土している。本地点ではいずれも東大編年Ⅳb期以降の遺構から出土している。66の瓦当文様は九曜文である。67の瓦当文様は卍文である。

### 軒平瓦 (IV-528 図～529 図68～96)

68～96は軒平瓦である。瓦当文様は68は16類。69、70は16類の変形。71は25類か。72は29類。73は35類。74～76は36類。74・76は瓦当文様左脇に「⊖」の刻印あり。77は37類。78は40類。79は58類か。80は分類無し。

81～96は瓦当文様に「江戸式」の文様を持つものである。81・82はI Aa。83はI Eb。84はI Ga。85はI Ha。86はII F、子葉は欠損し不明である。87はII Fg。88はIV Fk。89～94は？Ja。90は瓦当文様左脇に、92は右脇に「△」の刻印あり。95は？Kh。瓦当文様左脇に「○」の中に「權」？の刻印あり。96は瓦当文様右脇に「囿」の刻印あり。74、75、81は二次焼成を受け赤変している。  
軒棧瓦（IV-530 図97～109）

97～102は軒棧瓦である。97、98は軒丸部のみで、軒平部の大半を欠損する。軒丸部の瓦当文様は富山藩の家紋である丁字梅鉢紋である。本地点は富山藩邸内ではないが、SG1586、SD1581共に富山藩邸に隣接する地点であり、富山藩邸のものであろう。瓦当文様の丁字梅鉢紋や梅鉢紋の区別は付きにくいものが多いが、軒丸部の瓦当文様が家紋の軒棧瓦は出土数が少なく、ほとんどが三つ巴文である。99は瓦当文様は軒丸部が三つ巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、？Liに分類される。100は瓦当文様は軒丸部が三つ巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、ⅢLiに分類される。101は瓦当文様は軒丸部が三つ巴文、軒平部は「江戸式」に分類され、IV Ffに分類される。102は瓦当文様は軒丸部が連珠三つ巴文、軒平部は中心飾りの文様とくびれがある唐草などの「東海式」の特徴を持つ。また、軒丸部が他と比べ大形である。江戸遺跡で報告される類似の瓦は幕末・明治期以降の資料が多いとされているが、本遺構も東大編年Ⅷ期に比定されている。

103～109は滴水瓦である。いずれも金箔瓦で、103は下地の漆が残って見える。中央飾りには梅鉢紋Bが配されている。103、105、108、109は同範の可能性が高い。

丸瓦（IV-530 図～534 図110～120）

110、114は筒部の中央と玉縁部よりに釘孔が設けられている。残長は110が40cm、114は30cmある。木口の面取りは見られない。全長は不明であるが、おそらく長く棟瓦であった可能性もある。玉縁は短い。111は凸面にはヘラ磨きの痕が強く残る。凹面の布袋痕には横位の刺し縫いが施されている。玉縁が長い。112、113は玉縁が短く、112は2.0cm、113は2.5cm。115は玉縁が長く4.7cm。116、117は同様の規格と思われる。118は玉縁の付け根に1.5cmほどの溝が設けられている特殊な丸瓦である。凹面には布袋痕と棒状の叩き目痕がみられる。この瓦が出土したSX2102はD2面に属しており、天和の火災層以前の遺構である。平瓦127～129と一緒に使用されたものであろう（加藤 1992）。119、120は小形である。119は玉縁が3.4cmと長く、120は玉縁が2.1cmと短い。二次焼成を受け一部分赤変している。

平瓦（IV-534 図～536 図121～129）

121は平面形は台形、長さは39.7cmである。横幅は他の平瓦に近いが非常に長く、他の使われ方をしたのかもしれない。この瓦が出土したSX2102はD2面に属しており、天和の火災層以前の遺構である。122～125は平面形は台形。123は二次加工痕あり。後端部角が四角く切り取られている。126は「⊖」の刻印あり。127～129は平面形は長方形、長さは23cm前後である。凸面中央部分に下の瓦を引っかけ上下がずれないようにするための溝が切つてある特殊な瓦である。凹面には製作時の布目痕を残すが、丸瓦が重ならない中央部分はヘラで成形され布目が消されている。端辺の一方は凸面中央部分の溝にはまるように突起が付けられて、こちらが後端になる。もう一方は雨水がたまらないようにするためか、ヘラで斜めに削られており、こちらが前端になる。平瓦で布を型に巻く技法を使うのは中世までとされ、古い技法を残す瓦である。この瓦が出土したSF1759はD1面に属す

る長屋の炉状遺構で、その壁体に二次利用されていた。瓦が実際に使用されていたのは、天和の火災で被災した長屋以前の建物に使用されていたことが分かる。同様の瓦は東大編年Ⅲ期に比定されている御殿下記念館地点 255・270 号遺構から出土している。また、東大編年Ⅱ期に比定されている山上会館地点 105 号遺構瓦集中層からは幅は同じであるがやや長い 26.5cm 前後の瓦が他の道具瓦などと共に屋根から落ちたと思われる状態で出土している。

#### 蠟燭棧瓦 (IV-536 図 130)

130 は蠟燭棧瓦である。左棧。棧部分のみ残存している。棧瓦の古い形で、本瓦葺きの重量軽減のため 17 世紀後半に考案されたものとされる。

#### 道具瓦 (IV-536 図～540 図 131～170)

131～145 は熨斗瓦である。131～140 の文様は 2 類。厚さは 4cm で厚手である。133 は表面に「⊗」の刻印あり。裏面には 4 本 1 条の条線が斜めに入っている。132、133 は二次焼成を受け一部分赤変している。135 は右側面に「○」の刻印あり。裏面には 5 本 1 条の条線が横方向に入っている。厚いためか 1.8cm の深い分割線が入っている。138 は深さ 1.5cm の分割線あり。139 は深さ 1.7cm の分割線あり。140 は SX1670 の床材として二次利用されていたものである。141 の文様は中心飾りのない陰文の 8 類。丸瓦 118、平瓦 127～129 に対応するものと想定されている (加藤 1992)。142～145 の文様は陰文の 15 類。「江戸式」の軒平瓦に類似する。裏文の条線はバラエティがある。浅い分割線あり。

146 は谷丸瓦。釘孔が設けられている。丸瓦が屋根に合わせて斜めに切れている。

147～158 は菊丸瓦である。瓦当文様は 147～153 は無剣梅鉢紋、154～158 は菊文である。菊文の菊丸瓦の径は 8.0～9.0cm、梅鉢紋の菊丸瓦の径は 11.5～12.2cm と梅鉢紋の菊丸瓦の方が大形である。147～153 の梅鉢紋には範に付いた傷が同じ箇所に残されており、7 点とも同範であることがわかる。いずれも、D1 層から D4 層の間の遺構や包含層から出土している。147～150 は金箔瓦である。151～153 には金箔が見受けられないが、この 3 点にも金箔が施されていたのであろう。SK3 からも同範の菊瓦が出土している。また、東大編年Ⅱ期に比定されている御殿下記念館地点 532、寛永 14 (1637) 年の墨書のあるかわらけと共伴しており東大編年Ⅱ期に比定されている医学部教育研究棟地点 SK4553、17 世紀前半に比定されている薬学部新館 SE105、薬学部資料館 SD6 といった遺構から出土の梅鉢紋菊丸瓦とも同範である。154 は十六菊文、155 は十二菊文、156～158 は十三菊文である。154～157 は二次焼成を受け赤変している。

159 の文様は無剣梅鉢紋 A で、梅鉢の花弁断面の稜線が台形状になっているものである。裏の接合面にはカキヤブリが確認され飾り瓦の部分であると考えられる。二次焼成を受け下半分が赤変している。

160～170 は鬼瓦である。160 は金箔鬼瓦。不要になった金箔鬼瓦から硯を作ろうとして加工途中で割れ、その後片方のみが被熱し金箔が剥がれてしまったものと思われる。背面は指で成形した痕が強く残る。161 は鬼瓦中心部の家紋。梅鉢紋。被熱して赤変している。162 は鬼瓦中心部の家紋。梅鉢紋。背面には銅線で屋根に固定させるための把手 (龍頭) が付けられている。163 は鬼瓦中心部の家紋。梅鉢紋。文様部は後付のため、剥がれて接合のためのカキヤブリの痕のみ残る。背面には銅線で屋根に固定させるための把手 (龍頭) が付けられている。把手は後付のため、接合部分にわずかに亀裂が入っている。背面全体に指で成形した痕が強く残る。164 は鬼瓦中心部の家紋。梅鉢紋。文様部は後付のため、接合のためのカキヤブリが梅鉢紋の脇にわずかに残る。左隅には文字のようなものが刻まれている。背面には銅線で屋根に固定させるための把手 (龍頭) が付けられている。把手



は後付。二次焼成を受け赤変している。165～170は鬼瓦の脇の雲水。165の背面は指で成形した痕が強く残る。169はいぶし瓦。割れるのを防ぐためか、裏面に小さい穴がいくつも開けられている。167、168、170は、二次焼成を受け一部分赤変している。

海鼠瓦（IV-540 図、541 図 171～175）

171は一辺29.3cm前後で、ほぼ正方形を呈す。1辺の中央付近に二次加工の抉りあり、釘をかける溝であろう。172は欠損している辺以外の各辺中央付近に一次加工の抉りあり、釘をかける溝であろう。一辺29.5cmのほぼ正方形を呈すると思われる。天和の火災以前の年代に分類されている。173は長方形の粘土板を貼り付けて端部の厚みを増している。釘穴あり。全体の大きさは不明。174は辺の縁に条線、角に近いところに釘穴あり。全体の大きさは不明。175は平面形は三角形。長方形の粘土板を貼り付けて端部の厚みを増している。条線と釘穴あり。海鼠壁の周縁部に使用されたものであろう。全体の大きさは不明。裏面は二次焼成を受け赤変している。

塼（IV-541 図 176～178）

176は平面形は三角形。表面に陰刻の植物文様あり。全面が磨かれている。丁寧な作りである。厚さは6cmと厚い。177、178は同じ仕様のもと思われる。辺の中央付近に一次加工の釘穴あり。表面と側面は黒く煤けている。厚さは4.5cm。幅は21.6cm。177は表面と側面が丁寧に磨かれている。178は表面のみ磨かれている。二次加工痕あり。右下が四角く切り取られている。平面形は長方形である。塼ではあるが釘穴が穿たれており、床から壁に立ち上がる壁際など床以外に使われていた可能性もある。いずれもD2面に属するSX2105から出土している。

その他（IV-541 図 179、180）

179は瓦を円く加工し、砥石か、垢擦りのようなものに転用している。側面は擦ったように滑らかになっている。180は瓦を四角く彫り窪めようとしている。硯に転用しようとしていたのだろう。

瓦全体の刻印について、今回抽出された中では6種類確認できた。「⊖」、「○」、「△」、「囿」、「⊗」、「○」の中に「權」である。「⊖」、が一番多く7枚に押されていた。丸瓦は瓦当文様が梅鉢紋A、平瓦は瓦当文様が江戸式ではないものに押されており、いずれも下屋敷時代に比定されている瓦である。古手の瓦には記号を用いた刻印が多いことが以前より指摘されているが、やはり同様の結果が得られている。

D2層出土の瓦には金箔瓦類が多数見られる。下屋敷時代の加賀藩邸内西側にあった、御成御殿のものである可能性があり、ゴミまたは土地造成時の盛土の客土として加賀藩邸内西側から持ち込まれてきたと考えてよいであろう。金箔瓦以外にも、D2層からは海鼠瓦、塼、丸瓦118のような溝をもつやや特殊な瓦の一群なども出土している。やはり下屋敷時代の加賀藩邸内西側から持ち込まれてきた可能性が高いと考えられる。

今回抽出された瓦の半数近くが下屋敷時代の様相を持つ瓦と考えられ、その時代に本地点では造成が行われ、多くの瓦が持ち込まれたのであろう。また、瓦当文様が富山藩の家紋である丁字梅鉢紋の瓦は、本地点北側に位置する富山藩邸で使用されていたものであろう。

## 第6節 木製品 (IV - 542 ~ 545 図 1 ~ 16)

1 ~ 8 は連歯下駄で 1 ~ 6 の台の平面形は角形、7、8 の台の平面形は丸形である。

1 ~ 4、7、8 は SE2572 出土。歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。小形の下駄で先端部と後端部が摩耗している。台部先端部と後端部の摩耗に比べ歯の摩耗は少ない。2 は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。歯を切り出す際の切り込みが残る。前歯は一般的な連歯下駄の前歯と変わらないが後歯はケツ重能部分が無く後端部が歯になっている。台部と歯の摩耗は少ない。3 は歯の横断面は長方形。後穴は後歯の前に穿たれている。台部先端部の摩耗に比べ後端部と歯の摩耗は少ない。4 は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。台と歯が摩耗している。台中央部に穴が穿たれている。草履を固定したものか。5 は SE1559 出土。歯が摩耗した連歯下駄に材を鉄釘で固定して歯とした補修をした下駄は多く出土するが、本資料は歯の痕跡が無く板材に歯の材を鉄釘で固定している。前歯、後歯とも 3 本の鉄釘で固定されていた。台部表面の鉄釘は 0.5cm 表に出ており歩行を考慮すると草履が固定されていたと考えられ、草履、台部、歯が鉄釘で固定されていたと考えられる。台部先端部と後端部は摩耗し歯は欠損している。6 は SX2245 出土。歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。後歯は欠損している。7 は歯の横断面は台形。後穴は後歯の前に穿たれている。歯は摩耗している。台部に 5 つの鉄釘が打たれている。歯の摩耗した連歯下駄に鉄釘で草履を固定したと考えられる。8 は刳下駄で台の平面形は角形である。裏面は間重能部分を刳り抜き接地面としている。前歯の接地面、間重能、後歯の接地面はほぼ同間隔である。前歯部分は方形に刳り抜き前壺を穿孔している。9 は SU327 出土。刳り下駄で台の平面形は角形である。裏面は間重能部分を刳り抜き接地面としている。前歯の接地面、間重能、後歯の接地面はほぼ同間隔である。前歯部分は方形に刳り抜き前壺を穿孔している。10 は SE2295 出土。飯椀で高台が高く大振りである。内面は赤色、外面は黒色。高台外周に轆轤の跡がある。11 ~ 13 は SE2572 出土。門の材と考えられる。鉄釘で材が接合され表面に黒色の漆が塗られている。裏面の仕上げは丁寧ではなく凸凹している。表面は二次焼成を受けている。表面に金具が固定されていた痕跡があり金具の取り付けられていた部分は焼成を受けておらず、表面の未焼成部分から梅鉢を象った金具が取り付けられていたと考えられる。金具を取り付けた部分には釘穴があり金具の取付けは釘で行われたと考えられる。14 ~ 16 は SE2295 出土。表面は炭化している。3 つの製品は組み合わせて使用されたと考えられる。14、15 は中央部に最大径が 3.4cm の円形の孔が穿たれている。14 は左側に長方形の孔が穿たれ、右側は臍になっている。15 は右側に長方形の孔が穿たれ、左側は臍になっている。臍には長方形の臍穴が穿たれている。14、15 は同様の製品であったと考えられる。16 は棒状の資料で一端が太くなり、切れ込みが入っている。太い部分の最大径は 4.2cm、細い部分の最大径は 2.8cm。

第7節 繊維製品 (IV-545図 1~6)

1~6はSK132出土。漆濾紙と考えられる。1、2、4~6は茶褐色を呈し、3は赤色を呈する。



## 第8節 金属製品 (IV - 546 ~ 553 図 1 ~ 98)

1 ~ 25 はキセル。1 ~ 4 は雁首Ⅱ類。1 は E 面上層出土。補強帯は無く首部の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。2 は SU2382 出土。補強帯に見える帯は火皿と一体で首部と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。3 は SU436 出土。補強帯は無く首部の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。4 は SU390 出土。補強帯は無く首部の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。肩上部に敲打による凹みがある。ラウが残る。5 ~ 7、9 ~ 12 は雁首Ⅲ-1 類。5 は SU2440 出土。火皿に穴が穿たれている。補強帯は別部品。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。6 は D2 層、B9 グリッド出土。火皿には2本の稜線があり火皿の下部は補強帯を表現していると考えられる。火皿後部に穿孔されている。雁首の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。7 は D2 層、E4 グリッド出土。補強帯は別部品。雁首の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。8 は SK1870 出土。雁首に吸口を接続した資料。雁首Ⅲ-1 類、吸口Ⅰ・Ⅱ類。補強帯に見える帯は火皿と一体で首部と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。雁首地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。肩の角はやや丸味を帯びている。吸口地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。首部上部に敲打による凹みがある。9 は SU2245 出土。補強帯に見える帯は火皿と一体で首部と溶接されている。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。10 は C2 層。補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。11、12 は SU390 出土。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。13、17 は雁首と吸口が一体となった延ベキセル。13 は SU327 出土。雁首Ⅲ-1 類、吸口Ⅲ-1 類。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。17 は SE1155 出土。雁首Ⅲ-1 類、吸口Ⅴ類。補強帯は無く火皿の溶接部分は外側からは確認できない。雁首の溶接は吸口側から見て右側にある。地金の色調は金色、溶接部は赤銅色。14 は C 層、I15 グリッド出土。雁首Ⅲ-2 類。細い縄が肩部分に巻かれた状態で出土した。縄の巻かれた部分の腐食は縄が巻き付けられた状態で進行していた。肩部分の溶接部分は割れて広がっており、ラウを接続するために縄が巻き付けられていたと考えられる。補強帯は無く雁首の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て左側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。15、16 は雁首Ⅴ類。15 は SK1114 出土。補強帯は無く火皿の溶接部分は外側からは確認できない。雁首の溶接は吸口側から見て右側にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。雁首上部に敲打による凹みがある。16 は SK1910 出土。補強帯は無く火皿の溶接部分は外側からは確認できない。首部の溶接は吸口側から見て上にある。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。18 ~ 21 は吸口Ⅰ・Ⅱ類。18 は C3 層出土。吸口側、肩の角はやや丸味を帯びている。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。ラウが残る。19 は SK1114・SK1115-1 出土。肩の断面は6角形、彫金で幾何学文様が施されている。吸口側、肩

の角はほぼ直角で吸口に接続される。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。ラウが残る。20はSU390出土。肩は吸口の太さに比べ太く、肩の角は丸味を帯びている。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。21はC3層出土。肩の角は丸味を帯びている。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。22、23は吸口Ⅲ-2類。22はC3層出土。吸口と一体となっている肩の角はやや丸味を帯びている。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。吸口と肩の境目に沈線が1周しており、別部品に見える加工が行われている。地金の色調は金色、溶接部は腐食により金属色を確認できない。23はSK1114・SK1115-1出土。肩全体に沈線がめぐらされている。吸口は直線的で先端部がやや膨らんでいる。吸口から肩への繋がりはやや緩やかな曲線である。地金の色調は金色、溶接部はやや白味を帯びた金色。ラウが残る。24、25はキセルの部品か？24はSE1155出土。25はE面上層出土。

26～28は鏡。26はD1層出土。長方形の鏡。摘みを通す穴が2箇所にある。文様は青海波に貝尽くし。「天下一」銘。地金の色調は銀色。27はSP90出土。柄鏡。柄は欠損している。鏡面は使用時の状態を残している。文様は水面に水鳥、芦。「人見藤原重次」銘。地金の色調は銀色。28はSK2352出土。円形の鏡。摘みを通す穴が中央にある。文様は梅に鶯。地金の色調は金色。

29～35は小柄。いずれも刃の先端部は欠損している。板材を鍛造し棟方部分で溶接している。戸尻は別パーツを嵌め込み溶接している。29はSU2245出土。文様は地板部分に矢。地金の色調は赤銅色。溶接部は腐食により金属色を確認できない。30は遺構外。文様は地板部分に亀と梅、波。地金の色調は赤銅色。溶接部分は銀色。31はD2層出土。文様は地板部分に馬5頭。地金の色調は赤銅色。溶接部分は銀色。32はSK352出土。文様は幾何学文様。地金の色調は赤銅色。溶接部は腐食により金属色を確認できない。33はSK521の4層出土。地金の色調は赤銅色。溶接部は腐食により金属色を確認できない。34はSU799出土。地金の色調は赤銅色。溶接部は腐食により金属色を確認できない。35はD2層出土。地金の色調は赤銅色。溶接部は腐食により金属色を確認できない。

36、37は目貫。36はSU1125出土。文様は籠を担いだ翁。地金の色調は赤銅色。37はD2層、D5グリッド出土。文様は龍。地金の色調は赤銅色。

38、39は鍬（はばき）。38はD2層、D5グリッド出土。地金の色調は赤銅色。39はSK2043出土。地金の色調は赤銅色。

40は薬缶の注口。SU446出土。1枚の銅板を鍛造して成形している。胴部に接続するための鍬の穴が2ヶ所に穿たれている。表面色調は銀色。地金の色調は赤銅色。

41は薬缶の把手。D2層出土。

42、43は包丁の刃。42はSU327-1出土。地金の色調は黒鉄色。43は、D2層、E7グリッド出土。地金の色調は黒鉄色。

44は匙。遺構外。つぼ部分で柄は欠損している。地金の色調は銀色。

45は円匙状の製品。SD1483出土。匙部分と柄を固定する部分からなる。柄の固定部分には穴が2ヶ所に穿孔されている。地金の色調は赤銅色。

46は容器蓋。SK2588出土。被せ蓋で、摘み、受け部分の突起部分は溶接部を確認できないため鍛造の資料と考えられる。地金の色調は赤銅色。

47、48、50は蓋付きの容器。47は遺構外。蓋と身が腐食して一体になっている。蓋中央に長方形の穴が穿たれており、蓋の摘みの部品が嵌められていたと考えられる。蓋に五三桐の文様。蓋の表面の色調は金色。地金の色調は赤銅色。48はSU390出土。蓋と身が腐食して一体になっている。蓋中央に摘みが溶接されている。地金の色調は赤銅色。50はSK1131出土。腐食と欠損のため全体の

形状は不明。地金の色調は赤銅色。

49は蓋付きの容器の蓋。SU327出土。底部と側の溶接は認められないことから鍛造品と考えられる。地金の色調は赤銅色。

51は皿状の資料で中央部の穿孔から、灯火具の受け皿と考えられる。E面上層出土。地金の色調は赤銅色。

52は水滴。SK2414出土。長方形の中央の水入れ口には細長い板材を長方形の筒状に折り曲げた部品、円形の風穴には細長い板材を丸い筒状に折り曲げた部品をそれぞれ溶接している。表面は腐食が著しい。地金の色調は赤銅色。

53は鈴。SE1155出土。紐を通す金具をつけた半球の部品と切り込みを入れた半球の部品を接合している。部品の接合部は溶接かどうか腐食のため確認できない。合わせた部品の中に潰れた金属（地金の色調は金色）の玉を入れている。使用時の状態を残しており鈴の音がする。地金の色調は金色。

54は風鈴。SK1156出土。上部に紐を通した穴が穿たれている。地金の色調は黒鉄色。

55は火挟み状の製品で何かを挟む道具。SU390出土。先端部の挟む部分は寄棟屋根の形状のように先端部は三角形で横断面はV字。溶接部は認められないことから鍛造で成形されていると考えられる。柄は変形しているが保存状態は良好で、使用されていた当時の弾力を保持している。地金の色調は赤銅色。

56は火挟み状の製品で何かを挟む道具。D2層出土。先端部の挟む部分は寄棟屋根の形状のように先端部は三角形、三角形の底辺に当たる部分は丸く仕上げられている。横断面はV字。溶接部は認められないことから鍛造で成形されていると考えられる。保存状態は良好で、使用されていた当時の弾力を保持している。地金の色調は赤銅色。

57はピンセット形製品。SU247出土。保存状態は良好で、使用されていた当時の弾力を保持している。地金の色調は赤銅色。

58、59は灯火具。58はSE908上層出土。59はSK1091出土。地金の色調は赤銅色。

60、62、65、66、78～80、83、86、88、89は金具。60はD2層、E8グリッド出土。地金の色調は赤銅色。62はC3層出土。調度などの金具で円形の金具に鎖がつながっている。地金の色調は赤銅色。65は遺構外。地金の色調は赤銅色。66はSK2589-3出土。地金の色調は赤銅色。78はC層出土。2箇所固定のための穴が穿たれている。地金の色調は黒鉄色。79はSK3309出土。一方の先端部は尖っている。地金の色調は赤銅色。80はSK1114出土。3箇所固定のための穴が穿たれている。中央の穴には釘が残っている。地金の色調は黒鉄色。83はSB2457出土。溶けているため本来の形状をとどめていない。地金の色調は赤銅色。86はSK1194出土。腐食のため地金の色調不明。88はSD1103出土。2箇所に釘が残る。地金の色調は黒鉄色。89はSX1154出土。地金の色調は黒鉄色。

61は革製品もしくは布製品の金具と考えられる。SU390出土。裏面に取り付けのための鉤の穴が2ヶ所に穿たれており、鉤が残る。腐食のため地金の色調は不明。

63は調度などの摘み金具で七宝文を象っている。C3層出土。地金の色調は赤銅色。

64は鈴と考えられる。SK2106出土。半球状の部品を重ね合わせた製品で中に玉状の金属が入っている。表面の腐食のために紐を取り付けるための金具の取り付け跡は確認できない。地金の色調は金色。球状の金属の地金の色調は赤銅色。

67は円形の金属片。SK2352出土。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。

68は棒状の製品で一端を尖らせている。SK1161出土。地金の色調は金色。

69は板状の製品。SK1175出土。用途は不明。地金の色調は黒鉄色。



70 は長方形の板材。遺構外。片面は腐食しているが、片面には白色の付着物でおおわれており腐食は進行していない。地金の色調は赤銅色。

71 は長方形の板材。SK1183の1層出土。5箇所穿孔されている。1箇所鉸が残っていることから、固定のための鉸を打つための穴と考えられる。地金の色調は赤銅色。

72、73 は把手。72 はSK518 出土。両端に取り付けのための臍がある。地金の色調は赤銅色。

73 は遺構外。両端に固定のための穴が穿たれている。地金の色調は金色。

74 は錘か。SD1103 出土。両端に穿孔されている。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。

75 は棒材。SK2449 出土。地金の色調は赤銅色。

76 は皿状の製品。C層出土。地金の色調は黒鉄色。

77 は割れた部分の断面は板材を折り曲げ別の板材を挟んでいることから、刃物と考えられる。SD667 出土。腐食のため形状は不明だが、地金の色調は黒鉄色。

81 は円形鏡の縁部分。SK2245 出土。地金の色調は銀色。

82 はおろし金。SE2295 出土。左側は細かい目、右側は粗い目。地金の色調は赤銅色。

84 は板状の製品。SK1024 出土。地金の色調は銀色。

85 は香炉の口縁部。C2層出土。下部の曲線部分は窓の一部。地金の色調は金色。

87 は容器の蓋。包含層出土。丸い摘みは半球状の部品を重ねて球にしたもので、花卉状の飾り金具、蓋などの部品を棒状の部品を通して部品を固定している。地金の色調は赤銅色。

90～98 は不明。90 はSD236 出土。やわらかい金属で表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。91 はSU390 出土。やわらかい金属で表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。92 はSK1486 出土。やわらかい金属で表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。93 はSK2351 出土。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。94 はSK2352 出土。95 は金属板。C層、C5グリッド出土。薄くやわらかい。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。96 はC2層出土。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。97 はD2層。表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。98 はE面上層出土。やわらかい金属で表面の腐食部の色調は白色。地金の色調は銀色。

## 第9節 錢貨 (IV-554 ~ 565 図)

今回の調査では2000枚を越える錢貨が出土している。調査地点では近世以前の遺構・包含層も検出されているが、錢貨は出土していない。出土した錢貨をすべて掲載することは不可能なため、陶磁器との供伴により出土年代が判別しやすい遺構や包含層を中心に、遺存度の良好なものを抽出・掲載した。また渡来・模鑄錢については錢種のバリエーションを考え抽出しており、必ずしも出土遺構の年代を示すものではない。また本地点では寛永通宝の他に、小玉銀(豆板銀)、天保通宝、小判、一朱金が出土している。

錢貨は大きく金銀銅に分かれ、遺跡から出土する多くを占めるのは銅製の錢である。中心となるのは、江戸時代を通じて生産された「寛永通宝」であり、そのうち鉄製寛永通宝は遺存度が悪く、採拓に堪えず、報告書で掲載されるものはやはり銅製寛永通宝が中心である。銅製寛永通宝一文錢寛永通宝は、現在では大きく三種に分けられ「古寛永通宝」「新寛永通宝文錢」「新寛永通宝」に分類されている。

従来、報告書での寛永通宝の記載は、古錢界の錢譜との照合から錢籍(鑄錢地・時期)を当てはめた錢種の記載が多く認められた。しかし岡山市二日市遺跡の錢座の調査から、書体や銅色などが異なる寛永通宝が一つの銅座から鑄られていたと考えられ、錢種から導かれる鑄錢地は学問的根拠に乏しいことが明らかになっており(神谷 1991、神谷 1997)、明確な根拠に欠ける鑄錢地を想起させる錢種の記載は戒めるべきであると、警鐘がならされている(永井 1998)。しかしながら、上記の明確でないと思われた錢種を有効的に利用した研究が、川根・高橋両氏によって行われている。川根氏は錢種別の法量の比較や、年代の确实と思われる出土資料との比定により、錢種を考古資料として确实にする研究が進められている(川根 1996、川根・石川・植木 2005)。また高橋・斉藤氏による一連の鉛同位体比の理化学的研究により、現在推定されている錢種を、鑄造地と鉛供給地との地理的条件や、鉱山関係の文献記録との整合性から、鑄造地の比定できる資料を抽出されている(高橋 2001a・2001b、斉藤 2000、斉藤・高橋・西川 2000)。

今後も近世遺跡の発掘調査の増加に伴い、火災や火山灰、または埋葬などに伴う文献資料など、実年代の判明している資料の増加は期待されることから、錢貨の場合、通常の考古学的手法である層位的検出、出土遺物の分類という手順ではなく、錢種を确实と思われる出土例に比定する作業の蓄積が必要と思われる。

今回の報告では川根正教氏による分類(川根 2001)を参考に記載している。また錢種の詳細は川根正教氏のご教示による。

分類は鑄期により10期に分類される。以下各期の概要を述べる。

I期は古寛永通宝である。古寛永通宝は基本的に母錢を持たず、鑄流い母錢からの制作による手替わりが多く、古錢収集界で一般的に行われている細分類であっても、一致しないことが多い。I a・I bに細分され、文献などから鑄錢時期の差異を明らかにする可能性が考えられている(永井 1998)。

I a期は推定鑄造地(称)を省いた型式名とした。奇永型・麗書型・裕字型・長永型・長永手型・仰永型・跋永型・縮寛型・大永(称御蔵式)・二草点型・四草点型・不草点型芝錢・跳永型(称坂本式)・不跳永型・正永型(称坂本式)・無星文型・正字型・湾柱永型・流永型・力永型・剉永型・短足宝型・広永型・正永型・寛字型・狭永型・狭永型・広永型・太細型・肥永型・笹手永型・良恕式・俯

永型・進永型・縮字型・斜宝型・長永型（称井之宮式）・縮寛型・小字（称建仁寺式）・大字（称建仁寺式）である。同名異鑄地が存在する場合は、称・式という記載を加えた。

I b期は古銭界では鳥越銭、沓谷銭と呼ばれる一群である。正足寶型・低寛型・大字型（称鳥越式）・高寛型分類される。

II期は新寛永通宝文銭である。鑄銭時期は文献から寛文8（1668）年鑄銭が通説であるが、寛文3（1663）年説もあり、未だ検証が必要である。書体から、正字背文・中字背文・小字背文に分かれる。これらの他に織字・縮字などがある。II期新寛永通宝文銭は文献では亀戸のみで鑄銭されたとなっており、書体の差が時間差である可能性も考えられるので細分をしている。また文銭以降の新寛永通宝は母銭を持つものが多く、古寛永通宝よりも定型に属するものが多くなり、東洋貨幣鑄造研究所の研究（工藤 1998）などにより、細分類は確度の高いものとなっている。

III期（1697～1712）はIII a・III bに細分される。III a期（1697～1707）は広永型（四ツ宝）・勁永型（四ツ宝）・草点永型・正字型（称猿江式）・小字型（称猿江式）・跳永型（四ツ宝）俯頭歪型・退永型（不旧手）が該当する。御殿下記念館地点・増上寺子院群（港区芝公園1丁目遺跡調査団 1988）・長光庵寺跡（伊藤・小滝 1986）・長坂遺跡（惟村・増尾 1992）などの出土状況から、元禄期の鑄銭が確定している。

III b期以降の銭については、V期（1736～1745）の無印型、VI期（1765～1788）の小字背久型、背久二型が確定した資料となっている。III b期以降の銭種の数量を考えると、現時点では多いとは言えないが、寛政頃から残されている文献資料も、同時代に鑄銭された銭の記載が増えることから、文献資料の信頼性は増していると考えられる。また文献からIV期鑄銭と考えられる背文「左」、「千」、「仙」や、V期鑄銭と考えられる「足」「元」は、上述高橋氏による鉛同位体の分析により、鑄銭地に近い鉱山からの供給や、文献資料による供給の記述のと照合で「左」が佐渡、「足」が足尾、「元」が高津、「千」が仙台と比定されており、文献の記載に一定度の信頼をおくことができると思われる。

また近世遺跡出土の渡来銭については、中国本土での鑄銭による「本銭」、日本国内での鑄銭である「模鑄銭」に分かれ、本銭と模鑄銭の区別は可能だとされているが（永井 2001）、今回は勉強不足により分離できなかったため渡来・模鑄銭と記載している。

以下、拓本を掲載した銭貨を詳述する。

1、2はSU247出土の寛永通宝一文銭で、III a期に属する新寛永通宝である。2は四ツ宝銭広永型、2は四ツ宝銭勁永型である。従来宝永期の鑄造とされていたが、上記、御殿下記念館地点などの出土状況から元禄期に修正されている。勁永は四ツ宝銭の基本型である広永に比し、「永」字が力強くなっており、「寶」字が仰いでいる。供伴する陶磁器類および確認面から、1703年を下限とする遺構である。3、4は天和2（1682）年の火災を下限とするSE326から出土している。ともにII期に属する新寛永通宝文銭と思われる。遺存度が悪く細分型式は分からなかった。4は腐食により背「文」が見えづらくなっている。

5～65は天和2（1682）年の火災を下限とするSU390から出土している。総数113枚が出土している。期ごとの組成は、I期古寛永通宝42枚、II期新寛永通宝文銭65枚、不明5枚、渡来・模鑄銭1枚となっている。5～13はI a期、14～17はI bに属する。5は称御蔵式正字型、古銭界は浅草橋場で鑄銭されたとされているが、確証はない。6は二草点型、7は四草点型、8は不草点型である。9は称水戸式長永型で、水戸銭座の発掘調査により、水戸鑄と確定された銭種である。10は力永型。11は奇永型で毛利家手本銭調査の際に長門国鑄銭とされた銭である。12は進永型、13は称建仁寺式、小字型である。14～17はI b期に属する古寛永通宝である。14、15が正足宝型、16、17が高寛型



であり、現在では明暦期鑄銭と考えられている。18～64はⅡ期に属する新寛永通宝文銭である。1～38は正字背文型、39～47は中字背文型、48、55、56は縮字背文型、49～54は細字背文型、57～64は銭種の判別はできなかった。65、66は渡来・模鑄銭で65が至和元宝、66が開元通宝である。

67～92はSK476から銭指として出土している。供伴する陶磁器が少なく、帰属時期の確定は難しいが、Ⅰa期の古寛永通宝と渡来・模鑄銭で構成されることから、明暦期以前の遺構の可能性が考えられる。67は四草点型、68～73は不草点型、74は不跳永型、75は称坂本式正永型、76～78は湾柱永型、79、80は浮永型、81は流永型、82は広足寛型、83は勁永型、84～86は太細型、87は縮通型。88、89は長門鑄と考えられる銭で、88は奇永型、89は裕字型である。90は長通型、91はⅠa期に属すると考えられるが、銭種は判別していない。92は渡来・模鑄銭で永楽通宝である。

93、94はSK584出土で、帰属時期が判断できる様な陶磁器類は出土していないが、出土した銭貨が渡来・模鑄銭のみであることから、近世期でも古い段階の遺構の可能性はある。93は太平通宝、94は元豊通宝である。

95はⅤ期に分類される新寛永通宝で虎ノ尾寛型である。SU593から出土している。この遺構はA面で検出された地下室で、供伴する遺物から埋没時期は1760～70年代と考えられる。

96はSU631から出土した。Ⅲa期の新寛永通宝称猿江式小字型である。SU631はC面に帰属する遺構で、下限は元禄16(1703)年である。上述御殿下記念館地点の検出状況を首肯する。

97～99は渡来・模鑄銭で、99が天聖元宝、98が熙寧元宝、99が大観通宝である。出土したSK699は供伴する遺物から1630～40年代が与えられる。100は渡来・模鑄銭で、聖宋元宝である。101、102はSP851から出土している。SP851はE面で検出された遺構であり、1630年代後半～40年代の遺構と考えられる。銭種は101は皇宋通宝、102は元祐通宝である。

103はSK1023から出土している景祐元宝である。

104はSK1024出土の元豊通宝。

105～107はSK1052から出土している。105は開元通宝、106は元豊通宝。107は政和通宝である。108～1106はSD1103から出土している。SD1103は天和2(1682)年の火災から幕末まで大聖寺藩と富山藩の地境として機能した遺構で、非常に長い年代の遺物が出土している。出土した陶磁器類の下限は、1800～1820年代まで下る。108はⅢa期に属する新寛永通宝で、称猿江式小字型、109はⅤ期、亀戸式大字型、110もⅤ期、虎ノ尾寛型、111はⅥ期、狭通背元である。112、113はⅥ期以降の新寛永通宝四文銭十一波である。114、115は渡来・模鑄で、114は天聖元宝、115は渡来・模鑄銭、紹聖元宝、116は紹聖元宝である。

117は新寛永通宝四文銭で、SK1114から出土している。供伴する陶磁器の年代は1830～1840年代。118はSU1122出土の渡来・模鑄で元祐通宝であるが、陶磁器類は1780～1800年代まで出土しており、遺構の帰属時期を反映するものではない。

119はSD1134から出土した、永楽通宝である。

120はⅥ期に属する新寛永通宝で、小字背元型である。陶磁器分類Ⅷ期の陶磁器が出土しているSK1205から出土している。121は慶長通宝で慶長年間に鑄銭とされる。中世より流通していた、永楽通宝の「永楽」の銭文を削り、「慶長」へ差し替え作成されたとされている。

122～127はA面検出遺構であり、1740年代の陶磁器が出土しているSU1264から出土している。122～124はⅡ期に属する新寛永通宝文銭であり、122、123は正字背文型である。125はⅢa期に属する新寛永通宝四ツ宝で跳永型である。126は古銭界では仙台鑄銭とされる、異書斜宝型である。

Ⅳ期に属する。127はⅤ期に属する称秋田式中字型である。

128～144はCR1面検出のSK1309から出土している。遺構の年代下限は1707年である。

128～130はⅠ期に属する古寛永通宝で、128は広足寛型、129は称井之宮式縮寛型、130は称建仁寺式大字型、131～133はⅠb期に属する古寛永通宝で131は称鳥越式大字型、132は高寛型、133は低寛型である。134は新寛永通宝文銭で、深字背文型。135～144はⅢa期に属する新寛永通宝で、135、136、139、142、144は四ツ宝広永型、137、140、143は同じく四ツ宝で勁永型。138、141が草点永型で通称萩原銭と呼ばれているものである。

145～148は渡来・模鑄銭で、145はSB1772出土の永楽通宝。

146はSR1856出土の永楽通宝。147はD2面検出のSF2185から出土した洪武通宝、148は同じくD2面の検出遺構であるSK2187から出土した永楽通宝である。

149～157はE面検出遺構である、SX2245から出土した銭貨である。供伴する陶磁器の年代から、SX2245は1630～40年に埋没したと考えられる。149、150はⅠa期に属する古寛永通宝太細型、151、152は銭種は判別できないが、同じくⅠa期に属すると思われる。153～157は渡来・模鑄銭で153は祥符通宝、154は元豊通宝、155は元祐通宝、156は大観通宝、157は永楽通宝である。Ⅰb期の銭貨が出土していないこと、渡来・模鑄銭の比率が高いことが窺える。

158はⅠa期に属する古寛永通宝婉文型。SK2352から出土している。

159はSB2457出土の渡来・模鑄銭で、聖和通宝。

160～179はⅠa期の古寛永通宝で、SE2574から出土している。供伴する陶磁器の年代は1630～40年代である。160が二草点型、161が不草点型、162は称坂本式跳永型、163が称水戸式正字型である。164～166は浮永型、167が短足宝型。168～174は太細型である。175、177は称井之宮式縮寛型、176が称井之宮式長永型、178は長宝型である。179は渡来・模鑄銭の皇宋通宝。

180～184は渡来・模鑄銭で、SP2688出土の元祐通宝、181～184は当遺跡でも近世期最古期である遺構、SX2715から出土している。寛永通宝は出土していない。181は天禧通宝、182は皇宋通宝、183は治平元宝、184は大観通宝である。

185～195はD2層出土の銭貨である。D2層に含まれる陶磁器類から年代は下限として、1650～60年代が考えられる包含層である。Ⅱ期に属する新寛永通宝文銭は出土していない。185～191はⅠa期である。185は二草点型、186、187は跛宝型、188は太細型、189は長門鑄とされる麗書型、190・191は称井之宮式縮寛型、192はⅠb期、正足宝型である。193～195は渡来・模鑄銭で、193は皇宋通宝、194は腐食が激しいため銭種は判別できなかった。195は元祐通宝である。

196～263はD1層より出土している。D1層は天和2(1682)年の火災を下限とし、含まれる陶磁器から1660年代以降と考えられる。196～218はⅠa期で、196が御蔵式大字、197～200が不草点型、201が坂本式正永型、202・203が仙台式正永型、204・205が称水戸式長永型(称水戸式)、205が背星文型、207が湾柱永型、208が力永型、209～212が太細型、213が笹手永型、214が裕字型、215が斜宝型、216が称井之宮式縮寛型、217が称建仁寺式字型。218は銭種は不明。219～231はⅠb期の古寛永通宝で、219～221が正足宝型、222～231が低寛型である。232～255はⅡ期新寛永通宝文銭で、232～245が正字2背文型、246～251が中字背文型、252～254が細字背文型である。255の銭種は不明である。256～263は渡来・模鑄銭で256は唐國通宝、257は天禧通宝、258は紹聖元宝、259は大観通宝、260は嘉定通宝(背十二)、261は紹定通宝(背六)、262は洪武通宝(背一銭)、263は永楽通宝である。

264～266はC面焼土より出土した銭貨で、包含層の埋没下限は元禄16(1703)年と考えられる。

264 はⅢ a 期、新寛永通宝で四ツ宝広永型、265 は「マ頭」が特徴の不旧手退永型、266 が四ツ宝勁永型である。

267 は SK1114 から出土の天保通宝である。陶磁器の廃絶年代からⅧ b～Ⅷ c の年代が与えられる。郭が細郭となっており、輪も細めである。

268 は慶長一分金で D1 層から出土している。重量は 4.43g で裏面上部に刻印が 2 箇所ある。いわゆる「片本」「両本」ではないので、両替商による刻印かも知れない。

269 は小判型金製品で、加賀藩、花降雛小判金といわれているものに相当すると思われる。表面に横位の刻印が施される桜の刻印が施される。『加藩貨幣録』記載の花降小判金は 5 種類の絵が残されている。そのうち出土小判に類似しているのは「重サ一匁二分 又一品一匁一分 金位中」と記載があり、存在が疑問視されていた、地方金貨と推定される。重量は 1.90g で一匁二分の 46 パーセント、一匁一分の 42.2 パーセントとなっている。中央部で切断されていることから「秤量貨幣」として切り遣いされた考えられる（西脇 2003）。金の純度は慶長小判と同等との分析結果が出ている（小泉・伊藤・原・西脇 2001）。

270、271 はいわゆる雁首銭である。270 は SU390 出土であり、この雁首銭のほかに 112 枚の銭が検出されており、関連性がうかがわれる。

272～277 は碁石状金属製品で、272 は SK1125、273 は SE1155、274～277 は包含層出土で 274、275 は C 層から、276、277 は A 層から出土している。272 は上面にわずかに刻印の痕跡が認められる。274～277 は表面に亀裂が入り、滴状の形状で著しくゆがんでいる。緑青も多く、研磨すると、銀色から銅色で、銅色を呈してるものが多い。外見上では金属と判断しづらいであろう。銭貨として「小玉銀」と呼ばれているものに類似している。また D 面焼土からも類似品が 4 点出土していることから、本来は天和 2 年の火災で消失した長屋に存在し、火災を受け、変形した可能性が考えられる。貨幣の代わりに秤量として利用された可能性も考えられる。

当遺跡での出土銭貨の傾向を概観すると、その多くが遺構覆土中また包含層中に含まれ、亡失・廃棄銭（橋口 2001）に含まれる。意図的に散布・埋納などされた検出状況は 1 区では明らかではなく、2 区から検出される墓、基礎遺構などがあげられる。

まとまった数量を出土した年代の確定できる遺構、および包含層での出土枚数の比率を以下にしめた。

調査地点での近世最初の営為と思われる E 層の造成（1630 年代）から、最上層である A 層（1703 年までに整地）までの包含層と、まとまった数量の銭貨が出土した SU390・SK3 を時間軸で表した。E 層が 11 枚、C 面焼土層が 5 枚、A 層が 4 枚と極少量のため、比較資料としては不十分ではあるが、E 層で初鑄年代が寛永 13（1637）年といわれる寛永通宝が出土している点、C 面焼土層（元禄 16 年の火災層）からはⅢ a 期に属する新寛永通宝の四ツ宝・不旧手が出土していることが、現在の銭貨研究の成果を首肯する。

また万治 3（1660）年の銘を持つ硯が出土し、1660 年代に造成されたと考えられる D1 層からは銭貨が 140 枚出土し、Ⅱ期新寛永通宝文銭が全体の 24 パーセントを占めている。その下層である 83 枚の銭貨が出土した D2 層（D3・D4 層を含む）からは、Ⅱ期新寛永通宝文銭は出土していないことから、新寛永通宝文銭初鑄年確定の、一助になり得る可能性が考えられる。

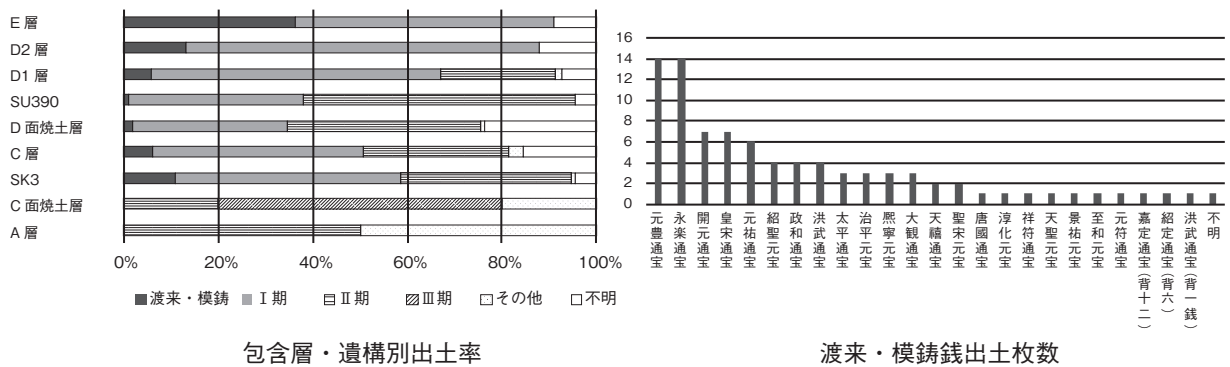
SU390 と D 面焼土層はともに天和 2（1682）年の火災に伴うもので、SU390 から 113 枚、D 面焼土層から 220 枚が出土しており、銭種の出土比率は近いものとなっている。出土状況は、不慮の火災に



よる亡失・廃棄の様相を呈し、当該期の銭種構成を強く表していると思われる。また65枚の銭貨が出土したC層は、同火災後の盛土造成層であり、加賀藩邸から運ばれたと考えられる。上記SU390・D面焼土層との比率の違いとしては、C層に渡来・模鑄銭がやや多いように思われるが、加賀藩邸からの客土であることに由来するものかは現時点では断定はできない。

元禄16(1703)年の火災を下限としているSK3からは、111枚が出土している。元禄10(1697)年初鑄とされるⅢa期新寛永通宝が出土していないことが特筆される。

また本地点の渡来・模鑄銭の出土率を示した。出土備蓄銭の研究から、出土数の上位6種(順位順に皇宋通宝、元豊通宝、熙寧元宝、元祐通宝、開元通宝、永樂通宝)で5割を占めている(鈴木1999)。本地点での出土傾向とは符号しないが、渡来・模鑄銭の出土数量が87枚と少ない為、差異の原因についての言及は難しい。



## 第10節 石製品 (IV-566～580 図)

硯、砥石、温石、軽石、火打ち石、碁石、石臼、その他の順に遺構順で記載している。

### 硯 (IV-566、567 図1～29)

石材は粘板岩が多く他は頁岩である。良質なものは見受けられない。1はD3層出土。粘板岩。縁に線刻で模様が刻まれているが、浅く、不明瞭である。自作か。本来の硯の石ではなく軟質だったためか、陸が大きく磨り減って溝状になっている。2はD2層出土。粘板岩。四隅が丸く削り出されている。四寸×二寸。3はD2層出土。粘板岩。硯背に「七日」「盛町」の文字が刻まれている。陸が大きく磨り減っている。4～7はD1層出土。粘板岩。4は四隅が丸く削り出されている。海が狭い。5は硯背に「万治三(1660年)六月一日 石」の文字が刻まれている。壊れて使用できなくなってしまったのか、縁を削って背面に硯を彫り直そうとしている。6は四寸×二寸。7は四隅が丸く削り出されている。8はC3層出土。粘板岩。全体的に彫りが粗く職人の手によるものとは考えにくい。持ち手が付いている、手持ち硯。9はC3層出土。粘板岩。背面に脚が付く。10はC2層出土。粘板岩。11はSD259出土。粘板岩。六寸×二寸。12はSU327出土。粘板岩。硯背に文字が刻まれている。11、16、17、19、20には硯を安定させるために背面に浅い挟りが施されている。13はSU390出土。粘板岩。縁に金箔が貼られている。14はSU446出土。粘板岩。再利用のため陸を掘り下げて加工しようとした痕跡がある。15はSU446出土。頁岩。四隅の角が落とされている。石が軟質だったためか、陸が大きく磨り減って溝状になっている。16はSK518出土。粘板岩。硯背に「正保二□(1645年)」の文字と鳥の絵が刻まれている。両端に海がある珍しい形のものである。17はSK593出土。頁岩。硯背に「本高島虎斑石」の文字が刻まれている。陸が大きく磨り減っている。おそらく本来の高島虎斑石ではないと思われ、似せて刻んだものであろう。18はSK979出土。頁岩。19はSK1114出土。頁岩。20はSK1114・SK1115-1出土。粘板岩。剥離している。21はSK1231出土。頁岩。小形の硯。22はSU1247出土。粘板岩。熱で何層にも剥離している。やや大形の硯。23はSK1632出土。頁岩。24はSK1698-3出土。粘板岩。四隅の角が落とされている。陸が大きく磨り減っている。25はSK1962・1965・1966出土。粘板岩。26はSK2477出土。頁岩。四隅の角が落とされている。27はSK2457-2029出土。粘板岩。陸に格子状に刻みが付けられている。28はSK2535出土。粘板岩。四隅が丸く削り出されている。29はSK2678出土。頁岩。石が軟質だったためか、陸中央部が大きく磨り減って溝状になっている。四隅が丸く削り出されている。

### 砥石 (IV-568～572 図30～96)

30はE層出土。粘板岩。面取りされている小形の砥石。かなり薄く使い込まれている。31はD3層出土。流紋岩。4面とも使用している。表面は中央のみ使用して工具痕が消えている。側面は、右手前から左奥に向かって摩滅している。32はD3層出土。粘板岩。3面に工具痕が残る。表面は右手前から左奥に向かって摩滅している。33はD2層出土。緻密質安山岩。表面と側面の2面を使用している。右手前から左奥に向かって摩滅している。34はD2層出土。デイサイト。表面と側面の2面を使用している。表面は手前と奥が摩耗しており、全面を使用して研いだのではなく部分的に小さいものを研ぐために使用したのかもしれない。側面は右手前から左奥に向かって摩滅している。35はD2層出土。粘板岩。仕上げ砥。置砥1面のみ使用。比較的均一に摩耗している。36はD2層出土。流紋岩。持ち砥。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。37～57はD1層出土。37は粘板岩。2面使用している。比較的均一に摩耗しており、かなり薄く使い込まれている。38は

流紋岩。置砥。比較的均一に摩耗している。39は粘板岩。置砥。1面のみ使用。比較的均一に摩耗している。40は頁岩。置砥。比較的均一に摩耗している。側面には工具痕が残る。41は頁岩。2面使用している。かなり薄く使い込まれている。42は頁岩。2面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。43は粘板岩。置砥。1面のみ使用、他の面には工具痕が残る。比較的均一に摩耗している。44は頁岩。置砥。1面のみ使用、他の面には工具痕が残る。比較的均一に摩耗している。45は頁岩。置砥。1面のみ使用、他の面には工具痕が残る。比較的均一に摩耗している。46は珪長岩（沼田砥？トラ砥）。持ち砥。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。47は流紋岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。48は頁岩。表面と側面の2面を使っている。右手前から左奥にかけて摩耗している。49は頁岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。50は頁岩。大形である。表面と側面の2面を使っている。51は流紋岩。置砥。比較的均一に摩耗している。52は頁岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。53は頁岩。3面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。54は流紋岩。1面のみ使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。55は珪長岩（沼田砥？トラ砥）。5面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。56は頁岩。4面使用している。57は頁岩。持ち砥。4面使用している。右手前から左奥にかけて反っている。58はC3層出土。頁岩。3面使用している。細い先端の尖ったものを研いだのか、細かい傷が複数付けられている。59はC3層出土。デイサイト。3面使用している。60はC3層出土。輝石安山岩。1面のみ使用している。比較的均一に摩耗している。焼成を受け表面にスス付着。部分的に変色し割れている。61はC3層出土。頁岩。置砥。1面のみ使用している。62はC層出土。粘板岩。小形の砥石。1面のみ使用している。63はSU12出土。頁岩。使用面のうち外側が摩耗して湾曲している。全面を使用して研いだのではなく部分的に小さいものを研ぐために使用したのかもしれない。64はSU132出土。頁岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて大きく反っている。2面には細い先端の尖ったものを研いだのか細い溝状の傷が複数付けられている。面によって2種類を使い分けていたのかもしれない。65はSD337出土。流紋岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。66はSD422出土。頁岩。小さな砥石に作り替えている。加工痕有り。周辺部から削り込んでいる。67はSK518出土。粘板岩。2面使用している。かなり薄く使い込まれている。68はSK596出土。頁岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。69はSD603出土。頁岩。置砥。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。70はSD603出土。流紋岩。4面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。71はSD603出土。流紋岩。小さな砥石に作り替えようとしているのか、加工痕有り。72はSU631出土。頁岩。小形の砥石。73はSU631出土。輝石デイサイト。3面使用している。先端の尖ったものを研いだのか溝状に痕が残る。74はSU804出土。頁岩。大形。1面のみ使用している。右手前から左奥にかけて反っている。75はSK1023出土。頁岩。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。76はSK1023出土。珪長岩（沼田砥？トラ砥）。持ち砥。4面使用している。右手前から左奥にかけて反っている。77はSK1023出土。粘板岩。中央部が大きく抉れ、裏面にも溝状に痕が残る。78はSK1023出土。粘板岩。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。79はSD1103出土。頁岩。2面使用している。かなり薄く使い込まれている。80はSK1114出土。粘板岩。置砥。比較的均一に摩耗している。81はSK1141出土。粘板岩。置砥。裏面は摂理面、表面は面取りしている。均一に摩耗している。82はSK1329出土。粘板岩。83はSK1415出土。粘板岩。小形。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。溝状の細かい傷が残る。84はSK1438出土。粘板岩。大形。2面使用している。面は大きく反っている。85はSB1671出土。輝石安山岩。4面使用している。均一に使われず、波打っている。86



はSB1822-4出土。頁岩。2面使用している。右手前から左奥にかけて反っている。87はSU1892出土。流紋岩。深く溝状になっている。88はSK2039出土。流紋岩。持ち砥。2面使用している。右手前から左奥にかけて反っている。89はSK2083出土。粘板岩。置砥。比較的均一に摩耗している。90はSK2352出土。頁岩。小形。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。91はSK2352出土。粘板岩。1面のみ使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。92はSB2457-9出土。頁岩。溝状に痕が残る。93はSK2477出土。粘板岩。2面使用している。右手前から左奥にかけて摩耗している。94はSK2535出土。粘板岩。小形。1面のみ使用し、比較的均一に摩耗している。全体的には置砥が多く、中砥、仕上げ砥として使われたものであろう。包丁などや小形の工具に使われたものであろう。また、大形の砥石も出土している。他の地点で鍬の出土もあり、鎌や鍬のような道具類が想定される。名前が書かれているような砥石は確認されなかった。

95はD1層出土。粘板岩。周縁部に加工痕があり硯から転用したものであろう。砥石または温石として使ったものであろう。96はD1層出土。砂岩。表面は滑らかであるが用途は不明。

#### 温石 (IV-572 図 97、98)

97はSK797出土。千枚岩。長方形を呈し灰の中から取り出すときに棒を指すための円孔が穿たれている。短辺は2寸。98はSK1753出土。緑色片岩。長方形を呈し灰の中から取り出すときに棒を指すための円孔が穿たれている。短辺は2寸。

#### 軽石 (IV-572 図 99～104)

裏面がすり減っているものが多く、垢擦り等として使用されたのであろう。99はSK797出土。上方に1箇所穴が開けられている。裏面がすり減っている。100はSR1856出土。上方に2箇所穴が開けられている。裏面がすり減っている。101はSU2245出土。上方に1箇所穴が開けられている。裏面がすり減っている。102はE層出土。周縁部に擦痕が見られる。103はD1層出土。裏面がすり減っている。104はST2484出土。裏面がすり減っている。

#### 火打ち石 (IV-572 図 105～124)

いずれも白色系の石材である。105はD2層出土。玉ずい。37.6g。稜の多くに使用痕が見られ、使用中のものであろう。106はD2層出土。脈石英。28.3g。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられ、使用中のものであろう。107はD1層出土。玉ずい。8.8g。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられるが、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。108はD1層出土。玉ずい。12.0g。稜の多くに使用痕が見られない。再利用されるものであろう。109はD1層出土。脈石英。18.2g。稜の多くに使用痕が見られ、使用中のものであろう。110はD1層出土。脈石英。4.2g。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられるが、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。111はD1層出土。脈石英。19.1g。稜の多くに使用痕が見られ、使用中のものであろう。112はD1層出土。脈石英。7.0g。稜の多くに使用痕が見られ、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。113はC3層出土。脈石英。11.2g。稜の多くに使用痕が見られる。114はSU132出土。瑪瑙。26.5g。稜に使用痕が見られ、使用中のものであろう。115はSP548出土。脈石英。26.2g。稜の多くに使用痕が見られ、使用中のものであろう。116はSK1721出土。玉ずい。46.5g。稜に使用痕は見られず、これから使用されるものであろう。117はSB1780出土。玉ずい。4.1g。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられるが、再利用するには小さく廃棄されたものと考えられる。118はSL1784出土。玉ずい。10.3g。使用痕がある稜と鋭いままの稜がみられる。119はSR1855出土。玉ずい。80.0g。稜の多くに使用痕が見られ、使用中のものであろう。120はSR1856出土。脈石英。6.4g。稜の多くに使用痕が見られ、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。121はSK2098出土。玉ずい。61.1g。使用痕がある稜

と鋭いままの稜がみられ、使用中のものであろう。122、123はSK2113出土。玉ずい。122は7.4g。123は5.6g。稜の多くに使用痕が見られ、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。124はSD2116出土。玉ずい。7.4g。稜の多くに使用痕が見られ、再利用するには小さく廃棄されたものであろう。

碁石、碁石状石製品、その他（IV-573、574 図125～206）

碁石、碁石状石製品、玉石の3種類に分類される。碁石は加工が施され径2.0～2.2cmでほぼ円形の一群である。碁石状石製品は形はあまり整っていないが、比較的薄く大きさも碁石に近く碁石としてほぼ使われたのではと考えられる一群である。そして、大きさも形もあまり整っていない、白と黒の玉石の一群がある。これらはどのように使われたのかは不明であるが、黒石と白石が混在した状態で出土している。加工はされていないようであるが、人為的に集められて持ち込まれたことは確かである。碁石の代用品として使われたか、他の黒と白に分かれて行う双六などの盤上遊戯に使われたのかもしれない。また、和算に関する継子立のような数遊びに使われたのかもしれない。125～146はD2層出土。125、126は頁岩。黒の碁石。127～146は黒と白の玉石である。129、142は頁岩。134はチャート。これらは黒石である。残りは脈石英の白石である。147～179はD1層出土。147～164は頁岩の黒碁石である。165～168は頁岩。169は緑色岩。形がやや不定形ではあるが、黒の碁石として使われたものであろう。170～179はSB1611のA9グリッドにある礎石の北側から出土している黒と白の玉石である。黒7点、白10点がまとまって出土しており内10点を掲載した。170～174は脈石英の白の玉石。175～179は頁岩の黒の玉石。180～194はD1層のSB1782第3室東壁際のE9グリッドからまとまって出土している。黒と白の玉石である。184、187、192は脈石英の白玉石。188は蛇紋岩。189はチャート。その他は頁岩で、黒の玉石。194は他の石に比べて特に大形であるが石質は他の黒石と同様である。195～201はSL1784の長屋の便槽から出土した碁石である。頁岩。径は2.2cmとほぼ均一。202～206はSF2281から出土している碁石状の黒石である。頁岩。形がやや不定形ではあるが、黒の碁石として使われたものであろう。長径は約2.2cm。黒碁石の出土した遺構からは碁石状土製品は出土していない。碁石状土製品は出土している全体数もわずかであるが、18世紀以降の遺構から出土しており、碁石の廉価版として考案されたものかもしれない。

石臼（IV-573～578 図207～214）

207は茶臼の下臼である。C3層出土。閃緑岩。1分画の中に溝が12本まで確認でき、溝は臼の周縁にまでは達していない。面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。208は茶臼で上臼ある。C3層出土。はんれい岩。面径は約19cmである。上縁は欠損している。挽き目は八分画で1分画の中に溝が7本確認でき、臼の周縁にまでは達していない。面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。209は挽き臼の上臼である。C3層出土。多孔質安山岩。部分的に溝が無くなるほど使い込まれている。210は挽き臼の上臼である。C3層出土。砂岩。挽き手孔は方形で1箇所確認できた。全面溝が無くなるほど使い込まれている。211は挽き臼の上臼である。SD1103出土。砂岩。挽き目は六分画で1分画の中に溝が7本確認できる。212は茶臼の上臼である。SD1103出土。ドレライト。面径は約16cmである。挽き目は八分画で1分画の中に溝が10本と11本確認でき、溝は臼の周縁にまでは達していない。面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。挽き手孔の台座文様は菊文様で、対になる位置に2箇所穿たれている。台座文様の間には獣文が確認できた。213は茶臼の下臼である。SD1103出土。はんれい岩。挽き目は八分画で1分画の中に溝が11本から13本確認できる。周縁は欠損している。面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。214は茶臼の上臼である。SD1出土。

はんれい岩。面径は約 22cm である。挽き目は八分画で 1 分画の中に溝が 12 本と 13 本確認でき、溝は臼の周縁にまでは達していない。面にはほとんどふくみが見られず、扁平である。挽き手孔は方形で 1 箇所確認できた。材質から茶臼は関東以外から持ち込まれた可能性が高く、挽き臼は在地のものが使われている可能性が高い。

#### その他 (IV-578 ~ 580 図 215 ~ 226)

屋外で使用されていたと考えられるものや性格不明な石製品である。**215** は C3 層出土。多孔質輝石安山岩。箱形。石をくり抜いて箱状にしている。口縁部や外側はかなりきれいに成形している。水などを張ったものか。**216** は D2 層出土。多孔質安山岩。箱形石製品。石をくり抜いて箱状にしている。口縁部や外側はかなりきれいに成形している。水などを張ったものか。**217** は SK2358 出土。溶結凝灰岩。箱形。石をくり抜いて箱状にしている。材質のためか表面にでこぼこが残る。水などを張ったものか。**218** は SU631 出土。軽石 (Px) コウガ石?。口縁部が内湾している大形の鉢。石をくり抜いており、内外面ともきれいに成形している。底部などの器壁の厚いところでは 6cm ほどある。外面は赤褐色に塗られている。**219** は SB2457 出土。安山岩。墓標で竿石の上部は欠損している。前面に「位」の文字と花卉が彫られている。裏面、側面の文字は確認できなかった。**220** は D2 層出土。緑色変岩。中世の武蔵型板碑。二条線があり下に天蓋の右部分が残る。石材として再利用したものと思われる。背面には工具痕が残る。**221** は SK2 出土。火山礫凝灰岩 (グリーンタフ)。性格不明。**222** は SU327 出土。軽石質凝灰岩 (グリーンタフ)。底面には工具痕が残るが、底面以外は表面がきれいに成形されている。**223** は SX557 出土。砂岩。元々の製品の性格は不明であるが、砥石に転用されたものであろう。6 面使用。**224** は SX1747 出土。頁岩。碁石の中央部に穴を開けて転用している。性格不明。**225** は SD1608 出土。風化粘板岩。砥石?からの転用品。石を切った跡が成形されずに残る。中央に穴を開けている。性格不明。**226** は SD1103 出土。軽石質凝灰岩 (グリーンタフ)。中央の穴はきれいに開けられている。線香などを立てるのに使用したのかもしれない。



## 第11節 ガラス製品 (IV-581 図)

1は緑色透明の扁平な玉である。包含層 D2 層出土。径 1.5cm。中心部に棒を抜いた径 4mmの穴があいている。穴の周縁部には使用痕が残る。袋・巾着・印籠・煙草入れなどの緒を通して口を束ねて締める緒締めであろうか。珊瑚・瑪瑙・木・象牙・金属・陶磁器などで作られたものがあり、多くは球形であるが、意匠を凝らしたものも多い。2、3は断面四角で筭と思われる。黄色味がかった無色透明。2はSU446出土。表面が銀化している。3はSK593出土。4は口唇部が外側に外反している碗。SK1114出土。無色透明。表面は銀化している。5は鉢。SK1160出土。口縁部が内湾している。器壁が厚く 0.7cm。無色透明。表面は銀化している。2～5はいずれも A 面の遺構から出土している。

## 第12節 動物製品 (IV-582 図)

1は簪である。SU446出土。先端部欠損。頭部に江戸耳の耳搔きが付いている。大形家畜四肢骨骨幹。2～4は筭である。2はSU446出土。頭部欠損。鹿角。断面四角。3はSU446出土。先端部欠損。大形家畜四肢骨。断面円。4はSK1160出土。先端部欠損。大形家畜四肢骨。断面四角。5は性格不明。SU1192出土。鹿角。薄く花の透かし模様が入っている。6は碁石の白である。SK1091出土。径2.2cm。二枚貝の貝殻を丸くくり抜いて角をおとし整形している。厚みのある一定の産地の貝殻しか使用できず、また、一枚の貝殻から1個しかとれない高級品である。黒石は出土量が多いが、那智黒石のような高級品は少ない。貝製の白石も出土量は少ないが、これは那智黒石に対応しているのかもしれない。7は歯ブラシの柄。SD1出土。頭部欠損。大形家畜四肢骨。「EXTRA PARIS」。8～11は貝柄杓である。イタヤガイの右殻。8はSU446出土。最大長は8.1cm。9はSU446出土。最大長は8.3cm。10はSU593出土。最大長は9.4cm。11はSU593出土。2層の自然遺物が多く含まれる層から出土している。最大長は6.5cm。12は貝パレット。包含層D1層出土。アカガイの左殻。内面に漆が付着している。13は貝パレット。SK1409出土。最大長は7.7cm。ウバガイの左殻。内面に漆が付着している。12以外はいずれもA面の遺構から出土している。

## 第13節 鹿角未製品 (Ⅳ-583、584 図)

本地点からは、人為的な加工を有する鹿角が22点出土している。これらは、鹿角製品を製作した際の廃材やその途中のもの(未製品)であると推測される。その内、20点が遺構内より出土しており、その内訳はSD1103が19点、SK3が1点である。その他の2点は遺構外(攪乱部分)から出土している。なお、これらの切断面を加工痕の持つウシとウマの骨と同様に久保(1999)で分類すると、角坐骨から第1分岐を残す資料である8のみが、第1枝側、主幹側の切断面共に複数方向から切り込みを入れる「切断A種」であったほかは、すべて一方向からのみ切り込みを入れる「切断B種」であった。切断に用いた道具は鋸で、切痕からアサリ幅1mm以上2mm未満のものが用いられたことが推測される。

報告をおこなうに際して、資料を、角坐を有するものと有さないものに大きく分類した。以下、それぞれに個々の資料について記載をおこなう。

## 角坐を有さない資料

角坐を有さない資料は10点である。その内、1点が遺構外(攪乱部分)出土であるほかは、すべてSD1103より出土している。これらは残存箇所が大きく、先端部分、主幹部分、分岐部分の3つに分けられる。

**先端部分(2、3)：**先端部分は2点出土している。その内、3の資料に関しては、切断面の観察が可能である。

**主幹部分(4)：**主幹部分は2点出土している。本分類資料は両端に切断面を有しており、材料として切り出されたものと考えられる。その内、図示した4の資料の両端の切断面は、その切断方向が一致しない。

**分岐部分(1、13)：**分岐部分のみが残存する資料が4点出土している。その内、1点は遺構外(攪乱部分)から出土したものである(本資料については詳細な記載はおこなわない)。まず、1のものは、第2もしくは3分岐とその付近のみが残存する資料である。分岐より43mm程近位(下)にのみ切断面を有する。次に、13のものは、遠位主幹部分と近位(角坐方向)に切断面を有する。なお、枝部分は縦に割れて欠損しており、加工痕の有無は不明である。さらに、どの分岐部分のものかも不明である。また、図示はしていないが、SD1103出土のもので同様の形態のものがもう1点出土している。しかし、全体的に劣化が激しく詳細は不明である。なお、近位にのみ切断面が残っており、その加工の分類は「切断B種」である。

**主幹+分岐部分(5)：**主幹と分岐が残存するものが1点出土している。角坐方向(近位)、枝方向、主幹遠位すべてに鋸による切断が認められる。本資料は、分岐部分(例：13)から主幹部分(例：4)を切断する前の状態のものと推定される。

**部位不明(15)：**主幹もしくは枝部分の切片が1点出土している。切断面は、角の長軸に対して横位(近位)のものが1箇所(d)と縦位(遠位)のものが2箇所(b・c)ある。dとbの面の切断は鋸によるものと推定されるのに対して、cの面は自然に割れたように粗い。cの面を加工(もしくは廃棄)後に自然に割れた面であると想定した場合、4の資料のように円筒型に加工されたものを、縦に2分割したものと想定される。



## 角坐を有する資料

角坐部分を有するものが12点出土している。その内、10点がSD1103から出土している。その他にSK3と遺構外（攪乱部分）からそれぞれ1点出土している。さて、角坐部分を伴うものの内、3点を除いてすべて角坐骨部分はなく、角坐底面に切断痕などの加工痕は見られない。つまり、その9点は頭蓋骨から切り取った角ではなく、春に自然に落角したものを用いている。これらは、角の根元部分である角坐もしくは角坐骨と角坐から最も近位になる第1分岐部分までを有しているもの（第1枝と主幹部分が切断されているもの）、角坐のみを残して切断されているもの、さらに側面を切断されたものの3種類が出土している。なお、第1分岐までを有する資料の内2点において、角坐から2～3cm程上（遠位）で切断を試みた痕が見られる（6、7）ことから、加工に際して、可能な限り角坐部分のみを切除しようとしていたことが推測される。

**角坐骨（角坐）～第1分岐（6～10、12）：**角の根元部分である角坐もしくは角坐骨から第1分岐部分を有する資料は8点出土している。すべて、第1枝と主幹が切断されている。なお、7と8のものは、角坐骨が有しており、その部分に鈍のような刃物を打ち込んで切れ目を入れて、へし折った痕跡が見られる。まず、6のものは、角坐から23mmほど遠位（上）に2つの方向から切断を試みた切込みがある。7のものは、角坐から18mmほど遠位（上）に1箇所、主幹側に切断を試みた切込みがある。8は、第1枝と主幹がそれぞれ分岐部分より少し遠位（上）で切断されている。また、第1枝側には、切断面の3cm程下（角坐より3cm程上）に2箇所の切断を試みたものと思われる切込みがある。9は、主幹側、第1枝側共に分岐部分よりやや近位（下）で切断されており、2つの切断面が重なっている。切断面の切り合いの関係から、主幹、第1枝の順に切断されている。10は、主幹側に切り込みが切断面より17mm下（角坐から25mm上）にある。12は残存状況が悪く、加工痕は主幹側遠位のみで確認できる。図示はしていないが、以上と同様の状態の鹿角は他に2点出土している。残存状態は共に悪い。

**角坐（11）：**角坐のみを残す資料が2点出土している（1点のみ図示）。具体的には、共に角坐底面から20mm程遠位（上）のところで切断されている。

**側面の破片（14）：**SK3から1点出土している。部位は角坐骨から第1分岐の一部であり、その側面を縦に薄く切断した資料である。また、側面を切断した際の痕跡（c）のほかに、角を縦に半分切断した痕跡が観察される（b）。以上から、角を縦に半分切断し、さらにその側面を加工する一連の工程が想定され、本資料はその際の廃材と考えられる。用いられた道具は切断面の観察から、共に鋸と想定される。なお、角坐骨部分に対して横位の切込みが複数みられる（a）。切り込みは斜め上から刃物を打ち込んであり、角坐骨が深く削られている。8と同様に頭蓋骨から角を切り落すことを目的に、鈍のような刃物を打ち込んだ際につけられたものと想定される。

第IV章 江戸時代以降の遺物

図版番号	遺構	位置	残存高	角坐底面からの角の残存高	角坐直径(左-右間)	角坐最大径	第1分岐高
14	SK3	角坐	74.0	32.8			
8	SD1103	角坐骨～第1分岐	116.6	68.9	—	53.8	61.3
9	SD1103	角坐～第1分岐	50.7	50.7	47.6	50.3	—
10	SD1103	角坐～第1分岐	62.2	62.2	45.9	50.9	—
12	SD1103	角坐～第1分岐	64.6	64.6	—	—	—
未掲載資料	SD1103	角坐～第1分岐	50.3	50.3	—	—	—
未掲載資料	SD1103	角坐～第1分岐	46.6	46.6	—	—	—
6	SD1103	角坐～第1分岐	67.9	67.9	50±	56.2	63.4
7	SD1103	角坐～第1分岐	88.9	67.1	50.9	55.1	67.1
未掲載資料	SD1103	角坐	27.7	27.7	43.5	45±	
11	SD1103	角坐	23.5	23.5	—	46±	
4	SD1103	主幹	89.4				
未掲載資料	SD1103	主幹	53.4				
13	SD1103	分岐部分	42.5				
未掲載資料	SD1103	分岐部分	60.2				
2	SD1103	枝・先端部分	55.3				
3	SD1103	枝・先端部分	46.7				
5	SD1103	分岐+主幹	153.1				
1	SD1103	第2もしくは3分岐付近主幹～	66.1				
15	SD1103	部位不明	35.9				
未掲載資料	攪乱	角坐～第1分岐	55.0	55.0	—	50±	52.7
未掲載資料	攪乱	主幹～分岐～枝	118.42				

鹿角未製品 (IV-583・584図) サイズ計測表 (単位: mm)

残存長: 鹿角の長軸方向における最大長

## 第14節 近代層出土遺物 (IV-585～595 図1～187)

本遺物群は、表土掘削中にD～F16グリッドに集中して発見されたため採取した一群である。磁器を観察すると、その大半が人工呉須で染付され、型紙摺りによる印判手と手描きにより絵付けされたものが中心で、わずかにクロム青磁なども含む。なお印判手の中には、いわゆる銅版転写の手法はごくわずかに含まれる程度である。これまでの研究成果などから銅版転写のものは明治30年代頃から始まることが明らかとなっており、本遺物群も幕末から明治30年頃までの遺物と考えられる。前述したグリッド付近は東大構内の配置図で調べると、明治13～26年頃まではいわゆる「お雇い外国人」が居住していた「教師館」と描かれた建物が南北に3棟並んで建っていた場所の東側付近であり、明治26～27年にはその場所が病院の皮膚科や眼科の病室へと代わった事が確認できる。本遺物群はその年代観から、「教師館」から皮膚科や眼科の病室として利用されるようになった際、それまで「教師館」で利用されていた生活道具がまとめて廃棄されたものである可能性もある。

### 磁器 (1～108)

1～20、50、52、73、74は碗とそれに伴う蓋である。1、50、73は肥前系(JB)、2、10、12～20、74は瀬戸・美濃系(JC)、3～9、11、52は産地不明(JZ)である。2が赤絵、10が青磁染付、それ以外はすべて染付が施される。なお染付の呉須は1、50が地呉須、他はすべて人工呉須が使用されている。文様は1、2、10、15、16、18、50、73、74は手描き、3～9、11～13、20、52は型紙摺り、14、17、19が銅板転写で施文されている。1は丸碗。細かな丁寧な絵付けが施される。2～8、10～15、17～19は体部が直線的に開く碗で、いわゆる飯碗に近い。9は8の蓋である。11は見込み以外、内面全体に染付が施される。14の高台内には「鐘美軒製」銘がある。15の蓋が16である。15の高台内と16の摘み内に角枠銘があるが、判読できない。なお近世のいわゆる飯碗に伴う蓋は碗と同じく体部が比較的直線的に開くものであるが、16の体部は強く湾曲している。15と同径であり、同一意匠であることから16をその蓋と考えたが、別製品の蓋の可能性もある。17～19は高台内に銘があり、17は「千〇園製」、18は「〇〇園製」、19は「清陶園製」と読める。20は器高がやや低い丸碗である。50、52は端反形碗である。50の文様は毛彫りされた上にダミが施されている。52には口鏽が施される。73、74はいわゆる湯呑碗である。74は畳付両側が小さく削られ、断面形が凸形を呈す。高台内には「大明成化年製」銘がある。

21～35、38は皿・平鉢である。21～23、25～32、34、35は瀬戸・美濃系、24は肥前系、33、38は産地不明である。21～27、34、は染付、28～30はいわゆるクロム青磁、31、33は色絵、32は白磁、35は染付に鉄釉が掛分られている。なお染付の呉須は23、25が地呉須、他はすべて人工呉須が使用されている。21、30は蛇ノ目凹形高台を有すものである。21の染付は裏表ともに型紙摺りによるものであるが、高台付近の圏線は手描きによるものである。22の染付は銅板転写によるものであるが、高台脇の圏線は手描きである。25の花文様は丁寧な線描きによるもので、高台内には二重角枠銘が認められる。26の染付文様は内面は型紙摺り、裏文様は手描きによるものである。見込みの文様は環状松竹梅文である。27は仙芝祝寿文風の染付が施され、高台内には角枠銘がある。29はいわゆるクロム青磁で、高台内には染付で「宝花園製」銘がある。23、28は蛇ノ目高台を有すものである。23の高台内には二重角枠銘がある。28の高台内には染付で「三宝亭製」銘がある。24は口縁部が輪花にされた皿である。白化粧された後、染付されている。31～34は型作りものである。31はいわゆる寿文皿である。胎土は灰色味を帯び、器面には大きな貫入がみられる。



内面には上絵付が施される。32は内面に陰刻がある。33は高台脇に沈線を有す。絵付は銅板転写によるものである。34の内面には陰刻、その上にダミが施される。35の見込みの鳥は陰刻され、ダミが施されたものである。38は産地不明の丸皿である。胎土は黄色味を帯びた白色を呈し、緻密である。裏表ともに型紙摺りによる仙芝祝寿文風の染付が施されるが、花の間の間仕切り線は手描きされたものである。

36、37、39、40は鉢である。36、39は瀬戸・美濃系の鉢で、いわゆるクロム青磁である。36は型作りで、底部は円形、口縁部は変形隅丸方形を呈す。底部は無釉で、沈線状の圏線と小判形の刻印が認められる。39は口縁部5箇所が小さく押さえられ、緩やかな輪花状にされる。内面には緑色で葉脈状のものが描かれることから蓮の葉を模した鉢か。高台内は無釉で、その中央は浅い小さな円形に削り込まれている。37は肥前系の染付鉢である。染付の呉須は地呉須である。井のような器形で、口縁部は肥厚し、縁帯状を呈す。高台脇には「久上」と判読される点刻の釘書きが確認される。40は産地不明の色絵鉢である。胎土は白色を呈し、器面にはやや粗い貫入が多くみられる。口縁部は外反し、輪花状を呈す。

41～49、51、53～72、75～81は坏である。41、44～46、50～60、62～64、66、72、75、76は染付、42、47は色絵、43、81は白磁、49、78はクロム青磁、77は瑠璃釉と染付、48、65～71は色絵と染付を組み合わせで施文されている。なお染付は、41、50が地呉須で、他は人工呉須によるものである。41は景德鎮窯系（JA1）。削り出し高台で、高台無釉である。42は九谷系（JN）。再興九谷の赤絵丸形坏である。赤絵は全面に施されるが、局所的に金彩も施される。高台内にも赤で小判形に「九谷」の銘が確認される。43、62は肥前系。43はやや腰が張る丸形坏で、高台がハの字状に開き、高台高が高い。62は端反形坏で、高台内には角椀銘が認められる。44～46、48、49、53、56～58、60、61、63、66～71、75～79、81は瀬戸・美濃系。44～46は丸形坏である。絵付はいずれも手描きによるものである。44は蛇ノ目高台を有し、高台内無釉である。45は高台内中央が逆「の」の字状に削り込まれ、畳付から高台内は無釉である。見込みには二重圏線に「富貴長春」銘がある。46も45と同じく高台内中央が逆「の」の字状に削り込まれ、畳付から高台内は無釉である。48、66～71は器厚がごく薄い坏である。48、69～71は畳付内側が小さく削り込まれ階段状を呈す。いずれも内面に上絵付、外面には高台脇に櫛歯文、高台内には銘が認められる。48、68、71はいわゆる江戸絵付が内面に施される。66は口縁部が小さく外反し、内面には手描きにより染付が施される。67、69、70は内面に上絵付が施されるもので、67は金、69は赤の上絵付が確認されるが、70は剥落している。なお69は高台内の銘の部分が削り落とされたように見える。49、53、56～58、61～63は端反形坏である。49は高台内中央が逆「の」の字状に削り込まれ、畳付から高台内は無釉である。53は蛇ノ目高台を有し、畳付から高台内は無釉である。58は口縁部数箇所が小さく削り込まれ、大きな輪花状を呈す。体部外面はへら状のもので陰刻が施され、高台内には染付で「陶玉園五助製」銘が認められる。瀬戸南新谷の窯屋の製品か。61は外面に金、赤、黒で上絵付が施される。口縁部外面の金彩文字は「暑気来□」か。60は体部が直線的に開く坏である。体部下半が7箇所面取りされ、高台内には銘が施される。75～78は筒形坏である。75は高台内に銘があるが、欠損のため判読できるのは「年」の字のみである。76は型紙摺りで施文される。77の高台内には、染付で圏線と角椀銘がある。78は外面はクロム青磁釉、内面は透明釉が施釉され、高台内には緑色の角椀銘が認められる。79は器高が非常に低い丸形坏である。81はいわゆる紅皿である。型作りで外面には陽刻の蛸唐草文がある。47、51、54、55、59、64、65、72、80は産地不明（JZ）である。47は腰が張った丸形坏である。内面にはいわゆる江戸絵付

が施される。51、54、55、64は端反形坏である。51は口銹が施され、外面には型紙摺りでいわゆる染色体文が染付される。54、55は銅板転写で染付が施される。54は高台内中央が逆「の」の字状に削り込まれ、畳付から高台内は無釉である。55は高台内まで施釉され、手描きで染付圏線が施される。64の高台内には緑色で角枳銘が認められる。59は型打成形された坏で、高台は粗くケズリ調整され、無釉である。65、72は器厚がごく薄い坏である。65の内面には金、赤、黒の上絵付が施される。72は口縁が内側に小さく押され、輪花状を呈す。高台内には角枳銘が認められる。80は器高が非常に低い丸形坏である。胎土は緻密で、淡灰色を呈す。

82は肥前系の染付仏飯器である。脚部のえぐりが浅く、畳付外周が面取りされたものである。文様は地呉須で手描きされる。

83は瀬戸・美濃系の染付筒形合子である。文様は人工呉須で、型紙摺りで施文される。

84は瀬戸・美濃系染付爛徳利である。畳付外周が雑に削られている。文様は人工呉須で手描きされる。

85は瀬戸・美濃系染付香炉・火入れである。文様は人工呉須で手描きされる。高台内には「明治年製」銘がある。

86は瀬戸・美濃系染付壺である。型作りで、胴部下半と肩部から口縁部の2つの部分を胴部中程で帯状の胎土で貼り合わせて成形されたものである。

87、88は瀬戸・美濃系染付水注である。87は型作りで、胴部は南瓜形を呈す。注口部、把手、胴部上半、下半の4つの部分を貼り合わせている。文様は地呉須で、手描きされたものである。内面は無釉。88は胴部と頸部はロクロ成形され、注口部は板状の粘土を筒状に丸めたものが貼付られる。高台は碁笥底状を呈し、無釉である。文様は人工呉須で手描きされるが、胴部中程には赤で角枳の銘款の手描きされる。

89は瀬戸・美濃系染付花生。文様は人工呉須で手描きされる。

90は瀬戸・美濃系の器種不明の白磁である。ロクロ成形である。

91～94は染付急須とその蓋で、91、92は瀬戸・美濃系、93、94は産地不明である。いずれも染付は人工呉須によるものであるが、絵付は91、92は手描き、93、94は銅板転写によるものである。91の底部は無釉で、渦状の浅いケズリ込みがある。濃し孔は7個。92は空気孔が1箇所あり、器面には焼継痕が認められる。93の底部は碁笥底状を呈し、無釉である。濃し孔は9個。94の空気孔は1箇所。

95～108は蓋である。95、97、99、100、105、107は瀬戸・美濃系、98、104、106は肥前系、96、101～103、108は産地不明である。95～98、101～103、105～108は染付、99、100は色絵、104は白磁である。染付は98、102、103、106、107は地呉須、95～97、101、105、108は人工呉須である。95～100は碗蓋である。95の絵付は型紙摺りによるもので、摘み内には角枳銘がある。96は95と同じく絵付は型紙摺りによるもので、摘み内には銘がある。97、99、100は丸碗蓋である。99の色絵には金、赤、青、100には金、赤、黒で上絵付が施される。98は端反形碗の蓋である。絵付は手描きで丁寧に描かれる。101、103、104は急須の蓋である。102、105、107、108は蓋物の蓋である。106は筒形合子蓋である。

陶器 (109～147)

109、111は碗で、109は瀬戸・美濃系灰釉陶器碗、111は産地不明の筒形湯呑碗である。109の高台内には「御用」の墨書がある。111の胎土は白色を呈し、やや粗い。高台は削り出し高台で、畳付脇は面取りされる。高台内には五角形の刻印がみられる。110は大堀・相馬系の灰釉坏である。

外面には鉄で馬の絵が描かれる。

112～116は皿・平鉢である。114は瀬戸・美濃系灰釉平鉢、他は産地不明の皿・平鉢である。112は六角形の形皿である。輪高台を有し、暈付には細かいロクロ目状のものが認められる。胎土は灰白色を呈し緻密で、内面から側面にかけては白濁した釉、底部には灰釉が掛け分けられる。113は3足を有す。ロクロ成形で、体部数箇所が窪ませられている。底部を除く外面には藁灰釉、内面は灰釉が掛け分けられる。なお見込み中央部分は釉が拭き取られ、粗い砂が付着し、底部中央付近には輪トチを使用したような痕跡が認められる。114はいわゆる石皿で、見込みにはトチ痕が7箇所認められる。無釉の底部には墨書が認められるが、判読できない。なお底部中央に二次的な穿孔があり、さらに暈付も幅3cmほどのアーチ状に削り込まれている部分がある。器の底部から液体が外へ流れやすくするための工夫か。115は白色の非常に緻密な胎土を呈す。全面施釉され、口縁部1箇所と見込みの1箇所に長さ5mmほどの小さな熔着痕が認められる。なお本製品は口径や胎土などが120の鉢と近似することから、120の蓋である可能性もある。116の裏側は無釉で、口縁部付近には灯心痕が数箇所看取される。油皿として使用されたものか。

117～120は鉢である。117、120は産地不明、118、119は京都・信楽系のものである。117は内外面に鉄と人工具須で絵付が施される。底部は碁笥底状に削り込まれているが、中央に逆「の」の字状の削り込みがみられる。118は内面のみを上絵付が施されるが、赤色の文様がわずかに残る程度である。119は底部以外白化粧され、茶、緑、黒色で松と鶴が描かれている。120の胎土は白色で非常に緻密である。底部は透明釉、体部内外面は黄釉で施釉される。蓋物の可能性もある。淡路系(JP)か。

121は京都・信楽系蓋物である。体部には銹絵染付が施され、暈付脇は面取りされる。

122～125は瓶である。122～124は瀬戸・美濃系灰釉徳利で、122は容量が二合半のもの、123は五合、124は一升のものである。122の胴部には点刻の釘書きで、123、124には鉄で文字が記されている。125は備前系伊部手のぺこかん徳利である。残存する胴部には2箇所のくぼみと布袋が看取される。

126、127は産地不明の急須である。126は胎土が練り込みのものである。ロクロ成形で、胴部、把手は全体に縦しのぎが施される。濃し孔を6個有す。144は本製品の蓋である。127の胎土は暗茶褐色を呈し、非常に緻密である。型作りで、底部には細かい布目が残る。器面には白、黄、緑で菊の盛絵が施される。把手の付け根には「温故」の刻印が認められる。温故焼か。

128～130は産地不明の植木鉢である。128の胎土は灰白色を呈し、非常に緻密である。ロクロ成形後、口縁部のみ方形にされる。高台は割高台にされる。129の胎土は淡灰色を呈し、ガラス質である。足も含めて型作りで、方形を呈す。底部の方形の足は四隅に1つずつ計4箇所ある。130の体部には外から内側へ押し窪められたような痕が数箇所あり、底部には足が2個残存するが、足の側面には斜め方向の切り込みが螺旋状に施される。

131、132は花生で、131は宜興窯系(TA5)、132は瀬戸・美濃系である。131は口縁部、胴部、脚部の3つのパーツからなる。高台内側は方形に削り込まれ、「葛明祥製」の刻印が施される。132は掛け花生で、口縁部よりやや下に1箇所穿孔がある。非常に厚く施釉され、粗い貫入がみられる。底部には右回転糸切り痕と、切り離された際の粘土塊が残る。

133は京都・信楽系灰釉筒形水注である。暈付、口唇部以外は施釉され、底部内面には砂目状のものが3箇所認められる。147は本製品の蓋である。

134は瀬戸・美濃系柿釉瘦瓶である。欠損しているが紐状把手が付くようである。



135～139は産地不明の土瓶である。135は白化粧され、鉄と緑で絵付が施される。濃し孔を5個有す。136は白土染付が施されたものである。染付は人工呉須によるものである。濃し孔を3個有す。137の染付は人工呉須によるものである。濃し孔を3個有す。138は鉄絵が描かれたものである。濃し孔を3個有す。139は青土瓶である。壘付脇に直径7mmほどの丸い粘土が3箇所貼付られるが、底面からは浮いており、足としての機能は果たしていない。濃し孔を4個有す。なお一方の耳に針金状のものが括り付けられている。つるべに伴うものか。

140、141は産地不明の鍋である。ともに壘付脇が一段削り込まれ、高台状を呈し、底部周囲にはススが付着する。140は白土染付されたものであるが、体部器面には「道八」と書かれている。141は口縁部の一箇所が注口状に外側に広げられ、底部内面には目跡が3箇所認められる。

142は京都・信楽系灰釉無脚の油受け皿である。受け部にはU字状の切り込みがあるが、非常に雑である。

143～147は蓋である。143、144は産地不明の急須の蓋である。ともに空気孔が1箇所穿たれている。144は126の蓋であり、126と同様、表側には放射状に縦しのぎが入れられている。145、146は産地不明の土瓶の蓋である。145は鉄釉、146は藁釉が施釉された蓋である。147は京都・信楽系灰釉筒形水差の蓋である。133の蓋である。

#### 土器（148～166）

148～153はかわらけで、148は見込みに「寿」字の浮文のあるものである。149、150は底部に左回転糸切り痕跡がある。148～150の3皿ともほぼ同サイズであり、器形的特徴も共通点が多い。すなわち体部は外側に開き気味に立ち上がり、口縁部はやや内湾し、体部との境に丸味を帯びた稜を有す。また内面の底部と体部の境には明瞭な段差がみられるが、見込み付近は全体的に窪んでいる。いずれも底部の糸切り痕は粗く撫で消されているが、148の底部中央には横方向の繊維状のものが看取される。151～153は内外面に透明釉が施釉されたものである。151と153には口縁部に灯心痕がみられる。

154、155はミニチュアの釜形・茶釜形製品でDQ\_2011\_Wに分類される。154は外面罇上は黒褐色、罇下は銀色に彩色し内外面施釉している。

156、157は瓦質の植木鉢である。ともに底部には穿孔が1箇所穿たれ、左回転糸切り痕が残る。

158は透明釉が施釉された鍋である。紐状の粘土を口縁部外側2箇所に貼り付けたものである。胴部上半にはトビガンナが施され、総釉掛けされる。

159は透明釉が施釉された無脚のひょうそくである。口唇部に灯心痕がみられるが、さらに内側面や灯心部内側にタール状の付着物がより顕著に認められる箇所がある。

160は瓦質のさなである。口唇部に瓢箪形に「太平造」の刻印がある。この刻印は、明治23年頃東京で作られた無釉の火鉢類にみられた銘であるとの記載が『日本古陶銘款集』にある。

161は土師質のほうろくである。かなり立ち上がりは小さく、器高も低いものとなっている。底部と体部の境は面取りされる。底部外面には砂粒が多く付着し、底部内目にはススが付着する。

162は五徳。胎土は白色のやや粗いものである。壘付脇に刻印が2箇所あり、一方は小判形に「松□」、一方は判読できない。

163はロクロ成形無印の塩壺である。口唇部はほぼ平らになり、受け部は認められない。底部には左回転糸切り痕がある。

164～166は塩壺蓋で164が断面形が凹形を呈すもの、165、166は断面形が逆台形を呈すものである。164の裏側にはやや粗い布目が認められる。165の裏側には非常に細かい布目が、また表

側には手のひらを押し当てた痕跡がある。

人形・玩具 (167～181)

167は人物像で、DD\_1100\_Hoに分類される。成形法はSK557出土の坊主人形と似ているが、胎土の精製度は低く、胴が長く衣裳も異なる。168～175はミニチュアの器物である。168は碗で、JB\_2001\_Wに分類される。見込み、高台径が広く、畳付は無釉である。169は皿で、DQ\_2002\_Mに分類される。型打ち成形で花卉形で、鮮やかな黄色と緑色で塗彩し施釉している。裏面は無彩で底部には板目が観察される。170は鉢で、JC\_2003\_Mに分類される。底部は猪目形を呈し無釉である。胴部中央に穿孔があり、内面の底部脇に孔を穿った突起を有する。171は鉢で、TZ\_2003\_Mに分類される。貫入が顕著で、見込みと外面に藍色で蟹文様をえがいている。畳付は釉剥ぎをしている。172は七輪で、DZ\_2014\_Bに分類される。上面と吹口は別作りで貼付し、角は面取りし、脚は工具で作り出している。白色に彩色し施釉している。173は土鍋で、DQ\_2013\_Wに分類される。口縁部から胴部中央にかけ施釉している。把手は手捻りで貼付けている。174は鉢で、DQ\_2003\_Wに分類される。内外面彩色痕が観察される。175は碗で、DZ\_2001\_Mに分類される。外面を白色に塗彩し青色で文様を描いている。176～178は泥面子で、DQ\_4006\_Mに分類される。176は「菊水」、177は「巴」、178は「に」をモチーフとしている。179、180は碁石状製品で、DQ\_4004\_Hに分類される。掌握痕が観察される。181は土玉で、DQ\_4007\_Hに分類される。無数に篋で突いた痕跡が観察される。

金属製品 (182～187)

182は真鍮製の迷子札である。竹と虎が彫り込まれた、寅年の生まれの子の迷子札である。裏面には迷子札の持ち主の名と、親の名前、住所が彫り込まれているのが通常であるが、出土したものは腐食して文字の判読は出来なかった。他の遺跡で出土した迷子札を見てもは皆、十二支が彫られている。183は鉛面子である。モチーフは金太郎である。赤色の彩色痕が観察される。184はホーロー容器。C-16グリッド出土。内面の表面の白色のガラス質が残っている。鍍金を除去した地金の色調は黒鉄色。185は皿状の製品。F-16グリッド出土。内面に円形の沈線がある。やわらかい金属で、白色と灰色の鍍金を除去した地金の色調は銀色。186は飾り金具か。D-16グリッド出土。硬質の金属で、白色と灰色の鍍金を除去した地金の色調は銀色。187は飾り金具か。F-16グリッド出土。金属線を通したバネを金属パイプに通し、飾り金具を接続している。バネは使用時の柔軟さを残している。飾り金具の白色と灰色の鍍金を除去した地金の色調は銀色。

## 東京大学構内の遺跡出土陶磁器・土器分類見直しの経緯

医学部附属病院入院棟 A 地点では東京大学本郷構内遺跡で調査事例の少なかった 17 世紀代の遺構が多数検出され、当代の陶磁器・土器類の様相が明らかとなり、これまで資料数の少なさから分類項目として抽出することが困難であった 17 世紀代の陶磁器・土器類を中心とした分類項目の再検討が必要となった。

本分類は 1990 年に医学部附属病院地点の報告書において提示され（成瀬・堀内 1990）、以降埋蔵文化財調査室では出土資料の増加や研究の進捗状況に伴って大きな改訂を 2 回行い、東京大学構内遺跡調査研究年報などで提示してきた（埋蔵文化財調査室 1997、1999）。しかし最後の改訂からすでに 10 年以上経過する中、1999 年に提示した分類（1）にもとづいて数十調査地点の出土陶磁器・土器の分類整理がなされているが、その過程で東大分類の柱としている胎質、産地、器種の各分類に、様々な問題が包括されている状況が明らかとなってきた。また同時にさらなる出土資料の増加、陶磁器・土器研究の進展などを受け、東大分類全体の精査、再考が必要となり本分類の見直しを行った。

以上のような分類見直しの経緯を含め、個々の分類項目の説明は今後刊行予定の年報などで改めて行う予定ではあるが、本報告書中に使用している分類表記は上記のような経緯からすでに再考後の新分類（以下、分類 Ver.4）を使用したものとなっている。そこで以下では一覧という形で分類 Ver.4 を提示し、分類項目の冒頭に分類（1）の項目から新規に追加したものには■を、何らかの修正、変更を行った項目には▲を付けて明示した。なお一覧の前に、過去に提示している陶磁器・土器分類や組成表データとの対照が可能となるように対応表も提示した。対応表「旧」の項目が分類（1）で提示した分類項目、「新」の項目が本報告から再考、提示した分類 Ver.4 の分類項目である。樹形図のように提示しているが、これは分類（1）で提示した項目が分化、あるいは統括された事を示す。また 1 対 1 で提示したものは、その項目が削除あるいは分類変更を行った事を示している。これまでの分類と対照する際の参考として頂きたい。



○胎質

J (磁器)      T (陶器)      D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ
- A9 福建・広東系
- A10 西アジア

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 万古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Q - 薩摩系

R - 三田系

S - 飯能系

Z - 不明

○器種

- |           |          |           |           |          |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 碗      | 2. 皿・平鉢  | 3. 大皿・大皿鉢 | 4. 爛徳利    | 5. 鉢     |
| 6. 坏      | 7. 猪口    | 8. 仏飯器    | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶    |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺   | 13. 蓋物    | 14. 筆立て   | 15. 壺・甕  |
| 16. 急須    | 17. 爛鍋   | 18. 合子    | 19. 水滴    | 20. 蓮華   |
| 21. 植木鉢   | 22. 花生   | 23. 片口鉢   | 24. 灰落し   | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ   | 27. 水注   | 28. 漚瓶    | 29. 搦鉢    | 30. 餌入れ  |
| 31. 火鉢    | 32. 柄杓   | 33. 鍋     | 34. 土瓶    | 35. 戸車   |
| 36. ちろり   | 37. 薬研   | 38. 手焙り   | 39. おろし皿  | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利   | 42. 行平鍋  | 43. 十能    | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈   |
| 46. カンテラ  | 47. ほうろく | 48. 七輪    | 49. 涼炉    | 50. 五徳   |
| 51. 塩壺    | 52. 燭台   | 53. 蒸し器   | 54. 懐炉    |          |
| 63. あんか   | 64. 煙硝搦鉢 | 65. 乳棒    | 66. 硯屏    | 67. 釜    |

旧		新
<器種>		
○2-- 皿	—————	○2-- 皿・平鉢
○3-- 大皿	—————	○3-- 大皿・大平鉢
○5-- 鉢	—————	○2-- 皿・平鉢
	—————	○3-- 大皿・大平鉢
	—————	○5-- 平鉢、大平鉢以外の鉢
○55-- 泥面子	—————	人形・玩具
○56-- 碁石形土製品	—————	人形・玩具
○57-- 玉	—————	人形・玩具
○58-- 鈴	—————	人形・玩具
○59-- 笛	—————	人形・玩具
○60-- 人形	—————	人形・玩具
○61-- ミニチュア	—————	人形・玩具
○62-- 面形	—————	人形・玩具
○00-- 蓋	—————	削除 (塩壺類を除く)

◎JB群 (肥前系磁器)		◎JB群 (肥前系磁器)
・JB-3-a (初期伊万里)	—————	・JB-2-a (初期伊万里)
	—————	・JB-3-a (初期伊万里)
・JB-3-b (高台▽、「U」字)	—————	(「U」字)
	—————	・JB-3-f (高台▽)
・JB-3-c (高台蛇ノ目剥)	—————	・JB-2-t (高台蛇ノ目剥)
	—————	・JB-3-c (高台蛇ノ目剥)
・JB-5-a (初期伊万里)	—————	・JB-2-a (初期伊万里)
	—————	・JB-3-a (初期伊万里)
	—————	・JB-5-a (初期伊万里)
・JB-5-b (シャープな「U」字)	—————	・JB-2-e (シャープな「U」字)
	—————	・JB-3-b (シャープな「U」字)
	—————	・JB-5-b (シャープな「U」字)
・JB-5-c (高台蛇ノ目剥)	—————	・JB-2-t (高台蛇ノ目剥)
	—————	・JB-3-c (高台蛇ノ目剥)
	—————	・JB-5-c (高台蛇ノ目剥)
・JB-5-d (蛇ノ目凹)	—————	・JB-2-i (蛇ノ目凹高)
	—————	・JB-2-j (蛇ノ目凹低)
	—————	・JB-3-d (蛇ノ目凹)
	—————	・JB-5-d (蛇ノ目凹)
・JB-5-f (高台▽)	—————	・JB-2-b (高台▽ダンバキリ)
	—————	・JB-2-c (高台▽柿右衛門B)
	—————	・JB-3-f (高台▽、逆台形)
	—————	・JB-5-f (高台▽)
・JB-34 土瓶	—————	削除

◎JC群 (瀬戸・美濃系磁器)		◎JC群 (瀬戸・美濃系磁器)
・JC-10-a (長頸瓶)	—————	削除
・JC-27 水注	—————	削除 水注
		ちろり

◎TB群 (肥前系陶器)		◎TB群 (肥前系陶器)
・TB-5-a (刷毛目)	—————	・TB-2-g (刷毛目)
	—————	・TB-3-a (刷毛目)
	—————	・TB-5-a (刷毛目)
・TB-5-b (三島手)	—————	・TB-2-h (象嵌)
	—————	・TB-3-b (象嵌)
	—————	・TB-5-b (象嵌)
・TB-5-c (京焼風)	—————	・TB-2-c (京焼風)
	—————	・TB-3-c (京焼風)
	—————	・TB-5-c (京焼風)
・TB-5-d (輪剥・内野山窯)	—————	・TB-2-a (青緑・灰・輪剥)
	—————	・TB-3-d (内野山窯)
	—————	・TB-5-d (青・灰・内野山窯)
・TB-15 壺・甕	—————	・TB-15-a (ロクロ成形)
		・TB-15-b (タタキ成形)

◎TC群 (瀬戸・美濃系陶器)		◎TC B群 (瀬戸・美濃系陶器)
・TC-2-f (石皿)	—————	・TC-2-f (石皿)
	—————	・TC-3-f (石皿)
・TC-2-g (馬ノ目皿)	—————	・TC-2-d (馬ノ目皿)
	—————	・TC-3-d (馬ノ目皿)
・TC-5-a (笠原鉢)	—————	・TC-2-v (鉄絵、緑釉、口縁外)
	—————	・TC-3-a (鉄絵、緑釉、口縁外)
・TC-5-c (輪禿鉢)	—————	・TC-2-u (輪禿平鉢)
・TC-5-i (灰・緑、波状櫛描)	—————	・TC-2-w (灰・緑、波状櫛描)
		・TC-3-b (灰・緑、波状櫛描)

第IV章 江戸時代以降の遺物

旧		新
<器種>		
◎TD群 (京都・信楽系陶器)		◎TD群 (京都・信楽系陶器)
・TD-1-m (腰張)	—————	・TD-1-c (丸形碗)
・TD-34 土瓶	—————	・TD-34-a (鉄砲口)
		・TD-34-b (S字状注口)
◎TE群 (備前系陶器)		◎TE群 (備前系陶器)
・TE-2 皿	—————	・TE-2-a (ロクロ成形)
		・TE-2-b (形皿)
◎TZ群 (生産地不明)		◎TZ群 (生産地不明)
・TZ-21 植木鉢	—————	・TZ-21-a (軟質施釉)
		・TZ-21 (軟質施釉)
・TZ-34-h (染付)	—————	・TD-34-b (S字状注口)
・TZ-34-m (S字状注口、銹染)	—————	・TD-34-b (S字状注口)
・TZ-42-b (鉄釉)	—————	削除
◎DZ群		◎DZ群
・DZ-2-a (右回転)	—————	・DZ-2-a (小林C類・E類、梶原IIb群)
		・DZ-2-b (小林F類、梶原IIc群)
・DZ-2-b (左回転)	—————	・DZ-2-k (底形大、器壁厚)
		・DZ-2-a (小林C類・E類、梶原IIb群)
・DZ-5-b (箱庭道具)	—————	・DZ-2-b (小林F類、梶原IIc群)
・DZ-5-c (釜形土製品)	—————	人形・玩具
・DZ-15 壺・甕	—————	人形・玩具
		・DZ-15-a (硬質瓦質蓋付)
・DZ-16 急須	—————	・DZ-15 (硬質瓦質蓋付)
・DZ-21-c (施釉)	—————	・DD-16 急須
・DZ-33-a (紐状把手、鉛釉)	—————	・TZ-21-a (軟質施釉)
・DZ-34 土瓶	—————	・TZ-33-b (軟質施釉)
・DZ-40-f (ドーナツ形)	—————	・TZ-34-n (軟質施釉)
・DZ-42 行平鍋	—————	人形・玩具
・DZ-48-c (風口)	—————	・TZ-42-d (軟質施釉)
・DZ-48-d (さな)	—————	削除
・DZ-49 涼炉	—————	削除
		・DD-49 涼炉
・DZ-50 五徳	—————	・DZ-49 涼炉
		・DD-50 五徳
・DZ-53 蒸し器	—————	・DZ-50 五徳
・DZ-55 泥面子	—————	削除
・DZ-56 基石形土製品	—————	人形・玩具
・DZ-57 玉	—————	人形・玩具
・DZ-58 鈴	—————	人形・玩具
・DZ-59 笛	—————	人形・玩具
・DZ-60-a (西行)	—————	人形・玩具
・DZ-60-b (天神)	—————	人形・玩具
・DZ-60-c (恵比寿・大黒)	—————	人形・玩具
・DZ-60-d (姉様)	—————	人形・玩具
・DZ-60-e (袴人形)	—————	人形・玩具
・DZ-60-f (ぶら人形)	—————	人形・玩具
・DZ-60-g (猿)	—————	人形・玩具
・DZ-60-h (馬)	—————	人形・玩具
・DZ-60-i (犬)	—————	人形・玩具
・DZ-60-j (狐)	—————	人形・玩具
・DZ-60-k (虚無僧)	—————	人形・玩具
・DZ-60-l (狛抱き童子)	—————	人形・玩具
・DZ-60-m (亀乗り童子)	—————	人形・玩具
・DZ-60-n (嵯峨人形系)	—————	人形・玩具
・DZ-00-h (DZ-31-iの蓋)	—————	削除
・DZ-00-i (DZ-44-eの蓋)	—————	削除
・DZ-00-m (DZ-42の蓋)	—————	削除
・DZ-00-n (DZ-34の蓋)	—————	削除



- J A 1 - - 景德鎮窯系
- J A 2 - - 漳州窯系
- J A 3 - - 徳化窯系
- J A 4 - - 龍泉窯系
- J A 6 - - 朝鮮
- J A 8 - - ヨーロッパ
- ○ J A 9 - - 福建・広東系
  
- J B 群 - - 肥前系磁器
  - 1 - - 碗
    - ・ J B - 1 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
    - ・ ♪ b (底部無袖)
    - ・ ♪ c (高台断面三角の製品、長吉谷窯跡指標)
    - ・ ♪ d (高台断面シャープな「U」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯跡IV～VI層指標)
    - ・ ♪ e (高台断面シャープな「U」字状で高台高が低い、蓋付有)
    - ・ ♪ f (高台径が小さい半球形の薄手碗)
    - ・ ♪ g (絵付・作りの粗雑な碗)
    - ・ ♪ i (高台高が高、慣用名：小広東碗)
    - ・ ♪ j (高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗)
    - ・ ♪ k (大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里)
    - ・ ♪ l (筒形碗)
    - ・ ♪ m (慣用名：広東碗、蓋付有)
    - ・ ♪ n (端反形碗、蓋付有)
    - ・ ♪ o (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)
    - ・ ♪ p (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)
    - ・ ♪ q (高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有)
    - ・ ♪ r (朝顔形、蓋付有)
    - ▲ ・ ♪ s (丸碗形、幅広高台)
    - ・ ♪ t (体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗)
    - ・ ♪ u (JB- 1 - d のやや小振りの碗形、コンニャク印判が多い)
    - ・ ♪ v (梅樹文が描かれた粗製の碗)
    - ・ ♪ w (高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク印判が多い)
    - ・ ♪ x (見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製)
  - ▲ ○ 2 - - 皿・平鉢
    - ・ J B - 2 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
    - ・ ♪ b (高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯跡指標)
    - ・ ♪ c (高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門B窯跡など指標)
    - ・ ♪ d (高台断面がシャープな「U」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯跡指標)
    - ・ ♪ e (高台断面がシャープな「U」字状)
    - ・ ♪ f (やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形)
    - ・ ♪ g (絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い)
    - ・ ♪ h (蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里)
    - ・ ♪ i (蛇ノ目凹形高台で高台高が高い)
    - ・ ♪ j (蛇ノ目凹形高台で高台高が低い)
    - ・ ♪ k (見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無袖)
    - ▲ ・ ♪ l (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小)
    - ▲ ・ ♪ m (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大)
    - ・ ♪ n (鍋島)
    - ・ ♪ o (器高が低く腰が張る皿)
    - ・ ♪ p (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯跡指標)
    - ・ ♪ q (高台断面が「U」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵)
    - ・ ♪ r (糸切細工の貼付高台)
    - ・ ♪ s (初期伊万里の系統で内山の影響を受け外山で作られた粗製品、広瀬向窯跡など指標)

## 第IV章 江戸時代以降の遺物

- ・ ♪ t (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
- ▲ ○3 -- 大皿・大平鉢
- ▲ ・ J B - 3 - a (いわゆる初期伊万里)
- ▲ ・ ♪ b (「U」字状の高台)
- ・ ♪ c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
- ・ ♪ d (蛇ノ目凹形高台)
- ・ ♪ e (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯跡指標)
- ・ ♪ f (高台断面が三角形や逆台形)
- 4 -- 燗徳利
- ▲ ○5 -- 鉢
- ・ J B - 5 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
- ・ ♪ b (高台断面がシャープな「U」字状)
- ・ ♪ c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い)
- ・ ♪ d (蛇ノ目凹形高台)
- ・ ♪ e (慣用名：八角鉢)
- ・ ♪ f (高台断面三角形)
- ・ ♪ g (鍋島)
- ・ ♪ h (見込み蛇ノ目釉剥ぎ)
- 6 -- 坏
- ・ J B - 6 - a (丸形)
- ・ ♪ b (端反形)
- ・ ♪ c (極めて薄手)
- ・ ♪ d (腰折れ直立形)
- ・ ♪ e (形作り、慣用名：紅皿)
- ・ ♪ f (高台径が小さい半球形の薄手坏)
- 7 -- 猪口
- ・ J B - 7 - a (底部蛇ノ目凹形高台状)
- ・ ♪ b (底部輪高台状)
- 8 -- 仏飯器
- ・ J B - 8 - a (脚部のえぐりが深い)
- ・ ♪ b (脚部のえぐりが浅い)
- ・ ♪ c (脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取り)
- 9 -- 香炉・火入れ
- ・ J B - 9 - a (底裏に円盤状の露胎部)
- ・ ♪ b (底部蛇ノ目釉剥ぎ)
- ・ ♪ c (高台状の露胎部)
- ・ ♪ d (べた底)
- ・ ♪ e (蛇ノ目凹形高台)
- ・ ♪ f (蛇ノ目高台)
- ・ ♪ g (底部・高台内無釉)
- 10 -- 瓶
- ・ J B - 10 - a (大形長頸瓶)
- ・ ♪ e (いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く)
- 11 -- 御神酒徳利
- ・ J B - 11 - a (瓶子形)
- ・ ♪ b (鶴首形)
- ・ ♪ c (筒形)
- 12 -- 油壺
- 13 -- 蓋物
- ・ J B - 13 - a (丸形)
- ・ ♪ b (筒形)
- ・ ♪ c (段重)
- ・ ♪ d (形作)
- 15 -- 壺・甕
- 16 -- 急須

- 18 -- 合子
    - ・ J B - 18 - a (扁平な球形)
    - ・        "       b (筒形)
  - 19 -- 水滴
  - 20 -- 蓮華
  - 21 -- 植木鉢
  - 22 -- 花生
  - ○ 23 -- 片口鉢
  - 24 -- 灰落し
  - 27 -- 水注
    - ・ J B - 27 - a (銚子形、釣手)
  - 29 -- 播鉢
  - ○ 30 -- 餌入れ
  - 35 -- 戸車
  - ○ 52 -- 燭台
- ◎ J C 群 -- 瀬戸・美濃系磁器
- 1 -- 碗
    - ・ J C - 1 - a (丸碗、蓋付有)
    - ・        "       b (筒形碗)
    - ・        "       c (蓋付有、慣用名：広東碗)
    - ・        "       d (端反形碗、蓋付有)
    - ・        "       e (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)
    - ・        "       f (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)
    - "       g (慣用名：小丸碗)
  - ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢
    - ・ J C - 2 - a (蛇ノ目凹形高台)
    - ・        "       b (輪高台)
    - ・        "       c (蛇ノ目高台)
    - ・        "       d (そり皿、木型打込など)
    - ・        "       e (陽刻)
    - ・        "       f (陰刻)
  - 4 -- 爛徳利
  - ▲ ○ 5 -- 鉢
  - 6 -- 坏
    - ・ J C - 6 - a (丸形)
    - ・        "       b (端反形)
    - ・        "       c (筒形)
    - ・        "       d (極めて薄手)
    - ・        "       e (寿文坏)
    - ・        "       f (体部が直線的に開く)
    - ・        "       g (形作り、慣用名：紅皿)
  - 7 -- 猪口
  - 8 -- 仏飯器
  - 9 -- 香炉・火入れ
  - 10 -- 瓶
  - 11 -- 御神酒徳利
    - ・ J C - 11 - a (瓶子形)
    - ・        "       b (鶴首形)
  - 12 -- 油壺
  - 13 -- 蓋物
  - 15 -- 壺・甕
  - 16 -- 急須
  - 18 -- 合子
  - 19 -- 水滴



- 20 -- 蓮華
- 21 -- 植木鉢
- 22 -- 花生
- 34 -- 土瓶
- ○36 -- ちろり
  
- ◎J N群 -- 九谷系磁器
  - 1 -- 碗
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
- 6 -- 坏
  
- ◎J R -- 三田系磁器
  - ○2 -- 皿・平鉢
  - ○5 -- 鉢
  - ○13 -- 蓋物
  
- ◎J Z群 -- 生産地不明
  - 1 -- 碗
  - 2 -- 皿・平鉢
  - 6 -- 坏

陶器分類

- ◎T A 5 -- 宜興窯系
- ◎T A 6 -- 朝鮮
- ◎T A 7 -- ベトナム
- ◎T A 8 -- ヨーロッパ
- ◎T A 9 -- 福建・広東系
- ◎T A 10 -- 西アジア
  
- ◎T B群 -- 肥前系陶器
  - 1 -- 碗
    - ・ T B - 1 - a (大振りの丸碗、慣用名：呉器手)
    - ・ ♪ b (外面主文様、慣用名：京焼風陶器)
    - ・ ♪ c (内面主文様、慣用名：京焼風陶器)
    - ・ ♪ d (刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目)
    - ・ ♪ f (陶胎染付)
    - ・ ♪ g (刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目)
    - ・ ♪ h (刷毛目端反形碗)
    - ▲ ・ ♪ i (青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯跡指標)
    - ・ ♪ j (卵手)
    - ・ ♪ k (象嵌の施された碗、慣用名：三鳥手)
  - ▲ ○2 -- 皿・平鉢
    - ▲ ・ T B - 2 - a (青緑・灰釉、輪剥、内野山窯跡指標)
    - ▲ ・ ♪ b (灰・青緑釉砂目)
    - ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)
    - ・ ♪ d (透明釉砂目、内野山窯跡指標)
    - ・ ♪ e (胎土目)
    - ・ ♪ f (陶体染付)
    - ・ ♪ g (刷毛目)
    - ・ ♪ h (白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三鳥手)
    - ・ ♪ i (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)
  - ○3 -- 大皿・大平鉢
    - ・ T B - 3 - a (刷毛目)
    - ・ ♪ b (白土・鉄などで象嵌の施された大皿・大平鉢、慣用名：三鳥手)

- ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)
- ・ ♪ d (内野山窯跡指標)
- ▲ ○5 -- 鉢
  - ・ T B - 5 - a (刷毛目鉢)
  - ・ ♪ b (白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名：三島手)
  - ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)
- ▲ ・ ♪ d (青緑・灰釉、内野山窯跡指標)
- ・ ♪ e (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)
- 6 -- 坏
- ○8 -- 仏飯器
- 9 -- 香炉・火入れ
  - ・ T B - 9 - a (陶胎染付)
  - ・ ♪ b (慣用名：京焼風陶器)
  - ・ ♪ c (刷毛目)
- ・ ♪ d (青緑釉)
- 10 -- 瓶
- 13 -- 蓋物
  - ・ T B - 13 - a (陶胎染付)
  - ・ ♪ b (刷毛目)
- ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)
- 15 -- 壺・甕
- ・ T B - 15 - a (ロクロ成形)
- ・ ♪ b (タタキ成形)
- ○22 -- 花生
- 23 -- 片口鉢
  - ・ T B - 23 - a (深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉)
  - ・ ♪ b (浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目釉剥ぎ)
- ○27 -- 水注
- 29 -- 播鉢
  - ・ T B - 29 - a (内外面全釉)
  - ・ ♪ b (口縁部のみ施釉)
- ○31 -- 火鉢
- ◎T C 群 -- 瀬戸・美濃系陶器
- 1 -- 碗
  - ・ T C - 1 - a (天目碗)
  - ・ ♪ b (白天目)
  - ・ ♪ c (灰釉薄掛け丸碗)
  - ・ ♪ d (灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名：御室碗)
  - ・ ♪ f (腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し)
  - ・ ♪ g (灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い)
  - ・ ♪ h (丸碗、慣用名：太白手)
  - ・ ♪ i (筒形碗、慣用名：太白手)
  - ・ ♪ j (慣用名：広東碗、太白手)
  - ・ ♪ k (体部中位に大きな凹み有、灰釉)
  - ・ ♪ l (半筒形碗、慣用名：せんじ)
  - ・ ♪ m (半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風)
  - ・ ♪ n (平碗、見込みに文様、京焼風)
  - ・ ♪ o (慣用名：尾呂茶碗)
  - ・ ♪ p (漆黒釉に長石釉散らし、慣用名：拳骨茶碗)
  - ・ ♪ q (鎊釉斑状、横位や波状の沈線が多い)
  - ・ ♪ r (トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名：鎊茶碗)
  - ・ ♪ s (刷毛目)
  - ・ ♪ u (内面・外面上半灰釉、外面下半鎊釉、慣用名：腰鎊碗)
  - ・ ♪ v (半筒形碗、灰釉柿釉掛分け)

## 第Ⅳ章 江戸時代以降の遺物

- ・ ♪ w (杉形碗、若松文、慣用名：小杉茶碗)
- ・ ♪ x (緑釉丸碗)
- ・ ♪ y (口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名：奈良茶碗)
- ▲ ・ ♪ z (端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
- ・ ♪ aa (灰釉丸碗)
- ・ ♪ ab (慣用名：小丸碗、太白手)
- ・ ♪ ac (灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有)
- ・ ♪ ad (筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け)
- ・ ♪ ae (体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け)
- ▲ ・ ♪ af (慣用名：広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
- ・ ♪ ag (鉄釉丸碗)
- ・ ♪ ah (鉄釉平碗)
- ・ ♪ ai (鉄釉筒形碗)
- ・ ♪ aj (長石釉丸碗)
- ・ ♪ ak (長石釉平碗)
- ・ ♪ al (長石釉筒形碗)
- ・ ♪ am (高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯跡など指標)
- ・ ♪ an (沓茶碗)
- ▲ ○2-皿・平鉢
- ・ TC-2-a (灰釉丸皿、ピン痕有)
- ・ ♪ b (灰釉丸皿、輪状直重ね痕有)
- ・ ♪ c (長石釉丸皿)
- ・ ♪ e (灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名：御深井)
- ・ ♪ f (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿)
- ・ ♪ g (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿)
- ・ ♪ h (染付皿、輪高台、慣用名：太白手)
- ・ ♪ i (形皿、高台有)
- ▲ ・ ♪ j (鉄絵皿、ピン痕多)
- ・ ♪ k (菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し)
- ・ ♪ l (菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し)
- ▲ ・ ♪ m (輪禿皿)
- ▲ ・ ♪ n (口縁部または体部をひだ状に成形、ヒダ皿)
- ▲ ・ ♪ o (油皿、直重ね)
- ・ ♪ p (把手付油皿、口縁部内側把手貼付)
- ・ ♪ q (灰釉丸皿、高台無)
- ・ ♪ r (見込み沈線・圏線文様、緑釉沈線文皿、ピン痕、慣用名：総織部)
- ・ ♪ s (鈔縁、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名：志野織部)
- ・ ♪ t (染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名：大白手)
- ・ ♪ u (輪禿平鉢、口縁部折縁状多)
- ・ ♪ v (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢)
- ・ ♪ w (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢)
- ・ ♪ x (形皿、脚付)
- ・ ♪ y (端反皿、ピン痕多)
- ・ ♪ z (鉄釉丸皿、ピン痕多)
- ○3-大皿・大平鉢
- ・ TC-3-a (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢)
- ・ ♪ b (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢)
- ・ ♪ c (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿)
- ・ ♪ d (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿)
- 4-燗徳利
- ▲ ○5-鉢
- ▲ ・ ♪ f (水盥、灰釉、口縁部一箇所凹み)
- ・ ♪ h (手鉢)
- ・ ♪ j (長石釉)
- ・ ♪ k (緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯跡など指標)



- ・ 〃 1 (こね鉢)
- ・ 〃 m (刷毛目)
- 6 -- 坏
- 8 -- 仏飯器
- 9 -- 香炉・火入れ
  - ・ T C - 9 - a (灰釉)
  - ・ 〃 b (鉄釉)
  - ・ 〃 c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)
  - ・ 〃 d (褐釉、半菊状のしのぎ)
  - ・ 〃 e (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)
- ▲ ・ 〃 f (袴腰)
- ・ 〃 g (筒形)
- 10 -- 瓶
  - ・ T C - 10 - a (二合半灰釉徳利、底部釉拭取り)
  - ・ 〃 c (二合半灰釉徳利、つけ掛け)
  - ・ 〃 d (五合徳利)
  - ・ 〃 e (一升徳利)
  - ・ 〃 f (舟徳利、漆黒釉または柿釉)
  - ・ 〃 g (柿釉徳利、献上備前写し)
  - ・ 〃 h (らっきょう形)
  - ・ 〃 k (織部徳利)
- 12 -- 油壺
- 13 -- 蓋物
- 15 -- 壺・甕
  - ・ T C - 15 - a (柿釉、底部及び器面下端露胎、平縁、慣用名：赤津半胴・銭甕)
  - ・ 〃 b (柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反)
  - ・ 〃 c (水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突)
  - ・ 〃 d (緑釉、貼付文)
- ・ 〃 e (ベタ底)
- ・ 〃 f (高台有、肩衝、有耳多し)
- 18 -- 合子
- 19 -- 水滴
- 21 -- 植木鉢
- 22 -- 花生
  - ・ T C - 22 - a (盤口形)
  - ・ 〃 b (朝顔形)
- 23 -- 片口鉢
  - ・ T C - 23 - a (筒形)
  - ・ 〃 b (丸碗形)
  - ・ 〃 c (「ハ」の字状に開く)
- 24 -- 灰落し
  - ・ T C - 24 - a (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)
  - ・ 〃 b (長筒形)
- 25 -- 鬘水入れ
- 26 -- 茶入れ
- 27 -- 水注
  - ・ T C - 27 - a (褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手)
  - ・ 〃 b (円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次)
  - ・ 〃 c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)
- ・ 〃 d (灰釉、らっきょう形、橋状把手)
- 28 -- 漚瓶
- 29 -- 播鉢
- 30 -- 餌入れ
- 31 -- 火鉢
  - ・ T C - 31 - a (瓶掛)

- ・ ♪ b (風炉)
- 34 -- 土瓶
- 38 -- 手焙り
- 39 -- おろし皿
- 40 -- 油受け皿
- ▲ ・ TC - 40 - b (脚付)
- ・ ♪ c (脚無、錆釉)
- ・ ♪ d (脚無、灰釉)
- ・ ♪ e (高い受付)
- 41 -- 油徳利
- 44 -- ひょうそく
- ・ TC - 44 - a (脚付)
- ○64 -- 煙硝播
- ○67 -- 釜
  
- ◎TD群 -- 京都・信楽系陶器
- 1 -- 碗
- ・ TD - 1 - b (高台径が小さい半球形の碗、薄手)
- ▲ ・ ♪ c (丸碗)
- ・ ♪ d (杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗)
- ・ ♪ e (端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け)
- ・ ♪ g (端反形、小振りで器面には細かい貫入)
- ・ ♪ h (平碗、多くは見込みに銹絵染付)
- ▲ ・ ♪ i (半筒形)
- ・ ♪ j (筒形、多くは鉄絵で文様)
- ・ ♪ k (体部中位に大きな凹み有、灰釉)
- ・ ♪ l (軟質施釉)
- ・ ♪ n (胴締め、慣用名：大福)
- ・ ♪ o (慣用名：小福)
- ・ ♪ p (天目形)
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
- ・ TD - 2 - a (見込み櫛目有、灯明皿、多くは三箇所のピン痕)
- ・ ♪ b (見込み櫛目無、灯明皿、多くは三箇所のピン痕)
- ・ ♪ c (輪高台)
- 4 -- 爛徳利
- ▲ ○5 -- 鉢
- 6 -- 坏
- 9 -- 香炉・火入れ
- ・ TD - 9 - a (形作り)
- ・ ♪ b (蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折)
- ・ ♪ c (筒形)
- 10 -- 瓶
- 13 -- 蓋物
- ・ TD - 13 - a (丸碗形の身)
- ・ ♪ b (段重)
- ・ ♪ c (半筒形の身)
- ・ ♪ d (格子状のしのぎ、梅花文)
- 14 -- 筆立
- 15 -- 壺・甕
- ・ TD - 15 - a (慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け)
- 18 -- 合子
- ・ TD - 18 - a (扁平な球形)
- ・ ♪ b (筒形)
- 19 -- 水滴
- 22 -- 花生

- ○23 -- 片口鉢
- 24 -- 灰落し
- 25 -- 鬢水入れ
- ○26 -- 茶入れ
- 27 -- 水注
  - ・ T D - 27 - a (銚子形、釣手)
  - ・     "      d (筒形)
- 32 -- 柄杓
- 34 -- 土瓶
- "      b (S字状注口)
- 36 -- ちろり
  - ・ T D - 36 - a (長筒形、横手、ちろり)
  - ・     "      b (段筒形、横手、ちろり)
- 40 -- 油受け皿
  - ・ T D - 40 - a (脚付、灰釉)
  - ・     "      b (脚無、灰釉)
- 46 -- カンテラ

◎T E 群 -- 備前系陶器

- ○1 -- 碗
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
- "      a (ロクロ成形)
- "      b (形皿)
- ▲ ○5 -- 鉢
- 10 -- 瓶
  - ・ T E - 10 - a (かま形、薄作、鶴首)
  - ・     "      b (底部付近に最大径を有す、体部三角形)
- 12 -- 油壺
- 15 -- 壺・甕
- 22 -- 花生
- 29 -- 播鉢
- 37 -- 薬研
- 40 -- 油受け皿
- 41 -- 油德利
- ○65 -- 乳棒

◎T F 群 -- 志戸呂系陶器

- 1 -- 碗
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
- ○9 -- 香炉・火入れ
- 10 -- 瓶
- 13 -- 蓋物
- 15 -- 壺・甕
- 29 -- 播鉢
- 40 -- 油受け皿

◎T G 群 -- 常滑系陶器

- 15 -- 壺・甕

◎T H 群 -- 萩系陶器

- 1 -- 碗
  - ・ T H - 1 - a (薬灰釉開口碗、渦巻高台)
  - ・     "      b (ピラ掛け、渦巻高台)



## 第IV章 江戸時代以降の遺物

### ◎T I 群-- 万古系陶器

- 1 -- 碗
- 16 -- 急須
- 34 -- 土瓶

### ◎T J 群-- 大堀・相馬系陶器

- 1 -- 碗
- 6 -- 坏

### ◎T K 群-- 丹波系陶器

- ○ 5 -- 鉢
- 15 -- 壺・甕
- 29 -- 播鉢

### ◎T L 群-- 堺系陶器

- 29 -- 播鉢

### ◎T M 群-- 笠間・益子系陶器

- 29 -- 播鉢

### ■◎T N 群-- 九谷系陶器

- 2 -- 皿・平鉢

### ◎T O 群-- 壺屋系陶器

- 10 -- 瓶
- 15 -- 壺・甕

### ■◎T P 群-- 淡路系陶器

- 2 -- 皿・平鉢
- 6 -- 坏
- 20 -- 蓮華

### ■◎T Q 群-- 薩摩系陶器

- 1 -- 碗
- 34 -- 土瓶

### ■◎T S 群-- 飯能系陶器

- 42 -- 行平鍋

### ◎T Z 群-- 生産地不明

- 1 -- 碗
- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢
- ○ 4 -- 爛徳利
- ▲ ○ 5 -- 鉢
- 6 -- 坏
- 9 -- 香炉・火入れ
- ○ 10 -- 瓶
- ○ 15 -- 壺・甕
- 16 -- 急須
- 17 -- 爛鍋
- 20 -- 蓮華
- 21 -- 植木鉢
- ○ 21 -- a (軟質施釉)
- ○ 22 -- 花生
- ○ 25 -- 鬢水入れ

- ○27 -- 水注
- ○31 -- 火鉢
- 29 -- 播鉢
- 33 -- 鍋
  - ・ T Z - 33 - a (紐状把手貼付、柿釉)
- - ・ ♪ b (軟質施釉)
- 34 -- 土瓶
  - ・ T Z - 34 - a (青緑釉、青土瓶)
  - ・ ♪ b (白土染付)
  - ・ ♪ c (三彩)
  - ・ ♪ d (糸目)
  - ・ ♪ e (鉄釉)
  - ・ ♪ f (鮫釉)
  - ・ ♪ g (灰釉)
  - ・ ♪ i (イッチン)
  - ・ ♪ k (うのふ釉、やや紫色に発色する)
  - ・ ♪ l (しのぎ、鉄釉)
- - ・ ♪ n (軟質施釉)
- 42 -- 行平鍋
  - ・ T Z - 42 - a (灰釉)
  - ・ ♪ c (トビガンナ)
- - ・ ♪ d (軟質施釉)
- 53 -- 蒸し器

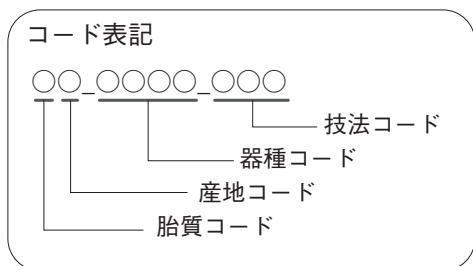
土器分類

- ◎D D群 -- 京都・信楽系土器
  - 16 -- 急須
  - 49 -- 涼炉
  - 50 -- 五徳
- ◎D Z群 -- 生産地不明
  - ▲ ○2 -- 皿・平鉢
  - ▲ ・ D Z - 2 - a (小林C類・E類、梶原II b群)
  - ▲ ・ ♪ b (小林F類、梶原II c群)
  - ・ ♪ c (磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線)
  - ・ ♪ d (磨きかわらけ、底部平滑)
  - ・ ♪ e (耳かわらけ)
  - ・ ♪ f (へそかわらけ)
  - ・ ♪ g (手づくね)
  - ・ ♪ h (透明釉)
  - ・ ♪ i (底部穿孔)
  - ▲ ・ ♪ j (見込みに浮文)
  - ・ ♪ k (底径大、器壁厚、小林B類、梶原II a群を含む)
  - ▲ ○5 -- 鉢
    - ・ D Z - 5 - a (土師質、端反)
    - ・ ♪ d (えぐり)
  - 9 -- 香炉・火入れ
  - 15 -- 壺・甕
    - ・ D Z - 15 - a (硬質瓦質蓋付壺)
  - 21 -- 植木鉢
    - ・ D Z - 21 - a (土師質)
    - ・ ♪ b (瓦質)
  - ○24 -- 灰落し
  - 31 -- 火鉢

- ・ D Z - 31 - a (土師質丸火鉢)
- ・ ♪ b (軟質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ c (鑊付角火鉢、掘炬燵)
- ・ ♪ d (硬質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ e (土師質角火鉢)
- ・ ♪ f (軟質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ g (硬質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ h (風炉)
- ・ ♪ i (火消壺)
- ・ ♪ j (硬質瓦質筒形火鉢)
- ・ ♪ k (カマド)
- ・ ♪ l (土師質筒形火鉢)
- 38 -- 手焙り
- 40 -- 油受け皿
  - ・ D Z - 40 - a (透明釉、脚付)
  - ・ ♪ b (透明釉、脚無)
  - ・ ♪ c (無釉、脚付)
  - ・ ♪ d (無釉、脚無)
  - ・ ♪ e (透明釉、長脚付)
- 43 -- 十能
- 44 -- ひょうそく
  - ・ D Z - 44 - a (無釉、脚付)
  - ・ ♪ b (透明釉、脚無)
  - ・ ♪ c (無釉、脚無)
  - ・ ♪ d (ろうそく状)
  - ・ ♪ e (透明釉、そろばん玉形)
  - ・ ♪ f (施釉、脚付)
  - ・ ♪ g (鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり)
- 45 -- 瓦燈
- 46 -- カンテラ
- ▲ ○ 47 -- ほうろく
  - ・ D Z - 47 - a (丸底)
  - ・ ♪ b (平底)
- 48 -- 七輪
  - ▲ ・ D Z - 48 - a (内部施設を持たない七輪)
  - ▲ ・ ♪ b (内部施設を持つ七輪)
  - ・ ♪ e (内底部に壁状凸帯を有す。コンロ)
- 49 -- 涼炉
- 51 -- 塩壺
  - ・ D Z - 51 - a (輪積成形、ミなど藤左衛門)
  - ・ ♪ b ( ♪ 、一重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
  - ・ ♪ c ( ♪ 、二重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
  - ・ ♪ d ( ♪ 、天下一御壺塩師堺見など伊織)
  - ・ ♪ e ( ♪ 、御壺塩師堺湊伊織)
  - ・ ♪ f (板作成形、御壺塩師堺湊伊織)
  - ・ ♪ g ( ♪ 、泉湊伊織)
  - ・ ♪ h ( ♪ 、小椀 泉州麻生)
  - ・ ♪ i ( ♪ 、大椀 ♪ )
  - ・ ♪ j ( ♪ 、泉州磨生)
  - ・ ♪ k ( ♪ 、サカイ 泉州磨生 御塩所)
  - ・ ♪ l ( ♪ 、泉州麻玉)
  - ・ ♪ m ( ♪ 、泉川麻玉)
  - ・ ♪ n ( ♪ 、御壺塩師難波浄因)
  - ・ ♪ o ( ♪ 、難波浄因)
  - ・ ♪ p ( ♪ 、摂州大坂)



- ・ ♪ q ( ♪ 、イ津ミ つた 花塩屋)
  - ・ ♪ r (ロクロ成形、御壺塩)
  - ・ ♪ s (板作成形、大上々)
  - ・ ♪ t (ロクロ成形、三など久左衛門)
  - ・ ♪ u ( ♪ 、播磨大極上)
  - ・ ♪ v ( ♪ 、大極上壺塩)
  - ・ ♪ w ( ♪ 、筒形、無印)
  - ・ ♪ x (鉢形、内湾)
  - ・ ♪ y ( ♪ 、直立)
  - ・ ♪ z ( ♪ 、碁笥底)
  - ・ ♪ aa (輪積成形、無印)
  - ・ ♪ ab (板作成形、無印)
  - ・ ♪ ac (ロクロ成形、壺形、無印)
  - ・ ♪ ad (板作成形、いつみや 宗左衛門)
  - ・ ♪ ae ( ♪ 、堺本湊吉右衛門)
  - ・ ♪ af ( ♪ 、堺湊塩濱長佐衛門)
  - ・ ♪ ag ( ♪ 、泉川麻生)
  - ・ ♪ ah (輪積成形、袋状)
  - ・ ♪ ai (ロクロ成形、三など作左衛門)
- 52 -- 燭台
- ・ D Z - 52 - a (筒形)
  - ・ ♪ b (薄形、扁平)
- 54 -- 懐炉
- ○ 63 -- あんか
- ▲ ○ 00 -- 蓋
- ・ D Z - 00 - a (ドーム形、無印)
  - ・ ♪ b (凹形、御壺塩師難波浄因)
  - ・ ♪ c ( ♪ 、無印)
  - ・ ♪ d (断面逆台形、無印)
  - ・ ♪ e (断面長方形、イツミ 花焼塩 ツタ)
  - ・ ♪ f ( ♪ 、深草砂川権兵衛)
  - ・ ♪ g (断面長方形、無印)
  - ・ ♪ j (ドーム形、いつみや 宗左衛門)
  - ・ ♪ k (凸形、無印)
  - ・ ♪ l (凸形、なんばん七度 本やき志本)



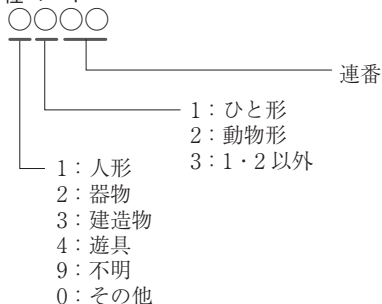
胎質コード

- J：磁器（磁質）
- T：陶器（陶質）
- D：土器（土師質）
- R：瓦（瓦質）

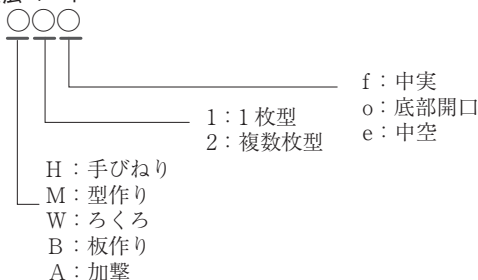
産地コード

- A：輸入陶磁
- B：肥前系
- C：瀬戸・美濃系
- D：京都・信楽系
- E：備前系
- Q：江戸在地系
- Z：不明

器種コード



技法コード



器種コード(詳細)					
1000 人形					
1100 ひと形					
1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋	
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形	
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧	
1116 獵師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆	
1121 姉様	1122 太夫(花魁)	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦	
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狛抱き童子	
1131 亀乗り童子	1132 狛乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子	
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子				
1200 動物形					
1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬	
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠	
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏	
1216 鴛鴦	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉	
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬			
1300 その他(1100・1200以外)					
1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物	
2000 器物					
2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶	
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋	
2011 釜・茶釜	2012 播鉢	2013 蓋	2014 七厘・焜炉	2015 石臼	
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨	
2021 五銚鈴	2022 柚でんぼ	2023 香炉・風炉			
3000 建造物					
3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段	
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟	
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤				
4000 遊具					
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 碁石状製品	4005 面模	
4006 泥面子・芥子面	4007 土玉	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品		
9000 不明					
0000 その他					

人形・玩具分類コード































---

---

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点  
報告編《第 3 分冊》

2016 年 3 月 25 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1  
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 能登印刷株式会社

---

---

